
時空を越えた黄金の闘士

かのもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空を越えた黄金の闘士

【Nコード】

N1417P

【作者名】

かのも

【あらすじ】

地上暦1990年に起こったアテナとハーデスとの聖戦。

双子座の黄金聖闘士カノンは、冥界三巨頭、天猛星ワイバーンのラダマンティスとの戦いで命を落とした……筈であった。

しかし彼は死の直前、時空を越える。

そこで、カノンは魔導師の少女と出会う。

時空を越えた黄金の闘士……はじまります。

魔法少女リリカルなのはと聖闘士星矢のクロスオーバー作品です。

他のサイトで投稿している作品を加筆修正した改訂版です。

若干カノンの性格が変わっているので、そういうのが許せない方は
ご遠慮下さい。

あと、設定が無茶苦茶なのは作者自身、自覚しておりますのでその
手の突っ込みもご遠慮ください。

第零話 プロローグ

「いい加減悟ったらどうだラダマンティス。もはや、お前たち冥界側の敗北は必至だということをしな！」

カノンはそう言うと、纏っていた双子座の黄金聖衣シエミニを脱いだ。ゴールドクロス

「何！？聖衣を脱ぎ捨てただと？貴様……何のつもりだ？」

「もう私には不要のモノ。兄に返すのよ」

聖衣はオブジェ形態になった。

「さあ行け双子座！他の黄金聖衣の下へと……！」

カノンの声と共に、何処かへ飛び去っていく。

【さらばだ双子座よ。後は頼むぞサガ！】

カノンは飛び去っていく双子座を見送り、ラダマンティスと対峙した。

「さあ、もはや私の役目は終わった。今度こそ心行くまで相手をしてやるぞ、ラダマンティス！」

「聖衣を脱ぎ捨て、裸同然の体で俺と戦うだと！」

激昂したラダマンティスは、そのままカノンに攻撃した。

「冥界三巨頭を舐めてもらっては困る。『グレイテスト・コーション』……！」

聖衣を纏っていないカノンは、その攻撃を防ぐことはできず、深手を負ってしまった。

「聖衣も失く、半死半生のお前がこの俺に勝てるんでも思っているのか！とどめだカノン！グレイテスト……！」

ラダマンティスが『グレイテスト・コーション』を放とうとした一瞬の隙を突き、後ろに周り込んだカノンは、そのままラダマンティスを羽交い絞めにし、上昇して行った。

「勝てるとは思っていない。道連れになってもらうぞラダマンティス。死への道連れにな……！」

「ば……馬鹿な！？お前ほどの男が相打ちを狙うなど……しょ……」

「正気かあ？」

カノンの意図に気付いたラダマンティスは、動揺していた。

「私の役目は終わったと言った筈だ！今、ジュデッカには、最強の黄金の12人が結集した」

「何イ！？」

「これで勝利は完璧になる。……このカノン、もはや過去の悪事も全て清算して何の憂いもない。さあ、一緒にギャラクシアン・エクスプロージョンを浴びてもらうぞ、ラダマンティス！！」

「や……止めるカノン！！」

「共に受けようぞ、砕かれていく星々の力を！！」ギャラクシアン・エクスプロージョン！！」

銀河を粉碎するといわれる力がカノンもろともラダマンティスを包み込む。

「うわあああああ！！」

ラダマンティスの翼竜ワイバーン サーフリスの冥衣は粉々に砕け、そのまま大地に墜落していった。

冥界三巨頭の一人、天猛星、ワイバーンのラダマンティスの最後である。

【アテナ……兄さん……】

カノンは最後にそう呟いた。

罪深い自分を許し、贖罪の機会を与えてくれた女神アテナへの感謝と、後事を兄、サガに託して……カノンの体は冥界から消滅した。

その後、ジュデッカに結集した12人の黄金聖闘士は、己の命と小宇宙を限界まで燃やし尽くし、太陽の光を作り出し、神以外越える事ができないといわれる『嘆きの壁』を破壊した。

その後に残されたのは、その凄まじい力に耐え切れず、消滅した黄金聖闘士たちが纏っていた12体の黄金聖衣のみであった。

自分達の後継者である4人……いや、5人の青銅聖闘士にアテナと、地上の愛と正義を託して……。

冥王ハーデスの死と共に、冥界が消滅していった。
そのドサクサに紛れてジュデツカに残っていた7体の黄金聖衣の内、
双子座の聖衣が突如、姿を消した。

第97管理外世界『地球』。

日本、海鳴市。

異世界『ミッドチルダ』の魔導師フェイト・テストロッサは、探し
物を探している途中に流星が墜ちるのを目撃した。

使い魔のアルフと共に、現場に向かってみるとそこに、見るからに
重症の青年が倒れていた。

その横には、黄金に輝く箱が横たわっていた。

双子座の黄金聖闘士カノンと魔導師フェイト・テストロッサが邂逅
した。

第零話 プロローグ（後書き）

異世界に飛ばされたカノンの運命は。

カノンを救った魔導師の少女の正体は。

時空を越えた黄金の闘士

「違う世界」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第一話 違う世界

「……ッ！？こ……ここは？」

目を覚ましたカノンは周りの風景を見て、いぶかしんだ。

そこは、冥界ではなく、現代風の部屋であった。

少なくとも、聖域や冥界の石造りの部屋ではない。

自分が寝ていたベッドも石造りの物ではなく、柔らかいベッドであった。

そもそも、何故自分が生きているのか……不思議だった。

自分の体を見ていると、体に包帯が巻かれている。

誰かが、手当てをしてくれていたようだ……いや、このことも疑問だ。

自分は確かに、自らギャラクシアン・エクスプロージョンを浴びたのだ。

しかも聖衣を脱ぎ、裸同然で……である。

この程度の傷で済む筈がない。

現に、ラダマンティスの冥衣は粉々になり、奴自身は冥界の大地に叩きつけられ死んだことは確認している。

なのに、自分の体の傷がこの程度で済む筈がない。

確かに自分の体は、消滅した筈……。

不審に思いながらも、もう一度周りを見渡してみる。

すると、更に信じられないものが目に入った。

双子座の聖衣櫃^{クロスボツケス}。

兄・サガに返したはずの双子座が何故、ここにあるのか？

自分は、夢を見ているのか。

死の直前に、妙な夢に囚われているのではないのか……。

等と考えていたが、扉の向こうから気配を感じ、中断した。

悪意はない。

だが一応警戒しながら、入室してくるのを待った。

「気が付きました？」

入ってきたのは、長い金髪で黒い服を着た10歳にも満たない少女だった。

その隣で、赤毛の犬……いや、狼が此方を警戒しているかの様に睨んでいた。

「……君が俺を手当てしてくれたのか？」

「はい。最初は見るからに重症かと思いましたが、服が血まみれだっただけで、お体の方は軽い怪我だったので、簡単な手当てをさせてもらいました」

確かに良く見ると、余り丁寧な手当てではない。

包帯の巻き方も、下手糞だ。

どうやら、余りこういうことには慣れていない様だ。

しかし、カノンはそのことには触れず、礼を言った。

「後……これを……」

そう言うと少女は、カノンにシャツとズボンを差し出してきた。

「先程まで着ていた血まみれの服ではどうかと思って、格安の服ですけど……」

どうやら、処分品としての低価格の服を買ってきてくれたようだ。

「……見ず知らずの俺の為にここまでしてくれるのか？」

「……」

カノンは少女を観察した。

どうやら、かなり純粋な少女のようだ。

自分のような得体の知れない相手に、ここまで優しくできるとは……。

「……ありがとう。この恩は必ず返そう」

カノンは少女から、ここが日本であることを聞いた。

日本なら、アテナが城戸沙織という人間として総帥を務めるグラード財団がある。

グラード財団を通じて、城戸家に連絡がとれるだろう。

そのまま、聖域までテレポーションしようかとも思ったが……
せめてあの少女……フェイトと名乗った……に、お礼をしたかった。
城戸家に連絡が取れたら、幾許かの金を貰い、フェイトに服のお礼
ができるであろう。

黄金聖衣をフェイトに預け、カノンは街に出ることにした。

グレード財団系列の会社を探そうと、役所に向かったカノンは途中、
財布を拾った。

中身を確認すると10万くらい入っていた。

カノンは、近くの公園の木陰で本を読んでいる車椅子の少女に声を
掛けた。

どうやら、フェイトと同じくらいの年の少女のようだ。

「すまんが……ここらあたりに警察の駐在所などはないか？」

「はい、交番はちょっと遠いですけど……何かあったんですか？」

変わったイントネーションで喋る少女……どうやら、訛りがあるよ
うだ。

「ああ。財布を拾ったので届けようと思ってな」

そう言うとカノンは、先程拾った財布を少女に見せた。

すると、少女が驚いた顔になって叫んだ。

「アー……ッ！それ、ウチの財布……！」

カノンは少女の目を見て、嘘ではないと確信し、財布を少女に渡し
た。

「ありがとうございます！生活費に降ろしたお金がそのまま無くな
る所でした……」

「いや、これからは気を付けなさい」

カノンはそう言うとその場から去ろうとするが、少女が呼び止めた。

「あの……ウチ、八神はやてといいます。お兄さんのお名前は……
？」

「…………カノンだ」

「カノンさん…………これ…………お礼の一割です」

そう言つて、財布から一万円を取り出し、カノンに差し出した。

「…………いいのか？」

「受け取つてくれへんと…………ウチの気が済まへんです…………」

「…………分かつた…………。有り難く貰つておこつ」

カノンにしても、無一文だったので、ここは貰うことにした。

とりあえず、フェイトに買ってもらった服の代金はこれで返すことができる。

カノンは、はやてから役所の位置を聞き、その場を後にした。

「…………どういうことなんだ…………？」

役所から出たカノンは、まるで狐に化かされたかのような顔になっていた。

聞いたところ、グランド財団という名の財団は存在していないと言われたのだ。

アジア最大と言われるグランド財団の名を知らない…………と言つのではなく、そんな財団は無いとはつきり言われたのだ。

ベンチに座り、そこに置き忘れられた新聞に目を通し、日付を見て驚愕した。

「何ッ！西暦2004年だと！？馬鹿な…………」

カノンの記憶では、今年間違いなく西暦1990年の筈だった。

まさか…………未来に来たとも言つのか？

しかし、いくら14年経つているとはいえ、グランド財団ほどの財団がそんな僅かで解体されるとは思えない…………。

まして、総帥は知恵と戦いの女神といわれるアテナその人なのだ。

カノンは詳しく調べる為、そのまま図書館に向かった。

図書館でカノンは、1990年当時の新聞を閲覧した。

新聞には、カノンの知っている事件が何一つ載っていなかった。

アテナが聖域に潜む悪……つまり偽の教皇であるサガを引き摺り出すためのおとりとして開催した、聖闘士同士の格闘技大会『銀河戦争』^{ギャラクシアンウォーズ}。

カノンが地上支配の為、海皇ポセイドンを誑かし起こさせた『世界規模の水害』。

太陽を忌み嫌う冥王ハーデスが起こした惑星直列による永遠の日食、『グレイテスト・エクリプス』。

あれほどの事件が何一つ、掲載されていないのはおかしい。

他、財界関係の資料も閲覧したが、グレード財団は存在自体していなかった。しかも、ポセイドンの寄り代であったジュリアンの家である海商王ソロ家さえも存在していなかったのだ。

更に、先程トイレにいったときに見た、鏡に写った自分。

カノンの年齢は28歳である。

そろそろ中年と言われてもおかしくはない年齢である。

しかし、鏡に写ったのは13年前……兄・サガによってスニオン岬の岩牢に幽閉された当時の若い姿であった。

図書館を後にしたカノンは、テレポーテーションでギリシャに飛び、聖域のある場所に来てみたが……聖域は廃墟でもなく、最初から、そこには存在していないかの如く、ただの岩山であった。

つまり、聖闘士自体存在していないのだ。

「ま……まさか……ここは、別の時空の世界……だとも言うのか？」

カノンは、呆然として佇んでいた。

何かの御伽噺……と、思ったかったが、聖闘士自体が一般人から見れば御伽噺の領域であり、かつて海闘士だった頃、自分が預かつていた北大西洋にある魔の三角海域伝説のような例もある。

有り得ない話ではなかった。

海鳴市に戻ってきたカノンは、とりあえずフェイトの所に戻る前に、礼として何か買って行こうと『翠屋』という喫茶店に入り、そこでシュークリームセットを買った。

フェイトの部屋に着いたカノンは、考え事をしていた為か、無造作に扉を開けた。

そこで目に入ったのは、黒いマントを羽織ったフェイトと、獣の耳と尻尾を生やした赤毛の女性であった。

「カノンさん!？」

「……………見たね……………カノン……………」

赤毛の獣人がそう言っていると、彼女のカノンに向かって翳した目の先に魔法陣が現れた。

「『チエーン・バインド』!」

魔法陣から現れたチエーンがカノンを拘束する。

「アルフ!」

「フェイト……………だから言ったんだよ。こんな奴ほっとけって……………」

「でも……………」

「とにかく、見られたんだから……………コイツの記憶を消して、どっかに捨ててくるから……………」

そう言っただけでアルフと呼ばれた女性はカノンに近づく。

「……………確かに…君達は恩人だが……………だからと言って記憶を消されなければならぬと謂れない」

カノンは小宇宙を発し、あっさりとバインドを引きちぎった。

「なっ!？」

驚いたアルフは、カノンに殴りかかる。

しかし、カノンはそれを指一本で止めた。

「嘘!？」

「この程度の拳が通じるか!」

拳を止めている指先が光ったと同時に、アルフは反対の壁まで吹っ

飛ばされた。

「アルフー！」

「さて……フェイト。…君はどうする。正直……君には手荒な真似はしたくない……。少し、聞きたいこともあるしな。しかし、向かってくるというのなら……こちらも、それなりの対応をしなくてはならなくなる……」

少し、厳しい眼差しでフェイトを見るカノン。

しかし、フェイトはカノンに頭を下げた。

「すみません。アルフがいきなり失礼な態度を取ってしまいました。でも、アルフは……私のことを思ってあんなことをしたんです。責任は私にありますから……アルフのことを許してください！」

「……いや……此方こそ手荒な真似をして済まない」

素直に謝られるとは思わなかったカノンは、フェイトにつられ謝罪した。

「済まないが、少し聞きたいことがある。まあ、とりあえずシュークリームを買ってきたから、それを食べながら話をしよう」

「なるほど……魔導師……ね」

フェイトからの話はこうだった。

彼女は、こことは違う世界『ミッドチルダ』出身の魔導師で、ロス・トログリアと呼ばれる何らかの事情で消失、あるいは滅んだ世界の遺産の一つ『ジュエルシード』と呼ばれるモノを探す為に、この世界に来たとのことだった。

その話を聞き、カノンは確信した。

この世界が、自分の居た世界ではないことを……。

「つまり、カノンさんは『次元漂流者』……だと思われれます」

カノンの事情を聞き、フェイトは結論付けた。

「やはり、そうか。……元の世界に戻る手段はないのか？」

「……私では無理です。こういうのは『時空管理局』の領分ですし……」

そう言うと、フェイトは『時空管理局』について、説明した。

時空管理局。

ミッドチルダが中心になって作られた、数多に存在する次元世界を管理・維持する機関。

いわく「警察と裁判所が一緒になった様なところ」であり、その他に、文化管理や災害の防止及び救助も任務としている。

しかし、実態は警察にとどまらない戦力を有しているの、事実上軍隊と呼んでも差し支えないだろう。

話を聞いて、カノンは不機嫌になっていた。

「気に入らないな……」

「何がですか？」

「次元世界を管理・維持するというのが気に入らん。何様のつもりだ。神にでもなつたつもりか」

「……………」

「特に『管理局』という名称が気に入らん。まあ、確かにそんな機関が必要なのかもしれんが……だったら『時空管理局』ではなく、

『時空治安維持局』とか、『時空警備局』とか、そんな名前ならともかく、『管理局』などと上から目線なのが気に入らん」

「…………… 八八八……」

フェイトは苦笑していた。

「しかし、……その『管理局』とやらに頼らねばならないのも事実だな……フェイト……その『管理局』に連絡はとれるのか？」

カノンがそう訊ねるが、フェイトの表情が曇る。

連絡は出来ないし、それに、どうやらフェイトにとって『管理局』は、場合によっては敵対しなくてはならない相手の様であった。

「君の探し物のロストロギアとやらに関係があるのか？」

「はい。『管理局』の中には『遺失物管理部』というのがあって、ロストロギアの探索・調査・確保する部署なんです。私が『ジューエルシード』を集めることを邪魔をする可能性が高いんです。……私その他にこれを集めている魔導師も居ますので……何れ接触してくると思います……」

しばらく沈黙が続いた。

フェイトは黙り、カノンは何か考えていた。

やがて、カノンが口を開く。

「ならば、フェイト。『管理局』が来るまで君と行動を共にしよう」

「えっ!？」

「『管理局』が来たら、君は俺をおとりにして逃げる。俺は君が逃げる時間稼ぎをしよう。そして、君が逃げ切ったら俺は『管理局』に投降する……」

つまり、雇われのボディガードである。

「でも、それじゃあカノンさんが……」

「気にするな。俺がその『次元漂流者』と判れば向こうは俺を保護するだろう。その際、情報提供を要請されるだろうから……君の事情はこれ以上聞かないで置こう……。『管理局』が来た後、君は、この場所を引き払い、君に指示している者に再び指示を仰げばいいだろう……」

「ですが……危険です……」

「実力は、そこにのびている君の『使い魔』とやらで証明していると思うが……」

アルフは狼の姿になり、まだ気絶していた。

「そもそも、その『管理局』とやらが来れば、君たちだけで相手が出来るとも思えない。安全に逃げられる保険は必要だろうか？」

それから、様々な討論が繰り広げられ、結局、フェイトはカノンの提案を呑むことになった。

第一話 違う世界（後書き）

フェイトの正体と目的を知ったカノンは、元の世界に戻る手がかりを得るまで彼女に協力する。

カノンとの生活で、人の温かさを知るフェイト。

徐々にフェイトはカノンに気を許していく…。

時空を越えた黄金の闘士

「協力関係」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二話 協力関係

カノンはフェイトを説得し、協力者となった。

いかに優秀な魔導師とはいえ、フェイトはまだ9歳に過ぎない。

しかも、純粹培養の少女である。

神すら誑かしたカノンにとって、そんな子供を言いくるめることなど造作もなかった。

「それで、お前の他にその『ジュエルシード』とやらを集めている魔導師がいると言っていたな？」

「……でも……フェイトに比べたら大したことないよ……すっごく弱っちい奴だからね。流石私のご主人様ってところだね」

目が覚めて、カノンがフェイトに協力することになったことを知ったアルフが、先程、カノンに突っ掛かったことを棚に上げて気さくに話しに割り込んできた。

「……目が覚めたか……」

「アンタがフェイトに協力するっていうなら……こっちから手は出さない……。でも、フェイトに危害を加えたら……只じゃ置かないよ」

アルフは、そう言いながらカノンを睨んだ。

先程あっさりと言われたくせに、強気で言うアルフを見て、カノンは静かに微笑み、狼の姿のアルフの頭を撫でた。

「心配するな。……ところで、お前たちは出掛けるんじゃないのか？」

「「あっ!?!?」」

ようやく、フェイトたちは自分たちが出掛ける予定だったことを思い出した。

「そっだよ、フェイト。早く『ジュエルシード』の探索に行かなきゃ」

「そうだね……カノンさんはどうされますか？」
「……フェイト……。俺に敬語はいらん……」
「……うん……。わかったカノン」
「とにかく……何時、時空管理局とやらが来るかも知れんからな。俺も付き合おう……」

フェイトとアルフは、飛行魔法で空を飛び、探索を行っていた。一般人に見つからないように、認識阻害魔法を使っているが、一応、カノンはその対象から外していた。しかし、カノンは魔導師ではないので空は飛べない。しかし、聖闘士であるカノンにとっては、屋根から屋根へ移動することはたやすくできるので、その様にフェイトを追いかけていた。フェイトは、ジュエルシードの探索に集中しているので、後を追うカノンのことを気遣う余裕をなくしていたし、アルフは気遣いをする気がないようである。

「……ジュエルシードの反応……ないね……」

「フェイト。ちよつと一息入れようよ」

アルフに勧められ、フェイトは近くのビルの屋上に降りた。

「一休みするの？」

突然、カノンに声を掛けられ、フェイトとアルフは飛び上がった。

「カ……カノン！？」

「何で……ここに？」

フェイトとアルフは、空を飛べないので走ってついて来ているカノンとはけっこう距離が離れていると思っていた。

降り立ったと同時に声を掛けられるとは思っても寄らなかつたのだ

「お前たちの後について行っただけだが……」

フェイトの飛行魔法は、かなりのスピードである。

それを、魔法も使わず、しかも走ってついて来られたことに、驚愕

する。

「アンタ……一体何者なんだい？」

目の前の規格外の存在に、アルフは驚愕するしか出来なかった。さつきも魔法を使えないのに、自分を簡単に倒してしまったことについて……。

「……お前たち、魔導師とやらは驕り過ぎている」

カノンは、呆れた顔で答えた。

「魔法を使えない者が、魔法を使える者に勝てるはずがない……と、思っているだろう」

フェイトとアルフは答えないが、その瞳がそれを肯定していた。

「言っておくが、俺をお前たちの常識で量らないほうがいい」

そんな風に言うカノンを見たフェイトは、「カノンの事をよく知りたい」……と思い始めた。

探索により、『ジュエルシード』の方角はわかったので、明日、その方角を重点に探すことにし、3人はマンションに戻った。

「さて、そういえば食事はとっていないようだな？」

「アタシは、もう腹ペコだよ……」

「待ってて……直ぐに用意するから……」

そう言っただけでインスタント食品を取り出すフェイト……。

それを見て、カノンが止めた。

「若いうちから、そんな物ばかり食べているのはよくない……俺が作るっ……」

カノンは冷蔵庫を開ける。

「……食材がないな……。まさか……今までインスタントばかりか？」

「……料理は……基本的な事は学んだし……材料を切ったり、火を使うのは得意なんだけど……」

食べられないわけではないが、あまり美味しいものは作れないとの

ことであつた。

「カノンは料理作れるのかい？」

「……ああ。一人暮らしが長いからな……料理くらい出来るようになる」

幼い頃は、兄サガと一緒に食事の準備をしていたが、サガが黄金聖闘士になって守護すべき十二宮に住むようになってからは常に自分で料理をしていた。

黄金聖闘士には従者が付くので、身の回りの世話は従者に任せればいいのだが、正当な双子座の黄金聖闘士であるサガはともかく、その予備でしかなかったカノンは十二宮に住まず、聖域の外れに居を構えていた。

故に、サガの双子の弟であることは聖域では誰も知らず、アテナとポセイドンとの聖戦で初めてその存在が明らかになったのだ。

「仕方がないな……買い出しをしてくる……時間は……8時か。殆どの店は閉まってているな」

「えっ！？まだ8時だろ……殆ど開いている筈だけど……」

「そうなのか……!？」

カノンの居た世界と、この世界は似たような歴史を辿っている。

この日本の歴史にしてもそうだ。

邪馬台国の卑弥呼。

冠位十二階と十七の憲法。

大化の改新。

藤原氏の栄華。

院政。

源平の戦い。

元寇。

南北朝の争い。

応仁の乱と戦国乱世。

関ヶ原の合戦。

島原の乱と鎖国。

黒船来航。

明治維新。

太平洋戦争。

これらの事件は当然、カノンの世界にも存在していた。平行世界。

数々の次元世界を管理する『時空管理局』においても、その存在は研究されているが……未だに到達はしていない世界である。

そして、この世界とカノンの世界は時代がずれていた。

カノンの世界は20世紀の西暦1990年。

この世界は21世紀の西暦2004年。

その僅か14年の間に、様々な変化があったのだ。

1990年においては、食料品などを売っている店は大都会を除けば、8時を過ぎると閉店していたが、21世紀を過ぎた現在は早くても10時……コンビニの様に24時間営業の店も現れている。

20世紀の感覚のカノンは、その事を聞き驚いていた。

それにカノンは15歳の頃から余り地上には出ず、殆ど海底神殿ですごしていた。偶には地上に出ていたが、海闘士が集ってからはまったく言っていないほど地上には出ていなかった。

故に、1990年どころか、1980年代の感覚なのだ。

「ふむ……とりあえず買い出しをしてから少し待っている」

「頼むよ……アタシはもうお腹と背中がくっついちゃうから……」

帰ってきたカノンが作った料理を食べながら、フェイトとアルフは驚愕していた。

余りにも美味しすぎるのだ。

昔、フェイトやアルフにとっても師と言えるフェイトの母親の使い魔が作ってくれた料理とはまた違った美味しさであった。

実はカノンは、かなりの凝り性であった。

旨い物を食べたい。

なら、どうすればいいか？

自分の料理の腕を上げればいい。

そう言うわけで、カノンの料理の腕は一流のコック並なのである。

宛がわれた部屋で、カノンは改めて自分の持ち物を確認していた。
双子座の黄金聖衣。

何故か、聖衣櫃まであるのかは理解できないが、正直、何が起こるか
わからないので、聖衣があるのは有り難かった。

そして……聖衣櫃の隣には小さな瓶が置かれていた。

その瓶の中身は……神聖なるアテナの血。『^{イコトル}霊血』であった。

^{ハイデス}冥王との聖戦が始まったとき、聖域に乗り込んできたのは、サガの
乱で死んだ黄金聖闘士たちであった。

彼らは、冥王からの「アテナの首を取ってくれば、死の世界から解
放し、永遠の命を与える」という誘惑に乗った振りをして、聖域に
乗り込んできた。

目的は、教皇しか知らない『^{アテナ}女神の聖衣』のことを……逆賊の汚名
を着てでも……伝えるために。

その最中、アテナは生きながら冥界に行くために阿頼耶識……^{エイトセ}第八
感……^{シンス}を發揮するため、自らの喉を黄金の短剣で貫いたのだ。

^{アテナ}女神神殿の床に残った血は、さすが神の血である為、普通の人間の
血のように外気に触れても固まらなかった。

その血により、^{ポセイドン}海皇との聖戦の折りに死に絶えた4人の青銅聖闘士
の聖衣は、神の血により最強最後の聖衣として蘇った。

カノンは、アテナの御為に役立つかも知れないので、その『^{イコトル}霊血』
を瓶に入れ、持っていたのだ。

結局、使用することもなかったが……。

神の血が入っている為か、カノンがラダマンティスを倒すために放った自らを巻き込むギャラクシアン・エクスプローションの威力にも割れることもなく、カノンの懐に入っていたようであった。

翌日。

カノンは、フェイト、アルフと共に再び、『ジュエルシード』の探索に出掛けた。

探索の場所は……湯の町『海鳴温泉』であった。

第二話 協力関係（後書き）

フェイトが母の下に帰っている間、カノンは白い魔導師の少女の事を考えていた。

帰ってきたフェイトが母親に虐待されていることを聞き、怒りを覚える。

なのはとフェイトの戦いに割って入ってきた魔導師の少年は一体何者なのか？

時空を越えた黄金の闘士

「魔導師たち」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三話 魔導師たち

海鳴市に隣接する遠見市。

ここに、フェイトの拠点であるマンションがある。

カノンは一人、留守番をしていた。

フェイトとアルフは、『ジュエルシールド』集めをフェイトに命じた母親のところに報告に行っていた。

『時空管理局』にいずれ接触する予定のカノンは、接触後、フェイトのことに付いて情報を提供することになるはずなので、余りフェイトの事情を詮索していなかった。

何の目的で『ジュエルシールド』を集めているのか……そのことが管理局に知られれば、フェイトにとってマイナスになるかも知れない。少なくとも、恩のあるフェイトが不利になるような状況には持つていく気はなかった。

それに、どうやらフェイト自身も、理由を知らないらしい。

ただし……フェイトの母親がこの世界に災厄をもたらす気なら……例え、自分の世界で無くても……フェイトを敵に回しても、カノンは戦うつもりではあったが……。

この世に邪悪が蔓延る時、必ずや現れる希望の闘士。『聖闘士』として……。

例えこの世界が、自分の世界ではないにしても……愛と正義の為に戦うのが『女神の聖闘士』の務めなのだから……。

とりあえず家事を済ませたカノンは、テレビを見ながら、もう一人の魔導師の少女のことを思い起こしていた。

白い防護服を着た少女……名前は……高町なのは……。

カノンが彼女を最初に見たのは、海鳴温泉の近くにあった『ジュエルシールド』を発見したときであった。

その前に、アルフが忠告……いや、脅迫？……をしたらしいのだが、彼女はそれでもその場に現れた。

フェイトとなのはは戦ったのだが、その時はフェイトの圧勝だった。基本的にカノンは、フェイトの身に危険が迫らない限り、手は出さない。

フェイトがそう言うてきたので、カノンもそれを了承していたのだ。次に見たのは、街の中にあつた『ジュエルシード』を強制発動させたときである。

その時はフェイトも前回と違いかなり梃子摺っていた。お互いのデバイスが損傷し、フェイトはデバイスを使わずに『ジュエルシード』を封印し、その場で倒れてしまった。

フェイトはなのはを『甘ったれた娘』と評したが、カノンはなのはを侮つてはいなかった。

確かに百戦錬磨のカノンから見れば、大した相手でもない。しかし、数回の戦闘を行っただけなのに、それだけでフェイトとの実力差を縮めているなのはを見て、感心していたのだ。

次戦うとき……フェイトも勝てるとは限らないだろう。

高町なのはの目を見たカノンは思った。

あの少女の目は、あいつ等の目に似ている……と。

かつて、カノンの野望を打ち砕いた5人の青銅聖闘士たち。

『天馬星座』星矢。

『龍星座』紫龍。

『白鳥星座』氷河。

『アンドロメダ』瞬。

そして、『鳳凰星座』一輝。

取るに足らない青銅の雑魚とばかり思っていたのに、海底神殿に乗り込み、海闘士七將軍を悉く倒し、カノンの野望を潰してしまったのだ。

あいつ等ほど強くはならないだろうが……高町なのはは、あいつ等

……特に星矢に似ている。
真っ直ぐで、そして決して諦めない勇気が籠もった目を持っていた。
実力で言えば、一輝、小宇宙では、瞬、技量においては氷河、紫龍
の方が優れている。

しかし、皆が最後にアテナを託したのは星矢であった。
アイツなら必ずアテナを救える。

そう思わせてくれる何かを星矢は持っていた。

高町なのはいずれ……皆の期待を一身に受ける存在になる。
カノンはなんとなく、そう思っていた。

そして……フェイトの母親と戦うとき……自分は、彼女に味方して
いるかも知れない。

「ふむ……そろそろだな……」

フェイトが帰ってくる時間が近づいていた。

帰り次第、次の『ジュエルシールド』の搜索に向かうとの事なので、
海鳴市で待ち合わせるようになっていた。

「カノン……お待たせ……」

待ち合わせ場所で待っていたカノンの前に魔方陣が現れ、フェイト
とアルフが転移してきた。

笑顔で声を掛けてきたフェイトを見て、カノンは違和感を感じた。

【おい、アルフ……聞こえるか？】

【……え……カノン……！？】

【……そうだ】

【魔法が使えないのに……どうして念話ができるんだい？】

【テレパシーだ】

【テレパシー……？】

【確かに俺は魔法は使えないが……サイコキネシス念動力が使える。念動力の能力
の中には精神感応もある。だから、お前たちで言う念話など簡単に

出来る】

念動力とは、念（意思）の力で様々な能力を発揮する…… よつするに超能力である。

黄金聖闘士は、全員この能力を持っている。

それは、古来より王道とも言うべき聖闘士の闘法の使い手である獅子座のアイオリアでさえ持っている能力である。

アイオリアは、かつて偽の教皇であるサガから、星矢たちの抹殺の命を受けグラーブ財団の療養所の病室に居た星矢を念動力で自分の目の前に引き摺り出したことがあるし、十二宮において、偽の教皇がサガであることが明らかになったとき、黄金聖闘士たちはそれぞれが守護する宮に居ながらも、テレパシーで会話をしていたこともあった。

黄金聖闘士の中で、最も秀でた念動力を誇る牡羊座アリエスのムウ、最も神に近い男と謂われる乙女座バルゴのシャカ、正当な双子座の黄金聖闘士である兄、サガに次ぐ念動力をカノンは持っていた。

【そんなことよりアルフ……。フェイトに何があった？】

【……何がって！？……べ……別に……フェイトはいつものフェイトだよ……】

カノンの指摘に動揺するアルフ。

【誤魔化すな！なんでも無い様に振舞っているが、フェイトの息が荒い……肉体的に何か負担が掛かったのではないのか？】

カノンの正鵠を射た指摘にアルフは観念し、事情を話し出した。

高次元空間内にある『時の庭園』

その中で、鞭の撓る音と、苦痛に喘ぐ声が響きわたっていた。

「たったの四つ……」

バインドで拘束され吊るされているフェイトの前に、妖艶な美女が居た。

「これは……余りにも酷いわ」

彼女の名は、プレシア・テストロッサ。

『大魔導師』の称号を持つ、優秀な魔導師である。

「……………はい……………。ごめんなさい……………母さん……………」

フェイトの防護服は既にボロボロで、その体には鞭で打たれた痣が無数に付いていた。

「いい、フェイト。貴女は私の娘……………大魔導師プレシア・テストロッサの『一人娘』。不可能なことなどあつては駄目。どんなことでも……………そう、どんなことでも成し遂げなければならないの」

プレシアは冷酷な瞳で、フェイトを見据える。

「……………はい……………」

「こんなに待たせておいて、拳がって来た成果がこれだけでは、『母さん』は笑顔で貴女を迎える訳にはいかないの……………判るわね、フェイト……………」

「……………はい……………判ります……………」

フェイトは、哀しそうな顔で答える。

「だからよ……………。だから、覚えて欲しいの。もう二度と『母さん』を失望させないように……………」

プレシアの持つている杖が鞭に変化し、再びフェイトの体を打ち据えた。

庭園内にフェイトの悲鳴が響く。

アルフは耳を塞ぎ、体を震わせていた。

「……………何だよ。一体何なんだよ……………あんまりじゃないか……………あの女！プレシアの異常さやフェイトに対する酷い仕打ちは今に始まったことではないが、今回の余りにも酷すぎる。

そんなにも、あのロストロギア『ジュエルシード』はそんなに大事なのか。

アルフの不信感は増すばかりであった。

【……………惨いな……………】

常軌を逸したフェイトの母親の行為に、カノンの表情が曇る。

【…………… フェイトの母親は…………… 今までもフェイトに対して酷い仕打ちばかりしてきたけど…………… 母親のくせになんでいつもあんなに酷い事を……………】

【…………… 俺は…………… 親というものを知らないから何とも言えないが…………… 一般的な母親の行為ではないな……………】

【親を知らない……………？】

【ああ。俺は孤児でな。親の顔も覚えてはいない。身内といえば双子の兄だけだった。…………… その兄も数週間前に死んだがな】

【…………… そうなんだ……………】

アルフは、思いもかけず知ったカノンの境遇に何とも言えなくなる。【しかし、何故フェイトはそんな女に従うのだ？いくら母親と言っても……………】

【アタシは理解出来ないんだけど…………… フェイトはあの女が好きなんだ。何でも昔は優しくかったらしくて…………… 自分が頑張れば、昔の優しい母親に戻ってくれる…………… って……………】

【…………… そうか……………】

カノンもアルフと同様、何処か納得が出来なかった。

海鳴臨海公園。

『ジュエルシード』が発動した。

一本の木が、まるで生き物の様に動き、巨大な木の化け物に変わった。

高町なのはと行動を共にしているフェレットが駆けつけ、結界を張る。

辺りの景色の色が変わる。

化け物と化した木に、高町なのはが杖を向け対峙する。

その時、無数の光弾が化け物木を襲うが、化け物木に当たる前に何

かに遮られる。

「生意気にバリアまで張るのかい」

「うん……今までのより強いね」

「多少だがな」

なのはが振り返った先には、黒い防護服を着た少女とその使い魔。そして、なのはたちより年上の黄金の箱を背負った男性が立っていた。

フェイトとアルフ、そしてカノンである。

「それに……あの娘がいる」

フェイトは、なのはを見つめながら哀しそうに呟いた。

化け物木は、根を地面から出しなのはたちに襲い掛かってきた。

「ユーノ君、逃げて!!」

化け物木の近くにいたフェレットは、なのはの声に従いその場から離れる。

「『アークセイバー』!」

フェイトのデバイス『バルディッシュ』が、斧型のデバイスフォーム基本形態から、鎌型のサイスフォーム近接戦闘形態に変化する。

なのはが、飛行魔法で高く飛び上がり、なのはのデバイス『レイジングハート』もバトン状のデバイスモード基本形態から、先端が音叉状に変化した砲撃魔法形態に変化する。

フェイトの放った圧縮魔力の光刃がブーメランの様に飛び、化け物木の根を次々と切り払う。

「『デイバインバスター』!」

なのはの主砲とも言える直射型の砲撃魔法が、化け物木に襲い掛かる。

「貫け、轟雷!!」

フェイトの砲撃が化け物木に直撃し、化け物木は消滅し、『ジュエルシールド』のみが残った。

「『ジュエルシールド』シリアル?!」

「封印!」

『ジュエルシード』が閃光が包まれ、封印される。
なのはとフェイトが対峙した。

先日のように、『ジュエルシード』に衝撃を与えるのは不味い。
そう判断した二人は、戦う意思を見せた。
譲れない願い。

母の為に、『ジュエルシード』を手に入れたいフェイト。

ただの甘ったれた娘ではないことを証明し、フェイトと話し合いた
いなのは。

『レイジングハート』と『バルディッシュ』を《デバイスモード》
に戻し、二人はぶつかり合う……答だった。

二人の間に魔方陣が現れ、一人の少年が転移してきた。

なのはの『レイジングハート』を掴み、フェイトの『バルディッシ
ュ』を自身のデバイスで受け止める。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる。『時空管理局』執務官
クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

第三話 魔導師たち（後書き）

フェイトを逃がす為に、執務官と戦うカノン。

黄金聖闘士の圧倒的な実力差に戦慄する魔導師たち。

そして、カノンは時空管理局と接触する

時空を越えた黄金の闘士

「圧倒的な実力」

君は、小宇宙を感じたことがあるか？

第四話 圧倒的な実力

『時空管理局』執務官クロノ・ハラオウン。

彼の登場に、フェイトは恐れていた者が遂に現れたことを知った。

彼の登場は、すなわちカノンとの別れである。

もう、彼の料理が食べられない。

もう、彼と話せない。

もう、彼と会えない。

いつの間にか、フェイトはカノンに対し思慕の念を寄せていた。

初めて接した男性。

自分にとって師とも言える母の使い魔リニスとはまた、違った暖かさ

をカノンから感じていた。

僅かの時間、一緒に居ただけなのに……。

それはアルフにとっても同じだった。

最初は警戒していたが、しばらく一緒に居て、すっかりカノンのこ

とを気に入っていた。

「まずは二人とも武器を引くんだ……このまま戦闘行為を続けるなら……っ!?」

話しているクロノに魔力弾が降り注ぐ。

「フェイト!こっちに!!」

アルフの言葉にはっとしたフェイトは、飛行魔法でアルフの傍に寄り添った。

クロノがフェイトを追いかけようとする、その前にカノンが立ちふさがった。

「……何の真似だ?」

クロノは、カノンを睨みながら言った。

「……約束なのでな。悪いが邪魔をさせてもらおう」

カノンは、背負っていた聖衣櫃を降ろし、側面の取っ手を引く。聖衣櫃は四方に開き、中から黄金のオブジェが現れる。

「!?？」

フェイト、アルフ、なのは、ユーノ、クロノは目を見張った。

二つの顔と四本の腕を持つオブジェの輝きはとても神々しかった。様々な次元世界を周ったクロノだが、これほど存在感のある物を見たことが無かった。

そのオブジェが光を放ちながら分解し、カノンの身を覆うプロテクターとなった。

「……なっ!?」「……」

頭部以外のプロテクターを身に纏い、頭部に被るであろうマスクを左手に抱えていた。

双子座の黄金聖闘士、カノンの姿がここにあった。

『時空管理局』・巡航級8番艦『アースラ』。

この艦の艦長であるリンディ・ハラオウン提督と、通信主任エイミイ・リミエツタの二人も黄金聖衣を纏ったカノンを見て驚いていた。第97管理外世界『地球』。

先日、この世界から次元震が発生し、調査に赴いてみたら高ランクの魔導師二人が戦闘を行っていた。

確認の為に、この艦のNO.2であり、息子でもあるクロノ・ハラオウン執務官に出撃してもらった。

戦闘を止めさせ、二人から事情を聞く。クロノなら簡単に果たせる任務である。

しかし、片方の魔導師が抵抗し、クロノに立ちはだかる人物が現れた。

「エイミイ。あの人から魔力反応は探知できる？」

「いえ、反応はありません。少なくとも魔力に目覚めてはいないようです」

詳しく検査しなければ魔力資質があるかはわからないが、現状では覚醒はしていないようだ。

「クロノ。彼に武装解除を要請して連行して。もし抵抗するような取り押さえなさい」

【了解です。艦長】

しかし、彼女はクロノにこの命令をしたことを後悔する事になる。

「武装を解除し、投降してもらおう。抵抗しなければ弁護の機会もある……これは最後通告だ」

クロノはデバイスを差し向け、カノンに通告した。

「……………どのような権限を持って……………？」

「……………権限？」

呆れ顔で返答するカノンに、クロノが聞き返す。

「俺はお前ら管理局とやらとは無関係の世界出身だ。そして、この世界もお前ら管理局の担当外の世界だろう。管理『外』世界なのだから……………。お前たちがこの世界で、しかもお前たちと関係の無い世界の出身者である俺に、どのような権限を持って拘束しようとするのだ？話を聞きたいのなら、頭を下げるのが筋ではないのか？」

カノンの指摘にクロノは返答に詰まった。

こんな返答をされたのは始めてだからである。

「しかし、君たちが危険なことを行ったのには変わりない。我々、『時空管理局』は次元世界の秩序を守る組織だ。故に君たちから事情を聞かなくてはならない」

「強制権はないだろう。拒否する権利が此方にはあるはずだ」

「……………これ以上、話しても無駄のようだ」

クロノは実力行使に出る決意をする。

「……………あ……………あの……………」

なのはがおずおずと話しかける。

「すまないが、少し待っていてくれないか。何、直ぐに終わるさ」

今までの経験、及び自分の実力に自信があるので、クロノはなのは

にそう答えた。

「はあっ!!」

クロノはカノンに魔力弾を放つ。

これで終わる筈である。

魔力資質があるかないかは判らないが、例え資質があったとしても、目の前の男は魔導師として覚醒していない。

魔法の力に絶対の自信が、クロノにはあった。

だが……。

魔力弾は、カノンをすり抜けていった。

「なっ!?!」

クロノは驚愕した。

「……もしかして……今のは不意打ちのつもりか?」

「くっ!」

クロノは魔力弾を連続で放った。

「お前の攻撃は全てスローモーションのようにしか見えないぞ」
全ての魔力弾はカノンをすり抜けていった。

「バ……馬鹿な……何故、すり抜ける」

目の前の存在は幻術の類ではない。

確かにそこに存在しているのだ。

にも係わらず何故、攻撃がすり抜けるのか……。

「躲しているだけだ」

こともなげに言うカノンに、驚愕するクロノ。

一向に当たらない攻撃にクロノは苛立っていた。

「……当たりさえすれば、それで済むのに……」

クロノの呟きを聞いたカノンは、不適な笑みを作った。

「ほう……ならば当ててみる……躲さず受けてやろう……」

その台詞に怒りを覚えたクロノは、今度はただの魔力弾ではなく、得意とする攻撃魔法を使った。

「舐めるな! 『ブレイズキャノン』!!」

炎の名の通り、熱量を伴う破壊魔法である。

ブレイズキャノンは見事カノンに直撃した。

「カノンー!!」

フェイトが悲鳴を上げる…。

「……どうだ。余裕を見せて僕を侮るから……ッ!？」

クロノは驚愕して目を見開く。

「……その程度か？」

無傷のカノンが立っていた。

「ば……馬鹿な!？」

自身の砲撃魔法の中で一番の得意魔法が効いていない。

クロノはとても信じられなかった。

「伊達や酔狂でこのようなプロテクターを纏っているわけではない」

カノンは、ゆっくりと説明を始めた。

「俺の纏っているこのプロテクターは『黄金聖衣』^{ゴールドクロス}という。この聖

衣は神話の時代より、ただの一度も完全破壊されたことがない究極

の防具なのだ。人間の力ではどう足掻いても、これを破壊すること

は出来ん。『神』でもないかぎりは……な」

そう、黄金聖衣を完全に破壊した者は、冥王ハーデスの側近の『死

を司る神『タナトス』のみである。

カノンはその事を知らないが……。

「つまり……この聖衣を纏っている限り、お前の攻撃は俺には通用

しないのだ……」

クロノにも理解できた。

先程、その聖衣という物を見たときに感じた神々しさ。

あのプロテクターを纏っている限り……否!方法はある。

「その油断が命取りだ!『ブレイズキャノン』!」

狙うは、聖衣に覆われていない頭部。

人体の中でも、特に重要な部分の頭部につけるはずの兜を被らな

ったのは失敗だ。

聖衣の防御力の高さに、驕り過ぎたな。

クロノはそう思い、カノンの頭部にブレイズキャノンを放った。

しかし……。

「そう……狙うのはここしかない……」

しかし、そんなことはカノンも承知のことだった。

カノンは、ブレイズキャノンを掌で受け止めた。

「な……そんな……」

「もう一つ。いい事を教えてやろう……聖闘士に同じ技は二度と通じないのだ……。……返すぞ！」

そう言うと、カノンはブレイズキャノンをクロノに押し返した。

「何ッ!?……うわああああ!!」

返されるとは思わなかったクロノは、ブレイズキャノンの直撃を受ける。

幸い、バリアジャケット防護服のお陰で無事だったクロノ。

だが、状況が絶望的であることは実感していた。

「フツ……さて……今度は此方の攻撃だ」

カノンの指が光ったと思ったら、衝撃がクロノを襲う。

「うわッ!!」

体制を整えカノンを見据えようとしたが……その場にカノンは居なかった。

「な……ど……何処に……!?……うわああああああ!!」

四方八方からの衝撃がクロノに襲い掛かる。

何時、何処から攻撃が来るのか……クロノはまったく理解できなかった。

黄金聖闘士の速度は光の速さ……光速である。

対する魔導師は……例え高速機動型の魔導師でも、マッハ音速1が限界である。

つまり、魔導師が何とか対抗できる聖闘士は、最下級の青銅聖闘士ブロンズ（星矢達五人を除く）であり、黄金聖闘士はおろか白銀聖闘士シルバーにも及ばないのだ。

もはや、クロノは防戦一方であった。

「……す……凄い……」

「ひえ〜〜〜！強いとは思ってたけど……想像を遥かに超えてるよ……」

フェイトとアルフは、カノンの余りにも規格外の強さに啞然としていた。

速さに関してはフェイトも自信があつたが、カノンのスピードは『ソニックムーヴ』よりも速い。

フェイトは自信を喪失していた。

アルフなどは、よくあんなのに向かつて行つたな……と、冷や汗を掻いていた。

何と言つても、動きが全然把握できないのだ。

「……カノンなら……あの女にだつて負けないよ……」

アルフは、嬉しそうにそう言った。

フェイトの母親は嫌な奴だが、とてつもなく強い。

しかし、カノンはそれ以上である。

カノンが居れば、もうフェイトが辛い思いをしなくて済むかもしれない。

カノンなら、フェイトをあの子から守ってくれるかもしれない。

アルフは、そう思った。

そして、フェイトは……カノンの強さに憧れを強くした。

あんな風に強くなりたい。

あれくらい強くなれば、きつと……母さんも認めてくれる……と。

「あの子……大丈夫なの？」

なのはは、カノンの強さに呆然としながらも、なすすべの無いクロノを心配していた。

「……管理局の執務官が……魔導師でもない相手になす術がないなんて……」

管理世界出身のユーノには、とても信じる事が出来なかった。

「艦長！このままじゃクロノ君が……」

エイミーが涙目でリンディに訴えた。

「……………クロノ……」

リンディの表情も、指揮官のそれから息子を想う母の貌に変わっていた。

そして、後悔した。

相手が魔導師でないことに油断し、クロノを嚇けたことを……。

クロノの防護服はもはや見る影も無いほどボロボロだった。

もはや、クロノには反撃する気力すら残っていなかった。

執務官としての誇りも、魔導師としての自信も完全に打ち砕かれていた。

しかし、クロノも伊達に弱冠14歳で執務官を務めているわけではなかった。

「……………貴方は……………何を求めているんですか？」

クロノは口調を改めていた。

敗北を受け入れたのだ。

そして、戦っている最中に気付いたことを指摘し始めた。

「……………貴方は……………最初から……………僕を殺す気なんてなかった……………そうですね？」

そう、カノンはクロノを殺す気などまったくなかった。

その証拠に、カノンは一度も致命的な一撃をクロノに放っていないかった。

見た目は酷いし、傷は確かに痛む。

しかし、直ぐに治る程度の傷であった。

「……………俺が望むのは、この場でフェイトを見逃すことだ……………もちろん、後を尾行することも許さん。それさえ適えば……………お前たちに投降しよう」

「…………拒否すれば…………？」

「…………お前を再起不能するだけだ。俺はどちらでも構わん」

「…………僕の一存では…………」

「なら、判断を仰げ」

その直後、一人の女性が転移してきた。

「その必要はありません」

「…………母さ…………じゃなくて…………艦長!？」

突如現れた母にして上司であるリンディを見て、クロノは目を見開いた。

「貴女が、責任者か？」

「はい。『時空管理局』、巡航Ⅰ級8番艦『アースラ』艦長、リンディ・ハラオウンです」

「…………俺の名はカノン。双子座のカノンだ」

「では、カノンさん。貴方の条件ですが…………承諾しましょう」

リンディの発言に、さらに驚愕する。

「艦長…………本気ですか？」

「ええ。他に対処法がないわ。拒否すれば貴方の命に係わるし…………それどころか彼の実力をかんがみたら、私達は全滅しかねない。どちらにしてもそちらのフェイトさん…………だったかしら。彼女達を逃がされてしまうことに変わりは無いわ。ならば、こちらとしても被害の少ない方法をとらざる得ない。とりあえず…………『ジュエルシード』の確保だけに留めましょう」

そう言うと、リンディは握り締めていた拳を開いた。

そこには先程、なのはとフェイトが封印したシリアル?の『ジュエルシード』があった。

「…………あつ!」

フェイトとアルフは息を呑んだ。

リンディは、カノンとクロノの戦い（カノンが一方的にクロノを攻撃していただけだが…………）に注視していた面々の隙を突いて『ジュエルシード』を確保していたのだ。

「……………フェイト……………」

カノンは、フェイトの迂闊さに苦笑していた。

「……………ごめん……………」

「う~~~~~!」

すっかりと落ち込むフェイトたちを見て、リンディは微笑んだ。

「では、私は一足先に失礼させていただきます。そちらのお嬢さんとフェレット君……………そして、カノンさんは、後ほど『アースラ』にて……………。では……………」

そう言い残すと、リンディは転移していった。

「成程……………。彼女はなかなか侮れないな。確かに……………『ジュエルシード』をフェイトに渡す……………と言う条件は提示していないな……………」

横から搔つ攫つていったリンディだが、確かに条件を保護にしたわけではなかった。

しかし、カノンは『ジュエルシード』を持っていかれたことはどうでも良かった。

フェイトには悪いが、アルフの話聞いて、カノンはフェイトの母親が信用出来なかった。

そのような輩に『ジュエルシード』を渡すのは、躊躇われたのである。『ジュエルシード』の優先権は主張しなかったのだ。

「……………フェイト、アルフ。とりあえずこの場を離れる」

「えっ……………!?!」

「……………カノン!?!」

フェイトとアルフは、カノンを見た。

「これで借りは返した……………。ここでお別れだ!」

「……………」

フェイトは哀しそうな貌になった。

「……………体を厭い、息災でな……………」

そう言つとアルフに念話を送る。

【とりあえず、俺は『时空管理局』の内情を調べる。フェイトの母親がまたフェイトを傷つける様なら、フェイトを連れてこちらに来

い】

【カノン……!?!?】

【ここで、「はい、さようなら」……と言う程、俺も薄情ではない……。お前の話を聞き、俺はフェイトの母親を信用出来ない……。だから……。もし、フェイトの母親がフェイトを害そうとするなら……。此方に逃げてくるんだ。いいな】

【……うん。ありがとう、カノン】

アルフは、カノンに感謝の念を送った。

「……カノン……今まで、ありがとう」

カノンとアルフの念話が届いていないフェイトは、泣きそうになりながらもカノンに礼を言い、アルフを伴いその場を後にした。

「小僧。余計な行動は取るな……」

念話で指示をだしたのでだろうか、不可視な機械がフェイトたちの後を追おうとしたので光速拳を放ち、それを全部墜とした。

「……サーチャー?」

クロノは驚いていた。

まさか、サーチャーの存在を見抜くとは思っていなかった。そして、自分は指示を出していない。おそらくは、リンディの差し金であるう。

クロノの驚きの表情に、カノンも誰の差し金を覚った。

「では小僧。『アースラ』とやらに案内してもらおう。先程の背信の件は、リンディとやらに償ってもらおう……」

尾行しないことを承諾したのに、尾行させた背信行為をしつかりと償わせるつもりのカノンの表情をモニターで見て、『アースラ』に戻り、サーチャーの指示を出したリンディは冷や汗を掻いていた。

こうして、カノン、なのは、ユーノは、『時空管理局』の誇る次元空間航行艦船『アースラ』に赴くことになった。

海鳴市、高町家。

「恭ちゃん。大変!」

「どうした、美由希…?」

なのはの姉、高町美由希は慌てて、兄、恭也の下に来ていた。

「玄関前に人が倒れているの!」

「何っ!?!」

恭也が、美由希と共に玄関に駆けつけてみると、確かに人が倒れていた。

「……服はボロボロだが……別段、体に外傷はないな……軽い打撲程度だ……」

「どうするの、恭ちゃん?」

倒れている人を介抱している兄に尋ねる美由希。

「救急車を呼ぶまでもない。ウチに運ぼう……一応、警戒はしておけ。……もしかしたら悪人かもしれんからな。彼は俺が運ぶから、

美由希はその箱を運べ」

そう言っつて恭也は、彼を背負い家の中に入っていった。

美由希も、慌てて箱を背負って後を追った。

美由希の運んだ箱は黄金色に輝いていて、羊のレリーフが彫られていた。

第四話 圧倒的な実力（後書き）

アースラに乗船したカノンは、なのはと共にロストロギアについての説明を受け、そして聖闘士について語る。

その頃、高町家で目を覚ました男の正体は……お前も生きていたのか？

時空を越えた黄金の闘士

「聖闘士という存在」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五話 聖闘士という存在

「今一度、今一度言わせてくれ！」

「若き青銅の、少年達よ！」

「地上の愛と」

「正義の為に」

「我らは逝く」

「命と魂の全てを注ぎ込んで」

「今こそ燃えろ！黄金の小宇宙よ！」

「この暗黒の世界に一条の光明を！！」

射手座のアイオロスの黄金の一矢に、黄金聖闘士12人の全ての小宇宙が注ぎ込まれる。

アイオロスが放った一矢は、『神』以外通ることが叶わず、破壊不可能と言われた『嘆きの壁』に大穴を空けた。

『神』でもない……たった12人の力によって。

壁が破壊されたとき、凄まじいエネルギーが放出され、黄金聖闘士たちを包み込んだ。

その直前、12人中、死者である射手座のアイオロス、双子座のサガ、牡牛座のアルデバラン、蟹座のデスマスク、山羊座のシユラ、水瓶座のカミュ、魚座のアフロディーテを除く五名の姿が消えた。纏っていた黄金聖衣を残して……。

冥界の崩壊が始まり、双子座の黄金聖衣が消えて暫くして、崩壊していくジュデッカから二つの流星が流れた。

更にエリシオンからも、三つの流星が流れた。

次元航行艦船『アースラ』内。

艦長リンディ・ハラオウン提督は今、生死の境を彷徨う心境であった。

クロノに伴われ、『アースラ』にやって来た魔導師の少女と、フェレットに身を変えていた少年と……黄金の闘士。

クロノは『アースラ』に到着後、医務室に直行になり、代わりに通信主任兼執務官補佐のエイミー・リミエツタが三人を応接室に案内した。

応接室は、和風の造りであった。

盆栽などがおかれ、茶席が設けられており、リンディが正座して待っていた。

まるで、これから茶会でも開くかのように……。

入室してきた三人に、朗らかな笑顔を向け挨拶しようとしたリンディに待っていたのは……冷たい殺気を纏った視線だった。

「……さて、リンディとやら……先程の背信行為について、弁明はあるか？」

「……え……え……と」

「イカサマは、バレなければイカサマではないが……バレてしまった時は……その報いを受けるものだ。……背信行為に対し、死を持つて償うか？」

冗談の様な口調だが……カノンの目は笑っていなかった。

「先程の小僧に対しては、指一本での攻撃だったが……お前にはこの拳を見舞ってやろうか？……心配するな……一撃で、苦しまずに逝けるぞ！」

リンディは呼吸も儘ならず、冷や汗を大量に流していた。

「……あの……カノンさん。それくらいで……」
見かねたなのは、仲裁に入る。

カノンの目から殺気が消え、解放されたリンディは安堵の表情で、その場に座り込んだ。

「……今回は、高町なのはに免じて不問に付す。次はないと思え！」

「ハ、ハイ！」
ホッと息を吐くリンディだった。

高町家において、一人の男が目を覚ました。

「……………ここは？」

「気が付きましたか？」

男は声のする方に視線を向けた。

穏やかな表情の青年と、おさげと眼鏡を掛けた少女が居た。

「貴方はウチの玄関の前で倒れていたの、中に運ばせてもらいました」

「……………それは、お手数を掛けました。ありがとうございます」

男は、この男女に助けられたと理解し、頭を下げた。

「それで……………貴方のお名前は？」

「美由希。人に名を尋ねる前に自分から名乗るものだ」
青年が美由希と言う少女に注意する。

「ゴメン、恭ちゃん……………。私は高町美由希と言います」

「この愚妹の兄の高町恭也と言います」

「酷いよ……恭ちゃん……………」

この兄妹のやり取りに苦笑していた男は、表情を改め自らも名乗った。

「私の名前は……………ムウと言います……………」

『アースラ』内で、ユーノが事情の説明をしていた。

自分が、『ジュエルシード』の発見者であること。

その『ジュエルシード』は輸送中に事故に遭い、この世界に散らばってしまったこと。

管理局には報告したが、何かあつてからでは遅いので自分で回収しようとしたが、力不足故に適わなかったこと。

類稀な魔力資質を持った高町なのはと出会い、彼女に協力してもらったこと。

等を説明していた。

そんなユーノとなのはにリンディはねぎらいの言葉を掛けていた。

「ですから、僕が回収しようと……」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

体中に包帯をまいたクロノが入室して来て、開口一番にそう言った。

「クロノ！……もういい？」

「はい。見た目ほど酷い怪我ではありません。カノンさんは十分手加減してくれていましたし……」

そう言いながら、クロノはカノンに会釈した。

「あの、ロストロギアって何なんですか？」

なのはの質問に、リンディが説明を始めた。

ロストロギアとは、過去、進化しすぎた文明により自滅してしまった次元世界の遺産の総称である。多くは現存技術では到達できていない超高度な技術で作られた物で、使い方次第では世界はおろか、次元世界そのものを崩壊させかねない程、危険な物も存在する。

然るべき手続きを取り、然るべき所で管理、保管しなければならぬ危険物。

それが、『ロストロギア』なのである。

「貴方達の集めていたロストロギア『ジュエルシード』は、次元干涉型の魔力の結晶体であり、幾つか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物」

次元断層が発生したことにより、隣接する複数の次元世界が崩壊したことは、歴史にも残っている。

「繰り返してはいけない」

そう言うと、リンデイは緑茶に角砂糖を一個入れた。

なのははそれを見て驚きの表情を見せた。

カノンも顔を顰めたが、抹茶と砂糖に湯や牛乳を入れて攪拌し、冷やして飲む抹茶ミルクという飲み方があるので、何も言わなかった。最も、確かに抹茶は茶道で使用するが……茶道では『抹茶ミルク』にはしないのだが……。

「これより、ロストロギア『ジュエルシード』の回収については『時空管理局』が全権を持ちます」

リンデイの宣言に、なのはとユーノが驚いた表情に変わる。

次元干渉に係わる問題ゆえ、民間人に介入できるレベルではないというのが主な理由だ。

とりあえず、『ジュエルシード』の搜索から手を引く事を渋るなのはとユーノにはよく考えて決める様に言ったリンデイは、カノンの事情を聞くことにした。

カノンは、自分の状況を話した。

自分が、『次元漂流者』であること。

自分の世界が、この第97管理外世界『地球』と酷似した世界から来たこと。

管理局と接触するために、フェイトと行動を共にしていたこと。

その条件として、接触後にフェイトを逃がす約束だったこと。

等を話していった。

「……………それで、フェイトさんを逃がす為に、クロノと戦ったというわけですか…」

「そうだ。フェイトは管理局と敵対する立場にいるわけだからな。

しかし、俺が管理局と接触する為にはフェイトに頼らざる得なかった。この世界で管理局のことを知っているのはフェイトだけだったし……………」

「あの……………僕が居ましたけど……………」

おずおずとユーノが自身を主張した。

「確かに……。しかし、他に当てが出来たからと言って、あっさり
とフェイトを裏切るなど……。出来ると思うか？それに、俺は今でも
フェイトのことを気にしている。あの娘は……。とても、純粹だ……。
出来ることなら救ってやりたい」

自身の感情に苦笑しながら、カノンははっきりと言った。

以前の自分なら……。他人を気遣うなどまったくしなかつただらうに
……。と。

自身がかなり甘くなってきていることを自覚するカノンであった。

しかし、不満は無い。

本来、敵であつた自分を女神は、アテナ気を掛けてくれていたのだから……。

そんな、女神の影響を受けていることは、むしろ誇らしい。

「とりあえず、貴方が元の世界に戻るよう、私達が貴方の世界を
探し出しましょう。それで、今回の件に関しての情報なのですが……」

「フェイトの居場所は教えない……。フェイトには場所を引き払う
よう言ったから、最初は教えるつもりだったが……。先程の背信行為
に腹が立ったから、教える気が無くなった」

「あつっ……」

リンディは、がっくりと肩を落とした。

「それに……。フェイトを捕まえても終わらんだらう。どうやら、フ
ェイトは命令されているだけで、何故『ジュエルシード』を集める
のか、その目的を知らないらしいからな……」

「……。そうですか……」

「とりあえず、フェイトに命令している女の名前は聞いたから、そ
れは教えてやろう。確か『プレシア・テストロツサ』という名前だ」
その名に心当たりがあつたのか、リンディは驚き、通信でエイミィ
にいくらか指示を出していた。

「カノンさん。貴方について他に教えてもらえますか？」
クロノが質問してきた。

「知ってどうするんだ、小僧？」

「クロノです。クロノ・ハラオウン……」

「……私も、聞きたいです」

「僕も……」

クロノに追従するように、なのは、ユーノもカノンに問いかけて来た。

「……………」

「僕は、今まで魔法こそ、人が使える最高の力だと思っていました。しかし……魔法が使えない貴方に、僕は成す術も無く破れました。

僕の誇りは……砕け散りました。だから知りたいです。貴方の力を……そして、貴方がどのような存在なのかを？」

クロノの真剣な眼に見つめられたカノンは、フツと微笑み、話し始めた。

「俺は……『^{アテナ}女神の聖闘士』だ……！」

古代ギリシャ神話にアテナと言う女神がいた。

アテナは神々の王である大神ゼウスの娘で、全身に鎧を纏った姿で誕生した……。

そう、アテナは戦いの女神であった……！！

しかし、アテナは自ら戦うことを好まず、その戦いは常に護る為の戦いだ……！！

凶暴で残忍な軍神アレスとの戦い。

巨人ギガースとの戦争。

海皇ポセイドンとの大地を賭けた争い……。

神々の壮絶な死闘は人間にとって気が遠くなるほどの永い年月続いた……。

しかし、その戦場において、常にアテナの周りを護る少年たちがいた…。

それが、アテナの聖闘士なのだ！！

彼らは地上のあらゆる場所からやってきた真の勇気を持った少年達である！

アテナの戦いは常に正義の戦い…。

正々堂々とした戦い…。

故に、アテナは武器さえも嫌う…。

そんなアテナを護るために、彼らは己が肉体を武器に変えて戦った！

その拳は、空をひき裂き！

その蹴りは、大地を割ったという！

今でも、この世に邪悪が蔓延る時、必ずや現れると言う希望の闘士…。

しかし、もはやギリシャ神話の中にもその名は存在しない幻の少年達。

それが、アテナの聖闘士。

クロノは、カノンの話に引き込まれていた。

今まで、様々な次元世界を巡って来たが、神々の戦いなどと言うモノが、伝説として伝わっているのではなく、現在も続いている世界など初めて知った。

「……聖闘士の闘技は、宇宙の開闢に基づいている。宇宙の開闢とは……爆発だ！……石も、花も、木も、そして、我々人間の体も原子で出来ているのはわかるな？」

クロノたちは頷いた。

なのも、小学三年生の割には理数系の成績がものすごく良いので、理解できているようだ。

カノンは、説明を続けた。

「そう、始めは地上の生物も、星も、銀河も、そのもつと果てにある何千億という星雲も、全てが一つの塊だった。宇宙は約150億年前に一つの塊から『爆発』^{ビックバン}によって誕生したのだ」

「……それは、全ての次元世界に共通しています。数多の次元世界の宇宙……そのすべてが、『爆発』^{ビックバン}によって誕生したと言われています」

リンディが口を挟んだ。

カノンも大体予想していた。

どれほど次元世界があるうが、それが宇宙である限り、誕生は同一である筈なのだから。

「……つまり、俺やお前たちの肉体も、爆発^{ビックバン}によって生まれた『小宇宙』^{スモ}の一つなのだ！ 聖闘士は自己の体内にあるその小宇宙を燃焼し、爆発させることによって超人的な力を生み出すことができるのだ」

聖闘士の闘技は、『原子を砕く』という破壊の究極を身につけている。

数字的に説明するのならば、最低の聖闘士でも、音速^{マッハ}1の拳を繰り出すことが出来る。

つまり、相手との距離が3・4mと仮定すれば、一秒間に100発の拳をぶち込むことができるのだ。

しかも、生身の体でそれを受ければ、その一つ一つが一撃必殺。

「……魔導師にとって、到達可能限界の速度が……聖闘士にとっては最低ランク……」

クロノ達は絶句していた。

段違い、桁違いなんてものではない。

スケールが違う、次元が違う。

クロノは覚った。

魔法文明が発達していない管理外世界の住人達のことを『井の中の蛙』と見下している管理局だが、管理局もまた『井の中の蛙』であったことを……。

「だからと言って、お前たちの『魔法』を見下しているわけではない。自在に空を飛べる力や、次元世界を行き来できることは驚嘆に値する」

しかし、魔法は資質があるものにしか存在しないが、小宇宙は、全ての人、全ての生物に宿つてゐる力である。

「では、僕も訓練次第で貴方の言う『小宇宙』を体得できるのでし
ようか？」

「……小僧……いや、クロノ。お前の歳は？」

「14歳ですけど……」

「……少し遅いが……不可能ではない……だが……」

カノンは言葉を濁した。

かつて、星矢たちの実の父親、城戸光政は100人居る自分の息子達を聖闘士にするべく、世界各地に送り込んだ。

その100人中、90人は行方不明……。

聖闘士になって、戻ってきたのは僅か10人であった。

つまり、聖闘士になれる確率は、10分の1という低確率なのだ。

「……その100人の息子と言うのに、突っ込みを入れるのは置いておいて……それほど厳しいのですか？」

「魔法は、魔力資質リンカーコアがあれば、魔法学院などで正しく学ぶことによつて、扱える様になれるわ……。小宇宙は……誰もが持っている力だけど……体得するのは命懸け……とても難しいようね……」

「……だからこそ、聖闘士の力は魔導師を上回る……というわけか

……」

クロノは、畏怖と憧れを込めた目でカノンを見た。

そろそろ時間も遅くなるので、なのはとユーノはクロノに元の場所に送ってもらい、帰路についた。

「ただいま〜〜！」

「お帰りなのは！ユーノ……！」

美由希が二人を出迎えた。

「……えっ？倒れてた!？」

「うん。怪我は大したことないんだけど……今、とーさんと居間で話してるよ」

「……恭也さんと美由希さんにはお世話をお掛けしまして……ありがとうございます」

「いや、大したことがなくてよかったですよ」

なのはの父、高町士郎は息子たちが助けたムウという名の青年と談笑していた。

「おとーさん。ただいま」

「おかえり。なのは」

なのはを迎える士郎。

「娘さんですか？」

「はい。末娘です」

ムウは、なのはに向き合い頭を下げる。

「ムウ……と申します。ご家族の方に世話になりました」

「高町なのはです。大丈夫ですか？」

「はい。それほど酷い怪我ではありませんので……」

などと、話しているうちに夕食の支度ができたので、キッチンに集まる。

ムウも、夕食をご馳走になった。

ムウは、考えていた。

この世界のことを……。

ここは、自分が居た世界に似ているが、違う次元世界なのは間違いなかった。

夕食時に見たテレビを見て、今の暦が1990年ではなく、2004年であることを知った。

単純に未来の世界に来たわけでもなく、違う次元の世界なのも確認できた。

あの時、冥界のジュテツカで死んだはずの自分が……何故、生きているのか？

それは解らない。

そして……元の世界に戻ることができるといふことも……。

「失礼します」

ムウが考えに沈んでいると、なのはがノックをして入ってきた。

「お茶を持ってきましたよ」

「すみません。わざわざ……」

「いえ、お兄ちゃんのついで……です……か……ら……」

なのはは部屋中を見渡して、ある一点で泊まり、息を呑んだ。

部屋の隅に置いてある、黄金の箱を見て……。

「ゴ……黄金聖衣？」

それは彫られているレリーフこそ違え、カノンが持っていたクロスボックス聖衣櫃

と同じものだった。

「ッ！？」

ムウの顔が驚愕に染まる。

自分達の世界の住人なら、聖衣の事を知っていてもおかしくはない。

グラード財団が主催した聖闘士同士の由、地上最大の格闘技戦『

銀河戦争』において、聖闘士の存在は知れ渡っているからである。

しかし、この世界には、聖闘士は存在しない。

にも係わらず、何故、この少女は黄金聖衣のことを知っているのか？

ムウは警戒した……が、次のなのはの台詞で警戒を解くことになった。

「ムウさんは……カノンさんの知り合いなんですか？」

思いもかけぬ名前を聞き、ムウは再び驚愕した。

なのはは、アースラで『クロス聖衣』のことについて、カノンから聞いた話を思い出していた。

【聖闘士の攻撃力はまさに超人的だが、その肉体は生身の人間であることに変わらない。並みの人間よりは鍛え上げられているとはいえ、破壊の究極である原子を砕く力に耐えることなどはできん。しかし、それを可能にする物が存在する。それが、俺たちが纏っている『クロス聖衣』だ。失われし神の技により生み出されたこの聖衣は、聖闘士の証であり、最強の防具なのだ。】

88あるという星座。

聖闘士はその星座を守護に持ち、聖衣も星座を模している。

その星座の数だけ、聖衣は存在する。

北天に29、南天に47。そして、北天と南天を分ける黄道……つまり、太陽の動く軌跡に12。

そして、聖衣は3つのランクに分けられている。

最も数が多く、聖闘士の基礎的な闘技を修得した者に与えられる48体の『クロス青銅聖衣』。

聖闘士の正規兵的存在であり、より高次元の闘技を会得した者に与えられる24体の『クロス白銀聖衣』。

そして、聖闘士の最高位。たった12人しか与えられない『クロス黄金聖衣』。

特に、黄金聖衣は人間の如何なる力を持ってしても破壊することの敵わない究極の防具。

『クロス神』以外、破壊することなど出来ない至高の聖衣である。

「カノンを知っているのですか？」

ムウは、驚きながらもなのはに質問する。

「はい。さっきまで一緒でした」

そして、なのははカノンの状況を説明した。

「……………成程…どうやらカノンと合流することが最善の道……………のようですね」

ムウは、そう呟くと、なのはに明日、カノンの下に案内を依頼した。どちらにしろ、なのははリンディ達にこの件から手を引かず、協力する胸を伝えてあったので、快く承諾した。

第五話 聖闘士という存在（後書き）

海の中に眠るジュエルシードを封印する為に無茶をするフェイト。
駆けつけるなのはとカノン。

そして、ついに双子座最大の奥義が炸裂する。

時空を越えた黄金の闘士

「銀河を砕く力」

君は小宇宙を感じたことがあるか！？

第六話 銀河を砕く力

「なのは……今です！」

ユーノが封時結界を張り、ムウが念動力サイコキネシスで火の鳥と化した『ジュエルシード』の動きを封じる。

「リリカルマジカル……『ジュエルシード』シリアル？……封印！」
シリアル？の『ジュエルシード』は封印され、なのはのデバイス……
『レイジングハート』に収納された。

「……それにしても……ムウさんの念動力……ですか？凄いい拘束力ですね。僕のバインドではああはいきませんよ……」
ユーノは感歎の声を上げた。

ムウの念動力で金縛りにあった火の鳥は微動だにしなかったのだ。
呪文もデバイスも必要としない念動力の力は、ユーノにとって驚嘆に値するものであった。

ムウはそんなユーノに微笑みながら、なのはを労っていた。

カノンの放った一閃に大熊は気を失った。

「『ジュエルシード』シリアル？……封印！」

大熊から『ジュエルシード』が抜け出て、クロノのデバイス『S2 U』に収納された。

「フム。ごくろうだったなクロノ」

「いえ。カノンさんがあっさりとあれを黙らせてくれましたから、
楽な作業です」

『ジュエルシード』の力で、とてつもない化け物となった大熊をあつさりと倒してしまったカノンの力に、クロノは畏怖と憧れを同時に抱いていた。

管理局に協力するため、学校を休学し、『アースラ』にやって来たのはとユーノに同行する者がいた。

アースラのブリッジのモニターで、その男の顔を見てカノンは驚愕した。

「ムウ!？」

自分以外の聖闘士がこちらの世界に來ていることを知ったカノンは、驚きの声を上げた。

アースラの乗組員達は、自分達の常識を凌駕する『黄金聖闘士』という存在が、また現れたことに戦慄した。

カノンだけでも脅威なのに……。

しかし、彼もまた『次元漂流者』なので、無視するわけにはいかない。

リンディは、ムウの乗船を許可した。

「……………」

「……………」

二人の黄金聖闘士は、顔を合わせてから一言も喋っていなかった。

ただ……お互いの顔を見つめるだけであった。

そんな二人に困惑するのはたちであつたが、ムウがその沈黙を破つた。

「……………こうして…貴方と顔を合わせて話すのは…初めてですね……………」

「……………そうだな」

そう、二人は一度だけ顔を合わせたことがあるだけで、話したことは一度もなかったのである。

「えっ!?!二人ともお仲間じゃなかったんですか?」

なのはが素っ頓狂な声で訊ねてきた。

「ええ。私とカノンは確かに同じ聖闘士であり、仲間ですが……だからといって、親しい間柄ではありません」

カノンが、言葉を交わした聖闘士は、兄サガを除けば、星矢達五人と、蠍座スコーピオンのミロ、天秤座ライブラの童虎のみであった。

「……本来の双子座ジミニの聖闘士は……俺の双子の兄でな。俺はその予備に過ぎなかった。それに……俺は……」

「その先はよろしいですよ」

自分の事を語ろうとするカノンを、ムウが止めた。

「ムウ……?」

「貴方のことは、ミロから聞いています。貴方は……間違いなく我々の同志……双子座の黄金聖闘士、カノンです」

確かにカノンは、大罪を犯した。

ムウにしても、それは許せないことである。

しかし、人はやり直すことができる。

カノンの女神アテナへの忠誠。そして、己の罪を償おうとする誠意をミロは認めた。

そして、先の冥王ハーデスとの聖戦で、彼は見事その務めを果たしたのだ。

何より、今のカノンからは邪悪さは一切感じない。

カノンの目は、真の聖闘士の目である。

ムウは、手を差し出した。

カノンもムウの手を握り、二人は固く握手を交わした。

「……ところでカノン。何で貴方…若返っているんですか?」

「……若返って!?」「……」

ムウの一言に驚愕するなのはたち……。

「……わからん!」

そうとしか答えようのないカノンであった。

10年以上若返ったカノンと、そのままのムウ……。

疑問が一つ増えた。

ちなみになのは達は、カノンの実年齢が28歳であることを知り、呆然となっていた。

「検査の結果が出ました」

クロノの顔が若干引き攣っていた。

カノンとムウは、身体検査や、魔力資質の検査などを受けていたのだ。

そして、カノンが若返った理由の調査も兼ねていた。

「……ムウさんは……リンカーコアは存在せず……魔力資質はまったくありませんでした……ですが……」

クロノは引き攣った顔のまま、カノンの方に視線を向ける。

「……カノンさんからは、リンカーコアが確認されました……オーバーSランク相当の……何ですか？何なんですか？貴方は……。原則もいい所ですよ！」

只でさえ、自分達魔導師を圧倒する力を持っているくせに、魔力もSランク以上……。

余りの反則的な存在に、クロノは冷静さを失っていた。

「落ち着け……」

「これが、落ち着けますか!？」

完全にテンパっているクロノであった。

「やれやれ……それにしても……」

「どうしましたか？カノン」

「いや、俺はムウの方に適正があると思っていたんだが……」
カノンの考えも分かる。

ムウは、黄金聖闘士の中で最も秀でた念動力の持ち主である。

そのムウに魔力資質が無く、自分が持っていたというのは、カノンでなくても意外に思うだろう。

「……まあ、別に私は魔法など必要ありませんから、気にしません
が……カノンはどうしますか？魔法を学びますか？」

「……そうだな……。とりあえず飛行魔法は便利そうだな……。あれくらいなら覚えてもいいだろう。あと、結界関係もな。関係の無い人間を巻き込まないようにするのに役立ちそうだな」

などと話していると……。

「カノンさんの魔力資質なら、それ以上のことも覚えられますよ」
ようやく落ち着いたクロノが口を挟んできた。

「……まあ、今回の件が終わっても、元の世界に戻るまで時間があ
るから、その間の時間つぶしにはなるか」

「私はデバイスという物に興味がありますね……」

聖衣の修繕者という、ある意味職人であるムウはデバイスに興味を
持ち始めたようであった。

「それで俺の体が若返ったことについては……？」

一番の疑問について問いただしてみると……。

「とりあえず、カノンさんの肉体年齢は、14歳……僕と同じ年に
まで若返っているのは確かなようです。しかし……やはり流石にそ
の理由までは解りませんでした……」

あまり期待はしていなかったが……。

カノンは今でもフェイトのことを気に掛けているが、アルフからの
話でフェイトの母を信用できなくなっている。

故に、『ジュエルシード』を奴に渡すわけにはいかないと判断した
ので、とりあえず管理局に協力することにした。

最も……管理局に渡すのも気が引けるが……。

カノンは疑問に思っていたのだ。

確かに、危険なロストロギアを管理しなければならぬ道理は解ら
なくはない。

しかし、管理局が全て管理するというのも危険な気がするのだ。

見方を変えれば、管理局がロストロギアを集めているとも見れなく
はないのだ。

これから管理局に入局する者たちの中に、ロストロギアを己の欲望
の為に使おうと考える輩がいなくても限らないのだ。

いや、もしかしたら次元世界の平和の為にという名目で、管理局上
層部が全次元世界征服の為にロストロギアを使用しようとしているの
かも知れないのだ。

その為に、管理すると言う名目でロストログアを集めている可能性も否定できない。

クロノ達、現場の人間には何も知らされずに……。しかしその時は、カノンとムウが管理局上層部に制裁を加えることになる。

この二人ならば、朝飯前だろう。

故に、カノンもムウも、今は管理局に協力することにした。

最も、その時がカノンとムウの寿命が尽きた後なら……。否、それでもそれを打ち砕く者は必ず現れるだろう。

『女神の聖闘士^{アテナ}』が居る限り……。

アルフは考えていた。

カノンと別れてから、『ジュエルシールド』を二つ手に入れた。

しかし、管理局に見つからないように探しているので、思った以上に苦労することになった。

そして今、フェイトはかなり無茶なことをやろうとしている。

フェイトとアルフは、今、海上の空に居た。

目的は、海中にある6つの『ジュエルシールド』を強制発動させる為に、強力な雷を海に打ち込むのだ。

これほど強力な魔法を使った後に、6つの『ジュエルシールド』を封印するなど、AAAランクの魔導師であるフェイトにでもかなり無謀である。

そのことは、フェイトもアルフも分かっていた。

しかし、フェイトは母の為、アルフはフェイトの為、それを選択した。

今、手元にあるのを併せれば、『ジュエルシールド』は8つになる。

前回より倍の数を持っていけばあの女……。プレシアも満足するだろう。

それでも、プレシアがまたフェイトを傷つけるようなら……カノンに言われたように、フェイトが何を言おうとも、カノンの下に逃げるつもりだった。

カノンなら、プレシアからフェイトを護ってもらえる。その確信がアルフにはあった。

「まったく……呆れた無茶をする子だわ……」

リンディは、フェイトのやろうとしていることを悟り、嘆息する。

「無謀ですね……間違いなく自滅します……」

クロノも淡々と呟く……。

カノンとムウは何も言わず、スクリーンに映ったフェイトを凝視していた。

そこへ、なのはが入室してきた。

「あの……私、急いで現場に……」

「その必要は無いよ……。放って置けば、あの子はそのまま自滅する！」

クロノはなのはを制止した。

間違いなく、フェイトは魔力の限界を超えるだろう。

自滅しなくても、魔力を使い果たした所を叩けばいい。

クロノはそう主張し、リンディもそれを肯定する。

「我々は常に最善の手段を取るしかないのよ……。辛いけど、これが現実よ！」

なのはは、救いを求めるようにカノンに視線を向けた。

「……公人としては、リンディとクロノの選択は間違いではない……。私人としては……お前たちはどう思っているんだ？」

なのはの視線を受けたカノンは、艦長と執務官という立場での意見を是としながらも、個人的意見を求める。

その視線は、誤魔化しは許さない……そう語っていた。

「……人道的に考えれば……あの無茶を止めるべきだと思う……も

しくは……彼女の手助けをしてその負担を軽くしてあげたい……」
リンディは、そう答えた。

その返答に、満足そうな顔になるカノン。

「では、リンディ……なのはから受けた借りを返す機会を与えよう」
「なのはさんからの借り？」

「忘れたのか？先日の背信行為……なのはが仲裁しなければ……今頃、お前はその席に座って暢気に、あの邪道の茶を飲むことも出来なかつたことを……」

カノンからの指摘で、リンディの顔は真っ青になった。

あの時に受けた、カノンからの殺気を思い出したからだ。

「だから、その借りを返す為に、今回はフェイトを救え！それが出来ないと言うのなら……背信行為の責を負うか？」

カノンはそう言いながら、拳を握り締めた。

そう、カノンがあの時、あっさりなのはの仲裁を受け入れたのは、こういう時の交渉材料にする為であった。

「……カノン。それは脅迫と言うんですよ……」

ムウが苦笑しながら指摘するが、止める気はないようだ。

「うるさい！とにかく、俺はフェイトを救いに行く。ムウ、頼む」

「……解りました」

ムウが、カノンを現場までテレポーションさせようとした時、なのはが待ったを掛けた。

「私も行きます！」

「……なのは！？」

「私も、フェイトちゃんの手助けをしたいんです。ムウさん。私もお願いします！」

「僕も行きます！」

なのはとユーノの決意が固いことを悟り、ムウは頷いた。

「……心配するな。何も『ジュエルシード』をフェイトに譲れという訳ではない。事が済んだら動け……」

クロノはカノンの考えを悟り、頷いた。

つまり、カノンが救いたいののはあくまでもフェイトの身命のみだということである。

ムウは、カノンとなのはとユーノの三人をテレポーションさせた。

「……でも、カノンさんはどうするつもりなんでしょう？いくら魔力資質があっても、まだカノンさんは飛行魔法……出来ませんよね？」

「「あっ！！」」

エイミイの指摘に、リンディもクロノもその事を失念していたので焦る。

「大丈夫です。対策は考えていますよ」

ムウは涼しげな顔で、そう答えた。

フェイトの魔力は既に限界に迫っていた。

「……クッ！やっぱり無茶だったんだよ……」

アルフは、もはや見ていられなくなっていた。

「まだまだ……」

フェイトは、满身創痕の体で、竜巻と化している『ジュエルシールド』に向かおうとした……その時。

「まだまだじゃないわ！馬鹿者！！」

「カ……カノン！？」

フェイトの目の前に、『黄金聖衣』を身に纏い、空中に浮かんでいるカノンが現れた。

「……魔法が使えないのに……どうやって……！？」

「念動力で体を浮かせているだけだ……」

これが、カノンの対策である。

ムウほどではないにしろ、それなりに強い念動力を持つてるカノンは、自らの体を念動力で空に浮かせたのだ。

多少、精神力を消耗するが、高機動さえしなければ、特に問題はな

かった。

「フェイトちゃん！」

カノンの傍にいたなのはは、フェイトに声を掛けた。

「……………」

フェイトは、なのはの姿を見た後、カノンに視線を向けた。

それは、とても哀しい目であった。

カノンが……………この少女と共にここに来たこと……………。

つい先日まで、カノンの傍には自分が居たのに……………。

理由は解らないが、そのことがとても哀しかった。

「フェイト。俺がこの竜巻をなんとかする。その後、お前となのは

で『ジユエルシード』を封印しろ！」

「……………そんな、いくらカノンでも……………」

「無茶ですよ！」

「そうだよ、カノン。アンタの力は認めるけど……………」

フェイト、ユーノ、アルフが次々に訴えるが……………。

「いいから任せる！」

「……………はい！！……………」

有無を言わず、カノンに押し切られてしまった。

カノンは、手に持っていた両サイドに顔が付いているジェミニのマスクを被った。

そして、両手を頭上に掲げる。

荒れ狂う竜巻と雷雲に狙いをつける。

フェイトたちは、クロノと戦っていた時には感じなかった宇宙を、

カノンから感じていた。

魔力を持っているので、小宇宙を操ることは出来ないが、小宇宙を

感じることは出来るようであった。

但し、強力な技を放たれるときだけだが……………。

「……………これが、『小宇宙』！？……………」

「これが、すべての者が持っているという……力!? こんな……こんな力を……本当に誰しもが持っているの?」

なのはとユーノは、自分たちが使う魔法とは次元が違う力に、畏怖を抱いた。

「見るがいい。星々の砕ける様を!」ギャラクシアン・エクスプロージョン!」

全小宇宙を爆発させ、銀河の星々をも破壊する力が、炸裂する。

「きゃあ~~~~!」

「うわっ!」

「にやあ~~~~!」

「ひええええ!!!」

その破壊力の余波を受け、フェイト達は吹き飛ばされた。

体制を整えた、フェイトたちが目にしたのは……あれほど荒れ狂っていた竜巻と雷雲が鳴りを潜め、カノンの傍に6つの『ジュエルシード』が浮かんでいた。

「……さっさと封印しろ!」

「……はいつ!」

『アースラ』では、リンディたちが我が目を疑っていた。

「……な……なんて…力…なの……」

「……本当に……手加減されていたんだな……」

「……信じられません。範囲は小規模ですけど、威力だけならアルカンシエルに匹敵します!」

ギャラクシアン・エクスプロージョンの破壊力を垣間見て、リンディたちの背筋に冷たい汗が流れていた。

「それにしても……あれだけの衝撃を受けているのに、何故、次元震が起きなかったんだ?」

『ジュエルシード』に衝撃を与えれば、次元震が起きる。

それは先日、証明済みであった。

にも拘らず、何故、今回は起きなかったのか……。

「……………恐らく……………カノンが抑え込んだんでしよう。彼の小宇宙は空間を操ることが出来ますからね……………」
ムウが事も無げにそう答えた。

もともと黄金聖闘士が全小宇宙で放出すれば次元震を抑えることは可能である。

ましてや、双子座の黄金聖闘士は、精神と空間を操ることに長けているのだ。

双児宮を迷宮に変えてしまうことができるように……………。
そんな力を持つカノンからすれば、次元震を抑え込む等容易いことであった。

カノンの力を説明されたリンディ達は、余りの規格外で反則な存在のカノンに呆れかえってしまった。

封印された『ジュエルシード』はなのはとフェイトの傍に、それぞれ3つずつ浮かんでいた。
なのはは思う。

寂しい気持ちも、哀しい気持ちも、分け合えて、半分こに出来るのだ……………」

【ああ…やつと解った。私はこの子と分け合いたいんだ……………】
なのはは、自分の本当の気持ちに気付き、それを口に出す。

「……………友達に……………なりたいんだ！」
「っ!?!」

フェイトは、なのはの言葉に目を見開く。

なのはとフェイトは、『ジュエルシード』の前で固まっていた。

『アースラ』に緊急アラートが鳴り響く。

「次元干渉!? 別次元から、本艦及び戦闘区域に、魔力攻撃来ます!……………後6秒!」

エイミィの報告に、クルー達に戦慄が走った。

しかし、予想された衝撃は襲ってこなかった。

放心しながらカノンの名を呼び続けるフェイトを、アルフは叱咤した。

「とりあえず、ここから逃げるよフェイト!!」

「でも……カノンが……」

涙目でフェイトは呟く。

「大丈夫!カノンは問題ないよ」

アルフは、そう答えると海面に向かって指差した。

フェイトが、そちらに視線を向けると、海面からカノンが姿を現した。

再び、念動力で宙に浮き、マスクを外し、フェイトの方に顔を向け微笑む。

フェイトは、そんなカノンを見て、ようやく落ち着きを取り戻した。

「納得したんなら行くよ!」

アルフは、魔力を海に撃ち込み、津波を発生させ、それを隠れ蓑にしてその場から離脱した。

第六話 銀河を砕く力（後書き）

フェイトを連れて逃げようとするアルフに一人の男が立ちはだかる。聖衣に似たプロテクターを装着したその男は……まさか…海の闘士！？

男が放つ拳がアルフを貫く。

時空を越えた黄金の闘士

「海闘士」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第七話 海闘士

アースラの医務室で、カノンは診断を受けていた。フェイトを庇い、強力な魔法の直撃を受けた為だ。

だが……。

「……大した怪我は負っていません。多少、体が痺れている程度です……」

医務官は引き攣りながら、診断結果を説明した。

「……無論だ。あの程度を防げない黄金聖衣ではない」

雷撃だった為、多少は痺れたが、衝撃は全て黄金聖衣が防いでいたのだった。

医務室を出ると、扉の前になのはが立っていた。

「大丈夫でしたか？」

「……ああ。特に問題はない……」

カノンの返答を聞き、ホツとした顔になった。

リンデイに呼ばれていた為、なのはと共にブリーフィンググループに向かっている途中、なのはから様々なことが質問された。

と、言っても雑談のレベルだ。

「……どうしたんだ？以前よりも、オレに付き纏って……」

「……カノンさんが、すつごく優しいことが解ったからです！」

満面の笑顔で、そう答えてきた。

「……俺が……優しい？」

「はい！最初はちょっと怖かったです……カノンさんがクロノ君と戦った時……私の理解を超えていて……クロノ君はスタボロにされていたし……。でも……カノンはフェイトちゃんのことを本当に心配していて……大切に思っているのがよく解ったんです。だから……カノンは優しいいい人だって……」

なのは話を聞き、カノンは……その短絡思考に呆れていた。
フェイトのことを心配しているのは確かだ。

……確かに女神^{アテナ}により悪の心を洗い流され、正義に目覚め、罪の償いをした。だからと言って自分の罪が消えたわけではない。
それに、女神に仇為す敵に対して遠慮する気はさらさらない。
容赦なく、相手を殺すだろう。

だが……昔と違い、自分が甘くなっているのも自覚はしていた。

「さて……カノンさんも大事には至らなかったの……事件の大元について……クロノ、『プレシア・テストロッサ』についての調査報告を……」

「はい艦長……エイミイ、モニターに……」

《はいはい！》

カノンとなのはがブリーフィング・ルームに到着したので、さっそく会議が始められた。

モニターに、プレシア・テストロッサのプロフィールが映し出された。

「僕らと同じ、ミットチルダ出身の魔導師『プレシア・テストロッサ』。専門は、次元航行システムの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データとさつきの攻撃の魔力波動も一致しています……そして、カノンの話ではあの少女『フェイト』は、彼女の……」

「フェイトちゃん……あの時……『母さん』って……」

なのはは、海上でプレシアの攻撃のフェイトに襲い掛かる直前のことを思い出した。

「……母娘……ね……」

「……その……驚いてたって言うより、なんだか怖がってるみたいでした……」

リンデイの眩きの後、なのはが感想を述べた。

「この人が……フェイトちゃんのお母さん……」

「……アルフ……フェイトの『使い魔』の話では、フェイトは、母親に鞭で打たれる虐待を受けているとのことだ……」

虐待……という言葉に、その場にいる者たちの顔が歪んだ。

高次元空間内 『時の庭園』

鞭がフェイトの身体を何度も何度も打ち据える。

響く悲鳴。

「あれだけの好機に、ただボクっとしてるなんて……」

プレシアは、息を切らせながら、フェイトに怒りをぶつけていた。

「……ごめん……なさい……」

「酷いわフェイト。貴女はそんなに『母さん』を悲しませたいの？
プレシアは再び鞭を振るい、フェイトを打ち据えた。

「それに、あの男の件を報告してもらっていないわ……。あんな何処の馬の骨か分からない危険な男と行動を共にしていたなんて……私の願いが無になったらどうするつもりなの!？」

6つの『ジュエルシード』を魔法とは違う未知の力で抑え込んだカノンの存在は、プレシアにとっても脅威であり、容認できないイレギュラーであった。

その時、初めてフェイトはプレシアに対し怒りの視線を向けた。

短い付き合いだが、フェイトにとってカノンは父のようであり、兄のようであった。

初めて好きになった異性を侮辱され、流石に怒りを覚えたのだ。

「……何……その目は……? どうやら、悪い影響を受けた様ね……。ますます『母さん』を悲しませるつもりなのね」

鞭を打つ力を強め、フェイトの絶叫が庭園内に響いた。

「フェイト……フェイト!!」

プレシアが奥に消えた後、アルフが倒れ伏しているフェイトに駆け寄り抱き締めた。

「……このまま此処に居れば……いつかフェイトは……あの鬼婆に殺される……。いくらフェイトがあの子の為にと望んでも……」

アルフは先日のカノンの言葉を思い出した。

【もし、フェイトの母親がフェイトを害そうとするなら……此方に逃げてくるんだ】

アルフはフェイトを抱きかかえ、庭園から逃げ出す決意をした。

フェイトがプレシアを慕っているようが、プレシアは間違いなくフェイトを疎んでいる。

アルフにはそうとしか思えなかった。

正直、管理局は信用できないが、カノンがいるから大丈夫だとアルフは思っていた。

カノンなら、フェイトをどんな者からでも護ってくれる。

カノンの強さ、優しさ（カノン本人に自覚なし）をアルフは信頼していた。

フェイトを抱きながら走っていると、行く手を遮る者が現れた。

「何処に行く気だ」

その男は、蒼いローブで己が姿を覆い隠していた。

アルフは今まで、こんな奴がこの『時の庭園』に存在していたことを知らなかった。

「……アンタ……誰だい？ここへの侵入者なら見逃してやるから、とつと何処かに行きな！」

警戒しながら、男に問う。

「……フツ……俺様はプレシアの協力者だ……使い魔には用はないが、その小娘にはまだ使い道がある。置いていつてもらおう」

返答を聞いたその瞬間、アルフは男に拳を放った。

だが、その拳はあっさりと躲されてしまう。

男は纏っていたローブを脱ぎ、その姿を見せた。カノンが纏っている『聖衣』に似たプロテクターを纏った男であった。

「使い魔風情が、この俺様に敵うと思うか！」

アルフはそう答えた男から、覚えのある気配を感じた。

そう……それは宇宙……『小宇宙』！

「……これは……あの時のカノンに似た力!?……」

あの時……つまり、カノンが『ジュエルシールド』を押さえ込んだ時に感じた力に似ていた。

聖闘士が使用する『小宇宙』と魔導師の使用する『魔力』は、まったく違う力である為、平時には感じることも出来ないが、必殺技とも言えるほどの力を発揮するときには、それぞれ感応できるようであった。

アルフの心に絶望が広がった。

感じる力は、カノンに比べればかなり落ちる。

しかし、それでも自分を凌駕する力であった。

「あ……アンタ……何者なんだ……!?!」

「フム……。犬っころに名乗るといふのも……まあよかろう。俺様は『^{バイレリット}海賊』のフック。くらえ『バイキング・アックス』！」

フックの豪腕がアルフのなぎ払う。

アルフはフェイトをその場に残し、吹き飛ばされた。

「……とどめだ！」

フックがもう一度、バイキング・アックスを放つ。

先程よりも、大威力で……。

アルフはバイキング・アックスを喰らいながら、咄嗟に転移魔法を使い、その場を離脱した。

「……フン！逃げたか……。あの男と接触を図るだろうが、まあいい……」

フックはアルフが逃げ込む先は間違いなく、カノンと接触すると確信した。

「…………さて、我が主が事を起こす為の準備が整うのには、後10年は必要。『海龍』^{シードラゴン}様……アンタはその障害になる可能性が高い……この小娘をプレシアに引き渡した後、急いであの御方に指示を仰がねば…………」

フックは、フェイトを肩に抱えて庭園の奥に向かって行った。

アリサ・バニングスはご機嫌であった。

先程、学校を休学している親友の高町なのはからのメールを読んだからだ。

最近のなのはは、何に悩んでいるのかよくボツツとして居たので、少し喧嘩してしまった。

自分達に相談してもくれず、一人で悩んでいたからだ。

話してくれば、一緒に考えてあげることも出来るし、そのことで少しは楽になるかも知れないのに…………。

そして…………何故かなのはが自分達の前から居なくなるのではないかという思いからであった。

「…ッ!? 鮫島、ちよつと止めて!!」

外を見ていたアリサは、あるモノが目に入り車を止めさせた。

「…………やっぱり大型犬…………」

そこには、紅い鬣の大型の犬が倒れていた。

それは、狼の姿に戻ったアルフであった。

「怪我をしていますな…………かなり酷いようです」

「…………でもまだ生きてる…………鮫島!」

「心得ております」

鮫島はそう答えると、アルフを優しく抱きかかえ車に運び込んだ。

【…………フェイト…………カノン…………】

アルフは、朦朧とする意識の中で大好きな二人を思い浮かべた。

なのは一時帰宅ということになり、リンディは家族への説明のため、ムウと共になのはに同行して行った。

その頃、カノンは遠見市のフェイトのマンションに来ていた。

当然ながら、フェイトもアルフも居ない。

管理局に接触する前に用意していたご飯は、綺麗に食べられていた。恐らく、カノンと別れた後、フェイトたちはこの部屋に戻り、これだけは食べたのだろう。

冷蔵庫の中は、ジュースのペットボトル以外は、最後に見たままであつた。

どうやら、約束どおり、それ以来この部屋には戻っていないようであつた。

カノンはフェイトたちと暮らしていた時に使っていた部屋に入り、そこで一晩過ごした。

一夜が明け、マンションを後にしたカノンは、海鳴市に戻っていた。時間があるので、なのはの家が経営している『翠屋』で、時間を潰そうと向かっていたのだが、突然、クロノから連絡が入った。

『怪我をしたフェイト・テストロツサの使い魔をなのはの友人が保護した』

その報告を聞いたと同時に、バニングス家の近くにテレポーターションした。

バニングス家の近くに到着したカノンは、待っていたムウと合流し、なのはから事情（魔法関連以外）を聞いた鮫島に案内された。

そこには、傷ついたアルフが檻の中に入っており、その前には、を含む3人の少女がいた。

一人は、金髪で、勝気そうな少女。もう一人は、黒髪のおっとりとした少女であつた。

「貴方がこの子の飼い主？」

金髪の少女……アリサがカノンに問いただしてきた。

「飼い主の友人だ……。すまない……迷惑を掛けたようだな」

カノンは、アルフを助けてくれたアリサに礼をする。

アルフを檻から出してもらうと、そのまま背負いバニングス家を後にした。

その後、念話で関係者すべてと話し合うことになった。

「何があつたんだ？アルフ……」

人気の無い所で、カノンはアルフに事情を問いただした。

「……管理局の連中も……見ているんだね……」

【『時空管理局』クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ。

正直に話してくれたら、悪いようにしない。君の事も……君の主『

フェイト・テストロツサ』の事も……】

「……話すよ全部……。だけど約束して、フェイトを助けるって

……あの娘は何も悪くないんだよ！」

【約束する！】

クロノから約束を取り付けたアルフは、説明を始めた。

フェイトの母親である『プレシア・テストロツサ』が、この事件の黒幕であり、『ジュエル・シード』は彼女の目的の為に必要な物であること。フェイトもアルフもその目的がどんな物なのかは教えられていないこと。

そして、プレシアのフェイトに対する様々な虐待行為。

そして、見かねたアルフはとうとう、フェイトを連れて脱走する事を決意をした。

しかしその途中で、謎の男に分かりアルフは重症を負わされてしまう。

その男は、カノンと同じ『小宇宙』を使っていたこと……など知っていることすべてを告白した。

【……『小宇宙』を使った……。敵に『聖闘士』がいる……と、い

うことか？】

聖闘士の強さは骨身に染みて知っているクロノは、戦慄した。

「……アルフ……。その男はどのような男だ？」

「……カノンが着ている『聖衣』……だっけ？それに似た鎧を着ていて……『海賊』のフックつて名乗ったよ……」

カノンの問いに、アルフが答えるとカノンの表情が変わった。

「何ッ！『海賊』のフックだと！？」

「……知っているんですか？カノン……」

「……ああ。奴は……『海闘士』だ」

『海闘士』とは、地上を護る女神アテナに『聖闘士』が居るように、海界を支配する神『海皇ポセイドン』を守護する闘士である。

彼らは『鱗衣』^{スケイル}と呼ばれるプロテクターを纏い、その実力は女神の聖闘士に匹敵する強さを持っていた。

そもそも、聖闘士が纏う『聖衣』は、鱗衣を纏った海闘士に対抗するために生み出されたのだ。

神秘の金属『オリハルコン』によって作られた鱗衣を貫ける武器も、鱗衣で身を包んだ海闘士の放つ拳を防ぐ防具も存在しなかった。

そこで、鱗衣に対抗するために聖衣が生み出され、それを纏う聖闘士の発生を促したのだ。

『海闘士』の選抜方法は、聖闘士と異なり、厳しい修行でその資格を得るのではなく、海闘士としての資質を持ち、海皇に選ばれた者が海闘士になると言われている。

「……先の海皇との聖戦において、星矢達と戦った海闘士は雑兵たちと七人の海將軍たちだったが、別にそれ以外に海闘士が居なかったわけではない……『海賊』のフックもその一人だ……」

正規の海闘士は、聖闘士よりも数が少ない。

何故なら、海闘士の雑兵は実力的には青銅聖闘士に匹敵するからだ。故に、カノンが口にした通り、先の聖戦において実際に星矢達と戦った海闘士は『海將軍』のみであった。

海闘士最強の『海將軍』は、『海馬』、『スキュラ』、『クリュサオル』、『リュムナデス』、『クラーケン』、『海魔女』、『海龍』の七人存在する。

それぞれ、海の怪物などをモチーフにした鱗衣を身に纏っている。雑兵の纏っている鱗衣は、半漁人をモチーフにしている。

しかし、いくら雑兵が青銅聖闘士に匹敵するとは言え、正規の海闘士が海將軍だけというわけではなかった。

白銀聖闘士と同レベルの海闘士『人魚姫』のテティスの様な者も存在していた。

『海賊』のフックもテティスと同格の海闘士であった。

「……奴は海底神殿崩壊の際にくたばった思っていたのだが……」
カノンが吐き捨てる様にそう言った。

「……どうやら、貴方は相当その男が気に入らなかったようですね……」

「俺だけではない！奴はすべての海闘士に嫌われていた」

フックは、格上の存在である海將軍には媚諂い、格下の雑兵等を奴隷のように扱っていた。

諂われた海將軍達も、蛇蝎の如く嫌っていた。

その実力は認められていたが、人格的には唾棄されていた。

こんな奴でも『同志』であることに変わりはない……。

そう、無理矢理自分を納得させていた。

『海龍』に扮していたカノンでさえも、フックの事は、反吐が出るほど嫌っていた。

何故、奴が『海闘士』として選ばれたのか……偽りの海龍であったカノンですら不思議に思っていたのだ。

「……しかし、海闘士が此方に来ているとは……」

「別に不思議でもあるまい。俺たちがここに居るのだから。聖闘士だけが此方に来ているとは限るまい……」

念話で事情を聞いていたなのはは、クロノに問われていた。

クロノ達の判断は、プレシア・テスタロッサの逮捕に決定していたので、なのはがこれからどうするのかを……。

【……私は……私は、フェイトちゃんを助きたい!!】

なのはは、フェイトを哀しいことから救いたいことを告げた。

なのはの答えを聞き、アルフはカノンに背負われながら、涙を流していた。

【それに、友達になりたいって伝えた返事……まだ聞いてないしね】
クロノもなのはの答えを聞き、フェイトに関してはなのはに一任することに決めた。

【アルフも……カノンさんもそれでいいですか？】

アルフは静かに頷いた。

「なのは……だったね。頼めた義理じゃないけど、だけど……お願い、フェイトを助けて……。あの娘、今、本当に一人ぼっちなんだよ……」

【うん、任せて!】

「……それと……カノン……」

アルフは懇願するかのようにかノンを見つめた。

「……解っている。例の男が介入してきたら、俺がなのはとフェイトを護ろう」

カノンの答えに、アルフは満足した。

第七話 海闘士（後書き）

海上での真剣勝負。

白き少女と黒き少女は互いの願いの為にぶつかり合う。

桃色の閃光が輝き、決着がついた後、残酷な真実が明らかになる。

時空を越えた黄金の闘士

「フェイトの真実」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第八話 フェイトの真実

カノンが、アリサの家でアルフから事情を聞いた翌朝、なのははユーノ、アルフ、そしてカノンを伴いフェイトと対峙した。

アルフはフェイトに、もうプレシアに協力することを止める様に懇願するが、フェイトは哀しそうな顔で首を横に振った。

フェイトは、プレシアを裏切るわけにはいかなかった。

今回の事が終われば、プレシアが昔の優しい母親に戻ってくれると信じて疑わないからだ。

そんなフェイトになのはは、お互いの『ジュエルシード』を賭けて勝負することを提案した。

なのはとフェイトの出会いの切っ掛けである『ジュエルシード』。

二人の関係は、まだ始まっていない。

すべてはここから始めよう……。

そう、なのはは決意した。

なのはとフェイトの勝負、カノンは立会人として、その肩にフェレット姿のユーノが乗っており、その横に狼形態のアルフが、心配そうに二人を見つめていた。

一進一退の攻防を繰り返す二人を……ずっと見守っていた。

しかし、フェイトを見つめるカノンの表情は、憂いに満ちていた。

なのはとフェイトの一騎打ちは、『アースラ』のモニターからクロノ達も見守っていた。

「しかし、ちょっと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて……」

「まあ、なのはが勝つことにこしたことはないが、あの二人の勝負に関しては、どちらに転んでもあんまり関係ないからね……」
エイミイの質問にクロノはそう答えた。

そう、クロノの狙いは、なのはが時間を稼いでいる間に、フェイトの帰還先追跡の準備をして置くことであつた。

「でも……『あの事』、なのはちゃんに伝えなくてもいいの？ プレシア・テストロッサの『家族』と『あの事故』のこと……」

「勝つてくれるに、こしたことはないんだ。今は、なのはを迷わせたくはない……それに……カノンさんには伝えてあるから……」

「……プレシア・テストロッサの娘……確か……『アリシア・テストロッサ』……のことですね」

クロノ達の隣にいたムウが、確認するかのように呟く。

「そして、あの『フェイト』は……」

カノン同様、憂いに満ちた表情で、モニターに映るフェイトを見つめるムウであつた。

ムウがここに居る理由は、前回の様にプレシアからの攻撃に備えるためであつた。

ムウの『クリスタル・ウォール』の方が、アースラのシールドよりも遙かに防御力が高いからである。

前回は、咄嗟のことだったので、アースラにも被害が及んだが、警戒を怠っていない今ならば、プレシアの攻撃など『クリスタル・ウォール』で完全に防げるからである。

「それにしても……カノンさんにはビックリだよ……もう、飛行魔法が使える様になつている……」

「魔力量は、なのは以上なんだから、当然といえば当然かも知れないけど……」

前までは『サイコキネシス念動力』で自身の体を浮かせていたカノンだったが、クロノから軽くレクチャーを受けただけで、魔法を理解し、飛行魔法を簡単に覚えてしまつていた。

なのはの魔力量のランクはAAA。カノンの魔力量のランクはSS

……魔力量だけならアースラで最もランクの高いリンディと同レベルなのだ。

エイミイは、モニターに映るカノンを見る。

カノンの右手には、マイク位の大きさのロッド型の簡易デバイスが握られていた。

攻防が続く中、フェイトは驚愕していた。

最初にあつた頃の彼女は、ただ魔力が強いだだけの素人だった。

しかし、今の彼女は違う。

こんな僅かの中に、自分と互角に戦える魔導師に成長していた。

【迷っていたら……やられる！】

なのはの周りに無数の魔方阵が出現し、そして一瞬で消えた。

その後、なのはは両手両足を光の輪で拘束された。

『ライトニングバインド』

空間に不可視の魔方阵を設置し、それに触れた対象を拘束する設置型捕獲魔法である。

「不味い！フェイトは本気だ！！」

「なのは！今、サポートを！！」

「動くな！！」

フェイトの本気を悟り、焦るアルフと飛び足そうとするユーノをカノンが制した。

「これは、なのはとフェイトの己の総てを賭けた一騎打ち。手出しすることは誰にも許されない！例え、二人に近いお前らでもだ」

「でも、カノン！フェイトのアレは本当にやばいんだよ！！」

「それでもだ！」

カノンとて、不安は確かにある。

しかし、カノンはなのはの秘められし力を信じることにした。

かつて感じたなのはの……星矢達に似た資質を……。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。『フォトンランサー・フアランククスシフト』。打ち砕け、ファイア！」
『フォトンランサー』とは、体の周囲に生成したフォトンスファイアから槍のような魔力弾を発射する魔法である。
そして、この『フォトンランサー・フアランククスシフト』は、そのバリエーションであり、30発以上のフォトンスファイアより繰り出されるフォトンランサーの一点集中高速連射を行う一斉射撃の魔法である。

現在のフェイトにとって、最大の攻撃魔法である。
電撃がなのはを襲い、爆煙がなのはを覆い隠した。
フェイトは肩で息をしている。

この魔法は、莫大な魔力を消費するので、一度使った後が無いほどに追い込まれてしまう。

煙が晴れ、なのはの姿が見えてきた。

フェイトの目に映ったのは、シールドを展開し、『フアランククスシフト』を完全に防いだなのはの姿だった。

「……ッた〜。打ち終わると『バインド』ってのも解けちゃうんだね……。今度はこっちの……番だよ！」

なのはのデバイス『レイジングハート』から、なのはの主砲とも言える砲撃魔法『デイバインバスター』が放たれる。

それと同時に、フェイトが魔力弾を放つが、『デイバインバスター』の威力を殺すことも出来ずにあっさりと飲み込まれてしまった。

完全な直撃コース。

フェイトはシールドを展開し、防御する。

なのはも自分の『フアランククスシフト』を耐えたのだ。自分も耐えてみせる。

フェイトの防護服が裂け、ボロボロになったが、何とか耐えることに成功する……だが、既になのはは次の攻撃態勢に入っていた。

「受けてみて、『デイバインバスター』のバリエーション！」

なのはの周囲から、まるで星の光のような桃色の魔力が一箇所に集中する。

フェイトは、迎撃の準備に入ろうとするが、先程のなのはのようにバインドに拘束されてしまう。

「これが私の全力全開！『スターライトブレイカー』！！」

『レイジングハート』から、桃色の閃光が放たれ、拘束されたフェイトに襲い掛かる。

拘束されている為、先程の様にシールドを張ることも出来ない。フェイトは、桃色の閃光に包み込まれた。

「なんつゝ馬鹿魔力！」

「うわあ、フェイトちゃん生きてるかな？」

「……フツ、やりますね……なのは……」

なのはの『スターライトブレイカー』を見て、啞然とするクロノとエイミー。そして、称賛するムウ。

『スターライトブレイカー』の直撃を受け、意識を失ったフェイトが海へと落下していく。

「フェイトちゃん！」

なのはが慌てて追いかけるが、海に墜ちる前にカノンが抱きとめた。「見事だったぞなのは……お前の勝ちだ。……実戦ではないから少しやり過ぎとも思うが……」

カノンの褒め言葉（少し微妙だが……）になのはは照れた。

そして、カノンに抱かれていたフェイトが目覚めます。

「……あつ、フェイトちゃん……気が付いた？」

「……大丈夫かフェイト？」

カノンの問いに静かに頷く。

「ゴメンね、大丈夫……」

自身でしたことだが、流石にやり過ぎたと思ったのか、謝罪する。

「……カノン……、私……負けちゃった……」

「……残念だが……な」

そう言うとカノンは、フェイトの頭を撫でた。

久しぶりに撫でられ、フェイトの顔に笑みが浮かぶ。

『バルディッシュ』が、フェイトの所有する9つの『ジュエルシールド』を出す。

「……飛べるか？」

フェイトは頷き、カノンの腕から離れ、自身で飛行する。

「よし！なのは、『ジュエルシールド』を確保して。それから彼女を

……」

「いや、来た！」

なのはに『ジュエルシールド』の確保と、フェイトの保護を指示しようとしたクロノは、突如、立ち上がったエイミーの方を見てから、モニターの方に視線を向けた。

突然、上空に異変が起こり、以前と同じ雷撃が、フェイトに襲い掛かる。……が、既にそこにはフェイトの姿は無く、雷は空しく海面に落ちていく。

前回と違い、プレシアの介入を警戒していたカノンは、いつでもフェイトを救う態勢が出来ていたのだ。

『バルディッシュ』の出した、『ジュエルシールド』が物質移動される。プレシアが、『ジュエルシールド』を奪われまいと手を回したのだ。

しかし、この行為をクロノ達は狙っていたのだ。

その結果、プレシアの居場所が判明。リンディは転送ポートで、プレシアの本拠地に武装局員を送り、プレシア逮捕を命令した。

時の庭園の玉座の間。
無数の魔方陣が現れ、転送された武装局員が姿を現した。
彼らの目的はその場に居る者の逮捕である。

フェイトを伴い『アースラ』に帰還したカノンたちを、リンデイが出迎えた。

フェイトの腕には、手錠が付けられている。

立場的には、フェイトは犯罪者であるのでこれはやむを得なかった。

「お疲れ様。それから……、フェイトさん…初めまして……」

リンデイが笑顔で挨拶するが、フェイトは待機状態に戻した『バルディッシュ』を握り絞め、俯いているだけであった。

母親が逮捕される現場を見せるのは忍びないとの理由で、リンデイはフェイトをこの場から離れさせるようなのはに念話を送り、なほもそれを了承、フェイトを自分の部屋に連れて行こうとしたとき、武装局員がプレシアを発見したとの報告が入った。

「プレシア・テストロツサ。時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で貴女を逮捕します！」

「武装を解除して、此方へ」

局員の指示を聞き流し、鼻で笑うプレシアを取り囲み、そして、数人が奥の間に侵入する。

その時、プレシアの雰囲気を変化した。

局員たちが奥の間に侵入し、アースラのモニターにもその奥の間が

映し出される。

そして、そこに存在しているモノを見て、なのはが、アルフが、ユニノが、そしてフェイトが驚愕した。

それは、フェイトそっくりの少女が液体の中に浮いていた。

【私のアリシアに近寄らないで！】

プレシアはそう言うと、局員達を殲滅した。

リンデイが慌てて、局員達の送還を指示する。

【もう駄目ね……時間が無い……。たった9つの『ジュエルシード』で『アルハザード』へ辿り付けるか分からないけど……】

『アリシア』に縋り付くように跪くプレシア。

【でも……もういいわ、終わりにする……。この娘を失ってから暗鬱な時間を、この娘の代わりの人形を『娘』扱いするのも……】
「ッ!？」

フェイトの表情が驚愕に染まる。

【聴いていて……貴女のことよ、フェイト】
吐き捨てるように語るプレシアの言葉に、フェイトが動揺する。

『プロジェクトF・A・T・E』

生命操作技術の一つで、『ジュエル・スカリエツィ』という男が構築した基礎理論をプレシアが発展させ完成させた。いわゆるクローニングの技術である。

この計画の最大の目的は、元となった人物の肉体と記憶の完全な複製。しかし、完全な再現は不可能であった。

『フェイト』は『アリシア』を元に造られた『人造生命体』であったのだ。

プレシアは『フェイト』を『アリシア』の偽者と言い放つ。

「……止めてよ。……お願い、もう止めてよ!」
涙を滲ませながら、なのはがプレシアに懇願する。

しかし耳に入っていないのか、プレシアはフェイトに通告した。

「最後に良い事を教えてあげるわ、フェイト……。貴女を造り出したから、ずつとね……。私は貴女が『大嫌い』だったのよ!」

「ッ!？」

突きつけられたプレシアの言葉に、フェイトの目から光が消え、心身が喪失した。

第八話 フェイトの真実（後書き）

時の庭園に突入するカノンたち。

そして、前に進む為に再びフェイトは戦いの場に向かう。

カノンとクロノがプレシアを追い詰めたとき、あの男が庭園に現れる。

時空を越えた黄金の闘士

「最強の男、現る」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第九話 最強の男、現る

カノン、クロノ、なのは、ユーノ、ムウはプレシアの本拠地にいる『時の庭園』に突入した。

プレシアの発言に自我を崩壊させてしまったフェイトは、医務室に寝かせられている。

フェイトのことをアルフに任せ、カノンたちはプレシアを止める為に彼女の下に向かった。

プレシアの目的は、実子のアリシアを蘇生させることであった。

その為に、失われた禁断の秘術の眠る地『アルハザード』に行く事なのだ。

その為に、『ジュエルシード』を集め、次元断層を引き起こすことであった。

プレシアが『アルハザード』に行く事は別に問題はない。

しかし、その為の方法である次元断層を引き起こすことは容認できなかった。

下手をすれば、なのはの世界である『第97管理外世界、地球』はおろか、时空管理局がある『ミットチルダ』を含めた複数の世界に危険が迫る。

それは、カノンとムウに取っても容認できなかった。

例え、自分達の世界でなかりうと、既に親しくなった人たちの世界が自分達の目の前で滅びるのを容認できる『聖闘士』ではない。

『黄金聖衣』を身に纏い、なのは達と共に『時の庭園』に乗り込んだ。

アルフは、ベッドで横たわるフェイトを見つめていた。

フェイトの目は開いているが、焦点が合っていない。

何も見ていないのだ。

「……………フェイト……………」

フェイトを見ている内に、アルフの中にはプレシアに対する怒りが臨界点を超えようとしていた。

あれだけ、あの女の為に頑張ったフェイトを地獄に突き落とすとしたプレシアを……………。

「……………フェイト……………この件が終わったら……………ゆっくりでいいから元のフェイトに戻ってね……………」

アルフは、『時の庭園』に乗り込もうとするカノンが言った言葉を信じていた。

カノンはこう言った。

【……………今はこんな状態だが……………直ぐにフェイトは立ち直る。……………今までのフェイトは何も始まっていなかった……………。プレシアに捨てられてしまったが……………プレシアの言い成りでは無くなった今、これだけがフェイトの本当の始まりだ！だから、それまでお前が傍にいてやれ。それがフェイトの使い魔のお前の務めだ！】

「フェイト……………」

アルフは、フェイトの頬を撫でた。

カノンたちの前に、傀儡兵と呼ばれる機械人形たちが立ちはだかつていた。

「クロノ君……………この子たちって？」

「近くにいる相手を攻撃するだけの……………ただの機械だよ……………」

「そっか……………なら安心だ」

なのはは、相手が人間……………いや生き物ですらない機械と知り、攻撃に入ろうとするが、それをクロノが止めた。

「この程度の相手に無駄弾は必要ないよ」

そうして、クロノが前に出るが、更にそれをムウが止めた。

「無駄弾が必要ないのなら……………貴方も下がって下さい……………」

そう言うとムウが前に出た。

傀儡兵たちが一斉にムウに襲い掛かる……が、突如、その動きを止めた。

「えっ!?!」

なのは達の目には、傀儡兵たちは見えない力で拘束されている様に見えていた。

そして、傀儡兵たちはお互いが次々と体当たりして、破壊していった。

ムウが念動力サイコキネシスで傀儡兵達を拘束し、お互いを激突させたのだ。

アレだけの数を拘束し、動かすなど普通ならかなりの精神力を消耗するのだが、黄金聖闘士の中でも最も秀でた『念動力』の持ち主であるムウにとっては大した労力ではなかった。

「では、先に進みましょう」

涼しい顔で走り出すムウを見て、クロノたちは啞然としていた。

カノンたちが走っている床の裂け目から奇妙な空間が見えていた。

「この穴……黒い空間がある場所は気を付けて……」

「えっ!?!」

「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ。飛行魔法もデリートされる」

「……もしも墜ちたら重力の底まで落下する……二度と上がってこれないよ」

クロノとユーノの説明になのははゾツとした。

「気をつける……」

等と話していると目の前に扉が現れた。

クロノがそれを蹴り空けると、其処にはまたもや傀儡兵たちがカノン達を待ち構えた。

「ここからは、二手に別れる。君達は駆動炉の封印を!」

「クロノ君は?」

「僕はカノンさんと一緒にプレシアの下に行く……。それが僕の仕事だからね……。ムウさんはなのは達をお願いします」

「……解りました……。行きましようなのは、ユーノ！」

「今、道を作ります」

《Blaze Cannon》

クロノのデバイス、『S2U』から、ブレイズキャノンが放たれ、この場の傀儡兵を打ち抜く。

その間隙を貫いて、ムウたちは駆動炉を目指し、奥に向かった。

「クロノ君、カノンさん、気をつけてくださいいね！」

なのはの激励に、カノンたちは微笑みで返した。

「私も出ます。庭園内で『ディストーション・シールド』を展開して、次元震の進行を抑えます」

艦長席から立ち、リンディは転送ポートに向かった。

「フェイト……。大丈夫かい？」

フェイトの意識が戻った。

「……。母さんは……。最後まで、私に微笑んでくれなかった……」

「何言ってるんだい。アイツはフェイトの母親なんかじゃない。アイツ自身が言ったことじゃないか！」

「……。私が生きていたと思ったのは……。母さんに認めてもらいたかったから……」

「フェイト……」

未だにプレシアのことを想うフェイトを、アルフは悲しげな目で見つめた。

「あんなにはつきり捨てられたのに……。私、まだ母さんに縋りついでる……」

フェイトは起き上がり、アルフの手を握った。

「アルフは、ずっと一緒に居てくれたのに……言うことを聞かない私に……随分…悲しんだよね……」

「フェイト。アタシはフェイトの使い魔だから……フェイトの為ならば……どんなことだって耐えられるよ……」

アルフはフェイトの手を握り返した。

「……何度もぶつかった…真っ白い服の女の子……。初めて私と対等に、真っ直ぐ向き合ってくれた……」

医務室のモニターは、傀儡兵と戦うなのはの姿を映していた。

「……何度も、私の名前を呼んでくれた……」

「……そうだね。最初は甘ちゃんの子だっと思ってたけど……あの子も、フェイトの事を……ずっと気に掛けてくれたね……」

「生きていたって思ったのは、母さんに認められたかったからだ。それ以外に生きる意味なんてないと思ってた。それが出来なきゃ、生きていけないんだと思ってた……」

「そんなこと……そんなことないよ！」

アルフは泣きながら、フェイトの言葉を否定する。

「うん。解ってる……。捨てればいってわけじゃない。逃げればいってわけじゃ……もつとない！」

ベッドから立ち上がり、握っていた待機状態の『バルディッシュ』を見つめる。

「……私の、私達の総ては……まだ始まってもない……」

『バルディッシュ』が起動し、ヒビだらけだがデバイスモードに変化した。

「……そうだよね……『バルディッシュ』も、アルフと同じようにずっと傍にいてくれてたんだよね……。お前も……このまま終わるなんて、嫌だよね！」

《Yes sir!》

『バルディッシュ』を抱き締めながら、涙を流す。

「……そして……カノン……」

いつも自分に優しくしてくれた。

まるで、お父さんの様に、お兄さんの様に……。

別れてからも……自分の事を気遣ってくれた。

大好きな……人……。

「アルフ……そして、『バルディッシュ』……上手く出来るか解らないけど……一緒に頑張ろう！」

『バルディッシュ』は自己修復され、そして、フェイトは防護服を纏った。

「私達の総ては……まだ始まってもない……本当の自分を始める為に……！」

「……うん！フェイト。始めよう、これから、本当の私達を！」

フェイトの復活に、アルフは歓喜した。

「今までの自分を……終わらせよう！」

フェイトたちの足元に魔方陣が現れ、『時の庭園』に転移した。

上空から襲い掛かる飛行兵を、なのはが『デイバインシューター』で打ち落とす。

ユーノは、『チェーンバインド』で傀儡兵と重斧兵を縛り付ける。

そして、ムウが必殺の一撃を放つ。

「『スターダスト・レボリューション』！」

煌く星屑が、傀儡兵を纏めて粉碎する。

しかし、いかにせん数が多すぎる。

次から次へと沸いて出てくる傀儡兵を相手に、なのはもユーノも疲労が溜まっていた。

その時、ユーノが拘束していた重斧兵がバインドを引き千切り、なのはに戦斧を振り下ろす。

「なのは……！」

その時、重斧兵に雷撃が襲い掛かった。

絶体絶命のなのはを救ったのは、『シーリングモード』のバルディッシュを構えたフェイトであった。

「『サンダーレイジ』!!」

フェイトのサンダーレイジが、重斧兵を破壊する。

「フェイトちゃん、アルフさん!!」

なのはが歓喜の声を上げた。

見詰め合う、なのはとフェイト……。

その時、砲撃兵が壁から現れ、砲口を二人に向ける。

大型ゆえ、バリアも強い。

しかし、二人の力を合わせれば……。

フェイトの提案に、なのはは嬉しそうに何度も頷く。

「……『サンダースマツシャー』!!」

「……『デイベインバスター』!!」

魔力量AAAの二人の魔法を受け、砲撃兵はあっさりと破壊された。そして、他の傀儡兵はムウによって一掃されていた。

一方その頃、カノンとクロノは最下層に向かっていった。

「いちいち道なりに進んでいくのは面倒。一気に行くぞ!」

カノンはクロノを連れ、プレシアの気配がする所にテレポーションした。

「ッ!？」

プレシアは、突然現れたカノンとクロノに驚愕した。

転移魔法ではない、テレポーションには魔力反応が無い為、予想外だったのだ。

「プレシア・テストアツサ!忘れられし都『アルハザード』とそこに眠る秘術は、存在するかも曖昧な、只の伝説だ!!」

「違うわ!『アルハザード』の入り口は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれた時、その狭間にかくらくしていく輝き。道は確かに其処にある!」

「……随分と分の悪い賭けだな……しかし……本当に一度失われた

命が、戻るとでも思っているのか？」

カノンは呆れた口調で、プレシアに問う。

「『アルハザード』に眠る秘術……それは失った命をも呼び戻せる筈……」

「無理だな。例え魔法の力といえども、『神』ならぬ人間の力で、死者を蘇生させる等……絶対に不可能……。出来たとしても、仮初めの命を与えることくらいだ……それこそ……『人形』でしかないだろうな」

そう。魔法の力は所詮、『人』の力に過ぎない。

如何に大魔導師と呼ばれても、人を超え、『神』にはなれないのだから……。

「黙れ！魔導師でもないお前に何が解る。私は、『アルハザード』に行き、私とアリシアの過去と未来を取り戻すの！こんな筈じゃなかった世界の総てを……」

「世界は……いつだってこんな筈じゃないことばかりだよ！ずっと昔から、何時だって誰だって、そうなんだ！」

クロノが叫ぶ。

クロノとプレシアはお互いを睨み、一触即発の状態になっていた。

その時、この場の3人は攻撃的な気配を感じた。

いや、只の気配ではない。

これは『小宇宙』。

「何なの？この力は!？」

『小宇宙』の概念を知らないプレシアには理解できなかった。

「……これは『小宇宙』……。でも、僕達『魔導師』には、技を發動させるときしか、『小宇宙』を感じ取れないのに……何故？」

技を放たれたわけでもないのに、魔導師である自分が『小宇宙』を感じることに戸惑うクロノ。

「……この『小宇宙』には覚えがある。いや、これほどの攻撃的な『小宇宙』を持つ者など……アイツしかいない！」

カノンは、この『小宇宙』の持ち主を悟り、戸惑っていた。

【……フツ！？何やら覚えのある『小宇宙』を感じたので来て見れば……やはりお前だったか……カノン！】
攻撃的な小宇宙が近づいてくる。

そして、その小宇宙がオーラとなり、形作る。

それは『不死鳥^{フェニックス}』！？

「……何者だ！」

プレシアが、不死鳥に向かって杖を向けた。

不死鳥のオーラから、一人の『聖闘士』が姿を現した。

「……フツ……やはり、おまえだったか……『フェニックス一輝』
！」

時の庭園に……最強の男が降臨した。

第九話 最強の男、現る（後書き）

狂える魔導師の額を貫く一閃。

そ……それはあの伝説の魔拳。

今、プレシアの過去が明らかに……。

時空を越えた黄金の闘士

「鳳凰幻魔拳」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十話 鳳凰幻魔拳

傀儡兵を倒したなのはとフェイトは、二手に別れることにした。なのは、ユーノ、ムウの3人は予定通り駆動炉の封印に向かい、フェイトとアルフはプレシアの下に向かう。

お互いを励まし合い、二手に別れ、駆動炉に到着したなのは達とプレシアの下に向かうフェイト達は、とてつもない攻撃的な気配を感じた。

「……………な……………何なんだい……………これは……………!?!」

狼の姿になったアルフは尻尾を震わせていた。

「……………ねえ、ユーノ君……………これって『小宇宙』だよ……………」

「うん。でも……………技を使っているわけじゃない……………、平常の状態なのに……………感知出来るなんて……………」

以前にも、説明したが……………魔導師の『魔力』と聖闘士の『小宇宙』はまったく違う力である。

故に、平常時はお互い感知することは出来ないが、必殺技と呼べるほどの強大な力を使った時は、それぞれ感知出来るのである。

つまり、なのはの『デイベインバスター』やフェイトの『サンダーレイジ』級の魔法を使った時。

ムウが『スターダスト・レボリユーション』の様な大技を使った時などである。

しかし、今、なのはたちが感知している『小宇宙』は平常の状態である。

なのに感知できるのは……………それだけこの『小宇宙』が攻撃的な証拠なのであった。

「……………まさか……………この『小宇宙』は……………一輝!?!」

「お知り合いですか?」

なのはがムウに訊ねた。

フェニックス
鳳凰星座一輝。

青銅最強と謳われる聖闘士。

その実力は青銅聖闘士でありながら、黄金聖闘士に匹敵する。

「青銅って……聖闘士の中で一番下の階級ですよね？」

「はい。ですが、彼を含める五人……天馬星座ヘガサス、龍星座ドラゴン、白鳥星座キクナス、

ANDROMEDA星座ダ、鳳凰星座の青銅聖闘士は別格です……彼

らは、私達、黄金聖闘士ですら一目置いています。特にあの一輝は

……その五人の中でも格上の實力を持っています……私も、そし

てカノンも……彼を相手に戦えば苦戦は免れません……下手をす

れば敗北を喫してしまうでしょう……」

ムウの説明を聞き、なのはとユーノは息を呑む。

ムウの強さも、カノンの強さも、彼女達からすれば想像を絶するの
だ。

最下級の聖闘士が、最上級の聖闘士に匹敵する。

魔導師に置き換えるなら、Fランクの魔導師が、SSSランクの魔
導師に匹敵ようなモノなのだ。

「しかし……彼が何故ここに……？」

「……一輝……。お前……何故この世界に？……いや、そんなことよ

りも、女神アテナは……ハーデスとの戦いはどうなった！？」

「……フッ！心配するな。女神はご無事だ。そして、ハーデスの肉
体にとどめを刺すことに成功した。もう二度と、ハーデスとの間に
聖戦は起きん！」

一輝の返答に、カノンは安堵した。

ラダマンティスに相打ちを仕掛けた時、カノンはアテナと聖闘士の
勝利を確信していた。

しかし相手は、天帝ゼウス、海皇ポセイドンと並び称される神……

冥界を統べる『冥王』ハーデス……。

どれだけ、信じていてもやはり不安はあったのだ。

「それよりも此方の方が訊きたいぞカノン。何故、お前が生きている？それどころかムウの小宇宙も感じる。ムウまで生きているのか？」

「……それは俺にも解らん。何故、俺たちが生きて、この世界に来たのかは……」

カノンは、ラダマンティスに相打ちを仕掛け、そして、ムウは嘆きの壁を破壊する為に、他の黄金聖闘士と共に『太陽の光』を作り出し、その余波で消滅する筈だった。

なのに、カノンもムウも別の世界で生存しているのだ。

もしかしたら、他の黄金聖闘士も……。

「まあ、そのことは今はいい。それよりも……その女の件を片付けるのが先だな……」

一輝は、視線をプレシアに向けた。

「……話は大体把握している。……死んだ娘を生き返らせる等という、愚かしい事を考えた末に、数多くの者たちを犠牲にしようとしているそうだな……」

「いきなり出て来た部外者は引っ込んでほしいわね……」

プレシアは、一輝に反論するが……その体は微かに震えていた。

『小宇宙』の概念が解らずとも、感じるそれは、恐ろしい程に攻撃的なのだ。

大魔導師などと呼ばれていても、これ程までのモノは感じた事等ないだろう。

「……笑止！愚かな願いの為に、関係ない人たちに危害を加えようとしているのは貴様だろう……！」

「黙れ！何も知らないクセに……私の邪魔をしようのなら、容赦はしないわ！『フォトンランサー』……！」

プレシアは、デバイスを掲げ、攻撃魔法を一輝に放った。

その威力は、フェイトの比ではない……が、一輝からすればこの攻

撃は余りにも……遅かった。

『フォトンランサー』をあっさりと躲した後、指先から閃光を放った。閃光は、プレシアの額から脳を貫いた。

「……な……何？……今のは……！？」

「……むうっ！……出たな、『鳳凰幻魔拳』！」

「お前から感じるのは、憎悪と『偽り』の狂気……。他の者の目は誤魔化せても、この一輝には通じん！お前は狂気に走った振りをしているに過ぎない……。さあ、お前の過去を見せてもらおうぞ……」

プレシアの脳裏に、あの忌まわしき事故が蘇った。

新型の大型魔動駆動炉『ヒュードラ』の設計主任に選ばれたこと。

一からの設計ではなく、他者からの引継ぎという危険なプロジェクト。

前任者の杜撰な資料管理。

スタッフと共に悪戦苦闘と悲鳴の日々。

上層部からの無茶な要求、次々に入れ替わる指示や一方的な決定。

モノの解っていない主任補佐の安全基準を無視した効率化……。

起こるべくして起こった、稼働実験中の事故。

駆動炉が生じる莫大なエネルギーは、予想を遥かに上回る破壊力をもつて、駆動炉を破壊した。

その時に発生した、目を開けていられないほどに眩い『金色の魔力光』。

そして、それに巻き込まれた愛娘の死。

事故の責任を押し付けられ、告訴するも勝ち目はなかった。

『ヒュードラ』の開発依頼をした企業の裏には『時空管理局』の幹部がいた。

この幹部は、例の主任補佐の身内であり、主任補佐が責任を負わされないように管理局の権限を使って手を回し、プレシアにすべての

責任を擦り付けたのだ。

プレシアの主張は、書類上の『事実』によって封殺されてしまった。告訴を取り下げれば、娘の不幸な被害の賠償金を支払うという、会社の意思に従うしかなかった。

中央から、地方に飛ばされたプレシアは、数年間様々なプロジェクトを成功させ、巨万の富を得た後、姿を消した。

プレシアが必要としていたのは、命の『創造』と『再生』の研究の為のノウハウと資金だったのだ。

命の創造と再生の研究は次々と成功したが、制限があった。

創造自体は、『使い魔』と大差なく、生み出されたのあくまで魔法生物であり、蘇生に関しても、死の直後で短時間であれば可能だったが、完全に『死亡』し終えたモノ蘇らせるのは不可能であった。そこで、プレシアが次に研究したのは、広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの考案した『プロジェクトF・A・T・E』であった。

アリシアの遺伝子から人造生命を作り出し、それにアリシアの『記憶』を転写すること。

そうして生まれたのが『フェイト・テストロッサ』であった。

しかし、彼女は決して『アリシア・テストロッサ』ではなかった。まず、利き手が違う。

そして、忌まわしき『金色の魔力』を持っていた。

それでも、『アリシア』そのものなら問題はなかった。

しかし、記憶の転写に関しては失敗だった。

もはや、この『作り物のアリシア』は憎悪の対象でしかなかった。

完全なる『アリシア』の蘇生は、もはや伝説の『アルハザード』しかない。

御伽話だと思っていた『アルハザード』は間違いなく存在する。

何故なら、あの『ジェイル・スカリエッティ』こそ、『アルハザード』

ドの遺児』なのだから……。

『プロジェクトF・A・T・E』の研究途中に、そのことを知ったプレシアは、『アルハザード』の存在を確信したのだ。

『失敗作』を一流の魔導師に育てあげるため、飼っていた山猫の『リニス』を使い魔にして、育てさせた。

そして、『アルハザード』に行くための力として、輸送中の『ジユエルシード』に目を付け、輸送船を襲撃した。

『ジユエルシード』は管理外世界に散らばり、それをあの『失敗作』に集めさせ、そして、『次元断層』を引き起こし、『アルハザード』に向かう。

世界がどうなるうが知ったことか！

私から『アリシア』を奪った、優しくない世界など……。

「ついに辿りついた……『アルハザード』に……」
プレシアは歓喜に包まれた。

そして、望んだ死者復活の秘術が目の前にある。

「これで、アリシアは蘇る。私は過去を取り戻せる」

プレシアは、アリシアに秘術を使った。

生体ポットの中のアリシアが目を開けた。

「アリシア！」

愛娘を抱き締めようと駆け寄る……だが……。

「……………お母さん……………」

アリシアの皮膚が腐っていき、眼球が垂れる。

「……………アリシア……！」

ゾンビと化したアリシアがプレシアに抱きつくくと、プレシアの全身は焼けるような痛みを苛まれた。

「あ……………熱い！こ……………これは！？」

プレシアの身体はどんどん腐っていく。

かすだけのモノに過ぎないのではないか。……という、お前の恐れから生まれたのだ」

「……つまり、プレシア自身も理解している……ということか……アリシアの蘇生など……『アルハザード』とやらに行っても成しえないことを……」

納得したカノンの言葉に、プレシアは俯いた。

そう、狂気に身を委ねても……完全には染まりきらなかったプレシアの冷静な部分が、アリシアの蘇生を否定していたのだ。

『神』為らぬ『人』の力で、死者の蘇生など不可能領域なのだということを……。

その時、今まで辺りを揺らした震動が収まった。

「……どうやら母さ……艦長が次元断層を抑えてくれたようですね……」

先程までの勢いを失っていたクロノがそう呟いた。

クロノはシヨックを受けていたのだ。

26年前のプレシアが起こした事故の真相を知って……。

そして、それに管理局員が係わっていたことに……。

クロノとて、そこまで子供ではない。

自分を含めた管理局の局員は、聖人君子ではない事くらい理解していた。

当然のことながら、権力争い等も存在している。

しかし……まさか管理局の権限を使って、プレシアに冤罪を押し付けていたとは思ってもしなかったのだ。

だからと言って、プレシアの行動を認めるわけにはいかないが……。とにかく、次元断層がリンディに抑えられたことにより、当面の危機は去った。

後は、プレシアの逮捕だけである。

既にプレシアには戦える力は残っていない。

ただでさえ病んでいる上に、『鳳凰幻魔拳』を受けたのだ。

もはや、立つ気力も残っていないのか、膝を付いている。

カノンは、そんなプレシアを見ていたが、突然、何かに気付いたのか、プレシアの横を通り過ぎ、アリシアの前に立った。

「私のアリシアに近づかないで……」

プレシアは激昂したが、やはり先程の勢いはない……。

カノンはそんなプレシアを無視し、アリシアを見つめていた。

一輝がそんなカノンを不思議そうな目で見ていたが、一輝もハッと気付いた。

それは、アリシアの周りから感じる微量な『小宇宙』。

「カノン……これは……!？」

「いや、確かにアリシアは死んでいる……この『小宇宙』は……恐らくは……」

カノンは、懐から小瓶を取り出した。

「それは!？」

「これは、アテナの血……『^{イーゴール}霊血』だ」

カノンは、小瓶から数滴の『霊血』を取り出し、その『小宇宙』が漂っている所に振り掛けた。

『霊血』に反応し、その『小宇宙』の力が強くなり、それは実体化した。

それは、その生体ポッドの中の少女と瓜二つであった。

「やはり……この『小宇宙』の正体は……君か……『アリシア・テスタロツサ』の……『思念体』……」

カノンの呟きに、少女は頷いた。

第十話 鳳凰幻魔拳（後書き）

アリシアの想いがフェイトの心に響く。

罪の意識に苛まれるプレシアを、悪意の拳が貫く。

時空を越えた黄金の闘士

「アリシア・テストロツサ」

君は小宇宙を感じたことがあるか！？

第十一話 アリシア・テストロッサ

「……………アリシア……………なの!？」

プレシアは、我が目を疑った。

カノンが、懐から取り出した瓶の中の液体……………アテナの血……………をアリシアが入った生体ポッドの周辺に振りかけたら、その場にアリシアが現れたのだ。

幻術……………そう思ったが、違う。

先程見せられた『幻魔拳』とやらとは違う。

母親として……………けっして間違うはずがない。

あのアリシアからは、間違いなく娘の雰囲気醸し出してた。

「……………お母さん……………」

アリシアが自分を呼んだ。

「アリシア!！」

プレシアは、重く感じる体をどうにか動かし、アリシアに近づき、抱擁を交わそうとした……………が……………。

パシン!！」

アリシアの掌が、プレシアの頬を打った。

「……………バカ!……………お母さんのバカああああああああ!！」

「……………アリ……………シ……………ア……………?」

プレシアは、信じられないと言った顔で、自分を打った愛娘を見つめた。

「……………アリシア……………お前はずっと、プレシアの事を見ていたのだな……………」

カノンの言葉に、アリシアは頷いた。

「……………この26年間……………お母さんが……………壊れていくのを……………ずっと……………見ていた……………」

『ヒュードラ』の事故によって、酸素が無くなり窒息死したアリシアだったが、その死の瞬間……彼女は『小宇宙』に目覚めた。極稀に、聖闘士の修行をすることなく小宇宙を目覚めさせる人間が現れる。

後に『聖人』と呼ばれた者たちは、皆、そのような人たちなのだ。アリシアも、その素養があったのだ。

だが、いくら『小宇宙』に目覚めようが、酸素が無ければ、窒息死は免れない。

水中なら常人よりは持つが、それでも一時間が限界だろう。

小宇宙に目覚めたばかりのアリシアは、小宇宙のコントロールが来ないので結局、一瞬で死んでしまったのだ。

だが、目覚めた小宇宙の力は、思念となってプレシアの周りに残った。

女神を護つて命を落としたアイオロスの意思が、射手座の黄金聖衣サジタリアスに宿り、アテナとアテナの為に戦った星矢たちを護ったように、山羊座のシユラの『聖剣』エクスカリバトが紫龍の右腕に宿ったように……。

アリシアもまた、死した後も小宇宙の力によってプレシアの傍に居たのだ。

しかしそれは、アリシアにとって……地獄以外の何物でもなかった。自分を生き返らせる為に、人の道を外れていく母を……自分の『妹』のような存在であるフェイトを虐待する母を……アリシアは見せ付けられたのだ。

どれだけ叫んでも、己の声は母には届かなかった。

思念体であるアリシアは、目を背けることも、耳を防ぐことも出来ず、プレシアに鞭打たれるフェイトを、見ることも出来なかった。

「……そんな……」

自分の今までの所業をアリシアが見続けていたこと知ったプレシアは、罪の意識に苛まれた。

寄りにもよって、愛娘にあんな醜い自分を…… 26年間見せ続けていたのだ。

「……お母さんは……優しかった……。でも、優しかったから……壊れてしまった……。お母さんを……壊したのは……わたし……」
自分の死がきっかけで、母が壊れてしまった。

アリシアは自分をも責めていたのだ。

……その時、この場にフェイトとアルフが姿を現した。

「……アリ……シア!？」

フェイトの声に反応したアリシアは、フェイトに近づいた。

「……ゴメン……ゴメンね……フェイト……」

自分に抱きつき、涙するアリシアにフェイトは困惑した。

「……お母さんが、フェイトにきつく当たっていたのは……私のせい……なの……」

プレシアがフェイトを虐待していた本当の理由。それは……。

アリシアは、大魔導師プレシア・テスタロッサの娘に生まれたが、魔力資質がまっただくなかった。

プレシアは、愛娘をとても可愛がっていたが、その一点のみを残念に思っていた。

自分の娘に、自分の力を受け継ぐことが出来ないことを……。

『プロジエクトF・A・T・E』によって、フェイトが誕生したとき、その魔力資質にプレシアは歓喜したのだ。

『金色の魔力』なのは気に入らないが、自分の娘に相応しい『魔力』を持って産まれたこの『アリシア』に……。
しかし、プレシアは間違ってしまった。

それは、『アリシア』の不完全な記憶をこの娘に与えてしまったことであった。

もし、『アリシア』の記憶を与えていなければ……プレシアは、彼女をアリシアの『妹』と見ることが出来た。

そうすれば、アリシアの代わりではなく、新しく生まれた『娘』として、自分の力を受け継ぐ後継者に出来た。

しかし、中途半端なアリシアの記憶を持ってしまったフェイトを認めてしまうと、あの『アリシア』は何だったのか……と、考えてしまったのだ。

違う。

あの『アリシア』は自分がお腹を痛めて産んだ、只一人の娘。

こんな『偽者』なんかじゃない。

不完全な『アリシア』の記憶を持つフェイトを認めることは、『アリシア』を貶めることになると思ってしまったのだ。

『アリシア』に、プレシアの娘として相応しい魔力資質があれば……このような行き違いは起きなかったかも知れなかった。

「……私がお母さんの娘として相応しい魔力を持っていたら……お母さんがフェイトにあればどきつく接することもなかったかも知れない……」

アリシアの想いを聞き、ますますプレシアは罪の意識に苛まれた。

「……フェイト……これからは、『アリシア』のクローンとしてじやなく、『フェイト』として生きて……本当の自分として……そして、フェイトの事を思ってくれる人たちと……生きて……」

「アリシア……」

「……私は……フェイトの『お姉ちゃん』だから……お母さんがどう思おうと……フェイトは、私の妹だよ……それは、間違いない……」

アリシアの言葉は、フェイトの心に染み込んだ。

プレシアには、人形と蔑まれたが、アリシア本人から『妹』と認められたのだ。『クローン』ではなく、『妹』と……。

「本当の体で、こうやって……フェイトと一緒に……いたかったな……」

アリシアの姿が崩れ始めた。
霊血の効果が切れ始めたのだ。

「アリシア!!」

消えようとする娘に手を伸ばすプレシア。

「お母さん……思念体としてのこの私は、もう直ぐ消滅する……。私の魂は既に天に召されている……。私が生き返ることは絶対に有り得ない……。だから……。私の大好きなお母さんに戻って……。私の最後の我侷を……。叶えて……」

「アリシア!」

「大好きだよ、お母さん、フェイト……。さようなら……」

アリシアの思念体は、灰となって消え去った。

灰となって消え去ったアリシアを見て、プレシアは号泣していた。愚かな自分を……。娘を苦しめ続けた自分を呪いながら……。ふらふらと立ち上がり、生体ポットのアリシアにしがみついた。

「許して……。バカな『母さん』を……。許して……」

その時、閃光がプレシアを貫いた。

「……がはっ!」

「母さん!!」

カノンたちは、閃光が放たれた先に視線を向けた。

「プレシア……。お前の役目は終わった……。この俺様が『アリシア』の下に送ってやる……」

「……貴様! フック!!」

プレシアに閃光を放ったのは、『海賊』のフックであった。

「……ア……リ……シア……」

プレシアは、アリシアと共に虚数空間へと墜ちていった。

「……母さん!」

「駄目だよ、フェイト!!」

後を追おうとするフェイトをアルフが抑えた。

その横を一輝がすり抜け、プレシアを追うように虚数空間に飛び込んだ。

「……一輝さん!？」

クロノは驚愕した。

いくら聖闘士といえど、虚数空間に飛び込んだら二度と脱出など出来るはずがない……。

一輝の行動は、クロノから見れば自殺行為に等しかった。

一方、カノンはプレシアを撃ったフックと対峙していた。

「……久しぶりですね……『海龍』様……いや、双子座のカノン……」

「……貴様……何故、プレシアを撃った?」

「フッ……俺様が奴に協力していたのは、我が主が『プロジェクト F・A・T・E』のデータを所望したからだ……。これさえ手に入れば、あんな愚かな女など……どうなるうと知ったことではない……」

「!」

うすら笑いを浮かべながら、フックはそう言い捨てた。

「……主だと?」

「そう、貴様など問題にならないほどの偉大な御方よ……」

「海闘士が、ポセイドン以外の者を主とするとは……な……」

「……ポセイドン様が居られぬ今、使える主は自分で選ぶ……それだけのことだ」

その時、辺りに激震が走った。

「何!? 次元断層はリンデイが抑えている筈?」

「フッ! 先程、この庭園の中枢を破壊したのでな……もう直ぐこの庭園は崩れ去るぞ!」

そう言つとフックの足元に魔方陣が形成された。

「さて……アンタとまともに戦つては、この俺様とて勝ち目などないのは解っているし、このまま崩壊に巻き込まれるのはゴメンなの

でな……。ここで失礼させてもらおう」

そう言つて転移しよとするフックにカノンは拳を放った。

「さらばだ」

フックの体は消え、転移していった。

「……逃げられましたか？」

「……いや、もう奴のことはどうでもいい……それよりも、ここから脱出だ！」

クロノの問いに、カノンはそう答えた。

いまだ呆然としているフェイトの傍に行こうとした時、なのはとユイノを連れたムウが現れた。

「ムウ！ここはもう直ぐ崩壊する。全員をアースラまでテレポーションさせてくれ！！」

「……ッ！……わかりました！！」

ムウは、庭園に居る全ての者をアースラにテレポーションさせた。

誰も居なくなつた時の庭園は……跡形もなく崩れていった。

海賊のフックは、彼の主の前で跪いていた。

「プロジェクトF・A・T・Eの完成データをお持ちしました……」

お納め下さい……」

「ごくろうだったな……フック……」

蒼いローブに身を包んだ主は、データディスクを受け取った。

「……主……。双子座のカノンたちをどうなさりますか？」

「今は放つて置く……。管理局の奴らはともかく、黄金聖闘士二人を相手にするのはそれなりの覚悟が必要……。こちらの態勢が万全でない状態で手を出すのは、無謀と言うモノ……」

「……しかし……」

「それに、フックよ……。お前はもはやそのような事を気にする必要

はない……」

主は、フックを哀れむように見据えた。

「ど……どういふ事ですか？」

「……既に死んでいるお前が気にする必要はない……と言う意味だ……」

「……私が死んでいるとは……どういふ……!？」

その時、フックの鱗衣スケイルに亀裂が走った。

「先程、お前が此方に転移する前、双子座のカノンの光速拳がお前の体をズタズタにしていたのだ……」

カノンがフックを追わなかった理由は……既にとどめを刺していたからであった。

「そ……そんな……! ……カツペツペツペツペ……」

フックの全身から血が吹き出て、鱗衣ごとが肉体が粉碎されていく。絶命したフックはその場に倒れこんだ……。

「……双子座のカノン……恐ろしい男よ……。だが、いずれ貴様は私が始末する……この真の『海龍シードラゴンジェネラルの海將軍である、この私が……必ず

……な……」

そう、この男こそ……真の海鬪士マリンナ七將軍の一人『海龍シードラゴン』であった。

「『海龍』殿……我らの出番はまだかな？」

海龍の後ろに黒いローブを纏った二人の男が現れた。

「……そうだな。貴方がたには、ある男の搜索をお願いします……」

「誰かな？」

「広域次元犯罪者……『ジェイル・スカリエッティ』……。奴の居場所を探し、奴が今、行っている研究……『戦闘機人』のデータを手に入れて下さい」

「承知！」

黒きローブの二人は、その場から姿を消した。

「……フツ！負け犬の奴らでも、この程度の使い道はあるっ……」

『海龍』はそう呟いた後、哄笑した。

第十一話 アリシア・テストロッサ（後書き）

虚数空間から抜け出した一輝はプレシアを看取った。
一輝がたどり着いた世界には、アテナの結界が……。
ムウが調査に向かい、発見したものは？

時空を越えた黄金の闘士

「サンクチュアリ異世界の聖域」

君は小宇宙を感じたことがあるか！？

第十二話 異世界の聖域

崩壊する『時の庭園』から、ムウのテレポーターションで脱出したカノン達は、一息入れていた。

プレシアに倒された武装隊のメンバーも全員、命には別状はなく、今、手当てを受けている。

『時の庭園』は完全に崩壊し、虚数空間に飲み込まれていった様だ。アースラに戻って直ぐ、フェイトとアルフは護送室に入れられた。一応、彼女達は今回の事件の実行犯である為、本来なら数百年の幽閉が通例だが、その件に関しては、リンディとクロノには考えがあるらしい。

最も、利用されただけのフェイトにそんな重い刑が下されれば……確実に元々『管理局』という存在が気に入らないカノンの怒りを買っている、管理局はこの世から消え去るだろうが……。

今現在、食堂に主要メンバーが集まり、食事を取っていた。

落ち着いて食事を取るカノンとムウに、クロノが心配そうに問う。

「……あの一輝さんという人が虚数空間に墜ちたのに、よく平気でいられますね……」

「……ん？……ああ、一輝のことか……。クロノ……」

「なんですか？」

「一輝のことは心配するだけ損をするだけだぞ……」

「私達は、目の前で彼の首が落とされてもしない限り、彼のことは心配する必要はない……という認識を持っていますので……」

あっけらかんと言うカノンとムウに、絶句する一同……。

「彼は、虚数空間に墜ちたんですよ……心配するのが普通ですよ！」

「アイツは、不死鳥フェニックスの名の通り、不死身だ」

「どんな所からでも、必ず生還してくる人です……」

「虚数空間に墜ちようが、異次元空間に閉じ込められようが、そんなことで死ぬような奴だったら、俺も苦労せんで済んだんだが……」

彼の無事をかけらも疑っていない二人だった。
それを証明するかの様に、一輝からのテレパシーが届いた。

一輝は、虫の息のプレシアと共に人っ子一人居ない筈の無人世界にいた。

虚数空間に墜ちた一輝は、プレシアとアリシアの遺体を抱き、導かれるかの様にこの世界に転移したのだ。

一輝は、小宇宙によるテレパシーをカノン達に送った。

プレシアは、もう助からない。

ならば、せめて手厚く葬ってやる必要があった。

プレシアは、既に己の罪を悔いているのだから……。

「……あんな……悪……夢を見せた……男にして……は随分……甘……い……わね……」

「余計な事は口にするな。死を早めるだけだぞ……」

「どの道……死ぬのなら……大差な……いでしょ……う？……貴方に……頼みたい……こ……とがある……の……」

カノンたちが到着したとき、既にプレシアは息を引き取っていた。
プレシアの遺体の前で泣きじゃくるフェイト。

そんな、フェイトをなのはとアルフが優しく抱き締めていた。

「カノン……プレシアの遺言だ……」

一輝はそう言うと、プレシアのデバイスをカノンに渡した。

「……これを……!?」

プレシアの遺言……それはこのデバイスの中には、フェイトとアルフの教育係にして『バルディッシュ』を製作した『デバイスマスター』、プレシアの使い魔『リニス』の遺体が保存されているので、彼女をカノンの使い魔として復活させて欲しいとのことであった。

リニスの名を聞き、アルフと泣いていたフェイトがカノンの方に顔を向けた。

「お前の魔力とやらは、プレシアと同格らしいから、十分リニスとやらを使い魔にすることが出来るとのことだ。例えばアリシアが認めても、自分はどうしてもこの娘を『我が子』と見る事は出来ない。だからせめて、その娘に愛情を持って接し、育てたこの『リニス』という使い魔をフェイトに与えてやってくれ……とのことだ」

これが、プレシアのフェイトに対する最初で最後の『母親』としての行為であった。

一輝は踵を返し、皆から離れていった。

「一輝さん！？何処に行かれるのですか？」

「何処に行こうと俺の勝手……。俺は群れるのが嫌いだ！」

クロノにそう答えると、一輝はその場から姿を消した。

一輝がこういふ奴だと知り尽くしているカノン達は、予想が付いていたので何も言わなかった。

プレシアとアリシアの遺体を収容した後、皆、アースラに戻ったがムウのみがこの世界に残った。

ムウならば、何処に居ようがテレポーターションでアースラに戻る事ができるからである。

ムウが残ったのは……管理局が指定する『第88観測指定世界』であるこの世界について調査をするのが目的であった。

この世界は、草ひとつ生えておらず、人っ子一人居ない無人世界なので、本来なら無人世界指定を受けるはずなのだが、何故、観測世界なのか？

それは、この世界の一つの島の周りに張られた結界が原因であった。この結界……今まで管理局がどれほど手を尽くしても、解く事も破る事も叶わなかった結界であった。

中に何かがあるか解らないので観測世界とされていたのだ。

しかし、ムウとカノンによって、この結界の正体が判明したのだ。

この結界は、彼ら聖闘士にとって守護すべき対象である、『女神^{アテナ}』の小宇宙によって創られた結界だったのだ。

一輝が、虚数空間からこの世界に転移したのも、この女神の小宇宙を感じ取り、そこに転移したからであった。

神の結界である。

管理局の魔導師風情が束になるうが、解ける筈がなかったのである。ムウは、カノンから『^{イコル}霊血』を借り、調査することにした。

何故、異世界であるこの世界に女神の結界があるのか……それを調べる為である。

流星に、アテナに関する事なので、管理局の人間を立ち入らせるわけには行かない……。

故にムウ一人で、調査する事になった。

無論、リンディは渋ったが、カノンとムウに睨まれ……中に何かあったのかわけで必ず報告する……ということを経験に認めることにした。

……冷や汗を掻きながら……。

ちなみに、普通なら最初に噛み付く筈のクロノが大人しい理由は……

……聖闘士の恐ろしさがある程度知った為である。

彼らをけっして敵に回してはならない。

この中で、聖闘士と対峙した事がある唯一の人間として、さらに一人の男として聖闘士に憧れを抱き始めているクロノは、何も口を挟まなかった。

結界の傍に来たムウだったが、苦もなく結界の内部に入る事に成功した。

と、言うよりも、アテナの小宇宙とムウの纏っている黄金聖衣が共鳴し、結界の中に繋がる道が開いたのだ。

つまり、聖闘士以外の者を拒む為の結界だったのだ。

「……どうやら、私達聖闘士が一人でも居ないと、この結界の内部には入る事が出来ないようですな……」

聖闘士が同行すれば、他の人間も入れるが、聖闘士が居なければ誰も侵入することが出来ないのだ。

ムウは、結界の内部を見て、驚愕した。

そこは、外とはまるで違う豊饒の大地であった。

草木が生茂り、清浄な川が流れ、様々な種類の鳥や動物がのどかに生息していた。

まさに、神の祝福を受けた大地……この雰囲気はまるで聖域サンクチュアリのようであった。

先へ進むと、やはりギリシャ風の神殿跡が存在していた。

一番高い丘の上には、アテナの神像が建っている。

ここは、まさしく聖域そのモノであった。

神殿近くまで足を運ぶと、ムウの目に二つの墓標とその前に腰掛ける白骨化した聖闘士の遺体……。そして、その横に一体の白銀聖衣と二体の青銅聖衣が修められた聖衣櫃が置かれていた。

墓標に近づくと、辺りに異様な小宇宙が発生した。

……誰だ！……

それは、白骨化した聖闘士の亡霊だった。

この地に足を踏み入れた……ということとは、お前は聖闘士か？

「そうです。私は牡羊座アリエスの黄金聖闘士ゴールドセイント、ムウ……」

おお、黄金聖闘士……。これは失礼しました。私は、スキュータムシルバ楯座の白銀

聖闘士セイントイージス。この地に聖闘士が来られるのを2000年間待っ

ておりました……

亡霊……楯座のイージスは歓喜していた。

「楯座……確か2000年前の聖戦で失われたと言われる聖衣です

ね……」

「ご存知でしたか……」

「私は、今の時代において只一人の『聖衣の修繕者』ですから……」

現在、聖衣の修復が可能なのはムウ一人である。

残念ながら、ムウの弟子である貴鬼では、まだまだ聖衣の修復は不可能なのであった。

「ところで……何故このような異世界に、あなた方が居られるのですか？」

ムウの疑問に、イージスが語り始めた。

今から約2000年前、アテナと、オリンポス十二神の一柱にして、アテナと同じく戦いの神である『軍神』アレスとの聖戦が起こった。アレスは、同じ戦いの神でありながら、その在り様はアテナと正反対であった。

アテナが正義の戦いを行うのなら、彼は血生臭い戦いを好むのだ。アテナが他に戦った神、海皇ポセイドンや冥王ハーデス等は、それぞれの正義を持ってアテナと争ったが、ことアレスに関しては、ただ血と恐怖と殺戮を楽しむ為に戦いを起こしたのだ。

この地は、聖域の一角であるが、アテナ率いる聖闘士とアレス率いる狂闘士とがぶつかりあった地に、最も近かった。

多くの聖闘士、狂闘士たちはその地に屍をさらし、アテナとアレスの一騎打ちが行われた。

二柱の神の戦いは余りにも激しく、遂には次元震まで発生した。

その次元震が、次元断層のレベルまで近づいたとき、この地は次元の裂け目に墜ちてしまったのだ。

この地を護っていた3人の聖闘士諸共……。

アテナはその事に気付き、3人の救助に向かおうとしたが、その背後をアレスが襲い掛かった。

「我を相手に余所見とは……愚かぞ！アテナ！！」

楯座のイージスは、窮地に陥りそうなアテナに向かつて叫んだ。

「我々のことなど気にせず、アテナ様はどうかアレスを！」

「イージス！……貴方たちを見捨てるなど……出来ません！！」
「アテナ様！我々のせいで貴女様が敗北してしまえば、我らは……聖闘士として……とても自分を許せそうにありません。我らの心を御汲み取り下さるのなら、どうかアレスを倒し、地上の愛と正義を御護り下さい！！」
「……イージス！！」

我らは、そのままこの地諸共、次元の裂け目に墜ち、気が付けばこの世界に居たのです

「……そんなことが……あったのですか……」
ムウは感慨深げに話を聞いていた。

……我らが恐れたのは、この地に存在する様々なアテナ様の大いなる遺産がこの地にやって来る異世界の者たちに悪用されることでした

自分たちが生きている時は良いが、自分達は所詮『人』でしかあらず、やがては老い、そして死んでいく……。その後、アテナの大いなる遺産を悪用する為に持ち出される事を恐れたのだ。

故に我らは、アテナ様の神具を用い、この地をアテナ様の小宇宙の結界を張って護ることにしたので……

いつの日か、アテナ……もしくは自分達と同じように異世界に来てしまった聖闘士がこの地を訪れるその時まで……。

そして今、その願いが叶った……ようやく……この二人の下に逝く事が出来る……

イージスと共にこの地に来た青銅聖闘士の二人は、天寿を全うした。しかし、イージスはやがて来るかも知れない……。もしくは永遠に来ないかも知れないアテナ、もしくは聖闘士がこの地に訪れるまで、この地を護り続けなければならなかった。

故に、肉体が朽ちた後も、亡霊としてこの地に留まっていたのだ。

牡羊座のムウ様……どうか、我らの残せし聖衣と、この地に残されたアテナ様の大きいなる遺産を、愛と正義の為にお役立て下さい……

……
そう言い残すと、イージスの亡霊は静かに霧散していった……。

「……お疲れ様でした……。イージス……。どうか安らかにお眠り下さい」

ムウは黙祷を捧げ、イージスの遺体を埋葬した。

そして、アテナの残した大きいなる遺産を確認する為、神殿の中に入ってしまった。

第十二話 異世界の聖域（後書き）

カノンの魔力によって蘇ったりニス。

ムウは聖域で女神の遺産を確認する。

ふたりの魔導師の少女は再会を約束する。

時空を越えた黄金の闘士

「クロス聖衣」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十三話 聖衣（前書き）

今回で、無印編終了です。

第十三話 聖衣

ムウが、楯座スキュータムのイージスの亡霊と邂逅していた頃、カノンがフェイトから使い魔との契約の方法のレクチャーを受けていた。

今現在、アースラの乗員の中で使い魔持ちの魔導師はフェイトだけだからである。

その間、護送室から出されているのだが、リンディもクロノも文句の一つも言わなかった。

リンディにしるクロノにしる、フェイトが今更逃げるなど思っていないし、彼女に好意を抱いている。

実は、リンディは彼女の裁判が終わったら、自分の養女になるよう申し出て見るつもりだった。

リンディは、フェイトが無罪になる公算が高いと思っっているし、例え無罪にならなくても、執行猶予付きの軽い罪で済む筈だと確信している。

プレシアが管理局の幹部に冤罪を押し付けられたので、その罪を隠す為はその幹部がフェイトを重罪にする様、裏工作をしてくるかも知れないと思っっていたが、実はその幹部は数年前、汚職が発覚して失脚し、懲戒免職になった男だったらしく、管理局も今更、その男を庇うとは考えられなかった。

下手に庇うより、むしろその男に全ての責任を擦り付けようとするだろう。

それはそれで問題だと思うが……フェイトの裁判が公平に行われる為には、むしろ都合が良かった。

「……リニス……」

「貴方が新しいマスターですか？」

プレシアのデバイスに保存されていた山猫が人型の女性の姿になり、

カノンと契約を交わした。

僅か一晩で完全に理解してしまったカノンの才に、アースラの乗員達は舌を巻く。

「……………リニス……………」

「アタシ達のこと、覚えてるのかい？」

恐る恐る聞くフェイトとアルフに、リニスは暖かい微笑を向けた。

「大きくなりましたね、フェイト。そして、アルフ……………。プレシアから契約を解除され、もう貴女たちとは逢えないと思っていましたが……………人（猫？）生とはわからないものですね」

間違いなく、彼女はフェイトとアルフにとって育ての親であったリニスそのものだった。

「うわ……………ん、リニス……………！」

「……………グスッ！……………リニス……………。逢いたかったよ……………」

泣きながら、リニスに抱きついた。

「……………マスターと契約して、精神がリンクしましたので、大体の事情は把握しています……………。プレシアが逝った事も……………彼女は最後まで、フェイトを娘としては見る事が出来なかったことも……………」

「……………でも、母さんは……………リニスを私達に返してくれた……………。それだけでも、私は母さんに『有難う……………』って言いたい……………」

「アタシも、アイツのことはまだ許せないけど……………リニスの件に関しては感謝しているよ……………」

「……………リニス……………」

カノンがリニスに語りかけた。

「はい。何でしょうマスター……………」

「俺のことは、『カノン』でいい……………。暫くお前はフェイトと共に居てやれ……………。それがお前に対する最初の命令だ……………」

「畏まりました。有難うございますマスター……………いえ、カノン」

フェイトとアルフは再び護送室に戻されたが、手錠代わりのバンドは外され、リニスも一緒に部屋に入った。

暗かった部屋も明かりを点けることを許され、3人は今まで離れて

いた時間を取り戻すかのように、語り合った。
リンデイとクロノ、そしてカノンはそんな三人を微笑ましく、見守っていた。

ムウがアースラに帰還したので、カノン達は調査の報告を受けていた。

「……2000年前の聖戦で、次元の裂け目からこちらの世界に現れた聖域の一面と……その地を護りし聖闘士の亡霊……か……」

ムウの話聞き、カノンは目を瞑り、その聖闘士の為に黙祷した。

「……それで、そのアテナという神の遺産というのは？」

リンデイが身を乗り出して聞いてきた。

「聞いてどうするのですか……言っておきますが、貴方達管理局に渡す気などまったくありませんよ……」

「それは諦めています……貴方達を敵に回す事に比べれば些細な事です……。それに、確かに貴方達の言うように、神の遺産など公になれば、それを悪用しようとする者が確実に現れるでしょう。むしろ、聖闘士と一緒にと入れない結界の中の方が管理局で管理するよりも安全なのは確かですし……」

リンデイも、管理局の裏側に関しては警戒していた。

どのような組織もいつかは必ず腐敗するモノであることは、理解していたのだ。

「それで、その遺産とは何だったのだ？……ムウ」

「……まずは、あのアテナの結界を張るための神具や、危険すぎる為に封印されたアテナ以外の神々の力を宿した様々な神具……そして、大量のオリハルコン、ガンニオン、スターダストサンド銀星砂がありました」

オリハルコン、ガンニオン、銀星砂とは聖衣の材料である。既存のどのような金属、鉱物などよりも優れた武具などを作れるだろう。

「確かに、悪用されればかなり厄介だな……流石に聖衣を作る事は

出来ないだろうが……」

「はい、並の技術ではあれを精製することさえ不可能ですが、精製方法などが書かれた文献もありましたので、解読されれば、不味い事になるでしょう……」

文献は古代ギリシア文字で書かれているため、『第97管理外世界』で学べば簡単に解読出来てしまうだろう。

小宇宙の概念は理解できないだろうから、聖衣の様な『神の奇跡』のようなモノは無理だが、それを差し引いても強力な武器などが作ることが可能になるだろう。

例えば『時の庭園』にいた傀儡兵などを、オリハルコンで作り出せば、いかに強力な攻撃魔法を駆使しようが、簡単に破壊など出来ない。

神の奇跡を宿していないので、黄金聖衣程の防御力はないだろうが、それでもSランク以上の攻撃魔法でも傷を付けるのがやっと……などと言う事も有り得るのだ。

「オリハルコンが神の金属と言われる所以だな……それで、他には何があった……？」

「……カノンは『氷戦士』ブルーウォリアーと呼ばれる存在をご存知ですか？」

「……俺にそれを聞くとは……愚問だな。北極圏に近い東シベリアの極寒の地に住むブルーグライドの戦士……封じ込めた『海皇』ホセイテンを監視する為に派遣された聖闘士が祖とも言われている者たちのことだろう……」

海皇関連に関しては、カノンの知識は並ではない。

かつて、その海皇を誑かし地上と海界の覇権を目指したのは伊達ではないのだ。

「はい。現在のブルーグライドの王はアレクサーという男で、前国王である父、ピョートルを殺害し篡奪しました。世に出て、世界を支配しようとする企んだそうですが……氷河の手によって、それは阻まれました。現在、彼は自らの過ちを悟り、妹と共にブルーグライドの民を護っているとの事です……」

「それが、何か関係あるのか？」

「いえ、話が逸れました。その氷戦士達の纏うプロテクターは私達の聖衣に近い……というのは無論知っていますよね？」

「ああ。故に、彼らの祖が聖闘士ではないか……という説だからな……つて、まさか！？」

カノンも、思い当たったのか目を見開き、ムウを凝視した。

「はい。そこにあつたのは、私達、正規の聖闘士が纏う、青銅、白銀、黄金……そのどれにも分類されない『聖衣』でした……」

『聖衣』は星座をモチーフにしているので、その総数は88である。最も『ケルベロス座』のように、国際天文学連合が定めた現在の星座には含まれない星座をモチーフにしたモノがあるが……。

48体の青銅聖衣、24体の白銀聖衣、そして、12体の黄金聖衣が存在しているがその合計を足しても84体しかない。

実は青銅、白銀、黄金……どれにも含まれない4体の聖衣が存在しているのだ。

最も、今回はその4体の聖衣はまったく関係ないので置いておこう。

「そこにあつた聖衣は、星座ではなく、精霊などをモチーフにしたモノでした……強度的には青銅聖衣と大差ないモノばかりでしたが……」

「何故、そのような聖衣が作られたのだ？」

「それに関しては、文献が残されていません……」

文献では、聖闘士は88人しかいない。

その為、聖闘士の素質を持っているのに、守護星座の聖衣の聖闘士が既に存在している為、聖闘士に認められずにいた候補生達が数多く存在した。

カノンも、かつてはそのような立場だった。

女神の為に、地上の愛と正義の為に戦う事を望んでいるのに、そのような理由で聖闘士になれなかった者たちの哀しみを知った当時の女神は、そのような者達の為の聖衣を作るように指示を出したのだ。それが、あの地に安置されていた聖衣であったのだ。

余談であるが、この聖衣がアレスとの聖戦で失われたので、新たに作り出された聖衣こそがデスクイーン島で発見された既存の聖衣と似た形の黒色の聖衣である『ブラッククロス暗黒聖衣』であった。

最もこの暗黒聖衣は、聖闘士の資格を剥奪された者達や、表面的な力しか身につけられずに聖闘士になれなかったハンパ者達が纏い、その聖闘士としての拳を己の私利私欲の為に使用した為、女神にさえも見捨てられてしまったという『ブラックセイント暗黒聖闘士』の誕生に繋がってしまったが……。

「……そうか……しかし、紛いなりにも聖衣なら、小宇宙を持たぬものにとつては只の重いプロテクターに過ぎん。簡単に悪用されるとは思えないが……」

カノンの言う事も最もである。

この聖衣たちに関しては、魔法文明が主流であるこの次元世界においては悪用されるとは考えにくかった。

「私も同意見ですが、イージスたちが心配したのは、むしろ封印された神具や、オリハルコンが悪用されることだったのでしよう。様々な神具がありました、その中には別に小宇宙など持たなくても簡単に使用できるモノも存在していましたから……」

そしてイージスが役立ててくれと願ったのは、その聖衣達だろう……。

「……確かに、その聖衣は使えるかもしれんな……」

カノンがそう呟き、ムウも思い当たった。

「……あのフツクなる海闘士マリーナに関連する事ですね？」

「ああ。この世界にいる海闘士が奴だけとは限らん。俺たちや、そのイージスなる2000年前の聖闘士が存在するのだ。もしかしたら……フツクの言っていた『主』とやらも、その類の奴かも知れん。そもそも海將軍ジネラルに次ぐ実力を持っていた奴が、この世界の魔導師等を主と仰ぐとは、どうしても思えん……。その主とやらが、海闘士バースカーや冥闘士スベクター、あるいは狂闘士所縁の者である可能性が高い」

自分達の力には自信があるが、今のところ二人しか居ないので、複

数の場所でのような者達が一斉に蜂起でもされたら対処しえない。故に、その聖衣を纏って闘う闘士を育成する必要がある……かも知れない……。

「……私達の世界に関係する者が、この世界に害を及ぼすと言うのなら、私達も無関係を決め込むわけにはいきません……か……」

「ああ。どうやらそれが片付くまで、元の世界に戻るわけにはいかないだろうな……」

カノンもムウは、この世界で起こる戦いを予感した。

なのははユーノと共に、プレシアの遺体を回収した後、アースラを降り、元の日常に戻っていた。

家族や友人に帰ってきたことを報告し、事件の事を振り返り、短い間だったがユーノを始め様々な出会いがあったことを思い出していた。

次元震が影響で、ユーノはそう簡単に故郷には戻れないのでその間は、高町家に厄介になることになっていた。

ムウも、暫くはこちらの世界に滞在することが決まっていた。

ムウは、カノンとは違いフェイトに協力していたわけではないし、今回の件が片付くまで自分達の世界に戻るわけにはいかなくなったからである。

その為、管理局のことはカノンに任せ、ムウは高町家に身を寄せ、情報収集をすることになった。

下手に管理局にこの話をすると、なんだか面倒なことになりかねないので、ある程度の情報が集まるまでリンディたちにも口を噤んでもらうことにした。

フェイトとアルフが本局に護送される前に会う時間を作ってもらっ

たので、今、なのははフェイトと会っていた。

友達になるという約束を果たし、再会を誓う二人を、カノン達は少し離れた所で見守っていた。

「思い出に出来るもの、こんなのしかないんだけど……」

「じゃあ私も……ありがとう、なのは……」

二人は再会の約束の証として、リボンを交換していた。

アルフは、そんな二人の様子を見て、もらい泣きをしている。

「良い友達が出来て良かったですね……フェイト。プレシアには、娘として認められなかったですが……今回の事件は貴女にとってそれに匹敵するくらいかけがえのないモノをたくさん得ましたね……」

「そうだな……」

「その中でも、フェイトにとって一番大事なのは、貴方なんですよ、カノン……」

自分のマスターとなったカノンにそう言うリニス。

「……ありがとうございます……貴方は、フェイトにとっても大事な存在です。これからもフェイトのことを気に掛けてあげてください……」

「……だからと言って甘やかすつもりはないぞ……」
苦笑しながらも、リニスの願いに応えるカノンだった。

第十三話 聖衣（後書き）

1人の広域次元犯罪者逮捕の為、クロノが出撃する。
窮地に追い込まれたクロノを救出に向かうカノン。
その時、クロノに大いなる力に目覚める。

時空を越えた黄金の闘士

「小宇宙の目覚め」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十四話 小宇宙の目覚め

本局に護送されたフェイトとアルフの公判が行われていた。

リンデイやクロノの根回しと、フェイトとアルフの公判中の素行の良さなどで、無罪が確定する可能性が非常に高くなっていた。

カノンも最初、フェイトに協力し執務官であるクロノに暴行を加えたことが問題視されたが、元々、未発見の管理外世界の住人で次元漂流者である為、管理局法を適用出来ないし、当の暴行を受けた本人であるクロノが、訴えを出さなかつたので、比較的自由の身であった。

「……ビデオメール？」

「うん。アタシ達の素行がいいのと、リンデイとクロノが頑張ってくれたお陰で、リアルタイム通信……は無理だけど、ビデオメールでなら、なのはとやり取りしても良いって事になったんだ……」

「成る程……文通みたいなものか……良かったなフェイト……」

「うん。有難うカノン……それで、これからそのビデオを撮るんだけど……カノンも出て欲しいんだけど……駄目……かな？」

フェイトが、指をもじもじさせながら伺ってきた。

「……俺よりもリニスに頼んだ方が？」

「そう言うわけにはいかないでしょう……」

山猫モードでカノンの肩に乗っていたリニスが反論した。

「私は彼女達とはそれほど付き合いがありませんし、なのはさんの方にしてもカノンの近況などを知りたいと思うでしょう？私ももちろん出させてもらいますが、だからといって貴方が出なくても良い……と、いう訳にはいかないでしょう……」

「……わかったわかった……そうクドクド言うな……」

しぶしぶ、了承するカノンであった。

「応援……ですか？」

クロノは、15歳くらい年長の自分と同じ執務官を務めるバモス・ローレルに応援要請を受けていた。

「そうだ。今から第54無人世界に行つて、広域次元犯罪者、ゼブラ・ベリーサ逮捕の応援に行つてもらいたいんだ……」

そう頼んでくるバモスに不審に思うクロノであった。

このバモス・ローレルという男とクロノはそれほど親しい間柄ではない。

むしろ、バモスはクロノに対し含むところがかかなりあると言われていた。

実際、彼が執務官になったのは20代半ばであり、弱冠11歳で執務官になったクロノに対して嫉妬に近い感情を抱いている……という噂である。

クロノ自身、彼から幾度となく嫌がらせの類を受けていた。無論、彼がやったという証拠はないが……。

「これは、本局からの命令でもある」

そういうと、クロノの端末に命令文書が提示された。

「……確かに……了解しました。では、クロノ・ハラウン執務官、ゼブラ・ベリーサ逮捕の任に就きます」

バモスは敬礼し、踵を返すクロノに下卑た笑みを向ける。

「……フン！ 精々痛い目を見て戻ってくるがいい……」

この男がクロノの事が気に入らないのは本当のことである。

しかし、『死んでしまえ』と言つてしまえる程の悪党でもなかった。現在の管理局の人手不足は深刻であり、その事はバモスも十分承知している。

如何に気に食わない餓鬼とはいえ、死んでもらつては困るのだ。

だから、精々酷い目にあつてくれればよい……というのが、彼の考えであった。

ゼブラ・ベリーサ。

この男はあのジェイル・スカリエツィに並ぶ程の次元犯罪者である。

彼の罪状は、破壊活動……テロリズムである。

しかし、テロと言っても思想も何も関係なく、ただただ魔法による破壊を楽しんでいるだけの男である。

管理局は、何度も彼の逮捕を試みたが、その都度彼の非道な手段によって取り逃がしている。

既に管理、管理外世界問わず、三桁を超える世界が、彼のテロリズムによって何らかの被害を被っているのだ。

本来は、アースラもこの件に参加させる案も出たのだが、『P・T事件』で受けた損傷の修理がまだ終わっていないので、クロノのみが他の艦に一時出向して、参加するという事になった。

ビデオメールも撮り終わり、なのは達の世界のDVDに編集も終わった。

早速、郵便物として包もうとした時、カノンが質問した。

「……これが、ビデオなのか？」

「DVDだけど……カノンは知らないの？」

フェイトにしても、まさか『第97管理外世界、地球』とほぼ同じ歴史を持つ並行世界出身のカノンが知らないとは思わなかった。

「……俺の世界において、映像記録はフィルムやビデオテープが主流だから……な」

実際、カノンの地球となのはの地球では、14年の差がある。

まだ西暦1990年のカノンの地球では、漸くコンパクトディスク（CD）がレコードに代わり主流となった頃であり、まだまだ映像に関しては、アナログのビデオテープが主流の頃である。

ちなみに、DVDが世に出たのは、1996年である。

更に、カノン自体はそう言う機械文明には触れない生活を送ってきたので、その方面の知識はあるが、詳しくはないのであった。

「カノンさん！」

と、そこにエイミィが切羽詰まった表情で入ってきた。

「……どうした？」

「クロノ君を……クロノ君を助けて！！」

涙目でカノンに縋りつくエイミィに皆が啞然とした。

「……くそっ！まさか……こんなことになるとは……」

クロノは辺りを見回した。

「まさか……これほど広範囲にAMFを張られるとは……」

ゼブラ・ベリーサを追い詰めたクロノと武装隊員たちだったが、またしても彼の策略にはまってしまった。

なんと目の前のゼブラは、クローン体を元に作られたダミーであり、その手には強制転移魔法の術式が組み込まれたデバイスが握られ、クロノは彼に組み付かれて、諸共、其処に転移させられてしまった。転移した後、そのクローンはその場にあつたりモコンのようなモノを操作した。すると、辺り一面にAMFアンチマギングフィールドと呼ばれるAAAランクの魔法防御が張られてしまったのだ。

魔力結合・魔力効果発生を向こうにする働きがある。

それに対抗する手段もあるが、今の状態ではそれはかなり難しかった。

何故なら、クロノが転移させられた場所は断崖絶壁に囲まれた空間であり、飛行魔法でも使わない限り、脱出は困難である。しかし、AMFの影響下である為、飛行魔法は使えない。

「ククク……。どうする小僧……」

ゼブラのコピーが嘲る様に、話し始めた。

「ここは、あと一時間で瓦礫に埋もれてしまうぞ……」

「何だと!？」

「この絶壁は、あと一時間で崩れるように爆弾が仕掛けられている。貴様ら管理局が禁止する質量兵器だ……。それまでにAMFの発生装置を破壊しなければ、ここからの脱出は不可能……。しかし、何処に隠されているかも解らず、しかも魔法が使えない状況で、どう見つけ出して、どう破壊する?……。緊急停止の機能は付いていないから破壊するしか止める手段はない……。新暦に入ってから、貴様ら管理局は『質量兵器』の使用を禁じてしまった……。この状況下では、最も有効な手段をな……。困ったなあ。はっはっはっはっはっはっはっ!」

「バカな……。そんな事をすれば、お前も只では……。」「生憎、これは私のクローン体を元に作った分身……。ダミーだ。元々この体は自我を持っておらず、私が遠隔操作で操っているに過ぎない……。つまり、これがどうなるかが私には何の問題もないのだよ……。」

「……クッ!」

「せめてもの情けだ……。貴様の今の状況を管理局の連中に教えてやろう。助かる可能性は多少は上がるだろう……。感謝するんだな……はあっはっはっはっはっはっはっ!」

笑い終わるとゼブラの体がまるで糸の切れた操り人形のように、ガクン……と倒れた。

どうやら、操作が切れたようだ。

「……クッ……魔法が使えない今の状況では……。でも、何とかしないと……。無駄死にはゴメンだ……。」

クロノは最後まで、悪足掻きをする覚悟で、AMF発生装置を探し始めた。

事情をエイミィから聞いたカノンは、転送ポートに向かっていた。

「……まったく、管理局とやらは対応が遅すぎる……。」

一人ごちながら、カノンは転送ポートで事件担当の部隊の下に転移しながら、先程の事を思い出していた。

ゼブラ・ベリーサから管理局に通告が届いたが、それがエイミィたちアースラのクルーに届くまで30分を有した。

ゼブラの通告が本当なのか、畏ではないのかと余計な討議に費やした時間である。

討議をする前に、さつさとその情報だけは伝えておくべきなのに……。

「何を考えているんだ！この管理局とやらの上層部は……一時間のタイムリミットなのにその半分の時間を無駄にするとは……」

「まったくです！でも、今はそんな愚痴を言っている暇はありません。カノンさん……お願いします、クロノ君を助けて下さい！！」

「カノン。私からもお願い……クロノを助けてあげて……」
涙目で訴えるフェイトとエイミィに懇願され、カノンは転送ポートに向かうのだった。

部隊の司令部に到着したカノンが見たものは、傷だらけで蹲る武装局員達の姿であった。

「これは、何事だ！？」

「ん……君は何者だ？」

この部隊を率いる提督らしき人物がカノンに問いかけた。

「……俺の名はカノン……。クロノの救出に来た者だ」

「……君が、本局から連絡のあったカノンさんか……私は、この部隊の責任者である、シビック・エスクード提督だ」

「挨拶はいい……状況の説明を頼む」

シビック提督の話はこうであった。

断崖絶壁に転移させられたクロノ救出に向かった武装隊員は、その場を護る傀儡兵や、Aランクレベルの魔導師でも苦戦を強いられるこの世界に生息する三つの首を持つ黒いドラゴン『三頭漆黒龍』が、護っていたのだ。

Cランクが平均であるここの武装隊員達では歯が立たず、撤退を余儀なくされてしまったらしい。

「本局に応援要請をしたのだが、アレだけの数を抑えるにはAAAランク以上の戦闘魔導師が3人は必要だ……私は総合Sランクだが……後、二人……AAAランクの魔導師がいる……。しかし、今現在、手の開いている高ランク魔導師が居ないのが現実だ。だからこそ、アースラ所属のクロノ執務官を借りたのだが……」

「そのクロノが足手纏いになった……とでも言いたいのか？」

「いや、クロノ執務官が居なければ、奴のテロを防ぐことは出来なかった……」

事実、ゼブラはこの世界から、隣の管理世界にテロを行おうとしていたのだが、それをクロノが見事に防いだのだ。

もしクロノが居なければ、ゼブラのテロ行為を防ぐ事は出来なかったかもしれない。たかもしれなかった。

「クロノ執務官は若いが、優秀な魔導師だ……。確かに少し融通の利かないところがあるが、それは若さ故……。それはこれからどうにでもなるう……」

だから、このような場所で死なせたくはない。

「……わかった……。俺を現地に送ってくれ……」

「しかし、君一人では……」

「心配するな……よく見ておくがいい……」

現地に転移したカノンは、見渡す限りの傀儡兵と、三頭漆黒龍に呆れていた。

「……なるほど……これだけの数……奴ら如きでは突破不可能な筈だ……」
既に傀儡兵が何体か襲い掛かってきたが、カノンの光速拳の前にあっさり粉砕されていた。

「これだけの数をいちいち倒しては面倒……」
カノンは小宇宙を高めていった。

すると辺りの景色が、まるで宇宙空間のようになった。

「……異次元の世界に飛んでいくがいい……『アナザーディメンション』！」

空間に現れた異次元への穴に傀儡兵や漆黒龍が次々と飲み込まれていく。

艦のモニターでその光景を見たシビック提督は、呆然と見入っていた。

「……信じられません……彼が開いたあの空間は……『虚数空間』と酷似しています……」

「どういうことだ？」

通信士の報告に、シビックは驚愕していた。

「……虚数空間ではないのですが……虚数空間と同じようにあらゆる魔法がデリートされてしまうようです……あそこに飛ばされれば、我々魔導師は、魔法が使えず……一切の脱出が不可能になるでしょう……」

「あれは、魔法なのか？……確か彼はSSランクの魔力量を持っているとアースラから報告があつたが……」

「いえ、一切の魔力反応がありません……」

「……これが……神を護る闘士……聖闘士の力……か……」
アースラから報告された聖闘士なる存在……。

半信半疑だったその実力を垣間見たシビック提督は、魔導師の常識を超越した聖闘士の力に戦慄を覚えた。

「はあ……はあ……見つけた……これがAMF発生装置……」
汗だくの泥まみれになっていたクロノはようやく目当ての物を見つけた。

「くそっ……後……五分か……」

早速、装置を破壊しようと試みるが、地面に叩きつけても大きな石で殴りつけてもびくともしなかった……。

AMFの効果範囲内にいる以上、魔法は使えない……。
管理局からの応援はまだ姿を見せない……。

実際、後五分では、助けに来た者たちも崩れてくる瓦礫から逃れる事は出来ず二重被害を被ってしまう。

助かる手段は、この装置を破壊して、AMFを消し、転移魔法を使用するしかないのだ。

「くそっ！壊れる、壊れるおおおお！！」

近くにある全ての石が砕けてしまった為、クロノは自分の拳で、装置を殴りつけた……。

アナザーディメンションで敵を一掃したカノンは、クロノの下に向かったが、またしても邪魔が入った。

今度は、AMF効果内でも活動が出来る様、対AMF対策を施された傀儡兵が突如として表れ、カノンの行く手を遮ったのだ。

今度は時間差を巧みに使い現れるので、一気に殲滅する事が出来なかった。

「チィッ！ゼブラ・ベリーサとやら……中々考えているな……」

そして、時間は無情にも過ぎていき、とうとう爆弾が爆発してしまった。

「しまった。どけえ……！『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』……」

敵を一気に粉碎し、そのまま断崖から飛び降りた。

「くそっ！爆弾が爆発したか！！」
爆発音を聞き、クロノは死を覚悟した。
瓦礫が次々と降ってくる。

やがてはそれが雪崩の様にこの場所を埋め尽くしてしまっただろう……。

「これまでか……いや、まだだ！！」

クロノは、最後まで足掻こうと拳を撃ち付ける……その時……。

「……なんだ？この感覚は……」

自身の内から魔力とは違う力が溢れてくるのを感じた。

「これは……まさか……」

死が差し迫った今、クロノが秘められし力を目覚めさせた瞬間だった。

「これは……『小宇宙』！？……まさか……」

落下していたカノンは、その先から今まで感じた事のない小宇宙を感じとっていた。

体を捻り、地にしっかりと着地したカノンの目に、小宇宙を燃焼させているクロノが映っていた。

「……クロノ……！？お前……小宇宙に目覚めたのか……」

クロノの周りに高まっていく小宇宙をしっかりと感じる。

「もっと……もっと小宇宙を高める！」

「……カノンさん……僕が……小宇宙を……！？」

クロノは自身から感じる宇宙が『小宇宙』であることを自覚した。

「よし、そのまま拳をぶち込むんだ！」

「はい！……うおおおおおおおおお！！」

振り下ろした拳が、見事、装置を粉碎する。

辺りに展開されていたAMFが解かれていく。

その時、二人に瓦礫の雪崩が迫ってきたが、カノンが小宇宙の結果を張り、瓦礫を押し留め、その間にクロノは転移魔法を展開し、二人の姿がその場から消えた。

シビック提督の艦へ転移に成功したクロノとカノンは、ホッと息をついた。

「驚いたぞ、クロノ……まさか、一度のまぐれとはいえ、小宇宙を目覚めさせるとは……な……」

「……あれが……小宇宙……自分でも信じられません……」

死が差し迫った時、発揮された小宇宙……それは……。

「お前は、アリシアと同じく死の淵において、小宇宙に目覚め、それを扱う事に成功したのだ……」

アリシアは、小宇宙に目覚めたが、どうすることも出来ず命を落としてしまったが、クロノは見事、小宇宙を扱い窮地に一生を得たのであった。

「……フツ……どうやら……面白くなってきたな……」

小宇宙に目覚めた事を、未だに信じられない……と、いった顔のクロノを見て、カノンは、笑みを浮かべていた。

第十四話 小宇宙の目覚め（後書き）

かつてカノンが出会った車椅子の少女、八神はやて。

彼女の前に、1人の黄金聖闘士が現れる。

兄妹のように暮らす2人の前に、四人の新たなる家族が現れる。

時空を越えた黄金の闘士

「獅子と魔導書」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十五話 獅子と魔導書

車椅子の少女……八神はやては夕飯の支度をしていた。

以前は一人っきりの寂しい時間……しかし、今は一緒に居てくれる『兄』が出来ていた。

強くて優しく、暖かい……はやてにとって、まさに理想の兄だった。

「ただいま、はやて」

「おかえり、リア兄……」

買い物に出掛けていた兄が帰ってきた。

「はやて、先程、石田医師せんせいに会ってな……。明日ははやての誕生日だろう……。検査の後、一緒に食事でもどうだ……。とのことだ……」

「そっか……。楽しみやな……。あつ、もう食事の支度出来とるで……。食べよう……」

「そっか……。はやての料理は美味いからな……。しかも飽きる事がない……。家庭料理というのはいいものだな……」

「そんなに褒めても何も出やへんよ……」
はやては照れながら、ご飯をよそった。

時系列を遡り、牡羊座のムウが高町家に保護された頃と同時刻……

八神宅の庭に一人の男が何も無い空間から突然現れた。

突然現れた傷ついた男に、はやては驚き、119番を掛けようとしたとき、男は目を覚ました。

「大丈夫ですか？」

「……ここは……何処だ？」

目を覚ました男の横には、獅子のレリーフが彫られた黄金の箱が置かれていた。

男は、アイオリアと名乗った。
そして、様々なことを質問してきたが、よく解らないことを聞いてきた。

日食はどうなった……とか、グロード財団という財団はあるか……とか、である。

日食といわれても、日食なんて今年は周期ではないので見れないし、グロード財団なんてものは聞いたことがない。

アイオリアは、新聞を見て驚愕した。

西暦2004年。

アイオリアの記憶が確かなら今は1990年の筈……。

その後、様々なことを調べて、この世界が自分のいた世界とは違う世界である……ということを悟らざる得なかった。

「ほえ……。アイオリアさんは異世界の御人なんか？」

「……って、信じるのか……お譲さん？」

「そりゃ、何もないとこから、突然現れたんやし……ところで……行くところがないんなら、暫くウチに住みませんか？」

「……いいのか？ご両親とか……」

「ウチの両親は、前に事故で死んでしもうたから、ウチ一人暮らしなんですわ……」

「……そうか……君も……天涯孤独の身か……」

「君も……って、アイオリアさんですか？」

「ああ……俺は両親の顔を知らんし……唯一の身内だった兄も、13年前に……な……」

アイオリアの兄、射手座サジタリアスのアイオロス。

黄金聖闘士の中でもその實力は、最強と言われる双子座ジミニスのサガに並ぶ程の實力者であり、次期教皇にほぼ決定していたが、13年前、非業の死を遂げていた。

「……正直、この世界の事は右も左もわからない……とは言わない

が……手持ちの金もないし、当てもない……。図々しいがよろしく頼むよ、お譲さん……」

「ウチの名前は、八神はやてと言います……。はやてって呼んでください……。それと……アイオリアさんのこと……。リア兄って呼んでもいいですか……。なんや、お兄さんが出来たみたいで……」

「恥ずかしいのか、はやての声がどんと小さくなるが、アイオリアは快く了承した。

「ありがとう、リア兄!」

「此方こそよろしくな、はやて……」

こうして、はやてとアイオリアの同居生活が始まった。

時系列は戻り、はやての誕生日前夜……。

「さて、はやて……。本に夢中になって夜更かしせず、早く寝るんだぞ……」

「ははは……。それは約束でけへんなあ……」

はやてにとって睡眠前の読書は、何よりの楽しみである。

「読むなどは言わんさ……。だが、余り遅くまで、熱中するな……ということぞ……」

「それも……。約束でけへんなあ……」

本に夢中になれば、おのずと時間を忘れてしまうものである。

アイオリアは呆れ果てて、自室に戻った。

ベッドに腰掛け、これからの事を考える……。

「……女神は……ハーデスとの聖戦はどうなったのだろう……。いや、星矢達なら必ず、女神を救い、そしてハーデスを倒し……。地上の愛と正義を護り抜いてくれたはず……」

アイオリアは、部屋の隅に置かれている獅子座の聖衣櫃を見つめた。
クロスボック

中にある聖衣自体は、完全に破壊されていた。
神話の時代より、ただの一度も破壊されたことのない黄金聖衣が、

あそこまで破壊されているとは思ってもよらなかったが……おそろく獅子座の聖衣を星矢達の中の誰かが……おそらくは一輝だろうが……纏ったが、ハーデスの2人の側近に破壊されたのだろう……。

老師から聞かされたハーデスの側近の2柱の『神』。

『眠り』と『死』。

この2人は神でありながら、ハーデスの側近となったという……。

黄金聖衣をあそこまで破壊する事など、原子を砕く力を持つ聖闘士と、それと同格の力を持つ冥闘士スベクターでも不可能。

しかし、『神』ならば……。

聖衣の修復を行えるのはムウただ一人……ムウには一人、弟子がいるがまだまだ未熟な為、聖衣の修復など行えないだろう。

自分が生きていたのだからムウももしかしたら、何処かで生存しているかも知れない……。

しかし、帰る方法など見当もつかない……。

アイオリアは、聖闘士の基本的な闘法スタンダードを得意としているので、ムウやシャカとは違い、あまり異能に長けているわけではない。

簡単な念動力サイコキネシスくらいは使用できるが、世界を超えるほどの力は持っていないかった。

それに……はやてのこともある。

彼女と暮らして、はや一ヶ月を過ぎた。

自分を兄と慕ってくれる少女に、アイオリアはかなりの情がわいていた。

かつて、当時の星矢達、聖闘士候補生達のよき兄貴分として接してきたが……彼女のように護ってやりたいと思ったのは初めてだった。この地で出来た大切な妹……。

しかも、はやては足が不自由である。

亡くなった彼女の父の友人が、その遺産を管理してくれていて、生活には困っていないようだ……、やはり、あんな幼子を一人で残しておくのは忍びなかった。

いや、それはただの言い訳に過ぎない。

自分が、これからもはやてと一緒に居たいのだ。

聖闘士として、命を掛けて戦ってきたが、ハーデスとの聖戦も終わった筈……ならば此処ではやてと静かに暮らすのも悪くはない……。

そう考えるようになっていた。

無論、女神アテナに再び危機迫りし時は、黄金聖闘士として女神を護り戦うことになんの躊躇もない。

しかし、帰る方法が見つかるまで……いや、見つかっても彼女の兄で居たいと願うようになっていた。

「……………ッ!? はやて!!」

突如、はやての部屋から異変を感じた。

アイオリアははやての部屋に駆け出した。

はやての目の前には、跪いた4人の男女が居た。

「『闇の書』の起動を確認しました」

「我ら、『闇の書』の蒐集を行い、主を護る『守護騎士』にござい
ます……………」

「夜天の主に集いし雲」

「ヴォルケンリッター……………何なりと命令を!」

彼女達は、はやての言葉を待った……………しかし、はやては余りのこ
とに目を回して気絶していた。

そのことに気付いた4人は焦ったが、その時、部屋のドアが開いた。

「…はやて!?!」

部屋に駆け込んだアイオリアは、気絶しているはやての傍で跪く3
人と、はやてを覗き込んでいた1人を見て、警戒心を強めた。

「……………貴様…何者だ!?!」

跪いていた長髪を後ろに纏めた女性が、アイオリアを睨みながら問
うてきた。

「……………それは此方の台詞だ!こんな夜更けに幼子の部屋に侵入する
など……………はやてに危害を加えるというのなら、このアイオリアが容

赦はせんぞ!!」

アイオリアから発せられる威圧感に、守護騎士たちはひるんだ。そして困惑した。目の前の男はどうやらリンカーコアを持つてるようで、それもかなり高ランクの魔力量だが、目覚めてはいない。魔力に覚醒してもいない男の眼光に、自分たちがこれほど威圧されるとは思いも寄らなかつた。

「……………それは誤解です……………。どうか我らの話を聞いてください……………」
金髪の女性が、2人の間に入り、説明を始めた。

はやてに活を入れ目を覚まさせたアイオリアは、はやてと共に闇の書の守護騎士『ヴォルケンリッター』と名乗った、シグナム、シャル、ヴィータ、ザフィーラの話聞いていた。

「そうかあ。この子が『闇の書』ってモンなんやね……………」
はやてが生まれたときからあつたという本。

それこそが『闇の書』と呼ばれる魔導書である。
彼女達、守護騎士『ヴォルケンリッター』は、主を護る事と、闇の書のページを埋めるため、魔力を蒐集し闇の書を完成させるために動くことを使命としていた。

「解つた事がある。闇の書の主として、守護騎士みんなの居・食・住…きつちり面倒見なあかん……………ということや……………」

彼女達の服を買う為に、サイズを測りだすはやてに、アイオリアは苦笑し、守護騎士達は戸惑っていた。

「良かったなはやて。こんなにも家族が増えて……………」
「うん。リア兄だけでも十分やつて思つとつたけど……………家族は多いんに越した事はないなあ……………」

はやては、闇の書の完成を望まず、たとえ、完成したら不自由な足が治ると言われても、魔力の蒐集は人様に迷惑を掛けるから駄目といい、皆に望む事は家族として、共に過ごすことだけであつた。

守護騎士たちもその考えに従い、戸惑いながらも平和の時を過ごすこととなった。

今までの主は、彼女らに対して高圧的に接するか、道具として利用するしか考えなかった。

彼女達もそれが当然だと思っていた。

しかし、はやてが皆を家族として接しているうちに、彼女らは『今』という時を、とても貴重に思うようになった。

一番早く、今の環境に慣れたのは『湖の騎士』シャマルであった。

次に、『烈火の将』シグナム、『盾の守護獣』ザフィーラも慣れ：

…最後まで、今の状況に最も抵抗を持っていた『鉄槌の騎士』ヴィータも、今でははやてとアイオリアに懐き、はやてと共にアイオリアに甘えるようになった。

はやてとアイオリアと守護騎士達の、穏やかで幸せに日々が続いたが……その幸せは、いつまでも続く事はなかった。

彼女達に衝撃の真実が知らされた事が、戦いから遠ざかるうとしていた、守護騎士達を再び、戦いに駆り立てる事となった。

第十五話 獅子と魔導師（後書き）

囑託魔導師試験を受けるフェイト。

クロノがカノンに師事し、聖闘士の闘法を学ぶ。

時空を越えた黄金の闘士

「修行」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十六話 修行

「囑託魔導師試験を受ける？」

「うん。これを受けると異世界での行動制限がぐつと低くなるし、裁判にも有利になれるからって……リンディ提督が薦めてくれたの」
フェイトは現在、裁判中の被告なので、アースラ内以外での行動は制限されている。

裁判中の囑託魔導師試験は異例だが、フェイト達が局の業務協力に前向きなのと、リンディ達の頑張りのお陰か、特例で受験できるようになったらしい。

「……まさかとは思うが……何れフェイトを管理局員にすることを条件に、承諾させたんじゃないだろうな……」

カノンは、リンディを睨みながら問う。
管理局は、慢性的な人手不足である。

フェイトほどの優秀な魔導師なら、喉から手が出るほど欲しいだろう。

リンディ達が太鼓判を押ししたように、フェイトの無実判決の可能性は高いだろうし、ここで囑託魔導師になれば、それがほぼ確定するのは間違いないだろう。

元々、フェイトの主犯ではなくただの実行役であるに過ぎなかったので、プレシアの目的などまったく知らなかったのだ。

たった9歳の娘が、母親……と信じていた者……に言われれば、それに従うのは当然であろう。

その様な事情もあり、一部を除いて周囲はフェイトに同情的であった。

それに、フェイトの人となりからも、裁判員達の印象も概ね好意的である。

しかし、打算がないとは言えないだろう。

『司法取引』というモノがある。

罪を犯した者に、協力させる事を条件に裁かれないようにすることである。

「もし、フェイトを無罪にする代わりに、管理局に強制的に所属させようなどと考えているとしたら……その首が胴からおさらばすると思え……」

最初の背信行為以来、カノンのリンデイに対する態度は少々キツイ。クロノやエイミー、アレックスやランデイといったアースラクルーには普通に接しているのに、リンデイに関しては時々威圧的になる。リンデイ個人に含むところがあるわけではないが、時空管理局の提督としての彼女には、警戒せざる得ないのだ。

「……大丈夫です……。確かに局長になつてもらいたい……という気持ちがあるのは否定しませんので、勧誘はしますが……フェイトさんの気持ちを優先させますので、フェイトさんが嫌なら無理強いはしません……」

「……言葉で無理強いはしなくても、フェイトの心に付け込んで、管理局に入るように誘導するつもりではあるまいな？」

辛辣なカノンの返答に、リンデイはハツとなった。

考えてみれば、フェイトの性格なら例え嫌でも、自分達に氣遣つて、いやいやでも管理局に入るかもしれないのだ。

「……フェイトさん……。私達の為に……と、思ってくれるのは嬉しいけど……まずは貴女の気持ちが第一ですからね……。自分の本心を曲げてまで私達の為に管理局に入る……なんてことはしないでね……。そんなことをされても嬉しくはないから……」

いやいや入ってもらつても、長続きはしない。その場の雰囲気の流れで、フェイトの人生を台無しにさせたくはない。

いくら、管理局の提督という立場でも、そこらへんは弁えているリンデイだった。

管理局の人手不足が深刻なので、お願いというか勧誘はこれからもあるだろうが、絶対に強制だけはしたくないと思う。

そんなリンディの気持ちを察したカノンは、これ以上何も言わなかった。

結局、囑託魔導師試験を無事に終了し、結果は合格だった。使い魔持ちのAAAランクの魔導師。

筆記試験はほぼ満点。

魔法知識も戦闘関連に関しては修士生クラス。

儀式魔法に関しても、転校操作に長距離転送フィールドの作成。

監督を務めるリンディの友人、レティ・ロウラン提督は、リンディが推薦しただけはがあると、認めていた。

この後の、実戦試験の監督官がクロノであった為、敗北してしまっただが、戦闘に関しては十分合格点だったので、AAAランク囑託魔導師に無事、認定された。

最も、『負けたら不合格』と思い込んだうっかりやさんは、今後、気をつけてもらうことになるが……。

試験の後、カノンは自身の使い魔であるリニスから、魔法に関するレクチャーを受けていた。

リニスはカノンの理解力と応用力に正直、舌を巻いていた。

今まで、魔法文化のまったくない世界に居たのに、既に全てにおいてフェイトを凌駕しようとする勢いである。

容姿だけでなく、才能面においてもカノンは兄、サガと瓜二つであり、間違いなく『天才』なのである。

しかも、彼はサガが生きている間は陽の目を見ることは叶わない存在だった故、変なエリート意識とは無縁である。

雑草の如き逞しさを兼ね備えた天才。

カノンはそう言う存在だった。

と、そこへ、クロノが訪ねてきた。

「……クロノ…、何か用か？」

「……カノンさんにお願いがあつてきました……」

改まった態度で訪ねてきたクロノにカノンは不思議そうな顔で応えた。

まず、クロノは先日のゼブラ・ベリーサの罠に落ちた時に、救援に来てくれたことに、改めて礼をした。

そして、クロノは自分を教導して欲しいと言つてきたのだ。

「……『小宇宙』を自在に操れるように……僕を鍛えて欲しいんです……」

クロノはあの時、一瞬とは言え聖闘士の闘法に目覚めた。

彼は興奮したのだ。

自身で使用してみても、『小宇宙』の力の雄大さを……。

今まで人が持てる最強の力と思つていた『魔法』よりも……。

カノンは、少し考えた。

確かに、クロノは一瞬とはいえ『小宇宙』に目覚めた。

本来、聖闘士の修行は最低でも9歳くらいから始めなければならず、14歳というクロノの年齢は遅すぎる。

しかし、『小宇宙』に目覚めた以上、普通の聖闘士候補生が聖闘士になる為にかかる時間をすっ飛ばす事も可能である。

大体、聖闘士になる為に掛かる年月は4年から6年である。

しかし、例外というのは何処にでも存在している。

当代の黄金聖闘士達の殆どは、大体1年で黄金聖衣を与えられ、黄金聖闘士になっている。

しかも、7歳から10歳くらいで……である。

最短なのは、アイオロスとサガの半年であり、しかもアイオロスは6歳で黄金聖闘士と認められており、聖闘士の歴史上最年少の記録を誇っている。

クロノも流星に其処までは行かないが、1年くらい修行すれば、聖

闘士の闘法を身につけることは可能だ。

しかし、クロノは執務官としての仕事がある。

修行ばかりに掛かりきりになるわけにはいかない。

人手不足の管理局が、AAA+ランクの優秀な魔導師にそれほどの休みを与える筈がないので、仕事をしながらだと、2、3年くらいは掛かるだろうが……。

「聖闘士になりたい……というのではなく、『小宇宙』という聖闘士の闘法を学びたい……ということだな？」

「出来れば、聖闘士になりたい……とも思いますが……管理局の仕事にも誇りを持っていますので……まだ、決めかねています……」

「……だが、以前にも言ったが聖闘士の修行は魔法の鍛錬とは違い、命懸けだ……。死ぬかもしれんぞ……」

「……リスクがある事は承知しています……でも……」

やはり、クロノも男であり、強くなりたいという願望があるのだ。

クロノの覚悟を悟り、カノンはクロノに修行をつけることを承諾した。

「うわああああああん!!」

辺り一帯にクロノの泣き叫ぶ声が響いていた。

ここは、ある無人世界。

その世界のとある断崖絶壁にポールを突き刺し、それに足を掛け、腹筋千回をさせられていた。

しかも、飛んで逃げられないように、リニスに『ストラグル・バインド』を掛けられていた。

「泣いても仕方がないぞ！ここで腹筋千回しなければ、誰も引き上げてはくれないと、今までの修行で知った筈……。あとたったの345回！」

この修行は、聖域では割とポピュラーな修行で、聖域で修行をして

いる聖闘士候補生はほぼ全員、これをさせられている。そして、この修行で命を落とした候補生は数多い。あの星矢も、魔鈴にこれをさせられていたのだ。最も、星矢はあと362回というところまでで、転落してしまったが……しぶとく生きていた。

アースラのブリッジで、リンディたち、アースラスタッフとフェイト達もクロノの様子を見ていた。

「……リンディさん！このままじゃ、クロノ……死んじゃいますよ！」

余りの過酷な修行内容に、フェイトは涙目になっていた。

いくら、信頼しているカノンとリニスが監督している修行でも、9歳の少女には見るに耐えないようである。

「……でも、これはクロノが自分で望んだことだし……」

「クロノ君も覚悟はしていただろうし……」

リンディはおろかエイミィさえも、取り乱さず平然としていることに、フェイトを含むクルー全員が、絶句していた。

「……ちよつとリンディ、エイミィ……アンタ達どうしたんだい？ポーカーフェイスのリンディはともかく、エイミィまで落ち着いていることに、アルフなどは疑問に思っていた。」

流石にクロノもこの修行は恐怖に駆られていたが、泣き叫んではいても、止めようとはせず続けていた。

もともと、命懸けなのは覚悟していたからであるが……、いい根性である。

「よし、後、6回、5、4、3、2、1……よし、終わりだ、リニス！」

「わかりましたカノン！」

リニスはクロノに施されていたバインドを解除し、クロノに向かって、愛用のストレージデバイス『S2U』を抛った。クロノはデバイスを受け取り、飛行魔法でカノン達の下まで飛んできた。

「……見事やり遂げたな……。よくやった……」

この修行は、危険度がとても高い為、途中で命を落とすものが多い。見事やり遂げたクロノに、珍しくカノンは褒め言葉を発した。

「……今までの課題も死ぬかと思いましたが、今回は極めつけでした……。本当に死を覚悟しましたよ……」

未だに、涙と鼻水でくちやくちな顔のまま、クロノはそう呟いた。

「……リニス……。アレを解除しておいてくれ……」

「……分かりました……」

そう応えると、リニスは断崖絶壁から飛行魔法を使い降りていった。クロノが覗き込んでみると、下には魔力で作られたネットの様なものが張り巡らされていた。

「……あれは!？」

「今までの修行では用意していなかったが、流石に今回に限っては、落ちても大丈夫なようにしておいた……。そうでなければ、リニスが反対するに決まっているだろう……」

修行などに関しては、結構厳しいところのあるリニスだが、流石にこれを行うと知った時は、凄まじい勢いでカノンに詰め寄り反対した。カノンにしても、クロノの事は結構気に入っているの、ここで死なすつもりはなかったの、落ちても大丈夫な様にしていたのだ。

リンディとエイミィは、その事を知らされていたので、落ち着いていたのだ。

「言っておくが、こんなことをするのは今回だけだ。次からの修行ではこんなものはないから、気を抜くと死ぬぞ!」

「……はい!」

なんだかんだ言いながら、結構、自分の事を思いやってくれるカノ

ンに、クロノは少し嬉しそうであった。

「……リンディ提督は、アレのことを知っていたんですね？」

「まあね。流石にそうでなければ止めていたわ……。いくらクロノが望んでいても……ね……」

クルー達もこの事を知り、ホッとしたが、だったら最初から教えてくれていればいいのに……と、全員が思った。

「まあ、カノンさんに口止めされていたから……余り知っている人間が多すぎるとクロノ君の耳に入るかもしれないから……クロノ君がアレのことを知れば修行にならないから……ってね……」

エイミィが皆にそう答える、

本来なら、一番取り乱しそうな彼女が落ち着いていたので、そのことを悟るべきだったと思う、クルーたちだった。

クロノの聖闘士修行は始まったばかりである。

第十六話 修行（後書き）

居候先で働くムウ。

そして、魔法の練習にいそしむなのは。

時空を越えた黄金の闘士

「その頃」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十七話 その頃（前書き）

今回は短めです。

幕間も今回で終わり、次回からA、S編が始まります。

第十七話 その頃

「はい、ミルクパイにカスタードシュークリームをそれぞれ6個ずつ……お持ち帰りですね……。少々お待ち下さい……」

喫茶翠屋。

高町家が営むケーキとシュークリーム、紅茶の美味しい地域密着店。現在、その喫茶店に少し変わった店員がいた。

「はい、ムウさん……そろそろ休憩に入って下さい」

「分かりましたマスター」

アリエス 牡羊座の黄金聖闘士、ムウ。

元来、人嫌いでジャミールに籠もりつきりであった彼が、よもや客商売をしているなど、彼を知る他の聖闘士から見れば信じられないだろう。

いくらムウといえど、いつまでもタダで居候させてもらうつもりはなかったのだので、店を手伝うことにしたようであった。

今時珍しく眉毛を剃り、額に眉を書くという、昔の公家のようなことをしているとはいえ、ムウはかなりの美青年である。

只でさえ女性向けの喫茶店なのに、彼目当てに足を運ぶ女性客が増え、土郎や桃子は、嬉しい悲鳴をあげていた。

高町なのはは、親友のアリサ・バニングスと月村すずかと一緒に先フレッシュアテスタロッサのPT事件の折に仲良くなったフェイトからのビデオメールを見ていた。

最初になのはが贈ったのは、自身の家族と親友である2人を紹介した内容のDVDである。

それ以降、家族や友人達と一緒にの物と魔法関連に関する物とに分けてやり取りするようになった。

今、現在見ているのは、前者の方である。
アリサもすずかも、なのはが新しく作った友達であるフェイトのこ
とが、気に入ったようで早く直に逢いたいようであった。

2人と別れたなのはは自宅に戻り、ユーノと仕事を終えたムウと一
緒に魔法関連の方のDVDを見ることにした。

何故か今回は魔法関連のDVDは二枚あるようだ。

【それでね。クロノがカノン達と同じ『小宇宙』に目覚めたの……。
それからクロノ……。執務官の仕事の合間にカノンに修行を付けて貰
っているんだけど……。その修行……。はつきりいつてどれもこれも厳
しすぎて……。私なんかじゃとても耐え切れそうに無いものばかりで、
よくクロノは耐えられるな……。って思うよ……。やっぱりクロノが男
の子だからかな？】

これには流石のムウも驚いたようである。

「……まさか……。彼が『小宇宙』に目覚めようとは……。上手くい
けば彼が見つかった聖衣を纏う新たな聖闘士になれるかも知れませ
んが……。」

「へえ、クロノ君が聖闘士に……。」

「……聖闘士の力は、魔導師よりも優れた部分がたくさんあります
から、魔導師と聖闘士の力をクロノが持てば、かなり凄い事になり
ますね……。」

それがどれだけ難しい問題を孕んでいるのか理解できないなのはと
ユーノは、気楽にそう答えたが、ムウは難しい顔をしていた。

「しかし、彼が聖闘士になるというのなら、管理局員としては常に
その力を使うことを認めるわけにはいきません……。」

「えっ、どうしてですか？」

「確かに管理局の仕事は、平和に暮らしている人々を護ることのよ
うですので、その為に聖闘士の力を使うこと自体は問題ありません。
しかし、その働きにより、クロノが昇進でもすれば、非常にきわど

いですが……出世の為に聖闘士の拳を使ったことになってしまいま
す……。つまり、私利私欲の為に聖闘士の拳を使つてならないとい
う、聖闘士の掟に反してしまうのです。つまり、クロノが聖闘士の
力を使つて事件を解決しても、それを彼の手柄にしてはいけないの
です……。いくらこの世界に女神アテナの目の届かないとしても……例外
を除き、掟破りを見過ごすわけにはいかないのです……」
ムウの言う例外とは、『キャラクターアンウォース 銀河戦争』に参加した10人の青銅聖闘士
達のことである。

あのイベントは、聖域に潜む悪を引き摺り出す為の罠であり、女神アテナ
本人であるグラード財団総帥、城戸沙織が主催した大会である為に、
これに参加した星矢達は、例外として処理されているからである。
如何にクロノ自身が、事件解決のみの為だけに聖闘士の拳を使つた
にしても、それにより昇進してしまえば、動機はともかく結局はク
ロノの利になつてしまう……。

クロノが正式な聖闘士になつてしまえば……であるが……。
「まあ、クロノが正式な聖闘士にならないのであるならば……大目
に見れますけど……ね」

どうやら、今のところカノンもクロノを正式な聖闘士にするつもり
はないようなので、その問題はとりあえず保留にしておくことにし
た。

そして、もう一枚のDVDを再生する。

それには、クロノが断崖絶壁の上で、泣きじゃくりながら腹筋千回
している様子が映っていた。

どうやら、アルフとエイミーが悪戯心でなのは達にも、この泣きじ
やくっているクロノを見せてやろうとこっそり忍ばせたようであつ
た。

主にクロノの泣き顔がメインに映っていたので、なのはとユーノは
これがどれだけ危険な修行なのか……というのを余り考えず、思い
つきり笑っていたが、後でムウからこの修行内容を聞かされ、顔を
青くした。

それから暫くして、なのははユーノの指導の下、魔法訓練を続けていた。

午前4時30分に起床し、5時に野外で魔法の練習。

指導者見学のもと、朝食の時間まで約二時間のトレーニング。

朝食中や通学、体育の時間などは、レイジングハートがなのはの魔力に強い負荷をかけていて、日常を過ごす中で魔力を消費するという「魔導師養成ギブス」的な効果を発揮しているのだ。

授業中などは、真面目に聞いてはいるが、実はその間も訓練をしていた。

二つ以上のことを同時に思考、進行させるマルチタスクは戦闘魔導師には必須のスキルであり、これに関しては聖闘士でもそう簡単に出来ることではないので、魔導師の方が優れている部分である。

最も、魔導師としての才も並外れているカノンは、なのは同様、簡単にこなしているらしいが……。

レイジングハートが送信する仮想戦闘データを元に、イメージフィードを行い、限りなく実戦に近い経験をなのはに与えているのだ。友達や家族とのひとときは流石に休憩しているが、暇さえあればなのははこれを行っていた。

塾や家の手伝いが無い日は、夕方まで鍛錬を行っていた。

バリアジャケット
防護服を纏い、上空で魔法の実践使用。

夜間は、高速機動の訓練。

ぐったりするまで練習して、入浴して、午後8時には就寝。

以下、日曜日以外はこれの繰り返し……。

聖闘士の修行ほどではないが、並の魔導師ならへたばってしまうほどハードな鍛錬を行っていた。

「ユーノ……私は魔法の事はあまり詳しくないのですが……なのは

の訓練は少しやり過ぎなのでは？」

それ以上の修行を行う聖闘士のクセに、なのはの基礎身体能力を把握しているムウは少し心配のようである。

「僕もそう思うんですけど……なのはは魔法の練習がどうも楽しいらしくて……」

「小宇宙を扱う聖闘士と違うんですから、余り疲労が溜まりすぎると、取り返しの付かない事態を招くかも知れませんよ……」

『小宇宙』は、たとえ疲労していようが、五感が薄れていこうが、命の炎が燃えている限り高まっていき、聖闘士に奇蹟の力を与えてくれるが、『魔力』はそうではない……。

疲労が溜まれば判断力が落ちてしまい、大きなミスに繋がる可能性があるのだ。

ムウの懸念は将来、なのはに深刻な事態を招いてしまうのだが……。
「とりあえず、僕もそのことは気にしていたんですが、どうやらクロノが管理局の教導メニューを送ってくれるとの事なので……それに従った訓練に切り替えるつもりですけど……」

後日、そのメニューが届く前に、なのはは自身の最強の放射系魔法である『スターライトブレイカー』の改良を試みるのだが、無意識の内に結界機能の完全破壊という能力を付与した為、自爆してしまい、全治一日半の魔力エンプティに陥ってしまった。

それから暫くして、ユーノはフェイトの裁判の証人として、本局に赴き、ムウも以前発見した、サンクチュアリ聖域の一部の管理の為に、高町家から離れ、なのはは暫く一人で訓練をすることになった。

そして、フェイトから近々、逢いに来れる事になったという知らせを聞き、喜んだのも束の間……なのはは、新たな魔法の事件に巻き

込まれることとなる。

第十七話 その頃（後書き）

フェイトの裁判も、ようやく終わろうとしていた。
なのは謎の魔導師の襲撃を受ける。
彼女の实力は恐るべきモノであった。

時空を越えた黄金の闘士

「新たな闘いの始まり」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第十八話 新たなる闘いの始まり

時空管理局艦船『アースラ』。

その食堂において、カノン、フェイト、アルフ、ユーノ、クロノの五名は、フェイトの裁判におけるの受け答えの確認をしていた。

先のPT事件におけるの裁判も明日が最終日。

事実上の判決無罪、数年間の保護観察はほぼ確実であるが裁判員達の心証を害すれば、不利になる可能性もあるからである。

フェイトとアルフは被告席、クロノとユーノとカノンは証人席である。

カノンは当初フェイトに協力していたが、彼の立場は『次元漂流者』である。

そして、行ったことと言えば『執務官に対する暴行』であるが、管理外世界の人間であるカノンに管理局の法では裁けないし、何よりクロノ自身が訴えを起こしていないので、被告者にはならなかったのだ。

そして、彼の後ろに立っている事件の首謀者であるプレシア・テストタロツサの使い魔であり、フェイトの育ての親であり、そして現在はカノンの使い魔であるリニスは、事件そのものには関わっていないので、裁判で発言することは出来なかった。

さて、カノン達に説明をしているクロノだが、その姿は実に痛々しかった。

体中至る所に包帯やら絆創膏等が目立っていた。

『小宇宙』に目覚めたクロノは、既に聖闘士の基本修行は全てこなしたので、最近カノンとのシュミレーションが主である。

青銅聖闘士レベルに力を抑えたカノンとのシュミレーションだが、それでもクロノはカノンに一撃を入れることも敵わなかった。

「それにしても、スタボロだな……クロノ」

「カノンとの模擬戦を見学したけど、クロノ……相変わらず歯が立

たないね」

「まあ、それだけカノンが強すぎるんだけど……」

クロノの姿を見ながら、ユーノ、フェイト、アルフの順でそう言った。

「正直、本当に自分が強くなっているのか……よく分からないんだよな……」

カノンに一撃も入れられないクロノは、自分の成長具合がいま一つ分からなかった。

「心配するな……確かに『小宇宙』を扱えるようになったとはいえ、まだまだお前の力は青銅レベルに後一步というレベルだが……少なくともお前よりも上位ランクの魔導師を上回る実力は付いている。

既に聖闘士の破壊力は身につけているのだから……。まあ、スピードはまだまだだな……」

「エツ……でも、クロノ……相当速かったですよ……!？」

シュミレーションをフェイトたちと見学していたユーノが疑問に思った。

先程のシュミレーションで、クロノは一秒間に85発の蹴りをカノンに放っていた。それはユーノから見れば目にも留まらぬ速さだった……が、たった85発では聖闘士相手には通用しないのだ。

「確かにお前たちが、あの蹴りを見切るのは難しいだろうが……俺にはクロノの繰り出す蹴りの一つ一つがはつきりと見えていた……一秒間に85発程度では、真の聖闘士には歯が立たん……。最低でも100発は繰り出せないと一人前とは言えんな。まあそれには最低でも音速^{マッハ}を超えなくてはならんが……」

カノンの話を聞き、フェイトは以前聞いた話を思い出した。

聖闘士は最下級の青銅聖闘士でも音速^{マッハ}1。

白銀聖闘士で、音速^{マッハ}2から音速^{マッハ}5。

カノン達黄金聖闘士は、音速^{マッハ}どころか光速……つまり光の速さで動くことができるという。

恐らく管理局のスピードタイプの魔導師と比べても、トップレベル

の速さを誇るフェイトでも、音速が限界である。

その速度が、聖闘士にとつては最低条件……。

更に恐ろしいことに、聖闘士はそれほどのスピードを見切ることが可能なのだ。

いくらスピードタイプ of 魔導師でも、音速の速さを目視で見切るなどはつきり言って不可能。

魔法で身体強化を施して、動体視力を上げててもそこまでは見切れない。

戦闘において、魔導師が聖闘士の相手にならないのはそれが理由の一つである。

魔法の中には、聖闘士の破壊力に匹敵する物も、当然存在する。

なのは、『スターライト・ブレイカー』などは、いくら聖闘士といえども、まともに直撃すれば無事ではすまない……。無論、黄金聖衣を纏った黄金聖闘士は別だが……。

しかし、威力はともかくスピードは聖闘士からすれば、余りにも遅すぎるので躲す事も防ぐことも造作ないのだ。何よりも『スターライト・ブレイカー』には聖闘士を相手にするには致命的とも言える欠点がある。それは発動まで時間も掛かりすぎることである。

それを補う為にバインドなどで拘束しても、聖闘士の力ならばその拘束はあっさりと解くことなど造作もない。

以前、フェイトにどうしても頼まれ、模擬戦の相手を務めたことがあった。

フェイトとしては、クロノの修行が原因で最近カノンとの時間が少なくなっていたことが少し不満だったので、自分にも修行して欲しいと頼んできたのだ。

無論、聖闘士になりたいとは言っていない。

残念ながら、フェイトの資質は聖闘士向きではないからである。

しかし、聖闘士にはなれなくても、戦術面に関して教えて欲しいと言ってきたのだ。

聖闘士は一部の例外を除いて、無手で闘う。

しかし、だからこそ武具の扱いにも長けているのである。

何故なら、無手で武器を持った敵と対峙した時、その武器の特性を知っていなければ対処しえないからである。

故に、実戦では無手とはいえ、基本的な武具の扱いは完全にマスターしているのである。

フェイトのデバイスであるバルディッシュは『杖』であるとははいえ、デバイスモードは『戦斧』、サイズモードは『大鎌』、シーリングモードは『槍』の形を取っているので、武具としても使用が可能である。

そこで、一度模擬戦をすることになった。

無論、クロノとのシミュレーション同様、カノンは青銅聖闘士レベルまで手加減しているが……。

その模擬戦で、フェイトはカノンにバインドを仕掛けたが、カノンが『小宇宙』を燃やすとその力に耐え切れなかったのか、あっさりと霧散してしまったのだ。

つまり、聖闘士にとって『バインド』などに簡単に拘束などされないのである。

しかも『スターライト・ブレイカー』は射程距離が離れば離れるほど威力が弱くなってしまう。

聖闘士の攻撃が届かないところから攻撃したとしても、それほど距離が離れてしまえば、黄金聖衣でなくとも、たいしたダメージを与えられることが出来なくなってしまうのだ。

このことからわかる通り、なのはの最強魔法は聖闘士相手にはまったくの無力なのであった。

「やっぱり闘いに関しては、魔導師は聖闘士より弱いんだね……」

「だからといって、魔導師が聖闘士より劣るわけではないぞ」

フェイトの呟きに、カノンが答える。

「前にもいったが、次元を渡る事や、重力に逆らい空を自在に飛びまわることや、回復魔法などは並みの聖闘士には出来んからな……」

……」

魔法に良く似た力である『念動力』サイコキネシスを持つ者ならばともかく、そのような力を持たない青銅聖闘士と白銀聖闘士などには不可能である。黄金聖闘士は力の大小に差はあるが、ほぼ全員『念動力』を持っているが、白銀聖闘士や青銅聖闘士の中では、その力を持っている者は数少ないのだ。

黄金聖闘士でも、自らの身体を飛翔させるほどの『念動力』の持ち主など、牡羊座アリエスのムウ、乙女座バルゴのシャカ、双子座シエミーのサガ（カノン）、天秤座ライブラの童虎くらいである。

後の八名には其処までの『念動力』はないであろう。

「戦闘が強い弱いかだけで、どちらが優れているか……などと考えるのは愚かなことだ……。無論、魔法が使えるか使えないかで差別することも愚かだがな……」

最後のカノンの皮肉に、クロノとユーノは苦い顔になった。

カノン達聖闘士の存在を知るまでは、クロノもユーノも『魔法』こそが最も優れた力だと信じていたし、『魔導師』が魔法の使えない『一般人』に敗北するなど、余程のことがない限り有り得ないと考えていたのだ。

「本局に暫く居て気付いたが、魔導師という連中は全員とは言わんが、自分達の『魔法』が使えるか使えないかで、相手の価値を決める輩が多いようだな……」

カノンが本局で目にした事柄のうち、魔法が使えず、デスクワークが主な仕事の管理局員に、BかC位のランクの魔導師が横柄な態度で接していたのを何度か見かけていた。

そのような輩に対し、警告というか、説教をしている高ランクの魔導師の姿も見たが、しかし、その魔導師も僅かながらその魔法資質の無い局員に対する優越感などが薄らと感じ取れていたのだ。

つまり、上から目線なのだ。

彼らの驕りを見ていると、かつての兄と自分を思い出し不快になる。サガは、黄金聖闘士の中でも『最強』と言われるほどの実力があつた。

それゆえに女神アテナに代わり、地上を支配するに『神』となるに相応しい存在であると、思い上がっていた。

力こそ正義。

最も優れた力を持つ自分こそが、地上を支配するに相応しい……とカノンも同様である。

『神』である海皇ポセイドンを誑かし、上手く立ち回って『地上』と『海界』を支配しようという野望を抱いた。

それはサガ同様、自分の力に驕っていたからである。

そして、サガもカノンも、その野望は果たされなかった。

女神アテナと、真の聖闘士たる星矢達の活躍により、その野望は打ち砕かれたのだ。

2人して『神』になりそこなった哀れで愚かな兄弟。

そんな自身の過去を思い、カノンは危惧しているのだ。

管理局も、自分達と同じ過ちを犯すのではないか……つと……。

世界の管理者を気取り、いつの間にか『神』をも恐れぬ野望を抱くのではないか……。

もし、そうなったとき、フェイトやクロノたちが苦しむことになるかもしれない。

カノンは、自分が保護している少女と、弟子である少年の為にも、自分の危惧が気のせいであることを願っていた。

月村すずかは親友のアリサ・バニングスの家のリムジンで行きつけである風芽丘図書館に送ってもらった。

アリサとなのはと別れ、図書館に入り、借りたい本を探していると本棚の本と本の隙間から、車椅子の少女が必死に手を伸ばしていた。車椅子に座りながらなので、中々届かないようである。

見るに見かねたすずかは、少女の下に駆けつけ、彼女の取ろうとしていた本を取り差し出した。

「これ……ですか？」
「はい。有難うございます」

「すずかと車椅子の少女……八神はやては直ぐに意気投合した。同じ年であること、時々この図書館で見かけていたことなどを語り合っていた。

「……はやて。待たせたか？」

「あつ、リア兄！」

「すまんな。トイレが清掃中だったから、少し時間が掛かってしまった」

八神家の居候……アイオリアであった。

ちなみに一階のトイレが清掃中でも、光速の動きを持ち、さらにレポートーションが使えるアイオリアには大した距離ではないが、いくらなんでも図書館でそんな動きが出来るはずがないので、ゆっくり歩いて行ったのだ（当たり前だ！）。

アイオリアはすずかの方に視線を向けた。

「はやての話相手になってくれたのか？ありがとうございます」

「あつ、私、月村すずかと言います」

「すずかちゃん……。八神はやてと言います。平仮名で『はやて』

……変な名前やる？」

「そんなことないよ！綺麗な名前だと思う……」

「俺の名前はアイオリア……。今ははやての家で厄介になっている」

「私の優しいお兄さんや！」

自慢の兄を紹介するはやての顔は、とても輝いていた。

談笑しながら廊下を歩いていると、金髪の女性……シャマルの姿が見え、はやてとアイオリアはすずかに別れを告げた。

シヤマルと合流し、図書館の駐車場で待っていたシグナムと合流する。

「晩御飯……シグナムとシヤマルは何食べたい？」

「ああ、そうですね……。悩みます」

「リア兄は？」

「……シヤマルの味付けじゃなければ何でもいいぞ！」

「酷い、アイオリアさん！」

アイオリアの意地の悪い返答に、シヤマルは涙目で抗議する。

シヤマルは料理が出来ないわけではないが……たまたま味付けに失敗する。

食べられないわけではないが、微妙な味付けで何とも言えなくなるのだ……。

「そう言えば、ヴィータは今日も何処かにお出かけ？」

「あ……え〜っと……そうですね……」

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラが付いていますので、あまり心配は要らないですよ」

はやての言葉に一瞬動揺するシヤマルだったが、シグナムが冷静に返答する。

そんな2人に、アイオリアは何か言いたそうな視線を向けるが、直ぐに逸らした。

ここ最近、彼女達が自分とはやてに何か隠し事をしていることに気付いているし、大体想像が付いているアイオリアであるが、あえて訊かない事になっているのだ。

シグナムもシヤマルも、アイオリアが自分達に疑いを向けていることに気付いているが、何も言って来ないアイオリアに感謝していた。

裁判が終わり、無罪が確定したフェイトはようやく大手を振ってなのはと会う事が出来るようになった。

そのことに喜びを覚えるフェイト達だったが、緊急事態が発生した。そのなのはが何者かに襲われているという報告が入り、フェイトとユーノの顔が蒼褪めた。

何者かが張った結界に気付いたなのはは、その何者かのいきなりの襲撃を受けた。

理由を問うが、襲撃者……ヴィータは何も聞かず波状攻撃を繰り返してきた。

「話を……聞いてつてはあ~~~~~!」

《Divine・Buster!》

やむを得ず反撃したなのはの『ディバイン・バスター』をヴィータは何とか避けるが、帽子を飛ばされてしまう。

大好きなはやてがデザインした帽子を破られ、怒りにかられたヴィータは目の色を変えた。

「アイゼン！カートリッジ・ロード!!」

ヴィータの持つアームドデバイス『グラーファイゼン』は長柄のハンマーの形をした『ハンマーフォルム』から『ラケーテンフォルム』に変化する

「ラケーテン・ハンマー!」

ヴィータの『ラケーテン・ハンマー』はレイジングハートを破損させ、なのはをビルの窓に叩きつけ、さらに追撃をかけた。

《Protection!》

なのはを護るために、レイジングハートが防御するがそれも破られ、更には『バリアシヤケット防護服』まで破られてしまった。

座り込んだなのはは、レイジングハートをヴィータに向けるが、もはや抵抗できなかつた。

ヴィータが無表情でグラーファイゼンをなのはに振り下ろすが、その間に入りそれを遮る者が現れた。

「仲間か!?!」

「……友達だ！」
なのはを庇うように、『サイズフォーム』のバルディッシュを構えるフェイトと、なのはに寄りそうユーノ。そして、3人から少しはなれた所に、黄金聖衣を纏ったカノンが腕を組みながらその場に現れた。

第十八話 新たなる闘いの始まり（後書き）

近接戦闘に長けたベルカの騎士に苦戦するフェイト。

それを見たカノンが戦いに介入する。

圧倒的な力の前に、騎士達は恐怖する。

時空を越えた黄金の騎士

「聖騎士対ベルカの騎士」

君は小宇宙を感じたことがあるか！？

第十九話 聖騎士対ベルカの騎士

なのはの危機に駆けつけたフェイトは、襲撃者の前に立ちはだかった。

時空管理局の囑託魔導師として、襲撃者……『鉄槌の騎士』ヴィータに武装解除と投降を呼びかけるが当然、拒否され戦闘に入った。フェイトとヴィータは攻防を繰り返していたが、そこにフェイトの援護をするアルフが加わり、彼女の『バインド』で見事ヴィータの拘束に成功する。

「終わりだね……名前と出身世界……目的を教えてくださいよ！」
フェイトがヴィータに『バルディッシュ』を突きつけながら問う。
しかしその時、突然、フェイトに斬りかかる一人の女性が現れた。
守護騎士を束ねる『烈火の将』シグナムである。

同時にアルフにも、『盾の守護獣』ザフィーラが襲い掛かってきた。
「『レヴァンティン』、カートリッジロード！」
シグナムのデバイスから薬莖が排出され、刀身が炎を纏う。

「『紫電一閃』！」
炎の斬撃がフェイトに襲い掛かる。
フェイトは『バルディッシュ』で受け止めるが、真つ二つに断ち切られてしまう。

シグナムは続けて二撃目を放つが、バルディッシュが『ディフェンサー』を展開し防御する……が吹き飛ばされ、ビルに叩きつけられる。

「フェイト……！」
アルフがフェイトの下に駆けつけようとするが、ザフィーラがそれを阻む。

「………新手か！………実力は、あの女の方がフェイトより少し上のよ

うだな……」

フェイトとヴィータと戦闘を傍観していたカノンだったが、突如現れたシグナムの動きを見て、表情が変わった。

「カノン！」

「……リニスか……」

アースラに残していたリニスが、此方に来たようであった。

「アースラでこの周囲に展開されている結界の術式を調べているんですが、手間取っているようです」

「何！？どういうことだ……」

「この結界……私達を使う『ミッドチルダ式』の魔法ではなく、別系統の術式を用いた結界魔法のようです……」

「心当たりはあるのか？」

「先程、フェイトに攻撃を仕掛けたあの女性の持つデバイス……恐らくは『アームドデバイス』。あれを使う者は……恐らくは『ベルカ式』でしょう」

リニスは使い魔とはいえ、優秀な『デバイスマスター』である。

デバイスを見て、それがどの系統のデバイスなのかは、一目で分かる。

ベルカ式とは、管理局が主に使うミッドチルダ式とは別系統の魔法であり、遠距離戦や複数戦はある程度切り捨て（完全には切り捨てていない）、近接戦闘に特化しており、かつてはミッド式と次元世界を二分するほど勢力を誇っていた系統である。

ベルカ式を使用する魔導師の中で、特に優れた術者は『騎士』と呼ばれている。

「不味いです。アルフがああ男に足止めを受けていますので、フェイトはあの騎士と一対一で戦わなくてはなりません」

「その様だな……しかし、確かにあの女はフェイトよりも強いが……それほど実力差はあるわけではないと俺は見るが……？」

「ええ。フェイトを育てた私から見ても、あの二人は経験の差はかなりありますが、実力差はそれほどありません……。ですが……デ

バイスにも差がありすぎるのです」

リニスは唇を噛み締めながら、そう答えた。

「あの『バルディッシュ』はお前が作ったデバイスだったな……」
先程も述べたがリニスは『デバイスマスター』でもある。

特にあの『バルディッシュ』は彼女の自信作である。故にフェイトの力になると信じ、彼女に与えたのだ。

「しかし、相手がベルカ式の『アームドデバイス』では分が悪いのです……」

ベルカ式のデバイスには『カートリッジシステム』が組み込まれているからである。

圧縮魔力を込めたカートリッジをロードすることで、瞬時に爆発的な魔力を得ることの出来るシステムである。

分かりやすく言えば、魔力のドーピングみたいなものである。

制御が難しく、身体に掛かる負担も大きく、使いこなせる術者が限られてしまい、それがベルカ式魔法が衰退した原因の一つである。

ミッド式の『インテリジェンスデバイス』は繊細な作りなので、このカートリッジシステムとは相性が悪く、研究はされたものの、デバイスの破損や術者に掛かる負担が相次いだ為、採用されることはなかった。

リニスもカートリッジシステムのことは知っていたが、フェイトと『バルディッシュ』に掛かる負担を考え、搭載しなかったのだ。

「悔しいですが、カートリッジシステムを搭載した『アームドデバイス』が相手では、『バルディッシュ』では耐えられません……」
自らの自信作では、相手に勝てないことを自覚しているリニスはとても悔しそうであった。

「実力が近いなら、経験と武器の差は勝敗に大きく関わるな……」
フェイトとシグナムの闘いを見守っていたカノンだったが、明らかにフェイトが押されていた。

シグナムの『レヴァンティン』の斬撃に、フェイトの『バルディッシュ』が破損させられていた。あのままではなのは『レイジング

ハート』と同じく大破してしまっただろう。

アルフとザフィーラの闘いは双方互角といったところであり、フェイトの援護には向かえない状況である。

そして、まだヴィータがいる。彼女が加わればフェイトの勝ち目は殆どない……。

「ユーノ……なのは傍から離れるな……。リニスはフェイトとアルフを退がらせユーノと共になのはを護れ！ 奴らとは俺が戦おう」
カノンは2人にそう言い残すと、簡易デバイスを展開させ、飛び出した。

アルフと攻防を続けていたザフィーラは突然、側面から蹴りを喰らい吹き飛ばされた。

「カノン!?」
突如、乱入してきたカノンに驚いたアルフだったが、リニスからの念話を受け、なのはの下に退がった。

フェイトを圧倒していたシグナムだったが、自分の方に蹴り飛ばされたザフィーラと衝突してしまい、体勢を崩してしまった。

「ザフィーラ!?」
「すまん……。不意を突かれた」

体勢を整え、フェイトの方に視線を向けたシグナムとザフィーラの前に、フェイトを庇うようにして立つカノンの姿が見えた。

「あの男か？」

「ああ。突然、間合いに入り込まれ蹴り飛ばされてしまった……」
ヴィータもシグナムたちの傍に寄ってきた。

「アイツ……かなりの魔力を持っているぞ！」

「ああ、あの男の魔力を蒐集できれば、『闇の書の管制人格』の起

動に必要な4百頁に一気に近づくことが出来るかも知れん……」

「先程、ヴィータが倒した少女と、今、シグナムが戦っていた管理局の囑託魔導師、そしてこの黄金の鎧の男の魔力で『闇の書』が完成させられる」

シグナム達は、降って湧いたチャンスに、昂揚していた。

「フェイト。お前はなのは下に行つて、彼女を護れ！」

「でも……私はまだ戦える！」

「フェイト！」

今まで防戦一方だったので、悔しそうな顔で反論するフェイトにカノンが一喝し、フェイトはビクツとなる。

「お前も理解している筈だ。ただでさえ経験も武器も実力も向こうの方が勝っているのに、お前は傷ついたなのはの事が気になり、実力を出し切れていない……。そんな状態では万に一つも勝ち目がない！」

カノンの指摘に、フェイトは言葉を詰まらせながら、なのはがいる方角に視線を向ける。。

「今、この場合は、お前が命を賭けるべき場所ではない……。悔しいのは分かるが、ここは退がれ！いいな！！」

フェイトは迎えに来たりニスと共に、なのはの下に向かった。

「さて、誰から来る？無論、3人まとめて掛かってきても構わんが

……いや、むしろその方が手間が省けて助かる……」

カノンの言葉に、ヴィータが激怒した。

「てめえ、アタシ達3人と同時に戦つて勝てると思つてんのか!？」

「無論！」

即答したカノンに、ヴィータの怒りは更に増した。

「確かに魔力量は凄まじいが、それだけでベルカの騎士に勝てると思われているとは……舐められたものだな！」

シグナムも、表には出していないが内心では怒りを覚えていた。

「勘違いするな……。俺は戦闘に関しては飛行魔法しか魔法は使わ
ん！」

「何だと！」

「魔法を使わずに我らを倒せると思っっているとは……。本当に舐めて
いるな！」

もはや、ヴィータは暴発寸前であり、シグナムもザフィーラも怒り
が表に出てきていた。

「ベルカの騎士を愚弄したことを後悔しやがれ〜〜〜」『シュワル
ベフリーゲン』！

四発の鉄球を放り投げ、空中で静止し、開店しながら紅く発光し、
『グラーファイゼン』のハンマーヘッドで打ち出した。

先程、なのはやフェイトにも使用した魔法である。

四発の鉄球が、滑らかにホーミングしながらも高スピードでカノン
に向かってくる。

しかしカノンは、無造作に腕を振るい、手の甲で四発全て粉碎して
しまった。

「な……。何！？」

バリアを張るわけでもなく、魔法で打ち落とすわけでもなく、無造
作にあっさりと粉碎されてしまったことにヴィータは驚愕した。

「……。この魔法は先程見た。それ以前にこの程度、初見で見切るこ
とすら容易い……」

ベルカ式にしては珍しい中距離誘導型射撃魔法であり、驚異的な誘
導操作を誇る魔法であるが、黄金聖闘士の目からすれば簡単に見切
れてしまうのだ。

しかも、一度見ている。

聖闘士に一度見た技は通用しない……。

「今度は此方から行くぞ！」

カノンの拳が光ったと同時に、凄まじい衝撃がヴィータを襲った。

「グアッ！」

カノンから放たれた閃光のような拳がヴィータの防護服……いや、

バリアジャケット

騎士甲冑を易々と貫いた。

「ヴィータ!？」

「バ……バカな……。攻撃が……まったく見えなかった!？」

「しかも、あっさりヴィータの甲冑を貫いただと!？」

シグナムとザフィーラは驚愕した。

先程のカノンの光速の一撃……見切ることどころかいつ繰り出されたかさえ分からなかった。

光ったと思ったら、一瞬でヴィータの肩口を貫いたのだ……。

「俺がお前らを舐めている……とほざいたが……お前たちの方こそ舐めている……。魔法無しでは自分達に勝つことなど出来ないと考えていること自体……増長極まりない……。その愚かしい先入観を粉砕してやるっ……」

カノンから発せられた眼光を受け、脅威を感じたザフィーラが障壁を展開し、2人の前に庇うように立ちふさがる。

しかし、再びカノンの拳が光り、先程ヴィータに向けて放った一撃ではなく、無数の光速拳が放たれ、あっさりと障壁を貫け、ザフィーラの全身に浴びせられた。

「グワアアアアアアアアアア!!！」

『盾の守護獣』という二つ名の通り、ザフィーラの防御力は守護騎士の中でトップクラスである。

しかし、破壊の究極を身につけている聖闘士の前ではその『盾』も無意味であった。

それでも、後ろのシグナムたちに攻撃を徹さなかったことは賞賛に値する。

「ザフィーラ!!！」

「……な……何なんだよ……コイツ……?」

シグナムとヴィータは、戦慄していた。

先程のカノンの台詞……「魔法無しでは自分達に勝つことなど出来ないと考えていること自体、増長極まりない」。まさしくその通りであったことを実感したのだ。

ヴィータへの一撃と、ザファイラへの攻撃。

そのどちらにも魔力反応がなかったのだ。

カノンは、本当に飛行魔法以外魔法を使っていないのだ。

自分達が信じていた常識が音を立てて崩れていくのを感じていた。

特に、ヴィータは目の前の規格外の存在に恐怖を感じ始めていた。

「……………そんなバカなことがあつて堪るか……………!!」

『闇の書』の主を護る守護騎士……………『鉄槌の騎士』である自分が敵に恐怖を感じるなど……………ヴィータは認めることが出来なかった。

「よせ！ヴィータ！！」

シグナムの静止も聞かず、ヴィータはカノンに踊りかかった。

カートリッジをロードし、『グラーファイゼン』がロケット推進による大威力突撃攻撃を行う強襲形態『ラケーテンフォルム』に変形する。

「くらえ……………!! 『ラケーテンハンマー』!!」

なのはの『ラウンドシールド』を貫通させる威力を誇る『ラケーテンハンマー』を、渾身の力を込めて繰り出すが、カノンの前では無力であった。

『グラーファイゼン』のハンマーヘッドがカノンの指拳で粉々に砕かれてしまったからである。

「……………そんな……………!!?」

『ラケーテンハンマー』は『ラケーテンフォルム』専用の魔法であり、彼女の使用する魔法の中では上位の攻撃魔法である。

絶対の自信があつた魔法をあつさりとしかも指一本で破られ、ヴィータは呆然自失となった。

その隙を逃すカノンではないので、呆然とするヴィータに一撃を加え、気絶させた。

離れた場所で、シグナムたちを見守っていたシャマルは焦りを感じ

ていた。

はやてとアイオリアに、もう直ぐ帰ると連絡した後、状況が一変したのだ。

かなり高い魔力を持つ『黄金の鎧の男』と、この男には及ばないもののそれでも高い魔力を持つ2人の少女。

上手くいけば、今回で蒐集が終わり、主であるはやてに迫る問題が解決できるだろう。

はやてとアイオリアと共に、これからも楽しい生活が送れるようになる筈であった。

しかし、それが如何に甘い考えであったかを痛感させられた。

ザフィーラに続き、ヴィータさえもあっさりとな敗北してしまったのだ。

如何に自分達の中で一番強いシグナムとはいえ、あの『黄金の鎧の男』が相手では時間の問題である。

あの男からは、この場にいる誰よりも高い魔力を感知できるのに、飛行魔法以外、一切の魔法を使わずにシグナムたちを圧倒しているのだ。

シヤマルから見れば、悪夢以外の何者でもなかった。

『黄金の鎧の男』と『金髪の少女』、そして最初にヴィータが狙った『バリアジャケット白い防護服の少女』。

この3人の魔力を蒐集すれば、一気に『闇の書』の頁が埋まるといふのに……。

あの男から蒐集するのは絶望的である。

切り札を使用しても、あの男のリンカーコアを捉えることは不可能だろう。

ならば、せめて『あの娘』からだけでも……。

シヤマルは、金髪の少女達に囲まれている白い少女に目標を定めた。

「さて、どうする……。残りはお前一人になったが……」

「……………」

シグナム自身、悟っていた。

どう足掻こうが目の前の男には歯が立たないことを……。
古代ベルカ時代に名を馳せた『王』達の中にも、これほどの強さを持つ者など存在しない。

このまま闘い続ければ、間違いなくこの場に倒れているのは自分である。

非殺傷設定から殺傷設定に切り替えて戦っても、結果は同じだろう。
今、シグナムの心には二つの感情が生まれていた。

1つは、自分の全てを出しきっても、勝てないほどの強者が現れたことに対する喜びである。

後先気にせず、全力でぶつかって行きたいという1人の『戦闘者』としての想い。

もう1つは、ここで自分まで敗れてしまえば、『闇の書』を完成させることが叶わなくなってしまうことに対する『将』としての絶望である。

ベルカの騎士に撤退はない。

しかし、ここで敗れ管理局に捕らえられてしまえば……。愛しい主を救うことが出来なくなる。

自身の心にある相反する二つの想いが、シグナムを迷わせていた。

「なのはあああああああああ……！」

その時、先程まで戦っていた金髪の少女の絶叫がシグナムの耳に届いた。

ユーノが張った『回復と防御の結界』の中にいるのはを護るように、前後左右に囲んでいるフェイトたちだったが、改めてカノンの強さを見せ付けられていた。

「……………これが……………カノンの力……」

特にリニスは、今回初めて自身の新しい主であるカノンの戦いを目にしたので、その驚愕は計り知れなかった。

「本当に聖闘士の力って、戦闘に関しては魔導師を圧倒するな……………」

「そして、カノンはSSランクの魔力量を持つから……………」

「魔導師としても、凄く強くなるよね……………」

ユーノ、フェイト、アルフも顔を引き攣らせながら、話していた。

しかし、カノンの戦いを見学しながらも、周囲の注意を怠ってはいなかった。

魔導師が、普通の聖闘士に勝るものの一つ。二つ以上のことを同時に思考、進行させるマルチタスクによって、話しながらも周囲を警戒していたのだ。

だが、攻撃は彼女達の思いもよらない方法で行われたのだ。

突然、なのはの胸部から腕が生えてきたのだ。

しかも、その手にはなのはの魔力の元である『リンカーコア』が掴まれていた。

「なのはああああああああああ！！！！」

余りのことに、フェイトの絶叫が響き渡った。

フェイトの絶叫を聞き、カノンもなのはに起こったことを把握した。

【カノン！……………どうやら敵はなのはちゃんの魔力を奪うのが目的だったようです】

リニスからの念話が届き、カノンは意識を飛ばし、なのはの胸から生えている腕の持ち主を探し始めた。

かつて十二宮の戦いのとき、教皇に扮したサガが、瞬を異次元に送り込もうとしたときに邪魔をした一輝の居場所を教皇の間から意識を飛ばし、探したときのように……………蟹座キャンサーのデスマスクが黄泉比良坂から意識を飛ばし、五老峰から紫龍の無事を祈る春麗の居場所を探

したときのように……。

それらに比べればかなり近い位置にいる、腕の持ち主……シヤマルの居場所は直ぐに見つかった。

「失せる~~~~~！」

カノンは小宇宙で作り出したエネルギー波をシヤマルに向けて撃ち出した。

ハーデスの尖兵を装い、乗り込んできたサガが双児宮からカノンの居る教皇の間に攻撃を仕掛けたときのように、強力な力がシヤマルに襲い掛かった。

「キヤアアアアア！」

直撃こそしなかったものの、余波により吹っ飛ばされたシヤマルは、なのはのリンカーコアの蒐集を中断させられた。

しかし、それでもなのはの半分以上の魔力を蒐集することが出来た。

【シヤマル！大丈夫か！？】

シグナムからの念話が届く。

【なんとか直撃は避けられたから……でも、これ以上は不味いわ。

さっきのあの男の一撃で境界が破壊されてしまったわ。ヴィータち

やんとザフィーラを連れて撤退しましょう！】

【それが、懸命だな】

シヤマルは転送魔法の準備を始めた。

「悪いがここは退かせてもらう……」

「……好きにしろ」

カノンにシグナムを追うつつもりはないようであった。

「お前なら、我らを逃がすことなく倒すことなど造作もないはずだが……」

シグナムは疑問に思ったことを口にした。

「俺は管理局員ではない。……それに今は貴様らより、なのはの治

療が先決だ……。逃げるならさっさと逃げろ！」

カノンの返答を聞き、自分達がこの男の眼中にないことを悟る。自分達を軽く見られているようで少し悔しいが、このままでは勝ち目がまったく無いのは理解できている。

逃がしてもらえらなら、逃げたほうがいい。

シグナムはそう冷静に判断を下し、その場を後にしようとする。

「テストロツサには名乗ったが、私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将、シグナム……。我らを凌駕する強者である貴公の名を教えてください……」

「……女神の聖闘士、双子座の黄金聖闘士、カノン……」

「……セイント？……そのような存在は聞いたこともないが……貴公の強さは敬意を超え、畏怖を覚えるほどだ……。その名は私の記憶に永久に留めておこう……」

シグナムは、気絶しているヴィータたちの下に行き、シャマルの転送魔法でその場を後にした。

【カノン……何故、彼女達を逃がすのですか？】

【管理局にそこまでの義理はない……。それに、俺には到底及ばないとはいえ、フェイトたちにとって、あいつらとの戦いはいい経験になるだろう……。恐らく流れからいって、この事件の解決は、アースラのスタッフの仕事になりそうだからな……】

リニスにそう答えたカノンは、魔力を奪われたなのはの下に向かった。

第十九話 聖闘士対ベルカの騎士（後書き）

『闇の書』とハラオウン家の因縁。

フェイトの保護監察官であるギル・グレアムとの出会い。

グレアムは、カノンを管理局に勧誘するが……。

時空を越えた黄金の闘士

「本局にて」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十話 本局にて

傷ついたなのはは、至急、本局に移送され、管理局の医療施設に収容された。

シグナムとの戦いで傷ついたフェイトもまた検査を受けている。

なのはが襲われた事件は、現在、管理局で問題となっていた『魔導師襲撃事件』と同じ流れであった。

リンデイとエイミィは、この事件が自分達の管轄になりそうで、休暇は延期になることを予想していた。

そして、検査を受けているフェイトに付き合っていたカノンとクロノが、今回の事件のことについて話していた。

「カノンさんが、奴らの結界を破壊したとき、アースラのモニターで奴らを確認しました。そして、なのはの魔力を奪った女の持っていたこの本……」

クロノは端末を操作して、金髪の騎士　シャマルが抱えている本を映し出した。

「第一級搜索指定遺失物……ロストログア『闇の書』……僕と母さんにとって……悪い因縁があるロストログアです」

「因縁？」

「……はい。この事はなのはとフェイトには今は内緒にしたいと思います……」

クロノは語った。

父、クライド・ハラウンが11年前に起こった『闇の書』事件で命を落としていることを……。

「フム。お前と奴らにそんな因縁があったとはな……。ならば、奴らを捕らえた方がよかつたか……？」

カノンは、自身が管理局員ではないので、フェイトたちに経験を積ませる相手として、シグナムたちを見逃したのだが、自らの弟子であるクロノの父の敵だと知り、少し悪い気がしてきた。

「いえ、カノンさんは局員ではありませんし、奴らを捕らえてくれと依頼したわけじゃありませんので……」

フェイトは囑託魔導師だが、カノンは管理局に何の責任もないのである。

あくまでクロノ達がカノンに頼んだのは、なのはを助けることであり、犯人の逮捕ではない。

「それに、これは僕たち管理局員の仕事です。いつもカノンさんに頼っているようでは、僕らの存在意義がありませんから……」
クロノはカノンの凄さを知っている。

だからこそ彼に師事しているのだから……。

しかし、あまりカノンの力に頼ることをよしとはしていなかった。何故なら、カノンは管理局そのものに対しては余りいい感情を持っていないからである。

彼が今のところ自分達に協力的なのは、フェイトの為と、クロノ達アースラのクルーたちとは親しくなっているからに過ぎない。

「ですが……一つだけ聞きたいんです。確かに奴らを捕まえてくれとは頼みませんでしたし、フェイトたちに経験を積ませる為にというのも分かりますが……『魔導師襲撃事件』の犯人たちで、カノンさんもそれは予測が付いていた筈。なのにそれだけの理由で見逃すというのに、少し疑問を覚えるのですが……」

「……フツ、お前も知っての通り、俺は管理局自体は気に入らん。それに、次元世界を管理するなどというでかい事を口にしてる組織なんだから、どんな事件でも自分達で何とかしろ！と、言いたくてな……それに……戦ってみて分かったが、あの『ヴォルケンリッター』とかいう連中……俺たち聖闘士が戦うべき邪悪とは、とても思えなかったのにな……」

彼女達が、聖闘士が戦うべき相手 世界を滅ぼそうする邪悪

とは、とても思えなかったのだ。

カノンは、かつて自身が邪悪の化身であったが為、人の善悪くらい理解できるのである。

一部の魔力を持った者のみを襲うだけで、ボセイドン海皇や冥王の様に、人間
全てを粛清しようなど考えているわけではない。

ならば、自分達聖闘士が出る幕はない。

カノンはその考えていた。

「カノン！」

クロノと話していたカノンに声を掛けてきたのはムウであった。

「ムウか？」

「なのはのことは聞きました。容態はどうなのですか？」

「外傷はそれほど大したことはないそうだ……。ただ魔力の源である
リンカーコアとやらがかなり消耗していて、しばらく魔法は使え
んそうだ……」

「……。そうですか……。私がサンクチュアリ聖域に行くのをもう少し遅らせてい
れば……」

ムウがそう考えるのも無理はなかった。

ムウがなのはの下から離れ、聖域に行ったのは数日前である。

あと数日、行くのを遅らせていけば……。そう考えてしまう。

「ムウ……。自分があの時、ああしていれば……。』と考えるのは自
己過信というものだ。過去の失敗を悔いるのは当然として、度が過
ぎればプレシアの様になってしまう……」

プレシアがあのようになってしまうのも、後悔の余り、己を責め
すぎたのも原因のひとつである。

『ヒュードラ』の実験を力ずくでも止めていけば、いや、そもそも
この仕事を請け負わなければ、いやいや、そもそもこの会社に入ら
なければ……。

考えがどんどんエスカレートしていき、あの様になってしまった。

「流石に、お前がああなるとは思えんが……。』とりあえず、なのは
の命は無事だったのだ。それで良しとしたほうがいい……」

「……。そうですね……。まさか、貴方に諭されるとは思いませんでしたし
たよ……」

思慮深く、よく星矢達やアイオリア、ミロなど血気盛んな者をを諭

していたのはムウであり、そんな自分が、まさか他人に諭されるとは思いもよらなかつたようで苦笑するムウであった。話をしている中、フェイトが診察室から出て来た。

フェイトの傷も大したことが無く、フェイトはクロノと共になのはの見舞いに行くことにした。

「カノンは行かないの？」

「俺は後で行く。少しムウと話があるのでな。久しぶりなんだから、ゆっくりとなのはと話をするといい……」

カノンにそう言われ、フェイトはクロノ共になのはの病室に向かった。

「それで、話というのは何だ……ムウ？」

「ええ、今回、聖域を再び調査したところ、イージスの手記が見つかりました」

イージスとは、異世界に飛ばされた聖域の一面を死してなおも護ろうとした楯座スキュータムシルバークロノの白銀聖闘士である。

その手記によれば、イージスと共にこの地に飛ばされたのは2人の青銅聖闘士だけではなかつた。

あと一人、アテナに使いし巫女が一人、巻き込まれていた。しかし、その巫女は聖闘士たちほど強くはなかつた。

アテナの加護が届かない異世界での生活に耐え切れなくなった彼女は、その地を逃げ出したのだ。

「そうか……しかし、それはやむを得ないのではないか？所詮、戦うことが出来ず、アテナに祈ることしか出来ない巫女……。いくら聖闘士が3人いても、自分達が今まで住んでいた世界と異なる世界に飛ばされれば、自暴自棄になって、逃げたしたくもなる」

「はい。私も同感です。ですが……彼女はこの聖域に納められていた『神具』を持って逃げたらしいのです……」

「ッ……何だと!？」

神の力を宿した『神具』。

それをアテナの結界に護られた聖域から出したということは……『神具』が世に出てしまったことを意味する。

「持ち出された『神具』は？」

「……テイター十二神の石柱、『記憶を司る女神』ムネモシユネの力が宿りし『神具』とのことです。死した人間の記憶などを再生することの出来るモノだそうですが……」

「再生するだけか？」

「はい、ですが記憶とは知識だけではありません。例えばその人間の技能なども記憶の一つに入りますので、そう言うモノも再生することが出来るらしいのですが……」

「ただ、人の記憶を再生するだけでは世界そのものを破滅させることには繋がらないな……」

「そうですね……しかも、その記憶を再生するには、血液や骨、髪の毛といった本人の一部が必要ですから……危険なロストロギアの作り方を知っている者の身体の一部など、なかなか手に入らないでしょうし、それにアレは『小宇宙』の力がないと発動できない類のモノですので、万人に使えるモノではありません……」

「だが、一応問題ではあるな……フックの『主』とやらなら、使うことができるからな……。とりあえず、クロノ辺りに調べてもらうことにしよう……。もしかしたらロストロギア扱いを受けて、管理局に回収されているかもしれんからな……」

それほど危険な『神具』ではないようなので、特に問題視してはいなかったが、後年、この『神具』がカノン達の災いになるとは、この時は、思いも寄らなかった。

なのはとフェイトは、傷ついた相棒の姿に、心を痛めていた。

敵との戦いでレイジングハートとバルディッシュは、ユーノとリスの2人が面倒を見ていた。

「ここにいたのか……」

そこに話を終えたカノンとムウが入ってきた。

「カノンさん……ムウさん」

「体の具合はどうですか、なのは？」

「はい。大丈夫です。心配かけてすみません……ムウさん……」

「いえ、こちらこそ肝心な時に居なくて、申し訳ありません」

「……カノンさんも……助けてくれてありがとうございます……」

「お前を助けたのはフェイトだ……俺は後から手を出したに過ぎない。だから、気にするな……」

そう答えると、カノンは傷ついたデバイスに視線を向けた。

「リス……どうなんだ、こいつらは？」

「今は自動修復をかけています。基礎構造の修復が終わり次第、再起動して部品交換が必要でしょう……」

「そうか……」

なのはとフェイトは、頑張ってくれた相棒に労りの声を掛けていた。

「フェイト……そろそろ面接の時間だ……。なのはとカノンさんも来ていただけますか？」

クロノの要請に、怪訝な顔になるなのはとカノンであった。

「では私はユーノやリス、アルフと一緒にいますので……」

ムウはユーノたちと残り、カノン、フェイト、なのはの3人はクロノと共にその場を後にした。

「あつ、ユーノ君にアルフ、そしてリスさん……」

休憩室の自販機でジュースを買い、くつろいでいた3人にエイミーが声を掛けてきた。

「とりあえず、リスさんの注文どおり、レイジングハートとバル

ドイツシユの修理の為の部品を発注したけど……本当にアレでいいの？」

「はい……バルドイツシユはもちろん、恐らくレイジングハートも同様の要請をするでしょうから……」

リニスが注文した部品に、エイミイは不安そうな顔になる。

「でも、インテリジェンス・デバイスにアレは……」

「しかし、あの子たちが、敵に対抗できるようにするには必要な措置です」

リニスとエイミイの会話を理解できないアルフは、怪訝な表情をしており、ユーノはエイミイの持ってきた部品の発注書に目を通し、驚愕した。

「リニスさん：これって!？」

リニスの考えを悟ったユーノも、エイミイ同様不安そうな顔になった。

クロノに案内され、赴いたオフィスに一人の紳士が待っていた。

彼は、時空管理局顧問官ギル・グレアム提督。

クロノの指導教官であり、歴戦の勇士。

一番、出世していたときで艦隊指揮官、後に執務官長を務めていた人物であり、管理局内において『英雄』と呼ばれている。

今回、フェイトの保護監察官を務めることになり、フェイトたちと顔合わせの面接を行うことになったのだ。

ちなみに彼は、なのはと同じ世界 第97管理外世界出身の英国人であり、魔法との出会い方も、なのはによく似ている。

なのはは、ユーノを助けて魔法と出会ったが、グレアムは管理局員を助けたのが、魔法との出会いである。

そして、時空管理局に入局して、現在の地位まで上り詰めたのだ。グレアムの話だと、第97管理外世界の人間は、殆ど魔力を持って

いないが、極稀にグレアムやなのは様な、高ランクの魔力保持者が生まれるらしいのだ。

そして、フェイトたちとの歓談が終わり、グレアムはカノンの方に視線を向けた。

「君がカノン君か……私の出身世界の平行世界からやってきたという……」

「ああ、どうやらそのようだな……」

「それにしても、アテナの聖闘士……。アテナというのは『ギリシヤ神話』に登場する大神ゼウスの娘で、知恵と戦いの女神といわれるあのアテナなのだろう？」

「……そうだが……」

「……まさか……『神』が実際に存在しているようとは……思いもよらなかったよ……」

時空管理局が管理する世界の中で、『神』が実在する世界はない。

そんな世界が管理局が把握している次元世界に存在していれば間違いないが管理局は、その傲慢さゆえに、神の天罰を受けてとくに滅んでいただろう。

大地を汚しただけでは飽き足らず、宇宙に進出しようとする人類を冥王ハデスは否定した。

ならば、他の次元に干渉しようとする管理局も、冥王ハデスの様な神からすれば許しがたい存在であろう。

「……それで……カノン君に少し頼みがあるのだが……」

「何だ？」

グレアムは姿勢を正した。

「実は、君たちに管理局に入ってもらえないだろうか？」

「……」

「君も聞いていると思うが、数多の次元世界を管理している為、管理局は慢性的な人手不足なのだよ……。優秀な人材は一人でも多く欲しい。ましてや、君たち聖闘士は、戦闘能力だけなら魔導師を圧倒する実力を持っているとのこと……。その力を、次元世界全体の

為に活かしてもらえないだろうか？」

そう言つて、頭を下げるグレアム。

「……提督、それは！」

クロノが焦りを含んだ表情で口を挟もうとした。

「断る！」

クロノを遮り、カノンはあっさり拒否した。

「……理由を聞かせてもらつてもいいかね？」

「管理局に入局ということは、管理局の命令に従わなくてはならない……と、いうことだ。悪いが俺はアテナ以外の命令を聞くつもりはない……貴様らの犬になるつもりなどまつたくない！」

言葉には出さないが、管理局の在り様には疑問点がある。

管理局は警察機構の様な存在で、確かにこういう組織は次元世界には必要であろう。

故にカノンは管理局という名称と上から目線が気に入らないだけで、活動そのものは否定していない。

だが、かつての自分や兄の様に次元世界の平和を名目に全次元世界の征服に乗り出す可能性を否定できないのだ……。

今のところは、個人的に付き合いのあるアースメンバーに協力しているだけに過ぎない。

しかし、管理局全体に協力……さらに入局してしまえば、見え隠れする管理局の闇に手を貸してしまうことになるかもしれない。

同じ過ちを繰り返すわけにはいかない。

「邪悪が現れれば、それを討つために戦うことは吝かではない。しかし、管理局に従う理由にはならない……。俺たちは聖闘士としての判断で戦う……。それだけだ……」

邪悪と戦うことに異存はないが、それは自分達が独自で行う……。

聖闘士は、今までもこれからもそうしてきたのだから……。

「……そうか……。無理強いはすまい。今の要請は忘れてくれたまえ……」

クロノはグラムに『闇の書』と『魔導師襲撃事件』の捜査を自分が担当することになったことを伝え、二、三言葉を交わして退室した。

「……焦りましたよ……。カノンさんがグラム提督に食って掛かるんじゃないかと……」

カノンに師事しているクロノは、聖闘士という存在のことを管理局員の中で一番理解している。

故に、聖闘士が管理局に正式に入局することなど有り得ないと思っている。

外部協力者　此方の指示に従わない　が精々だろう……と。

「予想はしていたからな……。あのグラムという男は、お前にとって大事な人のだろう……。だから自重した。しかし、管理局員というのは自分達管理局でなければ、世界を護れないとも思っているのか？もし、そう思ってるのなら二、三発くらい張り倒してやった方がいいか？……」

カノンの過激な返答に、フェイトたちは冷や汗を掻いていた。

カノン達の世界において、この世に蔓延る邪悪と戦っていたのは、聖闘士だけである。

それは、邪悪に対抗できる者が聖闘士しかいなかったからである。例えば、超神話によれば鱗衣スケイルを纏った海闘士マリナーは地上のどんな武器を持ってしても対抗できず、多くの地上の戦士達が命を落とした。

海闘士との戦いで傷つき命を落としていった少年たちに心を痛めたアテナは、鱗衣に対抗できるプロテクターである聖衣クロスを少年達に与えた。

それが、聖闘士の発祥である。

それ以降の戦い、巨人ギガントマキアとの戦い、軍神アレスとの聖戦、冥王ハーデスとの聖戦など、聖闘士以外の者では対処できない者たちと戦い続けてきた。

そう、聖闘士しかそれらの敵に対抗できなかったのだ。

もし、アテナ以外の『神』が、アテナと同じ様に地上を護ろうと考

え、その『神』に集う闘士が存在していれば、そちらと共闘する」とも厭わなかったであろう……。

所変わって、海鳴市内、八神家。

「はやてちゃん。お風呂の支度できましたよ」

「うん。ありがとう」

テレビを見ていたはやてが、シャマルに返事をした。

「ヴィータちゃんも、一緒に入っちゃいなさいね……」

「……アタシは、リアを待ってるから、それに……今日は風呂に入る気が起きないから明日の朝に入るよ」

「明日は朝から病院です……。余り夜更かしなさいませんように……アイオリアから説教されますよ……」

「はい」

新聞を読んでいたシグナムに忠告され、はやては素直に頷いた。

「シグナムはお風呂、どうしますか？」

「私も、今夜はいい……。ヴィータと同じく明日の朝にするよ」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまには、そういうときもあるさ」

はやては、シャマルに抱っこされて、風呂場に向かった。

はやての姿が見えなくなってから、ヴィータの表情が歪んだ。

「傷か痛むか？」

シグナムが気遣わしげな表情でヴィータの肩を見る。

「こんなの……なんでもねーよ……ッ！イテテ……」

強がって肩を回すが、激痛が走り、痛むところを手で押さえる。

「無理をするな……。騎士甲冑諸共貫かれたんだ……。シャマルの回復魔法でも、すぐには追いつかん……」

「アタシより、ザフィーラの方が深刻だろ？」

「我は盾の守護獣。この程度の傷など……」

最も深い傷を負ったザフィーラは、動くのも辛そうであった。

「表面上の傷はシャマルの回復魔法で塞いだが……ダメージはまだ回復していないのだろう……お前も無理をするな」

はやての前では何でもないように振舞っていたが、先程のカノンとの戦闘のダメージがヴィータとザフィーラを蝕んでいた。

「ちつきしょくく。何なんだよ……アイツは……。あんな化け物、見たことねぞ！」

自分達『ヴォルケンリッター』三人を相手に圧倒するなど、信じられなかった。

「……アテナの聖闘士……双子座のカノン……。やっかいな相手だ……」

「悔しいが、我らではまったく歯が立たん……。次に奴と戦うことにでもなれば……」

これからの蒐集活動に支障をきたすのは間違いなかった。

「それに、やっかいなのは奴だけではない」

シグナムはそう言うと、着ている服を捲った。

腹から腰にかけて、一線の痣が付いていた。

「あの金髪の少女との戦闘か？」

フェイトとの戦いは、終始シグナムが圧倒していたと思われていたが、彼女の放った一撃が、シグナムの騎士甲冑を打ち抜いたのだ。

「澄んだ太刀筋だった。良い師に学んだのだろうな……。武器の差がなければ、少々苦戦したかもしれん……」

フェイトが相手では、負ける気はないが……。

「だが、あの少女はともかく、あの黄金の鎧の男は……」

「ベルカの騎士としては屈辱だが……あの男が出てきたら、即効で退却する……それしかない……。我らはまだ、捕まるわけにも、死ぬわけにもいかないのだから……」

自分達が今、敗れば掛け替えのない主である八神はやては……。

「それしかないな……」

「アタシも賛成だ……。もうアイツとは戦いたくない……」

認めたくないが、あの男に恐怖を感じているヴィータだった。

「ただいま！」

玄関からアイオリアの声が聴こえ、先程までの暗い顔が、パツと明るくなる。

「お帰り、リア〜！」

リビングに入ってきたアイオリアに駆け寄る。

「ねえ、アイスは？」

「ちゃんと買ってきたから、心配するな……。一つだけだぞ！前みたいにお腹を壊すからな……。後は冷凍庫に入れて置け。はやては……」

…「シャマルと風呂か？」

ヴィータは、アイオリアから受け取ったアイスを食べる為に台所に向かった。

「すみません……。買い物に行かせて……」

「気にするな。女性を夜遅くにお使いに行かせるわけにもいくまい……」

朗らかな笑顔でそう答えたアイオリアだが……。突如真面目な顔になり、シグナムに近づき呟いた。

「お前たちが何をしているのか……。想像は付いているが……。あえて訊かん！訊けば、どのような理由があろうとも、お前たちを止めなくてはならないからな……。お前たちがはやての為にやっていることはわかっている……。だが……。絶対にはやてを哀しませるなよ！」

シグナムたちの口から、はっきりと聞かされれば、聖闘士して止めなくてはならない……。しかし、そうなるとはやては……。

アイオリアは葛藤の末、シグナムたちを信じ、気付かぬ振りをすることにしたのだ。

シグナム達の行動が、聖闘士として、絶対に見過ごせない行いではないと信じて……。決して、不用意に人の命を奪うようなことではないと……。

シグナムは、やはりアイオリアには気づかれていたことを悟ったが、アイオリアの対応に感謝した。

しかし、彼女は知らない。
目の前の男が、先程自分達を圧倒した男と同格の力を持つ闘士であることを……。

第二十話 本局にて（後書き）

事件解決のため、第97管理外世界に司令部を移すアースラ。
なのはの友人達と直接対面するフェイト。

時空を越えた黄金の闘士

「引越し」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十一話 引越し

今回の事件が「アースラ」の担当になったため、そのための会議を開くべく、主要メンバーがユーノたちがいる休憩室に集合することになった。

肝心のアースラがしばらく使えない為、事件発生地周辺に置くことにしたようである。

『魔導師襲撃事件』は、なのはの世界　つまり第97管理外世界を中心に個人転送で行ける範囲に集中していた。

つまり、アースラが使えない以上、本局からでは遠すぎるのだ。

「分割は、観測スタッフのアレックスとランディ！」

「はい！」

「ギャレットをリーダーとした、捜査スタッフ一同！」

「……………はい！」

「司令部は、私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐、フェイトさん……………あと、カノンさんとムウさん……………以上三組に分かれて駐屯します！」

「俺（私）達を含めるな（いでください）！！」

話を続けようとしたリンディは、カノンとムウに即答で断られたので、言葉を飲み込んだ…。

「……………あの…手伝って頂けないのですか？」

「当たり前だ！」

「私達は管理局の局員ではありませんし、フェイトの様に囑託でもありません……………何故、当たり前のように戦力に加えているのですか？」

クロノ、フェイト、リニス以外の他のメンバーも啞然とした顔でカノン達を見つめていた。

「……………でも、カノンさん達が手伝ってくれば、この事件も簡単に解決できるし、何よりフェイトちゃんの助けに……………」

エイミーが、恐る恐るそう言ってきたが、カノンはあっさりと切り捨てた。

「何故、フェイトの手助けをしてやらなくてはならないんだ？」

「これは、彼女の仕事でしょう？」

エイミーは絶句した。

まさか、カノンがフェイトの手助けをしようとは思わないとは思わなかったらしい。

「フェイトは、自らの意思で嘱託魔導師になった……。嘱託だからお前ら管理局の人間と協力しあうのはいいが、俺が常に手助けしていれば、俺が居なくては何も出来ない魔導師になってしまうだろう」「それじゃあ、意味がないでしょう？ 裁判を有利にする為に、嘱託試験を受けて、嘱託魔導師になったんですから、彼女は自分の力でそれに応えなくてはなりません……。私達が手を出すのなら、フェイトの力は重要視されなくなります」

「と、いうか……。お前らも俺たちをあてにするな！ 俺たちが管理局が気に喰わないことは知っているだろう。少なくとも、クロノとフェイトもその事は了解済みだ！」

「じゃあ、何で前はなのはちゃんを助けてくれたんですか？」

「あれは、フェイトが嘱託魔導師としてではなく、個人的に大切な友達であるのを助けようとしたからだ。なのはも訳も分からず襲われたみたいだし……。管理局の仕事じゃないから協力した。」

しかし、なのはもPT事件同様、現地協力者として、この事件に首を突っ込む気なら、次回からはなのはも助けん！」

皆からの協力要請を突っぱねる2人に、リンディが再び協力を請おうとしたとき、クロノとフェイトが口を挟んだ。

「母さ……。いや、艦長！ カノンさんとムウさんの意見は最もです。」

……。第一、先のPT事件の時は、管理局の仕事だからといって、なのはとユーノに事件から手を引く様に言ったのは艦長じゃありませんか？ カノンさんも、ムウさんも、今回は積極的に協力する気はないんですし、2人は局員じゃありませんから、強制は不可能ですよ

！」

「それに、確かにカノンの言うとおり、『カノンに頼るしか能のない囑託魔導師』なんて言われたくありませんし……」

恐らく、カノンが管理局の関係者の中で最も心を許している二人であるクロノとフェイトからも、反対意見を出されてしまい、リンデイも流石にそれ以上は口に出すことが出来なくなった。

「まったく手を貸さん……とは言わん！リニスは引き続きお前たちに協力させるし、なのはに関しては魔力が戻るまでは護ってやる……。そして奴らの行為が、魔法などとかかわりの無い者たちにも及びそうになれば、俺たちも独自に行動する……だが、恐らくそれは杞憂だろうな……どうやら奴らは相手を殺すことは禁じている風に感じたからな……現に、今までの事件の被害者の中に死者はいないのだろうか……？」

シグナムと名乗った女も、ハンマーを持った少女も、獣人の男も、闘志は感じられたが、殺意は感じられなかった。

「……分かりました……。では、貴方達は我々の切り札……いえ、我々の手に負えなくなった時に、改めて協力を要請させてもらいましょう……。それまでは、管理局員と囑託魔導師、現地協力者でこの事件の捜査にありましょう……。それでいいですね？」

リンデイの問いに、2人は頷いた。

「それでは、話を戻します……。司令部は、なのはさんの保護を兼ねて、なのはさんの御家のすぐ近所になります！」

リンデイのその言葉を聞き、なのはは、嬉しさの余り声を上げて喜んだ。

アースラの臨時司令部が置かれるマンションのベランダから、なのはとフェイトは街を眺めていた。

確かに、なのはの家の近所であり、ここからなのはの家が見えるく

らいである。

家の家具などの配置は、エイミイを中心に行われていた。

ムウが管理局の精密機材以外の生活必需品などを運んだ（主に念動力を使って）ので、思った以上にあっさり終わった。

「ムウさんのお陰で助かりました…」

「まあ、これくらいの手伝いはしませんと…ね」

「横着しただけだろう…」

等と、話していると3人の足元に小動物二匹　子犬とフェレッツ

ト　が居るのに気付いた。

「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿か!？」

「新形態、『子犬フォーム』!」

「なのはやフェイトの友達の前では、この姿でないと……」

そんな2人（二匹!？）を見て、なのはとフェイトが驚きと嬉しさが混じった顔で2人に近づいてきた。

「うわあ、アルフちっちゃい……どうしたの?」

「ユーノ君もフェレットモード久しぶり〜〜!」

子犬姿のアルフを抱き上げるフェイトと、フェレット姿のユーノに頬擦りをするなのは。

ユーノが自分と同年代の人間の少年だということを忘れていたのかのようなのであった。

【……可愛い女の子に頬擦りされて、気分はどうだ…エロ餓鬼!】

【……役得…。とか、思っているんだろうな……この淫獣モドキ!】
カノンとクロノの師弟コンビの冷たい視線と念話が届き、固まってしまうユーノであった。

早速、なのはの友人であるアリサ・バニングス、月村すずかの両名が遊びに来た。

彼女達は、フェイトのことはビデオメールで知っていたが、直接会うのは初めてであるがすぐに打ち解けていた。

そこへリンディが現れ、一同はなのはの両親が経営している『喫茶翠屋』でお茶をすることになり、リンディもなのはの両親に挨拶する為に、ムウも明日から復帰することを伝えに同行することになった。

なのは達が外の席で歓談を楽しんでいる合間に、リンディはなのはの両親に挨拶を済ませていた。

「あら、ムウさん……。帰ってこられたんですね」

桃子が、リンディの後ろにいたムウに気付き話しかけた。

「すいません、長い休みを頂いて……。以前に話したとおり、明日からは出られますので……」

「そいつは助かるよ。最近少し忙しくなってきたからね……」

士郎も、ムウの帰還を喜んでるようである。

「ところで、フェイトちゃん三年生ですよね……。学校はどちらに？」
士郎が尋ねると、聖祥付属小学校の制服の入った箱を抱えてきたフェイトが入ってきた。

どうやら、リンディが前もって手続きをしておいたらしく、フェイトは来週からなのは達のクラスメイトになる予定であった。

一方、その頃。司令部では、クロノとエイミー、カノンが『闇の書』について話し合っていた。

ロストロギア『闇の書』の特徴は、そのエネルギー源にある。
魔導師の魔力と魔法資質を奪うために、リンカーコアを喰うのである。

先日、なのはのリンカーコアもその被害にあってしまった。

そして、蒐集した魔力の資質と量によって、頁が増えていき、最終頁まで全て埋まれば完成するのだ。

「完成すると……どうなるの？」

「少なくとも……碌な事にはならない……」

いつも明るいエイミイには珍しい不安げな表情で問われ、クロノは答えた。

クロノの脳裏に、11年前の出来事が思い浮かんだ。

自分の前では、気丈に振舞っているが、ひとり隠れて涙を流す母の姿を……。

そして、もう二度と会えなくなった父の事を……。

「……しかし、あの騎士たちは本当に邪悪な気配はこれっぽっちも感じなかったんだがな？」

襲撃などをしているようだが、直接対峙したカノンには、どうしてもあの連中を悪だと断じることが出来なかった。

彼女達など、かつての自分に比べれば遥かに清廉な者たちだと……。

「彼女達に関しては、今度のブリーフィングで説明します……『闇の書』の守護騎士たちについては……」

「……まあ、俺は直接出張らんからな……。さて、クロノ……今日の鍛錬は一時間後に始めるぞ……」

「はい！エイミイ……ユーノに連絡して結界の準備を頼んでくれ」「はいなあ〜」

はやてはアイオリアと一緒に昼食を食べていた。

シグナムは剣道場で非常勤講師をしており、今日も行っている。

ヴィータは近所の老人会のゲートボールチームに入っているおり、そこのお爺ちゃんたちに連れられ、海釣りを楽しんでいるそうである。

シヤマルはすっかり主婦と化し（独身なのに）、今日は近所の奥様方と共にデパートのバーゲンセールに行っていた。

故に、今、家に残っている守護騎士はザフィーラだけである。

今日の昼食は、タラモサラタ、スブラキなどのギリシア料理である。アイオリアも、実はそれなりに料理が出来るので、作り方などを教えてもらいはやてが作ったのだ。

タラモサラタは、塩漬けの魚卵をほぐして、マツシユポテト、オリブオイル、レモン汁、刻んだ玉葱を混ぜたものである。魚卵はギリシアでは、鯉や鱒タラマの卵を使うのだが、日本ではタラコで代用することが多く、はやてもタラコを使った。

スブラキは、グリルで焼いた肉の串焼きであり、ギリシアでは鉄道の売店や車内販売でも買える一般的なファーストフードである。

2人しか（ザフィーラを入れても3人！？2人と一匹！？）いないので、簡単な物にしようということ、こうなった。

「そういえば、明日もシグナム達はでかけるんやったな？」

「ああ、そう聞いている……」

「リア兄は、今のところ仕事は休みなんやろ？」

「ああ。年内にはもう無いらしい……。年が明けて七日かららしいな……」

アイオリアも、流石にタダで居候する気はなかったので、ヴィータの知り合いのお爺さんに仕事を紹介してもらっていた。

非常勤の仕事なので、毎日……というわけではないが……。

「みんな最近、やりたいことを見つけ、家を空けることが多いなあ……」

やはり、少し寂しそうに呟くはやて。

「ここが皆の帰る場所です……。帰ってくる場所があるから、皆も気兼ねなく出掛けられるのですから……」

狼形態で、食事をしていたザフィーラがはやてにそう答えた。

「そうやね……。皆がやりたいことやって、そして、ウチの所に帰ってくる……。家族つちゅうのはそんなモンなんやな……」

はやての表情に笑顔が戻る。

「リア兄は、明日も暇やる？」

「ああ」

「だったら、明日…私、行きたい店があるから、付き合ってもらえるやるか？」

「ああ、いいよ…」

「留守はお任せ下さい…」

本局でリニスは、レティ提督の部下である本局メンテナンススタッフのマリエル・アテンザと共に傷ついたデバイスの修理をしていた。「さて、バルディッシュ…、そして、レイジングハート…貴方達が希望した…“CVK 792”に含むシステムを組み込んだわ…」

【All right!】

【Yes sir!】

「…リニスさん…。この子達…本気なんですか？」

「今更何ですか…マリーさん？」

「『インテリジェンスデバイス』であるこの二機に、『コレ』を組み込むなんて…」

「この子達は、先の戦いで己の力不足を痛感したんです…。解決策はこれしかありません…」

そう、レイジングハートとバルディッシュに新たに組み込まれたのは…『ベルカ式カートリッジシステム』であった。

第二十一話 引越し（後書き）

はやてに連れられ、翠屋に訪れたアイオリアは、そこでカノン達と再会する。

死に絶えた獅子座の黄金聖衣が、新たな命を吹き込まれ蘇る。

そして、レイジングハートとバルディッシュも、新たな力を得て蘇った。

時空を越えた黄金の闘士

「修復されし聖衣とデバイス」

君は、小宇宙を感じたことがあるか!?

第二十二話 修復されし聖衣とデバイス

「あ…あの、フェイト・テストロッサといます。よろしくお願ひします……………」

留学生でしかもかなりの美少女であるフェイトはすっかり人気者になり、クラスメイト達に取り囲まれてしまう。

余り、同年代の子らと接する機会がなかったフェイトは困惑してしまつた。

しかし、アリサが中に入り、助けてくれたので、クラスの皆と打ち解けることが出来た。

アリサが、なのはの親友の一人であつたことに感謝するフェイトだつた。

喫茶翠屋は、昼食時は平日でも忙しい。

昼休みに此処で食事を摂るOLや、専業主婦の奥様方が来られるからである。

時刻は14時30分。

漸くピークが過ぎ、忙しさから開放され、ムウはホツと息を吐いた。「大変だなムウ……………」

「冷やかしの客が一人いましたからね……………」

カウンター席で土郎と話していたカノンがムウをからかい、ため息を吐きながらカノンを睨むムウ。

「いや、やはりお前が客商売をしている姿は実に新鮮だ……………アテ……………沙織お嬢様にもその姿を見せてやりたいな……………」

流石に土郎が居るので、『アテナ』と呼ばず、人間としての名である『沙織』と呼ぶ。

等と、くだらない話をしていると来客が来たので、ムウは応対に向

かった。

「いらつしゃい……………ま……………せ……………」

お客さんの顔を見て、ムウの顔が引き攣った。

「……………ム……………ムウ!？」

車椅子の少女と、その車椅子を押す青年……………八神はやたと『獅子座』のアイオリアであった。

その瞬間、翠屋に爆笑が響いた。

席に案内され、メニューを見るはやたと笑いを堪えているアイオリア。
ア。

「いつまで笑っているんですか!？」

不機嫌さを隠し、表面上は営業スマイルのムウがアイオリアを睨む。

「い……………いや、お前がまさか……………ククッ……………」

やはり、人嫌いでジャミールに籠もっていたムウが、エプロン着けて客商売をしている姿は、彼を知る者にはいい見世物だった。

『スターライト・エクステインクション』で無人世界に飛ばしてやりましょうか……………などと物騒なことを考え始めたムウに、はやてが注文した。

「チーズケーキセット二つ、飲み物はホットのミルクティーとコーヒーでお願いします。……………あとシュークリームセットをテイクアウトでお願いします」

「畏まりました……………。マスター、チーズケーキセット二つに、ホットミルクティーとコーヒー。シュークリームセットお持ち帰り」
「応!」

ムウから注文を聞いた土郎が厨房に伝えに行き、戻ってコーヒーとホットミルクティーの準備を始める。

そして、土郎と話をしていたカノンが、はやてを見て……………。

「……………確か……………八神はやて……………だったな……………」

「……えっ！？……あゝ、カノンさん。あの時はありがとござい
ました〜」

「……はやて…、この男の事を知っていたのか？」

アイオリアの問いに、前に生活費の入った財布をカノンに届けても
らったことを話した。

「財布には、銀行のキャッシュカードも入ったから、カノンさ
んに拾ってもらわなんだら、大変な事になったかもしれない」

「気にするな。礼に一割貰ったのだ。それで十分だろう」

「それにしても……リア兄とカノンさんがお知り合いだったとは、
世の中狭いもんやな…」

感慨深く、そう言うはやてに一同は気まずい表情になった。

実際、カノンとアイオリアは、顔を合わせるのこれが二度目であ
る。

最も、カノンは兄であるサガと瓜二つなので、この顔自体はアイオ
リアも見慣れてはいたが……。

「そつえばムウ。偶然とはいえ、お前に逢えたのは幸運だ……」。

お前に頼みがあるからちよつと待っていてくれ…。はやて、俺は一度
家に戻るから、お前はゆつくりしている」

そう言うと、アイオリアは出されたチーズケーキとコーヒーを食べ、
テイクアウトしたシュークリームを持って、翠屋を後にした。

アイオリアが戻ってくるまでの間に、学校から帰ってきたなのはと
フェイトが翠屋にやってきた。

はやてがカノンの知り合いというので、なのはとフェイトも彼女と
仲良くなっていた。

そこにアイオリアが帰ってきた。

「ムウ……仕事はいつ終わる？」

「そろそろ交代の時間です……」

「では、人気の少ない場所に移ろっ……」

アイオリアが背負っている大きなリュックサック……それに入っている物を察したムウは黙って頷いた。

アイオリアたちは、人が来ない場所……廃棄されたビルに来ていた。このビルは廃棄されて既に何年も建っているが、いまだに放置されていた。

今では怪奇スポットとして、有名な場所である。

昔、誘拐され無残にも殺された外国人の少女の霊が出る……という噂である。

そのことを知っていたなのはとはやてが、怖そうな顔で説明したが、ムウが一蹴した。

「そんなものはタダの噂に過ぎません……。ここにはその様な霊の気配などまったくありませんから……」

伊達に、『聖衣の墓場』などという聖闘士の亡霊たちが生息（！？）する場所の近くに住んでいたわけではない。

ムウは、そういう霊の気配には敏感なのであった。

「とりあえず、お前のことだから察していると思うが……」

アイオリアはそう言い、リュックサックを開き、中から黄金の箱を取り出した。

「……それって!？」

獅子のレリーフが彫られた黄金の聖衣櫃クロスボックスであつた。

「……じゃあ、アイオリアさんも……ムウさんとカノンさんと同じ『聖闘士』!？」

なのはが驚愕の声を上げる。

「……なのは……気付いていなかったの？」
フェイトは呆れた顔でなのはに訊いた。

カノンとムウと同じ世界から来た人間で、2人の仲間ならば当然『聖闘士』の筈……まあ、カノン達と同格の『黄金聖闘士』だったこ

とは、フェイトも驚いたが……。

徐に、アイオリアは聖衣櫃を開いた。

そこにあつたのは、完全に破壊された獅子座の黄金聖衣だった。

「こ……これは!？」

カノンは驚いていた。

神話の時代から、破損された事はあつても、唯の一度も破壊されたことがない黄金聖衣がここまで完全に破壊されていることに……。そして、気が付いた。こんな真似が出来るのは『神』以外ないことに……。

「成る程。私達が『嘆きの壁』を砕いた後、何らかの力で超次元を越え、エリシオンで戦う星矢達の下に行き、ハーデス……もしくは2人の側近に破壊されてしまったのでしよう……」

冥王ハーデスには、神でありながら側近となつた2柱の神。

ヒュブノス
『眠り』と『死』タナトス。

「すまんが、修復してもらえるか?……『黄金聖衣』が無いのは、以後の聖戦に大きな影響が出る恐れがあるしな」

「それは構いませんが……察している通り、獅子座の聖衣は既に死んでいます……それを修復するには代償が必要なのはご存知ですね……」

ムウの問いに頷くアイオリア。

「エッ……聖衣が死んでいるって……どういう意味なんですか?」

「聖衣は唯のプロテクターではない。『命』を持っているのだ。まあお前たちのデバイスの様に喋ることは出来んが……だから、コレほどまで破壊されれば当然『死ぬ』……」

なのはの疑問にカノンが答えた。

「代償が必要なのは無理解しているから……とにかく、修復を頼む……」

「分かりました」

そう言うと、ムウは何処からとも無く、修復に必要な道具を取り出した。

「そういえば、修復に必要な道具はちゃんと持っていたのか？」

「確かに、私の修復道具は白羊宮に置いたままですが……、此方の聖域には『聖衣』の工房があったことをお忘れですか？当然、必要な道具も置いてありましたので問題ありません」

「おい、此方の『聖域』とはどういうことだ？」

ムウの返答の中に、聞き捨てならない単語があったので、アイオリアが聞いたのだした。

カノンアレスは、2000年前の軍神との聖戦のおり、異界に飛ばされてしまった聖域の一部を発見したことを説明した。

「……そういうことか……」

納得したアイオリアは、獅子座の残骸の前に立ち、服の袖を捲ろうとするが、それをカノンが止めた。

「待て、アイオリア……代わりに俺がやる」

「何だと!？」

いきなりのカノンの申し出に困惑する。

「俺はお前に対しても、個人的に謝罪しなければならぬ立場の間人
間だ……」

アイオリアはハツとした。

そうなのだ。

カノンは、彼の兄……『サジタリアス射手座』のアイオロスの死に責任がある。

確かに、アイオロス抹殺を命じたのは教皇に扮したサガであり、直接手を下したのは『カプリコン山羊座』のシユラである。

しかし、サガの中に眠る『サタナ邪悪』を目覚めさせたのはこのカノンなのだ。

間接的にはあるが、アイオロスの死の原因とも言える。

「気にするな……とは言えない。

アイオリアの中にも、当然、カノンに対する恨みは僅かだが存在する。

しかし、ミロからカノンが罪の償いをしようとしている。聖闘士としてやり直そうとしていることを聞かされ、アイオリアはその恨み

を飲み込んだ。

アイオリアにも罪の意識がある。

十二宮の戦いの前、日本において、女神である城戸沙織から衝撃の真実を聞かされ、それを信じられず、その証拠を見せてもらいたく、あるうことか女神に対し、拳を向けた。

射手座の聖衣に宿る兄、アイオロスの意思に阻まれ事なきを得るが……無礼にも程があつた。

更に、いかにサガの幻朧魔皇拳を受けたとはいえ、十二宮に乗り込んできた星矢を殺そうとし、自分にかけられた洗脳を解く為に、カシオスが犠牲になった。

如何に女神や星矢、シャイナに「気にするな」と言われても、それは無理だつた。

だから、カノンの気持ちも少しは理解できた。

確かに、サガはカノンの邪悪を目覚めさせた。

しかし、カノンが目覚めさせなくても、いつか目覚めたかもしれない……。

サガの中の『邪悪』は、それほど強大なモノだったのだから……。

しかし、だからといって、カノンに「気にするな」と言つても、無理だろう。自分と同じように……。

「……分かつた……。それでは頼もう……。これでチャラだ！」

アイオリアは、カノンに場を譲り、はやての隣に移動した。

「なあ、リア兄……。これから何が始まるの？」

はやてにも、あの黄金の箱の中身のモノを直そうとしていることは理解出来ていた。

しかし、先程のカノンとのやり取りが理解できなかつた。

「はやて……お前は見ないほうがいい……。」

そう言つと、はやての前に立ち、カノンの姿を見せないようにした。

「……!？」

よく分からないが、アイオリアが見ない方がいいと言つなら、見ない方がいいのだろうと判断した。

獅子座の聖衣の前に立ったカノンは、袖を捲り、手刀で手首を切った。

鮮血が飛び、あまりのことにフェイトとなのはが真っ青になった。

「カノン!？」

「な……何を……!？」

カノンはフェイトたちに応えず、手首から流れ落ちる血を聖衣に掛け始めた。

血がどんと流れていくのに、とても見ていられずフェイトとなのはは視線を逸らそうとする。

【目を逸らすな!】

突如、カノンからの念話が2人に届いた。

【この程度の流血で目を逸らすな! 戦闘中に、この程度の流血で動揺するようでは、不覚を取る……。今のうちに慣れておけ!!】

囑託魔導師になったフェイトはもちろんのこと、なのはもこれから管理局に関わるつもりなら……血を流すこと、流させることを覚悟しなければならぬ。

一般論で言うなら、9歳の小娘にはきつ過ぎるだろう。

しかし、既に戦いの場に立ってしまった2人には、例え酷だろうが、慣れさせなければならぬ。

戦闘中に流血に動揺して、動きが鈍るようでは、自分達はおろか、周りの者にも迷惑を掛ける。

それが嫌なら、戦いから身を引け……と、言い、フェイトたちに見せ付けた。

どんとどんと流れる血と、廃ビルに充満する血の匂いに、なのはとフェイトは気持ちが悪くなってきた。

はやても、血の匂いに何が起きているのか察し、顔が青くなっていた。

「……ムウ!……どうしてこんなことする必要があるの!？」

カノンから流れ出ている血液が、あまりにも多く、これ以上の出血が命に係わるかも知れない量に達しようとしている。

「死に絶えた聖衣を蘇らせるには、聖闘士の大量の血液が必要なのです。聖衣に新たなる『生命』を吹き込む為に……」

「どれくらいの血液が必要なんですか？」

「なのも流石に、ヤバイと感じ、ムウに質問する。」

「最低でも、人間の身体の半分の血液は必要です……それも、生の血液が……」

輸血用血液のように、冷凍保存されている血液では役に立たない。聖闘士の小宇宙の宿る、新鮮な血液でなければ駄目なのだ。

「そ……そんな！？」

2人はぞつとした。

いくら幼い2人でも、人間が三分の一の出血で死に至ることくらい知っている。

いくら聖闘士とはいえ、それほど出血すれば、タダではすまない事くらい理解していた。

「カノン！」

「心配するな！かつて、自分の聖衣だけでなく、友の聖衣の為の血を流した男がいる。それに比べれば遥かにマシだ……。この程度でアイオリアに対する『借り』を返せるなら……造作もないことだ」
フェイトに微笑むカノンの顔色が流石に悪くなっている。

「もういいでしょう」

ムウが、カノンの手首に触れ出血を止めた。

「さて、修復には一時間掛かります。それまでは気が散るので、出て行ってください」

廃ビルから、聖衣を修復する音が鳴り響いていた。

カノンは身体の血液の半分を流したにも係わらず、両の足でしっかりと立っていた。

信じられない精神力である。

常人なら、とつくに死んでしまっている。

なのはとフェイトは、改めて聖闘士がとんでもない存在であることを認識した。

「ところで、カノン！」

「何だ、アイオリア？」

顔色は悪いが、しつかりとした口調でアイオリアと話をしている。

「女神は……冥王ハーデスとの聖戦に勝利できたのだろうか？」

「……一輝の話では、冥王の肉体にとどめを刺し、聖戦を終わらせたらしいぞ……」

「一輝も此方に来ているのか！？」

「そのようだ……。最も今何処にいるかは知らんがな」

「……フツ！相変わらずだな……」

青銅聖闘士最強にして、孤高の男……フェニックス一輝。

カノンはおろか、あのシャカさえ一目置く男のことに思いを馳せる2人であった。

「リア兄って、実は凄い人やったんやな！」

なのはとフェイトから聖闘士の事を教えてもらったはやては、自分の兄がとんでもなく強いことを知った。

「はやてちゃん……。信じるんだね？」

流石に魔法のことは話していないが、聖闘士の話だけでも、何処の漫画だ……というような話である。

「まあ、リア兄は私の目の前に突然現れたから……。信じる信じへんの問題やあらへん。それに、リア兄が異世界のお人っちゅうのは知っとなし……」

はやてにしてみれば、アイオリアがどんな存在でも構わなかった。

アイオリアが正義感の強い優しい人であり、自分にとって自慢の兄であることに変わりはないのだから……。

「なのはちゃん。フェイトちゃん。私の友達になってくれる?」

「何、言ってるのかなはやてちゃん!」

「もう、はやては私達の友達だよ!」

なのはとフェイトの返答に、笑顔満面のはやてである。

しかし、彼女達は知らない。

なのはとフェイトは、はやてが自分達が今戦っている者たちの主であることを……。

はやては、2人が自分の家族と争っていることを……。

一時間後。

音が止み、聖衣の修復が終わった。

「……終わりました」

形態は変わっていないが、新たな命を吹き込まれた新生・獅子座の黄金聖衣が輝きながら、主を待っていた。

アイオリアの『小宇宙』に反応した聖衣が、分解し、アイオリアの身を包む。

屈強の黄金聖闘士。

『獅子座』のアイオリアが復活した。

「凄い!」

「これが、獅子座の聖衣!」

「……すごいカツコええよ、リア兄!」

なのは達が賛辞の声を上げる。

「……聖衣の息吹を感じる……。新たな命の息吹を……カノン……、ムウ……ありがとう」

アイオリアは聖衣を脱ぎ、聖衣櫃に修める。

「アイオリア……これからどうする……?」

「元の世界に戻る目途が付いたら教えてくれ。俺は、もう暫くはやての兄でいる。いや……新たな聖戦が始まるまで……はやての下

にしようと思う……」

「……リア兄！」

自分とこれからも一緒にいてくれる……はやては感激していた。

「そうか……」

「では、また後日に……」

「ああ。ムウ、カノン……また今度な」

「はやてちゃん……今度一緒に遊ぼうね」

「うん。なのはちゃんにフェイトちゃん。またね」

「またね、はやて……」

こうして、それぞれの帰路についた。

なのはの魔力が完治したある日。

『レイジングハート』と『バルディッシュ』の修復も終わった。なのはとフェイトがリニスからデバイスを受け取り、中継ポートで戻っているその時！……捜査対象が網にかかった。

ヴィータとザフィーラは、管理局の武装隊員達に囲まれていた。

「管理局か……」

「でも、チャライよこいつ等……返り討ちだ！」

しかし、武装隊員たちは、2人から離れていった。

いぶかしむヴィータにザフィーラが警告する。

「上だ！」

上空にクロノが魔方陣を展開していた。

『ステインガールブレイド・エクスキュージョンシフト』！

魔力刃『ステインガールブレイド』の一斉射撃による中規模範囲攻撃魔法である。

百を超える魔力刃が2人に襲い掛かるが、ザフィーラが障壁を展開し防御する。

「……少しは通ったか？」

煙が晴れ、2人の姿が見える。

カノンの光速拳の前にはまったくの無力だった障壁だが、流石に魔法には有効な防御魔法である。

しかし、三本は障壁を貫き、ザフィーラの腕に突き刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな、この程度でどうにかなるほど……柔じゃない!!」

しかし、大したダメージにはならなかった。

「上等！」

クロノは自身の魔法が通用しなかったことに悔しさを覚えた。

そして……自らの足を見る。

不完全とはいえ聖闘士の闘技を身につけた自分の足を……。

「カノンさんの様にいなくても……僕の蹴りは……あの障壁を貫けるか……?」

その時、エイミーから連絡が入り、武装局員の配置が完了したのと、助っ人を送ったことを告げられた。

なのはとフェイトがそれぞれの相棒を掲げセットアップを始める。しかし、いつもと違う感じに戸惑い始めた。

「2人とも落ち着いて聞いてね。レイジングハートとバルディッシュは新しいシステムを積んでいるの……その子たちの意思を酌んでリニスが組み込んだの！呼んであげて……その子たちの新しい名前を！」

エイミーの話を聞き、2人は自分達の相棒の新しい名前を呼ぶ。

「『レイジングハート・エクセリオン』！」

「『バルディッシュ・アサルト』！」

ヴィータは驚愕した。

前回襲った魔導師と邪魔をした魔導師が現れたことを……。

彼女達が現れたのなら……あの化け物が現れるかもしれないことを

……。

そして、彼女達の持つデバイスに組み込まれたシステムに気付いた。

それは、自分達のデバイスと同じ『ベルカ式カートリッジシステム』
であった。

第二十二話 修復されし聖衣とデバイス（後書き）

闇の書を持つシャマルを捕らえようとするクロノに謎の仮面の男が立ちほだかる。

魔導士としては格上の相手にクロノは聖闘士の闘技で対抗する。今、クロノの蹴りが音速を越える。

時空を越えた黄金の闘士

「クロノの実力」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十三話 クロノの実力

シグナムは、強装型の捕獲結界にヴィータとザフィーラが閉じ込められたのを確認した。

『レヴァンティン』から行動の選択を要請される。

「レヴァンティン……お前の主は、ここで退くような騎士だったか？」

すぐさま『レヴァンティン』は否定する。

「そうだ……私達はずっとそうしてきた……！」

カートリッジがロードされ、刀身が炎を纏う。

「結界内にあの黄金の鎧の男は居ない……。ならば……!!」
シグナムは『レヴァンティン』を掲げた。

対峙するなのは、フェイトとヴィータ、ザフィーラ。

戦いに来たわけではなく、話がしたいというなのは達に対するヴィータの答えは……。

「ベルカの諺にこうというのがあんだよ。『和平の使者なら槍を持たない』ってな」

理解できず、顔を見合わせるなのはとフェイトに、ヴィータは子馬鹿にした表情で、話を続けた。

「話し合いをしようってのに武器を持ってくる奴がいるかバカ」
って意味だよ。バカ！」

「い……いきなり有無をいわず襲ってきた子が言う!？」

ヴィータの話を聞いて、ズツこけたのはが反論した。

「それにそれは諺ではなく、小鼻のオチだ」

味方であるザフィーラからも突っ込まれる始末であった。

「成る程、一理あるな」

臨時本部のモニターで、ムウ、エイミィと現場の状況を見ていたカノンがヴィータの台詞を聞き、そう呟いた。

「しかし、武器を持たずに現れたら、彼女達はちゃんと話し合いに応じると思えますか？」

「……今までのあの小娘の態度から見て、無視するだろうな……」
等と後ろで暢気に会話している2人に、エイミィは苦笑いをしていた。

「本当に今回は、フェイトちゃんたちに手を貸す気はないんですね」
「奴らが、俺たち聖闘士にとって倒すべき敵にならない限りは……」
な

「あと、あの娘たちには内緒にしてもらいますが、あの2人が殺されそうになった時は……無論、助けますから……。その為にリニスを同行させたのですからね……カノンは……」
その返答を聞き、エイミィはホッと息を吐いた。

結界を破り、シグナムが姿を現した。

フェイトとなのはは、クロノとユーノとアルフに手を出さないでと頼んだ。

なのははヴィータと、フェイトはシグナムとそれぞれ一騎打ちを望んだのだ。

クロノとユーノは難色を示したが、アルフは了承した。

アルフにしても、ザフィーラとケリを付けたいようであった。

彼女達の意味が固いと見たクロノは、あの3人を彼女達に任せることにした。

彼女達は『闇の書』を持っていない。

結界の内か外に『闇の書』を持った主ないし、もう一人の守護騎士がいるはずである。

クロノはユーノと共にそちらの捜索に回ることにした。

『レイジングハート』と『バルディッシュ』にカートリッジシステムを組み込んだことにより、なのははヴィータを圧倒し、フェイトはシグナムと拮抗した戦いを繰り広げられるようになっていた。アルフと戦っていたザフィーラは、状況不利と判断し撤退を決意する。

結界の外のシャマルに念話でそのことを伝え、結界を破れるか否かを聞いた。

【何とかしたいけど……局員が外から結界維持しているの……。私の魔力じゃ破れない。シグナムの『ファルケン』かヴィータの『ギガント』級の魔力が出せなきゃ……】

【2人とも手が離せん。やむをえん……『アレ』を使うしか……】

【わかっているけど……でも……】

その時、シャマルは背後をクロノが取った。

【シャマル……どうした？シャマル！？】

『S2U』の先端をシャマルの後頭部に突きつけ、クロノは勧告した。

「搜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します……。抵抗しなければ弁護の機会が貴女にはある。同意するなら武装の解除を……!?!?」

言い終わる前にクロノは側面から気配を感じた。

何者かが自分に蹴りを放とうとしているのを感じ、肘と膝でその蹴りを挟み込んで止めた。

「……何ッ!?!?」

蹴りを放ったのは仮面を付けた謎の男であった。

『仮面の男』はまさか自分の不意打ちに対処されるとは思わなかったらしく、驚愕の声を上げた。

「エイミィ…今のは!？」

「わかりません!? こっちのサーチャーには何の反応も……」
突如現れた乱入者にあわただしくコンソールを操作するエイミィの後ろで、カノンは満足そうに頷いた。

「ほう、あれを対処するとは……クロノも出来るようになりましたね……」

ムウも、感歎の声を上げる。

「フツ……今のあいつなら、あの程度造作もない……」
しかし、口に出して褒めないカノンであった。

モニターでは、クロノと仮面の男の戦いが映し出されていた。

『仮面の男』は次々と、拳や蹴りを放つがクロノはそれを余裕で躲していた。

「……クロノ君…凄い……」

計測した結果、『仮面の男』はSランク以上の実力を持っている。しかし、そんな相手にAAA+のクロノが圧倒しているのだ。

『仮面の男』は困惑していた。

『彼』はある事情から、クロノ・ハラウンという魔導師の実力は完全を把握していた……把握しているつもりだった。

はつきりいつて、まだまだ自分には及ばない……筈であった。しかし、現実はどうだ。

自分の攻撃を、『あの』クロノが余裕で躲している。

【一体…どうなっているの!?!】

『彼の』の困惑は深まるばかりであった。

クロノも自分の実力に戸惑っていた。

明らかに相手は、魔導師としての自分よりは、格上の相手だと分かる。

しかし、今、相手の鋭い攻撃を完全に見切っている。

クロノは、先日カノンが言った言葉を思い出した。

「少なくともお前より上位ランクの魔導師を上回る実力についている」

目の前の『仮面の男』は間違いなくSランク以上の魔導師……。カノン相手では分からなかった自分の力を、クロノは自覚した。

そして、魔導師として戦っては相手に勝てない事を悟り、『小宇宙』を燃烧させた。

『仮面の男』は近接戦闘に絶対の実力を持っていた。

しかし、今、本来格下の筈のクロノ相手に、間合いに入ることすら出来なかった。

「クソッ!？」

手を拱いていたら、クロノが反撃してきた。

どうやら防御は上手くなったようだが、攻撃までは……。しかし、その考えは甘かった。

クロノの足から繰り出された無数の蹴りを見切ることが適わず、衝撃を受けた。

その後、空を裂くような音が響き渡った。

「ば……馬鹿な……。衝撃の後に音が響くなんて……」

「す……凄いよ、クロノ君！」

モニターの前でエイミィが興奮していた。

「今のクロノの蹴りですが……一秒間に百発繰り出していましたね……」

「ああ。どうやらようやくクロノは音速の領域に入ったようだ……」
クロノはついに、スピードにおいても聖闘士の領域に踏み込んだのだ。

初めて聖闘士としての力を実戦で使用して、クロノは興奮していた。カノン相手にシュミレーションをしていた時は分からなかったが、自分は今、確実に強くなっていることが実感できた。

クロノは自分が思い描いた技を試してみることにし、『小宇宙』を更に燃焼させた。

「な……何だ……これは……『宇宙』!？」

必殺技を放とうするクロノの小宇宙を、『仮面の男』は感知し、戸惑いを見せた。

「いくぞ! 『メガトン・メテオ・クラッシュ』! ! !」

クロノは飛び上がり、空中で前転しながら敵に突っ込んだ。

まるで、隕石のように……『仮面の男』に迫り、その顔面に向かって蹴りを放った。

『仮面の男』はシールド魔法を展開した。

しかし、聖闘士の力の前では無力だった。

シールドは、『メガトン・メテオ・クラッシュ』とぶつかってすぐ罅が入り、粉碎され、そのまま『仮面の男』を吹っ飛ばした。

「ぐわああああああ!」

『仮面の男』はビルに激突し、身体をめり込ませた。

クロノの蹴りを受けた為その仮面が罅割れ、砕けようとしていた。不利を悟ったのか、又は正体を知られるのを恐れたのか、そのまま魔方陣を展開させ、転移していった。

その時、強装結界が破られた。

どうやら、クロノが『仮面の男』に気を取られている間に、シヤマルが決意し『闇の書』の魔力で結界を破壊したのだ。

「しまった！」

普段なら、このようなミスを犯さないのだが……自分の今の力に興奮していたクロノはそこまで気が回らなかった。

結界が破壊されたことで、それまでなのは達と戦っていた3人も、撤退していった。

「……………馬鹿が！」

「……まだまだですねえ……………」

クロノの詰めよる甘さに、ため息を吐く黄金聖闘士2人だった。

第二十三話 クロノの実力（後書き）

『仮面の男』の動きに既視感エシヤウを感じるクロノ。

『闇の書』を調べなおす為、ユーノとカノンを連れ本局に赴く。

そこで、昔の師と出会った時、クロノの疑念は更に膨れ上がった。

時空を越えた黄金の闘士

「疑念」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十四話 疑惑

管理局の包囲網からの脱出に成功したシグナムたちを待っていたのは……アイオリアの拳骨だった。

「……せつかく、寒い中帰ってくるお前らのために、鍋を作って待っていたはやてとすずかに悪いとは思わなかったのか？」

「……すいません！」「……」

シグナムたちは何度も頭を下げ謝っていた。

「余りにも帰りが遅いから、やむを得ずはやてはすずかの家で夕食をご相伴に預かった……。今日はすずかを招待していたのに……その逆にする破目になるとは……」

アイオリアはシャマルを睨みながら、説教を続けた。

何故、シャマルが睨まれているかというと、みんなを迎えに行くという名目で出て行ったシャマルが余りにも遅すぎたからである。

「……すいません……アイオリアさん……」

「まあ、いい……。とにかく俺が鍋を温めておくから、お前らははやてに連絡して謝っておけ！」

アイオリアの一喝に、背筋を伸ばし回れ右をして、電話に向かう四人だった。

はやてに謝罪の電話を入れたシグナムたちは、アイオリアが温めた鍋を食べていた。

「……もしかして……リアは、あたし達が来るのを待っていたのか？」

「ああ、すずかを遅くまで待たせるわけには行かなかったから、はやてをあちらに預けたが……お前たちを迎える者がひとり居た方がいいだろうから、俺がお前たちを待つことにしたんだ！」

空腹を我慢し、自分達を待っていてくれたアイオリアに、恐縮する四人だった。

食事を終えた後、シグナムとシャマルは庭に出て、夜風に当たっていた。

「お前を助けたという男は、何者だ？」

「分からないわ！？少なくとも……当面の敵ではなさそうだけど……」

あの男のお陰で、管理局の執務官の注意が逸れ、戦場の離脱に成功できた。

「管理局の連中も、これで本腰を入れてくるだろう……」

「あの砲撃で、大分『頁』^{ページ}も減っちゃったし……」

結界を破る為に使ったせいで、先に白い少女から蒐集した分を、殆ど使ってしまったのだ。

「だが……あまり時間も無い！一刻も早く、主はやてを『闇の書』の真の所有者に……」

「……うん。そうね……」

「……ところで、お前とその『仮面の男』を追い詰めたという執務官は、それほどに手強いか？」

「ええ。あの『黄金の鎧の男』に比べれば劣るけど……似たような力を持っていたわ！」

あの『仮面の男』はシャマルの目から見ても只者ではなかった。

しかし、あの黒い防護服の執務官は、その男を圧倒していた。

しかも、あの『黄金^{カン}の鎧の男』のように、魔法を殆ど使わずに……。手強い相手が増えたことに、戦慄を禁じえないが……しかし、ここでやめるわけには行かなかった。

すべては、はやての為に……。

作戦本部の置かれたマンションに戻ったのはとフェイトは、リニスからカートリッジシステムの説明を受けていた。

「本来、カートリッジシステムを組み込むには、『バルディッシュ』や『レイジングハート』の様な繊細なインテリジェンス・デバイスとは相性が悪いんです。本体の破損の危険性が高いから……。しかし、この子たちは、自らシステムを搭載することを望みました……。貴女達を護れず、そして貴女達の信頼に応えることが出来なかったのが、悔しかったんでしょ……」

なのはとフェイトは、自らの相棒を見つめた。

「ありがとう……レイジングハート！」

《All light!》

「バルディッシュ！」

《Yes sir!》

モードはそれぞれ三つ。

『レイジングハート・エクセリオン』は、中距離のエクセルモード、砲撃のバスターモード、フルドライブのエクセリオンモード。

『バルディッシュ・アサルト』は、汎用のアサルトフォーム、近接特化のハーケンフォーム、フルドライブのザンバーフォーム。

破損の危険がある為、フルドライブのエクセリオンとザンバーはなるべく控えるように注意を受けた。

特に、なのはの『レイジングハート・エクセリオン』は、フレームの強化が済むまで、フルドライブは絶対に禁止と念を押されていた。

一方、クロノとリンディ達は守護騎士たちの目的について話し合っていた。

クロノの頭にタンコブが出来ているのは、先程、カノンから『仮面の男』にかまけてシャマルを逃がしたことで説教を貰い、拳骨を見舞われたからである。

同時刻、守護騎士たちが、アイオリアの説教を受け拳骨を見舞われたのは偶然である。

守護騎士たちが自らの意思で『闇の書』の蒐集をしている様に感じ

られることに違和感を覚えていたのだ。

『闇の書』は『ジュエルシード』とは違い、完成前も完成後も、自由に制御することが出来ず、破壊にしか使えない。

しかも、守護騎士たちは、『人間』でも『使い魔』でも無く、『闇の書』を完成させる為に作られた擬似人格……主の命令に受けて行動するプログラムに過ぎない……筈なのだ。

「使い魔でも人間でもない擬似生命……って。私みたいない……」
「違うわ！」

フェイトの言葉をすぐさまリンディが否定し、フェイトを叱った。

フェイトは、特殊だがそれでも『命』を受けて生まれた『人間』だ！と断言する。

守護騎士たちは、『闇の書』に組み込まれたプログラムが人の形を取ったモノでしかなく、対話能力はあっても、感情は無い……。

その筈なのだ……。

それについて、カノンが異議を唱えた。

「あのなのはを襲った……確か……ヴィータちゃんです」……そのヴィータとかいう小娘と、シグナムという奴らの将……。この2人は俺に対し、間違いなく恐怖を感じていた……。感情が無いというなら、当然『恐怖』など感じるはずが無い……。『プログラム』だから……と、お前らが偏見からそう思い込んでいるだけではないのか？」

カノンの意見に、なのはとフェイトも同意を示した。

接してみても分かる。

ヴィータにも、シグナムにも間違いなく人格と感情が存在していたことを……。

結局、『闇の書』に関しては情報を洗いなおす必要を感じ、クロノはユーノに明日、本局に共に来てくれるよう頼んだ。

皆が寝静まった深夜……。

目が覚めたクロノは夜風に当たる為、ベランダに出ていた。

「……………どうした…クロノ…!?」

同じく目を覚ましたカノンが、背後からクロノに声を掛けた。

「ええ……………実は……………僕の邪魔をしたあの『仮面の男』なんです…」

……………

クロノは、迷いながら自分の中に生まれた疑念を打ち明けた。

「あの男の動き……………何処かで見たことがある動きなんです……………。奴

のクセ……………慣れ親しんだ……………そんな感じがするんです!」

恐らく、カノンに師事していなかったら気付かなかっただろう。

カノンと出会う前のクロノでは、あの『仮面の男』に成す術も無く

やられてしまった筈だから……………。

聖闘士としての力を身につけたからこそ、クロノはあの男を圧倒できた。

故に、相手の動きに覚えがあることを感じ取れたのだ。

最も、誰かはまだ思い出せないようだが……………。

翌朝、すずかの家に泊まったはやてを迎えに行ったシグナムとシャルは、これまでのはやてとの生活を思い出していた。

はやての誕生日に『闇の書』が起動し、シグナム、ヴィータ、シャル、ザフィーラら守護騎士『ヴォルケンリッター』ははやての前に姿を現した。

しかし、新たな主となったはやては、これまでの主の様に、『闇の書』の絶大な力には興味が無かった。

アイオリアという『兄』を得ていた彼女は、既に願いは叶えられていたのだ。

それに、シグナムたちが新しい家族として加わる。それだけで充分だったのだ。

魔力を蒐集し、『闇の書』を完成させる必要性がなく、はやての望みはこのまま家族6人で、楽しく暮らしていくことだった。

アイオリアにしても、シグナムたちの存在はありがたかった。

アイオリアはこの世界の人間ではない。

確かに、このままはやての兄として暮らしていくことも悪くないが、元の世界に戻ることができるようになれば、そして再び女神アテナが邪悪と戦わなくてはならなくなったとき、彼は迷わず女神の下に駆けつけるだろう。

しかし、彼女達がいれば、自分が居なくなってもはやてが一人ぼっちになることはない。

憂い無く、戦いに身を投じることが出来るだろう。

家族6人の穏やかな暮らしが続いた。

しかし、それも長くは続かなかった。

はやての病状が悪化したのだ。

足の麻痺は、内臓にまで侵食しつつあったのだ。

原因は不明だがこのまま麻痺が進行すれば、やがてはやては……。

石田医師の言葉に、アイオリア、シグナム、シャマルは青褪めた。

アイオリアは、はやてが不憫で仕方が無かった。

神を護る闘士とはいえ、医者ではない。

アイオリアには彼女を救うことは出来なかった。

近いうちにこの世を去ってしまうかもしれない、妹の傍にいてやることしか出来ない自分が齒痒かった。

シグナムとシャマルには原因が分かっていた。

それは、『闇の書』の呪いである。

守護騎士たちの生命維持の為、『闇の書』がはやての魔力を吸い続けているのだ。

彼女達は悩んだ末、はやてとの誓いを破り、蒐集を始めることにした。

魔力を蒐集し、『闇の書』を完成させ、はやてが真の『闇の書の主』となれば、はやては助かるのだから……。

今までの主のように、高圧的でも、自分達を道具扱いせず『家族』として接してくれた小さな『主』を救う為に……はやての未来の為、『殺人』は行わないが……それ以外のことなら、はやてとアイオリアと自分達がこれからも、静かに暮らしていく為になら、何でもする。

その決意の下、彼女達は『闇の書』の蒐集活動を開始した。

「あの『黄金の鎧の男』の魔力を蒐集できれば、それで済むんだけど……」

「無理だな……。実力が違いすぎて、到底歯が立たないし、高町なのは……」

「だつたか？　の様に隙を突ける相手でない……」
それに、口には出さないがヴィータも、ザフィーラもあの男には恐怖を抱いている。

「だからと言って、アイオリアさんの魔力を蒐集するわけにはいかないし……」

実は、目覚めてはいないがアイオリアにも高い魔力が眠っていた。

『黄金の鎧の男』程ではないが、恐らくは、あの『高町なのは』と『フェイト・テストロッサ』と同レベルの魔力が……。

いくら、はやての為に何でもやるといつても、『家族』であるアイオリアは対象外である。

「アイオリアさんは私達が蒐集していることに気付いているんでしょう……？　事情を話して蒐集させてもらえないかしら？」

「……駄目だ。アイオリアは気付いているが、気付かぬ振りをして

くれているんだ。私達から告白してしまうと、彼は我らを止めざる得なくなる……」

アイオリアとて、はやてを救いたいとは思っているだろう。

アイオリアの魔力だけで『闇の書』が完成するなら、喜んで彼は魔力を蒐集させてくれるだろう。

しかし、残念ながら彼の魔力だけでは完成しない。

彼と同レベルの魔力の持ち主を後2人くらい、蒐集しなくてはならないだろう。

アイオリアは、基本的にははやての意思を尊重するつもりなのだ。

はやては、『闇の書』が完成したら、自分の病気が治ると知っても、決してそれを容認しないだろう。

『闇の書』の完成させるためには、他人に迷惑を掛けなければならぬ限り……。

相手を殺す必要は無い為、はやてが望めばアイオリアも蒐集に反対はしないだろうが……。

しかし、はやてが望まない以上、アイオリアも蒐集には反対するだろう。

それでも、やはりはやてには死んでほしくないのです、シグナムたちがはやてに黙って蒐集しているのを黙認しているに過ぎないのだ。

「アイオリアの厚意を無駄にしない為には、彼に事情を話すわけにはいかない!」

なかなか上手くはいかないことに、シグナムもシャマルもため息を吐くしかなかった。

一方その頃、本局に赴いたクロノ、ユーノ、エイミィ、カノンの四名は、クロノの魔法の師匠に当たるグレアム提督の使い魔、リーゼロッテとリーゼアリアという双子の姉妹と面会していた。

リーゼロッテに、散々おもちゃにされたクロノは辟易しながら、用

件を伝えた。

『闇の書』の事を詳しく調べる為、無限書庫でユーノの手助けをして欲しいと…。

無限書庫とは、本局にある超巨大なデータベースで『世界の記憶を収めた場所』と呼ばれている。

ただし、あまりにも巨大すぎるので、中は完全な未整理で、本来はチームを組んで年単位で調査する場所なのだ。

しかし、ユーノは遺跡発掘を生業とする『スクライア』の一族である。

そして、空間を操ることの出来るカノンがサポートするので、早い段階で『闇の書』のことを調べられるはずであった。

リーゼ姉妹は あるいは意味、鼠フヘレツトであるユーノを見たロッテが目を輝かせながら 承諾した。

しかし、ロッテが一瞬だが、クロノを睨んでいたことに、カノンは気付いていた。

無限書庫の使用の手続きに向かったユーノ達と別れ、クロノとカノンが話していた。

「……思い出しました。あの『仮面の男』の動き……ロッテの動きに似ているんです」

クロノは、先日戦った『仮面の男』の正体がロッテではないかと、疑念を持ち始めていた。

「それでか……あのロッテとかいう猫……一瞬だったがお前を睨んでいた……。弟子であるお前にいいようにやられたんだから、悔しかった……というのなら理解できる」

「しかし、ロッテが『仮面の男』だとすると……」

クロノは、信じられない……という表情をしていた。

「無論、『主』であるグレアムとかいう男が裏にいるだろうな……」

「それが、信じられないんです。グレアム提督にとっても『闇の書』

は……因縁の相手です。なのに……何故、『闇の書』の守護者に協力するのか……？」

グレアムはクロノの父、クライド・ハラオウンを息子の様に思っていた。

そのクライドが亡くなった原因である『闇の書』を憎みこそすれ、何故、協力するのか？

「あの『仮面の男』がロツテだというのは、僕の思い過ごしなのでしょう？」

そうあって欲しいと願うクロノであった。

「とりあえず、ユーノの事は俺に任せて、お前はその方面で調査しろ」

グレアムが、何か裏で動いているのかそうでないのか？

クロノは、グレアムの潔白を信じたい。

なればこそ、調べるべきなのだ。

潔白が証明できれば、それに越したことはない。

しかし、もし、彼が関与しているのなら……。

クロノには、辛い結末が待っているかもしれない。

第二十四話 疑惑（後書き）

仮面の男に卑劣な手で、魔力を奪われるフェイト。

クリスマススイヴの日に、仮面の男は遂に守護騎士達とはやてに危害を加える。

家族を喪った黄金の獅子が怒りの咆哮をあげる。

時空を越えた黄金の闘士。

「眠れる獅子は怒りで目覚める」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十五話 眠れる獅子は怒りで目覚める

無限書庫において、『闇の書』についての調査が始まった。前述したとおり、中は殆ど未整理で放置されている。

しかし、遺跡調査が得意なユーノと、空間操作の能力を持つカノンには造作もないことだった。

リーゼ姉妹は自身が受け持つ仕事があるとのことで、今は2人だけで調査していた。

「……………ん!？」

カノンがある一つの書を手に取った。

「何か重要な情報がみつかりましたか？」

「……………いや、『闇の書』には関わりないものだ……………が、どうやら俺たちの世界の事が記録されているようだ……………」

タイトルは『二つの地球』と記されていた。

「……………すまんがユーノ。少しの間、ひとりで調査を頼めるか？」

「……………いいですよ。もともとカノンさんが無限書庫の調査に付き合ってくれている理由は、『闇の書』の件だけではなく、自分達の世界に戻る手段を探ることが目的だったんでしょっ？」

「……………気付いていたか？」

苦笑しながら、カノンは目の前の情報に目を通し始めた。

流石に集中力が切れ、本日の調査は終了することになった。

宛がわれた部屋に戻ろうとすると、突然、エイミィから通信が入った。

「カノンさん！」

「……………どうした…血相を変えて…!？」

「フェ……………フェイトちゃんが…!」

アースラの医務室でフェイトは休んでいた。

リンデイ、クロノが本局に戻って留守にしていたとき、エマージェンシーコールが鳴り、近隣世界で守護騎士たちが見つかったことが報告された。

すぐさま、現場に急行したなのはとフェイトは、それぞれヴィータとシグナムと対峙した。

なのはは相変わらず話し合いの姿勢を崩さなかったが、管理局を信用出来ないヴィータと戦闘になった。

戦況はなのはが優勢だったが、例の『仮面の男』が現れ、なのはを『バインド』で拘束し、ヴィータを逃がしてしまった。

一方、フェイトはシグナムと、互いに拮抗した勝負を繰り広げていた。

しかし、やはり経験の差は埋められないのか、まだまだ近距離、中距離の戦闘力はシグナムの方が上であった。

フェイトは、禁じられている『フルドライブ』のザンバーフォームをおおうとした……その時、フェイトの胸からリンカーコアを掴んだ腕が生えていた。

此方でも『仮面の男』が現れ、フェイトのリンカーコアを奪ったのだ。

勝負を邪魔されたことに怒るシグナムだが、彼女達の事情を知っている風の『仮面の男』にやり方を選べる余裕がないことを指摘され、シグナムはフェイトに謝罪しながら、リンカーコアから魔力を奪っていった。

フェイトの救援に駆けつけたアルフにフェイトを託し、謝罪してシグナムは去っていった。

アースラの整備が終わり、試験航行中だったのが幸いして、すぐに迎えに来れたので、フェイトはすぐさま収容されたのだ。

扉が開き、医務室にカノンが入ってきた。

付きつきりで見ているリニスとアルフは、カノンに容態の説明をしていた。

魔力を奪われたフェイトは、前のなのと同じ状態になっているが、命に別状はないとのことだった。

「……大丈夫のようだな？」

「……」

フェイトは落ち込んでいるようだった。

「……失敗しちゃった。こんな事で……これから上手くやっていけるのかな？」

自分は役立たずの存在なのではないか？

こんな自分が存在しているのか？

そんな風に考え込んだフェイトに、カノンが拳骨を落とした。

「ッ痛！」

「お前は何様のつもりだ！」

珍しくフェイトに対し、声を荒げたカノンにフェイトはおろか、アルフも仰天していた。

「たかだか9歳の小娘が、失敗もせず完璧にこなせるとでも思っていたか！」

「ご……御免なさい！」

カノンは表情を和らげた。

「……リンディも、クロノも、なのはたちも、お前に完璧など求めている。『ヒト』である以上、ミスは必ず犯してしまうものだ。

俺たちの世界に『失敗は成功の母』という諺がある。失敗したことにうじうじ悩む暇があるなら、今回の失敗を糧にしてそれを次回に生かせ！」

最初から失敗することを前提に行動するのは問題外だが、今回はそれほど致命的なモノではない。

未熟な内は失敗もまた成長の為の糧である。

失敗は早いうちに経験しておくべきなのだ。

長いこと失敗の経験がなく、大人になってから大失敗をやらかすと、

耐性が付いていない為、再起不能になりかねない。

「とにかく、失敗したならそれを次で挽回するよう心がける。そうやってうじうじと落ち込まれるほうが、他のみんなに迷惑だ!」、「……うん……。ありがとうカノン……」

「だからと言って、『人間だからミスはする』……と、開き直るなよ!」

と、最後に釘を刺すカノンに、フェイトは苦笑しながら頷いた。

「流石ですね。あのフェイトをあつさり立ち直らせるなんて……」
育ての親であるリニスは、フェイトの気質をよく知っていたので、あつさり立ち直らせた今の主に贅辞を贈った。

しかし、カノンは考え事をしていて生返事を返すだけだった。

(『仮面の男』……、もし、クロノの予想通りあの『猫』共ならば……正体はつきりした時、報いをくれてやる!)

何だかんだいっても、フェイトを卑劣な手で追い詰めた『仮面の男』に怒りを燃やしているカノンだった。

一方その頃、八神家においても『仮面の男』についての対応を話し合っていた。

今のところ、自分達に協力的な『仮面の男』だが、その目的が分からない以上、警戒しなければならなかった。

もしかしたら、『闇の書』を利用することが目的なのかもしれないからだ。

しかし、完成された『闇の書』ははやてにしか扱えない。しかも『真の主』となつたはやては、絶大な力を手にする。

洗脳や脅迫など通用しなくなるだろう。

そんなはやてを、どう利用するといふのか?

疑問が晴れることはなかった。

「なあ、『闇の書』を完成させてさ……はやてが本当のマスターになつたらさ……それではやては幸せになれるんだよな？」

「何を今更……」

「『闇の書』の主は大いなる力を得る。守護者である私達が誰よりも知っていることでしょうか？」

突然のヴィータの疑問に、シグナムとシャマルが一笑に付した。

「そうなんだよ……そうなんだけどさ……。アタシ……何かさ……大事なこと忘れてる気がするんだ……」

ヴィータが何か引つかかっている様だが、しかし蒐集を止めるわけにはいかない。

蒐集を止めてしまったら、待っているのははやての『死』のみ……。

「はやて……!」

その時、アイオリアの叫び声が聴こえた。

慌ててはやての部屋に向かうと、アイオリアに抱かれながら胸を押さえて苦しんでいるはやての姿があった。

「シャマル! 救急車を呼べ……!」

「は………はい!」

アイオリアの指示にすぐさま従うシャマル。

「………はやて!」

「主・はやて……しっかりして下さい……!」

「………主……!」

病院に到着してしばらくして、はやては何事も無いように振舞っているが、念の為そのまま入院することになった。

もう一刻の猶予も無い。

『闇の書』の侵食の速度が速くなっている。

はやての体は持つて後、一ヶ月。

守護騎士たちは疑問を押さえ、決意を新たにした。

シグナムたちは蒐集する為に病院を後にしたが、アイオリアは面会時間ギリギリまで、はやての傍にいた。自分出来ることはこれくらいしかない……表情には出さないが、アイオリアの心は悲痛に苛まれていた。

12月24日。

アイオリアがいた世界同様、この世界もクリスマス・イヴ。

本来なら、イエス・キリストの降誕祭前夜であり、家族と過ごす日なのだが、日本では何故か恋人と共に過ごす日になっている。

「以前、星矢達に聞いた事があったが……、本当に日本ではこの日は恋人達だらけだな……」

日本の独自性という奴なのか……アイオリアにはよく分からないが、ただのイベントと化している聖なる日の前夜を呆れながら眺めていた。

「まあ、俺の信じる神はアテナだし……聖域では12月24日も25日もただの平日に過ぎないからな……。どうでもいいことだが……俺たちは本来の趣旨どおり家族と過ごすとするか……」

聖域では、別にキリスト教の祭りなど関係が無い。

だから、ほとんど聖域で過ごしていたアイオリアにとって、クリスマスを祝うなど初めての経験である。

今日は、病院でささやかに祝うことになっていた。

自分と、シグナムたちと、今年になって出来たはやての友人、すずか、なのは、フェイト……そして、3人のもう1人の友人達ではやての病室に集まることになっていた。

無論、アイオリアはなのは達が、シグナム達と敵対していることなど知らない。

兄、アイオロスを喪って13年……新たに出来た『家族』を再び喪ったアイオリアの怒りが爆発した。

「許さん……絶対に許さんぞ……！」

アイオリアの小宇宙に反応して、八神家から獅子座の聖衣が飛来し、その身を包んだ。

「な……何だと！」

「……ま……まさか……この男も『聖闘士』!?」

驚愕する『仮面の男』に拳を向けるアイオリア。

「さあ、受ける！獅子の牙を……！『ライティングプラズマ』……！」

第二十五話 眠れる獅子は怒りで目覚める（後書き）

グレアムの暗躍を確信するカノンとクロノ。

そのころ、怒りに燃えるアイオリアが圧倒的な力を仮面の男に振るっていた。

時空を越えた黄金の闘士

「獅子の牙」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十六話 獅子の牙

その頃、本局では、無限書庫で収穫を得ていたカノンが本局の廊下を歩いていると、クロノと見たことが無い少年が真面目な顔で話していた。

「クロノ……。その小僧は何者だ？」

「あつ……。カノンさん！」

「へえ……。この人がクロノ君の言っていたカノンさんかい？」
身長はクロノよりも高いが、どうやら同い年のようである。

「初めましてカノンさん。僕は査察官補佐を務めているヴェロツサ・アコースです……。クロノ君とは親友と言っていていい間柄ですね……。」

「ほう、お前の様な小僧が補佐とはいえ『査察官』とは……。よほど管理局は人材不足なのだ。そのような大切な役職を小僧に任せるとは……。」

「……。相変わらずきついですね……。まあ、人手不足なのは確かですが……。でも、ミッドチルダでは、能力がある者は年齢に関係なく評価されるんですよ。」

カノンの痛烈な皮肉に苦笑するクロノとヴェロツサ……。

「魔導師限定だろうが……。魔法を使えるか使えないか……。と、いつか魔法以外の力を認めていないだろうに……。」
痛い所を突かれ、更に苦笑する。

実際、魔導師以上の戦闘力を誇る『聖闘士』の存在を、本局は地上にも航空にも秘匿しており、本局の人間でもその存在を知っているのは執務官以上の局員だけであり、一般局員達には知らされていない（アースラのクルーとシビック・エスクード提督の部下達は勿論、全員知っているが、守秘義務を課せられている）。

聖闘士の力は、『レアスキル』として分類できるレベルを超越しているので、戦闘力限定とはいえ魔導師以上の存在を公にすることを躊躇っているのだ。

「それで……こんなところで何を話していたんだ？」

「はい……。実はグラム提督の件の調査をロツサに頼んでいたんです……。僕よりもロツサの方がこういう調査に向いているので……」

「それで結果は……？」

カノンの問いにロツサの表情が曇った。

「……残念ながら……クロノ君の予想は……当たっていません……」
ロツサの答えに、クロノは俯いてしまった。

「……どうやら、グラム提督は今回の事件が起こる前に既に『闇の書』に選ばれた新たな主を突き止めていたようなんです」

「ほう……では、何故捕らえなかったんだ？」

「……恐らく提督は、完成直前に『主』諸共、『闇の書』を永久封印しようと考えたのでしよう……。『闇の書』の主を監視して、覚醒が始まるまでの間に封印に使うための『ストレージデバイス』を開発させています」

ストレージデバイス『デュランダル』。

広域凍結魔法『エターナルコフィン』がセットされており、おそらくこれを使って『闇の書』の主を永久に凍結させてしまおうという計画なのだろう。

カノンは、『水瓶座^{アクエリアス}』のカミュの『フリージングコフィン』のようなモノだと想像した。

この技は、絶対零度に限りなく近いカミュの凍気で造り出した『氷の棺』であり、黄金聖闘士数人の力を持ってしても砕くことが不可能と言われている。

星をも砕く『天秤座^{ライブラ}』の武器か、カミュ以上の凍気……すなわち絶対零度を身につけた氷の闘技を使う聖闘士にしか砕くことは出来ない（冥界三巨頭の1人、天貴星グリフォンのミーノスは氷河の『フリージングコフィン』をあっさり砕いたが……）。

「それで……『闇の書』の主とはどういう人物なのだ？」

ただの興味本位で聞いたただだったが、その人物の名を聞いて驚愕

した。

「……八神……はやて……だと……」

カノンが、フェイトとアルフの次に出会った少女で、今ではなのはとフェイトとも友情を育んでいる……そして、アイオリアの『妹』……。

「八神はやては確かに『闇の書』の主ですが……彼女はまだ何もしていない……。『魔導師襲撃事件』も守護騎士たちが勝手にやっていることだし、彼女自身は、永久凍結されるような犯罪者じゃない……。違法だ！……何よりも……僕も母さんも……こんなことは望んでいない！」

クロノとて『闇の書』には恨みがないとは言えない。

しかし、何の罪も無い『八神はやて』にその責を負わず気など毛頭ないのだ。

何よりも……グレアムにこれ以上間違った手段を取らせたくなかった。

「おそらく『仮面の男』　つまりリーゼ達ですが　今日、

事を起こすと思われます。僕はこれから彼女達を捕らえに行きます。

ロツサは提督の方を頼めるかい？」

「わかった。こちらは任せてくれ」

「カノンさんは……行くぞクロノ！！」……どうす……って……うわああああああああああああああ！！」

クロノの首根っこを引つ掴み、カノンは転送ポートに駆け出した。

「……あれっ!？」

その場に残されたロツサはポカーンと走り去る2人を見つめていた。

「ど……どうしたんですか……カノンさん？」

カノンが何故か焦っている事に、クロノは不思議に思った。

「昨日、フェイトから学校の友達たちと一緒にはやての入院している病室でクリスマスパーティーをすると聞いた……その日ははやて

の家族も来る……とのことだ……」

フェイトとなのはがはやてと友人になった事を先程聞いたクロノも、焦りが生まれた。

「じゃあ、フェイト達と守護騎士達が鉢合わせに……」

「問題はそれだけじゃない！」

「どういふことですか？」

「お前が先程言っただろう。あの猫共は、今日、事を起こす……と……」

確かにリーゼ達は、目的を果たす為にフェイトたちをどうにかするかもしれないが、せいぜい足止めをするだけだろうとクロノは思っていた。

いくらなんでも、流石に殺しはしない筈……。

「俺が心配しているのは、フェイト達じゃない！あの猫共だ！」
「まずまず、分からなくなる。」

カノンは、フェイトを傷つけた『仮面の男』に報いをくれてやると言っていたのに、何故、今になって心配するのか？そして、何故心配する必要があるのか？

「はやての家族の中には、俺と同格の男がいる……」

「……ゴ……黄金聖闘士!？」

「そつだ……はやてを妹のように思っている『あの男』がはやてに危害を加えようとするあの猫共を生かして帰す筈がない!……自業自得とはいえ、あの猫共には使い道がある……。まだ死なれては困る……」

アイオリアから放たれた無数の閃光が『仮面の男』に襲いかかった。
アイオリアを聖闘士と知って咄嗟に防御魔法を展開していたのだが、その様なモノは大して役にも立たない。
いや、多少は役に立った。

何とか直撃は避けられたのだ。

しかし、かなりのダメージは受けた。

「……クソッ！」

「これが『聖闘士』……アースラの報告通り……我々の常識を超えている……」

「あの男がこの技を放ったとき、あの時、クロスケから感じた宇宙を感じた……」

「つまり、クロノが『聖闘士』の力を持っているってこと？」

前に、『仮面の男』　リーゼロツテ　が弟子であるクロノにまったく歯が立たなかった。

魔導師としては、まだまだロツテの方が実力は上だった筈の相手に、完膚なきまでに叩きのめされたのだ。

実は、クロノが聖闘士の修行をしていることは、アースラのクルー以外誰も知らなかったのだ。

特に今、『仮面の男』の前にいる男は、黄金聖闘士の中でも1、2を争う屈強さ誇る……と謳われた『獅子座』^{レオ}のアイオリアである。

アイオリアは、拳や蹴りによる聖闘士の基本的な闘法を主体とする聖闘士である。
サイコキネシス

ムウの様に念動力に長けているわけでもなければ、カノンの様に空間を操る力も無い。

しかし、だからと言って彼が2人よりも弱いという訳ではない。

正面からぶつかり合えば、カノンもムウもアイオリアに勝つのは五分以下の確率であろう。

むしろ基本を極めているからこそ、彼の力は絶大なのだ。

だからこそ、かつて『逆賊』の弟と見下されては居ても、誰しもが彼に対し一目置き、屈強の勇者と称えられる程の聖闘士だったのだ。

「とにかく分が悪い……此処は退くしか……」

「馬鹿な……此処で退いたら『父様』からの命令が果たせなくなる。今、この時のみ……『闇の書』を封じることの出来るチャンス……。何

としてでもあの男を排除して……」

「……そうだな……。幸いあの男は高い魔力を持っていてもまだ目覚めていない……。飛行は出来ない筈だから、上空から砲撃魔法で攻撃しよう……」

そう言うのと、『仮面の男』達は、飛行魔法で遙か上空に昇っていった……。

「いくぞ……『ブレイズキャノン』……！」

『仮面の男』 リーゼアリア の放ったクロノ以上の威力の『ブレイズキャノン』がアイオリアに直撃した。

「これなら奴も……って……嘘!？」

煙が晴れ、仮面の男達が見たものは……無傷で立っているアイオリアの姿である。

彼女達は、アースラからの報告を思い出した。

黄金聖闘士の纏う黄金聖衣は、いかなる攻撃にも耐えうる究極の防具である。

ましてや、修復仕立てで生命の息吹に溢れる獅子座の聖衣を、『ブレイズキャノン』程度の砲撃魔法では傷一つ付けることも不可能である。

たとえ、なのはの『スターライトブレイカー』であっても……。

「……ここは、もう撤退しか無い」

「……でも!？」

逃げることを考慮に入れ始めたアリアにロツテが反論しようとする。「まだまだ暴走には時間がある……。このままここに留まっただけ……。あの男にやられるだけ……。それでは『父様』の命令を果たすことも出来なくなる……」

「……」

ロツテも納得したのか、再び飛行魔法で上空に昇り距離を取ろうとした。

「……逃がすと思うか……！」

「……何ッ!？」

「身体が……引き摺られる……!？」

再び放たれた『ライトニングプラズマ』にロツテ諸共、アリアもズタズタにされた。

彼女達が被っていた仮面が砕け散り、変身魔法が解け、彼女達は本来の姿に戻った。

しかし、相手が女と解つても今のアイオリアには容赦という文字は存在しなかった。

基本的にアイオリアは、星矢達同様フェミニストである。

しかし、大切な家族を非道な手段で奪った者に対する怒りが、アイオリアに容赦という文字を消し去っていたのだ。

倒れているロツテの足を容赦なく踏み砕いた。

「ギャーーーーー！！」

足を砕かれたロツテは、その場でゴロゴロと転がり悶絶した。

「ロツ……ロツテ……」

痛がる妹に這いながら駆け寄ろうとするアリアの鼻面に容赦なく蹴りを放つ。

アリアの鼻の骨がへし折れ、鼻血が飛び散った。

「痛い……苦しいか……だがその程度……はやてが受けた苦しみの何万分の一にも値せん！！」

転移魔法で逃げようにも、光速の動きを持つアイオリアの攻撃は余りにも速すぎて、魔法を使う暇すらなくリーゼ達はもはや虫の息寸前であった。

肋骨が数本折れ、鼻の骨は砕け、全身は血塗れになっていた。

「とどめだ……あの世でヴィータたちに詫びる！！」ライトニングボルト！！」

獅子の牙が、リーゼ達を打ち抜こうとする瞬間、転移してきたカノンがアイオリアの手首を掴み、遮った。

「そこまでだ！アイオリア……」

「邪魔をするな、カノン！！」

「そうはいかん！その猫共には使い道がある」

「何だと！！」

「その猫たちには、はやてと守護騎士たちの代わりに責任を取ってもらわねばならんのでな……」
今度の事件が解決した後、管理局ははやてに管理責任を問うて来るかもしれない。地球の日本の常識では、9歳の子供に責任能力などないのだが、ミッドチルダにおいては9歳でも能力があれば第一線で活躍している魔導師がいる。

管理局の連中は自分達の尺度で他の世界の人間達を測る傾向がある。それは、リンデイのような人物にも見られるのだ。

リンデイはフェイトだけではなく、なのも管理局に勧誘している。しかし、日本という国では9歳で就職など許されていない。

同じ地球でも、他の国ならばなのはくらいの年齢で働いている者もたくさん居るが……少なくともこの日本という国では、15歳までは義務教育が課せられ、それまでの就労は認められていないのだ。

勿論、カノンはやてを庇うつもりだが、それでも今回の事に責任を取る者が居なければならぬ。そこで、カノンはグレアムとリーゼ姉妹に白羽の矢を立てたのだ。

つまり、今回の事件の黒幕をグレアムとリーゼ姉妹に仕立てるつもりなのだ。

そしてそれはあながち冤罪とは言えない。

目的はどうであれ、グレアムとリーゼ姉妹は、アースラの捜査を妨害し、クロノ執務官に攻撃を仕掛け、囑託魔導師であるフェイトに危害を加え、守護騎士たちの蒐集に協力したのだ。

更にカノンには、冒頭で言った様に無限書庫において収穫を得ていたのだ。

それは偶然見つけたモノで、今回の事件を丸く治めるのに役立つモノであった。

これを使えば、グレアム達の言い分を完全に封じ込めることに成功するであろう。

それが何かは後日、明らかになるだろう。

「だから、殺しては駄目だ。生きたこいつらの身柄が必要なのだ……」

「しかし……！」

なおも怒りが治まらないアイオリアに、カノンが宥めに入った。

「と、言うかこれ以上、フェイトを怖がらせないで欲しいな……」

アイオリアが、カノンの示す方に視線を向けると、アイオリアの怒気と殺気に震えているのはとフェイトの姿があった。

幼子の怯えた姿を見て、漸く冷静さを取り戻したアイオリアは、拳を下ろした。

「……解った……お前に任せよう……」

「……すまん……感謝する……ッ何!？」

この時、この場にいる全員が息を呑んだ。

そして、全員同じモノに視線を向けた。

先程まではやてが包まれていた黒い光……。

それが晴れて……その場に居たのは……はやてではなく、銀髪の間書の意思とも呼べる存在だった。

第二十六話 獅子の牙（後書き）

遂に覚醒した『闇の書』の管制人格。

結界内に取り残されたアリサとすずか。

闇がフェイトを取り込もうとしたとき、それを遮る者が……。

時空を越えた黄金の闘士

「闇の書」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十七話 闇の書

銀髪の女性の姿となったはやて……いや、『闇の書』の管制人格は涙を流しながら、なのはとフェイトに狙いを定めていた。

「……『デアボリック・エミッション』……」

愛しき守護者を目の前で破壊したなのはとフェイト（犯人はリーゼ姉妹なのだが……）に空間砲撃を放ってきた……が、その砲撃はカノンがあっさりと消し飛ばしてしまった。

「……クロノ。この場は俺とアイオリアに任せろ！お前はそこで虫の息になっているバカ猫共をさっさと回収しろ！！」

師の指示に従い、クロノはリーゼ達を抱え、本局に転移していった。

「止める！」

なのは達に攻撃を続けようとする『闇の書』にアイオリアが静止を掛けた。

「何故……あの娘たちを攻撃する」

「……守護騎士たちを破壊した者たちを破壊する……それが『主』の願いだ……アイオリア……」

「……」

『闇の書』の返答に、アイオリアは失望の表情になった。

「……シグナムたちの話では……『闇の書』は絶大な力を主に与えるという話だったが……ヴィータたちを破壊したのが本当にあの2人だと思っているのなら……どうやら、過大評価だったようだな……」
リーゼ達は、アイオリアの目の前でなのはとフェイトの姿から、『仮面の男』の姿に変わったが……それを見る前に既に、あの2人がなのはとフェイトではないことなど、すぐに見破っていた。
変身魔法とは、あくまで姿を変えるだけであり、その人そのものに

同化できるわけではない。

あのなのはとフェイトは、はつきりいつて気配が違いすぎていた。そんなお粗末な変身……見破る事など『黄金聖闘士』には造作もなかった。

彼らを騙すなら、南氷洋の『海将軍』ジェネラルリウムナデスのカーサ級の変身能力が必要である。

「……本物が偽者の区別くらいも付けられん阿呆が……さっさと引っ詰め!!」

アイオリアが『小宇宙』を高め、『ライティングボルト』を放とうとしたとき、またもカノンが止めた。

「止める!!」

「また止めるのか?カノン!!」

「奴を始末することなどは確かに容易い……。しかし、それははやくにとどめを刺すことと同義だぞ!!」

カノンは説明を始めた。

『闇の書』はロストロギアであると同時にデバイスでもある。

なのはやフェイトが使う『インテリジェントデバイス』や守護騎士たちが使う『アームドデバイス』とも違う……。『融合型デバイス』または『ユニゾンデバイス』とも呼ばれる。

これは、ミッドチルダ式の『インテリジェントデバイス』の設計思想を極端化したモノで、自意識を持つデバイスに人の姿を与え、状況に応じて『融合』ユニゾンすることで魔法管制と補助を行う。

他のデバイスを遙かに超える反応速度と魔力量を術者は得ることが出来るが、融合適正を持つ術者は少ない。

更には、デバイスが主の身体を乗っ取ってしまう『融合事故』の危険もあるので、製品化するには至らなかった。

「今の『闇の書』の状態が融合事故だ。完全にはやての身体を『闇の書』が乗っ取っているから、はやての面影がないだけで、アレは間違いないはやての身体なのだ……。奴にお前の拳など放てば間違いない、はやてを殺してしまうぞ!!」

「では、どうすればいい？」

「とにかく今は戦略的撤退をするしかない……」

そういうと、カノンはアイオリアに肩を貸し、飛行魔法でその場を離れた。

なのはとフェイトも、ユーノとアルフと合流し、『闇の書』から離れた。

一方、本局の医務室では、アイオリアに半死半生にされたリーゼ姉妹の治療が行われていた。

「どうですか？先生……」

「……これは……完治するには相当の時間と……彼女達の努力が必要ですよ……。下手をすれば……一生ベッドで寝たきりになるでしょう……」

これほどのダメージを負ってしまったえば、いかに強力な魔導師の使い魔とはいえ、完治するのは難しいようである。

かつて、魔法の指導をもらった相手の 自業自得だが

無残な姿を痛ましげに見つめていた。

そこへ、ロツサに伴われ、グレアムが病室に入ってきた。

グレアムは、自分の使い魔の状況に絶句していた。

「先生……すいませんが……」

「わかりました。彼女達の容態が急変したらお呼び下さい」

そう言つて、医師は席を外した。

クロノはグレアムに哀しげな視線を向けた。

「……提督……」

「……君は……既に……私が何を企んだか掴んでいるんだな……」

査察部所属のロツサが自分を拘束に来たとき、グレアムは自分の計画が潰えた事を悟った。

「……提督の行動は……はっきり言つて状況を悪化させる原因にし

かなりません……。何故なら……。カノンさんとユーノが無限量庫で見つけたんです……。提督の計画よりも遥かに確実で、安全な方法を……」

「……なんだって!？」

「……グレアム提督とリーゼ姉妹の行動で……。かえってその方法を使い難くなつてしまいました。多分……。そのことも提督の罪状に含まれるでしょう……」

『闇の書』の完成前に、その方法を使えば……。『闇の書事件』は誰も傷つかず、誰も悲しまずに、そして……。11年前の様な悲劇を起こさず、解決できたであろう……。

結局、グレアムの行動は完全な邪魔でしかなかったのだ。

「……その方法とは何だね……。クロノ……」
グレアムの問いにクロノは静かに答えた。

そして、その方法を聞いたとき……。グレアムは……。己の行動の愚かさを悟った。

「……あと、カノンさんがこの事件が終わった後……。聞きたいことがあるそうです……。下手に誤魔化すとカノンは容赦しないので……。観念して素直に答えることをお勧めします……」

現場が気になる……。といい、退室しようとするクロノに、グレアムは待機状態のデバイスを手渡した。

「……氷結の杖『デュランダル』……。これをどう使おうと君の自由だ……」

クロノは黙ってそれを受け取り、退室していった。

「……結局……。私は……。クライドの仇を討つどころか……。とんだ道化を演じていただけのようだな……」

自らの愚行をあざ笑うグレアムを……。ロッサは哀しげに見つめていた。

『闇の書』から距離を取ったカノン達は、『闇の書』が砲撃魔法を放とうとしていることに気付いた。

「……あれは!?!」

カノンが小宇宙で意識を飛ばし、『闇の書』が放とうとしている魔法を確認した。

「奴が放とうとしている魔法は……『スターライトブレイカー』だ!」

「なのはの魔法!?!」

「何で!?!」

なのはのオリジナル魔法である『スターライトブレイカー』を何故使えるのか……。

その疑問に答えたのはユーノだった。

「なのはは一度、蒐集されている……『闇の書』……いや、『夜天の魔導書』は本来、優れた魔法を記録する為の魔導書……。奴は蒐集した相手の魔法を使うことが出来るんだ」

「……感じる魔力から見て、なのはの『スターライトブレイカー』よりも強力なようだな……」

その時、バルディッシュから結界内に一般人が取り残されていると報告が入った。

「すいませ〜ん!ここは危ないんでそこでじっとしてください」

「……えっ!?!」

「今の声って……!?!」

なのはの声を聴き、振り返った少女達は……アリサとすずかだった。

「アリサちゃん……すずかちゃん!?!」

「……なのは……フェイト……!?!」

「それに……カノンさんに……アイオリアさん……!?!」

アリサとすずかは、混乱の極致だった。

楽しいクリスマス・イヴの日に、突如起こった異常事態。

家族連れやカップルたちで一杯のはずなのに……あたりを見回せば誰もいない。

空の方に妙な光の球が見え、とりあえず避難をしようと思えば、聴きなれた声が聞こえ振り向けば、親友2人がなにやら妙な格好をしていた。

無論、それはなのはとフェイトも同様だ。

取り残された一般人が、よりにもよってアリサとすずかだった。自分達の今の姿を見られてしまった。

「……来たぞ！」

カノンの声に我に返ったなのはたちは、『闇の書』の『スターライトブレイカー』が接近してくるのを確認した。

「フェイトちゃん……アリサちゃんとすずかちゃんを……」

「うん」

なのはに促され、フェイトは2人の周りに結界を張ろうとしたが……

「その必要はありません！」

「……ムウ!?」

「『クリスタルウォール』！」

突如現れたムウが、全方位に『クリスタルウォール』を張り巡らせた。

『スターライトブレイカー』は、『クリスタルウォール』に反射され、『闇の書』に撥ね返っていったが、『闇の書』は防御魔法を展開し、それを防ぐ。

「……遅れても申し訳ない……」

「いや、ナイスタイミングだった……」

なのはとフェイトでも防ぐことは出来ただろうが、かなりの負担が掛かっただろうが、ムウの『クリスタルウォール』なら、いかに『スターライトブレイカー』でも打ち抜くことは困難である。

『クリスタルウォール』にも弱点はあるが……、それはそう簡単に

は見破ることは出来ないだろう。

「……とりあえず、アリサとすずかの方は私が引き受けましょう……。この2人のことは気にせず……貴方達は目の前の件にしゅうちゅうしてください」

カノンやアイオリアよりも、ムウの方が誰かの護衛には適している。「……ちよつと……今、何が起こっているのよ!? それに、なのはとフェイトは何をやるうとしているの? それにあの変な格好は何!? コスプレ?」

なのはとフェイトは、興奮しながらもこの状況の説明を求めるアリサを軽くあしらってムウを見て、安堵していた……が……。

「見られちゃったね」

「……うん」

その時、エイミーから通信が入った。

【なのはちゃん、フェイトちゃん……そしてカノンさんと……え〜つと……】

「……アイオリア……だ」

【アイオリアさん! クロノ君から連絡……『闇の書』の主……はやてちゃんに投降と停止を呼びかけてって!~!】

「おい、はやて……そして、『闇の書』……聴こえるか! さっきも言ったがヴィータ達を傷つけたのはなのはとフェイトじゃない! 止まれ!~!」

「……その程度の事は理解しているよアイオリア……さっきのお前の言ではないが、アレがその2人ではないことぐらい……すぐに分かる」

アイオリアの叫びに、『闇の書』は静かに答えた……しかし……。

「我が主は……自分の愛する者たちを奪った世界が悪い夢であつてほしいと願った。我はただ……それを叶えるのみ……主には穏やかな夢の中で……永久の眠りを……」

「何だと!!……はやてが……本当にそんなことを願っていると思うのか!」

確かに、目の前で守護騎士たちを喪った直後はそう願ったかもしれない……。だが……。

「そして、愛する騎士たちを奪った世界には……永久の闇を!」

『闇の書』が手を翳すと、地面から触手を持った生物が召喚され、その触手がなのはとフェイトを拘束しようとするが……。

「フン!」

「失せる!!」

カノンとアイオリアの光速拳で一瞬のうちにズタズタにされてしまった。

「……これが……本当にはやての願いだともいうのか……。悲しみに満ちて……混乱していたときの状態に思った事など……本当の願いでないことくらい……理解できるだろう!……今まで、はやての傍にいて……貴様は何を見てきた!!」

「そうです……。そんな一時の悲しみの中での願いを叶えて……はやてちゃんは幸せになれるの!心を閉ざして……何も考えずに……『主』の願いを叶えるだけの『道具』でいて……貴女は……それでいいの!」

「……我は魔導書……ただの『道具』だ……」

『闇の書』の返答にアイオリアが激昂した。

「ふざけるな!なら、その涙はなんだ!!……ただの『道具』が……そんな悲しみに満ちた涙を流せるか!!」

「……この涙は『主』の涙……。私は『道具』だ……。悲しみなど……ない……」

フェイトが叫んだ。

「……悲しみなどない……。そんな言葉を……そんな悲しい顔で言っただって……誰が信じるもんか!!」

「貴女にも……心があるんだよ!悲しいって言っていいんだよ!!」
はやてはきつと、それに応えてくれる。

優しい娘だから……。

「だから、はやてを解放して！武装を解いて！！」

……。その時、『闇の書』の顔が歪み……苦しげになった。

「……早い……もう……始まったのか……。『あの男』が……もうすぐ……」

『闇の書』の苦しみに呼応して、辺りが震動し始め、火柱が立つ。

「……もうすぐ私は……『あの男』に全てを乗っ取られる……そうなる前に……主の望みを……叶えたい……」

「この駄々っ子！」

そう叫ぶと、フェイトは『闇の書』に向かって突撃した。

「待て！不用意に近づくな！！」

「言うことを……聞け！！」

カノンの制止の声に気付かず、フェイトは突撃した。

「お前も……我が内で……眠れ……」

フェイトの一撃は、魔方陣で防がれ……金色の光がフェイトを包もうとしたとき……突然、襟首を攫まれ放り投げられた。

「エッ！？……」

フェイトが目にしたのは……自分の代わりに『闇の書』に吸収されるカノンの姿だった。

「……カ……カノン！！」

第二十七話 闇の書（後書き）

闇の書に取り込まれたカノンが目を覚ますと、そこは十二年前の聖域に似た世界だった。

教皇になっている兄から呼び出され、カノンは大いなる存在と再会する。

カノン達がこの世界に来た原因が今、明かされる。

時空を越えた黄金の闘士

「女神顕現」

君は、小宇宙を感じたことがあるか!?

第二十八話 女神顯現（前書き）

今回、私の滅茶苦茶な設定の一部が明らかになります。

第二十八話 女神顯現

カノンが取り込まれるのを見て、フェイトが絶叫を上げた。

「カノン……カノン……。わ……。私のせいで……」

自分の不用意な行動で、カノンを窮地に追いやってしまったことに……フェイトは自責の念に囚われ、蹲って泣きじゃくっていた。

【……落ち着きなさいフェイト！】

フェイトの脳裏にムウのテレパシーが届いた。

【……でも……】

【大丈夫です……カノンはあの程度の事で、どうにかなるほど柔ではありません……】

泣きじゃくるフェイトにアイオリアが近づいてきた。

「信じる……。カノンは……黄金聖闘士はあの程度ではやられはせんことを……」

「……はい……」

フェイトは、顔を上げ涙を拭い去った。

「……我が主とあの男は、覚めることない眠りの内に、終わりなき夢を見る。我が内で眠りに入った……。生と死の狭間の夢……。それは……永遠だ」

『闇の書』は静かに告げた。

それに対する応えは……ムウの冷笑だった。

「……愚かですね……。永遠など……。『神』以外のモノには不可能……。そして、カノンはそのような安穩の『夢』に溺れることなど、彼自身が許さないでしょう……」

そう、カノンにはその様な『夢』に逃避するなど許されない。

カノン自身がそれを許さない。

例え、償いを終えたとしても……彼はその『罪』を一生背負っていかなくてはならない。

その『罪』をなかつたことにする『夢』に逃げてはならないのだ。

「お目覚めですか……カノン様……」
目を覚ましたカノンの傍らに2人の男が傳っていた。

「……お前たちはカストとポルク……!?」
13年前、兄サガの従者であった2人の少年であった。

「そうですね……まだ完全には目が覚めておられませんか……。朝食の用意が出来ております……顔をお洗いになってお支度を……」

カノンは、今の状況が理解できなかった。

何故、兄の従者が自分に傳えているか……。

第一、この2人はカノンの存在など知らなかった筈なのに……。用意された朝食を食べていると、カストが声を掛けてきた。

「先程、教皇からの使者が来られました。朝食を済ませたら、教皇の間に赴くように……とのことです」

「……教皇？」

「……まだ寝ぼけておられるのですか？お兄君のサガ様ではありませんか……。サガ様が教皇になられたので、カノン様が双子座ジヘミニアの黄金聖闘士ゴールドセイントとなられたではありませんか……」

カノンの意識が完全に覚醒した。

そして、悟った……。

これは、『夢』であることを……。

次期教皇に選ばれたのは、サガではなくアイオロスであったはずである。

これは、もしこうなっていたら……と思ったカノンの願望が生み出した『夢』であることを……。

そして、カノンは現状を把握した。

自分は確か、フェイトを庇って『闇の書』に取り込まれた筈。

この『夢』は、おそらく『闇の書』が自分の願望を元に作り出したモノであることを……。

カノンは十二宮を通り、教皇の間に向かっていた。

これが『夢』だとわかったからさっさと脱出するべきなのだが……カノンは少し興味が出てきたのだ。

偽教皇ではなく、真の教皇となっている兄の姿を……。

この『夢』を終わらせるのはそれを見た後でもいいだろう……と。教皇の間に入ったカノンは、玉座に座る教皇の前に跪いた。

「……教皇。双子座のカノン……参りました……」

「うむ。カノンよ……。本日、お前を呼んだのは他でもない……。アテナがお前に拝謁をお許しなった……」

「……はあ!？」

思いもかけない言葉に、カノンは目が点になっていた。

先程、通り抜けてきた十二宮。

そこにいた黄金聖闘士たちは、まだ幼かった。

間違いなく、この『夢』は13年前の聖域である。

つまり、この当時のアテナは、まだ赤子の筈……。

なのに、何故、アテナがカノンに拝謁を許すのか……？

「身体を清めた後、私と共にアテナ神殿に向かうぞ……。私は既に沐浴を済ませてある。さっさと沐浴して来い」

教皇が、兄としての口調になり、カノンを沐浴場に放り込んだ。

理解不能のまま、沐浴を済ませたカノンは、教皇と共にアテナ神殿に向かっていた。

教皇はマスクを脱ぎ、その素顔を見せていた。

「おい、サガ!」

「……何だカノン……」

「アテナはまだ赤子だろう……どういう事だ?」

「……お前は気付いているだろう……この世界が『闇の書』とやらがお前の心の奥底にある願望から作り出し、お前に見せている『夢』

だと言っことを……」

「!？」

カノンは驚愕した。

目の前の兄が、『夢』の産物ではなく、サガの自意識を持っていることに……。

カノンとサガは、揺り籠に眠る女神の傍に到着した。

「……アテナ……」

サガがアテナに語りかけると、アテナの身体から『小宇宙』が立ち昇った。

「……この『小宇宙』は……」

アテナから感じる『小宇宙』は……とても雄大で暖かさに満ちていた。

「このような『小宇宙』……決して作り出すことなど不可能……。

これは間違いなく本物の『アテナ』の『小宇宙』……!？」

その時、アテナの身体が眩い光に包まれた。

光が収まり、カノンが目を開くと、そこには……。

【お久しぶりですね……カノン……】

そこには、『アテナの聖衣』を身に纏った……アテナの化身、城戸沙織が立っていた。

「……ア……アテナ……」

カノンは、無意識の内に沙織の前で跪いていた。

そして、沙織の顔を見て驚愕した。

「……アテナ……。……御髪が……」

沙織の長く美しい髪が短くなっていた。

【……月の魔女ヘカーテさんに差し上げました……。それに私は前から短くしたかったから……。さっぱりしましたわ……】

あっけらかんとした沙織に、カノンは啞然としていた。

その頃、『闇の書』と融合しているはやても……目覚めた。
はやての前に『闇の書の意味』である管制人格の姿があった。

【お眠り下さい……『あの男』が私と貴女を喰らい尽くす前に……
貴女の望みを……】

【……私の……望み】

フッフッフ……いい加減観念して、私にその身を捧げるがいい
……。この地上の新たな『神』となる私の寄り代になれるのだ。光
栄に思うがいい

【クツ、『あの男』が、もうここまで……】

【『あの男』？】

【はい。いつの間にか私の中に入り込み、内側から『私』を乗っ取
ろうとしている『邪悪の化身』……。あの男に乗っ取られれば、こ
れまで『私』が引き起こしてきた様々な悲劇など……比べものにな
らないでしょう……。ですが……もうどうにもなりません。あの男の
侵食を止めることなど……出来ないのです……】

すでに、この邪悪の化身は、『闇の書』の防衛プログラムの大半を
その支配においていた。

「『ブラッディダガー』！」

『闇の書』はアイオリアたちに向けて、魔法を放った。
血色のナイフの群れがアイオリアたちを襲う。

その時、カノンが取り込まれたときに落とした簡易デバイスを手に
していたアイオリアに異変が起こった。

「……何だ……この力は!？」

「エッ!?!……アイオリアさんから魔力が……」

簡易デバイスに組み込まれていた飛行魔法により、アイオリアは飛

翔した。

「…………どうやら、アイオリアさんにも魔力資質があったようだね…。それでカノンさんの残したデバイスがきっかけになって、魔力に目覚めたんだ…………カノンさんほどではないけど…………おそらかなのはと同等レベルの魔力が…………」

アイオリアが魔力に覚醒した。

「…………それにしても…………妙ですね…………」

ムウが『闇の書』を見ながら、呟いた。

「…………何がですか？」

その後ろに隠れるように立っていたさすがその呟きを聞き、ムウに問う。

「先程から、あの彼女の様子がおかしい…………涙が止まり…………アレほど哀しみに満ちていた感情が…………感じられなくなりました。まるで…ただの人形になってしまったかの様に…………。アイオリアとなのは…に対する攻撃も…………単調になってきています…………」

一方、なのはは自身の最大の魔法である『スターライトブレイカー』を撃つチャンス伺っていた。

その時、レイジングハートから提案があった。

それは、『フルドライブ』…………エクセリオンモードの起動であった。レイジングハートが壊れる可能性がある為、なのはは躊躇っていたが、レイジングハートに激励され、起動を決意した。

正直、魔力に目覚めたばかりのアイオリアでは『闇の書』に通じるような魔法は使えないし、だからといって聖闘士の拳を使えば、確実にはやてを傷つけてしまう。

非殺傷設定で攻撃できるなのはに託すしかないのだ。

なのははエクセリオンモードを起動させ、『エクセリオンバスター』を放った。

カノンは、沙織から様々な事実を知らされた。

この地球と、カノンが居た地球の関係に関しては、無限書庫で見つけた『二つの地球』で把握はしていた。

この世界の地球とカノン達の地球とは、互いに干渉しあう平行世界。此方の地球を『テラ』と呼ぶなら、カノン達の地球は『エデン』と区別されている。

平行世界であるために、此方の地球にも当然、カノンやムウ、アイオリアに似た人間も居る。

しかし、あくまで『聖闘士』ではなく、普通の一般人でしかないが……。

神の現存しない地球がテラで、神が現存する地球がエデンなのだ。

【貴方も知つての通り、この宇宙は今から百五十億年前に、一つの塊から『大爆発』が起こり、その折に拡がった『神々の意思』によって誕生しました。しかし、それは宇宙だけではなく、全ての次元世界の誕生でもあったのです……】

神話の時代における神々の戦争。

有名なのが、オリンポス神族とティターン神族のティタノマキアである。

周知の通り、ティターン神の王『農耕神』クロノスは、父である『天空神』ウラノスの予言「子によって地位を奪われる」を恐れ、生まれてくる子を次々と飲み込んでしまった。妻であるレアによって末弟であるゼウスのみ難を逃れ、やがてそのゼウスによって兄弟達はクロノスから解放され、やがて、神々の覇権をかけた戦争が起こり、オリンポス側が勝利を納め、ゼウスは神々の王となった。

しかし、神話には残されなかったモノも数多く存在する。

オリンポスの神々に従うことを拒んだ神話に名も残っていない神々

は、自らを信じる人間達を引き連れ、他の次元世界に旅立ったのだ。その人々はやがて『ミッドチルダ』や『ベルカ』といった世界を作り上げていくことになった……が、その神々はおるかオリンポス十二神にとつても看過できない事が起こった。

それこそが古代ベルカで起こった大戦争によって複数の次元世界を巻き込み滅亡、旧暦462年のロストロギアによる次元断層。

『地球』から離れた人間達が行き過ぎた力を手にしたことによって起こった悲劇に、『地球』の神々は人間の増長に怒りを覚えた。

そして、そんな力を人間達に与えた『地球』の外に出た神々に天帝は罰を与え、次元世界の狭間に幽閉してしまつたのだ。

それが、他の次元世界に神々が居なくなつた理由である。

しかし、このときはまだオリンポスの神々も人間に失望はしてしたが、まだ見放してはいなかつた。

万が一の保険として、『地球』を守るため神々の力で結界を張り、外の次元世界からの干渉を絶つに留めた。

その副産物として生まれた平行世界が、管理局が『第97管理外界』と呼称している此方の地球である。

神々の張つた結界は、『地球』から外の次元世界には出ることは出来ても、『地球』を含む外の次元世界からの進入を拒む性質を持つ結界である。

しかし、その後『地球』の人間たちまで、神が与えた地上を汚し始めた為、アテナとポセイドン、ハーデス以外のオリンポスの神々はオリンポスに引きこもり、ポセイドンとハーデスによる人間粛清の為、唯一、人間を護ろうとするアテナとの聖戦が起こる様になるのだが……。

「……待つて下さい……それでは俺たちが『地球』に戻ることは……」

【……残念ですが……ある特別な神具を用いない限り不可能です……】

「……特別な神具……？」

それほど多くはないが、万が一の為、その結界を通ることの出来る
通行証を次元世界のどこかに保管してあるのだ。

その場所は流石にアテナである沙織も把握はしていないが……。

「そして……もう一つは……『鳳凰星座』の聖衣です……」

「……ツ何と!?!」

クロス
スケイル
サイプリス

聖衣や、鱗衣、冥衣といった神を護る闘士の纏うプロテクターは、
オリンポス十二神の石柱、『炎と鍛冶の神』へパイトスの技法によ
って作られている。

そして、結界を通る通行証もへパイトスの技法によって作られたの
だ。

ブロンズセイント

青銅聖闘士は、雑兵を除けば一番下の階級の聖闘士である。

ブロンズクロス

故に、青銅聖衣には装着する聖闘士の実力を補う為に、様々な機能
が組み込まれている。

ドラゴン

『龍星座』には、最強の拳と盾を……。

ネビュラチェーン

『アンドロメダ星座』には、攻防一体の星雲鎖を……。

ヒト

『海へ星座』には、拳と二パットに毒牙を……。

シ

等、様々な機能が組み込まれているのだ（青銅聖衣だけでなく、白

ルバークロス

銀聖衣にも特殊能力を持った聖衣が存在する。ペルセウス座や杯座

シ

など……）。

そして『鳳凰星座』は、一番最後に作られた正規の聖衣である。

へパイトスは気紛れにこの最後の聖衣に、他の青銅聖衣以上の機能
を組み込んだと言われている。

『自己修復能力』と『次元移動能力』である。

知つての通り、『鳳凰星座』の聖衣は例え粉々に砕け散ろうが、一
握りの灰であっても復活するのだ。

更には『次元移動』。

シャカの『六道輪廻』によって六道に跳ばされても、サガの『ギヤ
ラクシアン・エクスプロージョン』によって宇宙の塵となっても、
カノンの『ゴールドントライアングル』によって異次元空間に閉じ
込められようと、一輝はまさに不死鳥の如く蘇ってきた。

そして、次元結界を通行する能力も組み込まれていたのだ……。十二宮での戦いにおいて、シャカと共に自爆し、十万億土の彼方まで行ったときは、『鳳凰星座』の聖衣を纏っていなかったため、ムウの力がなければ帰還できなかったが……。

『鳳凰星座』の聖衣でも通ることが出来ないのは、『時間の流れ』タイムスリップ』、死者の国である『冥界』、そして神々の道である『超次元』だけである。

だが、『冥界』に関しては阿頼耶識……又は八識と呼ばれる第八感エイトセンスに目覚めることで行き来が可能になり、先のハーデスとの聖戦において、アテナの血によって聖衣の究極にして幻の形態『神聖衣』ゴッドクロスに進化したことにより、『超次元』も通行可能になった。

もはや、一輝が自力で通れないのは『時間の流れ』のみであった。

「では、……一輝が此方の世界に来たのは……」

【はい。彼は自分の力で其方に行つたのです。現に一輝は既に此方に戻っています……『鳳凰星座』の聖衣を纏える一輝のみ……制約されず行き来できるのです】

しかし、一輝と一緒にいけば結界を越えられるというわけではなかった。

あくまで通れるのは『鳳凰星座』の聖衣を纏った者だけであり、カノンが一輝と一緒に結界を越えようとしても一輝だけが超えられ、カノンは結界によって弾き飛ばされてしまうのだ。

そして、『鳳凰星座』の聖衣を纏うことが出来るのは、一輝のみである。

『鳳凰星座』の聖衣が誕生してより過去、装着できた聖闘士が一輝のみであり、一輝以外、纏うことが出来ないのだ。

ある意味、青銅聖衣でありながら、黄金聖衣以上に持ち主を選ぶ聖衣……それが『鳳凰星座』。

「つまり……俺たちが『地球』エアースに戻るには、通行証を見つけ出すしかない……と、いうわけですか……」

【はい……残念ながら……私の力を持ってしても……貴方達を戻すこ

とは不可能です……】

「では、何故今、アテナは私と交信が出来ているのでしょうか？」

「……それは、『闇の書』とやらが私の偶像を作ったからです」

神が神託を行うとき、巫女等に憑依する『神降ろし』の他に、その神の神像などに降臨する場合がある。

カノンが『アテナの壺』の封印を解きポセイドンを意思が、海皇の鱗衣に宿ったように……、『闇の書』が夢の中に作った赤子のアテナという、沙織の写し身とリンクさせ、アテナはカノン達の現状を把握したのだ。

神は、自らの写し身を通じて、世界を把握できるのだ。

「ところで、俺たちがこの世界に転移した原因は分かりますか？」

【……はい。それは先程判明しました。どうやら、貴方達は『時の神』クロノス様によって転移させられたようです……】

『時の神』クロノス。

テイターンの王である『農耕神』と同じ読みの名を持つ神であり、よく混同されるが別の神であり、オリンポスの神すら超越した存在である。

テイターン神族の母である大地母神や奈落と同様、『原初神』の柱、混沌の子という説があるが、ヘシオドスの『神統記』にも登場しない幻の神である。

クロノスは気紛れを起こし、この時代に起こった聖戦で死ぬ寸前の闘士を、次元世界に放り出したのである。

【貴方とムウ、アイオリアを『地球』へ……。そして、老師やシヤカ、ミコを他の次元世界に飛ばし、冥王との聖戦終了後、貴方達それぞれ『黄金聖衣』を貴方達の下に転移させたいのです……】
自分達の現状が、『時の神』の気紛れが原因と知り、何とも言えなくなるカノンであった。

【……カノン……。私はこれから星矢の命を救う為、瞬と共に二百年前の聖戦へと向かいます……。暫くは貴方達の援助が出来なくなるでしょう……】

アテナを護る為、『冥王』の剣で心臓を貫かれた星矢は一命を取り留めたが、今現在も冥王の怨念の籠もった目に見えぬ剣『インビジブルソード』が星矢の胸に突き刺さっているのだ。

神話の時代から、冥王の地上侵略を阻止してきた『天馬星座』の聖闘士である星矢を葬り去ろうとするハーデスの呪いであった。

星矢の命を救う為に、前聖戦の時代に遡り、『インビジブルソード』を失き物とする為に……。

「……申し訳ありません……。その様な時にアテナの御力になる事が出来ずに……」

【……カノン……貴方達は其方の世界で生きていかなくはなりません。しかし、聖域サンクチュアリの援助無しに生きていくことは不可能でしょう。

故に特例として、正義に反する事以外であれば、生活の糧を得るために聖闘士の闘技を使用することを認めます……。それに、状況によつては『アレ』の使用も認めます……。貴方達が『地球』エースに帰還できるその時まで……】

そして、色々な助言を与え、沙織の意思は……この場から去っていった。

オリンポスにある過去と未来が混在する時間を超越した世界。地上における時空の扉……。

沙織は瞬と共に、前聖戦の時代に向かおうとしていた。

「……クロノス様……。わたしの黄金聖闘士たちを救ってください有り難うございます」

フッフッフツ……。別にお前の為にやったわけではない。唯の気

紛れだ……。礼には及ばぬ……

沙織は、クロノスに礼を言うと、花で作った鎖を自分と瞬の手首に巻きつけた。

「この花の鎖がわたしたちを固く結び付けてくれます。瞬、私から決して離れてはなりません。さもないと貴方は時空の谷間に飲み込まれてしまいかも知れません」

「はい……。それにしても黄金聖闘士たちが生きていてくれて……。良かったです。このことを知れば紫龍も氷河も……。そして星矢もきつと喜びます！」

「……。そうですね本当に……。その為には必ず『冥王』の剣を失きモノにしなくては……。では、行きましよう。前聖戦の時代へ……」
沙織と瞬は、時空の扉へと飛び降りた。

「な……。何て凄まじい重圧だ。体が引き千切られる！沙織さん……」
「瞬！わたしの手を離してはなりません……！」

……。フッフッフ……。あのカノンとかいう聖闘士同様、アテナ……
……。お前の細胞時計を少し弄ってやった……。さて、果たして無事、目的を果たせるかな……。フッフッフ……。……

第二十八話 女神顕現（後書き）

闇の書の夢から脱出するカノン。

現実に戻り、『夜天の王』として覚醒したはやては守護騎士たちを蘇らせる。

そして、ついに闇の書に巣食っていた『邪悪の化身』が正体を現す。

時空を越えた黄金の闘士

「復活」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第二十九話 復活

「さあ、お眠り下さい……主……。『あの男』に乗っ取られる前に眠ってしまえば、『主』は苦しむことなく『夢』の中で……愛しい者たちと安らかに……」

『闇の書』の意思は、はやてに眠りを促す……が……。

「そやけど……『夢』は『夢』や！」

はやては、それをはっきりと拒絶した。

沙織が去り、その場にはカノンとサガの2人が残った。

今まで沙織が居た場所が光を放っていた。

「あの光に入れば、この『夢』は終わる……そして、『闇の書』の主の下に行けるだろう」

「……そうか」

カノンは、そのまま光に入ろうとする。

「カノン！」

それをサガが呼び止めた。

「何だ？サガ……」

「……気をつける！ヤガミハヤテを『闇の書』の呪縛から救っても、この戦いは終わらない……『闇の書』に巢食っている『邪悪』を倒さなければ……な……」

「邪悪……だと!？」

何時の頃からか『闇の書』に取り憑き、内部から乗っ取ろうとしている邪悪なる意思……。

その正体は……。

……。

「何だと！？それは本当か？」

信じられないカノンは、サガに問い詰めたがサガは静かに頷いた。

「……バ……馬鹿な……それが本当なら……他人事では済まされな
い……」

「……『アレ』を倒す『権利』……それは、アイオリアにもムウに
もある。だが……お前が倒すことが『義務』だと私は思っている……」

「……確かに……俺の『義務』……だな……」
カノンは決意した。

『アレ』は自分が滅ぼす……と。

これが、本当の『清算』だと……。

「……カノン……。私達が13年ぶりに双児宮で再会したときの事を
覚えているか？」

「……ああ……」

それは、冥王との聖戦が始まったばかりの頃、サガが山羊座のシユ
ラと水瓶座のカミュと共に、冥王の尖兵を装い十二宮を攻めた時の
ことである。

「お前が……私に代わって双児宮を護ろうとしてくれたこと……ま
さか夢にも思わなかった」

「……」

「お前が改心し、双子座の黄金聖闘士として闘ってくれたこと……
そして、お前のアテナへの忠誠が上辺だけではないことを……お前
は証明してくれた。冥王との聖戦を戦い抜いてくれたこと……とて
も嬉しかったぞ……」

「……サガ……」

サガは涙を隠そうともせず、カノンを抱き締めた。

「……もうお前が正式な双子座の黄金聖闘士だ……。私の予備では
ない……。今後のお前の武運を……祈っているぞ……」

「……兄さん……」

サガとカノン。

この行き違ってしまった兄弟は今、本当の和解をした。

「もう……会うこともあるまい……。後の事は頼むぞ、双子座のカノン！」

「……さようなら……兄さん!!」

カノンは、光の中に飛び込んだ……。その目からは一粒の涙が零れ落ちていた。

「名前をあげる。もう『闇の書』とか、『呪いの魔導書』とか呼ばせへん……。わたしが呼ばせへん！」

はやてから伝わる温もりに、『闇の書』の意思は涙が溢れていた。

「私は管理者や……。私にはそれが出来る！」

「……無理です！自動防御プログラムは止まりません。そして、『邪悪の化身』の侵食も……。外では管理局の魔導師が戦っています。それも……」

「……止まって……」

はやてが念じると、外でなのは達と戦っている『闇の書』が停止した……。

……小娘ええええええええええ！邪魔をするなああああああああああああ！

『邪悪の化身』の禍々しいオーラが、はやてと『闇の書』の意思に襲い掛かった。

「……やらせん!!」

はやてを庇うように、一人の男が立ちはだかった。

「……カノンさん！」

「はやて……『奴』は俺が押さえる……。その間にやれ！」

カノンは『小宇宙』で作った防護壁をはやてと『闇の書』の意思の

周囲に張り巡らせ、『邪悪の化身』の侵攻を防ぐ。

……邪魔をするなあああああ……！カノオオオオオオオオン
！！

「お前の好きにはさせん！」

【外の方……。えと……管理局の方！……其処にいる子の保護者……

……『八神はやて』です】

「……はやて（ちゃん）！？」「」「」

【なのはちゃん……フェイトちゃん……それにリア兄！？】

【うん……いろいろあつて『闇の書』さんと戦っているの！】

【はやて……無事なのか！？】

なのはは念話で返答し、アイオリアがテレパシーではやてを気遣う。

【うん。私は大丈夫や……。ごめん、なのはちゃん、フェイトちゃん、リア兄……。何とかその子……止めたげてくれる？……】

魔導書本体との制御は切り離れたのだが、『闇の書』の意思が出ていると管理者権限が使えないのだ。

今、外に出ているのは『邪悪の化身』に乗っ取られた防御プログラムだけである。

ユーノは驚いていた。

『闇の書』の完成後に管理者が目覚めていることに……。これなら、活路が見出せる。

【なのは、フェイト！解りやすく伝えるよ。今から言うことを2人が出来れば、はやてちゃんもカノンさんも外に出られる！！どんな方法でもいい。目の前の子を魔力ダメージでぶっ飛ばして！全力全開、手加減無しで……！！】

「さっすがユーノ君！」

カノン！……必ず……必ず殺してやるぞ！！

「それは此方の台詞だ……。忌まわしき過去の悪行を清算する為に……
貴様を滅す！」

そう返答するとカノンは『闇の書』から脱出した。

「……カノン！」

カノンの姿を確認したフェイトは、泣きながらカノンに抱きついた……。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

カノンは、泣きじゃくるフェイトの頭を撫でる。

「お前が無事ならそれでいい。だが……少しは慎重になるようにな……。勇気と無謀は全然違うのだから……」

「……うん……」

【ですが……コントロールを切り離れた為、防御プログラムは完全に『あの男』に乗っ取られました】

「うん……まあ、なんとかしよう……」

そこへカノンからの念話が届く。

【いや、『奴』は俺が滅す……】

「……なんでカノンさんが？」

【『奴』とは……因縁があるのでな……】

カノンと『邪悪の化身』との因縁とは……一体……！？

「守護騎士システム……破損修復……」

はやての眩きと共に、はやての周りに四つのリンカーコアが現れ、その光が魔方陣を描く。

魔方阵から、守護騎士……『湖の騎士』シヤマル、『盾の守護獣』ザフィーラ、『鉄槌の騎士』ヴィータ、そして烈火の将『剣の騎士』シグナムが再生された。

「おいで……私の騎士たち……」

『闇の書』からの光が収まり、なのは達の前に再生された守護騎士たちが姿を見せた。

「我ら、『夜天』の主に集いし騎士……」

「主ある限り、我らの魂尽きることなし……」

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり……」

「我らが主、『夜天』の王……『八神はやて』の名の下に……！」

そして、はやての手に魔法杖シュヘルトクロイツが握られ、騎士甲冑のアンタースーツが身を包む。

「『夜天』の光よ、我が手に集え！祝福の風『リインフォース』セツトアップー！」

先程の『闇の書』ではなく、はやての姿をベースとした『融合フュージョン』が完成する。

『夜天』の王、八神はやてが完全に覚醒した。

シグナムたちは、はやての意思に反し蒐集活動を行っていたことに對する負い目で、はやての顔をまともに見れなかった。

だが……そんなシグナムたちを笑って許し、「おかえり、みんな」と言っで迎える。

感極まって泣き出したヴィータがはやてに抱きつく。

その五人に、もう一人の家族であるアイオリアが近づいた。

「……シグナム、シヤマル、ザフィーラ、ヴィータ……そして、はやて……。おかえり……」

「うん……只今や……リア兄……」

「アイオリア。ただ……い……！？」

「アイオリアさん……エツ!？」

「……………!？」

「……………エツ……リア……!？」

素直に返事をするはやてと、アイオリアの姿を見て驚愕に染まる騎士たち……。

「どうした……お前たち……」

「……………アイオリア……その格好は……………」

シグナムたちが驚愕している理由。

それは、アイオリアが装着しているプロテクター……。

形こそ違えど、それは自分達がまったく歯が立たなかった存在。

『黄金シヘミのカノンの鎧の男』が装着しているモノと同じモノを纏っていることである。

「相変わらず、獅子座シオの聖衣を纏ったりア兄は格好ええなあ……………」

事情を知るはやては暢気にそう言うが、シグナム達は混乱する。

「フツ! 久しぶりだな……」

其処に、カノンが近づいてきた。

ヴィータとザフィーラが1歩下がる……………。

「……………おい、カノン……。お前、こいつ等に何かしたのか？」

「……………何、喧嘩を売ってきたから返り討ちにしたただけが……………」

アイオリアも事情を悟った。

大方、蒐集しているときに、カノンが邪魔をしたので排除しようとしたら、逆に叩きのめされてしまったのだろう……………と。

「……………お前等……………。カノン相手によく無事だったな……………」

アイオリアが苦笑しながら、ヴィータの頭を撫でる。

「一応、お前らに言っておくが……………このアイオリアは、俺と『同格』の存在だぞ……………」

その一言にギョツとなってアイオリアを注視する。

そして、シグナムは理解した。

初めて会ったとき、シグナム達はアイオリアの眼光に怯んだ。

『闇の書』いや、『夜天の魔導書』の守護騎士たる自分達が……………で

ある。

しかし、アイオリアが目の前の規格外と『同格』だというのなら、話は分かる。

理解できず、あれほど恐怖した存在だが、それがアイオリアだと逆に頼もしく感じる守護騎士たちだった。

なのは達もはやて達に近づいてきた。

はやては、シグナム達がなのは達に迷惑を掛けたことを詫びるが、なのは達はそれを笑って許した。

その時、本局に『仮面リーゼ姉妹の男』達を連行したクロノが戻ってきた。

「すまないな…水を差してしまっんだが……。『時空管理局』執務官クロノ・ハラオウンだ…。時間がないので簡潔に説明する」
もうすぐ、『闇の書』の防御プログラムの暴走が始まる。

それを押さえる方法は、クロノがグラムから預かった氷結の杖『デュランダル』で凍結するか、それとも『アースラ』に装備されている魔導砲『アルカンシエル』で蒸発させるか……。

それ以外の方法がないか。

それを『闇の書』の主であるはやてと守護騎士達の意見を聞いてきたのだ。

「……暴走は起こらへんよ…」

はやての返答に驚くクロノ達。

そして、はやての口から驚愕の事実を聞かされる。

『闇の書』の防御プログラムは何時の頃からか侵入してきた『邪悪の化身』に完全に乗っ取られたこと。

そして、その『邪悪の化身』をカノンが対処することを……。

クロノは、師であるカノンを見つめた。

協力はしてくれるとは思っていたが、まさかここまで積極的に関わってくれるとは思ってもしなかったのだ。

「…………アイオリア、ムウ…………。お前たちにも『奴』を討つ『権利』がある…。しかし、『奴』は俺が滅す『義務』がある。すまないが手を出さなくてももらえるか？」

突然のカノンの申し出に戸惑う二人。

「…………どういう意味だ…。『奴』とは一体…………」

「…………分かりました。よく分かりませんが貴方ほどの男がそこまです言つのなら…………。いいですねアイオリア!？」

「…………分かった…………」

「…………感謝する…………」

その時、防御プログラムに変化が起こった。

黒い澱みは、縮小していき、人の姿に形取り始めた。

そして…………。

「な…………何だ!？」

クロノは驚愕した。

『闇の書』の防御プログラムから『小宇宙』が発せられたのだ。しかも…………。

「な…………何て…………邪悪に満ちた『小宇宙』なんだ…………」

『小宇宙』に目覚めたばかりのクロノにとって、こんなにも邪悪に満ちた『小宇宙』が存在することに、恐怖を感じていた。

「…………この『小宇宙』は…………!？」

「ま…………まさか…………!？」

防御プログラムから立ち込める覚えのある『小宇宙』は、アイオリアとムウに…………敵の正体を悟らせた。

そして、澱みが晴れ『邪悪の化身』がその姿を顕わにした。

「エッ…………!？」

「あ…………あれは!？」

「…………カノン!？」

そう、『邪悪の化身』の姿は、闇色の双子座の聖衣を纏い、髪の色は紫でまるで充血している様な眼をしているが、その容貌はカノンと瓜二つだった。

「ウワーッハハハハ

ッ。ついに得たぞ。新たなる肉体を

!!!」

そして『邪悪の化身』はカノンを睨む。

「先程はよくも邪魔をしてくれたな……愚かなる弟、カノンよ!」

「貴様もとうとう姿を現したな……兄さんの心に巣食っていた『悪心』……!!!」

『邪悪の化身』の正体は……サガに巣食っていた『邪悪の心』であった。

第二十九話 復活（後書き）

サガの邪悪との再会に、アイオリアは怒りを見せる。
なのは達に今、明かされる。忌まわしき過去。

時空を越えた黄金の闘士。

「明らかにされる過去」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十話 明らかにされし過去（前書き）

今回と次回は、聖闘士星矢の原作のおさらいです。

他サイトで投稿している方に追いつきましたので、更新スピードが遅くなります。

第三十話 明らかにされし過去

WHO ARE YOU? お前は誰だ……。正義か悪か、神か邪悪か。答えるサガよ。お前は誰だ

「う……う……う……」

WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?
WHO ARE YOU? WHO ARE YOU? WHO ARE YOU?

「ええーい失せる！これ以上私の邪魔をするなあ　　つ。お前
がなければ、この大地はとくに私のものだったのだ！お前は十
三年間悉く遮ってきた。もう邪魔はさせん！」

よせ、お前こそこれ以上罪を重ねるな。アテナは決して死にはし
ない。アテナに詫びろ、そして罪を償え！

「だまれ……！何度も言っただ。この私こそが地上の救世
主なのだ！」

己の内から聴こえる『声』と言い争いながら、サガはアテナ神殿へ
駆けていた。

先にアテナ神殿に向かった星矢を止める為に……。アテナの命を救

う『アテナの楯』を星矢に使わせない為に……。
「うっ」

サガがアテナ神殿に辿り着いたとき、巨大なアテナの神像がサガの眼前に現れた。

「ア……アテナ……」

まるで、カノンを見つめているように……。

「むっ、星矢……」

我に返ったサガは、目前で『アテナの楯』に触れようとしている星矢を発見した。

「お……おのれ！楯に触らせるか

っ」

「星矢！」

「星矢！」

「星矢！」

「星矢！」

「星矢……」

刻一刻と過ぎる時の中、邪武達青銅聖闘士が、アルデバランが、アイオリアが、シャカが、ミロが、ムウと貴鬼が、魔鈴とシャイナが……消えようとしている火時計を注視していた。

「アテナよ！我に正義の楯を与えたまえ……」

星矢の声に応え、アテナの神像から、楯が変形縮小し、星矢の手に収まった。

「死ね星矢

っ」

「楯よ女神を救え

っ」

沙織が倒れている方角に楯を翳す星矢。それは、襲い来るサガと同

しかし、この『邪悪』は決して消滅したわけではなかった。サガの悪心は、地球エレンの結界と時空を越え地球テラに……。そして、その地に転生していた『闇の書』の中の最も忌むべき部分『闇の書』を暴走させる諸悪の根源である『防衛プログラム』に取り憑き、書の起動と共に侵食していき、新たな活動体にしようとしていたのだ。

「……弟！？」

「……兄さん！？」

サガとカノンから発せられた単語に、なのは達は戸惑った。

「あの人……カノンのお兄さん！？」

「……正確には、カノンの兄に巣食っていた邪悪な心……と、言っ
たところですね……」

語りだしたムウに、皆の視線が集まった。

「カノンの双子の兄であり、真の『双子座』ジエミニアの黄金聖闘士であるサガは、俗に言う『二重人格者』だったのです。人間は誰でも心に『善』と『悪』を持っているのです。なのは、フェイト、はやて……貴女たちも当然持っています。人間は理性によって悪を抑えているときは善人となり、欲望に負けたときは悪人となる……。サガは、その『善』と『悪』のまったく相反するものがとてつもなく強すぎたのです……。だから、『悪』が心を支配すれば、今、私達の目の前に居るような巨大な邪悪となり、『善』の心が支配すれば神の様な男になる……。アレはそのサガの『悪』そのモノの様ですね……」

「……神！？」

「ええ、十三年前、サガは神の化身ではないか……と、言われるほど心が清らかだと認識されていました。どんな者にもわけ隔てなく

優しい男でした。故にまるで『神』のように多くの人たちから慕われていた男でした……」

話を聞いても、皆とても信じられなかった。

カノンと対峙している男は、誰が見ても邪悪……。

サガから発せられる禍々しい気配は、なのは達の心胆を震えさせるに十分な程の悪意に満ちているのだ。

永き時を生きてきたヴォルケンリッターでさえも、これほど邪悪なる存在を見たことがなかった。

彼女達は、かつてカノンから感じた恐怖以上のモノをサガから感じていた。

はやても『闇の書』に潜んでいたモノが、想像以上の代物だったことに怯え、無意識にアイオリアの腕にしがみついていた。

不安に駆られ、アイオリアに視線を向けたとき、はやては見た。

兄の憤怒の表情を……。

アイオリアが怒ったところを見るのはこれが初めてではない。

時折、ヴィータやシャマル相手に叱っているアイオリアを何度か見たことがある。

しかし、これほどの怒りを見せるアイオリアなど、はやては見たことがなかった。

「……リア兄い!?!」

「……アイオリア!」

「分かっている!?!」

不安げなはやてと、諫める様なムウの口調にアイオリアは荒々しく返事をした。

「カノンに譲ると言ったんだ。手を出すつもりはない……だが……」
アイオリアは自制するのに必死だった。

しかし、あのサガを見ているとアイオリアの心に激しい怒りが噴き出してくるのだ。

「……リア……いったいどうしたんだよ……」

「アイオリアさんが、これほど怒るなんて……」

ヴィータもシャマルも困惑していた。

彼女達にとってアイオリアは、叱られるときは怖いが、普段は優しく暖かな男だという認識を持っている。

だからこそ、ヴィータははやくと同じ様にアイオリアにも甘えたりしていたのだ。

そんなヴィータにアイオリアは、優しく接してくれていたのだ。

ヴィータは、そんなアイオリアをはやくと同レベルで慕っていたのだ。

「確か……ムウと言ったな……。アイオリアのあの怒りは、いつものアイツに比べれば、はつきり言って異常だ……。何かあったのか？」
シグナムが皆を代表し、ムウに問う。

なのはとフェイトも、先程の『仮面の男』に対する以上の怒りを見せるアイオリアに戸惑っていた。

「……あのサガは、アイオリアにとっては……『兄の仇』に等しい存在……」

「……ッ!?」「……」

アイオリアを家族として見ている八神家は、この返答を聞き絶句した。

女神を補佐し、聖闘士を統括する権限を持つ『^{アテナ}教皇』。

その気になれば、大地を征服することも可能な存在である。

故に、教皇になる者は『心・技・体』ともに優れた者でなければならない。

だから、教皇は代々、黄金聖闘士の中から、アテナもしくは前教皇自らの指名によって決まる。

アテナか前教皇が、これこそ聖闘士の頂点に立つに相応しい認められた者に次の教皇の座が与えられる。

十三年前、教皇と共に前聖戦の生き残りである『^{ライブラ}天秤座』の童虎を

除く十一名の黄金聖闘士の中で、次期教皇候補に選ばれたのは、『
射手座』のアイオロスと『双子座』のサガの二名だった。
他の黄金聖闘士はまだ歳若く、教皇に選ばれる程ではなかった。

数百年ぶりアテナが、人の姿を借りて降臨した。

それは、次の聖戦が近づいてきている証拠である。

聖戦に備える為、教皇シオンは、教皇の座を退き、候補のどちらかに譲ることを決めた。

教皇はアイオロスとサガを呼び出し、次期教皇を指名した。

「仁・智・勇を兼ね備えた『射手座』のアイオロス。これよりはお前に教皇の座を任せることにする」

「は？わ……私がですか……」

指名されたのは、神の化身と呼ばれるサガではなく、アイオロスだった。

「サガよ」

「はっ」

「聞いたとおりだ。アイオロスに力を貸して、これからも聖域の為に尽くしてくれ。よいな」

「はい。アイオロスこそ次期教皇に相応しい立派な聖闘士だと私も思っていました。アイオロスに協力を惜しまず、アテナの為、正義の為に、このサガ、これからも一命をかけて尽くしましょう」

その後、教皇がアテナに代わり、星の動きで大地の吉兆を占う『星見』を行う場所、教皇以外立ち入ることが許されない禁区『スターヒル』において……その禁を破り侵入したサガが教皇に問うた。

何故、神の様に慕われている自分が次期教皇に選ばれなかったかを……。

仁・智・勇においても、いや全てにおいて、アイオロスより自分の方が勝りこそすれ劣っている筈がないのだから……。

「よかるう。それほど言うのなら教えてやるう」

教皇は、サガの心の奥底から不気味なモノを感じていた。

確かにサガは、神の化身と呼ばれ、サガ自身も清らかに生きている。それは、教皇も認めていた。

しかし、サガの魂にとつてもない悪魔が住んでいる……そう感じていたのだ。

教皇の返答を聞いていたサガが突然苦しみだし、その金髪が暗い紫に変化していった。

「み……見抜いていたのか、私の秘密を……。さすが教皇……老いたりといえども前の聖戦の生き残りだけのことはあるようだな……」

髪の色が完全に変わると傳っていたサガが立ち上がり……。

「死ね教皇!!」

その拳が、教皇の胸を貫いた。

「ぐ……うう……や……やはり私の目に狂いはなかった……。お……お前は神などではない……。じ……邪悪の化……身……」

全盛期の頃の教皇なら、いくらサガが強大であろうがこれほど容易く殺されなかっただろう。

だが、老い衰えた今の教皇では、サガの不意打ちに対処することが出来なかったのだ。

教皇は、その場で息絶えた。

「老いぼれめ。なまじ私の正体を見抜くからこんなことになるのだ」

教皇を暗殺したサガは、教皇のマスクと法衣を身に纏った。

教皇の素顔は、マスクに覆われている。

顔を見たことがあるのは、五老峰に居る老師……『天秤座』の童虎以外みたことがないはず……。

実はもう1人、教皇の素顔を知る人物が居るのだが……。

「こうなった以上、私がこのまま教皇に成りすまして聖域を掌握する」

降臨したばかりで、まだ赤子であるアテナをくびり殺すなど、造作もない。

「このサガが、アテナに代わり大地を支配するのだ！！この世の『神』そのモノになるのだ。ウワーハハッ！！」

アテナ神殿に赴いた教皇は、幼子のアテナを黄金の短剣で刺し殺そうと振り下ろした。

しかし、その凶行を止める者がいた。

「き…教皇。正気ですか…？」

『射手座』のアイオロスである。

アイオロスは、教皇の今の行いがとても信じられなかった。

教皇は、アイオロスを振り払い、黄金の短剣を振り下ろした。

しかし間一髪。アイオロスがアテナを抱きかかえ、その刃はアテナを貫くことは出来なかった。

「教皇！！貴方はご自分のなさっておられることが分かっておられるのか！この子は数百年に一度、神がおくだしになるアテナの化身それを…」

「邪魔をするなアイオロス！」

なおも、アテナを殺そうとする教皇にアイオロスは一撃を加える…

…が、その時、教皇の顔を覆っていたマスクが落ちた。

「何い！？き…教皇。貴方は…！？」

その素顔は、髪の色と形相が違っているが、アイオロスが見知っている男の顔であった。

「う…うう…見たなアイオロス…。私の素顔を見たものを生かしておくことは出来ん！お前もアテナと共に死ね～～～～～～」

教皇…いや、サガの光速拳がアイオロスに襲い掛かる。

間一髪、避けたアイオロスはアテナを抱きかかえながら、その場の離脱に成功する。

「誰かであえ　　っアイオロスが反逆を試みたあ　　っ」
サガは、あるうことがアイオロスにアテナ殺害未遂の罪をなすりつけ、逆賊に仕立て上げたのだ。

「ア…アテナ…。こ…このアイオロスが一命に代えても御護りいたしませんぞ」

アイオロスは、アテナを抱き、『射手座』の聖衣櫃を背負い、聖域から脱出を試みた。

その後、アイオロスは黄金聖闘士、『山羊座』カプリコーンのシユラの襲撃を受け半殺しの目に遭うが、聖域からの脱出に成功。

日本から旅行に来ていたグラード財団総帥、城戸光政翁に幼いアテナを託すと力尽き、この世を去った。

聖域に残されたアイオロスの弟、『獅子座』レオのアイオリアはその後の十三年間、『逆賊の弟』という不名誉を背負うこととなった。
アテナが聖域に戻り、真実が明らかにされるまで……。

「……リア兄い……」
「……リア……」

話を聞き終えたはやてとヴィータは泣きながらアイオリアに抱きついていた。

シグナムも、シャマルも、ザフィーラもアイオリアの兄を殺された哀しみと、受けた屈辱を知り、涙を流していた。

そして、十三年もアイオリアを苦しめたサガに対し、怒りを向けた。もはや彼女達のサガに対する恐怖は、それ以上の怒りにより吹き飛んでいた。

はやて達に抱きつかれ、冷静さを取り戻したアイオリアは、憤怒の

表情を和らげ2人の頭を撫でていた。

「……それで、カノンさんはアイオリアさんにも、サガを討つ権利があるって言ったんですね。」

ユーノが、先程のカノン達の会話を思い出しながら呟いた。

「あれ。でもカノンさんはムウさんにも権利があるって言ってなかったっけ？」

なのはの疑問にアイオリアが答える。

「それはムウにとっても、奴は『師の仇』だからだ……」

「……えっ!?!」

アイオリアを除き、ムウと付き合いが長い(といっても約半年余りだが)なのはとユーノが驚きの声を上げる。

「……十三年前、サガに暗殺された『真』^{アリエス}の教皇こそ、二百数十年前の聖戦の生き残り……先代の『牡羊座』の黄金聖闘士にして、ムウの大恩ある師、『牡羊座』のシオンなのだ……」

なのはとユーノがムウに視線を向けた。
ムウは、一瞬哀しそうな表情になったが、すぐにいつもの笑みを浮かべ、なのはとユーノに応えた。

「……カノンは、弟として……お兄さんの心に巢食った『悪』を退治しようとしているんだね。弟としての義務を果たす為に……」

フェイトが、先程カノンが言った『義務』をそう解釈したが、アイオリアとムウは頭を振った。

「確かにそう言う側面もありますが……」

「その程度の理由なら、いくら手を出さない約束をしても、そんなものは反故にしている……」

『弟』としての義務程度なら、アイオリアとムウの権利の方が強い……だが……。

「カノンが奴を滅さなくてはならない義務……それは……」

「カノンこそが、サガの邪悪を目覚めさせた張本人だからだ!」

「……!?!」

第三十話 明らかにされし過去（後書き）

サガとカノン。

地上を支配する『神』になろうとした兄弟。

今、カノンの過去がフェイトたちに語られる。

時空を越えた黄金の闘士

「神を目指した双子座^{ジエミネー}」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十一話 神を目指した双子座

十三年前、聖域。

サガの拳がカノンを殴り飛ばした。

「カノン、もう一度言ってみろ！ いかにも弟と言えど聞き捨てならんぞ！ ア：アテナ女神を…先頃、サンクチュアリ聖域に降臨なされた女神を殺せたと…」

「そうだサガ：女神だけじゃない。次期教皇にアイオロスなどを選んだ間抜けな教皇も共に殺してしまえと言っているんだ。そうすれば地上は俺たちのものだ」

「し…正気かカノン。俺たちは女神を護るべき聖闘士！ お前もこのサガに何かあった時は双子座ジエミニーの黄金聖闘士として闘わねばならんだぞー！」

「フツ兄さん。いい加減正直になつたらどうだ？」

サガは、確かに幼い頃から心優しい神のような男として育ってきたが、カノンは悪事ばかりを好んできた。

サガとカノン。

双子の兄弟とはいえ、まるで天使と悪魔ほどの違いがあった。

だが……。

「俺は知っているのだぞ。兄さんの心にも俺と同じ『悪』が眠っていることをな…」

カノンのこの一言に、ついにサガの怒りは頂点に達した。

「だ…黙れ！ もはやお前の様な悪魔をこのまま放っておくわけにはいかん！ この兄自らの手でスニオン岬の岩牢に幽閉してくれる！」

スニオン岬。

岬の先端には、かつて地上にあったポセイドン神殿の廃墟がその名残りとどめている。

その崖下の岩牢は神話の時代、アテナが神々との闘いによって捕らえた敵を懲らしめの為に閉じ込めた場所である。

「出せ！！俺をここから出してくれ　　ッ。弟の俺を殺す気が

」

懇願するカノンに、サガは非情に言い返した。

この岩牢は『神』の力をもってせねば生涯出る事は出来ない。

カノンの心の悪魔が消えるまで、アテナの許しがあるまで……。

「お…おのれサガ。お前の様な男こそ偽善者と言つのだぞ！！いつもまでも『悪』の心を隠しおおせると思うな！！力のある者が欲しいものを手に入れて何処が悪い！『神』が与えてくれた力を自分の為に使って何故いけないというのだ！サガよ。俺はいつもお前の耳元に囁いてやるぞ！『悪』への誘惑を！！サガよ。お前の正体こそ『悪』なのだ　　ッ」

「カノンとのこの出来事が、サガの心の悪を覚醒させたのです……。結果、サガはこの後カノンに囁かれたとおりに教皇である大恩ある我が師シオンを殺し、アテナ抹殺を試みることになってしまいました……」

「……そ……そんな……カノンが……」

「……」
フェイトは、自分の事をあれほど気遣ってくれるカノンが、昔は『悪』だったとは信じられなかった。

クロノは、無言である。

「……そしてその結果、リア兄のお兄さんを……。前にカノンさんが、リア兄に詫びなければならぬって言つとつたんは、それなんやね……」

「そうだな。直接的ではないが、間接的にカノンには俺の兄の死に責任がある……。だから、その謝儀を兼ねて俺の聖衣の修復に自ら

の『血』を提供してくれたのだ……。命を懸けて……。な」

「……しかし、それほどの悪魔だったというあのカノンという男。どの様に改心したのだ？」

シグナムの疑問に皆、頷いた。

まさしく、カノンはその凄まじい力を己の欲望の為に使おうとしていた。

そんな男が何故、あそこまで他人の為に戦うような男に変貌したのか？

フェイト、なのは、アルフ、ユーノ等、今のカノンしか知らない者は、話を聞いてもカノンがその様な自己中心的な悪人とはとても思えないのだ。

確かに他人に敵しいところもあるが、フェイトたちには優しさが見え隠れしていたのだから……。

「それは……カノンさん達『聖闘士』が護るべき『女神』^{アテナ}の御力によるものらしいよ……」

その疑問に答えたのは、なんとクロノであった。

スニオン岬の岩牢に幽閉されたカノンは、そこで、アテナの封印が施された『海皇』ポセイダンの三叉の矛を発見した。

既に封印の効力がなくなっていたので、カノンの力で引き抜くことが可能だった。

引き抜いたカノンは、海底深くまで引き摺りこまれ、地中海の底にあるポセイダンの海底神殿に誘われた。

そこにおいてあったアテナの壺の封印を外し、^{ポセイダン}海皇の魂を目覚めさせた。

ポセイダンは、復活の度に地中海の海商王ソロ家の血筋の借りている。

そこで今生においては、当時三歳のジュリアンという跡取りの体内

に宿ることにした。

カノンは、この時野望を抱いた。

起こすなと言うなら、二度と起こしはしない。

カノンは、ポセイドンをジュリアンの体内に眠らせたまま傀儡とし、その大いなる意思だけを利用することを思いついた。

ポセイドンの名の下に、『海龍^{シードラゴン}』の海將軍となり、海鬪士^{マリナー}の全権を統括する。

海鬪士を操り、地上を征服し、アテナとポセイドンに代わり『地上』と『海界』を我が物とする為に……。

「見ているサガよ！このカノンが大地と海の『神』となるのだ！！
ウワァッハハハハ　　ッ」

そんなカノンの野望は、完全に打ち砕かれたのだ。

星矢達、五人の青銅聖鬪士^{ブロンズセイント}によって、『海鬪士七將軍』は、五人まで悉く葬られ、更には眠らせておく筈だったジュリアンの中の『海皇』も完全に覚醒してしまい、カノンの野望を知った『海將軍』のNo.2である『海魔女^{セイレーン}』のソレントが離反。

そして、カノンは驚愕の真実を知る。

十三年前、スニオン岬の岩牢において、満潮時に幾度となく死線を彷徨った。

しかし、カノンがもう駄目だと思う度にとても優しく暖かな『小宇宙』を感じて、何回となくカノンを救った。

それは今まで感じたこともない、とても偉大で安らぎに満ちた『小宇宙』だった。

その『小宇宙』こそ、女神^{アテナ}の『小宇宙』であった。

カノンは、アテナによって生かされていたのだ。

アテナが、海底神殿に乗り込んで来てから幾度となく感じた『小宇宙』……。

一輝に諭されても、最初は信じることは出来なかった。当時、幼子だったアテナに救われていたなど……。しかし、ソレントに諭された時、カノンも認めたのだ。アテナの『小宇宙』から感じられる至上の『愛』を……。多くの『神々』が見捨てる中、アテナは人間を信じ、人間を愛し、護ろうとする。

穢れきつたと言われる人間を、いつかきつと過ちに気付きそれを正していくと信じて……。

決して人は、邪悪に染まりきらないと……。

カノンは、そのアテナのとてつもなく大きな『愛』に撃たれ、自らの野望の愚かさと過ちを悟った。

アテナは、カノンの中の邪悪を洗い流したのだ。

そして、正義に目覚めたカノンは、『聖闘士』としてアテナに忠誠を誓い、アテナと地上の愛と正義を護りぬく事を誓ったのである。

「クロノ……クロノはカノンの過去を知っていたの？」

「修行の合間に、カノンさんに聞いたんだ。『聖闘士』の護るアテナという女神はどのような『神』なのかをね」

その時、カノンは自分がかつてアテナに反逆した『悪』だったこと、そして、アテナがそんな自分の悪を洗い流してくれたことを、クロノとリニスに話したのだった。

「それでも、貴方はカノンに師事してきたのですか？」
ムウが意外そうに聞いた。

カノンが、悪人だったと聞いても、クロノがカノンを師事してきたことに。

「確かに……カノンさんは『罪』を犯した罪人なのかもしれませんが、でも……カノンさんはそれを悔い、償いをしています……。犯した罪を認め、償っている者を侮蔑するなど……そんな心の狭い人間で

「はいつもりです……」

管理局では犯罪者でも能力があり、罪を悔いている者を局員とする場合がある。

おそらく、今回の事件においても守護騎士たちにも適用されるであろう。

人手不足という現実的な理由もあるが、一種の奉仕活動である。

罪を償おうとしている者を、露骨に嫌う地上本部のレジアス・ゲイズ少将のような人間を、クロノは心の中で軽蔑していた。

もし、カノンをここで忌避すれば、自分も彼と同類になってしまう。何より、それでもクロノはカノンを尊敬していた。

普通、それほどの罪を犯した人間が、償うためとはいえ皆の前に姿を晒すだろうか……。

周囲に白眼視されることは間違いない。

普通だったら、姿を隠し、隠者として生活するだろう。罪の意識を背負いながら……。

しかし、カノンは白眼視されることを承知の上で、アテナに許しを請い、『聖闘士』として戦うことを選んだ。

それは、とても勇気がいることだとクロノは思う。

「リア……。お前もよくカノンを許したな……？」

ヴィータも、間接的とはいえ、自分の兄の死の原因を作った男をアイオリアが何故許したのか、不思議に思った。

「……別に完全に許したわけじゃない。奴が償いの道を歩むことを辞めれば……。その時は……」

アイオリアはそう言い、拳を握った。

「しかし、奴の意思は本物だ。俺達の仲間である『蠍座』スコルピオンの黄金聖闘士、ミロが認めたからな……」

アテナはともかく、聖闘士たちは当然、最初はカノンを信用できなかった。

それほどまで、カノンの為に多くの血が流されたのだ。

改心したからと言って、おいそれと信用できるわけがなかった。

しかし、カノンはそれを証明したのだ。

三口は、それを認めた。

三口ほどの男が認めたのならば、自分達も彼を認めよう……。
そう決めたのだ。

「それに……罪なら俺も犯しているからな……」

アイオリアは、自嘲した。

アテナから、兄の真実を教えられた時、アイオリアも信じられなかった。

『逆賊』と思われていた兄、アイオロスではなく、教皇こそが真の『逆賊』だったことを……。

十三年間、聖域で信じられてきたことが、まるで逆だったことを……。

それを信じられず、目の前にいるアテナが本物かどうか確かめる為に、恐れ多くも拳を向けてしまった。

『射手座』サジタリアスの聖衣に宿った兄の魂に諫められ、ようやく真実を知ることができた。

しかし……、それでも聖闘士にあるまじき事をしでかしてしまったのだ。

「……兄の汚名を晴らしたのは、俺ではなく兄、アイオロスの意思を継いだ若き5人の青銅聖闘士たちだった。本来なら……俺こそが兄の潔白を信じ続けなければならなかった……。今にして思えば、何故俺は兄を信じなかったんだ。兄ほどの偉大な聖闘士が、逆賊になるような男ではないことを俺が一番知っていたはずなのに……」

『逆賊の弟』として蔑まされ続け、兄を恨み、兄を超える黄金聖闘士になってその汚名を晴らすことばかり考えていた。

弟として兄を尊敬し、兄のような聖闘士を目指していたのに……兄が正義感の強い男だと知っていたのに……。

何故、自分は兄を信じられなかったのか……。

例え周りに何を言われても、弟である自分が一番兄を信じなければならなかった。

教皇に化けていたサガに騙されていたとはいえアイオリアは、密かにそんな自分に憤りを感じていたのだ。

『真』の教皇であるシオンを知るムウと老師は、真実を見抜いていた。

ならば、アイオロスを知る弟である自分は、何故真実を見極めようとしなかったのかを……。

「フツ……いまさらだが……。俺も罪を償わなければならん。そんな俺が罪を償おうとしているカノンを認めんわけにはいかんさ……。最も奴がまた『悪』に走ったら……。今度こそ俺の手で制裁を加えてやるが……な」

まあ、そんなことにはならぬだろうが……。

と、最後に冗談の様に呟き、笑った。

ハーデス冥王との聖戦でのカノンの働きを認めているから、アイオリアもムウも、今ではカノンの事を認めているのだから……。

「戦う場所を変えるぞ！」

カノンは周りを見渡し、サガにそう告げた。

「何だと……」

「ここでは被害が大きくなりすぎる……。誰もいない無人世界で闘おう……。それとも周りの者をまきこまなければ俺と闘えないのか？」

「フン！ 安い挑発だな……。まあ、よかるう……。死に場所くらい選ばせてやる」

【リンディ……聞いていたな……。俺とサガを何処かの無人世界に転移させる……。これでこの街の復旧作業もしやすくなるだろう】

「わかりました。エイミィ、カノンさんと敵の転送を」

「了解！」

カノンからの念話を受け、リンディはエイミィに指示を出した。確かに、カノンほどの凄まじい力の持ち主が、それと同格の者と闘えば……周りの被害がどうなるか知れたものではない。

結界内に取り残され、今ムウに護られているアリサとすずかを早く戻してやらなくてはならないし、戦闘場所を別の世界に移した方が安全であろう。

そして、復旧作業も捗る。

早速、2人を無人世界に転送させた。

「ここなら文句はあるまい……」

周りを見渡したサガが言った。

廃墟と化した街……否、世界そのものが廃墟になっていて、人っ子一人いない世界。

カノンとサガは、共に戦闘態勢に入った。

「フツ、2人して神になり損ねた……愚かな兄弟もいたものだ……」

「もはや、岩牢に幽閉など生温い……異次元空間に閉じ込め……、いや、宇宙の塵となるがいい……！」

第三十一話 神を目指した双子座（後書き）

2人の双子座の激闘が始まった。

纏っている聖衣の違いにより、カノン優勢で終わると思われたが…

…。

二つの「銀河を砕く」力が激突する。

時空を越えた黄金の闘士

「双子座対双子座」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十二話 双子座対双子座

「さて、それでは我々もカノン達の転送された世界に行きますか」

「そうだな……」

皆、それぞれ頷いた。

ムウは、今まで自分が護っていた少女達 アリサとすずか

に視線を向けた。

「もう、大丈夫です。我々が此処を離れば、貴女たちは日常に戻れますよ……」

そうしている間に、クロノはエイミーに自分達も転送する様に指示していた。

「ち……ちよつと待ちなさいよ！」

納得のいかないアリサが叫んだ。

「何が起こったのかちつともわからないままじゃない。さっきのアントたちの会話もわけが分からなかったし……」

「それは後でなのは達が説明してくれますよ……。もうこの3人も貴女達に全て話してくれるでしょう……。でも、今は部外者の出る幕はありません……」

「部外者ですつて つ。なのはとフェイトが関わっているのに……」

親友が何か妙な事に関わっているのに、部外者扱いされたことに立腹する。

「……貴女の理屈に付き合うつもりはありません。貴女達2人は立派な部外者です」

「何ですよ！」

「それは、貴女達2人は戦う力を持たないからです！」

ここに居る者は皆、小宇宙や魔法という戦う力を持っている。

アリサは確かに頭脳は優れているが、それはあくまでも一般人としての頭脳に過ぎない。

すずかも運動神経はかなりの高スペックだが、だからといって戦うことができるわけではない。

「戦場において、戦う力を持たぬ者を部外者と言わずなんと言うんですか？先ほどまでは、貴女達は戦いに巻き込まれた被害者でしたから、私が貴女達を護っていました。ですが、戦場を移動するに際し、戦えない者を同行させる必要がありますか？それとも……貴女達は自ら足手纏いになりにつもりですか？」

ムウの正論の前では、いくら頭脳明晰なアリサでも反論など出来なかった。

確かにアリサは天才的な頭脳を持っているが、やはりまだまだ9歳の小娘に過ぎないのだから……。

「アリサちゃん、すずかちゃん。帰ったら全部話すから……今日のところはこのまま……」

「お願い。アリサ、すずか……」

「ごめんなあ……」

なのは、フェイト、はやてからも懇願され、アリサとすずかは不承不承ながら承諾した。

「帰ってきたら全部話しなさいよ！」

「なのはちゃん。フェイトちゃん。はやてちゃん。気をつけてね……」

「それじゃあ、エイミィ……。僕達も転送を……」

【了解！】

ムウたちが転移した先は、廃墟と化した世界であった。

「この世界は？」

「管理局が設立される以前に滅びた世界です。異常気象により農作物も育たなくなってしまう、この世界の人々は他の世界に移住したそうです……。これといった資源もなく、僅かにあった資源も全て掘り尽くされているので、管理局もこの世界を開拓してまで復興す

る必要性がなくそのままのようです……」

「ゴーストタウン……いや、ゴーストワールドとでも言うべき世界というわけか……」

「カノン達は何処に？」

フェイトがカノン達を探そうと辺りを見回すと先の方に光がちらちらしているのを見つけた。

ムウとアイオリア以外は、それを見て啞然とした。

光ったと思えば、辺りの瓦礫が次々と粉碎されているのだ。

間違いなく、そこにカノン達はある……。

しかし、フェイトたちにはその闘いを視認することさえ出来なかった。

カノンとサガ……2人の双子座ジューミニの高速戦闘……否、光速戦闘というべきか……。

「見える……クロノ？」

「無茶言うな！漸く音速マッハの域に達したばかりの僕が光速の動きを見切れるわけないだろ！」

今、この場で2人の動きを視認できているのは、ムウとアイオリア

……あの兄弟と同格である黄金聖闘士ゴールドセイントだけであった。

「今、2人は秒間に一億発の攻撃を応酬をしています」

「一秒間に一億発！？」

「そうです。音速マッハ1の速さを持つクロノは一秒間に百発の蹴りを撃てますが、我々、光速の速さを持つ黄金聖闘士は一秒間に一億発の拳を撃てるのです」

しかも、その一つ一つが破壊の究極である「原子を砕く」威力である。

聖闘士という存在を今まで知らなかった守護騎士たちは言葉も出なかった。

「我々が勝てんわけだ……」

「ギガ凄え……。本当に化け物かよ。黄金聖闘士ってというのは……」

「人間がそこまでの領域に辿り付けるモノなのか？」

「いや、普通じゃ無理……」

感歎する守護騎士たちに、聖闘士の修行を受けていたクロノがそう答える。

よく生き残れたものだ……と、今までカノンに受けた修行を思い出して、背筋が冷えた。

「ほう、やるな……カノン！」

「貴様もな……」

光速拳の応酬を止め、足を止めた。

「では、これならどうだ！」

「クツ！」

2人は同時に攻撃を仕掛けた。

お互いのパワーが中間でくすぶっていた。

「むっ……押しきれんか？」

「どうやら、俺たちのパワーは完全に互角のようだな……」

「フツ……この私と互角とは……さすが我が弟といふべきだな……カノ

ン！このままいけば……千日戦争になるか……」

「ンサウサントウオース」

サガとカノンが、互いに動きを止めて拳を放った為、どうにかクロノ達にも視認できるようになっていた。

「……あの2人の中間に凄いパワーがくすぶっている……」

「不味いですね……」

「ああ……」

「えっ、どうということですか？」

ムウとアイオリアの危惧を察し、ユーノガ訊ねた。

「実力伯仲の黄金聖闘士同士の戦いは、二通りの結末が予想されま
す……」

「お互いが一瞬の内に消滅するか……千日戦争に陥るかのどちらか

だ」
「ワンサウゼントウォーンス」

千日戦争とは、実力が伯仲している為相手に決定的な攻撃を加えられず、千日間戦っても決着がつかない状態のことである。

サガは言うに及ばず、カノンもそのサガと瓜二つの実力を持っているのだ。

正面からぶつかりあえば、こうなるのは自明の理であった。

「千日戦い続ければ、どちらもタダではすまん……」

結局、2人のパワーはお互いを相殺し合い消滅した。

「このまま戦っても埒があかな……」

しかし、『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』を撃ち合うわけにはいかなかった。

間違いない、その結果はお互いの消滅である。

再び、お互いの光速拳の応酬が始まった。

何度目かの応酬が過ぎた頃、目に見える変化が現れ始めた。

カノンが押し始めたのだ。

「カノンが押ししているな……」

「2人の実力は互角……そうか！」

ムウが思い当たった。

「2人の実力は互角ですが……2人の纏っている聖衣に差があるのです……」

形こそ似通った聖衣を纏っているが、カノンが纏っている聖衣は、ゴールドクロス黄金聖衣なのに対し、サガが纏ってるのは……。

「……そうや、サガが着とるのは形こそ『双子座』の聖衣やけど、あれは『騎士甲冑』や！」

はやても思い当たった。

そう、サガの肉体はあくまでも『闇の書の防衛プログラム』であり、サガの『悪心』が乗っ取っているだけに過ぎない……。

つまり、サガが纏ってるのはなのは達が着ている『バリアジャケット防護服』。

ベルカ式で言えば、『騎士甲冑』なのであった。

如何になのは達のよりは桁外れに防御力の高い『闇の書の防衛プログラム』の『騎士甲冑』とはいえ、それでも『聖衣』とはその防御力は鋼鉄とダンボール紙くらいの違いがある。

しかも、原子を砕く聖闘士の拳を防ぐ事は、いくら聖衣に形を似せていても、『バリアジャケット防護服』でははっきり言って不可能である。

実力が伯仲している為、その装備によって差が出始めたのだ。聖衣を纏った黄金聖闘士と聖衣を纏っていない黄金聖闘士。

そのハンは、思ったよりも大きかったようである。

「これで終わりだサガ！」

カノンの渾身の一撃がサガの『騎士甲冑』を完全に粉碎した。

「グハア！！」

完全にヒットした一撃を受けたサガが吹き飛び、壁に叩きつけられ、崩れてきた瓦礫に埋もれた。

「よし、決まった！」

「確実にヒットしました……」

「カノンが勝ったんだね……」

フェイトがホツとしてカノンに近づこうとした時……サガを埋め尽くしていた瓦礫が吹き飛んだ。

「ウワァッハッハッハッハッ！残念だったなあ……カノン……」

傷だらけになったサガだが、その口は笑みを浮かべていた。

「そんなダメージを受けていて、口が減らんサガ……」

「フツ………忘れたかカノン……？私のこの肉体は『闇の書の防衛プログラム』なのだということを……」

「何ッ？……バ……馬鹿な……き……傷が……！？」

サガの傷がみるみると癒えていった。

「そうか……『闇の書の防衛プログラム』は無限の再生を繰り返し、周りのものを侵食していく……。つまり、いくら奴にダメージを与えても……瞬時に再生してしまうんだ……」

ユーノが防衛プログラムの特性を思い出し、それを口にするると皆もそれを思い出した。

「つまり、奴を倒すには……」

「『アルカンシエル』級の破壊力を用いて、塵一つ残さず消滅させるしかない……」

つまり、『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』でサガを跡形もなく消滅させるしかないのである。

「だが……サガも当然『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』を撃てる……」

もともと『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』はサガの技である。

黄金聖闘士同士の決着のもう一つの可能性である「お互いの消滅」が皆の脳裏に閃いた。

「そ……そんな……」

いくらサガを倒しても……カノンまで死んでしまったら……。今のフェイトにとって、カノンを喪うことは耐えられなかった。

「フツ……確かに防御力は黄金聖衣を纏っている貴様の方が上だが、無限の再生を繰り返す私相手にいつまでもつかない……」

無限の再生能力があるサガは、体力も無限なのである。

つまり、サガには千日戦い続けられる余力があるということである。千日戦争に陥ったら、カノンが圧倒的に不利であった。

「フツ……。もはや勝負は決したな……」

そう言うとサガは構えをとった。

「……しまった！」

カノンは慌てて回避行動に入るが、間に合わずサガの攻撃を喰らった。

「うわあああああああッ……!!」

サガから放たれた凄まじい力により、カノンは吹き飛ばされた。

「カノオオオオオオオオオン!!」

フェイトの絶叫の音が響く。

「今のは……!?」

「サガ必殺の……『ギャラクシアン・エクスプロージョン』……!!」

「あ……あれが『ギャラクシアン・エクスプロージョン』!?」

「な……何という技だ……。あれが一個人が放った技だというのか……」

この技を始めて見る守護騎士たちは、そのあまりの破壊力に戦慄した。
まさしく、「銀河を砕く」というに相応しい技であった。

直撃は避けたモノの、カノンはかなりのダメージを負ってしまった。カノンの纏ってるのが黄金聖衣でなければ、如何に直撃を避けていてもこれで終わっていたかもしれない。
立ち上がったカノンに、サガが攻勢に出た。

サガの光速拳が次々とカノンにヒットしていく……。

「フツ……所詮、お前はこの程度……。私に敵う筈が……なかったのだあ　　っ」

サガの右ストレートがカノンの左頬に直撃する。

もはや一方的な展開になっていた。

「……や……やめて……やめて……やめて……」

フェイトは、なす術もなくサガの攻撃を受け続けるカノンを見ていられなくなっていた。

「ムウ……アイオリア……お願い……カノンを助けて……」

フェイトがムウとアイオリアに懇願するが……2人は動こうともしなかった。

「ムウさん……このままじゃカノンさんが……」

「リア兄い……!」

なのはとはやての言葉にも2人は反応しなかった。

「ムウ……アイオリア!!」
動かない二人に、フェイトが激昂しかけたが、それをクロノが制した。

「クロノ!?」

フェイトは、クロノが冷静な表情で見ているのを見て、今度はクロノに喰ってかかろうとしたが、その前にムウがクロノに語りかけた。

「クロノ……気付きましたか?」

「はい……。一見すればカノンさんはサガに手も足も出ない状況ですが……カノンさんの『小宇宙』は衰えるどころか……」

「ますます高まっている……既にカノンの『小宇宙』はサガを上回るほどに……な……」

「……バ……馬鹿な……カノン……貴様は……!?」

自分の猛攻を受け続けながらも、小宇宙が増大しているカノンを見て、サガは戦慄していた。

「………忘れたか……サガ……」

「何!?!」

「星矢は、貴様によって五感を絶たれ、傷だらけになっても………生命の炎が燃えている限り………何度も立ち上がり………貴様を倒したことを………どれだけ追い詰められても………諦めさえしなければ………最後に勝つのは………この俺だ!?!」

カノンの小宇宙は、サガを凌駕し始めていた。
カノンが反撃を開始した。

満身創痍とは思えぬ程の光速拳が繰り出され、サガは避けきれず直撃した。

「グオツ!き………貴様……。ならばこの一撃で終わらせてくれる!?!」

サガは、『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』の構えを取る。

そして、カノンも……。

「ま………まさか……。やめるカノン……!自ら消滅を望むつもりかあああああああああ!?!」

アイオリアが叫ぶが、2人には届かなかった。

「『ギャラクシアン・エクスプロージョン』!」

第三十二話 双子座対双子座（後書き）

ギャラクシアン・エクस्पロージョンの衝突を制したカノン。
闇の書の闇の暴走が始まった。

アースラは切り札のアルカンシエルを撃つが……。

時空を超えた黄金の闘士

「闇の書の闇」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十三話 闇の書の闇

『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』がぶつかり合い、途中で燻っていた。

「クツ……先程と同じ様に互いのパワーが中間で燻っている……」

「このままでは、双方力が抜けん……。一瞬でも気を抜けば、お互いのパワーを纏めて喰らうことになる……」

先程と違い、今回はお互いの最大の奥義のぶつかり合いである。

一瞬の気の緩みが死へと繋がるであろう。

『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』のぶつかり合いで生じた余波は、フェイトたちの方にも届いていた。

皆、魔法の障壁を展開し防御するが……。それでも伝わってくる衝撃はそこらの魔法と比べものにならない程、ケタ違いの威力であった。余波でこのレベルなのだから、まともにぶつかれば……。障壁などあって無きが如しであろう。

「……衝撃が此処まで来るとは……。不味いな……」

「……急いでこの場から離れないと危険だよ！」

シグナムとユーノが危惧の言葉を発するが、フェイト達は動こうとしなかった。

フェイトにすれば、大好きなカノンが心配であり、はやて達はサガの肉体が『闇の書の防衛プログラム』であるので、それが滅びるのを確認しなければ気が済まなかったからである。

「カノンはどうなるんだい？」

フェイトと同様カノンの事が心配なアルフがムウに問う。

「先程も話したとおり、このままではお互いが消滅する可能性が高いです……」

「じゃあ、さつきフェイトが言ったようにアンタ達が協力すれば……」

「今、介入すれば逆にカノンの身は元より俺たちも危なくなる……あれほどの力のぶつかり合いに下手な横槍を入れれば、それこそこの辺り一帯が吹き飛ぶ可能性があるのだ。」

「あれ!？」

その時、なのはが素っ頓狂な声を上げた。

「どうしたの……なのは？」

「何か、カノンさんの方が押し始めたみたい……」

「何!？」

視線をアルフからカノン達の方に戻したムウとアイオリアもそれに気付いた。

「……確かに、小宇宙といい、威力といい間違いなくカノンの方が押し始めている……」

「ば……馬鹿な……何故……私の小宇宙がこれ以上高まらないのだ？」

サガに焦りが浮かび始めた。

カノンの小宇宙が増大しているのに、自分の小宇宙がこれ以上上がらないのだ。

これほどの極限状態なのに……まだまだ上がるカノンの小宇宙。

にも関わらず何故、自分の小宇宙が上がらないのか……。

中間で燻ってる力も、徐々に押され始めている。

その時、サガの体に変調が起こった。

サガが吐血したのだ。

そして、その隙を見逃すカノンではなかった。

「今だ!くらすサガ!！」

「し……しまっ……くおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!！」

途中で燻っていた力が全てサガに襲い掛かり、サガは『ギヤラクシアン・エクスプローション』の奔流に飲み込まれた。

「決まった！」

「ああ」

「あれほどの力を喰らったのだ……如何に防衛プログラムとも言えども……」

再生など間に合わなかった筈……。

「……いや……流石はサガというべきか……」

しかし、ムウとアイオリアの顔からは安堵の表情は浮かんでいなかった。

「先程のカノン同様、なんとか直撃を避けたようでした……」

「そ……そんな……」

「あのタイミングで……避けたというのか？」

シグナム達は改めて、サガという男の恐ろしさを痛感した。

「しかし……」

「何故、サガが吐血したのか……」

全身から血を流しながらも、サガは生きていた。

再び『ハリアシヤケット防護服』は粉碎されていた……。

カノンは、サガが再び再生すると思ひ、構えた……が……

「ば……馬鹿な……何故……何故、再生が始まらないのだ！」
それどころか、出血が酷くなってきた。

「サガの様子がおかしいですね……」

「ああ。何かあったのか？」

ムウ達もいぶかしんでいると、はやてと融合していたリインフォースの念話が皆に届いた。

【原因が分かりました……】

「えっ……どういうことやリインフォース……？」

【サガは……未完成だったのです】

「未完成……って？」

【サガは、本来なら『闇の書』の主である貴女と管制人格である私も取り込むつもりだったのです。変更された『防衛プログラム』を御することなど歴代の主も私も出来ませんでした……。サガはその強大な精神力で無理矢理プログラムを支配しました……。しかし、やはり『闇の書』の主は『八神はやて』であり、その管制を行っているのは私です。私達を取り込んでいれば、サガは完璧にプログラムを支配できたでしょう……。しかし、カノンにそれを邪魔されてしまい、未完成の状態で実体化しました】

「成程……私も理解出来ましたよ……」

今の説明を聞き、ムウも理解した。

サガの『悪の人格』の精神力は強大である。

最初は小さかった『悪』だったが、覚醒したと同時にそれは途轍なく巨大な力と化した。

星矢と闘っていた時、本人格であるにも拘らず『善の人格』は星矢が『アナザーデイメンション』で異次元に跳ばされそうになった時、邪魔をすることが出来たが、闘いの最中に『悪の人格』から体の主導権を取り戻す事が叶わなかった。

それほどの強大な精神力なので、歴代の『闇の書』の主が御せなかった『防衛プログラム』を御することが出来ていたのだ……。

「ですが……。流石のサガも、自分と同格の力を持つカノンと闘っていれば、当然、精神力も消耗します……。そして、先程の『ギョラクシアン・エクスプロージョン』同士のぶつかり合いで更に消耗

「分かりました。静かなる風よ、癒しの恵を運んで……」
アイオリアに促され、シャマルは回復魔法『静かなる癒し』を使い、カノンに治癒を施した。

「……少しは楽になった……。シャマル…礼を言う……」
普通の傷ならば完全回復するのだが、今のカノンの傷は普通なら死んでもおかしくないほどの重症であるので、完全には回復しなかった。

しかし、それでも身に見える傷は塞がったようである。
その時、リンディから通信が入った。

【カノンさんが戦場を変えてくれたお陰で、躊躇いなく『アルカンシエル』を使えます。クロノ、皆さんをアースラに帰還させます】
「了解です。艦長……」

アースラのブリッジに来たカノン、ムウ、クロノ、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、そして、はやてと融合を解いたリインフォース、守護騎士たちとアイオリアはモニターで『闇の書の闇』を見ていた。

なのは達の意向で、はやてとアイオリアは勿論のこと、リインフォースと守護騎士たちは拘束されていなかった。

「初めましてはやてさん、アイオリアさん……そして、リインフォースさんと守護騎士の皆さん。アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです……」

「はい…初めまして……」

「世話になる……」

「……」

いきなり笑顔で挨拶されて、はやてとアイオリアは普通だが、守護騎士たちは罰の悪そうな顔していた。

一応、管理局と敵対する立場を取っていた負い目からであるが……。

「艦長。『アルカンシエル』の発射準備が整いました！」

「では、澱みが晴れ次第、発射します」

「了解。カウントダウン十秒前」

時間がカウントされているのを横で聞きながら、皆、『闇の書の闇』を見つめていた。

「これで終わりか？」

「聞いたところによると、『アルカンシエル』とやらは、カノンの『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』と同レベルの破壊力で、その効果範囲が百数十キロに及ぶそうですよ……」

「成程……並の者ではどうすることも出来んな……」

等と話している内にカウントが終わり、澱みが晴れ、『闇の書の闇』が姿を現した。

下半身が獣の牙と前脚、甲殻類のような四本の足、黒い六枚の羽を持ち、その周りに触手の様なモノに囲まれていて、上半身は人の姿をしており、その容姿はサガであった。

「……『アルカンシエル』、バレル展開！」

「ファイアリングシステム、オープン！」

リンデイの前に火器管制機構が現れ、そこにトリガーとなる鍵を差し込む。

「……『アルカンシエル』……発射！！」

赤くなつたトリガーを回し、『アルカンシエル』が発射された。

アルカンシエルとは、弾体自体にはそれほどほどの攻撃力はないが、着弾後に一定時間の経過によって発生する空間湾曲と反応消滅で対象を殲滅する魔導砲である。

直撃すれば、黄金聖闘士ゴールドセイラントであっても無事では済まないだろう……。

『直撃すれば』であるが……。

その時、『闇の書の闇』が雄叫びを上げながら、両手を頭上でクロスした。

「何！？」

「あ……あの構えは！？」

第三十三話 闇の書の闇（後書き）

『アルカンシエル』が通用しなくなった『闇の書の闇』。
もはや、手立てはないかに見えたその時…。
禁じられし力が今、開封される。

時空を越えた黄金の闘士

「影の闘法」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十四話 影の闘法

『アルカンシエル』が通用しなくなった『闇の書の闇』に対し、もはや打つ手は何もなかった。

『ギャクシアン・エクスプロージョン』は威力に関しては『アルカンシエル』と同レベルであるが、規模では劣る。

しかし、『闇の書の闇』のその巨体から繰り出される『ギャラクシアン・エクスプロージョン』は速度を犠牲にしたとはいえ、それを克服してしまったのだ。

再び、戦場に戻った黄金聖闘士ゴールドセイントと魔導師と騎士たちだったが、その攻撃は無効だった。

『闇の書の闇』のバリアは魔力と物理の複合四層式……だったのだが、サガを取り込んだ為にそこに『小宇宙』が加わってしまい魔力と物理と小宇宙の複合五層式になっていたのだ。

『小宇宙』のバリアは魔法の障壁よりも遥かに強力である。

なのは達の魔法はおろか、カノン達の技も最後の小宇宙のバリアによって威力を相殺され、『闇の書の闇』を再生不可能までのダメージを与えることが出来なかった。

バリアその物は貫く事はできるのだが、威力が相殺されるので、本体を消滅させることが出来ないのだ。

もはや完全に手詰まりになったかに見えた。

「くそ！ どうすればいい？」

既に『闇の書の闇』が侵食が始まっている。

この世界全てを侵食し終えた後、有人世界に転移されれば、大混乱が起きる。

クロノに表情に焦りが見え始めた。

「……………こうなったら……もはや『アレ』しかないな……」

カノンの呟きに、ムウとアイオリアがハツとなった。

「……………『アレ』！？ 何か手があるんですか？」

もはや、手立てが何も思い浮かばないユーノは、目の前の規格外3人の反応に期待した。

「……カノン…お前、まさか!？」

「……『アレ』は、我々にとっては……」

「俺と違って、お前らは抵抗は薄いだろうが……一度使用しているのだから……」

躊躇いの表情を見せるアイオリアとムウに、カノンは苦笑しながら指摘した。

「それに……アテナの許可はとってある……」

「許可?……いつだ?」

カノンは、『闇の書の夢』に囚われた時に、アテナとコンタクトが取れたことを説明した。

「……成程な……俺たちがこの世界に飛ばされたのは……『神』の力によるものか……」

「時の神『クロノス』……オリンポスの神々をも超越した『神』……」

嘆きの壁を破壊したとき、間違いなく命を落としていたはずの自分達が何故、生きていたのか漸く納得がいった二人であった。

「……俺たちは……『神』の気紛れで命を存えたのか……」

アイオリアは苦笑していた。

「……とにかく、アテナのお許しがあるのなら……」

「そうだな。カノンにとっては初めて、俺たちにとっては二度目の『アレ』を撃つか……」

ムウとアイオリアも決意した。

カノンがクロノに呼んだ。

「何ですか?」

「お前以外はアースラに撤退させる!」

「な……なんでだよカノン!!」

横にいたアルフが食って掛かってきた。

「話は最後まで聞け!いいかクロノ。俺たちはこれから『切り札』」

を使う。皆が撤退したら、少しの間だけでいい……奴の動きを止める。出来るか？」

「この『デュランダル』の凍結魔法を使えばなんとか……」

「それだったら、『バインド』でもできるのでは？」

ユーノが口を挟んできた。

「いや、設置型のバインドなら直ぐに破壊されるだろう……自我を失っているとはいえ、奴にはサガの……聖闘士の力が在ることを忘れるな……」

少なくとも、凍結魔法なら数十秒は氷付けに出来るだろう。

「うちの石化魔法でも可能やけど……」

「そうか……ならばまずムウとアイオリアが奴のバリアを破壊し、はやての石化魔法で動きを止める。その後クロノ以外はアースラに撤退。奴が石化魔法を破る寸前にクロノの凍結魔法で再度動きを止める。そしてクロノはすぐさま撤退。その後、俺たちの『切り札』で奴を討つ！」

「何故、撤退する必要があるのだ？」

「……これから撃つ技の余波は『ギャラクシアン・エクスプロージョン』同士のお前たちではその衝撃にはとても耐えられん……『黄金聖衣』を纏っていないお前たちではその衝撃にはとても耐えられん……」

シグナムの問いにアイオリアが答えた。

先程の『ギャラクシアン・エクスプロージョン』のぶつかり合い以上の余波……。

どんな物なのか想像もつかなかった。

「分かりました。カノンさん達を……『黄金聖闘士』の力を信じ、そのプランで行きましょう」

「……『ライトニングプラズマ』！」

「……『スターダスト・レボリューション』……！！」

アイオリアとムウの技が魔力と物理と小宇宙の複合5層式のバリアを相殺するとその場をテレポーションで離脱。カノンの両サイドに立った。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け！石化の槍『ミストルティン』！」

バリアを張り直す隙を突き、はやてのランクA A A +の石化魔法『ミストルティン』が『闇の書の闇』の石化に成功した。

「今だ、エイミィ！転送を！！」

【了解！】

すぐさま、クロノと黄金聖闘士を除く者達がアースラに撤退する。石化された『闇の書の闇』は形状を変え、すぐさま石化を破った。

「クロノ！」

「はい。悠久なる凍土。凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ。『エターナルコフィン』！」

グレアムから預かったストレージデバイス、氷結の杖『デュランダール』にセットされたランクSオーバーの凍結魔法『エターナルコフィン』が『闇の書の闇』を凍結し、クロノもすぐさま撤退する。

凍結の軛から脱した『闇の書の闇』だったが、その目の前には、膝を着き両腕を前に出して構えるカノンと、その左右で構えるムウとアイオリアの姿があった。

「……………いくぞ！」

「…応！！」

黄金聖闘士が三位一体となって放つこの技は、究極まで高めたワールドの攻撃的小宇宙が一点に集中する為、その破壊力は小規模ながら宇宙創造のビックバンに匹敵する…。故にその余りに凄まじい破壊力の為、神話の時代よりアテナに禁じられた究極の影の闘法。

「……………アテナ・エクスクラメーション！！！！」

小規模ながら宇宙創造のビックバンに匹敵する『アテナ・エクスク
ラメーション』が発生した…無人世界 廃墟と化した街
『闇の書の闇』はおるか、その街の廃墟は跡形もなく消滅した
かつて人々が生活していたと思われた建築物は全て吹き飛び、大地
は引き裂かれた荒野と化した

諸行無常…

盛者必衰…

その地に残っていたのは、黄金の三人のみであった

アースラのモニターで見守っていたなのは達は絶句していた。

「……………エイミー……………防衛プログラムは？……………」

「……………消滅を確認……………跡形も残っていません」

「……………カノンさん達のあの技の分析結果は……………」

「……………ぶ……………分析不能です……………お……………おそらく宇宙創造の『ビックバン』
に匹敵するエネルギー量とコンピュータは予測していますが……………」

何とか声を振り絞り、エイミーに先程の技の予測結果を聞いたリン
ディだったが、返ってきた答えを聞き、再び絶句する。

確かに、結果だけなら『アルカンシエル』を撃った後の状態と大し
て変わらないだろう。

だが、放たれたエネルギー自体は『アルカンシエル』とは比べもの
にならず、しかもそれを、たった3人の力のみで制御したのだ。

「……………どこまで……………どこまで私達の常識を覆せば気が済むのかしら
……………黄金聖闘士という存在は……………」

大量の冷や汗を流しながら、シートに座り込んだリンディは嘆息し
ながらそう呟いた。

「……………終わったな……………」

「……………ええ……………終わりました……………」

アイオリアとムウが一息入れた時、異変が起こった。

「グッ……………」

カノンが表情が苦悶に歪み、膝を突いた。

「カノン!!」

「どうしました!!」

二人の手がカノンの肩に触れる寸前……………カノンは全身から血が噴き出した。

「カノン!!」

流血が止まらぬまま、カノンはその場に倒れこんだ。

「カノンさん!!」

「カ……カノン!!」

「イ……………イヤアアアアアアアアアアアアア!!」

カノンが倒れる様をモニターで見ていたクロノとアルフの顔色が変わり、フェイトの張り裂けんばかりの絶叫が艦橋に響いた。

第三十四話 影の闘法（後書き）

新たな暴走を防ぐ為、自らの破壊を願うリインフォース。
泣きじゃくるはやて。

その時、希望を持ったリニスが現れた。

時空を越えた黄金の闘士

「夜天の魔導書」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十五話 夜天の魔導書

気を失ったカノンは、アースラの医務室に收容された。

サガとの戦いで受けた傷を、一度シヤマルの『静かなる癒し』で塞いでいたが、余りに深い傷だった故、完全には癒えていなかった。そんな状態で、『アテナ・エクスクラメーション』を放ったのだ。いかに最強の聖衣である『黄金聖衣』を纏っていても、その下は生身の体である。

『アテナ・エクスクラメーション』の衝撃で、表面だけ塞がっていた傷が再び開いたのである。

医務室のベッドで眠っているカノンの横に、フェイトが付き添っていた。

カノンが目を覚ますまで、傍にいるつもりである。

「リインフォース……何を言ってるんや！」

一方その頃、食堂ではやてがリインフォースに縋りついていていた。

「確かにサガが乗っ取っていた『防衛プログラム』はカノンやアイオリア達のお陰で無くなりました。しかし、破損は致命的な部分にまで至っています。『防衛プログラム』は今のところ停止していますが、歪められた基礎構造はそのままなのです。このままでは私は

『夜天の魔導書』の本体は、やがて新たな防衛プログラムを生成し、また暴走を始めてしまいます……」

『夜天の魔導書』の管制プログラムであるリインフォースの中にも、本来の姿のデータが消えているのだ。

元の姿が分からなければ修復することが出来ない。

『防衛プログラム』がない今なら、『夜天の魔導書』の完全破壊は可能である。

破壊してしまえば、もうはやてを侵食する危険性は完全に無くなる。幸い、サガに乗っ取られた『防衛プログラム』と共に、守護騎士システムも『夜天の魔導書』から切り離された。

『夜天の魔導書』を破壊してもシグナム達、守護騎士は消滅しない。逝くのは、リインフォース一人で済むのだ。

「破壊なんてせんでええ！私がちゃんと抑える…だから……」
「良いのです…」

泣きじゃくり、縋りつく手を強めるはやてを優しく諭そうとするリインフォースを、アイオリアと守護騎士達は哀しげに見つめていた。「永い永い年月を生きてきて…最後の最後で、綺麗な名前と心を貴女にいただきました。騎士達も貴女の下に残ります…そして、アイオリアも…何も心配はありません…。ですから、私は笑って逝けます…」

「…リインフォース…」
はやてがどれだけ止めても、リインフォースの決心が変わらない。

「私はもう、世界一幸せな魔導書ですから…」
ちょうどその時、クロノが食堂に入ってきた。

「…ちょうど良かったハラオウン執務官…。貴方達、時空管理局に…『夜天の魔導書』の破壊を依頼したい…」

「あ…あかん…。やめてクロノ君！」

クロノははやてとリインフォースの顔を交互に見て、答えた。

「断る！」

「…な…!？」

「クロノ君！」

クロノの返事に、リインフォースは驚き、はやては喜色を浮かべた。「何故!?このまま私が存在していれば、また悲劇が起こるぞ！

…十一年前の用に…」

はやてがその場にいるので言及しないが、リインフォースは目の前の少年が、十一年前の暴走で死んだ管理局の提督の息子であることを悟っていた。

目の前の少年は自分を恨んでいるだろう事も……。

「……呪われた魔導書『闇の書』は確かに、不幸を撒き散らした。

しかし、君は『リインフォース夜天の魔導書』だ……。罪があるのは君を『闇の書』に改変したかつての『主』であって君ではない……」

「それに……私の努力を無にして欲しくはありませんね……」

そこに、リニスが入室してきた。

「……お前は？」

「私は山猫のリニス……。ゴールドセイント黄金聖闘士、『ジエミ双子座』のカノンの使い魔です……」

「……カノンの？」

「はい。お初にお目にかかります。アイオリア……」

初対面になる自身の『主』と同格の存在に、リニスは礼を取る。

「……お前の努力とは……どういうことだ？」

リインフォースの問いに、リニスは一枚のデータディスクを差し出した。

「……これは!？」

「先日、無限書庫で私の主とマスターユーノが見つけた『夜天の魔導書』の修復プログラムです……」

「……なっ!？」

『夜天の魔導書』を製作した初代『夜天の王』は、自分の後継者たちの誰かが魔導書を改悪する可能性を予測していた。

故に、それに備える為、『夜天の魔導書』のプログラムのバックアップを取っていたのである。

リニスは、カノン達が見つけたそれを受け取り、修復プログラムを組んでいたのである。

「それじゃあ……」

はやてが涙を流しながら、期待を込めた瞳でリニスを見つめる。

アイオリアも守護騎士たちの表情にも喜色が浮かんでいた。

「はい。『夜天の魔導書』……いえ、リインフォース……。貴女を破壊する必要などありません……。最も、あのグラム提督が余計なことを企てなければ……。今回、これほどの騒ぎにはならなかったんですけど……。ね」

グラムの名前に、はやてが反応した……。

「グラム提督って……。グラム小父さんの事？」

「その件は、後で説明するよ……。で、どうするリインフォース……。これを聞いても、まだ自分を破壊して欲しいと願うかい？」
クロノの問いに、リインフォースは沈黙している……。

「……リインフォース……」

「私は……。私はこれからも……主と……騎士達と共に生きて……。いいのか……？」

「もちろんや！」

「リインフォース……」

「これからも、家族として……」

「一緒に生きていこう……」

「やはり、我らも……お前を喪いたくない……」

はやてが頷き、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラも自分の本当の気持ちを伝える。

リインフォースは、その場で泣き崩れた。

こうして、『夜天の魔導書』が修復された。

リインフォースと守護騎士たちの強い希望により、転生システムも切り離されることとなった。

自分達の主は八神はやてだけであり、これより以降、はやて以外を主としたくないとの願いからである。

医務室で寝ていたカノンが目を覚ました。

「カノン！良かった……」

「……フェイト……」

目を覚ましたカノンに、フェイトは泣きながら縋りついた。

「……そうか……『夜天の魔導書』いや、リインフォースの修復は済んだか……」

「うん。カノンとユーノのお陰だって、はやてが礼を言いたがっていたよ……」

「それで、はやて達は？」

「とりあえず、シグナム達は事情聴取を受けているよ……はやては病院に戻ったよ……勝手に病室を抜け出したみたいになっているから、主治医の石田医師せんせいって人にアイオリアがお説教されたらしいけど……」

「……そうか」

カノンは、ベッドから起き上がった。

「まだ寝てなくちゃ駄目だよ！」

「いや、まだ解決していない事があるので……。本局に行かなくてはならん……」

「その必要はないですよ……カノンさん」

そこへ、一人の少年が医務室に入ってきた。

「誰！？」

知らない人が突然入ってきたので、警戒するフェイト……。

「失礼。僕は本局の査察官補佐のヴェロツサ・アコース……。カノンさん……提督をお連れしましたよ……」

ロツサに伴われた人物は……ギル・グレアム提督だった。

第三十五話 夜天の魔導書（後書き）

カノンの前に現れたグレアム。

グレアムは、自身の動機をカノンに語る。

それを聞いたカノンが、グレアムに求めることは？

時空を越えた黄金の闘士

「罪と罰」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十六話 罪と罰

「……グレーム提督？」

フェイトは、突如現れた自分の保護監察官を見て戸惑っていた。

「……カノンさんが重症だとクロノ君から聞いてね……、無理をさせるのは悪いと思って、此方から来させた方がいいと思ってね……」

「確かに、本局に向かう手間が省けたな……」

苦笑していたカノンは、そう呟くと表情を改めた。

「……カノン……。私は席を外した方がいい？」

「……イヤ、別に構わん……」

退室しようとしたフェイトを制し、カノンはグレームと向き合った。

「……さて、ギル・グレーム……。俺が聞きたいことは理解しているか？」

「……私が、『闇の書』をはやて君諸共、封印しようとしていた件について……だろう？」

「そうだ。お前は『闇の書』が起動するかなり前にはやてが次の主であることを知った筈……。にも拘らず何故、このような短絡な方法を取った？」

それほど早くに『闇の書』の転生先を突き止めておきながら、グレームは管理局に報告せず、転生先であるはやてに父親の友人を語り、後見人となった。

その目的は、『闇の書』を完成させ、暴走が始まる直前に強力な凍結魔法を用い、はやて諸共、永久封印することであった。

そのため、使い魔のリーゼ姉妹を『仮面の男』に変身させ、守護騎士達の蒐集に協力し、アースラの捜査妨害などを行っていたのだ。

フェイトは、グレーム達が『仮面の男』として自分達の妨害をして

いた事を知り、呆然となった。

「少なくとも、お前ら管理局が定める法に照らし合わせてもお前の行為は違法だ。管理外の世界の人間にもそれを強いる管理局員であるお前達こそがそれを最も守らねばならないのではないか？」

カノンは、クロノと初めて会った時のことを思い出していた。あの時、クロノは管理局とまったく関わりのない……… ところどころか管理局が発見していない世界出身の自分に対しても、管理局が内輪で決めたルールを押し付けようとした。

今のクロノはその様な傲慢な行為を行わないが、それはカノンがクロノの魔導師としてのプライドを完膚なきまでに砕いたからであり、あの場にカノンが居なければ………、クロノは高圧的な態度のままだったかも知れない。

他者に自分達が決めた法を従わせようとするのなら、まず己自身がそれに従わなくてはならない。

グレアムも管理外世界の出身だが、もう何十年も管理局の水を飲んで生きてきた。

今更、自分は管理外世界の人間だから………というのは通用しない。

「………今でも後悔している。クライド………クロノの父の艦に何故、『闇の書』を積ませたのか………と……。本来なら、最高責任者である私の艦に積ませるべきだった。幼い息子が居るクライドよりも、独身で、しかも年長の私の方が犠牲になるべきだった………と。」

夫の訃報を聞き、涙を堪え気丈に振舞うリンディと、父の死に泣き崩れるクロノ。

2人の姿が、グレアムの目に焼きついていた。

リンディも管理局の人間であり、優秀な魔導師である。

『闇の書』がどれほど危険な物か理解していたし、局員としての考えから、グレアムを責めなかった。

いつそのこと罵ってくれれば………恨み言の一つも言われたほうが気が楽だった。

グレアムは、『闇の書』への復讐を誓った。

任務の合間に、独自に転生した『闇の書』を搜索し、何年か経ってそれを見つけた。

皮肉にも、転生先は自分の出身世界にある東洋の島国に住む一人の少女の下だった。

「彼女の身の上を知り身体を悪くしている彼女を見て良心は痛んだが　運命だと思った。孤独な子であればそれだけ悲しむ人は少なくなる……」

「……はやての生活の援助をしていたのは？」

「……永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった……偽善だな……」

グレアムの返答を、カノンは鼻で笑った。

「フツ……幸せに……だと？何処かだ……」

「何!？」

「はやてを幸せにしたいのなら、援助などしない方が良かったのだ……」

「……どういう意味だね？」

「はやては、お前の援助で生活が安定していたからこそ、アイオリアや守護騎士たちと暮らすことが出来た……。しかし、最後の最後でお前達ははやての幸せを踏みにじった。はやての前でシグナム達を『闇の書』に蒐集させ、はやてから奪った。ささやかな幸せの中にいたはやてを絶望に突き落とした……」

孤独だったはやては、アイオリアと守護騎士たちという家族を得た。病魔が自分を蝕んでいても、はやては十分に幸せだった。

しかし、その家族が目の前で消滅していった……。しかも、友達の手で……。

リーゼ達はなのはとフェイトの姿でシグナム達を消滅させたのだ。ささやかとはいえ、やっと手に入れた幸せを奪われた絶望は、並大抵の物ではない。

「生活が苦しかったら、シグナム達の衣食住の世話など出来なかつただろう……。苦しければ苦しいほど……そこから逃れなくなる……。」

それなら、お前の計画は、はやてにとって苦しみからの救済になつていただろう……」

生きる苦しみから解放され、『闇の書』の見せる幸せな夢の中で永遠に眠る……それが正しいか間違っているかは置いておいて、その方がどれほど……。

「……大切な存在を目の前で喪わせ、絶望に突き落とす必要性があったのか……？」

「……しかし、はやて君は今までの『闇の書』の主たちと違い、『闇の書』の絶大な力を望まなかった……。『闇の書』の起動に必要な願いを求めさせなければならなかった」

「……だから、生活の援助など要らないと言ったんだ……。生活が安定していなかったら、家族とのささやかな幸せすら望めない……。安定していたからこそ、はやては『闇の書』の力を求めなかったのではないか……。皆と幸せに暮らすために力が必要なら……。はやても『闇の書』の力を望んだかもしれん……」

最も、アイオリアというイレギュラーが存在していたので、そう上手くはいかなかっただろう。

いくら、はやてを大切にしているも、アイオリアはアテナの聖闘士である。

まだ魔力を持った生物からの蒐集ならば『狩り』で済ませただろう。人が生きて行く為に、他の生物を糧にするしかなく、それまで悪と断じてしまえば、人間は生きていられなくなる。

むしろ、命を奪わないので、糧を得るための『狩り』よりは穏便だろう。

しかし、人間相手にそれを行えばそれは『通り魔強盗』と同じだろう……。

今回、アイオリアは見て見ぬ振りをしたが……。それはシグナム達はやてにも内緒していたからであり、それを表立って行っていれば、アイオリアは止めざる得なかった……。

「あと、お前の計画自体に問題がある。お前の計画では永久に『闇

の書』を封じることなど出来ない。いや……そもそも『永久』に封印など『神』でも不可能なのだ……」

たとえ凍結魔法で封印しても、いつか誰かが手にして使おうとする……『闇の書』の絶大な力を求めて……」

そして、誰も手を出さなくとも、いつかは凍結魔法の効力が失われ、復活してしまうだろう……」

所詮、魔法は『人』の力に過ぎない。

二百数十年前の聖戦において、アテナは『108の魔星』を封印した。

しかし、その封印は二百数十年で効力を失ってしまった。

『神』であるアテナの封印でさえ、永久に封じることが出来なかったのだ。

ましてや『人』の力で、『永久』に封印など不可能なのである。

最も、『神』である冥王ハデスの力である『108の魔星』と『人間』である魔導師が作った『闇の書』とでは、モノのレベルが違うと言っ
てしまえばそれまでだが（『108の魔星』と違い、『闇の書』程度なら、『神』の力なら永久封印が可能かも知れないが）……」

「……お前の取った手段は、本来なら最後の手段にすべきだった。はやてを見つけてから今まで、時間がなかったと言わさん……」

現に俺たちは偶然とはいえ、『夜天の魔導書』を修復する手段を見つけたのだ……。お前の権限があれば無限書庫で主を殺さずに『闇の書』を何とかする方法を探せたはずだ……」

「……無限書庫は本来、探索のチームを組んで数年がかりで探さなければならぬ……その間に多くの犠牲者が……」

「行動も起こさず、推論だけでほざくな！」

グレアムの反論を、カノンは切り捨てた。

「どれだけ理屈を並べても、現に俺とユーノが見つけたのは事実……。可能性はゼロではなかった筈だ」

確かに、カノンとユーノが解決法を見つけたのは偶然だった。

もしくは遺跡発掘を生業にしているスクライア族のユーノと、空間

を操る力を持つカノンの二人がそろっていたからこそ、見つけれ
たとも言えるかも知れない。

しかしそれならば、そのスクライア族に探索を依頼すれば見つかる
可能性が高いだろう。

数人のスクライア族が探索すれば、カノンたちと同じ……いや、そ
れ以上の確率で見えてきたかもしれない。

グレアムの取った行動は、それでも見つけることが出来なかったと
きの為の最後の手段にするべきだった。

「お前は…身勝手な復讐心で何の力も持たない少女に、全てをなす
りつけて殺そうとしたに過ぎない……」

カノンの痛烈な指摘に、グレアムは沈黙した。

「そして……お前のもう一つの罪は、クロノとリンディの信頼を裏
切ったことだ……！」

グレアムはかつて、フェイトの保護監察官として言った。

「友達や、自分を信頼してくれる人の事は決して裏切ってはいけな
い……と……」

「フェイトにそれを求めたクセに、お前自身が、クロノとリンディ
の信頼を裏切った……」

もはや、グレアムは何も言えなかった。

「……お前に聞きたいのは、その罪を償う気があるかどうか……だ
……」

「……」

「どうなんだ？」

カノンの問いに、沈黙していたグレアムが口を開いた。

「……君の言うとおりだ……。はやて君に対する罪は…償うつもり
だ……」

「ならば……自分が何をすべきかは理解しているだろう」

グレアムは頷いた。

「管理局は、はやて君に対しても罪を求めらるう……。それを全て私が引き受ければ良いんだね……」

「そうだ……。守護騎士たちの行動に関しては……。流石に無理だが、はやてに関しては元々罪などないからな……」

カノン達からすれば納得いかないことだが、管理局はシグナム達守護騎士たちを人間とは見なさず、はやてのデバイスの『プログラム』に過ぎないとみなすだろう……。

つまり、守護騎士たちの行った行為はすべて『夜天の魔導書』の所有者に責任がある……。と……。

しかし、自立していない9歳の少女に管理責任などある筈がないのだ。

はやては一人暮らしではあるが、自身で働いて生活していた訳ではなく、両親が残した財産で生活しており、その財産は後見人のグレアムが管理していた。

そして、『闇の書』の主とはいえ、覚醒前のはやてには何の力もなかった。

つまり……。はやてに守護騎士たちを止める力などなかったのだ。

『闇の書』にしても、はやてが自分から手に入れたモノではなく、『闇の書』側が、ランダムにはやてを選んだに過ぎない。

むしろ、後見人であるグレアムが、全ての責任を負うべきだろう。グレアムは、『闇の書』の危険性を熟知していたのだから……。

「……お前が本来、はやてに着せられる罪を肩代わりするのなら、俺はそれでいい……」

そう言うと、カノンは再びベッドに寝そべりシーツを被った。

「……それで良いのかね……。私は君に制裁を受けるモノと思っていたのだが……」

「……お前を裁く権利……。それは俺にはない……。お前がすることは、はやてに謝罪し、はやての審判を仰げ……。はやてが赦せばそれで良からう……」

再び体を起こしたカノンが、グレアムを見据え言った。

「……………最も、はやてはきつとお前をあつさりとお赦すだろうが……………な……………。だからこそ、はやてが被る罪をお前に被れと言ったわけだが……………」

「そう、おそらくはやては、それでもグレアムを赦すだろう……………。グレアムにどのような企みがあったにせよ、グレアムのお陰ではやては今まで生活できたのだから……………。」

「それに……………、お前程度の小悪党など、俺に比べれば小さい小さい……………」

……………
『神』である海皇ホセイドーンを誑かし、アテナと海皇に代わり地上と海界を支配する『神』になるうとしたカノンに比べれば、グレアムの企みなど取るに足らないことである。

「だが……………それでもさっき言ったように、お前に罪がないわけではない。はやて、クロノ、リンディ……………この3人の信頼を裏切ったことは、赦されることではない。例え、はやて達がお前を赦しても……………お前はその罪から逃げるな……………。逃げるようなら……………その時は俺がお前の首を落す！」

カノンも罪を背負う身である。
グレアムが、その罪を背負い償うのなら、カノンは手を出さない……………。

しかし、グレアムがその罪を償うつもりもなく、自分を正当化し、罪から逃げるつもりなら……………例え、管理局を敵に回してもグレアムに制裁を加えるつもりだった。

グレアムがロツサに連れられ、医務室から退室した後、フェイトが口を開いた。

「……………本当に……………グレアム提督が罪を償おうとしなかったら……………提督を殺すつもりだったの……………?」

「……ああ」

自分に比べれば大したことではないとはいえ、グレアムの行為は当然、赦せるものではない。

先程も言ったが、グレアムが取ろうとした行動は、手を尽くしてどうしようもなくなった時の、最後の手段である。

やるべき事もやらずに、ただ自分の復讐の為に、何の罪もないはやてになすりつけるなど……赦されることではないのだから……。

「奴は、管理局の中では『英雄』とまで呼ばれている……。今回、はやての罪を被っても今までの功績から鑑みて、そう大層な罪にはなるまい……。管理局としても、今まで英雄扱いしていた者が、大罪で裁かれては体面が悪くなるだろうから……。」

組織というものは、体面を気にするものである。

恐らく、今回の件はグレアムに辞職させることで済ませるだろう。

何しろ、死人はただの一人も出ていないのだから……。

守護騎士たちが、はやての将来を考え、殺人を犯さなかったことがプラスになるだろう……。

「あの猫共は、アイオリアが制裁を加えたから……。アレ以上は必要あるまい……。それとも、お前個人はまだ赦せないか……。」

『仮面の男』に扮したリーゼに不意をつかれ、リンカーコアを奪われてしまったフェイトに、悪戯っぽく訊ねる。

「……アイオリアがあそこまでしたんだから……私もういいよ……」

アイオリアの怒気と殺気は、自分に向けられてもいないのに、とても怖かった。

なのはと共に、肩を抱き合い震えていたあの時の状況を思い出し、背筋が冷えるフェイトだった。

第三十六話 罪と罰（後書き）

はやてに謝罪するグレアム。

その頃なのはは、家族に自分の事を説明していた。

管理局への入局を望むなのはに危惧を抱く者が一人いた。

時空を越えた黄金の闘士

「少女たちの思い」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十七話 少女達の思い

八神家に、一人の男が来訪していた。

ギル・グレアム提督である。

グレアムは、己の所業をはやてに告白し、謝罪しに来たのだ。

グレアムは、はやてに罵詈雑言を浴びせられる事を覚悟していたのだが、カノンの予測した通り、はやてはあっさりとグレアムを赦した。

「……はやて君……」

「……グレアム小父さんの事情は、クロノ君から聞きました……。それに『闇の書』はそれだけ不幸を巻き起こしたんやから、恨みに思っただけです……。確かに小父さんのやり方は、正しかったとは言えへん……。でも……小父さんのおかげで今までウチは生きてこれた。それは事実です……。何より、今回のことでは最終的には誰も死んでへんし……。一番痛い目を見たんは、小父さん達やろ？」

今回の事件で自業自得とはいえ、最も被害を受けたのは、アイオリアに半死半生の目に遭わされたグレアムの使い魔であるリーゼ姉妹たちである。

「しかし、それは結果論に過ぎない。私は……」

「……それに……小父さんは、ウチにしようとした事を悔いとるんですやろ……。こうして、逢いにきてくれて、謝ってくれたんやから……それでええです」

はやては、俯くグレアムの手を取りながら微笑んだ。
年甲斐もなく、グレアムは涙を流していた。

「……フッ……、甘いな……はやては……」

「しかし……それでこそ主だ……」

隣室で話を聞いていたアイオリアとリインフォースが苦笑していた。
「……しかし、はやてはそれで良いとしてお前らはそれでいいの
か？」

「……確かに……グレラム提督が画策していたことは腹立たしい……
。しかし、『闇の書』が原因でクロノ執務官の父親が亡くなられ
たのは事実……」

「……それ以外にも、『闇の書』に恨みを持っている人たちはたくさ
んいます……。私達に復讐しなくなっても仕方ありません……」

「……はやてが赦すんなら……アタシも赦すよ……」

「主が決めた事なら、我らはそれに従う……」

アイオリアの問いに、シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ
が答える。

「……まあ、お前達がそう言うならそれでいいか……」

アイオリアも、カノンからグレラムがはやてに被せられる罪を引き
受けさせた事を聞いていたので、それで良しとしていた。

本来なら、一発ぐらい殴ってやろうと思ったのだが、カノンから「
あの猫共をあれほど叩きのめして、まだ足りないのか？」とジト目
で言われ、自重した。

アイオリアがリーゼ達をあそこまでボッコボコにしたので、カノン
の方はフェイトを傷つけられた鬱憤を晴らせない……もとい、制裁
を加えられないのをしっかりと根に持っていた。

その頃、高町家のリビングに家族全員のほかに、ムウ、リンディ、
クロノ、エイミィ、フェイト、ユーノ、アルフ、アリサ、すずかと
いった面々が揃っていた。

カノンも赴こうとしたのだが、フェイトに涙目で「まだ安静にして
なくちゃ駄目」と懇願されたので、仕方なくアースラの医務室で横
になっていた。

なのはの家族と友人たちに、次元世界を自然もしくは人為的災害から守り管理する時空管理局のこと、そこで使われる魔法のことなどの説明をする為であった。

本来は、なのはの家族だけに話す予定だったのだが、アリサとすずかは前回、巻き込まれた時に説明する約束だったので、今回、呼ばれたのである。

流石ににわかには信じられなかったが、魔法の実演などを実際に見せられては信じざる得なかった。

リンディはPT事件の折に、桃子達を欺いたことについて謝罪をしていた。

そして、恭也と美由希は自分達が助けたムウも、リンディ達とは関係ないとは言え、この世界の人間ではないことを知り驚いていた。

そして、ユーノの正体がフェレットではなく、なのはと同年代の男の子であるという事実が明らかにされ、なのはと温泉に入ったり、一緒に寝たりしていたことが問題視され、皆からシスコンと言われる恭也に凄まじい殺気を浴びせられ、アリサとすずかもなのはと一緒に温泉に入っていたので、裸を見られた事を思いだし、アリサにも睨まれ、生きた心地がしなかったユーノであった。

そして、そこでなのはは、家族の皆にお願いをしていた。

「学業とちゃんと両立するから時空管理局で武装局員として働いてもいい？」

フエイトがこれからも囑託魔導師として、管理局に協力していくのを知り、なのはも管理局への入局を決意したのだ。

元々、なのはは自分の将来の展望が見えていなかった。

アリサとすずかは、それなりに考えていたのだが、なのはは自分に何が出来るかがわからなかったからである。

しかし、ユーノを助け、魔法と出会い……、なのはは自分の進むべき道はこれだ…と、決めたのである。

それを聞いたとき、家族の皆…特に、士郎と恭也は渋い顔をしていった。

最初に、なのはに許可を出したのは桃子だった。

「なのはがやりたい事が出来て、そして悪い事じゃないんなら……私は反対しないわよ……」

桃子が、賛成したのを機に士郎と美由希も賛成し、恭也も無理をしないのなら……と、渋々認めた。

なのはが、家族の皆に礼を言おうとしたとき、待ったが掛かった。それは、ムウだった。

「……随分と簡単に認めましたが……、本当に貴方達はそれでいいのですか？」

管理局の武装隊という仕事が如何に危険であるか解らない筈がない。相当な危険を覚悟しなければならぬのに……。

「……ああ。なのはが決めた事だ……。家族として、それを応援するのが当然だろう……。第一、時空管理局というのは、立派な仕事のようだしな……」

士郎の答えに、ムウは内心、危惧を抱いたが、結局、家族が認めるのなら、部外者である自分が口を出す筋合いはないと、引き下がった。

後日、この判断が、高町家の人間に後悔を呼び寄せる事になるのだが……。

後日、翠屋において、忘年会を兼ねたパーティーが催された。

高町家と八神家、ハラオウン家とアースラのクルー、バニングス家、月村家の面々が集まっていた。

漸く医者 of 許可が出て、自由になったカノンも、リニスと共に参加していた。

「まったく……あの程度の傷で……」

「……全身から血が吹き出たのを『あの程度』とは言わないでしょう……。それに、それだけフェイトが貴方を心配していたということだ

すよ……」

愚痴るカノンに、リニスが苦笑しながら諭していた。

「ところで……カノン……。リンディ提督がフェイトに養子にならな
いかと薦めているそうですね……」

「ああ。裁判が始まる前から、リンディが言っていたからな……」

「……カノンは、どう思いますか？」

「管理局の提督としては、喰えない女だが……一人の女性としては
問題あるまい……。フェイトの事を考えれば、俺などが保護者をし
ているよりは、はるかにマシだろう……。まあ、どの道、それはフ
ェイトが決める事だ。プレシアにも頼まれたことだから、最後まで
面倒を見るつもりだが……な」

カノンの答えを聞き、リニスは以前、フェイトと話した時の事を思
い出した。

「このまま、フェイトはカノンの被保護者として生きていきますか
？」

「……カノンとは一緒にいたいけど……いつまでも、カノンが保護
者だと……」

フェイトは、赤くなりながら言葉を濁していた。

カノンはフェイトを大事にしているが、あくまで子供としてしか見
ていない。

魔導師としては、一流といってもいいくらいのフェイトだが、カノ
ンから見ればまだまだ半人前である。

最も、カノン達聖闘士が、魔導師よりもはるかに強いからであるが
……。

「どうしましたか……フェイト」

言葉を濁したフェイトに顔を寄せると、フェイトの咳きが入っ
てきた。

リニスも素体が山猫なので、犬ほどではないが聴覚が優れている。人間の耳には届かないほどに小さな声でもはつきりと聞き取れた。

「……今のままじゃ……カノンのお嫁さんにはなれない……」

フェイトの少女らしい願いを知り、リニスはこっそり微笑んでいた。「どうした、リニス？」

「……いえ、何でもありません！」

訝しげなカノンの問いを誤魔化しながら、リニスは考えていた。

カノンの実年齢は28歳……

フェイトは9歳……

歳の差は19年……

カノンには小児性愛ロマンティックの気はまったくないので、フェイトの想いが通じるとはとも思えない。

しかし、カノンは何故か肉体は14歳まで若返っている（クロノスに細胞時計を弄られていることが原因であるというのを、カノン達は知らない）。

つまり10年くらい経ては、カノンの肉体年齢は24歳……

フェイトは19歳……

違和感はなくなるだろう。

それに、それくらい成長すれば約20年の歳の差など問題ではなくなるだろう。

それくらい歳の離れた夫婦など、別に珍しくもないのだから……。フェイトは遺伝子学的には、歳を取ってもあれ程の美貌を持っているプレシアの娘なのだから、将来が期待できるだろう……（スタイルの面においても……）。

等と、自分が育てたかつての主の娘と、現在の主の将来を勝手に想像し始めていた。

何か悪寒を感じたカノンは、そんな妄想に耽る使い魔を放っておいて、ムウとアイオリアの下に向かった。

第三十七話 少女達の思い（後書き）

「闇の書事件」が決着を迎えたあと、ユーノは里帰りをしていた。それに同行していたムウに、ユーノは自分の決意を語る。

時空を越えた黄金の闘士

「ユーノの決意」

君は、小宇宙を感じた事があるか！？

第三十八話 ユーノの決意

『闇の書』事件と後に呼ばれる今回の事件は、終わってみれば死者ゼロという結果だった。

以前に起こった『闇の書』が齎した被害を考えれば、それは『奇跡』だった。

今回の事件の実行犯であるヴォルケンリッターは、各世界の魔導師たちを襲ったことによる障害の罪に問われる事になったが、死者を出していない事と、本人達が罪の償いを望んでいることをふまえ、管理局に入局する事で罪を償う事が決定した。

人手不足の管理局としては、高ランク魔導師に匹敵する實力を持つ彼女たちの力は喉から手が出るほど欲しかったので、まさに渡りに船だった。

『剣の騎士』と『鉄槌の騎士』は武装隊に、『湖の騎士』はその治療魔法の腕を見込まれ医療班に配属された。

今回の事件の黒幕として、責任を取ったギル・グレアム提督は表面きは希望退職として処理された。

彼の今までの功績を考慮に入れての処置だったが、実際に今回、彼がしたことは捜査妨害による混乱はともかく、事態の拡大を招いた事は管理局としても問題視されていた。

サガという邪悪なる意思に乗っ取られた『闇の書』の防衛プログラムは、黄金聖闘士という次元漂流者の協力がなければ、管理局の手に負えなかっただろう。

切り札である『アルカンシエル』すら通用しない化け物だったのだから……。

しかし、スクライア族の少年と次元漂流者が無限書庫で見つけ、次元漂流者の使い魔が作った『夜天の魔導書』の修正プログラムを『闇の書』の管制人格の起動前に使用していれば、これほどの大事にならなかつた。

管制人格が覚醒する前に修正プログラムを使用していれば、何の苦
労もなくサガが乗っ取っていた防衛プログラムを『夜天の魔導書』
から切り離す事が出来、サガは何も出来ずに消滅させる事ができた。
しかし、グレラムの命を受けたりーゼ姉妹が『闇の書』を完成させ
てしまったので、事態はややこしくなってしまったのだ。

『闇の書』の主の傍には、アイオリアと言う黄金聖闘士ゴールドセイントがいて、そ
のアイオリアを通じて修正プログラムを使い、『闇の書』を『夜天
の魔導書』に直せば、今回のような大事にはならなかったのだから
……。

その為、表向きは希望退職だが、実際は地位を剥奪されることにな
っていた。

しかし囑託魔導師扱いになっており。有事の際の現場への出向が定
められていた。

普通の囑託魔導師とちがい、現場に行けば指揮官クラスの権限が与
えられるが、出勤依頼の拒否権が認められていない立場であるが……。

さて、『闇の書』改め『夜天の魔導書』の主である八神はやてであ
るが、彼女はなのはとフェイト同様、『囑託魔導師』となることを
希望していた。

彼女は何の刑罰も受けなかったが、『夜天の魔導書』の力を世の為
に役立てたいという願いから管理局への入局を望んだのだ。
これには、アイオリアが難色を示した。

「お前まで管理局に入る必要はない……。お前には罪はないのだから……。
例え、シグナム達の主とはいえ、お前は何も知らなかった。

『無知は罪』などと主張する者など、ただの傲慢なだけの輩だ……。
そんなことをぬかす奴らなど放っておけばいいのだから……。」

「ウチだって、そんなおこがましい事は言わへんよ……。そんな事
言ったら、カノンさんやグレラム小父さんに悪いからなあ……。そ
やけど……シグナム達はウチの大事な家族や……。シグナム達の罪を肩
代わりなんて出来へんけど……背負つとる罪を横から支えることく

らいたいんや……。みんなで支えあうのが『家族』つちゆうモノ
やる？」

そう言われれば、アイオリアもそれ以上反対は出来なかった。

結局、はやては管理局の『囑託魔導師』となり、その護衛として『
ラインフォース
ザファイラ
管制人格』と『盾の守護獣』が付く事となった。

さて、年が明けて…… 1月4日。

今回の事件の功労者である高町なのは、フェイト・テストロッサ、
カノンの3人は…… お正月休みの真っ最中であつた。

「……フム、この『コタツ』と言うモノは良いものだな……」

カノンが育つた聖域には流石に日本の暖房器具である炬燵はなく、
すっかりと気に入っていた。

「炬燵は日本の誇る文化の極みだよ……」

「流石にそれは言い過ぎだと思っけど…… 反論できないかも……」

カノンと同じくまつたりしているなのはの言に、みかんの皮を剥き
ながらフェイトも同調した。

「フェイトちゃん…… 今夜の準備は万全？」

三が日が過ぎ、今夜から高町家、ハラオウン家、バニングス家、月
村家の4家族合同での2泊旅行を行う予定であつた。

エイミイとアルフはその準備の為、今、買い物に行っている。

「……カノンも一緒に来てくれるんだよね？」

「ああ。まあ、暇だし、リニスがどうしてもというんで……」

フェイトには、家族で旅行をするという思い出がない……。

かつて、プレシアとピクニックに行ったという記憶はあるのだが、
それはフェイトではなく、アリシアの記憶である。

リニスはその事をカノンに告げ、フェイトに自分自身の楽しい思い
出を作ってもらいたいので、カノンも是非参加してやって欲しいと
懇願してきたのだ。

真面目に懇願されれば、カノンとしても嫌とは言えず、また……自分もレジャー目的で旅行などしたことがないので、参加することにしたのだ。

「…はやてちゃん達が来れないのは残念だけど……それと、ユーノ君とムウさんも……」

八神家は、年末は検査と面接などがあり、年が明けてもまだまだ忙しいとの事で、今回は不参加となっていた。

ユーノは、スクライア族の家族の下に帰っていて、ムウもそれに行っていた。

「ユーノ君とムウさんは何をしているんだろう……？」

ユーノとムウの不参加に、なのはは内心ガツカリしているようだった。

「ムウがユーノの一族の下を訪ねたのは、探し物を依頼するために……な……」

スクライア族の集落で、ムウはスクライアの長と話していた。

「フム……『通行証』ですか……」

「ええ。貴方達は遺跡発掘を生業としているとの事です……。この様なモノを見つけたら、我々に教えていただきたいのです……」

カノンが、『闇の書の夢』に囚われた時、それを利用したアテナとコンタクトが取れた。

『エデン』に張られている外からの侵入を全て拒む結界を越える為には、『通行証』が必要であり、カノンはムウと共に、此方の聖域を調べてみると、その『通行証』に関する文献を見つけたのだ。

しかしその文献には、通行証の図と、どこかの次元世界の古代遺跡に保管してあるとしか記されておらず、場所などについては一切、記されていないかったのだ。

そこで、ムウは遺跡発掘を生業としているスクライア族に調査を依

頼する為、ユーノが里帰りをするのに便乗させてもらったのだ。スクライアの長に『通行証』の図を見せ、その事を依頼すると、スクライア族の長は快く承知してくれた。

「……ありがとうございます……」
ムウは、謝意を込めて頭を下げた。

さて、ユーノは無限書庫の司書になることが内定しているので、このままスクライアの集落に残らず、近日中には本局に戻ることになっていた。

しかし、PT事件から、一族の元に帰っていないなかったので、暫くはここに留まり、ムウもユーノと共に留まっていた。

一室を与えられていたムウの下に、ユーノが訪ねてきたのは、滞在を始めて三日たったある晩であった。

「どうしましたか……ユーノ？」

「……実は……ムウさんをお願いがあつてきました……」

ユーノは、決意込めた眼をしながら、その場で膝を付き、ムウに頭を下げた。

「……僕を……弟子にしてください！」

流石のムウも驚き、眼を見開いてユーノを見た。

「……それは、聖闘士の修行を受けたい……ということですか？」

「はい……」

「……何故、聖闘士になりたいのです？強くなりたいからですか？」

聖闘士への志望を目指す少年達の動機で一番多いのが「強くなりた
い」である。

稀に、姉と逢わせてもらう交換条件や、沈没した船に眠る母親の遺
体を引き上げたいという願い等で聖闘士を目指す者もいるが……。

「……強くなりたいという気持ちも勿論あります……」

ユーノは聖闘士の修行により、魔導師としては自分よりも格上の相

手に圧倒したクロノを思い浮かべた。

男として生まれた以上は、強さを求める感情があることを否定はしない。

争いごとを好まず、地上で最も心清らかな人間である瞬ですらも、強さを求めたのだから……。

最も、瞬の動機は自分の身代わりで地獄の島に行った兄と再会したいからだったが……。

ユーノが強さを求める理由……それは、なのはを護りたいことであつた。

確かに、ユーノは結界魔導師としては優秀である。

前線で戦うのはを護ることは出来るだろう……。

しかし……やはり男としては女性を前面に立たせ、後ろにいるなど……情けなく感じてしまうのである。

女性から見れば、そんなものは男女差別だと言われてしまうだろう……。

それでも、男としては女性を引つ張る立場でいたいという矜持は存在するのだ。

「断っておきますが……既に小宇宙に目覚めていたクロノと違い、貴方の修行は想像を絶するモノになりますよ……」

クロノが聖闘士の修行を始めたのは、危機的状況下の中、小宇宙を発現させた後からなので、普通の聖闘士候補生の修行に比べれば、まだまだ軽い方である。

それでも一般人から見れば、地獄の修行だが……。

「貴方はこれから、無限書庫の司書として、膨大な数のデータを整理するという仕事があります……。聖闘士の修行は、そんな激務の合間に出来るほど生易しいものではありません……」

無限書庫は膨大な知識の宝庫であるが、管理局が怠慢だったせいで（管理局側は、人手不足という理由をつけている）長年放置されており、何処に何があるかがさっぱり分からない有様であり、何人かでチームを組み、年単位で搜索しなければならぬ。

だからこそ、『闇の書事件』においても解決が長引いたのである。キッチンと整理していれば、もっと早くに『闇の書』が『夜天の魔導書』であったことが判明できたのと、『闇の書』の修復が行えたかもしれない。

流石に管理局も反省し、無限書庫の司書において管理することが決定され、遺跡探索を生業としているユーノを筆頭に幾人かに司書になるよう要請した。

「古代と違い、現代：いや近代以降において、歴史と情報は何よりも貴重なモノだ。戦いだけでなく、政治においても、商売においても、農耕においても……『管理局』などと名乗っているのに、古代からの貴重かつ重要なデータの管理を怠るとはいい加減な組織だな……」

カノンの皮肉に、リンディ達は冷や汗を掻きまくっていた。

「……その事をふまえて、実は一族の何人かに無限書庫の司書を頼みました。声を掛けた全員から承諾をもらいましたから……。僕一人なら激務などと生易しいモノではありませんが、みんなが居てくれるので……。それにムウさんも無限書庫の司書になってくれるんですよ……」

無限書庫は管理局がスポンサーではあるが、厳密には管理局とは別機関となる。

ムウも生活の糧を得るための職として無限書庫の司書を選んでいた。いかにアテナから「生活の糧を得るために聖闘士の力を使ってもいい」許可を得ていても、おいそれと出来るものではなかった。

故に元々興味のある無限書庫の司書なることにしたのだ。

カノンほどではないが、ムウも空間を操る力があるし、何よりも『サイコキネシス念動力』があるのでこういう仕事に向いているのである。

ちなみに、カノンとアイオリアは聖域のサンクチュアリ見つかった世界で、農耕をすることにしていた。

主に栽培するのは、アテナと関係が深いオリーブである。

聖域の内部にはオリーブの木が沢山生えていて、その果実から得ら

れるオリーブ・オイルはとても品質が高く、種子から精製されるオリーブ・オイルより品質の劣るオリーブ核油ですら、一般のオリーブ・オイルよりも品質が良かった。

果汁から遠心分離で直接得られるバージン・オイルやエクストラ・バージン・オイルも既存のモノとは比べるモノにならない。

これは、オリーブがアテナを象徴する植物であり、そのアテナの小宇宙の加護が満ちている聖域内で育ったオリーブから得られる為である。

こちらの聖域にもアテナの加護があるので、流石に本場のモノに比べると若干品質は劣るがそれでも、上質であることは間違いなかった。

聖域の中では、オリーブを育てることにしたが、問題は聖域の外である。

聖域の外の世界は、草一本生えていない不毛の地なのだが、保管された神具の中に、豊穡神デメテルの力を宿した神具があったので、それを利用することにしたようである。

話がそれたので戻そう。

「……修行の過程で死ぬ可能性がありますよ……」

「……はい……。覚悟はあります……」

ムウはユーノを見据えた。

確かに、何度も何度も悩み、そして決心した強い眼をしていた。

「……分かりました」

ムウが承諾し、ユーノはムウの二番目の弟子となった。

第三十八話 ユーノの決意（後書き）

管理局に正式に入局したなのはたち。

聖闘士の修行を受けているユーノ。

そして、黄金聖闘士たちも平和な日々を送っていた。

時空を越えた黄金の闘士

「未来へのプロローグ」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第三十九話 未来へのプロローグ(前書き)

今回でA' S編が終了します。

第三十九話 未来へのプロローグ

『闇の書事件』より、約半年が過ぎた。

なのは、フェイト、アリサ、すずかの四人も進級し、四年生となった。

はやての足も少しずつ回復しており、守護騎士たちも元気である。

そして、管理局の仕事の方も、仮配属期間が終わり、なのは達は正式に時空管理局に入局した。

高町なのはは、武装隊の士官候補生。

フェイト・T・ハラオウンは、執務官候補生。

八神はやては、特別捜査官候補生。

なのはは、武装隊の士官からスタートして、最高の戦闘技術を身につけ（あくまで魔導師としてであるが……）局員達にそのスキルを教えて導く『戦技教導隊』入りを目指している。

フェイトは、リンディの正式な養子となり、基本的には『アースラ』に所属しながら、執務官になるために勉強している。

カノンという保護者がいるので、フェイトが自分の義娘になつてくれないかとも思っていたリンディは、フェイトが自分の義娘になつてくれた事をとても喜んだ。

はやては、稀少な『融合デバイス』^{ユニゾン}を用い、四人の守護騎士と共にその能力が必要とされる事件に随時出動する特別捜査官……しかし、指揮官特性も高いので将来はまだまだ検討中との事……。

さて、その頃……。

聖域サンクチュアリの外の不毛の大地を耕し、豊穰神デメテルの神具を使い、穀物が育つに適した土に変えているカノンとリニス、アイオリアの姿があった。

「さて、そろそろ一息入れるとするか……。」

リニスの作った弁当を開く、カノンとアイオリアは自分達が開墾し

た畑を見渡した。

「…………この大地を全て開墾するには、俺たち3人だけでは人手が足りんな…………」

「まあ、別に畑に関しては俺たちが食う分を作れば問題ないからな…………」

「畑だけではなく、放牧等もいずれは行うのでしょうか？」

「ああ。やはり畑だけというのモナ…………」

リニスの問いにカノンがそう答えた。

「さて、俺は午後からクロノの修行を見なければならんで本局に行く…………。後を頼むぞ」

弁当を食べ終えたカノンは、そういい残し転送ポートに向かった。

「それにしても…………フェイトが正式にリンディの養子になるとは…………な」

あれほどカノンに懐いていたフェイトが、カノンの下を離れた事を、アイオリアは意外に感じていた。

「あの娘にも、思う所はあるんですよ…………。むしろ、カノンの事が好きだから、カノンの被保護者からリンディ提督の養子になったんですから…………」

リニスは小声でフェイトの願いを、アイオリアに囁いた。

それを聞いたアイオリアは、苦笑しながら転送ポートに向かうカノンの後ろ姿を眺めた。

「…………フツ…………成程…………。確かにそれを願うのなら、カノンが保護者でいては、叶わんな…………」

フェイトの願い…………「カノンのお嫁さんになる」為には…………。

無限書庫での仕事を終え、ムウの指導を受けていたユーノは地に倒れ伏していた。

「では、本日はこれまで……」
そう言うと、意識を失い掛けていたユーノを抱えて書庫内に入ってしまった。

「ユーノ！」

ユーノの誘いを受け、共に無限書庫の司書になっている同族の者が駆け寄ってきて、治癒魔法を掛け始めた。

彼は、一族の中でも特に治癒魔法に長けており、シャマルに匹敵するほどであった。

此方の世界には、ムウの出身世界である『地球』^{エデン}と違い、魔法という技術がある。

その為、向こうよりは過酷な聖闘士の修行でも、生存率は高い様である。

「……大丈夫か……ユーノ……」

「……うん……。ありがとう……」

「……それにしても……あんな優しくそうな顔なのに……なんて厳しい人なんだ……ムウさんって……」

「……ハハハ……でも、アイオリアさんの話だと、ムウ様は黄金聖闘士の中でも変人にカテゴリーされるって……」

「聴こえているぞ……明日の修行は……楽しみにしているがいい……」

「……はう……！」

しっかりとユーノたちの会話を聴いていたムウは、そう微笑み、自分の新しい愛弟子に余計なことを吹き込んだ張本人に、どのような報復をするか考えていた。

同時刻、聖域で畑を耕していたアイオリアの背筋に悪寒が走った。

本局の会議室において……管理局の高官たちが集まっていた。

アースラが記録していた次元漂流者、『獅子座』^{レオ}のアイオリアと、『仮面の男』に変身したリーゼ姉妹との一方的な戦い。『双子座』^{ジミニ}の

カノンと闇の書の闇を乗っ取った『双子座』のサガという名の邪悪との戦いがモニターに映し出されていた。

限界まで超スロー再生された映像だが、それで漸く、普通の動きの様に見える程度である。

管理局でも、トップレベルの戦闘能力を誇った、グレアム元提督の使い魔のリーゼ姉妹が成す術もなく半死半生の眼に合わされる姿、『ギヤラクシアン・エクスプロージョン』同士のぶつかり合い、そして、最後の暴走状態に入った『闇の書』の防衛プログラムに対して黄金聖闘士3人による『アテナ・エクスクラメーション』。

その余りの破壊力に、皆、絶句していた。

「……彼ら『聖闘士』の存在をどうなさいますか？」

「既に、彼らの事は地上本部も航空も知るところとなりました」

流石にいつまでも隠し通せるモノではなく、とうとう本局が今まで隠してきた『聖闘士』の存在が明らかにされてしまった。

「今の映像を見て、諸君らも悟ったと思う。彼らに対する管理局の対応は……友好関係を築くことだと……」

敵に回せば、間違いなく管理局には勝ち目はない。

彼らにしては、魔導師が魔導師以外の者に敗北するなど、絶対に認めたくないのだが……認めざる得ないのだ。

管理局の総力をかき集めても、黄金聖闘士1人相手でも歯が立たないことを……。

ましてや、最後の『アテナ・エクスクラメーション』なる技を本局でぶっ放されたら……。

本局は、間違いなく消滅する。

一般職員はおろか、提督レベルの者にも知らされていない『闇』が管理局にはある。

もし公になれば、管理局の存在意義自体が喪われかねない程の『闇』が……。

そして、管理局に敵対する組織も存在する。

その様な存在が、彼らを担ぎ上げたら……。

「幸い彼らは、アースラとは好意的に接している。そして、今回の件で判明したが、アースラ所属のクロノ・ハラウン執務官は彼らの一人に師事しているとの事だ……このまま関係を維持していつてもらいたいものだ……」

今まで、様々な危機を乗り越えてきたが、これほど実力差が違いすぎる相手　しかも少数　に巡り合ったことなどない管理局としては、藪を突いて蛇を出す愚を冒すことは避けたいことだった。

開墾をしていたアイオリアは、本局に向かった筈のカノンの姿を捉え、疑問に思った。

「どうした……。クロノを指導しに行ったのではなかったのか？」

「……今日は中止だ……」

フェイトとシグナムがデバイスの微調整の慣らしをしていたのだが、なんだか模擬戦の流れになり、いつの間にか、フェイト、なのは、アルフ、ユーノ、クロノのミッド式の魔導師と、はやてと守護騎士たちベルカ式の騎士との団体戦という形になったらしく、修行どころでは無くなつたらしい。

「修行が中止なら、戻って開墾を続けた方が良いと思ってな……。さつさと引き上げてきた」

「そうかそうか……。人手が多いに越した事はない……って、そこ！　サボるな……！」

と、手を休めていたリーゼ姉妹にアイオリアが怒鳴った。

「……は……はい……！」

よほどアイオリアが怖いのだろう。

リーゼ姉妹は、雑談を止め、作業に取り掛かった。

管理局を退職したグラムは、囑託扱いとなり、管理局からの出勤要請があれば強制的に参加しなければならぬ立場になったが、退職した者に頼りすぎれば管理局の面子にもかかわるので、よほどの

大事件でもない限り、出勤要請は来ない。

そこで、グレアムは傷の癒えたリーゼ姉妹と共に、カノン達の開墾を手伝っているのだ。

リーゼ達は、アイオリアに恐れをなして、出来れば遠慮したかったのだが、主であるグレアムに言われて、渋々手伝っているのである。

「……どうだグレアム……。畑仕事の感想は……。」

「そうだな……。こういう労働は辛いが……。心地よい疲労だ……。生きていくという気がしてくるよ……。管理局で働いていたときとはまた違った充実感を感じるよ……。」

これから、グレアムは、カノンと同じ様に罪の償いをしていかなくてはならない……。

しかし、それとは別の生き甲斐を見つければ、どれほどの苦難の道でも乗り越えられる。

そう、思える様になった様である。

日が暮れたので、今日はここまでにして、それぞれ帰路についた。

カノンとリニスは、この聖域で寝泊りしているが、アイオリア達は「第97管理外世界、地球^{テラ}」に戻る。

転送ポートを使い、地球の八神家に戻ったアイオリアをはやて達が出迎えた。

「お帰り、リア兄」

「ただいま、はやて……。カノンから聞いたがなのは達と模擬戦を行ったらしいが、どうだった？」

アイオリアの問いに、皆が苦笑いをしていた。

なのはとフェイト、はやての魔法のぶつかり合いで訓練室が破損し、結局、引き分けに終わったとのことである。

最近、なのはの影響を受けたのか、なにやら過激になってきた妹に、アイオリアは将来どんな成長をするか心配し始めていた。

「おい、リインフォース……」

「……ま……まあ、大丈夫……」

「……本当に……？」

「……だと……いいな……」

アイオリアとリインフォースは、今回の団体模擬戦の反省会をしているはやて達を眺め、ため息を吐くが……、直ぐに苦笑し、はやて達の会話に混ざった。

第三十九話 未来へのプロローグ（後書き）

首都防衛隊所属のゼストと、戦闘機人チンクは突如現れた男によって窮地に立たされた。

その男とは……冥闘士。

絶対絶命のピンチの2人を救ったのは……。

時空を越えた黄金の闘士

「真紅の衝撃」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

A' S 編終了に伴い設定紹介

さて、漸くA' S 編が終了し、次回から幕間2が始まります。

この『時空を越えた黄金の闘士』は他サイトに投稿しているモノを、加筆修正しております。

此方では後書きを次回予告風にしているので、向こうのサイトの後書きで語った様々な設定を此方では説明していません。

故に、こちらのサイトでしかこの作品を読んでおられない読者の方々の為、改めてこちらで説明しようと思います。
向こうのサイトでも語らなかつた事も、紹介させていただきます。

魔法少女リリカルなのはシリーズと聖闘士星矢のクロスオーバー。
聖闘士星矢は原作のストーリーの方を元にしています。

過去回想で、台詞がアニメのものを使っているものもありますが、ストーリーの流れは間近い無く原作です。

つまり、ジャンプ・コミックスの『聖闘士星矢』と現在、週刊少年チャンピオンでシーズン連載をしている『聖闘士星矢 ND冥王神話』のクロスオーバーだと思ってください

アニメオリジナル、劇場版、エピソードG、LC冥王神話は……作品のネタとして、その設定を使わせてもらいます。

例えば、ムウが聖域の一部から見つけた聖衣は、アニメオリジナルのドクラデス、ガイスト達幽霊聖闘士、アニメ版の氷河の師である水晶聖闘士、炎熱聖闘士などの系列の聖衣です。

劇場第一作に登場する亡霊聖闘士もこちらの設定に流用させてもらいました。

気付かれている方もいらっしゃるかもしれませんが、あの男の守護星座と必殺技はこれを参考にしています。

他のアニメオリジナルである鋼鉄聖闘士スチールセイントや劇場版第二作、テレビ版ユックトウォーリアの神闘士についても詳細は決まっていますが、ネタとして使用する予定です。

後、カノン達聖闘士の髪の色なども原作通りに設定しています。

カノンはアニメ版だと青ですが、原作では金髪ですし、ムウも紫ではなく金髪、アイオリアも茶髪ではなく金髪です。

黒サガもアニメでは灰色ですが、原作では紫です。

聖闘士星矢の二次小説では、死んだ聖闘士を生き返らせるというのが多いです。

しかし、感想などでも記しましたが、この話は死者の完全復活は認めていません。

故に、原作では死亡しているカノンたちもこの話では「生き返った」わけではなく、「生きていた」ということになっています。

しかし、読者様から死んだデスマスクやカミュたちの登場を期待されている方が数多くいらっしゃるようなので、検討はしてみようと思います。

ですが、期待はしないでください。

絶対に、完全に生き返らせるような事はしませんし、登場させないかもしれません。

さて、要望のあったクロノの正式聖闘士化が決定しました。

次回からの幕間2の間にクロノを聖闘士にする予定です。
後、残りの黄金聖闘士もこの幕間で登場させます。

さて、今後の展開ですがA'sからStrikersまで10年の
年月がありますので、無印からA'sまでの幕間より、幕間2は長
くなります。

そして、Strikers編はA's編と違い原作からかなりかけ
離れたモノになると思われます。

では、これからも私の作品にお付き合いください。

君は、小宇宙を感じた事があるか!?

第四十話 真紅の衝撃（前書き）

幕間2スタートです。

今回は、カノンやなのは達はまったく出てきません。

第四十話 真紅の衝撃

新暦0066年。

時空管理局地上本部、首都防衛隊最強の部隊である『ゼスト隊』は、当初の予定を早めて、『戦闘機人』事件の強制捜査に踏み切った。地上本部の長であるレジアス・ゲイズ中將は、ゼスト隊を『戦闘機人』の捜査から外し、別任務に就かせるつもりであったが、ゼスト隊長、ゼスト・グランガイツが強行し、機人プラントと思われる施設の調査に踏み切ったのだ。

ゼスト隊のクイント・ナカジマ、メガーヌ・アルピーノの両名が機械兵器に襲われ、別の場所では部下を庇ったゼストが負傷してしまふ。

そのゼストに、『ナンバーズ』と呼ばれる3人の『戦闘機人』が現れ、その中の一人、?5『チンク』とゼストの死闘が始まった。

ゼストはミッド式主体の管理局には珍しい古代ベルカ式の騎士であり、陸戦S+ランクのストライカー級の実力を誇る。

万全の状態ならば、如何に戦闘機人相手でも後れを取らないのだが、負傷している今は、チンクに押され気味であった。

とはいえ、ゼスト相手ではチンクも無事ではなく、チンクも满身創痕になっていた。

高みの見物を決め込んでいた?3『トーレ』と?4『クアットロ』に?1『ウーノ』から緊急連絡の念話が届き、トーレとクアットロは急いで戻ることになった。

「チンク…さつさと片付けてお前も戻って来い」

トーレはそう言い残し、クアットロと共にその場を後にした。

满身創痕の2人の睨み合いが続いたが、お互い最後の1撃を繰り出そうとしたとき、異変が起こった。

その場に、黒ずくめのローブを纏った男が現れたのだ。

「……フツ…、ここがスカリエッティとやらのアジトの一つか……」

今度こそ、当たりだと良いな……」

「貴様……何者だ！」

如何にも怪しげな男に、チンクもゼストも警戒心を高めた。

「……フム……。『时空管理局』とやらの魔導師と……『戦闘機人』の一体か……。魔導師如きはどうでも良いが……『海龍』の目当ては『戦闘機人』のデータ……。出来れば『サンプル』も欲しいとのことだったな……。どうやら今度こそ当たりのようだな」

黒ローブの男の物言いにチンクはハツとなった。

「き……貴様か……！此処最近、我らのアジトに襲撃を掛けているのは……！」

新暦0065年より、広域次元犯罪者『ジェイル・スカリエツティ』のアジトが次々と襲撃を受けていた。

「最初は管理局の仕業と思っていた。だが……老人達もこの事には驚いていたとドクターが言っていたが……」

チンクは男を睨みつけた。

「正体をみせる！」

チンクがそう言うと、男はおもむろにローブを脱ぎ捨て、闇色のプロテクターを纏った男の姿が顕わになった。

「フツ……私の名は天捷星『バジリスク』のシルフィード……」

冥王ハーデスの戦士……108の魔星『冥闘士』^{スペクター}。

冥界三巨頭、天猛星『ワイバーン』のラダマンティス直属の部下で、三巨頭を除けば冥闘士屈指の戦士と称された男。

それが、この天捷星『バジリスク』のシルフィードである。

黄金聖闘士達が『嘆きの壁』を破壊した後、エリシオンへ向かおうとする星矢達を追おうとするシルフィードと天牢星『ミノタウロス』のゴードンと天魔星『アルラウネ』のクイーンは、師である『天秤座』^{ブラ}の童虎から紫龍が受け継いだ最強の奥義『廬山百龍霸』の前に

敗れた。

その後、エリシオンに向かおうとする紫龍と氷河を傷つきながらも追いかけてようとすると、『神』以外を拒む超次元に呑み込まれ消滅した筈であった。

しかし、実はこの男もカノン達同様、死の直前に『時の神』クロノスによって次元世界に跳ばされたのであった。

クロノスは聖闘士だけではなく、冥闘士も次元世界へと跳ばしていたのだ。

無論、善意からではなく……気紛れによるものであるが……

その後、『海龍』に出会い、行き場の無くなったシルフィードは『海龍』に協力しているのである。

先手必勝とばかりに、チンクは自らの武器であるスローイングナイフ『ステインガー』を投擲した。

しかし、シルフィードはナイフを二本の指で挟み込み止めた……しかし……。

「私の『ステインガー』を受け止めたのが命取りだ！」

その瞬間、『ステインガー』が爆発した。

これこそが、チンクの先天固有技能である一定時間手で触れた金属にエネルギーを付与し、爆発物に変化させる能力『ランブルデトネイター』である。

ただし、余りに巨大な金属塊の場合爆破に必要な力が拡散し、爆発に到らない為サイズ制限がある。そのため、基本的には今回の様に固有武装である投げナイフ『ステインガー』に付与して使用する。

爆発のタイミングはチンクの任意で変更でき、中距離の遠隔操作も可能である。

勝利を確信したチンクだったが、爆発による煙が晴れた時……シルフィードの姿がなかった。

「何!？」

チンクは驚愕した。

いくらなんでも、あの程度の爆発では死体が残らない筈はない……。と…言うことは…。

「その様な見戯にやられる冥闘士ではない。2人まとめて吹き飛ばしてくれるわ!」

いつの間にか、チンクたちの側面に移動していたシルフィードがチンクとゼストに襲いかかる。

「くられ、『アナイアレーション・フラップ』!」

「うわああああああああああ!」

シルフィードの必殺技。

闘気によって相手を吹き飛ばす怪鳥『バジリスク』の羽ばたき『アナイアレーション・フラップ』を受け、チンクとゼストは吹き飛ばされた。

少し距離があつた事もあるが、実戦経験豊富なゼストは咄嗟に直撃を避け、至近距離にいたチンクはモロに直撃を受けるが、防御技能である『ハードシエル』作動させ防御する。

しかし…纏っていた灰色のコートがビリビリに破れ、吹き飛ばされた。

「な…何い…!?バ…馬鹿なあ!!『シエルコート』が…ッ
!」

防御外套『シエルコート』の支援を得た『ハードシエル』は、本来は施設規模の爆発にも耐える防御力を誇る…。しかし『冥闘士』の拳の前にはまったくの無意味であった。

「…フツ…馬鹿め…。冥闘士に貴様ら如きが勝てると思つたか…。貴様ら『戦闘機人』はこれより我らの尖兵となるのだ…。貴様にもその為に働いてもらつぞ…」

「は…放せ!」

シルフィードが、抵抗するチンクを連れ去ろうとした時…。

「ま…待て!!」

直撃は避けたモノのかなりのダメージを負っているゼストが、シルフィードの前に立ちはだかった。

「……管理局に用はない……。それにこいつは貴様に取っても敵であるろう……。見逃してやるからさっさと失せろ！」

「そ……そうはいかん……。『戦闘機人』を悪用しようとする者を放っておくわけにはいかん……」

『戦闘機人』のデータを欲する者など……どう考えてもそれを悪用する者としか思えない。

ゼストは槍を握り締めた。

「死にぞこないが……。よかろう……。邪魔をするなら一思いに殺して……何!？」

ゼストにとどめの一撃を撃とうとした時、シルフィードは警戒態勢を取った。

「この『小宇宙』は……!？」

この場所に迫ってくる小宇宙は、シルフィードと共に来た仲間の小宇宙ではない……。

「誰だ!?!姿を見せろ!!」

シルフィードが迫り来る何者かに叫ぶと、その何者かが姿を見せた。

フツ……なにやら『小宇宙』を感じて来て見れば……冥界の亡者どもの生き残りがいたとは……な……

「な……何い……き……貴様は……ま……まさか……『黄金聖闘士』!?!」
金色に輝く『聖衣』を纏い、2人の女性を肩に担ぎながら現れたこの男は……!?!?

「……『スコルピオン蠍座』のミロ……!?!」

ミロはゼストの傍まで近づき、担いでいた女性二人を降ろした。

「クイント、メガーヌ!？」

「た…隊長…ご無事で…」

傷だらけだが、意識のはっきりしているクイントがゼストに声に反応した。

「メガーヌは!？」

「すみません…。生きてはいますが…。危険な状態です…」

メガーヌの意識は無く、このままでは間違いなく死んでしまうだろう……。

「何があつたのだ……」

「……隊長が負傷されたと連絡をもらった後、機械兵器の大群が私達に襲い掛かってきました」

この機械兵器 後に管理局が『ガジェットドローン』という名称を付ける は単機でAMFを発生させる事が出来るので、クイ

ント達は魔法を封じられてしまった。

クイントは『シューティングアーツ』と呼ばれるミッドチルダの格闘術『ストライクアーツ』を元にした特殊な格闘術の使い手なので、魔法無しでもそれなりに戦えたが、やはり多勢に無勢……。

絶対絶命の大ピンチに陥った時、何処からともなく現れたミロが、一瞬の内にその場の機械兵器を全て破壊してしまったのである。

「……フツ…黄金聖闘士……相手にとって不足はない!行くぞ蠍座スコーピオン」

「来い!バジリスク!」

アテナの聖闘士とハーデスの冥闘士。

神話の時代より、戦つて来た敵同士……。互いに問答無用と激突した。

「…『アナイアレーション・フラップ』!」

「…『スカーレット・ニードル』!」

2人がそれぞれ必殺技を放った。

『アナイアレーション・フラップ』の威力により、ミロは吹き飛ばされた。

「フツ… スコーピオンよ… この怪鳥バジリスクの大いなる風を受け、異次元まで消し飛ぶがいい…」

シルフィードが勝利を確信したとき、そんな彼をあざ笑う声が聴こえた。

「フツ… 甘いな！」

「な… 何!?」

『アナイアレーション・フラップ』によって吹き飛ばした筈のミロが、上から一回転して地面にひらりと着地した。

「この程度の技でこのミロを消し飛ばせると思ったか…」

「… な… 何だと…」

シルフィードは己の実力に自信を持っていた。

先の聖戦においては、死を覚悟した紫龍相手に実力を発揮することが出来なかったが…。

「お前の技に比べれば、十二宮の戦いの時に氷河から喰らった『K
ホルドニー・スメルチ』の方が遥かに威力があるぞ…」

この物言いはシルフィードのプライドを傷つけた。

「お… おのれ… ウツ」

突如、シルフィードは激痛を感じた。

「な… 何だ… この針に刺されたような傷は…」

「… 『スカーレット・ニードル』… 小さな針で刺したような傷跡だが、激痛と共に全身を麻痺させる。しかし、この技は一発で相手を殺すような事はない…。蠍座の15の星を形どる15発より成り立ち、1発打つごとに相手に『降伏』か『死』かの選択する機会を与える慈悲深い技なのだ。さあ、選べバジリスク！」

そう言うとミロは、再び『スカーレット・ニードル』を撃った。

「ぐあああああああ！」

「ただ、今まで15発全てを喰らって、生き延びた者は一人しかいない…。それまでに発狂するか、命乞いをするか、死を選ぶか…」
そのただ一人の氷河も死の寸前、ミロが止血しなければ、そのまま確実に命を落としていた。

一発一発的確に蠍座の形に『スカーレット・ニードル』を打ち込んでいく。

「……慈悲深い技って……拷問のようにしか見えないのは私だけでしょうか隊長？」

「……俺も同感だ……」

クイントとゼストが顔を引き攣らせながら、ひそひそと話していた。その間も、ミロは次々とシルフィードに毒針を打ち込んでいく……。

「な……何故だ……。何故、こうも歯が立たない……何故!？」

シルフィードの実力は三巨頭に次ぐ実力……聖闘士というなら黄金聖闘士クラスである。

にも関わらず、ミロ相手に歯が立たない。

「フツ……。俺に言わせればお前が冥闘士の中でも実力者とは信じがたい……。お前から感じる『小宇宙』は聖域に攻めてきた冥闘士たちよりも劣るぞ！」

「な……なんだと!?!この俺が……『サイクロプス』や『パピヨン』に劣るといふのか!?!」

サガ達を監視する為に十二宮に乗り込んできた冥闘士達は、金牛宮で地暗星『デイクロプス』、巨蟹宮で地妖星『パピヨン』、巨蟹宮から獅子宮への階段で、地陰星『デュラハン』、地走星『ゴーゴン』、地劣星『エルフ』、獅子宮で地伏星『ワーム』他五名が、処女宮で地暴星『サイクロプス』他残り全てが全滅したので、天蠍宮を護っていたミロは直接戦ってはいない。

しかし、彼らの小宇宙は感じていたので、それよりも弱いシルフィードの『小宇宙』に疑問を持っていた。

シルフィードにしても、自分の『小宇宙』が格下の『サイクロプス』達より劣ると言われるとは思ってもよらなかった。

とうとう14発打ち込まれ、針の穴のようだった傷が広がり、血が噴出し始めてシルフィードの五感が薄れていった。

「さあ、後一発でお前は死に至る。さあ選べ、降伏するか?」

「ふ……ふざけるな……。如何に勝敗が決したとはいえ、誇り高きラ

ダマンティス様直属の冥闘士であった俺が、聖闘士に命乞い等するか！やるならひと思いにやれ！！」

「よかるう…死を望むか…ならば受ける！『スカーレット・ニードル』最大の致命点！！」

ミロは地を蹴り、一瞬の内にシルフィードの間合いに入った。

「う…うおおおおおお！！」

「…『スカーレット・ニードル・アンタレス』！！」

「…助けてくれたこと…部下共々感謝します…」

「気にするな…。冥闘士は俺にとっても敵…。お前達を助けたのはついでに過ぎん…」

ミロが慣れた手つきでゼストたちの応急手当をしていた。

シルフィードはとどめの一撃を受け、既に絶命していた。

「よし…次はこの少女だな…」

ミロは、シルフィードに連れさらわれそうになったチンクの手当てを始めた。

「わ…私も助けてくれるのか？」

ゼストたち管理局から見れば、スカリエッティの『娘』である自分は犯罪者である。

その自分まで手当てをしてもらえとは思っていなかったらしい…。「…俺にはお前が…それほどの悪人には見えん…。お前自身はとも純粹なのだろう…」

ミロからしてみれば、目の前で幼い少女が誘拐されそうになり、傷だらけで倒れているのを見過ごせないだけである。

「な…ならば…頼む…。ド…ドクターを助けてくれ…。私はさつき
の男にも敵わなかった。いくらトーレやクアットロでも…奴らには勝てない」

先程のウーノからの念話は、ゼストとは別の侵入者がスカリエッテ

イの下に向かっているので迎撃しろとのことであった。

しかし、自分が戦ったシルフィードの強さと同等の敵ならば、如何に戦闘機人の中でも最強の戦闘力を有するトーレでも勝てない。

「……そうだな……。この施設内には先程のバジリスクの他にも『小宇宙』を二つ感じる……間違ひなく冥闘士だろう……」

「頼む。こんな事、頼めた義理ではないのは解っている……そしてドクターは……世間から見れば悪逆な犯罪者……それでも！」

チンクは懇願を続けた。

「そうだな……ムッ!？」

その時、ミロは気付いた。

もう一つ、『小宇宙』が近づいている事を……。

しかも、その『小宇宙』は先程から感じている敵の『小宇宙』より、遥かに強大で……そして、覚えのある『小宇宙』……。

「どうやら、俺が行く必要はなさそうだな……。向こうにも俺と同格の……いや俺よりも強いかもしれん男が向かっているようだ……」

スカリエツティに迫る侵入者とは……。

そして、ミロが感じた強大な『小宇宙』の持ち主とは……。

第四十話 真紅の衝撃（後書き）

その頃、スカリエッツィの前にも冥闘士が現れていた。
無限の欲望が絶望に染まり、絶体絶命。

そこに、静かなる男が現れた。

時空を越えた黄金の闘士。

「最も神に近い男」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第四十一話 最も神に近い男(前書き)

すいません。

今回は出来が悪いです。

第四十一話 最も神に近い男

ゼストとチンクがシルフィードに襲われている頃……。

スカリエッティの方にも冥闘士スペクターが現れていた。

その場には、ウーノと駆けつけたトーレ、クアットロと共に地に倒れ伏していた。

そして、スカリエッティは……。

「体の自由が効かない……これは『バインド』なのか？」

ウーノたちも同じ様な技で、両手両足の骨を折られ、身動きがとれなくなっていたのだ。

デバイスを用い『バインドブレイク』を使用するがまったくの効果がなかった。

「……『バインド』じゃない……!？」

流石のスカリエッティにも焦りの表情が見え始めた。

自慢の『戦闘機人』たちもなす術も無く倒れている。

そして、自分の命も風前の灯のようなモノである。

「フツ……私の『コズミック・マリオネーション』は貴様らでは解く事は不可能……。この天貴星『グリフォン』のミーノスの前では広域次元犯罪者と悪名の高い貴方でも雑魚に過ぎません……」

冥界三巨頭の一人、天貴星『グリフォン』のミーノス。

彼もシルフィード同様、超次元で消滅する寸前、時の神『クロノス』の力により、次元世界に跳ばされた者の一人である。

『コズミック・マリオネーション』でスカリエッティの体をまるで操り人形の様に操り、スカリエッティのデバイスを奪い取った。

「さて、しばらく大人しくしておいてもらいましょう……。貴方の研究は我々の偉大なる計画に使用させてもらいます。光栄に思ってください」

ミーノスと同行している青のローブの男が端末から今までの『戦闘機人』のデータを吸いだしていた。

「フム……このレリックというモノも、役立ちそうだな……これも貰っておこう……」

必要なデータを全て奪い、青ローブの男は意識を失って倒れているクアット口を担ぎあげた。

「……『戦闘機人』のサンプルとしてこの女も貰っておこう……」

「ま……待て！い……妹をは……放せ！！」

ミーノスの『コズミック・マリオネーション』によって戦闘不能に追い込まれたトーレが這いながら青ローブの男の足首を骨折した腕で無理矢理掴んだ。

そんなトーレに、青ローブの男はその鼻面を足の爪先で蹴り上げた。

「……ミーノス殿……後の始末は貴方にお任せします……」

「心得た……ムッ！」

その時、ミーノスと青ローブの男は顔を見合わせた。

「今、シルフィードの小宇宙が大きく弾けて……完全に消えました」

「……シルフィード殿は敗れたようですね……」

自分達の他にこの施設内に強大な小宇宙が現れ、シルフィードの小宇宙が消えた……。

「どうやら邪魔者が現れたようですね……」

「これほどの小宇宙……『黄金聖闘士』ですか……。ミーノス殿……『冥界三巨頭』の貴方なら……黄金聖闘士相手でも後れはとりますまい……」

青ローブの男はそう言うと、クアット口を担ぎながら『テレポーション』でこの場を去っていった。

「ま……待て！クアット口を返せ！！」

トーレが叫ぶが、既に青ローブの男はこの場所を離れてしまった。

「……サンプルは一人で十分……貴女達はこの場でまとめて始末してあげましょう……『コズミック・マリオネーション』！！」

再び、ウーノとトーレは『コズミック・マリオネーション』に捉われてしまう。

「は……放せ！」

「クツ……」

身動きが取れないスカリエツティたちを、ミーノスは侮蔑の視線を送りながら嘲っていた。

「フツ…今の今まで『生命』を弄んでいた報いを受けるときが来たようですね……」

スカリエツティは今まで、ある者たちの命令で『生命』というモノを弄び、まさしく『神』に対する冒涇を行ってきた。

無理矢理させられていたわけではなく、彼自身も嬉々としてそれを行ってきた。

冥界の裁判官であったミーノスから見れば、彼は間違いなく有罪である。ギルティ

「このまま首の骨を折るのは容易いが……ゆっくりと苦しめてから殺す事にしましょう……指の骨を一本一本折っていく、全ての骨を折ってから、最後に首の骨を折ることにしましょう……」

ミーノスの残酷な宣告を聞き、流石のスカリエツティも顔が青くなつた。

彼は今まで、様々な生命を弄んできたが、自らがその対象になったことはなかった。

今、始めて弄ばれる立場に立ち、己の今までの行いを思い返すことが出来るようになった。

ミーノスの指が動き、スカリエツティの小指の間接が逆方向に曲がっていく……

その時、ミーノスとスカリエツティを繋ぐ糸が切断された。

「何!？」

宙に浮いていたスカリエツティたちは、そのまま床に倒れこんだ。

「……た…助かったでしょうか……」

息も絶え絶えのウーノが呟く。

「誰ですか!私の楽しみを邪魔するものは……」

ミーノスの怒りに満ちた声が、辺りに響く。

フツ……生命を弄んでいるのは、君も同じであろう……。人の事が言えるのかな？

「な…何者だ!？」

ミーノスは、戦慄しながら警戒した。

先程、シルフィードを倒した『小宇宙』とは別の、余りにも強大な『小宇宙』を感じているのだ。

その『小宇宙』の持ち主が姿を現した。

「お……お前は…!？」

「…『乙女座』のシャカ…三巨頭・ミーノス!私の顔が引導代わりだ…迷わず成仏したまえ!!」

「…『乙女座』のシャカ…!？」

ミロに背負われているチンクは、ミロからその男の名を聞いた。

「そうだ。俺たち黄金聖闘士の中で、『最も神に近い男』と言われている男よ…」

「な…なんと…!？」

意識の無いメガーヌを背負うゼストも驚嘆した。

ゼストは、以前聞いた『黄金聖闘士』の噂を思い出した。

本局のリンディ・ハラOWN提督率いる『アースラ』が接触した『次元漂流者』。

昨年、同管理外世界で起こった2大事件、『プレシアテスタロッサPT事件』、『闇の書事件』解決の立役者。

その実力は、たった一人でもオーバーSランクの魔導師はおろか管理局が総力を上げても歯が立たないと言われている。

眉唾物と思っていたが、先程のミロを見て誇張であっても、虚報ではないことを痛感させられた。

そんな者たちの中で『神に近い』と言われている男とは……どのよ

うな存在なのか…。
ゼストには想像すら出来なかった。

「バ……馬鹿な……」

ミノスは、この世の悪夢を見ているようであった。
冥闘士の頂点に位置する『冥界三巨頭』である自分が、『神にもつとも近い』と言われる男とはいえ、聖衣を纏っていない聖闘士に手も足も出ない状況に陥るとは思いもよらなかった。

『乙女座』の聖衣は、『獅子座^{レオ}』の聖衣同様、エリシオンで『死』を司る神、タナトスによって粉々に粉碎されている。

故に、シャカは聖衣を纏っていないのである。

にも拘らず、『コズミック・マリオネーション』はおろか、いくら拳や蹴りを放つても通用しなかった。

そう、シルフィードがミロにまったく歯が立たなかった様に……。

「な……何故、私の力が悉く通用しないのだ？」

「フツ……今の君では、この私は基より、他の黄金聖闘士の誰にも勝てんよ……」

「何！？どういう意味だ！！」

「コレを見れば解る！」

そう言つと、シャカは懐から数珠を取り出した。

「そ……それは！？」

「そう。この数珠の球は、君たち魔星・冥闘士と同じ108つある。これは君たち^{108のませい}邪悪を退散させる為に神仏が御作りになったモノ……。冥闘士が一人滅びれば、数珠の球も色が変わるのだ」

嘆きの壁で、一輝はタナトスに殺されたパンドラの遺体にこの数珠を握らせ、エリシオンに向かったのだが、ハーデスがアテナに倒され、冥界が崩壊したとき、破損した『乙女座』の黄金聖衣と共にこの数珠も、シャカの手元に戻ってきたのである。

「見たまえ……108の数珠、全ての色が変わっている……。すなわち108の魔星は既に滅んでいる証拠なのだ……」

冥闘士は、過酷な修行を経て超人的な戦闘力を身につける聖闘士や、既に資質を持った者が鱗衣スケイルに選ばれ、海皇の理想に共鳴し、海皇への絶対的な忠義心を力の源として覚醒する海闘士マリーナと違い、魔星に見出された者、つまり冥衣サイプリスが装着者の体へ直接的に働きかけ、冥衣に合わせた体質へと変換させる特性によるものであり、言い換えれば冥闘士とは、冥衣を機能させる為の触媒であり、冥衣の方が冥闘士の本体とも言えるのである。

「今、君の纏っている冥衣は……魔星の抜け殻に過ぎないということだ……」

そもそも今、天貴星『グリフォン』の冥衣は、超次元において粉々に粉碎されてしまっている。

今、ミーノスが纏っている冥衣は、『海龍』が持っている特殊な技術で復元した冥衣の粗悪な『コピー』に過ぎず、冥衣よりも鱗衣に近いモノなのである。

「そ……それでは……」

「そう。魔星本体が滅びた今、君に残っているのはその『残りカス』のようなモノに過ぎないのだ」

つまり、今、ミーノスがシャカにまったく敵わないのも、先程、シルフィードがミロにあっさりと敗北したのも、魔星本体を喪った為、弱体化していたのが原因だった。

だからミロは、シルフィードが「聖域に乗り込んできた冥闘士たちよりも劣る」と感じたのだ。

今のミーノスとシルフィードの強さは、せいぜい青銅聖闘士と白銀聖闘士の間ぐらい程度でしかない。

故に青銅聖闘士レベルの『魔導師』や『戦闘機人』には圧倒できて、黄金聖闘士には手も足も出ないのである。

「そ……そんな馬鹿なことがあってたまるか　　っ……!」

もはやミーノスには冥界三巨頭としての余裕も貫禄もなかった。

自身の弱体化を認められず、自暴自棄の如くシャカに飛び掛った。

「……自分を見失ったか……哀れな……」

シャカは、同情しながらもミーノスに反撃した。

「……さらば……冥界三巨頭……『天空破邪魑魅魍魎』！！」

異次元から現れた妖怪たちが、ミーノスに襲い掛かった。

「う……うわあああああああああああ！！」

妖怪たちに包み込まれ、絶叫を上げミーノスは息絶えた。

昔のミーノスならば、この程度の技は通用しなかっただろうが、弱体化した今では対抗すらできなかつたようである。

「どうやら終わったようだな……」

そこに、チンクとゼスト達を連れたミロが到着した。

「……久しぶりだなミロ……」

「ああ。やはりお前も生きていたのか……」

2人は約一年ぶりに再会した。

青ローブの男は、ミーノスの『小宇宙』が消えた事を感じとった。

「……フツ……どうやらミーノスも敗れたか……。まあ、魔星の力を喪つた冥闘士などこの程度に過ぎん」

先程までの丁寧な態度はどこへやら……侮蔑を込めながら、ミーノス達がいる方角に視線を向けていた。

「ごくろうだつたな……『海女王』……」

そこに、『海龍』が姿を現した。

「ハッ……『海龍』様……。スカリエツティの研究……使えそうなモノ全てのデータを奪ってきました。後、『戦闘機人』のサンプルもこちらに……」

データの入ったディスクと、奪ってきたレリックとクアットロを『海龍』に渡した。

「ミーノス達は……？」

「2人とも、黄金聖闘士に殺られました…」

「……そうか…まあ構わん。お前が為の足止めにはなったか…。まだ黄金聖闘士と事を構えるわけにはいかんからな…。あの負け犬共は『捨て駒』に過ぎん……。弱体化した『駒』でも、この程度の役に立てば上等だ。むしろ始末する手間が省けたな………」

「御意！」

『海女王』と呼ばれた青ローブの男は、『人魚姫』^{マイメイト}のテティス、『海賊』^{バイレック}のフックと同格の『海闘士』であった。

彼もまたフックと同じ様に、こちらの世界に跳ばされ、そこで出会った真の『海龍』に忠誠を誓ったのである。

「しかし……ここまで慎重に事を運ぶ必要があるのでしょうか…」

「……『海女王』。自己を過信して、奴らを侮ってはならん！」

『海龍』はけっして『聖闘士』を侮ってはいないのである。

「海闘士最強の『七將軍』のうち、5人までも最下級の『青銅聖闘士』に敗れたと言っていたのはお前達だろう。ならば聖闘士の最高位である『黄金聖闘士』も当然、侮るべきではない………」

「……ハッ…申し訳ございません………」

『海女王』は、自らの非を認め、『海龍』に詫びた。

瀕死の重傷を負っていたメガー又は、スカリエッティの適切な処置により、一命を取り留めた。

ゼスト、クイント両名もスカリエッティの治療を受けている。

「……隊長…よろしいのですか…。管理局に戻らなくて………」

「…今、戻るのは不味い………」

ゼスト隊は、このままスカリエッティの下に留まるつもりである。その理由は、スカリエッティが『最高評議会』と繋がっていたことを知った為である。

『最高評議会』とは、時空管理局の最上層部に君臨する『評議員』

『書記』『評議長』の3名で構成されている。

旧暦の時代、未だ統制の取れていなかった数多の次元世界を平定してそれを次代に託し、自分達も評議会を設立して見守り続けていた。何れも姿を見せないモニター越しであり、正体は謎に包まれている。その『最高評議会』が、広域次元犯罪者『ジェイル・スカリエツェイ』と繋がっていたのだ。

今、下手に管理局に戻れば、口封じの為に何をされるかわからない。ゼストは独身であり、天涯孤独の身である為心配ないが、問題はクイントとメガーヌである。

クイントには、夫と娘が2人居る。

夫の方は、後に地上本部の108陸士部隊の部隊長となり、現在でもその人柄から地上本部の局員たちに信奉されており、最高責任者のレジアス・ゲイズ中将与二分する人物である。

娘の2人は、スカリエツェイとは別の組織により『戦闘機人』の実験体としてクイントの遺伝子から造られ、保護された後にナカジマ家の養子となった。

メガーヌは、既に夫とは死別しているが、ルーテシアという愛娘がいる。

その為、2人が戻れば2人だけではなく、家族にも類が及ぶ。

特に、クイントの娘2人は『戦闘機人』である為特に……。

そこで、ゼスト隊は全滅したことにし、ゼストとメガーヌは『人造魔導師』の素体として適応している事を利用し、人造魔導師として蘇生した事にしたのである。

更に、ルーテシアの事が心配なメガーヌの為に、ウーノが最高評議会に要請し、その身柄を確保させた。

クイントの家族は、下手に干渉するとかえって不審に思われるかも知れないので、そのままであるが……。

「……スカリエツティ……。何故、ここまでしてくれる……」

流石にここまで便宜を図ってくれたスカリエツティの意図が読めなかったぜストは、スカリエツティに問い質した。

そして、ゼストはスカリエツティを見て、軽く驚いていた。

スカリエツティの雰囲気が変わっていたからである。

「犯罪者でさえなければ歴史に名を遺す」とさえ称される天才でありながら、並外れて傲慢且つサディスティックなその性格と言動から多くの者に忌み嫌われていた男とは思えない程、人が変わっていたのである。

その理由は、ミーノスに生命を弄ぶことの醜さを思い知らされ、『アンリミテッド・デザイア無限の欲望』である自分とは対極の存在であるシャカと出会った事が、彼を変えたのである。

スカリエツティの心は常に満たされなかった。

無限の欲望……それが、彼に癒えることの無い渴きを齎していた。

しかし、シャカという存在が、彼の欲望地獄からの救済となったのである。

「私は……最高評議会と袂を分かち決心をしたのだよ……騎士ゼスト

……」

その後、スカリエツティとゼストはミロとシャカを交え、今後の事を話し合った。

ミロからすれば、最高評議会は今すぐ制裁したい存在であった。

彼らも、かつては優れた指導者であったように、一線を退いた後も評議会制を作り見守ってきたが、今ではもはや権力の座にしがみついた上に、目的のためには一切手段を選ばない次元犯罪者同然の存在に成り果てている。

自分とシャカならば……いや、自分一人でも最高評議会を始末することなど容易い。

しかし、その後に来るのは次元世界全体の混乱である。

問題はかなりあるモノの、『時空管理局』という存在が、次元世界の平和を危ういところで支えているのは事実である。

今、ここで最高評議会を始末すれば、管理局は混乱し、下手をすれば組織は崩壊しかねない。

支えを失えば……この次元世界の秩序が乱れ、悲哀と悲劇を大量生産することは目に見えていた。

次元世界間での戦乱など、ミロもシャカも望むことではない。

故に、今はまだ、スカリエッティも評議会に従う振りをしなくてはならないのである。

全ての準備が整うまで……。

第四十一話 最も神に近い男（後書き）

撃墜されたなのはを庇うヴェータに襲い掛かる海の闘士たち。
絶体絶命のピンチに追い込まれた2人の前に偉大な男が現れる。
数多の龍が今、戦場を駆ける。

時空を越えた黄金の闘士

「いにしえの闘士」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第四十二話 いにしえの闘士

新暦0067年。

この年、悲劇が起こった。

「なのは……なのはあああああああああ！！」

『鉄槌の騎士』ヴィータの絶叫が辺りに響いていた。

彼女の腕の中には、血まみれになった白き少女の姿があった。簡単な任務の筈だった。

普段の彼女なら、犯さない失敗だった。

しかし、彼女の体はそれまでの魔力の酷使が原因で、疲労が溜まっております、本来なら躲せたはずの砲撃が躲せなかったためである。

「……『海龍』様……。スカリエッテイから接收した機械兵器の起動実験は成功です……」

「そのようだな」

『海龍』と『海女王』は、モニターに映るなのはとヴィータの姿を見て、ほくそ笑んでいた。

「……ここ最近、管理世界で名を上げ始めた『無敵のエース』または『白い悪魔』等と分を弁えない異名を持つ小娘と、古代ベルカの……『鉄槌の騎士』か……」

「魔導師や騎士など、我ら『海闘士』にとっては雑魚も同様でございますが……」

「確かに、私やお前ならば問題にもならん相手……。しかし……それでも『青銅聖闘士』レベルなら魔導師共でも対抗が可能……油断は禁物だ。特に砲撃タイプの空戦魔導師は……な」

流星に空を自在に飛びまわる空戦魔導師は、青銅聖闘士レベルでは苦戦は免れない。

白銀聖闘士レベルにもなれば、空を飛べないハンデなどモノともしなくなるが……。

「……………」

「以前にも言ったが、慢心は禁物よ……。先の『地球』^{エデン}での聖闘士との戦い……。敵が黄金聖闘士ではなく青銅聖闘士如きなら取るに足らん……。という慢心が、地中海の『海底神殿』を失わせた原因である事を忘れるな……」

「……はっ！申し訳ありません……」

『海龍』は、再びモニターに視線を向けた。

「……………管理局も我らにとつては邪魔な存在……。『E-ス級』の空戦魔導師を一人でも減らしておくに越したことはない。兵を差し向け……確実にあの2人の小娘を始末せよ……」

「御意！」

なのはを撃った機械兵器が退がり、ヴィータはホッと息を吐いた。

しかし、なのはが危険な事には変わりない。

「おい……おいっ！バカヤロー……しっかりしろよ……！」

……………から……………だい……………じょうぶ……………だから……………

出血は止まらず、息も絶え絶えながらも、『大丈夫』と口にするなのはを見て、ヴィータは焦りを覚えていた。

出会った時は、敵同士……………。

今でもライバル心を抱いていた相手……………。

でも……………大好きなはやての大切な親友で……………自分にとつても掛け替えのない仲間……………。

「医療班っ！何やってんだよっ！早くしてくれよ……コイツ死んじまうよっ！」

今にも消えそうな命の灯火を繋ぎとめようとするかの様に、ヴィータはなのはの体を抱き締めていた。

「…ッ!?」

その時、ヴィータの前にたくさんの影が迫ってきていた。

「な…何だよてめえら…?」

現れたのは魚の鱗の様な鎧を身に纏った軍団　海闘士の雑兵達であつた。

「……『管理局の白い悪魔』と『鉄槌の騎士』……。我らが主の命により、お前達の命…貰い受ける!」

海闘士たちの一人が、ヴィータに襲い掛かってきた。

「させるか!『シユワルベ・フリーゲン』!!」

魔力の鉄球をハンマーヘッドで打ち出し、海闘士を打ち抜いた。

しかし、海闘士たちは次から次へとヴィータに襲い掛かる。

その一人一人が、ヴィータと同レベルの戦闘力を持った者たちである。

しかも、ヴィータはなのはを庇いながら戦わなくてはならない。

空を飛んで逃げようにも、先程なのはを撃つた(後にガジェットドロ

ーン?型と命名)のとは違うタイプの機械兵器(ガジェットドロ

ーン?型)に乗った海闘士たちが、上空を固めていた。

まさしく四面楚歌。

逃げることは不可能であつた。

「護らなきゃ……なのはだけは…アタシが絶対護つてやる!」

海闘士は雑兵でも、青銅聖闘士レベルの実力を持っている。

そんな者達が軍勢を率いて襲い掛かってきているが、ヴィータは奮戦していた。

護るべき者を護る為に戦うのが『騎士』。

なのはを護りたいと強く願ったヴィータは、今、實力以上の力を発揮していた。

『守護騎士システム』により生み出されたプログラムに過ぎないはずのヴィータが……そのプログラムの限界を超え始めたのだ。

しかし、それでも多勢に無勢……だんだんとヴィータは追い詰められていた。

「ち……畜生……。アタシはどうなるかと……なのはだけは護ってやる……絶対に……！」

思い浮かぶは大好きな主と兄の顔。

【ゴメン……はやて、リア……】

心の中で、大好きな2人に謝り、ヴィータは死を覚悟した。

「フツ……小娘が……。往生際の悪い……」

満身創痍でなのはを庇うヴィータをあざ笑う海闘士たちが、その手に持つ武器をヴィータに向けたその時……！

傷だらけの少女一人を相手に多勢で襲い掛かるとは……海闘士も地に堕ちたのう……

海闘士たちは戦慄した。

この場に近づいてくる『小宇宙』が、余りにも強大さに……恐怖を感じているのだ。

「だ……誰だ！」

「姿を現せ！」

「フツ……わしはここだ！」

一筋の閃光が走り、その軌道にいた海闘士たちが吹き飛ばされた。

「……ウギヤアア ツ……！」「……」

一人の男がヴィータを庇うように、海闘士たちの前に立ちふさがった。

その男は、笠を被り、中国風の服を着ており、大きな荷物を背負っていた。

「な……何者だ貴様は？」

「フツ……お主ら……余りにも情けないと思わぬか……。傷だらけの少

女を庇い、奮闘する一人の女子相手に徒党を組み殺そうとするとは……それでも海皇ポセイドンの戦士『海闘士』か……。恥を知るが良
い！」

「邪魔立てするならば、貴様から殺してやる……！ かかれ
ッ
！」

この男から立ち込める強大な『小宇宙』に恐れを抱いた海闘士たちは、自暴自棄になり一斉に襲い掛かって来た。

「クッ……！」
ヴィータは最後の力を振り絞り、迎撃しようとして構えるが……それを男が制した。

「その傷では無理じゃ……わしに任せておくが良い……」
そう言いながら、ヴィータの頭を優しく撫でた。

普段なら、「子ども扱いするな！」と怒るところであるが、その手の暖かな温もりを感じ、ヴィータは力が一気に抜け、その場に座り込んだ。

男は、襲いかかってくる海闘士たちに視線を向けると『小宇宙』を高め迎撃態勢を取った。

「受けよ百龍の牙を……！」スズンヒヤクリウ『廬山百龍霸』……！
男は、両手を前面に繰り出すと数多の龍が現れ、海闘士たちに襲い掛かる。

「……ギヤアア
ッ……！」「……」
たった一撃の技で、この場にいた全ての海闘士たちは全滅した。

「……な……何だと！」
差し向けた海闘士たちが全滅する様をモニターで見ていた『海龍』は驚愕した。

「……『海女王』……あの男は何者だ……！？」
「わ………解りません……。あのような男は見た事がありません……」

『海女王』も目を疑っていた。

「あの『小宇宙』…間違ひなく黄金聖闘士級…しかし…あのよう
な黄金聖闘士など知りません…ただ…」

「…ただ…何だ…？」

「あの男の放った技…『廬山百龍霸』とやらと似た名前の技を使う
者が青銅聖闘士に居ました。…『龍星座』の青銅聖闘士が…確か『
廬山昇龍霸』とかいう技を……」

「では…その『龍星座』ゆかりの者か？」

「…『龍星座』の師は、確か『天秤座』の黄金聖闘士ですが、この
男は前聖戦の生き残り…。既に二百数十歳の老いばれの筈です…」
しかし、モニターに映るその男は、若々しく二十歳前後にしか見え
ない。

「…では…何者なのだ…あの男は？あの男の『小宇宙』……下手を
すれば『双子座』のカノンすらも凌駕するかも知れん…」

確認している黄金聖闘士は、『双子座』『牡羊座』『獅子座』『蠍
座』『乙女座』の5人。

それだけでも十分脅威なのに…黄金聖闘士級の謎の人物の登場に戦
慄を禁じえない『海龍』と『海女王』であつた。

高町なのは撃墜……。

その報は、すぐさま『アースラ』や無限書庫にも伝わった。

なのはは直ぐに本局の病院に収容され、緊急手術を受けていた。
リンディヤククロノ、フェイト、はやたと守護騎士たち…そして、高
町家の面々とアリサ、すずかが駆けつけた時、手術室の前で傷の手
当を受けたヴィータが泣きながら座り込んでいた。

「…ヴィータ…」

「…ごめんなさい…ごめんなさい…なのはを護れなかった…。ごめ
んなさい…」

ヴィータに駆け寄ったはやてに抱きつき、泣き崩れる。

「ヴィータ！……すっかりして……。なのはちゃんは無事なん!?」

「……血が止まらなくて……。どんどん流れ出てきたけど……。アタシたちを助けてくれた人が……。『シンオウテン』ていうのを突いて、なのはの血止めをしてくれたんだ……。」

そのお陰で、なのはは失血死しんけつてんを免れた。

「……血止めの急所……。『真央点』ですか?」

その時、カノン、ムウ、アイオリア、ユーノの4人も到着した。

「ヴィータ……。そのお前達を助けたという人は何処に行った?」

「……アタシたちと一緒にこの病院に来たけど……。さつき……。どっかに行っちゃった……。」

ヴィータがアイオリアの問いに答えたその直後、廊下にこちらに向かってくる足音が響いた。

「なんじゃ……。その娘を落ち着かせようと飲み物をもらってきたのじゃが……。随分と人数が増えたのう……。」

その声を聴き、驚愕したカノン達は、声の主に視線を向けた。

「ムツ……。お前達は!」

その人物の姿を見た瞬間、カノン達はその場に跪き、礼を取った。

「……お久しぶりです……。老師!……!」

「……お前達も、無事で何よりじゃ!」

そう、なのはとヴィータを救ったのは『天秤座』の黄金聖闘士、童虎であった。

第四十二話 いにしえの闘士（後書き）

なのはを襲った凶事を嘆く家族。

覚悟を持たずに、なのはの管理局入りを許したことを後悔している
高町家の面々に、ムウが叱責する。

時空を越えた黄金の闘士

「戦いの覚悟」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第四十三話 戦いの覚悟

『天秤座』の黄金聖闘士、童虎。

二百数十年前の前聖戦の生き残りであり、「老師」と呼ばれすべての聖闘士の尊敬を集めている。前聖戦では彼と教皇でありムウの師であるシオンの二人だけが生き残ったという。

サガからは、老齢ながら全聖闘士中で最強と評されていた。教皇亡き後は、事実上の聖闘士の最高指導者となっていた。

先の聖戦までは、中国江西省九江市の南部にある世界遺産として指定されている『廬山五老峰』に老人の姿で座すのみだった。これは、十八歳の時に先代アテナより『MISOPETHA-MENOS』^{メノス}と呼ばれる仮死の法を受けたためである。この法の効果により心臓が一年で十萬回　人間の一日の平均的な心臓の鼓動　しか動かない状態になっており、五老峰より西に千キロの巨塔に封印されていた108の魔星の封印を監視、尚且つ仮死状態となった身体を休ませるためであった。

童虎の肉体にとっては、二百数十年という長い年月も二百数十日間分の加齢にしか過ぎず、ハーデス軍の侵攻にあたり、肉体は全盛期の十八歳の姿に若返り、二百数十年ぶりに聖衣を纏って戦いに臨んだ。

ムウから童虎に関する説明を受けて、リンディは顔を引き攣らせた。
「……………あ……………貴方達はどれだけ私達を驚かせれば気が済むんですか？」

カノン達だけでも、自分達の常識を超越しているのに、この童虎に至っては……………すでに人外の領域である。

さて、リンディたちが既に一杯一杯になっている間、カノンとアイ

オリアが童虎に、自分達が置かれている状況を説明していた。自分達が、生存している理由やこの次元世界の情勢などである。

「……成程のう……。わしらが生きていた理由はそういう事じゃったのか？」

童虎は感慨深げに頷いていた。

童虎は、気付いたらなのはとヴィータを助けたあの世界に居た。

そこが、自分達の居た世界ではないことには気付いたが、どうすることも出来なかったので、二年間、その世界を旅しながら生活していたのだ。

もともと聖闘士はサイバル能力にも長けている。

ましてや、人生経験豊富な童虎にとって旅生活など苦にもならなかったのである。

なのはの手術が終わった。

童虎の応急処置のお陰もあり、命は取り留めたようである。

しかし……その傷は軽いものではなかった。

下手をすれば、空を飛ぶどころか歩行すらも満足に出来なくなる可能性すらあるのである。

なのはの状況を知り、なのはの両親である士郎と桃子が嘆いた。

「……こんな事になるんなら……なのはを管理局で働かせなければ良かった……」

桃子がそう呟き、士郎もそれに同調した。

美由希などは、なのはと共に任務に就いていたヴィータを責めていた。

「何で……何でなのはを護ってくれなかったの！」

糾弾されたヴィータは、体を震わせていた。

しかし、そんな高町家の面々にムウが怒りの声を発した。

「何を今更、そんなことを言っているんですか？」

今まで見た事がないムウの怒気に、美由希は圧倒された。

「なのはが選んだ道なら応援してあげたい……。そう言っていたのは貴方たちではありませんか！」

管理局への入局を望んだのはなのは本人であり、そしてそれを認めたのは士郎たちである。

「まさかとは思いますが…、貴方達はどうなることを予想すらしなかったのですか？」

返答はなかった。

そう、桃子も、恭也も、美由希も、そしてかつて同じ状態になっていた士郎さえも、なのはがこうなる可能性を考えなかったのである。治安維持組織といっても、戦闘を行う以上こうなる可能性は考慮に入れるべきである。

平和な日本でも、警察官が犯人に殺され、殉職する例は多々あることである。

ムウにとって、高町家の人たちは恩人である。

だから、言いたくなかった。

しかし、言わなくてはならない。

「……私達の世界でも日本人は平和ボケしていると言われていたが……、どうやらそれは事実だったようですね……」

士郎たちは、リンディからなのはの力の事を教えられ、安心していただろう。

僅か九歳でAAAランクに達していたなのはは、次元世界間でも稀少ともいえる程の才能がある。

現に、なのはは管理局に入局し、研修期間を終え、実戦に配備された後、目覚ましい活躍を見せた。

『無敵のエース』と称えられ、彼女の活躍ぶりに嫉妬したモノたちからは、『白い悪魔』などと陰口を叩かれもしたが、それもなのはが魔導師として卓越した才能をもっているが所以である。

それほどの力があるのなら、大丈夫だろう……と。

「リンディが言ったように、なのはは才能豊かな魔導師でしょう。」

実力もあります。ですが、強い「生き残れるというわけではありません。それは士郎……貴方の例をとつても分かるでしょう……」かつて、桃子と結婚する前から士郎は、ボディガードを生業としていた。

その筋では有名で、まさしく超一流と言われる程の実力者だった。そんな士郎でも、なのはが幼い頃に重症を負い、第一線からの引退を余儀なくされた。

「我々、聖闘士でも同様です……。先の聖戦のおり……正規の聖闘士で最初の犠牲者となったのは……聖闘士の最高位である私達、黄金聖闘士の中の一人でした……」

黄金聖闘士の中で、いや全聖闘士の中で並ぶ者のない『剛』を誇る『牡牛座』のアルデバラン。

正面からぶつかり合えば、屈強の勇者と謳われたアイオリアでさえも力負けする相手である。

そんなアルデバランが、先の冥王との聖戦における最初の犠牲者となったのである。

「戦いとは、いつ、どのような状況で死に繋がるか分かりません……。実力あるなしに関わらずにです。ましてや美由希……ヴィータを責めること自体間違いです……」

なのはが撃墜された後、とどめとばかりに海闘士の大軍が襲い掛かってきたのだ。

童虎の助けが入るまでの間、ヴィータが奮戦しなければ、なのはの命運はそこで尽きていた。

「……ヴィータが命懸けでなのはを護らなければどうなっていたか……想像出来ないほど貴女も愚かではないでしょう……。にも拘らず、ヴィータに感謝するどころか責めるとは何事ですか！」

ムウの弾効を受け、美由希はようやく自分の愚かさに気付いた。

「……ごめんなさい……ヴィータちゃん……。そして、なのはを護ってくれてありがとう……」

自らの非を認め、ヴィータに謝罪と感謝を口にした。

「え……でも……」

「ヴィータ……。貴女がなのは護ったのは間違いありません。……ですから、そんなに自分を責めないように……」

ヴィータの頭を撫でながら、ムウはそう諭した。

「士郎、幸いにもなのは一命は取り留めました。これからののはの事……しっかりと本人と話し合って決めて下さい」

今回の事は、運が良かったに過ぎない。

なのはが完治したとして、これからも管理局で働くのか、これを機会に辞めさせるのか……。

「今度こそ、後悔しないよう……徹底的に話し合うことを勧めます」

「……ああ。ありがとうムウさん……」

ムウの叱責は容赦のないモノだったが、それがなのはや自分達を思いやってくれているからこそなのだということは、理解できている士郎だった。

その頃、カノンはフェイト、アルフと話をしていた。

「フェイト……。今日、お前は執務官の試験だったそうだな……」

「……う……うん……」

フェイトの歯切れが悪い。

「クロノから聞いたが……見事に落ちたそうだな……」

万全の態勢で望んだ試験だったが、その直前になのはの凶事を聞き、動揺したフェイトは実力の一割も出すことが出来なかった。

「……フウ……どうやらお前はまだまだヒヨコだったようだな……」

カノンは呆れながら呟いた。

「……でも、直前になのはの事を知らされたんだ。フェイトが動揺しても仕方ないじゃないか……。親しい人間の凶報を聞かされ、動揺しない人間なんか居ないだろ！」

「黙れアルフ!!」

アルフはそう主張したが…カノンはあっさり切って捨てた。

「居る居ないの問題ではない。そういう人間が居なくてはならないのだ！ましてや、次元世界の平和を護ると謳う管理局員なら尚更だ！！」

カノンの叱責に、フェイトは衝撃を受けた。

「親友の凶報を聞いて哀しむのは当然だ…。むしろ、哀しまない方がおかしい……。だが、それに流されてはならん……。その哀しみを堪え、自らの使命を貫く強さを持たなくてはならんのだ」

今回は、執務官『試験』だからよかった。

しかし、何らかの任務の最中だったら…。力が出せませんでしたでは済まないのだ。

管理局の仕事が、次元世界の平和を護るといふモノである以上…。そこは、戦場なのである。

フェイトが動揺し、任務に集中出来ないことで、フェイトはおるか周りの者までもが死ぬ可能性があるのだ。

「今回のなのはの件で、どれほど優れた才能や実力を持っていても戦場が死と隣り合わせなのかは理解できたはずだ……。いかに大切な親友が重症に負った事を知っても、それで動揺して、何も出来なくなる者等、戦士として失格なのだ……」

遠くにいる友のことは勿論、身近の同僚が例え命を落としても動揺してはならないのである。

仲間の死（なのはは死んでないけど）を哀しみ、涙するまではない。だが、それで歩みを止めてはならない。

かつて、『矢座』のトレミーが放った『黄金の矢』を受け倒れた沙織を救う為、星矢たち青銅聖闘士が十二宮の突破を試みたときのよう……。うに……。

十番目の『磨羯宮』で紫龍が、十一番目の『宝瓶宮』で氷河が、最後の宮『双魚宮』で瞬が倒れる中、星矢は倒れた兄弟たちを乗り越え、『教皇の間』に乗り込んだ、そして立ちはだかる諸悪の根源であるサガの前に、星矢を救う為に駆けつけた一輝までもが倒れた。

しかし、星矢はそれでも前進を止めず、ついにサガを倒し、沙織を助けることに成功した。

兄弟たちが傷つき倒れた事に動揺しては、沙織を助けることは叶わなかっただろう。

「お前もなのはも、自分の力を次元世界の平和を護る為に使いたい
の願い、管理局に入局したのなら、その仲間が倒れたからといって、
哀しむことはあっても、動揺はするな……。それを乗り越える強さ
を持って！それが出来ないのなら、管理局を辞める…。でなければ、
次はお前がなのはの二の舞になるだけだ…」

いつもながらの厳しいカノンの言葉だが、フェイトはそれをしつかりと受け止めた。

「うん……。次の試験は必ず合格する…。そして、カノンの言うように強くなる……。こんな事で辞めたら、それこそ私の夢は叶わないから……」

強い視線で自分を見つめてくるフェイトを見て、カノンは厳しい顔を和らげ、フェイトの頭を撫でた。

「お待たせしました……。カノン……」

そこへ、リニスが見れた。

「あれ、リニス…。どうしたの？」

「ええ。実はカノンに頼まれてレティ提督の下に赴いていたんです」

「レティ提督の所？」

何故、カノンがレティの下にリニスを使いに向かわせたのか…フェイトには分からなかった。

リニスは、レティから預かってきたディスクをカノンに渡し、カノンは端末を開いてその中身を確認かめていた。

「ここにいましたかカノン！」

そこに先程まで士郎たちと共にいたムウもこちらに合流した。

「ちょうどいい所に来たなムウ……」

カノンは、ムウに先程のディスクを見せた。

「こ…これは!？」

「ああ。なのは今回の事故の原因だ……」
それを見たムウの顔に、再び怒りが浮かび上がった。

第四十三話 戦いの覚悟 (後書き)

なのはの事故の最大の原因は、なのは自身の驕りであった。
ムウはその事を指摘し、なのはを諭す。

時空を越えた黄金の闘士

「なのはの心」

君は、小宇宙を感じた事があるか!?

第四十四話　なのはの心

なのはの手術も終わり、本人も目覚めたので、集中治療室から一般病室に移ることになった。

今まで面会謝絶だったが、これで漸く皆が見舞いに訪れることが出来るようになった。

皆が心配そうな顔で面会に来るので、なのはの台詞は決まって「ごめんね」だった。

なのはが目を覚ました後、土郎たちはムウに言われたとおり、改めてなのはのこれからの事を話し合おうとした。

しかし、そのムウが待ったを掛けた。

その前に、自分がなのはに話があるので、話し合うのはその後にしてほしいと言ってきたのだ。

それに、なのははまだ目覚めたばかりであり、そんな話をするのは時期尚早であることも考え、なのはがリハビリを始められるまで待つ事になった。

意識は回復したものの、身動きがまったく取れないなのはの為、美由希が許可を取り、病院に泊まりこみながら介護をすることにし、恭也も泊まり込みはしないが、美由希のサポートをするべく、毎日、訪れることにした。

土郎と桃子は、喫茶店を開けなくてはならないからである。

これから、なのはは再び動ける様になる為の、リハビリが待っている。

なのはが目覚めて一週間が過ぎたある日、本局にある公園のベンチでユーノは一人で座っていた。

「……僕は……間に合わなかった……」

いや、元々無理だったのかもしれない。

聖闘士の修行は苛烈を極める。

それに集中していなければ、とても乗り越えることは出来ない。

友人を無限書庫の司書に誘い、仕事量を減らしても……多忙であることは間違いない。

執務官であるクロノも似たようなものだが、彼は偶然とはいえ、修行を始める前に『小宇宙』に目覚めていた。

しかし、自分は1からである……。

当然、修行が捗るはずが無い。

なのは護れる強さを求め、聖闘士の修行を始めたのに……その前になのはに凶事が襲い掛かったのだ。

「どうしたのじゃ……」

「あつ……老師……」

悩んでいるユーノの前に童虎が現れた。

「確かムウの弟子の……」

「はい。ユーノ・スクライアです。老師のご高名はかねがねムウ様より聞いていました」

今更ながら説明しよう。

ユーノは、ムウに弟子入り以降、『ムウさん』から『ムウ様』へと呼び方を変えていた。

別にムウが強制したわけではないが、一番弟子である貴鬼同様そう呼ぶ様になっただけらしい。

「……それで、どうかしたのか？何か悩んでいるようじゃが……」

「はい……実は……」

ユーノは躊躇いもなく、童虎に悩みを相談した。

外見は若いのが、童虎は人生経験が豊富であり、何よりも他の黄金聖闘士には無い安らぎがある。

悩みを打ち明け易いのである。

ユーノの悩みを、童虎は黙って聞いていた。

「それで……どうするのじゃ。聖闘士の修行を辞めるか……？」

聖闘士発祥の地である聖域で修行するなら、聖闘士の修行を途中で辞め、脱走を試みると、待っているのは『処刑』である。

この掟だけは、絶対に守られる。

聖域は、聖闘士の本拠地であり、ここで修行するという事は、世界各地の何処かで修行するよりは厳格でなければならぬ。

しかし、他の地での修行はそれほどでもない。

来る者拒まず、去る者追わず……。

殆どがそうである。

つまり、ユーノも辞めたければ辞めてよいのである。

「……いえ、それは辞めません。僕に付き合ってくれているムウ様に失礼ですし……なのはの事が無くても……純粋に強くなりたいという気持ちもあるんです……」

やはり、ユーノも男であるので、強くなる事に憧れているのは確かであった。

「フム……そう、はっきり言えるのなら、特にわしが何か言う必要はないのう……」

童虎は微笑んだ。

「……でも……なのはがそのまま再起不能なら、ゆっくり強くなる……で良いんでしょうけど……多分、そうはならないでしょう……」

「ほう、それは何故じゃ……」

「……今回のなのはの事故の最大の原因は……」

……。

「なるほどのう……」

ユーノの説明を聞き、童虎も納得した。

「多分、今頃ムウ様から、キツイ説教を受けている頃でしょう……」

「……ここに居たかユーノ……」

そこにカノンがやって来た。

「これは、老師」

童虎も居ることに気づき、膝を付き、頭を下げる。

「……どうしたのじゃカノン……」

「……ユーノ。ムウからの伝言だ……。道具を用意しておけとの事だ。『オリハルコン』と『ガマニオン』、^{スターダストサンド}『銀星砂』も忘れるな……との事だ……」

「……それらを用意すると言つことは……?」

「……そうか……わしの『天秤座』^{ライブラ}の聖衣の修復を……」

そう、『天秤座』の黄金聖衣も、アイオリアの『獅子座』^{レオ}の聖衣同様、『死』を司る神、タナトスによって粉碎されているのである。

「はい。後、聖衣の修復に必要な血液は、私を使います……」

「なんじゃと!?!」

カノンからの申し出に、童虎は驚いた。

「……これは私のけじめです……。納得していただきたい……」

カノンの気持ちを察した童虎は、カノンの肩を叩き頷いた。

「では、頼むぞカノンよ……」

「ハッ!」

「……ごめんね……ムウさん……。心配かけて……」

「………なのは……。貴女は何を考えていたのですか!」

なのはの謝罪に対し、ムウは叱責で返した。

「エッ!?!」

そう言うとムウは端末を操作し、管理局に正式に入隊してからのなのはのデータを空間モニターに表示した。

フェイトと共に訓練校の短期メニューをこなし、アースラでの研修を終えたなのはは、武装隊の一員として、様々な任務に就いた。

そう、一年の間にほとんど休み無しのフル活動である。

管理局の任務だけでなく、小学校に通いながらである。

管理局入局の条件として、「学業を疎かにしない」というのが入っ

ているので、学校と管理局の二束の草鞋の状態である。

「貴女の管理局での仕事ぶりのデータを見せてもらいました……。過重労働と呼べるレベル超えています」

学校が終わったら、本局に直行し、武装隊の任務に就く。

まあ、ここまでは良いだろう。

しかし、そのスケジュールは余りにもハードであった。

三日と開けずに、現場への出勤……。

任務が無いときも、訓練に明け暮れる。

睡眠時間は、多くて五時間。

下手をすれば、一時間程度でしかない日もある。

成長期の少女にとって、少なすぎる睡眠時間である。

それ以前に、個体差があるが人間の理想的な睡眠時間は7時間以上8時間未満である。

睡眠が不足した場合に最も影響のある精神活動は気分、記憶力、集中力である。

つまり、今回の事は、『不幸』な事故ではなく、『起こって当然』の事故なのである。

「…『闇の書事件』の前も、貴女は『やり過ぎ』と言える程の訓練をしていましたが、それでも20時に寝て4時に起きていました。つまり8時間バッチリ睡眠をとっていたから、それほどの負担にはならなかったのでしょうか……。ですが、学業と仕事を両立させながら、しかも睡眠時間が少ないのでは、疲労が溜まって集中力が切れるのは当たり前です！私達、聖闘士でも持ちません！！ましてや、魔法が使えるだけで、基礎体力が常人よりも劣る貴女ならなおさらです！！」

『聖戦』時は、不眠不休は当たり前前の聖闘士だが、そもそも『聖戦』は短期決戦が殆どである。

永くても半年くらいで終結を迎えるし、短ければ数週間くらいである。

先の海皇との聖戦は、約二週間で終結し、その次の冥王との聖戦は

十余日で終結したくらいである。

そして、平時には聖闘士が動く事は稀であり、特に黄金聖闘士が勅命を受ける等、滅多に無いので、なのは様に約一年近く、睡眠時間を削る事などないのである。

特に、『生命の炎』が燃えている限り無尽蔵な『小宇宙』と違い、魔力は使えば『消費』するのである。

しかも、彼女の戦闘を見れば信じられないだろうが、なのはは『体力』と『運動神経』がダブルで赤点なのである。つまり、魔力が無ければ、ただの小娘に過ぎないのだ。

「人間、まず基礎体力がなければ、話になりません。ましてや『戦闘』というのは、体を負担を掛けるベスト3に入る分野です。まあ、これに関しては貴女よりもむしろ『管理局』の方に問題がありますね。研修期間において、魔法戦闘のことばかり重点に教えて、基本中の基本を疎かにしたわけですから……ね」

廊下で聞き耳を立てているリンディにはっきりと聴こえるように……。

「おそらく、人手不足である故に、稀少な才能を持つなのはとフェイトを、一刻も早く使える『駒』にしたいが為でしょう……。しかし、フェイトにはリンディが、はやてにはレティ提督と言った、キチンと手綱を握れる人物が上司である為、2人の方はそれほど問題は無かったです。ですが……なのはの上司は……」

運が悪かったのか、なのはの直接の上司はリンディとまったく親交のない人物だった。

この上司は典型的な小役人タイプであり、若くして才能豊かななのはに嫉妬し、嫌がらせに扱き使っていたのである。ついでに、自らの立身出世の道具にしようと画策したのだ。

魔導師ランクは、空戦Cランクであり、自力では武装隊の一部隊長がである現在の地位で精一杯である。

しかし、頼まれたら嫌と言わない『良い子』のなのはを利用すれば

……。

そう考え、本来なのはを必要ともしない任務にも駆り出したのだ。余りの過重労働に、レティは何度もなのはに休暇をとるよう通告していたのだが、なのはは休暇をとらない。

次々と課せられる任務に出勤を繰り返した。

業を煮やしたレティは、今回の任務が終了したら、自分の権限で強制的になのはに休暇をとらせるつもりだったらしい……。

しかし、後1歩、間に合わなかったのである。

「……ですが、その男の思惑とは別に、なのは……貴女自身にも問題があります……。それは、貴女自身の驕りが原因です……」

「……お……驕り……？」

「なのは、貴女は皆から持ち上げられる事で、自分が超人にでもなつたつもりでいたのではありませんか？」

「そ……そんなこと！」

「……ならば何故……こんな無茶をしたのですか？確かに私と出会ったばかりの頃から、貴女は無茶をしていましたが……ここまで身の程知らずでは無かった筈です。『無敵のエース』などと呼ばれている内に、自分の力を過信しすぎたのでありませんか？」

何よりもムウ達聖闘士と離れたのが、それに拍車を掛けた。

如何に魔法という力を手に入れても、カノンやムウ達『黄金聖闘士』に比べれば、それほどどの事でもなかった。

『PT事件』はともかく、『闇の書事件』は間違いなく、カノン達でなくては解決出来なかつただろう。

しかし、そんな黄金聖闘士から離れてみると、なのはの力は実には有用であった。

その活躍ぶりは、『無敵のエース』又は『白い悪魔』という異名が付くくらい目覚ましいものであった。

その為、周りはなのはを称えた。

尊敬と畏怖、期待と嫉妬を折り混ぜた視線を受けることとなったのだ。

「貴女は……自分が注目を受けることに酔い、それが増長に繋がったのです」
ムウの指摘に反論したいのはであったが、有無を言わさぬ眼光により反論できなかった。

「なのはのお父さんが、なのはが小さい頃に事故に遭い、そのお父さんの世話と、まだ軌道に乗っていなかった喫茶店の経営で忙しくて、なのはは寂しい想いをしていたそうです……」

聖衣の修復の道具を揃え、準備をしていたユーノは、待機しているカノンと童虎に、なのはの事を話していた。

「フム……。それでなのはという少女は、自分が『いらない子』だと思いきんできましたのじゃな？」

自分は『いらない子』だから、聞き分けのいい『良い子』でなければ、居場所がなくなってしまふ……と、感じていたのだろう。

無論、それはなのはの錯覚に過ぎない。

士郎も、桃子も、恭也も、美由希も、なのはを大事にしている事は間違いないのだ。

なのはも頭ではそれを理解していても、感情の方では理解していなかったのだろう。

「そして、士郎達も幼いなのはを放っておいたという負い目から、なのはに対して強い態度に出れなかった……ということか……」

カノンは、納得したようである。

如何に才能豊かとはいえ、日本人の常識で9歳の小娘を危険を伴う管理局の武装隊入りを認めるのは、余りにも理解がありすぎと感じていたのだ。

その負い目から、どういう結果になるかと言うことを考えもせず、それがなのはの願いなら……と、受け入れてしまったのだろう。

「しかし、今回の事でなのはも痛感しただろう……動けない人間の

世話というモノがどれほど大変なのかを……自分が世話される立場になる事で……な……」

「今でも、高町家には自分の居場所がない……などという戯言を言いますか？」

なのは首を振った。

この一週間、泊まり込みながら自分の世話をしてくれる姉を見て、介護というのがどれほど大変なのかを痛感させられた。

そして、人間、お金を稼がなくては生きていけないし、稼ぐ為には働かなくてはならない。

家族は決して、好きで自分を一人にしていたわけではなかった。

それは、事故に遭った自分に対する態度でも十分理解できた。

何より、姉の顔を見る度に、胸が苦しくなった。

こんなにも自分を心配してくれている。

こんなにも自分を大切にしてくれていた。

だから、父の怪我が治り、喫茶店も軌道に乗ったら、皆がなのはを気に掛けてくれた。

しかし、なのはは表面上は喜んで、自分でも気付かない心の奥底では捻くれて「何を今更」と白々しい気持ちになっていたのだ。

何と愚かだったのだろう……。

「リハビリを始める前に、今度は本音で家族と話し合い、今後の事を決めなさい……。管理局の仕事を続けるのか、辞めるのか……。今度こそお互い納得の行くまで……ね」

ムウも表情を和らげ、なのはに諭した。

「……はい……。ありがとございます……ムウさん」

「大体、貴女は贅沢なのですよ……。フェイトやはやてに比べれば……貴女はとても幸せな環境にいるのに……。『親』というモノを知らない私達から見れば特にね……」

親（と信じていた者）に虐待されて、最後まで愛されなかったフェイト。

両親を事故を喪い、本当に永い間一人ぼっちだったはやて。

そして、そもそも両親の顔を知らないムウ、カノン、アイオリア。それらに比べれば、はるかに恵まれた環境にいるなのではある。

正直、「何贅沢なことぬかしているんだ！大概にせんと絞めるぞ！」と言いたいくらいであった。

「老師……。お待ちせしました……」

なのはとの話を終わらせたムウが、童虎達の所に姿を見せた。

「ユーノ……。準備は終わりましたか？」

「はい、ムウ様。後はカノンさんの血の提供のみです……」

カノンが自らの手首を切り、流れ出る血を聖衣に振り掛けていた。

「……あのなのはとかいう娘への説教は終わったのじゃな？」

「はい。今は士郎たちと話し合っていますよ……」

「……で、結局なのはは、これからも管理局で働くのか、それとも辞めるのか？」

「……私としては、さっさと辞めてもらいたいんですが……恐らくそうはならないでしょう……」

カノンの疑問にムウが答えた。

「似たような仕事をしていた士郎から、色々と聞かされているでしょうし、今度は家族が本音をぶつけ合って討論しているようですよ……」

「フム、本音で語り合うというのは大事なことじゃからのう……。家族の中で遠慮しあってはいかんからな……」

「そうですね。まあ、本音をぶつけ合った為に、余計に拗れる可能性もあります。あの家族なら大丈夫でしょう。本音をぶつけ合い、拗れまくっていがみ合った、どこぞの双子とは違いますからね」

「…………喧嘩売ってるのか？買っぞ！」

「…………相変わらず温和な表情で、毒を吐くのう…………」
育て方間違えたんじゃないのか…シオン…と、今は亡き親友に心の中
で語りかける童虎であった。

なにやら殺伐とした雰囲気、ユーノはフェレットモードになり、
隅に隠れて震えていた。

聖衣の修復の後、軽く『千日戦争』を陥りそうになった黄金聖闘士

2人を宥め、童虎は修復された『天秤座』の聖衣を纏った。

「ウム…。ムウ、そしてカノンよ…感謝する」

満足そうに頷いた。

「それで、老師はこれからどうなされますか？我々の本拠に来られ
ますか？」

「いや、もう少しこの『次元世界』とやら回って見ようかと思っ
てる」

童虎は、前聖戦から二百数十年間、座したままであった。

役目から解放された今、未知なる世界を旅して回りたいのだ。

「分かりました。リンディに便宜を図ってもらいましょう」

第四十四話　なのはの心（後書き）

次元海賊に襲われた輸送船から発見された変死体。

海賊殲滅に派遣されたアースラ。

敵アジトに潜入したクロノの前に、恐るべき敵が現れた。

時空を越えた黄金の闘士

「黒い死」

君は、小宇宙を感じた事があるか！？

第四十五話 黒い死

「そうか。なのはのりハビリは順調なのか」

「うん。なのはちゃん、一生懸命頑張ってるよ……」

休暇が取れたはやては、アイオリアが居る聖域に足を伸ばしていた。

「結局、なのはは管理局を辞めなかったのか……」

「でも……、今度は士郎さん達とすっかり話し合った結果やからな……」

「お前はどうするんだ？ 今回の事で、戦いというものがどういふものかお前も実感出来ただろう……。シグナム達の支えになりたいというお前の気持ちは立派だが……」

アイオリアとしては、はやてには管理局……いや、戦いというモノに関わって欲しくない。

特に最近、はやてがだんだん腹黒くなってきた様な気がするし……。

「……リア兄が心配してくれるのは嬉しいし、確かに怖いけど……でも、だからこそ辞めるわけにはいかん。皆が帰ってくるのをただ待つだけの方が苦しいからな……」

皆が危険な仕事に就いている中、ただ一人で待っているのは、はやてにとつてはとても辛い事であった。

「……ところで、最近、この世界も人が増えてきたなあ」

重い話になりそうだったので、はやては話題を逸らした。

「ああ。管理局を退職した者たちが、レティの紹介で第二の人生としてこの地で農業をやってくれているからな……」

定年になり、管理局を辞した者や、任務中に事故に遭い、復帰が出来なくなった者などに、レティがこの世界で農業をやる事を勧め、それを受け入れた者たちが、この世界に集まっていた。

それとは別に、リンディの昔の知己である有名な料理評論家が、聖域で作られたオリーブオイルを絶賛してくれたお陰で、注目が高まっているのだ。

その評論家が、諸事情で土地を失った農家の人間などをこちらに回してくれた。

働き手が増えたので、畑だけではなく放牧も可能になり、大農園や大牧場といった規模にまでなっていた。

「アイオリアさん。とりあえず課題は終了しました」

そこに、一人の青年が姿を見せた。

「ああ、ロツサ…邪魔しとるで」

「やあ、はやて…来ていたのか…」

この青年は、ヴェロツサ・アコース。

時空管理局査察部の査察官である。

『闇の書事件』の後、謝罪する為はやての家を訪ねたグラムに付き添い、はやてと面識が出来ていたが、その後、聖王教会騎士団の任務に派遣されたはやては、ロツサの義姉である聖王教会の騎士であり、管理局の理事官を兼任するカリム・グロシアと出会い、その縁で親しくなっていた。

ロツサは、親友であるクロノが聖闘士の修行をしている事に興味を持ち、はやてを通じてアイオリアに弟子入りしたのである。

執務官であるクロノに比べれば、融通が利く立場であるロツサは、査察官としてよっぽどの事がない限りは、部下に仕事を任せていた。管理局上層部としても、聖闘士との友好関係を構築する為、ロツサの弟子入りは都合が良かったので便宜を図っていた。

「そういえば、今朝方慌ただしくアースラが本局から出て行ったけど、なんかあったん？」

「ああ。『次元海賊』の件だろうな」

「何をやっているんだフェイト、それに…リニス!？」

アースラの厨房で、リニスと一緒に料理をしているフェイトを見て、クロノがいぶかしんだ。

「見ての通り、料理の指導です。フェイトは材料を切るのと、火を使うのは得意なのですが……味付け等が苦手です……。そろそろフェイトには花嫁修業が必要だと思ひまして……」

義妹の花嫁修業……、最近シスコンになりつつあるクロノは、一瞬、不愉快そうな顔になったが、フェイトが誰を想っているか思い出したので、「まあ、仕方がないか」というような表情になった。

師匠であるカノンに対して、いちやもんを付けるのは憚るからである。

最も、カノンは未だにフェイトに対して『保護者』としての感情しか持っていないのであるが……。

「まあ、何れは必要なことだろうけど……でも、カノンさんは確かに料理の腕前もプロ顔負けだった筈だけど……」

以前、カノンの料理を食べて、料理に自信のあったエイミイが悔しそうにしていた事を思い出した。

「確かにハードルが高いですけど、カノンの料理はどちらかと言えば、店で出す料理です。『家庭』料理とは違いますからね……」

「それはいいとして……ところで、どうしてリニスがこの艦に乗り込んでいるんだ……」

リニスは、フェイトの育ての親とも呼べる立場だが、彼女はフェイトの使い魔ではない。

一応、部外者なのである。

リニスの主であるカノンが居ないのに、何故乗り込んで入るのか。

「リンディの許可は取っていますよ……。娘の花嫁修業の講師として……」

母の職権乱用ぶりに、気苦労が増えるクロノだった。

「……まあ、気を取り直して……フェイト、一時間後にブリーフィングが始まるから、遅れないようにな」

「……うん」

「そこ！塩の入れすぎです。味を生かすも殺すも塩加減次第……！」

「……本当に忘れるなよ……」

「さて、それじゃあ今回の任務について、説明する」
ブリーフィングルームで、会議が始まった。

ちなみにリンディとフェイトの頭にはタンコブがそれぞれ一つ。

案の定、遅刻をして、フェイトはクロノから拳骨をもらったようである。

リンディは、職権乱用で任務に必要な部外者の乗艦を認めた事で、クロノから説教をもらい、拳骨を貰っていた。

「最近、クロノ君が暴力的になってきたねえ……」

「エイミィ…君も一発、落とされたいか」

クロノが拳骨を握ると、エイミィは慌てて首を振った。

「……さて、今回の任務は最近、勢力を伸ばしてきた『次元海賊、ダークホース』に関してだ」

『次元海賊、ダークホース』は、『闇の書事件』が終結して、二ヶ月くらいから活動している新興犯罪組織である。

航行中の次元航行船を襲う海賊行為が、主な活動である。

今回、遺失管理部所属のアースラが、この組織の追討命令を受けたのは、つい先日発見されたロストロギアを管理局に輸送していた船が、『ダークホース』に襲われ、ロストロギアを強奪されたからである。

「奪われたロストロギアは、調査の結果、危険などなく、一人が所有を許される類の物であるので、後日、オークションなどで出品される予定だったらしい……、そして、輸送船の乗組員達が……」
輸送船の乗組員は、護衛していた武装局員を含め、全員、殺害されていた。

「そこで、これを見てもらいたい」

エイミィが端末を操作し、局員の遺体の画像が映し出した。

「見ての通り、全身が真っ黒に染まっている……この様な死因は、

過去に類を見ない……。他の乗組員は、斬殺、撲殺、もしくは殺傷設定の魔法によって殺されているが、武装局員は、このような変死だ……」

司法解剖の結果、彼らの血液がどす黒く変色しており、それが死因であると判明した。

「これが、魔法によるものなのか、毒物によるものなのか不明だが、十分注意してくれ。『ダークホース』のアジトは、強奪された荷物の中に忍ばせてある発信機でおおよその場所は見当がついている。

我々の今回の任務は、この『次元海賊、ダークホース』を壊滅させ、全員逮捕する事だ。何か質問は……」

部下達からの質問に答えた後、ブリーフィングが終了した。

『ダークホース』のアジトは、自然保護指定世界の一つで、その世界で最も巨大な休火山（富士山の三倍）である。

自然保護の指定を受けているので、その火山ごとアジトを潰すわけには行かないので、慎重に潜入することになった。

先遣として、クロノとフェイトがコンビを組み、潜入したとき、それに気付いた。

「ASF……！？かなり珍しいモノを使っているな……」

ASF アンチ・スカイ・フィールドは、アンチ・マギリンク・フィールドAMFの亜種で、飛行

魔法を無効化するフィールドである。

「更に通信妨害も……アースラや他の突入部隊との通信も念話も封じられている……」

「ああ。敵も馬鹿ではない……か……」

警戒しながら進んでいく二人だが、ふとクロノが足を止めた。

「どうしたの？」

「……バ……馬鹿な……この先から『小宇宙』を持った者が近づいてくる……」

「エッ!？」

『小宇宙』を持っている……つまり、相手は『聖闘士』と同等の力を持っていることになる……。

「まさか、先日なのは達を襲った『海闘士』とかいう……」

「だとしたら、不味い……僕達だけでは対処出来ないかもしれない……」

戦闘態勢のまま、警戒を続けていると、その『小宇宙』を持った男が姿を見せた。

「ま……『海闘士』!？」

「いや、違う……あれは『聖衣』!？」

「ほう、管理局の魔導師が聖闘士の事を知っているのか!？」

その男は、黒色の聖衣を身につけていた。

「……青銅聖衣じゃない……。白銀でも、ましてや黄金聖衣でもな

い……黒色の聖衣……ま……まさか……ブラックセイント『暗黒聖闘士』!？」

「その通り。俺は暗黒聖闘士最強の『ブラックフォー暗黒四天王』の一人、『ブラツクペガサス』だ」

暗黒聖闘士……

彼らは正しかるべき聖闘士の拳を自らの欲望の為のみに使い修羅界の中で未来永劫殺戮を繰り返されると言われる

その存在はアテナからも見放された

そう、彼らは欲望の為だけに悪魔に魂を売った暗黒の聖闘士それが、『暗黒聖闘士』!!

「フェイト！お前は退却しろ、そして待機している皆を全員を下がらせるんだ！」

「エツ…なんで!?!」

「いかに暗黒聖闘士が、聖闘士の落ちこぼれの集まりとはいえ、その戦闘能力は脅威だ！暗黒聖闘士が奴一人とは限らない。もし、他にも居るのなら…全滅しかねない。アースラに戻ってカノンさん達の誰かに協力を要請しろ！いけ!!!」

「でも、クロノは…」

「2人で逃げるのは危険だ…僕は何とか奴を退ける…だから、行くんだ！これは命令だ!!!」

そういうと、クロノはBペガサスと対峙し、小宇宙を燃焼する。

「まさか…管理局に『小宇宙』を使える者がいるとは…な…」

フェイトは渋々、命令に従い撤退していった。

「……『小宇宙』を使えるということは、分かっているんだろう？『聖衣』を纏った聖闘士相手に、生身で対抗するのは無謀である」とを……」

「確かに…でも、だからと言って退くわけには行かない！」

「よかるう…ならば死ぬ」

Bペガサスが跳び上がり、クロノに向けて拳を放った。

「喰らえ、『暗黒流星拳』!!!」
フラックリゅうせいけん

秒間百発近い拳がクロノに襲い掛かる。

「うわあああああああ!!!」

『暗黒流星拳』の威力によりクロノは吹っ飛び、岩壁に叩きつけられた。

「フツ…いかに『小宇宙』を使えようが所詮は『魔導師』…俺の敵ではないようだな」

そういうと、Bペガサスはフェイトの後を追おうとしたが、その前に先程、倒した後のクロノが立ちはだかった。

「な…なんだと…。まさか『暗黒流星拳』を全て躲したというのか!?!」

「いや、二・三発は喰らったよ……。急所は外したけどな……。まとも
に喰らえば、僕の命はなかっただろうけど……。伊達に黄金聖闘士に
指導を受けているわけじゃない……。この程度で、この僕、時空管理
局執務官、クロノ・ハラウンを倒せると思うな……！」

クロノは反撃する為に、小宇宙を高めた。

その時、この空間にアラートが鳴り響いた。

「ちっ、撤退の指示か……」

Bペカサスがその場を離れようとする。

「待て！逃げるのか！？」

「フン！既に必勝の拳は放っている。もう、会うこともあるまい。

クロノとやら……さらばだ……！」

そう言うと、Bペカサスはその場から姿を消した。

その場を離れ、アースラに戻ろう撤退を始めたクロノだったが、体
に異常を感じていた。

「お……おかしい……。か……体がだるい……。い……一体どうしたんだ……」

『暗黒流星拳』を受けたところが、うずきだしたのだ。

クロノは防護服を解除し、執務官の制服姿になる。

制服を脱ぎ捨て、上半身裸になるとその体に異常を確認した。

「……『暗黒流星拳』を受けた箇所に、黒い斑点が出来ている……」

あ……熱い！黒い斑点が燃えるようだ……。し……。しかも徐々

に斑点が広がって……。このままじゃ全身が黒く覆いつくされてしま

う……」

その時クロノは変死体として発見された、輸送船の護衛の事を思い
浮かべた。

「そ……。そうか……。彼らの死因はこれだったのか……。ふ……不覚

……。お……おそるべき男だ……。Bペカサス……」

よろけたクロノは、そのまま、崖から足を踏み外し、そのまま転げ

落ちていった。

「うあああああああああああああああああ！」

第四十五話 黒い死（後書き）

黒死拳を受け、死が迫るクロノを助けた一人の老人。

管理局にアジトを発見された『ダークホース』はアジトの放棄を決定する。

絶体絶命の危機が再び、クロノに襲い掛かる

時空を越えた黄金の闘士

「オリオン星座の聖闘士」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第四十六話 オリオン星座の聖闘士

「こいつはBスワン。こいつはBアンドロメダ、Bドラゴン。一体どうなっているんだ？」

「俺達は確かに青銅を追ったつもりが間違いだっただというのか？」

「暗黒のこいつらにとどめを刺し、ここに葬っていたとは……」

「まるで狐に抓まれたようだぜ……」

『獵犬星座』のアステリオンと『白鯨星座』のモーゼスは、自分達が葬ったと思つた紫龍、氷河、瞬が別人だった事を知り、戸惑つていた。

そして、気にかかる事があると言つて残つた『蜥蜴星座』のミスティと迎えに行つた『ケンタウロス星座』のバベルの亡骸があつた。それぞれに、倒したのが誰かを知らせる聖闘士カードが置かれていた。

『ペガサス』と『キグナス』のカードが……。

「ペガサス…星矢は魔鈴、お前がとどめを刺した筈！」

「これはどういふことなのか説明してもらおうか！」

モーゼスとアステリオンが魔鈴に追求する。

魔鈴は右へ跳んでこの場から逃げようとするか、どちらかを倒して突破口を開こうとしたが、アステリオンに看破された。

「フツ、そうだったねアステリオン。お前は相手の心を読み取れる術：いわば『サトリの法』を心得ていたのだったわよね。だったら、もう何も言わなくても全てが解つた筈……」

魔鈴は観念し、開き直つた。

「ああ、解つたぜこの裏切り者め！貴様は空拳をもつてしてとどめを刺した様に見せかけ星矢を助けたのだ！！のみならず富士の地底からムウが八つテレポーションさせた流星を四つと偽り、最初に跳んだ『暗黒』を俺達に追わせた！『青銅』だと言つてな！！しかもその後、俺達はムウの幻惑にかけられ奴らを砂に埋めるまでで

つきり青銅聖闘士だと思い込まされていたのだ！」

富士山麓 青木ヶ原の十風穴での、黄金聖衣を賭けた星矢達『青銅聖闘士』と一輝率いる『暗黒聖闘士』との私闘を、聖闘士の掟を破る行いとして、教皇 に扮したサガ の命を受け、白銀聖闘士たちが制裁の為、来日した。

『蜥蜴星座』のミスティの『マーブルトリパー』によって、富士の地底で生き埋めにされそうになった星矢達だか、ムウのテレポーターシヨンによって救われ、さらに魔鈴とムウの連携（本人達が相談してとつたわけではないが…）によって、暗黒四天王は、上記の通り紫龍達の身代わりとなった。

しかし、星矢に関しては、魔鈴が空拳 見せかけの拳 で幻惑した為、Bペガサスのみ身代わりにならず一命を取り留めた。

いつまで経ってもクロノが戻ってこないの、様子を見に行ったギヤレットが戻ってきた。

「そ…それは、クロノの『S2U』と執務官の制服!？」

ギヤレットは、待機状態であるカード型になった『S2U』と執務官の制服を手に持っていた。

クロノは常に『防護服』を展開しているのだが、一応、制服も着ているのだ。

「これが地面に置き捨てられているだけで、クロノ執務官の姿は何処にも見当たらなかった…ただ、執務官のモノらしき足跡が崖の方に向かって残っていたよ……」

「ま…まさか…崖から転落したの!? 飛行魔法が使えないあそこ
で……」

フェイトの血の気が引いた。

アンチスカイフィールド
ASFの影響下で、飛行魔法が使えない状態で、あの深い崖から転

落した……。

あの高さから落ちたら、まず助からない……。

「待ちなさいフェイト！」

フェイトはクロノを探しに一人で突入しようとしたが、それをリンデイが止めた。

「義母さん！？何で止めるの？」

「今、貴女が言ってもクロノを見つける事は出来ないわ……。飛行魔法が使えない以上……。下手をすれば貴女もクロノの二の舞になる……。まずは、あの一体のASFを解除しなければ……。」

気丈に振舞っているが、リンデイの腕が小刻みに震えていた。

母親として、直ぐにでもクロノを探しに行きたい衝動に囚われているが、提督として、この部隊の指揮官としての部分がそれを押しと止めていた。

フェイトも、そんな義母の葛藤に気付き、何もいえなくなった。

「とにかく、相手に聖闘士がいる以上、私達だけでは危険です。何人いるかも判らないし……。エイミィ、リニスさん……悪いけど直ぐにカノンさんに連絡をとって、応援に来てもらえるよう依頼してください」

「了解！」

「解りました……。カノンに連絡をとります……。」

崖から転落したクロノだったが、一命を取り留めていた。

運よく、崖から突き出ていた木の枝に引っかかり、落下のスピードが殺され、地に叩きつけられる衝撃が緩和したのだ。

さらに、その地が草花が生い茂っており、クッションの変わりになったのも幸運だった。

しかし、『^{ブラック}暗黒流星拳』……別名『黒死拳』の影響は消えてはいない。結局、死が先送りになっただけに過ぎなかった。

「ハア…ハア…ハア…こ…これまで…か…」

クロノは死を覚悟した。

しかし、天はクロノを見捨ててはいなかったようであった。

「…足音…！？だ…誰かが…近づいて…来る…」

「…その方…。怪我をしておるのか？」

一人の老人が、姿を現した。

老人はクロノの状態を見て、すぐさま駆け寄ってきた。

「これは…血が濁っておるのか…ムッ!？」

老人は、クロノをまじまじと見た。

「…な…何…か!？」

体が熱く、意識が朦朧としているクロノだったが、老人がまじまじと自分を見ているの事をいぶかしんだ。

「…わしの名はリゲル。荒療治になるが、許してくれい…」

リゲルはそう言うと、老人とは思えぬいきおいで、クロノの体に指を突き入れた。

「グッ！な…何を…」

「君の『星命点』を突き、濁った血液を抜き取る以外に、君が助かる手段はない…。君の『星命点』の数は七つ…。後は君の『小宇宙』次第じゃ…」

「…貴方は…!？」

クロノは、リゲルが『小宇宙』と口にした事に驚いた。

「君から『小宇宙』を感じる…。ならば、我ら『聖闘士』の存在を知っているのじゃろう…」

そう、このリゲルという名の老人もまた…『聖闘士』であった。

「…そうか…なにやら上が騒々しいと思っておったのじゃが…

まさかあの聖闘士の面汚し共が…ゴホッゴホッ!」

「はい…」

処置が早かったお陰で、体が完全に黒く染まる前に、クロノは『黒死拳』の影響から回復した。

リゲルが地球から^{エテン}こちらの次元世界に飛ばされたのは、今から約50年前という話である。

リゲルともう一人の聖闘士は、突如発生した次元震が原因で跳ばされてきたらしいのだ。

リゲルは次元震というモノを知らなかったが、その時の状況を聞いたクロノは次元震だと確信したのだ。

それから、この世界に来たのだが、帰るアテもなかったので、やむを得ずこの世界で生活していたらしい。

そして今から20年前、もう一人の聖闘士を事故で亡くし、彼の墓を守りながら、今まで生きてきたが、5年くらい前から不治の病に冒されてしまった。

この世界に駐留している『時空管理局、辺境自然保護隊』のドクターに診断を受けたが、結果は管理局の医術を持ってしても、延命が精一杯で完治は不可能な死病であると診断された。

ドクターは、ミッドチルダの病院に入院することを勧めてくれた。しかし、友の墓を守る事を誓っていたリゲルは、それを断り、このままこの地に骨を埋める覚悟をしていた。

それ以来、この休火山で一人、墓を守りながら生活していたのである。

「一年くらい前から、なにやら上で騒がしいと思っていたのじゃが……死を待つ身……ゴホッ……としてはどうでも良かったから放置しておいたのじゃが、『暗黒聖闘士』のクス共じゃったのなら、ゴホッゴホッ……それは失敗じゃったのう……」

正義の為の聖闘士の拳を、己の欲望の為に使う『暗黒聖闘士』は、まさしく聖闘士の面汚しである。

いかに此処がアテナの目の届かぬ世界とはいえ、いくら病んでいたとはいえ、奴らを放置していた事に忸怩の思いを抱いていた。

「戻られたかペガサス殿」

アジトに戻ったBペカサスを出迎えたこの男こそ、次元海賊『ダークホース』の首領である。

「どうやら、管理局にこのアジトをかぎつけられたようだな」

「ならば、このアジトはさっさと放棄しましょう」

ここは所詮、幾多あるアジトの一つに過ぎず、放棄すてするのに何の躊躇いもなかった。

「ここは、自然保護指定がされていますから……この山その物を爆破すれば、次元航行艦の奴らも混乱するでしょう。保護隊のベースキャン普も近くにありますが……。その混乱に乗じて……」

「逃げるのか？」

「いや、討つて出ましょう。我らにはAランクの魔導師も何人かおられますし、何よりペガサス殿が率いる『暗黒聖闘士』がおられます。あなた方6人は高ランクの魔導師が相手でも後れはとらないでしょう……。それに先程、やつかいなAAA+ランクの執務官を片付けられましたから……。ただ逃げるよりは、奴らを叩いた方が得策でしょう」

「解った。部下達を集めて来よう」

Bペガサスが退室した後、首領はこの山を爆破を部下に命じた。

「艦長！休火山が爆発しました！！」

エイミーが慌ててメインモニターに休火山が爆発を起こし、崩れていく有様がはっきりと映し出されていた。

「そんな……あの山にはまだクロノがいるのに……」

「いけない。直ぐにここに駐留している保護隊の救助を！」

「了解！」

「義母さん！クロノが……」

「あれじゃあ……もう……」

「そ……そんな……クロノ君……」

「……クロノ……」

リンディとフェイトとエイミィの表情は、絶望で染まった。

突如崩れてきた山に押しつぶれてた思ったクロノだったが……自らの無事を確認した。

「……僕は無事なのか……何故……！？……リゲルさんは……！！」

そしてクロノは見た。

上から降り注ぐ岩盤を支えているリゲルの姿を……。

「……無事かね……クロノ……」

「……はい！でもリゲルさんが……」

病に冒され、老いたとは思えぬ力で岩盤を支えるリゲルに畏敬の念を抱いた。

「クロノ……このままでは時間の問題じゃ……この老いた体では後僅かしか持ち堪えられぬ……。わしがこの岩盤を支えている内に、君だけでも脱出しなさい……」

リゲルは、そう言うつと顎で何かを指すようなしぐさをした。

「あそこの壁を破れば外に出られるじゃろう……」

「でも、僕の魔法ではあの分厚い岩壁を砕くことなんか……」

あの壁を砕くには、なのはの『ディバインバスター』級の破壊力が必要だろう。

「何を言っている。君は聖闘士の修行を受けているんじゃないか……。ならばその技を用いて砕けばよいではないか！？」

「しかし……今の弱りきった僕では……」

先程、『黒死拳』の治療の為、それなりに出血しているクロノである。

ベストの状態ではない今、あの岩壁を砕く事など出来るのか…。

「…クロノ…『小宇宙』を高めた聖闘士の拳に砕けないモノはない…そして、命ある限り『小宇宙』は無限なのじゃ…君に聖闘士の闘技を教えた者からも聞いているはずじゃ…」

リゲルの指摘に、かつてカノンから指導された事を思い出した。

「…『小宇宙』の奇跡を信じるのじゃ…」

「…はい…。わかりました…」

クロノは立ち上がり、岩壁に向かって蹴りを放つ態勢を取った。

「…燃える…僕の『小宇宙』よ…限界まで高まれ！」

今のクロノの限界値まで高まった『小宇宙』を用い、クロノは渾身の蹴りを放った。

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

生じた衝撃波で、岩盤は粉々に吹き飛んだ。

「み…見事じゃ！」

リゲルは満足し、感嘆の声を上げた。

「や…やった…あ…あれは!?!」

クロノは今、自分が砕いた壁の奥を見て驚愕した。

「そうじゃ…あれがわし…そして、君の守護星座である『オリオン星座』の白銀聖衣じゃ…」

リゲルが、クロノの『星命点』を直ぐ理解したのは、自分とクロノが同じ守護星座を持つことを感じ取ったからであった。

『クロスボツクス聖衣櫃』が開き、中から『オリオン星座』の聖衣が現れ、分解する。

「エッ!?!」

聖衣が、そのままクロノの体に装着されていった。

「…クロノ…。この聖衣と更に奥に置いてある我が友の聖衣を君に託す…。わしももう限界が近づいておる…早く脱出しなさい…」

「でも…」

「わしはもう永くない…この降って来た岩盤を支えた時、内臓破裂を起こしたようじゃ…」

第四十六話 オリオン星座の聖闘士（後書き）

アースラに襲撃をかける暗黒聖闘士達。ブラックセイント

フェイトに襲い掛かるBペガサス。

聖衣を纏ったクロノの小宇宙が炸裂する。

時空を越えた黄金の闘士

「新たな聖闘士の誕生」

君は、小宇宙を感じた事があるか！？

第四十七話 新たなる聖闘士の誕生（前書き）

今回のクロノの選択を私は正しいとも間違ってるとも思っていない
ん。

なので、この件に関する批判は受け付けませんのであしからず。

第四十七話 新たなる聖闘士の誕生

自然保護隊と現地住民の救助をしていたアースラのクルー達に、『
ダークホース』が襲撃を掛けてきた。

まず、次元空間内のアースラに強襲揚陸艦が突入してきたのだ。

アースラのシールドを破り、外壁に穴を空け、五人の黒い聖衣を纏
つた者達が乗り込んで来た。

「俺は、^{ブラック}Bユニコーン」

「私は、Bヒドラ」

「Bベアー」

「俺は、Bウルフ」

「俺は、Bライオネット」

Bペガサスの部下達……、『^{ブラックセイント}暗黒聖闘士』たちであった。

「そ…そんな…艦内に聖闘士が侵入してくるなんて……」

「ま…不味いわね……」

リンディとエイミィは動揺した。

リニスがカノンに教えてもらった話によると、『^{ブロンズセイント}暗黒聖闘士』とは
戦闘力に関しては、最下級の『^{ブロンズセイント}青銅聖闘士』と大して変わらない。

つまり、魔導師でも何とか対応できるレベルである。

しかし、それは砲撃タイプの空戦魔導師か、ヴォルケンリッターの
様な百戦錬磨か、フェイト並のスピードを誇る者に限定する。

アースラの武装隊は殆ど空戦魔導師で構成されているし、その中に
砲撃型の魔導師も存在する。

しかし、この狭い艦内の廊下では例外である。

空を飛ばない聖闘士に対して、攻撃範囲外からの砲撃が出来ない場
所では音速の動きを持つ聖闘士相手には通用しない。

それに最下級の青銅聖衣でも、その防御力は『^{バリアジャケット}防護服』以上である。

殺傷、非殺傷関わらず、攻撃がその身に届かなければ意味がないか
らである。

聖衣を砕く程の砲撃など、それこそAAAランク以上の攻撃魔法でもなければヒビ一つ入れることすら出来ないのだ。

ちなみに白銀聖衣ならば、SSランク以上、黄金聖衣に至ってはたとえSSSランクであろうともヒビ一つ入らない。

シグナム達ほどの百戦錬磨ならば、自らよりも速い相手でも、音速^{マッハ}1くらいならば対応が可能である。

現に、シグナムは自分よりも速いフェイトと、接近戦で互角以上に戦えるし、ヴィータは先のなのは撃墜事件のおり、なのはを守ると言う想いにより、実力以上の力を発揮していたとはいえ、青銅聖闘士と同格の強さを持つ『海闘士^{マリナー}』の雑兵たちの猛攻に対抗できていた。

しかし、アースラの武装隊の面々に彼女達レベルの者は流石にいない。

それほどの者がいたら、部隊の保有ランクの規定をオーバーしてしまう。

SSランクのリンディ、AAA+のクロノ、AAAのフェイト、3人の高ランク魔導師がこの部隊に所属している。

リンディは、なのはも欲しかったのだが、なのはを加えれば確実に規定オーバーになってしまい、仕方なく彼女を別の部署に渡したのだ。

最も、それもなのはの悲劇の原因の一つになってしまったが……。リンディの部下だったら、なのははあそこまで酷使されずに済んだであろうから……。

「少なくとも、艦内で彼らと戦えるのは、私とリニスさんの二人……か」

フェイトは今、外で保護隊の救助に回っている。

そのフェイトの前にも、魔導師を引き連れた暗黒聖闘士が現れていた。

Bペガサスである。

フェイトの前に、Bペガサスと『ダークホース』の首領と構成員たちが姿を現した。

しかも、首領は持っているASF発生装置により、この辺り一帯にアンチスカイフィールドASFが展開されている。

フェイト達は、飛行魔法を封じられてしまった。

先程も説明したが、聖闘士相手に陸戦で戦うのは魔導師たちにとってかなり不利である。

「…クロノをどうしたの!？」

「…先程の男か？奴ならば今頃息絶えているさ…俺の拳によって…それでなくても既に崩れた山の下敷きになっているだろうさ…」

「…ゆ…許さない!」

クロノの死を聞かされ、心が揺さぶられそうになるが、フェイトはそれを堪えた。

湧き上がる怒りは抑えられないが、それでも先日カノンに言われたとおり、動揺しては駄目と…自らに言い聞かせていた。

「フェイト……」

アルフが心配そうな顔で見つめてくるが、フェイトはアルフの頭を撫でた。

「大丈夫……。私は大丈夫だよ……」

先の執務官試験の様な醜態は晒さない。

「フツ…心配しなくても、お前も直ぐにあの男の下に送ってやる!」
フェイトとBペカサスの戦いが始まった。

アースラに侵入した『暗黒聖闘士』たちは、訓練室に誘導され、入ったとたん、リンディとリニス、そして武装隊の四方八方を囲まれた。

「撃て！」

リンディの合図に、その場の全員が暗黒聖闘士に砲撃魔法を打ち放った。

全方位からの砲撃魔法。

いかに音速の動きでも避けられない筈……。

「フツ…中々やるが…俺達聖闘士を甘く見すぎだな…」

しかし、暗黒聖闘士たちは小宇宙で障壁を張り巡らせ、この集中放火を防ぎきっていた。

無論、無傷ではないが……。

暗黒聖闘士たちは散開し、武装隊の面々に襲い掛かった。

乱戦が始まり、次から次へと武装隊が倒れていく。

死んではいないが、かなりの重症を負っているようである。

その中でリンディとリニスは健闘している。

SSランクとはいえ、やはり近接戦闘においてはリンディに聖闘士の相手は苦しかった。

リニスは、流石にフェイトの師だけあって、近接戦闘もお手のモノであったが、それでも相手の方が優勢だった。

しかし、それでも何とか戦えている。

それは、敵の攻撃を魔法で防御できる点であった。

カノン達黄金聖闘士相手には魔法の障壁は容易く貫かれてしまうのだが、彼らの攻撃は防ぐ事が可能だった。

それは、彼らの拳が音速に『近い』だけで『音速』^{マッハ}ではなかったことも上げられる。

『暗黒聖闘士』は、主に二つに分類される。

1つは、『暗黒四天王』^{ブラックフォー}の様に青銅聖闘士に匹敵する実力の持ち主たちである。

その中でもBドラゴンは当時の紫龍に「今まで闘った中でも最強」…と言わしめた程である。

もう一つは、一輝いわく「何年修行しても、青銅聖闘士にもなれなかった能無し」である。

聖衣を授かる為の試練に打ち勝てなかった者や、認めらなかった者たち……いわば「おちこぼれ」である。

この五人の暗黒聖闘士たちも、その類である。

しかし、それでも高ランクの魔導師と互角にやりあえる位の実力を有しているのだから、魔導師から見れば強敵であった。

その時、リンディたちにとって良いニュースが伝えられた。

【艦長！カノンさんが到着しました！！】

エイミーからの通信の直後、この訓練室にカノンがテレポーターションしてきたのである。

リニスがかノンに連絡をしたとき、運よく彼は本局にいた。

聖域で作ったオリブオイルを本局で営業しているレストランなどに納品していたのである。

リニスからの連絡を受けた後、カノンは直ぐにアースラに向かったのである。

本局から、この世界までは個人転送では届かない距離だったので、次元高速艇をレティに手配してもらい、個人転送が可能な所まで急いだのである。

アースラの転送ポートに転送したあと、すぐさまテレポーターションで訓練室に跳んだのであった。

「き……貴様は！？」

「ま……まさか！？」

暗黒聖闘士たちは、カノンの纏っている黄金聖衣を見て動揺した。

それを見逃すカノンではないので、問答無用で光速拳を放った。

「……うぎゃあああああああああああ　　っ！！」「」

「」

一瞬の内にズタズタにされる五人であった。

「……最初はどうなるかと思いましたが……随分とあっさり片がつきましたね……」

自分達があればほど苦戦した相手を苦もなく一蹴したカノンの実力を、既に何度目かは覚えていないが、改めて思い知ったリンディであっ

た。

「…クロノが…死んだ!？」

カノンは、エイミーにクロノが崩れた山に生き埋めになった事を、泣きながら伝えられた。

そして、現在フェイトがBペガサスと交戦中だということも……。暗くなる面々を見わたし、カノンは苦笑していた。

「……では、今、フェイトの下に向かっていているクロノの小宇宙は何なんだ？」

「…えっ!？」

管理局の魔導師の中でもトップレベルのスピードを誇るフェイトは速さの面ではBペガサスとほぼ互角であった。

ときおり入るアルフの援護もあるので、何とか凌いでいたが、流星に限界が近づいていた。

「どうやらここまでのようだな…女!」

Bペガサスは、フェイトにとどめを刺そうとしたが、その時、ここに近づいてくる小宇宙を感じとった。

「な…何!? 馬鹿な…この小宇宙は…?」

フェイトは、Bペガサスが驚愕しながら目を向けた方に視線を向けた。

そして、死んだと思っていた義兄がこちらに向かってくるのを見て、喜色を浮かべた。

「ク…クロノ!」

「…心配をかけたな…フェイト…」

『オリオン星座』の白銀聖衣を纏ったクロノが、Bペガサスと対峙

した。

「い…生きていたのか？…そ…それに…シ…白銀聖衣だと！？」

「先程は僕は聖衣を纏っていなかったから不利だったが、これで対等以上だな…Bペガサス！」

「フン！いくら白銀聖衣を纏ったからといって…貴様自身の実力が白銀聖闘士シルバーセイントとは限るまい…。もう一度、黒い死の恐怖を味わえ！

『暗黒流星拳』…！』

Bペガサスは、『暗黒流星拳』で不意打ちを仕掛けた。

しかし、クロノは流星拳を易々と躲し、Bペガサスの背後をとった。

「な…何イ…！」

「お前の技は、見せてもらった。聖闘士と同じ技は二度も通じん！」

クロノはそのまま空中で前転しながら、Bペガサスに迫った。

「うっ！」

「くらえ！『メガトン・メテオ・クラッシュ』…！」

クロノの『メガトン・メテオ・クラッシュ』が、Bペガサスの脳天に炸裂し、ぶっ飛ばした。

「ガハア…！」

Bペカサスは起き上がれず、そのまま戦闘不能に陥った。

「ペ…ペガサス殿…」

頼みの綱のBペガサスが倒され、首領は動揺し、その場を逃げようとするが、クロノが音速の動きで回り込み、ASF発生装置を奪い、停止させた。

「今だ！武装隊は残りの奴らを逮捕しろ…！」

クロノの命令を発し、その場にいた武装隊員たちが、一斉に『ダークホース』のメンバーを逮捕した。

こうして、次元海賊『ダークホース』は壊滅した。

アースラに戻ったクロノは、カノンと対面し、聖衣を身に纏った経緯を説明した。

「……………」

カノンは、難しい顔をしながらクロノを見つめていた。

フェイトがカノンに話しかけた。

「……………どうしたカノン…？」

「……………クロノ…。経緯はわかったが、お前はどうしたい。そのまま、その聖衣を受け継ぎ、『聖闘士』となるか…それともその聖衣を返上するか…？」

「……………確かに管理局員を務めながら、聖闘士になるのは難しいでしょう…。でも、僕は……………リゲルさんが託してくれたこの聖衣を受け継ぎたいと思います…」

クロノの返答を聞き、カノンはますます眉を顰めた。

「局員を辞めるとは言わん。だが……………」

「解っています…。無闇に聖闘士の力を振るってはならないのでしよう」

管理局の仕事は、管理世界の平和を守ること。

その為に、聖闘士の拳を振るうこと自体は問題はない。

しかし、それによってクロノが昇進などをしてしまうと、微妙に『私利私欲の為に拳を振るってはならない』という、掟に反してしまうのである。

以前、カノンは沙織から、正しい行い限定で、糧を得るために聖闘士の拳を振るう許可を貰っていたが、昇進ともなれば別である。

今回は、聖衣を纏ったとはいえ、まだ正式な聖闘士と認められていないので、大目に見れるが……………次からはそうはいかない。

クロノが、聖衣を返上すれば問題はない。

聖闘士にさえならなければ、アテナの管理外である地球エースの外の世界のことなので、問題はないのだが、聖衣を受け継ぐ＝正式な聖闘士となる…であるため、掟は適用されるのである。

と、そこでリンディが助け舟を出した。

「一応、前から決まっていることなのですが……もう直ぐ私は『アースラ』の艦長職を降り、クロノが提督に昇進して、館長職を引き継ぐことになっています。流石に艦長ともなれば、前線に出る機会は減りますから……そこまで問題にはならないと思いますが……」

「……もう一つの条件がある。聖闘士になる以上……アテナに対し忠誠を誓ってもらわなくてはならん……。例え、会った事が無かろうともな……。お前は管理局という組織に忠誠を誓っているだろうが……アテナに忠誠を誓う以上……管理局よりもこちらへの忠誠を優先してもらおうことになる……」

つまり、管理局の命令よりも、聖闘士の務めを優先しなければならぬのだ。

ある意味、管理局に対しての『獅子身中の虫』になるのである。

「……僕は、管理局の正義と聖闘士の正義はそれ程、大差ないと思っています……この次元世界に害となる者たちを取り締まることと、この世界に蔓延る邪悪を討つ聖闘士の使命。その二つが相反するとき……それは管理局が『邪悪』になるという事です……。ならば……ただ上からの命令に諾々と従うのが正しいとは思えません。管理局がその理念を完全に捨て去り、世界の支配を企むならば……それに組するするもりはありません。さっさと辞表を出して、その野望を阻止する為、聖闘士として戦うだけです……」

管理局が掲げるお題目。

この次元世界の秩序と平和を護る……という理念が無くなるのなら、そんな組織に従う理由などない……。

ただ盲目的に管理局に従うのではなく、間違った道に進もうとするのを止める……その覚悟はある。

もちろん、その逆も……。

有り得ないとは思いますが、カノン達黄金聖闘士たちが道を間違っようならば……勝ち目が無くとも、それを正す為に敵対する覚悟も出来ていた。

その事を伝えると、カノンは苦笑した。

「生意気を抜かすな！……だが、その気概は大事だ……。俺が再び、歩む道を間違うようなら……」

「はい。でも、大丈夫だと思いますけどね……。カノンさんは決してもう道を間違えない……。僕はそう信じています……」

「フツ……さて、順番が前後してしまっただが……。『アテナ』はクロノを新たな聖闘士と認めた。ここに聖闘士の証である聖衣を授ける……！！」

指導者である童虎が不在である為、黄金聖闘士であり、クロノの師であるカノンが、教皇の代理でクロノに聖闘士の資格を授けた。

『オリオン星座』の白銀聖闘士、クロノが誕生した。

第四十七話 新たなる聖闘士の誕生（後書き）

Bペガサス達が次元を越えたのは、カノン達とは別の事情だった。寛いでいたカノン達にレティが団体を連れて訪問してきた。

彼らの目的は……。

時空を越えた黄金の闘士

「聖闘士候補生」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第四十八話 聖闘士候補生

バシヤア!!

「冷た!」

気絶していたBペガサスは、頭から水をぶっ掛けられ目を覚ました。

「気が付いたか…」

声のする方に視線を向けると、黄金の聖衣を身に纏った3人の男が視えた。

「…ゴ…黄金聖闘士!？」

「あの時、貴方を放置したのは失敗だったかも知れません…」

ムウが、冷たい表情でBペガサスを睨んでいた。

星矢と『リザド蜥蜴星座』のミスティの戦いを見届けた後、ムウは貴鬼と共にジャミールに帰っていった。

シルバースaint白銀聖闘士たちは、未だに自分が仕掛けた幻惑に気付かず、身代わりになったブラックSaint暗黒聖闘士を紫龍達だと思い込んでいた。

その時、唯一身代わりに使わなかったBペガサスにとどめを刺しておくべきだったのかもしれない。

あの時、あんな所で死なせるには惜しい…そんな思いを抱かなかつたら……。

そうすれば、今回の事件はここまでの被害が出なかったかも知れないのだ。

Bドラゴンの様に、友情に目覚めた男がいたが為に、情けをかけてしまった。

生き残らせるのなら、Bドラゴンにすべきだったと思う。

Bドラゴンには、伏龍という名の兄が居て、その男は既に絶命していたので、富士の地底にそのままだった。

その伏龍を紫龍の身代わりに立てて、Bドラゴンは助けるべきだった。

まあ、状況的に無理だったのだが……。

「まあ待てムウ……。貴様に聞きたいことがある……。お前達はどうかして、こちら側に来た？」

アイオリアの問いに、Bペガサスは答えない。

「黙秘か……。ならば仕方がないな……。お前の口を割らせるなど造作もないし……」

カノンがBペガサスの前に立った。

「……拷問でもするのか……。だが無駄だ。確かに貴様ら黄金聖闘士に比べれば、俺など雑魚に過ぎないだろう。だが、それでも俺は『暗黒聖闘士』最強の『暗黒四天王』^{ブラックフォー}の一人……。拷問などに屈しはしない……」

カノンは感心した。

聖闘士のおちこぼれである暗黒聖闘士のこの男にも、それなりの矜持が存在するようだ。

かつて首領と仰いだジャンゴ……そして、一輝以外に頭を垂れるつもりはない。

『ダークホース』の首領にも、自分の力を奴に貸していたに過ぎず、その軍門に下っていたわけではないのだ。

「お前達、暗黒聖闘士は確か、かつて一輝の配下だったとの事だな……。ならば一輝の『鳳凰幻魔拳』の事は当然知っているな……」

『鳳凰幻魔拳』。

心に潜む恐怖を増幅し、恐ろしい幻影を見せて精神を破壊する『伝説の魔拳』である。

「その幻魔拳と同じく、『伝説の魔拳』と呼ばれる拳を俺も持っている……。としても……。まだ黙秘をするつもりか？」

幻魔拳の恐ろしさを知っているBペガサスの顔が蒼褪めた。

かつて、その魔拳を受けたことのあるアイオリアも嫌そうな顔になる。

「……。『幻朧魔皇拳』……。相手の脳を支配する『伝説の魔拳』だ……。目の前で人が一人死なぬ限り、その洗脳が解けることはない。お前が素直に吐かないなら、この魔拳で洗脳すれば済む事だ。自害しよ

うとしても無駄だ。お前が自分の命を絶つ前に、お前に魔拳を打ち込むことができるからな……」

音速^{マッハ}1のスピードしか持たないBペガサスよりも、光速の動きを持つカノンの方が速い。

「洗脳され、強制的に喋らせられるより、自らの意思で口にした方がいいんじゃないか？」

Bペガサスも、流石に観念した。

洗脳されるよりはマシ……と、判断したようである。

『デスクイーン島』。

第97管理外世界、『地球^{テラ}』には存在せず、『地球^{エデン}』にのみ存在する島。

赤道直下、南太平洋に浮かぶこの島は、大地は熱く焼け爛れ、一年中火の雨が降り注ぐ灼熱の地獄。

この世で最も地獄に近い島……それが、デスクイーン島である。

その過酷な環境ゆえか、デスクイーン島とその周辺の島の住人は心が荒んでいる。

一輝が愛した、瞬と瓜二つの容姿の少女　デスクイーン島に咲いた一輪の花……エスメラルダが唯一の例外だった。

この島は、『暗黒聖衣』が発見された島でもあり、そして、アテナが暗黒聖闘士を封じ込めた場所でもあった。

一輝の師、ギルティはその暗黒聖闘士の封印を護る戦士であり、封印を破ろうとする暗黒聖闘士と戦い続ける役目を担っていたが、そのギルティは一輝に殺され、その一輝が暗黒聖闘士を掌握した事で、その封印は解かれた。

海皇ホセイドンが起こした『世界規模の水害』の猛威は、当然、このデスクイーン島にも襲い掛かっていた。

この島の環境を思えば、この島の住人達がとても貧しいのは想像がつくであろう。

現に、デスクイーン島とその周辺の島々の娘は、七歳になると、数少ない農家に奴隷として売られるのである。

そうしなければ、親兄弟が食べていけないくらい貧しいのである。

エスメラルダもその一人であり、たった小麦粉三袋で売られたのだ。それ程貧しい島が、水害に耐えられる筈もなく、海皇の猛威はこの島に多大な被害を齎した。

数少ない農家の畑や家畜は全滅し、ただでさえ少ない食料が失われってしまったのである。

元々、あまり収穫がない島なので、暗黒聖闘士たちの主食は魚なのだ。やはり魚だけというのも……。遂に、彼らは強攻策に出たのである。

彼らの首領となった一輝は、当初は、自分達兄弟を不幸にした、実父である城戸光政に対する憎悪ゆえに、己の中の正義を無理矢理心の奥底に仕舞い込もうとしていたが、星矢との戦いを経て過ちを悟り、配下となつた暗黒聖闘士たちにも、悪事を禁じた。

彼らは、一輝の強さに惹かれ、彼を首領と仰ぎ、その命を預けている。

例え一輝の心境が変化したからといって、反旗を翻したわけではないので、黙って指示に従っていたのだが、流石にこの状況ではそれも言っていられなかった。

幸いというか、一輝は海皇との聖戦……いや、十二宮の戦い以降、島には戻ってきていないので、彼らは独自の判断で、他の所から物資を略奪してくることにした。

一輝にバレたら、タダではすまないだろうが……。

しかし、『世界規模な水害』は各地に多大な被害を齎している。

デスクイーン島に近い、オーストラリア、ニュージージーランド、ハワ

イ島、グアム島なども、似たようなモノである。

そこで、BペガサスはBユニコーンら五人を連れて、ユーラシア大陸を目指した。

日本を狙わなかったのは、日本だと流星に一輝にバレる可能性が高いからである。

ユーラシア大陸に上陸した六人は、比較的バレそうにない所で、略奪をしようと考えていた。

略奪に成功した後、ほとぼりが冷めるまで身を隠す場所を探していた彼らは、巨塔が建っているだけで、人があまり近づかない場所を見付け、その場所を散策していた時である。

突如、地震が起こり、巨塔から108つの流星が飛び出したのである。

その影響で空間が裂け、その歪みに呑み込まれ、気が付いたら見知らぬ場所いたのである。

色々、調査していく内に、そこが自分達がいた世界とは違う、別世界であることを知った。

戻る方法が解らないまま、『ダークホース』と知り合い、成り行きで彼らと行動を共にする様になったのである。

「その…巨塔があるという場所は何処ですか？」

ムウは、地球の世界地図を広げ、Bペガサスに場所を問いただした。Bペガサスが指した場所、中国の廬山から西に千キロの地点であった。

「……ここは、老師が監視していた二百数十年前にアテナが『108の魔星』を封じた場所……」

「成る程…時期から見て、こいつらは『108の魔星』が復活した時に、その場所に居合わせていたのか……」

「そして、『108の魔星』の復活の際に、恐らく『次元震』とや

らが発生し、それに巻き込まれた……という所か……」

「俺達のように『時の神』^{クロノス}の気紛れで、次元を越えたわけではないようだな……」

暗黒聖闘士たちが、次元を越えたのは……いくなればまったくの偶然であつた。

悪い事は出来ないモノである。

「……それで、このBペガサスをどう処理しますか？」

「……確か他の五人は、既に死んでいるんだよな……？」

「ああ。俺の光速拳でくたばつた」

アースラで、カノンがあの人五人に光速拳を放つた時に葬っていた。

元々、カノンは管理局の掲げる『不殺』に付き合つつもりもさらさらなかつたので、確実に仕留めていたのである。

殺すには惜しい……そんな思いすらも、あの五人には抱かなかつたからでもあるが……。

「フン。殺すならさつさと殺せ！」

Bペガサスも、潔いというか、自暴自棄なのか？

「しかし、コイツは一輝の配下だから……。戦いの場でもなく、それ以外で勝手に処刑する……というの……な」

一輝の名前が出たことで、Bペガサスに動揺が走つた。

先程の威勢は何処へやら……完全に萎縮していた。

「……お前、もしかして……俺達に葬られるよりも、一輝の怒りに触れることを恐れて、黙秘していたのか？」

「……っつ！」

Bペガサスの態度を見て、カノンは確信した。

一輝の幻魔拳はカノンも喰らつたことがあるので、あの拳の恐ろしさは十分知っている。

先程の同じ様に伝説の魔拳と恐れられる『幻隴魔皇拳』に対するBペガサスの恐れようから見て、こいつは一輝の幻魔拳を喰らつことを恐れているようであつた。

確かに普通に殺されるよりも恐ろしいかも知れない。

暗黒聖闘士は、『フェニックス鳳凰星座』の聖衣に秘められた力がある程度、知
っているのだろう。

自己修復と次元移動。

Bペガサスもそれを知っているので、一輝がこちらに来て、自分達
が一輝の命令に背いた事を知れば……。

一輝の性格を考えれば、管理局と付き合う様な奴ではないが……黄
金聖闘士とは接触するかも知れない。

その時、自分の事を知らされれば……待っているのは一輝の制裁。
一輝の怒りに触れるくらいなら、黄金聖闘士に殺される方がマシ。
Bペガサスは、そう考えていたのだ。

「……如何に強かるうが、『黄金』の俺達よりも、『ブロンズ青銅』の一輝
の方が畏怖されているとは……」

「……妙に納得出来るのも、嫌ですね」

アイオリアとムウも苦笑しながらも、微妙にプライドが傷ついた。

しばらくして、寛ぎながら茶を飲んでいたカノンとアイオリアに口
ツサが姿を見せた。

「どうしたロツサ。今日の修行は休みだと言ったはずだが？」

昨日の修行で死に掛けたので、流石に今日は休ませていたのである。
普段は優しいアイオリアだが、修行に関しては一切手抜きしないの
で、ロツサは何度も死線を彷徨っていた。

「……僕も流石に今日はゆっくりと休みたかったですけど……お
客さんが来てますよ」

「客？」

「ええ。レティ・ロウラン提督です……。何やら団体さんを引き連
れてますけど……」

レティが何のようなのか……。

しかも団体を連れて……？

「何だと？聖闘士の修行を受けたいだと……こいつらが…か！？」
レティがつれてきた者たちは、聖闘士志望の少年達だった。
総勢、248名。

「ええ。彼らは魔力ランクがE以下なの…。士官学校はおろか、空
隊、陸士部隊の養成学校にも入れなかったのよ」

「別に管理局は、魔力がなくても入れるだろう。後方勤務ならば…
…。それに聞いた話では管理局の首都防衛隊のトップは魔法が使え
ないというではないか？」

地上本部を掌握しているレジアス・ゲイズ中將は魔導師ではなく、
一般人である。

しかし、彼は地上のトップになっている。

魔法至上主義であるミッド、そして管理局でも珍しい部類の人間で
ある。

最も、並大抵の苦勞ではなかったであろうが……。

「私もそう言ったんだけど……。自分達は強くなりたい…と言って
諦めてくれないのよ…」

男というモノは、どのような世界においても強くなる事を望むモノ
なのかも知れなかった。

「そもそも、俺達『聖闘士』のことは、管理局でもあまり知られて
いなかったのでは？」

「人の口に鍵を掛けることは出来ない……。貴方達の存在は、既に
噂になっているわ…」

いわく、聖闘士と呼ばれる者は魔力が無くても、魔導師を上回る強
さを持つ……と。

実際は、カノンもアイオリアもかなり高ランクの魔力を持っている
が、確かに魔力など無くても、戦闘では魔導師に負ける要素はほと
んどない。

魔力を持たないムウも、『サイコキネシス念動力』という『レアスキル』を持っている。

レティとしては、彼らを聖闘士のするのは反対であった。親友のリンディの息子であるクロノが聖闘士の修行していたのは知っている。

そのクロノから、聖闘士の修行の内容を聞かされているからである。管理局の士官学校および空士、陸士の訓練校においても、学生達の安全は配慮している。

しかし、聖闘士の修行は聞く限りにおいても、死んでも止む無しと言えるほどである。

実はクロノも何度も死に掛けているし、ユーノもロツサも同様である。

先も言ったが、昨日、ロツサは死に掛けた。

レティも、戦いに死は付き物である事くらいは理解している。

しかし……それでも、死ぬ確立が高い聖闘士の修行を紹介するのは気が引けるのである。

いくら説得しても、彼らの意思は変わらなかったため、止む無く紹介する事にしたのである。

カノンは、レティが連れてきた少年達を見渡し、全員に拳を放った。光速とは程遠いスピードで放った拳であったが、皆、避けられず吹っ飛ばされた。

「……お前達が聖闘士になりたいというのなら、修行を受けさせる。しかし、レティからも聞かされたであろうが、俺達はお前達が死んでも気にせん。死ぬなら所詮、その程度に過ぎなかったかと思わん。建前だと思っていた奴は辞めておけ。三日の猶予を与える。それでも聖闘士になりたいと思う奴は残れ……。自信がない者は帰れ……。」

最初に問答無用で殴ったのは、死ぬ可能性のことを悟らせるためである。

手加減はしたが、それでもかなりの威力で拳を放ったのだ。

彼らには、相当な激痛を与えた。
修行では、この程度では済まんという意味を表したのである。

三日後、248名いた候補者達は、その数を154名に減らしていた。

やはり、甘く考えていた者がかなり居たようである。
しかし、カノン達が思ったよりも多くの人間が残った。

「……よくまあ、これだけの人間が残ったものだな」

「レテイ。彼らの家族に伝えておけ。お前らの息子達は確かに預かった……が、命の保障はしない……。死んだからと言って、後から文句を言ってきたも叩き出す……とな。それが嫌なら、一週間以内に連れ帰れ……とな」

そして、更に数が減る。

この一週間のうちに、家族が首に縄を付けてでも連れ帰った人数は22名。

それでも132名が残った。

今、聖域に存在する聖衣は、白銀聖衣2体、青銅聖衣2体。

そして、この聖域で作られていた、星座をモチーフにしない聖衣が40体である。

つまり、ユーノとロツサを含め、この中から聖闘士になれるのは4人である。

いや、それ以前に何人生き残れるのか……。

それは、カノン達にも分からなかった。

第四十八話 聖闘士候補生（後書き）

スカリエッツィの生み出した理論は、様々な不幸を呼び起こしていた。

その理論によって生み出された少年の悲劇。

そして、その理論によって蘇りし、恐るべき敵。

時空を越えた黄金の闘士

「プロジェクトF」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第四十九話 プロジェクトF（前書き）

今回は、原作設定からかなり掛け離れます。

第四十九話 プロジェクトF

新暦0068年。

フエイトは、サンクチュアリ聖域のカノンを訪ねてきた。本局や『地球』テラで会う事は多いが、聖域に赴くのは久しぶりであった。

聖域の周りは、以前来た時よりも畑や牧場が増え、そこで農業を営む者達も増えていた。

そして、聖域に足を踏み入れた時、辺りから様々な悲鳴が木霊していた。

「な……何!？」

悲鳴がする方に近づくと、何人かの少年達が呻き声を上げながら寝転がっていた。

「やあ、フエイト……」

「あつ……ロツサ……。何……この人達？」

その中でただ一人、自分の足で立っているロツサにこの惨状の理由を聞いた。

「ああ。彼らが新しく来た聖闘士候補生達だよ……。さっきまでカノンさんにシゴかれていたのさ……」

その時、新たな悲鳴が響き渡った。

「今は、別の連中がシゴかれているけど……」

カノンが候補生達に課す修行……そもそも聖闘士の修行は、人道的とはとても言えない。

ここに呻いている者達は、まだマシな方で、既に何人かは半殺しになっている。

「……いくらなんでもやり過ぎなんじゃ……?」

「この程度で死ぬようなら、所詮其処までだよ……」

管理局員でありながら、あっさりとそう答えるロツサの目はヤバイ。今まで、アイオリアから受けた指導を思い出し、遠くの世界に旅立

ちそうな目である。

当時は辛かった管理局の士官学校時代のシゴキ等……この生き地獄に比べれば快適だったなあ……と、ブツブツ呟いている。

「ロツサ」。戻ってきて……ッ」

カノンは、フェイトが訪ねてきたので、指導をアイオリアと代わってもらった。

「……お前が聖域に来るのは、執務官試験合格の報告の時以来だな……。どうしたんだ……急に？」

フェイトは二度目の執務官試験に見事合格し、執務官となっていた。なのほもりハビリを終え、現場に復帰していた。

「うん……。実はね……私の名前の元となった……母さんが私を作った技術の事……覚えている？」

「……確か……『プロジェクトF・A・T・E』だったか？」

「その技術の理論を作り上げた人間の名前が分かったの……」

広域次元犯罪者……ジェル・スカリエッティ……

紛れも無い天才であり、管理局で指名手配されているにも関わらず、一度も逮捕されたことがない。

「人の命を弄ぶ……悪魔の科学者……」

フェイトは、嫌悪を込めてそう吐き捨てた。

彼女は知らない。

スカリエッティが、黄金聖闘士のミロとシャカに助けられ、自らのこれまでの行いを悔い、改心している事を……。

「……確かに、人の命を弄ぶ事は許しがたいことだが……しかし、その男がいなければ、お前は生まれることもなく、俺やなのは達とも出会わなかっただろう……。その点だけは、奴に感謝してもいいんじゃないのか？」

なんだかんだ言いながら、カノンはフェイト達と知り合った事に関

しては、素直に喜んでいた。

フェイトは、自分達が出会えたことを喜んでいるカノンを見て、確かにその点だけは、あの男に感謝しても良いのではないかと、思った。

カノンと出会えなかった自分など…今では想像もしたくないし、出来ない。

彼という存在は、フェイトにとってそこまで大きくなっているのだから……。

でも、命を弄ぶことだけは許せないのです、やはり、いつかジェイル・スカリエツィをこの手で逮捕する事を心に誓った。

「…そういえばカノン…。あのBペガサスってというのはまだ牢にいるの？」

Bペガサスは結局、この聖域の牢に幽閉されている。

管理局の収容施設では、Bペガサスを拘束し続けるのは、難しいと判断され、処遇に関してはカノン達に一任すると、管理局の方から懇願されたからである。

その牢は、罪を犯した聖闘士を幽閉する為に作られた牢で、聖域の区画それぞれに数個存在している。

当然、本来の聖域の一部であったこの地にも存在していた。

『青銅』^{ブロンズ} や 『暗黒』^{ブラック} 程度の聖闘士では脱出できない牢で、『白銀』^{シルバー}

クラスでギリギリ脱出出来るか出来ないか……と、言われる程の堅牢さである。

しかし、黄金聖闘士^{ゴールドセイント}にとってはたいしたモノでもない。

『黄金』でも脱出不可能なら、かつてサガもカノンを神の許し無しでは脱出が不可能と云われる『スニオン岬の岩牢』ではなく、こちらに幽閉しただろうし……。

Bペカサスの処遇に関しては、とりあえず、アイオリアが彼奴の根性を叩き直している最中である。

カノンも、昔の自分の事を思えば、直ぐに断罪する気にはなれなかった。

自分の様に、改心することが出来るのなら、チャンスを与えてもい
いだろう…と、主張したのだ。
もしも、Bペガサスにとつての首領^トである一輝が、気紛れにこつち
に来たら、突き出すつもりである……。
一輝が来るまでに、Bペガサスが改心していなければ……の話だが
…。

少年自身は、裕福な家庭で育った普通の少年だった。

しかし少年は、普通の生まれではなかった。

少年の名の本来の持ち主は、既にこの世を去っていた。

少年は、クローンだった。

少年は、攫われた。

少年の両親は、必死に抵抗した。

両親は、真実を突きつけられると、抵抗を止め、諦めてしまった。

連れ去られる途中、少年は、隙について逃げだした。

森の中を、必死に逃げ回った。

追跡者は、必死に追いかけた。

やっと手に入れた研究材料を失うわけにはいかなかった。

「もう逃げられんぞ…。いい加減覚悟を決めろ！」

「さあ、連れ戻して、お仕置きだ！」

少年は、追い詰められた。

追跡者達の手が、少年に伸びたその時、一人の青年が姿を現した。

「……大の大人が多勢で一人の少年を追い詰めるとは……貴様らは
何者だ」

青年は、少年に手を伸ばしていた黒服の男を殴り飛ばした。

「何だね君は？邪魔しないで貰いたい」

「どう見ても、貴様らがこの幼い少年に危害を加えようとしている
風にしか見えん…」

「それは誤解です。この子が悪戯をして、皆に迷惑をかけたので探していたです」

青年は、男の主張が正しいか少年に問うた。
少年は首を横に振った。

「この少年は違うと言っておるが……？」

「まったく……。この子は相変わらずの嘔吐きですね。どうかその子をお引き渡し下さい……」

「嘔吐きはそちらであろう……。わしはこれでも人を見る目はあるつもりじゃ……。どう見てもお前達の方が悪人に見えるのじゃが……」

如何にも自分はマッドな科学者ですといった白衣を着た男と、ダークスーツにサングラスという黒ずくめの人相の悪そうな男達。

客観的に見れば、堅気の間人には見えなかった。

「我々は、特殊機関の間人です。その少年は重要な参考人なので……。どうか御理解の上、お引き取りを……」

男は焦りを覚えていた。

確かに、自分達の姿は一般人から見れば怪しいだろう。

しかし、何処かの組織の間人と思わせれば、大抵は引き下がるはずであった。

この青年からは、魔力反応がないので、魔導師では無いのは分かっていた。

魔力があっても、目覚めていないのは確実である。

管理局の間人にも見えない。

一般人が、厄介事に関わるとは思えなかった。

しかし、青年は引き下がろうとしなかった。

「……ならば『時空管理局』に問う事にしよう。わしは管理局の『三提督』と懇意の間柄じゃ……。彼らに聞けば分かるじゃろう」

青年の一言に、黒服達は一斉に襲い掛かってきた。

管理局の『三提督』。

時空管理局黎明期の功労者として伝説になっている。

レオーネ・フィルス法務顧問相談役。

ラルゴ・キール武装隊荣誉元帥。

ミゼット・クローベル本局統幕議長。

彼らの知己ともなれば、自分達が違法な研究を行っている事がバレるのは不味い。

そう考え、口封じに走ったのである。

しかし、相手が悪かった。

その青年の指が光ったと同時に、黒服達は吹き飛ばされたのである。魔力が計測出来なかったので、魔法でないことは分かったが、それだけに青年が不気味な存在である事が分かり、白衣の男は逃げ出すとするが、あっさりと青年に捕まった。

「さて……お前達が何者なのか…白状してもらおうか」

二、三発殴られ。男はあっさりと白状した。

自分達は、違法な研究をしている組織である事を……。

青年は、管理局の知己に連絡を取り、行動に移った。

違法な研究施設は10分と経たない内に壊滅した。

青年は、時空管理局のリンディ・ハラウン提督に事後処理を任せた。

「……わしの名前は童虎。お主の名は？」

青年 『天秤座』^{ライブラ}の童虎が少年の名前を問う。

「……エリオ……。エリオ・モンディアル……」

童虎が三提督と顔を合わせたのは、ムウの紹介でリンディに旅の便宜を図ってもらったときであった。

三提督は、聖闘士の実質的な指導者である童虎に会談を求めてきたのである。

童虎も、それに快く応じ……意気投合したのである。

正直、童虎もカノン達と同様、『時空管理局』という組織を完全に信頼を置いている訳ではない。

しかし、三提督と呼ばれる彼ら個人は信用しても良い感じた。既に名誉職に過ぎないが、未だに影響力の強いこの3人の人となり
に好感を持ったのである。

三提督の方も同様であった。

目の前の青年は、聞けば見た目は20歳くらいだが、実年齢は自分
達はおるか『最高評議会』のメンバーよりも年上である。

話をしていく内に、三提督は童虎に心酔していった。

童虎の人となりを知るうちに、彼の偉大さを感じたのである。

彼らは、『管理局』が道を誤る可能性があることに気付いていた。

しかし、彼ら聖闘士の存在が、それらを救ってくれるかも知れない
と感じたのであった。

会談が終わり、童虎と三提督の間に深い信頼が生まれたのであった。

現場検証に来た局員は、エリオから事情を聞こうとしたが、童虎と
彼の要請を受けて駆けつけたリンディ・ハラオウンの一喝で引き下
がった。

「如何に能力があれば、子供であっても一人前と扱われる『管理局』
でも、流石に三歳の子供に証言能力を認めてないでしょう！」

「その三歳の子供に高圧的に尋問するとは何事か！」

ダブルで説教されて、涙目になる局員であった。

「……………」

エリオは、呆然と目の前の状況を見つめていた。

「……………なんと言うことじゃ……………」

童虎も、呆然としていた。

エリオはリンディの計らいで、取り調べされる事も無く、童虎に保

護されながら家に戻ってきた。

しかし、そこで待っていたのは……両親の死であった。もう直ぐ家に到着すると思った矢先、怪しい影を見つけた童虎がそれを捕らえた。

その正体は、エリオを攫った組織の人間であった。

彼は、自分達の組織が童虎によって壊滅した事を知らず、与えられた命令を実行した帰りであった。

童虎が彼を締め上げ、吐かせた内容にエリオは顔を蒼くした。

彼に与えられた命令は、『口封じ』であった。

保身に走り、息子の劣化コピー（この発現に童虎の更なる怒りを買、後でボコられる）を売り渡したとはいえ、念には念を入れ、エリオの両親を暗殺したのであった。

童虎が駆けつけた時、エリオの両親が食堂で血を吐いて倒れていた。どうやら、料理に毒を盛られたようだ。

父親の方は既に絶命しており、まだ意識のあった母親の方も時間の問題であった。

「ママ」

「エ……エリオ……」

死に逝こうとする母親は、エリオの見て、涙を流した。

「……ご……ゴメ……ンネ……エリオ……。馬鹿な……パパとマ……マ……を……許……」

言い切ることも出来ず、母親も息を引き取った。

「マ……ママ　　ッ」

幼子の絶叫が、屋敷全体に響き渡った。

五つの培養液の詰まったカプセルの中に、それぞれ眠りについている遺体があった。

その場所から離れた部屋に、その遺体と同じ顔をした五人の青年が

眠っていた。

「…………準備は出来たか『海女王』?」

「御意!」

『海女王』は『海龍』に答えながら、眠っている五人の横にある宝玉が埋め込まれた機具に視線を向けていた。

「…………ムネモシユネの神具…………役立つ時が来たな」

そう、この宝玉こそ、2000年前に『地球』から他の次元世界に跳ばされた『楯座』のイージスたちと共に、この世界にやって来た巫女が持ち逃げした『記憶』を司る女神ムネモシユネの力を宿した神具である。

紆余曲折を経て、この『神具』は『海龍』の手に渡ったのであった。カノンの危惧は、見事に的を射っていたのである。

この神具に宿りし力は記憶の再生。

そして、神具が埋め込まれし機具は、記憶の転写装置である。

プレシア・テストロッサがフェイトに『アリシア』の記憶を転写する為に用いた物を改造した物だ。

「どうやら…お目覚めになられたようです」

『海女王』の言った通り、眠っていた五人が目を覚まし、起き上がった。

「…………気分はどうか？」

「…………何故…、我々は…生きているのだ?」

五人は不思議に思った。

自分達は、間違いなく…………海の底にある神殿で戦い、敗れ、死んだはず…………。

「確かに…お前達のオリジナルは死んだ…………」

『海龍』は彼らに真実を教えた。

彼らは、『海賊』のフックがプレシア・テストロッサのところから持ち出した『プロジェクトF』によって作られた事を。

そして、ムネモシユネの神具を用い、オリジナルの能力を完全に受け継いだ事を…。

オリジナルの記憶は受け継いだが、性格は完全に一致していない事を…。

あと、必要のない記憶は与えていない事を…。

「しかし、お前達の中には『海皇』の理想への想いは有る筈だ。お前達の『オリジナル』の故郷たる世界では実現出来なかったが…：それを『此方の世界』で行う為にお前達は作られた…。此方の世界も『地球』と似たようなモノだ」

確かに地球の様な大地を汚染させてはいない。管理局は『魔法』をクリーンな力と言っている。

しかし、その魔法によって生み出された『古代遺産』ロストロギアによって『次元断層』を引き起こし滅びてしまった『世界』も存在するのだ。

何処がクリーンな力だ！

世界そのものを滅亡させているではないか！

やはり、地球の人間たちと同じ様に他の次元世界の人間も穢れきっている。

「そのような穢れきった人間を肅清し、選ばれた者達による『理想郷』を築くという『海皇』の崇高なる使命の為に私はお前達を蘇らせた」

『海龍』の言葉を五人は黙って聞いていた。

「確かにコピーに過ぎないお前達だが、オリジナルが果たせなかったこの偉業を果たした時…：お前達はオリジナルを越える事が出来るだろう。その意思があるのなら、お前達の『鱗衣』を纏い、私と共に来い！」

そう言うと『海龍』はそれぞれの『鱗衣』を彼らの目の前に置いた。破損していた『鱗衣』は、完全に修復されていた。

五人は、おもむろにそれを纏った。

「…『海馬』のバイアン！」

「…『スキュラ』のイオ！」

「…『クリュサオル』のクリシュナ！」

「…『リユムナデス』のカーサ！」
「…『クラーケン』のアイザック！」
「…『我ら五人。オリジナルが果たせなかった『海皇』ポセイドン様の理想をこの地で果たす為に、そして『オリジナル』を越える為に、『海龍』と共に戦うことを誓います！」「」「」

「どうやら、上手くいきましたね」

『海女王』がほくそ笑んだ。

「出来れば、『海魔女』様のクローンも欲しかったのですが…」

「やむを得まい。『海魔女』は先の聖戦を生き残り、此方の世界に流されて来なかったのだから…」

『海魔女』のソレント以外の『海闘士』は、海底神殿崩壊の時に発生した次元震によって、『地球』から次元世界に跳ばされてしまった。

星矢達に倒された五人の『海將軍』の遺体も共に…。

「…それにしても、『海皇』の理想…ですか？」

「…『海闘士』の力の源は、『海皇』への忠義…。如何に『神具』によってオリジナルの能力を継承しても、彼奴らの能力を完全に引き出すにはそれが必要だから…な。そして、『海皇』の名の下にこの『海龍』が全ての全権を持ち、『海闘士』たちを掌握する…。そして、次元世界を征服してくれるわ！この『海龍』が全ての次元世界を支配する『神』となるのだ！！ウワーッハッハッハッ
ッ

何のことはない。

結局この男も、かつてのカノンと同じ穴のムジナであった。

第四十九話 プロジェクトF（後書き）

管理局地上本部のレジアス・ゲイズが聖闘士に接触してきた。

候補生達が聖闘士になったら、地上本部の所属させると要請するレジアス。

それに対し、アイオリアの返答は？

時空を越えた黄金の闘士

「聖闘士の掟」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十話 聖闘士の掟（前書き）

今回で五十話。

けっこう長くなりました。

今後もよろしくお願いします。

第五十話 聖闘士の掟

両親を失ったエリオは、童虎に引き取られることになった。

最初は、管理局本局の特別保護施設かフェイトの様にリンディが引き取るはずだったが、童虎が引き取ると言い出したのだ。

検査の結果、エリオにはリンカーコアが検出された。

万年人手不足の管理局の保護施設に入れるという事は、そのまま『魔導師』としての道を強要されかねない。

また、ハラウン家に預けるのも問題である。

家族全員が局員なので、忙しくてエリオの面倒を見る者がいない。次元航行艦に乗っている為に、長期的に家を空けるリンディとクロノ。

学校と管理局の二足の草鞋を履いているフェイト。

いくらなんでも、アルフでは一人で幼子の面倒を見る事は出来ない。リンディが、高町家の人たちがいるから大丈夫！と抜かしたとき、童虎の拳骨が叩き込まれた。

「自分で面倒を見れないなら、引き取るなどと抜かすな、馬鹿者！」

と、いうわけで童虎が引き取ることにしたのだ。

聖闘士の養成ならともかく、純粋な育児に関しては、他の黄金聖闘士はアテにならないので、却下。

幸いながら、童虎は聖闘士の養成とは別に、育児も経験がある。

最も、童虎が育てたのは女の子なので、男の子を育てるのは初めてだが……。

それでも、自分で面倒を見る暇がない者に任せるよりははるかにマシである。

引き取ると言った者が、引き取られた者を別の人間に任せる。

引き取られた者に、「自分は厄介者」という思いを抱かせる可能性がある。

下手をすれば、エリオは「第二のなのは」に成りかねない。なのはの事をムウから聞いた童虎がリンディにそう告げると、リンディもその可能性に気付き、童虎に任せることにした。ちなみに、エリオの両親が残した遺産は、財産管理の専門家に一任した。

正直、今のエリオには手に余るので、エリオが一人前になるまでは、その専門家が管理することとなった。

勿論、それを着用してしまうような悪徳な専門家もいるのだが、そこからへんは信用の置ける者を選んだのはいうまでもない。

管理局にそれなりに影響のある『ハラオウン家』の紹介である。背任行為は自滅に繋がるので、その専門家も必死である。

「さて、それじゃあ行くとするか……」

童虎は、手作りの箱車にエリオを乗せ、歩き始めた。

基本、童虎の移動手段は徒歩である。

交通機関は海を渡る時か、次元を渡る時しか使っていなかった。それを見送ったリンディは……。

「……『子連れ狼』？……でも『童虎』だから『子連れ虎』かしら？でも、『老いた虎』なら挿一刀じゃなくて、柳生烈堂の方だし……」しばらく地球の日本で生活している内に、時代劇と昼ドラにはまったリンディは、時代劇チャンネルで見た『子連れ狼』を連想し、わけの分からんことを呟いていた。

ミッドチルダ首都『クラナガン』。

そこに建つ『时空管理局、地上本部』。

その長を務めるレジアス・ゲイズ中將が、招いた相手がいた。

黄金聖闘士『獅子座』のアイオリアである。

アイオリアは、レジアスが嫌っている『元・犯罪者』である八神はやて一等陸尉の関係者であるが、彼自身には『前科』ではないので、レジアスも見下す態度を取っていなかった。

最も、アイオリアは人伝でレジアスが、はやてを『犯罪者』呼ばわりしている事を知っているので、内心憤っているのだが、顔には出していないかった。

アイオリアも、昔と比べて成長しているようである。

「よく来てくれた。ワシが地上本部のレジアスだ」

「アイオリアだ。よろしく……。それにしてもレジアス・ゲイズ中将……地上本部……首都防衛長官……。地上本部の幹部が俺達に接触してくるのは始めてだな……」

呼ばれた理由になんとなく予想はついてはいるが……。

「すまんが、下手な腹の探りあいには性に合わん。単刀直入に要件だけ言ってくれ」

「……こちらとしても、無駄話をする暇はない。この後も予定がぎつしり詰まっているので……。では、単刀直入に要請する。貴様ら『聖闘士』に地上本部に所属してもらいたい」

「……俺達は、お前達管理局に協力する事はあっても、お前らの組織に組み込まれるつもりはない……。もう何年も前からそう言っている筈だが……?」

「そこを曲げてもらいたい……せめて今、修行している何人かが聖闘士になった暁には、何人かを帰順させて欲しいのだ」
レジアスも必死であった。

「いや、貴様ら聖闘士の証である『聖衣』とやらを持たぬものでなくてもよい。貴様らの闘技を身につけ、管理局に入局したいと願う者を回してもらえれば……」

レティ・ロウランの紹介で現在、聖闘士の修行を受けている者たちは、元々、管理局の武装隊志望だった事からの提案だった。

本音を言えば、聖闘士全員を地上本部に欲しいところだが、下手に

アイオリアの機嫌を損ね、敵対行動をとられるのは不味いということくらいは理解できていた。

アイオリアたちが、自分達管理局を完全に信頼していない事も承知している。

「……それはできん！」

アイオリアは、明確に拒絶した。

「……何故だ!？」

「掟に反する……お前達に置き換えれば、『管理局法』に抵触するような者だ」

少し前までは、聖闘士候補生はクロノ、ユーノ、ロツサの三名だった。

それゆえ、地方での聖闘士養成と同じ様に「来る者拒まず、去る者追わず」でよかった。

しかし、現在は『地球』^{エチン}の聖域の候補生を上回る人数になっていた。統制を取るためには、ルールが必要である。

そこで、アイオリア達3人は相談し、^{サンクチュアリ}聖域の掟を適用することを決めたのである。

元々、今、アイオリア達が本拠として使っている聖域は、『地球』^{エチン}の聖域の一画が2000年前の聖戦で土地ごと時空を越えてしまったのである。

言うなれば『出張所』のようなモノである。

しかし、『出張所』なので、本来の掟よりは多少甘くしていた。

つまり、聖闘士候補生が聖域を出るには、見事聖闘士となるか、それとも死体となるか……であるのだが……本来なら、聖闘士志望で聖域に来た以上は、問答無用で掟を適用するのだが、まずは聖闘士の修行の辛さを教え、三日間考え直す時間を与え、さらに一週間以内なら、家族の者が連れ帰る事を許す『仮研修期間』を設けた。

期間が過ぎても、聖闘士になる事を諦めることは出来るが、それでも直ぐに帰ることは許されず、最低でも10年は雑兵として聖域に所属する。

脱走した者は、どのような理由があろうと連れ帰って処刑する。アイオリア、カノン、ムウの3人が話し合いで決め、『教皇代理』の立場の童虎の承認を受け、決定されたのである。

この決定により、最もとばっちりを受けたのがロツサである。

ロツサは、聖闘士候補生だが、同時に管理局の『査察官』でもある。その為、彼だけは例外的に、査察官の仕事がある時のみ、聖域から出ることを許されるが、任務終了後は直ぐに聖域に戻らなくてはならなかった。

任務が終了して、一週間経っても戻らなかった場合は、脱走とみなし刺客が差し向けられるのである。

怪我などをして入院を余儀なくされた場合は退院後一週間以内に戻らなくてはならない。

それを通達されたとき、ロツサの顔は蒼褪め、引き攣っていたのだが、強制されたわけでもなく、自らの意思で聖闘士を目指した為、言い訳できなかった。

そして、ユーノは特に影響を受けていない。

何故なら、ユーノは聖域で修行しているわけではないので、今まで通り、辞めたくなったら辞めてもいいのである。

その事を後で聞かされたロツサは、「僕もクロノ君の様に、本局で修行すればよかった…」と黄昏ていたらしい。

「多少、変更したとはいえ、古代から続く掟を適用すると決めた以上、決めた我々がそれを破るわけにはいかん。『アテナ』の許しでもない限り……」

聖域のある世界……かつて、第77観測指定世界と呼ばれたかの地は、今は治外法権指定世界となっている。

管理局と交流はしているが、管理局法がまったく適用されない世界と定められた。

聖闘士候補生として、聖域に足を踏み入れた以上、その掟を科せられるのだ。

「……しかし、別に我々をお前達に組み入れる必要はないのではな

いか？正直、聖闘士と同格の戦闘力を持つ犯罪者などそういまい。いくら人手不足とはいえ……」

アイオリアの疑問に、レジアスは苦虫を噛み締めたような表情になった。

「……オーリス！例の資料をアイオリアに見せる」

防衛長官秘書であり、またレジアスの娘でもあるオーリス・ゲイズ陸上三佐は、空間モニターを展開しデータを映し出した。

「……これは!？」

そのデータを見て、アイオリアは絶句した。

本局と地上本部の戦力差、更にミッドチルダの首都であるクラナガンの治安の悪さは、想像以上であった。

万年人手が足りないと言っている本局だが、それでも地上本部と比べるとはるかに人材が恵まれている。

稀少と言われるAランク以上の魔導師。

管理局に所属しているAランク……全体を100として、比率が本局85：地上15と圧倒的に地上本部が少ない。

更に、AAA以上の魔導師は全て本局に所属しており、地上には一人も居なかったのである。

二年前までは、地上にもSランクのストライカー級の騎士、『ゼスト・グランガイツ』がいたのだが、彼は戦闘機人の捜査中に殉職と記録されている。

実は、スカリエツィたちと行動を共にしているのだが……レジアス達は知らない。

Aランクの魔導師も10人にも満たず、各部署にB、Cランクの者が居ればいい方という有様である。

そんな有様なので、地上では「質より量」という形をとり、物量で補っている有様なのである。

そして、クラナガンの治安の悪さに目も当てられない有様であった。魔導師の犯罪は、基本的に魔導師でなければ鎮圧できないので、魔力を持たない一般人による自警団では、抑止力にならない。

Aランク以上の魔導師による犯罪が起きると、地上本部の今の戦力では、対処に時間がかかりすぎるのだ。

「……優秀な魔導師は、皆、本局が持つていってしまっ……。我が友であり、唯一のオーバースだった古代ベルカ式の騎士だったゼストが死に……」

レジアスは、苦しげな表情になった。

実は、レジアスはスカリエッティのスポンサーであった。

戦力の強化の為、倫理的問題、莫大な予算を承知で、『人造魔導師』を作ることスカリエッティに依頼していた。

親友であり、同じ理想を持ってゼストにも黙って……。

ゼストが戦闘機人事件を追っている事を知り、彼の部隊を捜査から外そうとしたが、ゼストはレジアスの指示を無視し、捜査を強行した。

同じ理想を持っている筈のレジアスに不審を抱いた為である。

ゼストの死をスカリエッティから聞かされ、レジアスのシヨックは計り知れなかった。

「……如何に数を増やしても、限度がある。少しでも優秀な者が欲しい……」

アイオリアは、レジアスの言葉を聞きながら、考え込んでいた。

以前、面会した三提督の一人であるミゼット・クローベルからも聞かされていた。

「本局が扱う事件は、規模が大きいから優秀な魔導師はほとんど本局が持つていく。レジー坊や達はかなり苦労しているわ」

本局の統幕議長であるミゼットも、この件に関しては思うところがあつたようである。

外のことばかりに目を向け、自分の家族達が住んでいるクラナガンを護っている地上本部を軽く見ている事に、心を痛めているのだ。何度も、その事を指摘したのだが、豆腐に鋏、糠に釘、暖簾に腕押しであつたという。

「……分かった。管理局に入局させることは出来んが……『出向』」

という形なら、何人が回そう……。奴らがモノになれば……の話だがな」
流石に、今の地上本部の状況に同情したのか、アイオリアは最大限
譲歩することにした。

それでも、納得できないというなら、此方もそれ相応の対応になる
……と、言下に匂わせたが。

レジアスも、アイオリアの意図を察し、それを受け入れた。

「……後一つ、中将に言っておくことがある」

「……なんだ？」

「……はやてを『元・犯罪者』と呼ぶのをやめてもらいたい。第一、
はやては犯罪者ではない」

先の『闇の書』事件。

はやて自身は、何もしていないのだ。

シグナム達、守護騎士が『元・犯罪者』と呼ばれるのは、不快だが
事実なので仕方がない。

しかし、はやては『闇の書』の転生機能により、ランダムに選ばれ
ただけに過ぎず、『闇の書』の意思』の覚醒に関しても、グラムや
リーゼの姦計が原因である。

「はやてに関しては、『犯罪者』ではなく『被害者』だ……。事実
を見ずに、勝手なことを言わないでもらいたい」

アイオリアの眼光に、レジアスは押されていた。

魔力資質を持たずに、地上本部のトップにまで上り詰めた男だが、
それでも黄金聖闘士の眼力に耐えられるほどの胆力は養われてい
なかった。

「……あと、候補生達がモノになるまでは後、数年を要する。それ
まではいかに本局が気に入らなくても、彼らとの連携を取れるよう
にしておくことだ」

地上をこれまで護ってきたのは我々だという自負があるのは認める
が、お互いが足の引っ張り合いをしていては、護れるモノも護れな
くなる。

本局と地上の確執など、一般の人たちには関係ないのだ。

意地の張り合いで、惨事を招いては、市民達の管理局に対する支持を失っては、出資してもらえなくなり、局を運営する事も出来なくなるのだから……。

第五十話 聖闘士の掟（後書き）

管理局の技術者であるマリエル・アテンザはクロノの聖衣を解析していた。

しかし、その結果は……。

その頃、スカリエッティも聖衣に興味を持ち始めていた。

時空を越えた黄金の闘士

「聖衣？」

君は、小宇宙を感じた事があるか！？

第五十一話 聖衣？

本局技術部において、マリエル・アテンザは『オリオン星座』の白銀聖衣の解析を行っていた。

クロノに解析させて欲しいと頼み、自分の一存で決めかねたクロノが居合わせたカノンに訊ね、許可出されたので、何とか解析できるようになったのだが……。

「……………で、解析結果は？」

「……………か…解析不能…」

もともと、聖衣に使われている材質である『オリハルコン』、『ガンマ二オン』、『銀星砂』スターダストサンド自体が未知の金属であり、『地球』エデンにしか存在していないからである。

『地球』テラにおいては『オリハルコン』は神話や伝説等に伝わる架空の金属ではない。

更に、聖衣は神々の技法によって作られてる為、管理局の技術では解析が出来ないのである。

聖衣の修復が出来るムウでも、新たな聖衣を作り出すことは不可能なのだから。

「…そもそも、聖衣の重量なんですけど…まるで鉛のように重たいんです。こんなものを着けて戦えるわけがありません！」

中世の騎士達が身につける甲冑などのように凄まじい重量なのである。

にも関わらず、聖闘士は高機動型の戦闘魔導師をはるかに凌駕するスピードで動けるのである。

魔導師たちの常識では、如何に魔法で身体強化したとしても、こんな重たい物を身につけていたら、まともに動く事さえも難しい。

「…………マリエル…君は一つ思い違いをしている…と、というかデバイスの技術者である君がそれでどうする？」

「へー!？」

「聖衣を身に着けただけで、力が出ると思ったら大間違いさ。聖闘士は自己の体内にある『小宇宙』を爆発させることで、超人的な力を発揮するんだ。小宇宙を使わなければ、聖衣はただの重いプロテクターに過ぎない。装着者の小宇宙が燃えれば燃えるほど、聖衣は軽くなり、発揮する力も増大する……魔力がなければデバイスが機動しないのと同様に……」

魔力を持たない一般人が起動させようとしても、デバイスはうんとも寸とも言わない。

そして、同じデバイスを使っても、使用者の魔力によって、発揮する力も大きく変わる。

なのはのデバイスである『レイジング・ハート』は本来はユーノのモノであった。

だが、Aランクのユーノではレイジング・ハートを使いこなせず、『ジュエルシード』を回収することが出来なかった。

しかし、AAランクのなのはは素人ながら『レイジング・ハート』を使いこなし、『レイジング・ハート』も本来の持ち主であるユーノではなく、なのはの方を『主《Master》』と認め、強い信頼関係を築いている。

聖衣もデバイスと同じであり、『魔力』と『小宇宙』を置き換えただけに過ぎないのだ。

守護星座が一致し、小宇宙を燃焼し爆発させる事により、聖衣に秘められた力を発揮できるのである。

デバイスの事に精通しているマリエルが、そのことに気付かなかつたのは迂闊と言えよう。

「……まあ、例え聖衣を再現できたとしても、肝心の小宇宙を持たない限り、意味がないってことさ……」

『小宇宙』を持たない者にとつての聖衣の使い道など、せいぜいオプジェ状態のまま飾っておくだけの美術品としてしか使い道がない。後は、聖衣を魔法で操り、『動く鎧』^{リビングアーマー}として使うか……であるが、それはあまり効果がない。

かつて、双児宮でサガとカノンが、双子座の聖衣を教皇の間から遠隔操作し、敵にぶつけたことがあるが、それは、彼らが『小宇宙』によって操ったからこそ聖衣の力を引き出せたが、魔法では聖衣の力を引き出す事は不可能。

せいぜい、聖衣の硬度くらいしか活用できず文字通り、動く鎧としてしか使えない。

聖衣の材質を利用して傀儡兵を作ろうにも、神の技法によって作られた聖衣を人の技に過ぎない魔法で変質させる事も不可能。

聖衣の材質に使われる『オリハルコン』などは、『地球^{エテラ}』の天界と失われし大陸『アトランティス』『ムー』でしか採掘できず、所蔵の確認がとれているのは現在は聖域に保管された分しかなく、他の者が手に入れるのは困難である。

「……結局、聖衣を管理局に役立たせるのは不可能ですか？」

「……最も、他の連中はそんな事を思いもしないだろうから……無駄な事をしているけどね……」

「何をですか!？」

「聖闘士候補生の中にも何人か……管理局の命令を受けた者が何人か紛れ込んでいると、カノンさん達は睨んでいる……。だからこそ、あのような厳しい掟を持ち出すことにしたようだし……」

木を隠すなら森の中……人を隠すなら人ごみの中というように、聖闘士の事を探ろうとスパイが紛れこんでいる。

既に、誰がスパイなのかは当たりをつけているらしいが、実行を起こすまでは監視に留めるつもりらしい。

後、聖王教会はロツサに期待しているが、それはアテが外れている。確かにロツサの義姉は聖王教会の騎士であり、管理局の理事官でもあるカリム・グラシアであるが。

カリムは聖闘士の闘法を教会騎士達に組み入れようと考えているが、ロツサはそれは不可能と見ている。

自身で聖闘士の修行を受けているからこそ、教会騎士達に伝えられない。

闘法を身につける前に、何人犠牲になるか分からないからである。如何に騎士とはいえ、死ぬ確率の方がはるかに高い訓練を受け入れるはずがない。

ロツサ自身、何度逃げ出したくなつたか分からない厳しさなのだから……。

それに、グラシア家に対する恩と、カリムを義姉として慕っている為、聖王教会との関わりを絶つ気はないが、ロツサの心情もかなり聖闘士に近づいている。

クロノに続き、ロツサもまた管理局にとって獅子身中の虫となるだろう。

聖域にある正規の聖衣は、青銅聖衣は、『麒麟星座』カメロバルタリス、冠星座』コロナ。白銀聖衣は、イージスの残した『楯座』スキュータム、クロノが持ち帰った『南十字星座』ザンクロスの計四体である。

「ムウからの報告だと、ユーノが小宇宙に目覚めかけているらしい……」

「うちのロツサも、小宇宙に目覚めかけている……無限書庫の司書を兼任しているユーノはまだまだ時間がかかるが、このままいけばロツサは後、二、三年で聖闘士になれるだろうな」

カノンとアイオリアの2人は、二体の白銀聖衣の前で聖闘士候補生の中でも、最も有望性を持った二人について語り合っていた。

「それにしても……あの2人の守護星座がそれぞれ『楯座』と『南十字星座』とは……クロノの『オリオン星座』といい……偶然で片付けられる事ではないな……」

「ああ、まるであいつらの為に、聖衣が様々な方法で此方の次元世界にやってきたようだ……」

人は皆、自分の星の下の運命を持っている。

カノンとサガが『双子座』ジエミニの黄金聖闘士となつた事も、アイオリア

が『獅子座』の黄金聖闘士になった事も、クロノが『オリオン星座』の聖闘士となったのも、それぞれが生まれ持った星の運命に導かれた結果である。

神の気紛れに、次元世界を超えたカノン達も……それが運命だったのだろう。

カノン達と出会ったクロノ達もまた……。

ジエイル・スカリエツティは往診を終え、自分のラボに戻っていた。シヤカ達に命を救われたスカリエツティは、今までの自らの愚かさを悟り、その償いなのか、医者として人の命を救っていた。

ただ、流石に指名手配の身の上の為、モグリの闇医者であるが……。しかし、科学者としての自分を捨てたわけではないし、最高評議会の欺く為にも、『戦闘機人』の研究は続けていた。

いつか、命を弄んだ自分に報いが来る……その事を確信し、その時の身の処し方も弁えていた。

スカリエツティの戦闘機人『ナンバーズ』。

新暦0051年に？1『ウーノ』、0052年に？2『ドゥーエ』、0055年に？3『トローレ』、0060年に？5『チンク』、0061年に？4『クアットロ』、0063年に？6『セイン』、？10『デイエチ』が製造されている。

最高評議會は、ゼスト隊のメンバーの一人であるクイントの遺伝子を使い新たな戦闘機人を作るよう指示を出してきた。

かつて、スカリエツティ以外の研究者が作ったクイントを元にした戦闘機人であり、クイントが引き取った2人のことを考え、クイントの遺伝子は戦闘機人に適応しやすい事から、そう指示を出してきたのだ。

人造魔導師適正のあったゼストとメガーヌと違い、適正がなかったクイントの遺伝子くらいは役立てようとする非情な考えである。

人を人とも思わぬ評議会に怒りを覚えたミロだったが、今はまだ動けない事をシャカに諭され自重したが、機嫌が悪い。

スカリエツティはクイントに詫び、彼女の遺伝子を元にして、新たな戦闘機人の製造を始めた。

それと同時に、スカリエツティは聖衣に興味を持ち始めていた。

ミロの『蠍座』^{スコーピオン}の黄金聖衣を解析した結果は、管理局同様『解析不能』ではあったが、彼は聖衣の特性に目をつけたのである。

「魔導師でも、戦闘力だけならば『神の闘士』達にもある程度対抗できる……。流石にミロやシャカには対抗できないが……。しかし、ネツクとなるのは防御力……。『防護服』^{バリアジャケット}では、彼らの攻撃に耐えられない。しかし、『聖衣』^{クロス}や『冥衣』^{サイプリス}はある程度なら彼らの攻撃を防げる……。黄金聖衣に至っては完全破壊は聖闘士でも不可能……。ならば……。確かに聖衣の解析は不可能だ……。しかし、解析できた部分もある。

それを参考に、スカリエツティは決意した。

クアットロを攫っていった青のローブを着た男。

あの男も、聖闘士と冥闘士同様『神の闘士』に違いない。

ミロやシャカはおそらく、あの男達と戦う事になるだろう。

そして、自分の下から奪っていった『戦闘機人』や『レリック』を使い、何か企んでいる。

自分達も、それに巻き込まれるのは必定……。

ならば、自分の『娘』達が奴らに対抗する為に必要なモノを作り出さなくてはならない。

特に、砲撃型の魔導師ならともかく、近接型のトーレやチンクでは、先の戦闘の例もある。

「……ならば作ろう……。魔導師専用の聖衣を……」
このスカリエツティの研究が、後に新たなデバイスの誕生に繋がる。

第五十一話 聖衣？（後書き）

第6管理世界のアルザス地方を旅する童虎とエリオ。
二人の前に、一人の少女が現れる。

時空を超えた黄金の闘士

「竜の巫女」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十二話 竜の巫女

新暦0069年。

なのはは、念願の航空戦技教導隊入りを果たした。

その後、業績を重ね、『無敵のエース』『管理局の白い悪魔』に続き『エース・オブ・エース』の異名を持つようになった。

新暦0071年。

童虎とエリオは、第6管理世界のアルザス地方に来ていた。

元々、童虎は自然に囲まれた五老峰に二百数十年間もの間、座していた。

それ故、今まで人が文明が発達した世界ばかり旅をしていたのだが、久しぶりに自然の中で寛ぎたくなり、緑豊かなこの地にやってきたのである。

エリオは、両親に見捨てられ、さらにその両親と死別した悲しみから立ち直っていた。

『悲しみ』という名の闇の中にいたエリオは、童虎と共に旅をしたこの三年間で、一筋の光明を得た。

旅の最中、エリオは童虎から、「生きる」と言う根本的な物を教えられたのだ。

特殊な生まれであるとはいえ、生まれてきた以上、最後まで生きる権利と義務が存在するということを……。

腕っ節だけでなく、人間としても強く、優しく温かな童虎に、エリオは尊敬と憧れを抱いた。

既に2人は、父（祖父？）と子（孫？）であった。

父子は、川辺に座り込み、釣り糸を垂らしていた。

そろそろ昼食の時間なので、魚釣りと洒落込んでいたのだ。

正直、ただ魚が食べたいなら、わざわざ釣り糸を垂らす必要はない。童虎は泳いでいる魚の口に直接、釣り針を引つ掛けて釣る事もできるし、手づかみで簡単に獲る事も出来る。

あえて、魚釣りをしている理由は、単純に『釣り』を楽しむ為であるが、同時にエリオに糧を得る事の大変さを教える為である。

エリオを引き取って三年……、そろそろ生活手段を教えることにしたようだ。

人が糧を得る方法として、町などで生活する場合は仕事をして金銭を稼ぎ、食料を買うこと……と、文明から離れ、このような自然豊かな地で生活する場合は、野の獣を狩り、野に生茂る山菜を採り、今の様に魚を釣るということである。

エリオが、どのような生活をするかは分からないが、例え都会で生活するにしても、『釣り』自体は趣味としても楽しめるモノであるので、教えておいて損はないであろう。

結果は、童虎12匹、エリオ1匹であった。

童虎が次々と釣り上げるのに対し、エリオの釣り糸には1匹もかからなかった。

そろそろ昼食の時間が差し迫り、焦りが生まれたとき、童虎がエリオの頭を撫でた。

「…エリオ…焦ったら負けじゃ……。心を静かに保ち、自然体になるのじゃ……」

童虎に諭され、肩の力を抜いてしばらくして……エリオの釣り糸が引いた。

「今じゃ！素早く、そして焦らず釣り上げるのじゃ！！」

言われた通りに竿を引きあげると、釣り針に魚が引っかかっていた。

「……っ…釣れた…釣れました老師！」

「……魚に限らず、野生に生きる生物は皆、普通の人間など比べも

のにならぬ程、気配に敏感じゃ……。釣ろつ釣ろつと考えるお前の『殺気』を魚は敏感に感じ取り、警戒したから、お前の釣り糸に引つかからなかつたのじゃ……」

火を起こし、釣った魚を焼くと香ばしい匂いが辺りに立ち込めた。

「キユクル」

「……ムツ……なんじゃ今の鳴き声は？」

聞いた事のない獣らしき鳴き声のする方に視線を向けると、そこから泥だらけの少女が翼を持つ獣と共に姿を現し……その場に倒れこんだ。

「キユクル……！」

獣が心配そうに鳴く。

「……ど……どうしたの!？」

驚いたエリオが少女に駆け寄ると……。

くう~~~~~。

可愛らしい腹の虫が少女から発せられた。

「……お腹が空いているの？」

「……いかな……大分衰弱しておる……。もう何日も碌に食べておらんようじゃ……エリオ……荷物から米を持ってきてくれ……粥を作る……」

「……あのお魚じゃ駄目なんですか？」

「……恐らく胃が受け付けまい……。そこのチビは大丈夫じゃろうが……」

「慌てずゆつくり食べるんじゃ……。いくら粥とはいえ弱った胃にいきなり大量に入れたら、吐いてしまうからな……」

キャロ・ル・ルシエと名乗った少女は、童虎に言われたように一口一口ゆつくりと粥を啜った。

キャロのお供をしている獣は、童虎達が釣った魚を喜びながら食べていた。

「……ありがとうございます」

食べ終わったキャロは、童虎たちに頭を下げた。

「……ところで…親はおらんのか？」

キャロの今の様子を見て孤児の可能性が高いが、必要な事なので聞く。

「……」

「……迷子なら、お主の住んでいるところまで送るが？」

自分と同じ『次元漂流者』ならば、管理局に連絡することも考えた。

キャロは……躊躇したが童虎に促され、自分の事を話始めた。

少女は一人だけで……否、一匹の獣を連れて旅をしていた。

少女には、『力』があった。

その『力』は、他者にとって強力過ぎた。

少女は、その『力』故に……生まれた地から追い出された。

「アルザスの竜召喚の祖、ルシエの末裔…キャロよ」

「僅か6歳で白銀の飛竜を従え、黒き火竜の加護を受けた……。お

前はまこと素晴らしい竜召喚士よ」

「じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ……」

「済まぬな……お前をこれ以上この里に置くわけにはいかんのじゃ

……」

そう言われて……。

【…竜召喚は危険な『力』……人を傷つける怖い『力』……】

以来、半年もの間、一匹の獣……つまり、白銀の飛竜『フリードリヒ』と共にアルザスの地を彷徨い続けていた。

この『第6管理世界』と管理局に指定された世界には存在しない『安住の地』を求めて……。

「……酷いよ……」

キャラコの過去を聞いたエリオは、憤慨した。

キャラコが強い力を持っているからといって、まだ6歳に過ぎない少女を追い出すなんて……死ねと言っている様なモノである。

特殊な生まれ故に両親から見捨てられたエリオからすれば、他人事ではない。

「……確かに酷い……。わしらの常識からすれば……な。しかし……それは『文化の違い』と言えなくもないのじゃよ……」

国、又は世界が違えば文化も違う。

これは仕方のないことである。

「……しかし……追い出して、はいそれまでと言つのは無責任じゃな……」

村の護るため、村の責任者として断腸の思いでキャラコを追放した……

「泣いて馬謖を斬る」と言えば聞こえはいいが、幼子を何の保障もなく放り出したことに変わりはない。

ここで出会ったのは何かの縁……エリオ同様、キャラコも自分が引き取ることにした。

しかし、キャラコの為にはその『竜召喚』の能力を使いこなせなければならぬが……いかに二百数十年生きていたとはいえ、専門外の事を教えることは出来ない……。

「……ふむ……。そういえばあやつがおつたな……」

童虎は、キャラコを伴いアルザスの地を後にした。

サンクチュアリ
聖域。

候補生たちの指導を終えたカノンは、リニスを入れたコーヒートを堪

能していた。

リニスは、フェイトの花嫁修業がようやく満足のいく水準に達したので、次はカノンにどうフェイトの想いを受け止めてもらおうか画策し始めていたが、我が主ながら、そちら方面はかなり朴訥なので、さてどうしようかと悩んでいた。

「入るぞ、カノン！」

扉の向こうから、童虎の声が聴こえた。

「どうぞ！」

くつろいでいたカノンは、入ってきた童虎の前に傳いた。

「お戻りになられたのなら、お迎えにあがりましたのに……」

「いや、急な事じゃったからの……」

カノンに楽にするようにいい、ソファに座った。

カノンは、童虎が伴ってきた二人の幼子を見て、いぶかしんだ。

男児の方のリンディから聞いて知っているが、女兒の方は知らない。だが、今はとりあえず二人にジュースを出すようリニスに指示した。

「……旅は終わりですか？」

「うむ。そろそろ一所に落ち着こうと思っている」

「聖域に留まられますか？」

「いや、どこか別の……五老峰ほどでなくてもよいが、自然豊かな場所がよい……。まあ、それは伝手を頼るから良いが、聖域に来たのはお前に頼みがあったからじゃ」

「頼みとは？」

童虎が自分を頼るとは何事なのか。

「ふむ、お前の使い魔という、そのリニスを貸してほしいのじゃ……」

「……私をですか？」

リニスはカノンの使い魔になる前は、大魔導師と謳われたプレシア・テスタロッサの使い魔であり、フェイトの魔法の師でもある。

「召喚士……ですか？……確かにプレシアは召喚魔法にも長けていましたから、私もそれなりの知識があります」

「うむ。ならば、キャロにも指導してもらいたいのじゃ……。リンデイは、お前は師としても優秀と言っておったからのう」

「……カノン……どうしましょうか？」

リニスは主であるカノンに聞いた。

「お前はどうしたい？俺は構わんが……老師の言つとおり、どれだけ強力な力も制御がきちんと出来なければただの害悪だが、制御さえ出来れば正しく使えば問題はないから……」

「……わかりました。私でよければお力になりましょう……」

「助かる……。わしも体験したが、確かにキャロの力は暴走すれば被害が出るかもしれんからな」

実は、聖域に来る途中、一度、キャロはフリードを暴走させてしまったのである。

危うく大惨事になるところだったが、『天秤座』の聖衣を纏った童虎の一撃であっさりと静まった……。

「……アルザスの飛竜は、そこいらの魔導師が召喚する赤竜などよりも強力なのですが……それを拳一発ですか……？」

さすがに聖闘士を束ねる立場……と、呆れながらも畏怖するリニスであつた。

「いや、きちんと制御され、冷静じゃつたら苦労したじやろうが、ただ暴走しておるだけなら、それほどでもない」

普通、暴走している方が危ないんじゃない……と、リニスは思ったが、黄金聖闘士を自分魔導師の常識で測るのは間違いであることは今までで十分理解できていたので、口には出さなかつた。

童虎は、どこか適当な場所を三提督に紹介してくれるように頼み、ミゼット・クローベルが紹介したのは第61管理世界『スプールス』の自然保護区域であつた。

そこには管理局自然保護隊が駐留しており、召喚士の能力は自然保

護官向きなので、召喚士の修行にはもってこいだらうと薦めたのだ。先の例もあり、暴走しても童虎が抑えてくれるので、ミゼットとしても安心して紹介した。

童虎も『スプールズ』が気に入り、自然保護隊との面々とも意気投合し、そこで生活することになった。

第五十二話 竜の巫女（後書き）

久々に皆が集まった。

成長したなのは達は任務の後、皆で食事を楽しんでいた。

時空を超えた黄金の闘士

「同窓会」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十三話 同窓会

第162観測指定世界。

時空管理局、巡航L級8番艦。次元航行艦船『アースラ』が任務を遂行していた。

任務の内容は『聖王協会』からの依頼で、この世界の遺跡から発掘された二つの『ロストロギア』を確保することである。

『アースラ』の艦長職がリンディ・ハラウン提督から、クロノ・ハラウン提督に引き継がれ、久しぶりに『PT事件』、『闇の書事件』で知り合ったメンバーが全員揃っていた。

ちよつとした『同窓会』である。

なのはとフェイト、リンフォースと『融合』したはやてが将来について語りながら任務に臨み、現場に到着した時、『AMF』を備えた機械兵器と遭遇した。

『AMF』は魔力を打ち消すが、魔力によって発生した効果は消せない。

それを利用して、フィールドの範囲外で発生した効果をぶつけてしまえばいいのだ。

「……スターダスト・フォール！」

「……サンダー・フォール！！！」

なのはとフェイトはそれぞれ、物質加速型射撃魔法の『スターダスト・フォール』を使い、岩を砕いてその破片を弾丸として発射し、天候操作+遠隔操作魔法の『サンダー・フォール』で発生した自然現象の雷を落とした。

岩の破片の弾丸と降り注いだ雷を受け、機械兵器たちは一掃された。否、数機ほど逃走した様である。

「リンフォース……頼んでええ？」

【……御意！……『凍てつく足枷』ッ！！】

はやてと融合しているリンフォースは、設置型凍結魔法『凍てつ

く足枷』を使い、凍りつかせた。
発掘隊から、古代遺産『レリック』と呼ばれる宝石のような結晶体を受け取り帰路についた。

なのは達と別行動の守護騎士達が向かった先で見たものは……焼け野原となった発掘現場であった。

汚染物質の残留がないところを見ると、典型的な魔力爆発である。ヴィータはこの様な焼け野原を見るたびに、三年前のあの悲劇を思い浮かべてしまう。

ザフィーラが森が動いたのに気づき、座標から調べたところ、先ほどのなのは達が遭遇した機械兵器達か『レリック』を移送中のなのは達の方に向かっていることが確認された。

なのは達ならば大丈夫だろうが、運んでいる物が物である以上、自分たちが叩いた方がベストと判断し、守護騎士たちが殲滅に向かった。

任務は無事に終了し、クロノは確保した『レリック』を本局の研究施設に運ぶことにしたが、『聖王教会』のカリム・グラシアから、警備員を寄越したので行動を共にしてほしいとのこと。

クロノを出迎えたのは……。

「クロノ君！」

「……ヴェロツサ……君だったか」

時空管理局、本局査察部、査察官のヴェロツサ・アコースであった。

「今日はどうした……。義姉上の手伝いか？」

「うん。カリムが君たちを心配してたから……っていうのもあるんだけど……本音を言えば面倒で退屈な査察任務より、気の合う友人と一

緒の気楽な仕事の方がいいなって……」

「相変わらずだな君は……。でも、聖闘士の修行よりは査察任務の方が楽なんじゃないかい？」

「……た…確かに……。あの地獄に比べれば…査察任務の方がマシかな……」

ロツサはクロノの指摘に顔色を変える。

「カノンさんから聞いたよ。聖闘士の資格を得たんだってね」

「ああ。我が師アイオリアの試練を見事合格して、正式に聖闘士の資格を得たよ……。聖衣は…君が持ち帰った『南十字星座』だよ」

「……そうか……」

【……リゲルさん。貴方に託された聖衣は、ちゃんと次代の聖闘士に受け継がれました。どうか安心して眠ってください……】

クロノは、自分に聖衣を託した先代の『オリオン星座』の聖闘士、リゲルを思い浮かべた。

「ともあれ、君が護衛とは心強い。出る前にはやてやアイオリアさんにも声をかけるか？」

「ああ、大丈夫だよ。お土産はもう届けてあるし……」

アースラ艦内のレクリエーションルームに豪華な料理が並んでいた。

「おお　　凄いですねえ！」

「肉がある！」

「こんなに用意されたんですか？」

エイミイ、アルフ、ユーノが用意されたご馳走を見て目を輝かせていた。

アルフは今、子犬フォームだけでなく人型においても幼い姿をしている。

今のアルフのフェイトの護り方は、共に戦う事ではなく、フェイトの帰る場所を護ることである。

子供の姿でいるのは、フェイトの魔力を食わない状態を追求したらこうなつたらしい。

「半分はアコース君からの差し入れよ。任務を終えたエースたちに……ですって」

リンデイは、飲み物と取り皿とコップなどを準備しながら答えた。

「それにこれが全部じゃないわよ。まだ厨房でカノンさんが腕を振るっているから……」

「カノンの料理も久しぶりだなあ」

フェイト同様、カノンの料理が大好きなアルフは、目の前の肉を見て涎を垂らしながら、期待していた。

「しかし、そんなに作って食べ切れるんですか？」

目の前の料理もかなりの量がある。

食べ切れなかつたら、食材を無駄にすることになることをムウは心配した。

「その点は大丈夫ですよ。艦のクルーたちにも振舞うから……」

「艦長……じゃない。リンデイさんもしません」

「ふふ、いいのよ。私も艦を降りてからは平穏な内勤職員だもん。」

それよりもエイミィ……そんな他人行儀な呼び方じゃなく『お義母さん』でいいのよ」

「……いや、さすがにまだ早いんじゃない」

実は、エイミィは来年クロノと結婚する予定である。

「任務の前に聞きましたけど……クロノもやっとな決心したんですね」

「……でも、いまさら言うのも何なんですけど……いいんですか？ 聖闘士のクロノ君が私と結婚しても……」

エイミィは、不安そうな目でムウに問う。

管理局員であると同時に白銀聖闘士でもあるクロノが結婚しても良いのか……。

「……別に聖闘士だから結婚してはならないなんていう掟はありませんよ」

ギリシア神話において、アテナは処女神として伝えられているが、

だからと言って恋愛や結婚などを忌んでいるわけではない。

『琴座^{ライラ}』のオルフェのように恋人がいる聖闘士もいた。

女性聖闘士である『蛇遣い座^{オヒュクス}』のシャイナは、星矢を愛している。

聖闘士は、アテナ以外は男のみの世界である。

ゆえに、女が聖闘士の世界に入るためには、女であることを捨てる為に仮面をかぶる。

そして、その素顔を見た男を殺すか、愛するかのも二者択一をしなければならぬ。

恋愛を禁じているのなら、素顔を見た相手を殺すだけでいい筈である。

『愛する』という選択肢を入れているのだから、恋愛を禁じているわけではないのだ。

「リア兄様！」

人形のような大きさの小さな少女が、アイオリアの頭に飛び込んできた。

「……あかんよリン……。リア兄の頭に乗ったら……」

この小さな少女の名は『リンフォース^{ソウタイ}？』。

はやてが『夜天の魔導書』の中にあつたデータを元に新たに製作した『融合^{ユニオン}デバイス』……。

リンフォースははやてとしか融合できないが、？は適合できれば誰でも融合が可能なのだ。

はやては、シグナムとヴィータ……つまり守護騎士たちの新たな力として彼女を作った。

なのはとヴィータが海闘士達に襲われた事で、危機感を抱き、少しでも自分の家族達の助けになればと願った故である。

リンフォース？は、生みの親であるはやて同様、アイオリアに懐いていた。

「別に構わんよ…はやて。それにしても…今回の仕事では俺の出番は無かったな」

アイオリアが今回の任務に同行したのは、海闘士が現れたときの為であった。

先なのは撃墜事件の時のように、AMFを装備した機械兵器と共に現れたら流石に魔導師では対処出来ない。

そのときの為に、アイオリアに同行してもらったのである。

ちなみにカノンはまだ料理を作りに来ただけであり、ムウはユーノ同様、無限書庫の司書としてである。

「フェイトちゃん。リニスさんが子供たちの写真を見せてくれるって！」

久しぶりのカノンの料理を堪能しながら、そのカノンと談笑していたフェイトになのはが声を掛けてきた。

子供たちとは、童虎の下にいるエリオとキャロの事である。

エリオの素性は、フェイトも聞かされており気に掛けていた。

「エリオとキャロは、元気に育っているぞ！」

写真を見ながら、アルフが二人の近況を説明していた。

実はリニスに乞われて、アルフはたまにエリオとキャロの遊び相手を務めている。

「ただ…最近ちよつと困った事になりました…」

リニスがため息を吐いた。

「困った事？」

「ええ。エリオとキャロの二人が「聖闘士になりたい」…って言い出したんです」

その場が沈黙した。

「……せ…聖闘士になりたい…って…」

「…だ…大丈夫なのか？」

この場にいる者は、聖闘士の修行がどんなモノなのかよく知っている。

「最初は老師も猛反対して諭したんですが……エリオ達の熱意に根負けしてしまいました……」

「あの老師を押し切るとは……なかなか末頼もしい子らですね……」

「……でも……あの子達が心配だよ……」

フェイトはクロノの修行をよく見ていたので、まだ年端も行かない二人を心配していた。

「その点は大丈夫でしょう……。カノンと老師では師匠としての質が違いすぎますから……」

全聖闘士に『老師』と呼ばれ、敬意を寄せられる童虎である。星矢達五人の中で、一番の人格者である紫龍を育てたのは伊達ではない。

もともと師匠に向いていない性格のカノンと比べる方が間違いである。現にカノンが指導している聖闘士候補生の内132名中、既に45名が脱落している。

奇跡的に死者は出ていないが、その45名は既に聖闘士になることを諦め、現在は雑兵としての務めに従事している。

「……しかし、私は老師があれ程まで反対するとは思っても寄りませんでしたけど……」

リニスとしても、予想外だった様である。

「……おそらく老師は、エリオとキャロの二人が紫龍のようになるのを危惧したのかも知れませんか」

先ほども述べた様に、紫龍は五人の青銅聖闘士の中で一番の人格者である。

紫龍という男は、自分の為よりも義の為に生きる男であり、人の為に命を捨てられる男なのだ。

……。

「ブラックドラゴンよ。確かにこの地上で信じられるモノ等何もないかも知れない。しかし、だからこそ友情だけでも信じたいのだ。父の愛も母の愛も知らぬ俺たちにとって、友だけが心の拠り所なのだから…少なくともこの紫龍だけは信じることの為に死にたいのだ」

「！！…よ…よし今度こそわたしの全力を込めた拳を放つてやろう。友情の為に死ね紫龍！！」

「今こそ受けてみる、これが龍星座最大の奥義！！」ろざんしょうりゅうは「盧山昇龍霸」
「！！」

「ペルセウス。どうやらお前を甘く見すぎていたようだ…。お前を倒すにはこの俺自身も相当の血を流す必要があったのだ…。そう…『メドウサの盾』を封じるにはこれしかなかったのだ！」

「な…なにに！？馬鹿な自ら両目を潰すとは！！し…正気か紫龍…？」

「正気さ。ただ俺たちにとって戦いは常に命がけだということだ。さあ来いペルセウス！このドラゴンの右拳はまだ残っているぞ！」

「ほざくな。そんなことは破れかぶれの行動に過ぎん！『メドウサの盾』が通用するかしないか受けてみる！！」

「見えた！！『メドウサ』の顔ではなく勝利の女神が！！」龍覇「盧山昇
龍覇」
「！！」

「な…」

バ…馬鹿な…たった一つの勝利の為に自らの両目までも捨てるとは…こ…このような男は見たことがない…。

たかが一つの勝利の為だけではない…。大いなる未来の為さペルセウス…。

「お…お前わかってているのか。このまま上昇を続ければ二人とも摩擦熱に耐え切れず天空の塵となってしまうぞ。い…いや俺は黄金聖衣を纏っている分、お前よりは長く耐えられる。先に死ぬのは生身のお前の方だぞ、紫龍」

「こ…この紫龍、死はもとより覚悟の上。お前も必ず連れて行く言った筈だ…」

「バ…バカな、そこまでして勝ちたいか…自分が死んでの勝利など何の価値がある！？何の為にそこまで闘うのだ、何故だーっ!？」

「シユラよ。聖闘士ならわかりきったこと…アテナの為だ!！」

「!！」

「俺たちは沙織さんをアテナと信じ、ここまで戦ってきた。この十二宮の戦いで、もはやそれは確信した！アテナは邪悪と戦うために数百年に一度生まれるという…沙織さんはこれからその邪悪と戦わなければならない大切な人…！沙織さんが悪を打ち払い、この世が平和になり、それによって俺たちの様な不幸な子供たちがいなくなるのなら…この紫龍一人の命など安いものだ…!！」

「シ…紫龍よ。手出しはならんと何度言ったらわかるのじゃ…」

「し…しかし…しかし老師、私はアテナの聖闘士です…地上の正義と平和の為に戦うアテナの聖闘士です…。そ…その為に長い間老師に教えを受けました…。い…今ここで闘うと言うのなら何故死ぬとおっしゃって下さらないのです…?」

「紫龍…」

「わ…わたしは多くの同志が闘っているのを、見て見ぬ振りをして生きてゆく事など死んでも出来ません。こ…この紫龍には…」

「ホッホッホッ相変わらず人間堅い奴よの。まあ、それがお前の欠点であり良き所でもあるのじゃが。わかった紫龍…アテナにはわたしからお詫びしておこう」

「ろ…老師…」

「一緒に死ぬか、紫龍よ」

「老師…」

「よ…よかろう…望み通り命を断ってくれるぞドラゴン…！」

「アルラウネ…！」

「ミノタウロス…！」

「バジリスク…！我等三人の力を結集してなっ…！」

来い！もはや俺にもあと一撃しか力は残っておらん…！！

春麗…君はまた遙か五老峰で祈ってくれているのだろう…いつも俺の為に祈り続けてくれた君…。だけど…こんな戦いも…もう、これが最後だ…さよなら、春麗…。

「紫龍…！？」

「さあ、いくぞ…！」

「死ねドラゴン…！」

「…『ブラッド・フラウア・シザー』…！」

「…『グランド・アスクラツシャー』…！」

「…『アナイアレーション・フラップ』…！」

「老師…！貴方に授けていただいた力のすべてを今ここに…！」
山百龍霸さんひやくりゅうはく ツ…！！
盧ろ

……。

「紫龍は確かに素晴らしい男です。…ただ、彼は『愛情』よりも『友情』そして『義』を優先させます。彼を愛している春麗は紫龍が戦いに出る度に、涙し、彼の無事を祈ります…。紫龍は、春麗を哀しませている自覚を持っています…。それでも彼は、春麗を一

人残り戦いの場に出向きます……」

童虎は、エリオとキヤロを紫龍の様な『素晴らしくも哀しい人間』にしたくないのだろう。

『冥王』との聖戦の前に沙織が星矢たちに望んだように、ごく普通の少年少女として安らかに生きて欲しい……と。

「ところでクロノ君。君から見てどうだい？君が見守ってきたエーヌ達は」

「……なのはやはやて達のことか？今更僕が語るまでもない。それぞれ優秀な『魔導師』だよ」

希少能力と固有戦力を持つて、支援特化型で指揮能力を持つ八神はやて特別捜査官。

法務と事件捜査を担当、多様な魔法と高い戦闘力で単身でも動けるフェイト・T・ハラウン執務官。

部隊メンバーを育てることが出来て、こと戦闘になれば単身でも集団戦闘でも、ある例外を除いてあらゆる戦況を打破してみせる『勝利の鍵』、高町なのは教導官。

「……あの三人も、管理局に入局当初は危ういところがあったが、カノンさんやムウさん：アイオリアさんのお陰で成長したからな」

なのはは『無茶』はするが『無謀』さが無くなり、フェイトは精神面が強くなった。

はやては以前の純粹さがなりを潜め、腹黒くなってきているのが少し心配だが……遅くなった。

「三人揃えば、世界のひとつやふたつ軽々と救ってくれそうだなってさ……。かの『三提督』の現役時代みたいに……」

聖闘士や海闘士の様な『神の闘士』が絡まなければの話だが……。

「まあ夢物語ではあるがな。部隊の魔導師は保持制限があるし、それぞれの進路もある」

「……ねえ、カノン。今更だけどいいの？」

「何がだ？」

「……聖域を留守にして……」

現在、聖域には黄金聖闘士が一人も残っていない。

カノン、ムウ、アイオリアの三人が此方に来ており、童虎は第61管理世界『スプールズ』にいる。

つまり今の聖域には、候補生達しかいないのだ。

フェイトはこの隙に脱走者が出るのではないかと、心配している。今、聖域から脱走しても、カノン達なら必ず探し出して連れ戻し、処刑するだろう。

いくら掟とはいえ、やはり人が死ぬのはいい気分ではない。

カノンとムウはその辺りはシビアなので躊躇せず処刑するし、三人の中で一番優しいアイオリアでも、脱走未遂なら目を瞑るだろうが完全に脱走した者を庇うことは出来ないだろう。

「フツ……。今回俺たちが聖域を留守にしたのには理由がある……」

カノンがフェイトに説明しようとした時、アイオリアがカノンに声を掛けてきた。

「カノン。リーゼ達から念話が来た。網に掛かったようだ」

「そうか……フェイト……後でな……」

カノンはそう言うのとレクリエーションルームを後にし、あらかじめクロノから借りていた一室に入り、瞑想に入った。

第五十三話 同窓会（後書き）

聖域に潜入していた間諜たちが、神具を盗み逃亡を計る。しかし、脱出は不可能であった。

間諜たちの前に、『双子座』の黄金聖衣が立ち塞がる。

時空を超えた黄金の闘士

「双子座の迷宮」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十四話 双子座の迷宮

聖域。

その中央には大きな神殿がある。

そこが、カノンと候補生達の生活の場である。

この神殿は、古代ギリシア建築の3つの主要な建築様式の1つであるドーリア式建造物である。

ドーリア式建造物で有名なのは、最高峰と言われる『パルテノン神殿』である。

その神殿の最奥にある候補生達は立ち入る事を許されない一画

オリハルコン、ガマニオン、銀星砂などの希少金属と共に神の力を宿した様々な『神具』が納められた宝物庫に三人の候補生達が侵入していた。

彼らは管理局の……いや、『最高評議会』から送られた間諜であった。

彼らは、他の候補生達と違い、魔力量はAAランクに達していた。年齢はなのは達と同年代で、評議会直属の部隊のEーS級の魔導師である。なのは達には及ばないが……。

本人たちに自覚はないが、広告塔の役割を担わされているなのは達と違い、評議会直属部隊の為、一般局員には顔を知られておらず、人事部の責任者であるレテイですら彼らの事は知らない。

だから、彼らは他の候補生達と同様、魔力資質がE〜Fレベルしかないと偽り、聖闘士候補生達の中に紛れ込んだのだ。

最もその為、聖闘士の修行を科せられる羽目になり、あまりにも過酷で地獄の修行ぶりに、この任務に付いたことを後悔しまくっていたのだが……。

カノン達の留守を好機にと、行動を起こしたのである。

「……これが、『神具』？」

「これを持ち帰ること……それが『評議会』からの命令だ……」

「…我らはここでの地獄の修行を経て、『小宇宙』に目覚めた」

「つまり、この『神具』を使用することが出来る……」

「やはり、これほどの『力』を持つ『ロストロギア』は管理局で管理しなければ……な」

「よし、黄金聖闘士達がアースラから戻ってくる前に……ここから脱出するぞ！」

「その後、顔を整形してしまえばバレることはあるまい……」

彼らは目に付いた神具……それぞれ豊穰神^{デメテル}、鍛冶神^{ヘイストス}、酒神の神具^{デュオニョソス}を持ち宝物庫を出た。

他の神具は何処にあるか分からないし、いつカノンたちが戻ってくるか分からない……のでやむを得ず置いていくことにした。

彼らは気付いていなかった。

リーゼ姉妹が自分たちを監視していたことを……。

通路を駆ける三人は奇妙な感覚に襲われていた。

「……な……なんだ!？」

「来たときとあたりの雰囲気が違う……」

「急に真っ暗になった……」

「と……とにかく脱出だ!」

彼らは出口に向かって駆けた。

「な……何なんだ……この感じは？」

「まるで……光と影が交互に襲ってくるような感覚は……?」

「……明かりが見える……出口か!？」

出口に駆け込むと……そこは!？」

「こ……ここは!？」

「バ……馬鹿な……!？」

「宝物庫の……前!？」

何と……彼らはまた入口……つまり宝物庫に戻ってしまっていた。

「俺たちは道に迷ったのか？」

「いや、あの通路はそもそも一本道だった……」

「……早く脱出しないと……」

「どうする天井を魔法でぶち抜いて、空を飛んで逃げるか？」

一人がデバイスを展開する。

「やめる。ここで派手な行動をすると、他の奴らに気付かれるぞ……」
自分たち以外の候補生達は、あのような地獄の修行を強いられているにもかかわらず、カノン達『黄金聖闘士』に心酔している者が数多い。

基本的に、彼らを直接指導するのはカノンであり、かなり扱われるが、それでもその強さに敬意と畏怖を抱いている候補生は多い。

最も、候補生に人気があるのはアイオリアであり、彼のさりげない気遣いを受け、救われた者たちは数知れない。

童虎は、たまにしか聖域に訪れないが、彼の器量と偉大さは皆知るところである。

自分たちの行為を彼らが知れば、間違いなく妨害してくるだろう。

もともと管理局の武装隊志望だったくせに、今ではすっかり聖闘士側になってしまっているのだから……。

いかに自分たちがAランクも魔導師で、小宇宙に目覚めているとはいえ、他の候補生達も、小宇宙に目覚めている者は存在している。取り囲まれれば、流星に数で劣る自分たちが取り押さえられてしまう。

「とにかく、もう一度突破を試みよう……」

三人は再び、通路を駆け抜け抜けようとした。

「……おい、妙だぞ？」

「ああ。今度はいくら走っても出口が見えない……」

「もう、数十時間も走っている気がするが……」

「それでいて、まだ数分しか経っていない様な気もする……？」
走っている三人の時間感覚が狂っていた。
そして…走り続ける三人の前に人影が現れた。

フッフッフ……まんまと網にかかりおったな……愚か者共よ……！

「な…何!？」

「お……お前は!？」

……お前たちは迷い込んでしまったのだ……『双子座』の迷宮に
な……!!

三人の前に立ち塞がったのは、フル装着状態の『双子座』の黄金聖
衣イトであった。

「…ねえリニス……カノンは何しに行ったの？」

「…さあ…私も聞いていませんから……」

席をはずしたカノンをいぶかしむフェイトだったが、リニスは本当に知らないようであった。

「…流石に料理の作りすぎで疲れたらしく、少し休むらしいぞ」

アイオリアがフェイトにそう答える。

「……リーゼ達からの連絡って言うのは？」

「何かカノンが、留守の間仕事を頼んでいたらしくてな。それが終わったとの報告だ……」

【……泳がせていた奴等を処理するんですか？】

【……奴らが他の候補生達のように…聖闘士を目指す者としての自覚を持つてくれたなら、こんなことはしなくてもいいんだが……】
フェイトと話しながら、アイオリアはムウとテレパシーで話してい

た。
結局、奴等は掟を破ろうとしている。
奴等を見逃せば示しが付かないので、言い方は悪いが見せしめとして、掟通り奴等を処刑せざる得なくなつた。

「ば……馬鹿な……、あんたは今、『アースラ』に行っているんじゃないのか？」

「フツ……俺たちが留守だと言えば、貴様らが行動を起こすと思つてな……」

「……クツ……嵌められたか……」

彼らは、カノン達が自分たちの正体に気付いていたことを知り、齒噛みした。

「……それにしても……秩序を護る『時空管理局』とやらが、空き巢紛いの事をするとは……同じ局員であるクロノやヴェロツサが知れば、嘆くだろうな……」

『双子座』は侮蔑のこもつた声で糾弾する。

「このような『ロストロギア』は、管理局で管理しなければならぬんだ！それがわからないのか！？」

流星、最高評議会の直屬部隊である。

傲慢さも、他の管理局員の比ではなかつた。

「フツ……。どの道、貴様らの行為は無意味だな……。そもそも大事な『神具』を貴様ら如きが、そう簡単に手に出来るような場所に置いておくと思うか？」

「な……なんだと！？」

彼らは、自分たちが手にしている神具を見る。

「それは、ムウが作った精巧な模造品……つまり……ブラフだ……」

『双子座』が、彼らをあざ笑う。

「本物は『靈血』^{イコーブル}で作つた符によって封印してある」

カノンが持っていた『霊血』は、この聖域を見つけた時にムウが預かっていた。

ムウは、師である教皇シオンから、アテナの『霊血』を用いて『封印の護符』を作る方法を伝授されていたのだ。

「貴様ら管理局は、この場所を見つけておきながら、ここに張られたアテナの結界を破れず監視するに留めていた。そんな貴様らでは、あの封印を解くことは適わぬ……。残念だったな……」

アテナの『霊血』の効果は、二百数十年続く……。

その封印を途中で解くには、アテナの力を用いなければ不可能。

つまり、現在ムウが所持しているアテナの『霊血』を用いない限り、封印を破ることは出来ない。

「ちくしょう……。任務失敗か……」

「地獄に耐え、ようやくチャンスが巡ってきたと思ったら……」

「俺たちの経歴に傷がついてしまった……。俺の出世街道が……」
まんまとしてやられた三人は、持っていた神具の紛い物を地面に叩きつけ、悔しがった。

「フツ……。経歴も出世もはや気にする必要はない……。貴様らが聖域に来たときに宣言した筈だ……。脱走者に待っているのは『死』だと……。さらに貴様らは未遂とはいえ、『神具』を盗もつとした『逆賊』……。これから死ぬ貴様らが経歴や今後の出世を気にする事など無意味だ……」

カノンは、彼らが管理局の間諜だと気付いていたが、自分自身がつて逆賊だった事もあり、チャンスを与えてきた。

行動を起こすまでは気付かぬ振りをし、アテナが、城戸沙織がどれほど素晴らしい女神かということを説明し、クロノやロツサ同様、彼らが『小宇宙』に目覚めた時にアテナの神具に込められたアテナの『小宇宙』に触れさせたりもした。

彼らにもアテナの雄大な小宇宙に触れさせることにより、愚行を思い留まらせようとしたのだ。

しかし結局、それは無駄であった。

彼らは、クロノ達の様に次元世界の平和を願い、管理局に入局したのではなかった。

ただ、己の栄達の為だけに管理局に属したに過ぎない。

昔のカノンも似たようなモノであるが、アテナの『愛』に触れ改心した。

カノンは、彼らにそれを期待したのだ…しかし…それも徒勞に終わったようだ。

「もはや、お前たちにかける情けは持たぬ……。ここで『逆賊』として制裁する！」

『双子座』は一步一步、足を踏み出し…彼らに近づいていった。

「……こんな所で死んでたまるか…。AAランクの魔導師を舐めるなよ！セツトアップ！！」

彼らのうちの一人が、インテリジェント・デバイスを起動させ、『バリアジャケット防護服』を纏う。

「……普通の攻撃魔法では、黄金聖闘士には通じないが…これならどうだ…『フリーズキャノン』！！」

《Freeze Cannon》

クロノがよく使用していた『ブレイズキャノン』は『炎』の名の通り、熱量を伴う破壊魔法であるが、この魔法は『凍結』フリーズの名の通り、相手を凍りつかせる凍結魔法である。

破壊が無理なら凍結させようと考えたようである。
だが…。

「な…何iiiiiiii！」

『フリーズキャノン』はまったく効果がなかった。

「……この程度で『黄金聖衣』を凍結させることは出来ん」
すべての物には凍結点というものがある。

水が摂氏〇 で凍るように、アルコールが零下114.5 で凍結するように、聖衣にも凍結する温度がある。

『フロンスクロス青銅聖衣』は、零下150 以下で凍りつく。

たとえば、永久氷壁から生まれた氷の聖衣である『キグナス白鳥星座』でも例

外ではない。

『シルバークロス白銀聖衣』は、

零下200 以下でその機能を停止させる。

だが、『黄金聖衣』を凍結させるには、零下273.15 ……つまり、すべての物質が凍結される『絶対零度』ぜったいれいどでなければならない。しかし、いかに魔法でも『絶対零度』の凍結魔法などは存在しない。クロノがグレアムから託された氷結の杖『デュランダル』にセットされたオーバースランクの凍結魔法『エターナルコフィン』も、『絶対零度』には達していない。

氷の闘技を身につけた聖闘士といえど、『絶対零度』の凍気を作り出すことは難しい。

『絶対零度』に達した氷の聖闘士は『白鳥星座』の氷河以外、確認されていない。

氷河の師である『アクエリアス水瓶座』の黄金聖闘士カミュでさえも、『絶対零

度』には僅かに及ばなかった。

その後、残り二人も次々と攻撃魔法を放つがそのすべてが無力化されてしまった。

「……気が済んだか……。ならば、異次元に跳んで行け『アナザーデイメンション』!!」

異次元の入口がぼつかりと口を開ける。

「うわあああああああああああああ!!」

「くそっ…脱出を……」

「だ…駄目だ…飛行魔法がデリートされた!す……吸い込まれる!」

『アナザーデイメンション』によって開けられた異次元空間は、魔導師たちにとって落ちたが最後、二度と出ることが不可能な『虚数空間』に等しい空間であり、すべての魔法がデリートされてしまう。AMFは、対策次第でなんとかなるが、虚数空間は魔導師ではどうすることも出来ない。

それに等しい空間を操れる『アナザーデイメンション』を持つカノンは、ある意味、魔導師の天敵と言えるよう。

彼らはそのまま、異次元空間を漂うことになる。
時間感覚が狂い、自分たちがどれほどこの空間を漂っているかも知覚できず……その命が途絶えるまで……。

三人が異次元空間に跳ばされた後、通路は元の状態に戻り、『双子座』の聖衣は分解し、オブジェ形態に戻った。

そう、カノンはその場には居なかったのだ。

アースラの一室から、『双子座』の聖衣を遠隔操作で操っていたのだ。

かつて、サガが『教皇の間』から双児宮の『双子座』の聖衣を操り、星矢達を迎え撃った時のように……。

瞑想を終えたカノンは、レクリエーションルームに戻った。

「……カノン。お帰り……大丈夫？」

「ああ。さすがにあれほどの料理を作るとなると、戦闘とは違う意味で疲れるものだな……」

出迎えたフェイトに笑顔で応える。

その後、カノンは何食わぬ顔で、パーティーを楽しんでいた。

翌日、候補生達に彼ら三人が脱走を試みた為、処刑された事が通達された。

第五十四話 双子座の迷宮（後書き）

休暇を利用して、はやての研修先に遊び来たのはとフェイト、そしてアイオリアは現地で起こった空港火災の救助活動に参加する。そこで、二人の少女を救出する。

時空を超えた黄金の闘士

「空港火災」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十五話 空港火災

同窓会任務から、約二週間後。

なのはとフェイトは、保護者代行としてアイオリアを伴いゴールデンウィークGWの連休を利用してはやての研修先に遊びに来ていた。

八神家は、基本的に仕事が終われば皆、家に帰ってくる。

聖域で、カノンと共に候補生達の指導や畑仕事等をしているアイオリアも同様である。

しかし、現在はやては研修中なので、家に帰っていない。

まだ二週間しか経っていないにも関わらず、アイオリアに会いたくなつたはやてが、無理を言つてなのは達に同行してもらつたのだ。

高町家の面々も、アイオリアに同行してもらつた方が安心できる。

既に社会に出ているとはいえ、日本の常識では中学三年生が保護者の同伴無しで、しかも海外どころか別世界を旅行するのは不安である。

少し、過保護だと自分たちも思っているが、どれだけ強くなっても、心配は心配なのだからしょうがない。

ミッドチルダ北部 臨海第8空港。

そこから、少し離れた場所に二人の男女が佇んでいた。

「……あの空港にあるのは間違いありませんわ……」

「……そうか……。しかし、『レリック』とやらは、それほど必要なものなのか？ 『機械人形』……」

「……私の名前はクアットロです。その呼び方は止めていただけませんか？ 『ナツクラヴィ』様……」

「……我等に味方するというのが、本当に真意なのか……まだ見極めではおらん……。造物主をそう簡単に裏切れるとは思えんので……」

スカリエツテイの『戦闘機人』？4、クアットロと、海闘士マリーナの一人『ナックラヴィ』であった。
この『ナックラヴィ』は『人魚姫』、『海賊』、『海女王』と同格の海闘士であり、『海龍』シードラゴンに付き従う地球から流れてきた最後の正規の海闘士である。

「……フン。あのような情けない男……とうに見限っております。あの程度の事で私たちの崇高な目的を諦める等、ドクターもウーノお姉さまも、トーレもチンクちゃんも……所詮、その程度……。むしろ『海龍』様の目指されている事は、私達の……いえ、私の崇高な目的に近い……。つまり、貴方達につくのは私の目的に合致するからですわ」

クアットロは調整を受け、洗脳されたのではなく、自らの判断で改心したスカリエツテイを裏切り、『海龍』の側についたのである。

「……できれば……、なんとかドウーエお姉さまと接触して、此方側に来てもらいたいんですが……」

クアットロにとって？2、ドウーエこそが戦闘機人の理想である。

妹達には優しいが、敵には等しく残酷……。

「フン。そんな妹達に優しい姉が、造物主とその妹達を裏切った者に同調する筈もあるまい……。寝言は寝てから言え……」

『ナックラヴィ』の指摘に、反論しようとしたクアットロだったが、それが中断された。

突如、空港が爆発したのである。

「な……何事だ!？」

「……あの爆発は『レリック』の暴走……?」

炎に包まれた空港。

災害担当の局員が必死に鎮火作業に当たっていた。

「駄目だ駄目だ。こっちは駄目だ!」

「この先に子供が取り残されているんだ…なんとかならないのか？」
「さつき、本局の魔導師達が突入した。救助は彼らがしてくれる！」
ミッドチルダがいかにも魔法文明とはいえ、そこに住む人間がすべて魔導師というわけではない。
むしろ、資質を持たない人間の方が多い。
だからこそ、魔導師が優遇されているのであり、特に高ランク魔導師はエリートとして扱われるのである。
本局以外の管理局ではむしろ、魔力を持たない局員も多く、この場にいる災害担当の局員達も魔導師ではなかった。

「お父さん……お姉ちゃん……」

一人の少女が燃え盛る炎の中を歩いていた。

「きゃあああああ！」

震動が起こり、少女の傍らで小爆発が起こり、少女を吹き飛ばした。

「……痛いよ。熱いよ……。こんなやだよ……。帰りたいよ……」

蹲る少女の後方にある女神像の土台に輝が入る。

「……誰か…助けて……」

ついに土台が砕け、女神像は少女に向かって倒れこんだ。

少女もそれに気付いたがどうすることも出来ず、目を閉じる。

「……『ライトニング・プラズマ』！」

秒間一億発の拳が、倒れようとした女神像を粉々に粉碎し、その破片も少女から離れた所まで吹き飛ばされた。

「…大丈夫か!？」

黄金の鎧を纏った男……『獅子座』のアイオリアが少女に駆け寄り、聖衣と共に纏っていた純白のマントをシオルダーから外し、少女に被せた。

「……よく頑張ったな……」

マント越しから感じる暖かな温もりを少女はしっかりと感じていた。

「アイオリアさん！」
そこへ、白い『バリアジャケット防護服』を着た魔導師の女性がアイオリアに駆け寄った。

「なのは！俺はこれより奥の方の様子を見に行く。お前はこの子を頼む」

「分かりました。お気をつけて」
アイオリアはなのはに少女を預けると、そのまま奥の方に突入して行った。

「もう大丈夫だからね。安全な場所まで…一直線だから…」
なのははそう言うと少女の周りに結界を張る。

レイジング・ハートが上方の安全を確認し、カートリッジをロードする。

「…『デイバイン・バスター』！！」
レイジング・ハートを天井に向け、桃色の閃光が放たれる。

閃光は、易々と天井を貫通し、上空への出口が開かる。
なのは、少女を抱え飛行魔法で飛び立った。

「……あれでは『レリック』の回収は無理ですね…」
クアットロは炎に包まれた空港を見ながら嘆息した。

「……火災自体は問題ないが……火災の原因がその『レリック』とやらならば……」

「ええ。もう本体は使い物にならないでしょうね…」
クアットロと『ナッククラヴィ』が、その場を離れようとしたとき、炎に包まれた空港から一筋の閃光が走った。

「…あれは!？」

「桃色の魔力光……『管理局の白い悪魔』……」

「…ほう。以前、雑兵共が殺し損ねた魔導師か……」

『ナッククラヴィ』は感嘆した。

「…なかなかの威力だ。いかに鱗衣スケイルを纏まとっていてもダメージは受けるだろうな…。まあ、『当たれば』の話だが……」
魔導師たちが着る『防護服』よりもはるかに防御力の高い鱗衣とはいえ、すべての衝撃が防げるわけではない。

海將軍の鱗衣ならまだしも、それよりも強度が低い自分の鱗衣では、多少の輝は入るかもしれない。

「……『海龍』様が、魔導師を警戒されている理由も分かる…。これで、我等に匹敵する『速さ』があれば脅威だっただろうな…」

奥の方に突入したアイオリアは、フェイトと合流した。

「8番ゲートに要救助者を確認されたようだよ」

「よし、直ぐに向かうぞフェイト…」

火の勢いが増す中、二人は突入して行った。

「くそ…。こんなときにムウがいてくれれば、もっと早く要救助者を救えたんだろうが……」

ムウならば、場所さえ確認できれば外からでも、要救助者を轉移させることが可能である。

並大抵の轉移魔法などよりも確実に……。

「無いものねだりしても仕方が無いよ……。いくらムウでも、旅先でこんなことが起こるなんて予想が付く筈ないし……」

「…だな…。急ごう…」

炎の中、三人の女性が咳き込みながら、救助を待っていた。

そこに、フェイトとアイオリアが駆けつけた。

「もう大丈夫ですから……」

フェイトは、女性たちを包んでいたバリアの上からさらに強固なバ

リアを張る。

「直ぐに安全な場所までお連れします」

「あ……あの……」

「はい？」

「……あの……魔導師の女の子が、このバリアを張ってくれて、それから……妹を探しに行くって……あつちに……」

女性が指差した方には炎の壁が出来ていた。

「よし、俺がその子を助けに行く。フェイトは、その人達を避難させてくれ！」

「……うん。分かった……気をつけてね」

「……スバル……スバル……返事をして……」

長髪の少女が、妹の名前を呼びながらかね折れスロープを這いながら上っていた。

「……お姉ちゃんが……すぐに助けに行くから……」

「見つけた！」

そこに、アイオリアが駆けつけた。

「大丈夫か！」

少女に駆け寄り、抱き上げた。

「もう大丈夫だ……」

「……あ……あの、妹がまだ……」

「そういえば、妹を探しているそうだな……どこではくれたか分かるか？それと……妹の名前は？」

「……あの、エントランスホールの方ではぐれてしまって……名前はスバル……ズバル・ナカジマ……11歳です……」

「……エントランスホール……。妹はショートヘアの娘か？」

アイオリアは、先ほどのなには託した少女の顔を思い浮かべ、目の前の少女と見比べた。

「…さつき助けた少女に似ているな…【なのは、先ほどの少女の名前は、分かるか?】」

【……スバル・ナカジマ……11歳。さつき無事に救護隊に渡しました。部隊指揮をとっているはやてちゃんにも伝えただけ……お姉ちゃんはまだ中にいるんだって……】

【そうか。今、その子の姉を保護した。その旨を伝えておいてくれ……】

【了解!】

アイオリアは、少女に妹を救出した事を伝えた。

「…スバル…良かった…」

「よし、それじゃあ脱出……」

そのとき、アイオリアの足元が崩落した。

「きゃあああああ!!」

「チイ!」

二人ともそのまま落ちていくが、アイオリアはすぐさま飛行魔法を発動させた。

「アイオリア!大丈夫!!」

先ほどの要救助者を避難させたフェイトがこちら駆けつけて来た。

「先ほどの女性たちが話していた少女を保護した……名前は……」

「……ギンガ…ギンガ・ナカジマです……。陸士候補生13歳です……」

アイオリアは、ギンガをフェイトに渡すと、さらに奥の方に向かった。

「その子の事は任せただぞ!」

「うん!…候補生か…未来の同僚だ……」

「きよ…恐縮です」

フェイトはギンガを避難させるべく飛び立った。

その後、アイオリアは数名の要救助者を救出した。

「…ふむ。こういう時は、聖闘士としての力よりも、魔法の方が役立つな…。カノンも言っていたが…戦闘以外では、魔導師の方が聖闘士よりも優れている部分はたくさんあるな…」

アイオリアは、A A Aランクの魔力を持っているので、時折、はやて達に魔法を学んでいた。

そのお陰もあり、この災害救助にも大いに役立っている。

そうでなければ、ムウやカノン程の強い念動力を持たないアイオリアでは、大した手伝いは出来なかったかも知れない。

その頃、外において…到着した応援部隊の指揮官、ゲンヤ・ナカジマ三佐に部隊指揮を任せたはやては、リインフォース？^{ソウライ}をゲンヤのサポートに廻し、リインフォースと融合して消火作業を行っていた。

「灰白^{ほのしろ}き雪の王、銀の翼^も以て、眼下の大地を白銀に染めよ！」

はやての周り、4個の氷結立方体が現れる。

「八神一尉。指定ブロック避難完了です！」

「お願いします！」

「了解！来よ、『氷結の息吹』！！」
アイテム・デス・アイセス

圧縮した気化氷結魔法を打ち込む事で着弾点周囲の熱を奪い、空港まるまる飲み込み凍結させた。

「すっげー」

「これが、オーバーSランク魔導師の力…」

はやてのみだと、微調整が困難なのだが、リインフォースと融合しているので完璧に調整できていた。

次の凍結可能ブロックを探そうとした時、上空から此方に向かってくる光が見えた。

「遅くなつてすまない。現地の局員と臨時協力のエース達に感謝する…あとは此方に任せてくれ」

本局からの応援…首都航空部隊がようやく到着したようだ。
「了解しました。引き続き協力を続けますので、指示をお願いします」

「ふう〜、やっと来たか……」

ようやく到着した応援に、ため息を吐くナカジマ三佐。
「もほつと息を吐く。」

「だが…まだ油断はできねえ……。もちつと情報整理を頼んでいいか？」

「了解です!!」

今回の空港火災は、利用者・職員ともに多数の負傷者を出し、空港施設がほぼすべて消失する記録的な事故であった。

しかし、奇跡的に死亡者は出なかった。

その鎮火救出劇において、現場に居合わせた三人の魔導師と一人の聖闘士の働きがあったことを知る者のいない事実である。

第五十五話 空港火災（後書き）

火災の翌日、アイオリアはゲンヤと管理局に出向する聖闘士の部隊について語り合った。

そして、はやても「自分の部隊を持つ」という夢をこの時明らかにする。

時空を越えた黄金の闘士

「新部隊構想」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十六話 新部隊構想

空港火災の翌日の早朝。

アイオリアとリインフォースは、火災現場がよく見える場所に立っていた。

偶然だが、この場所はクアットロと『ナッククラヴィ』が火災時に居た場所でもある。

「よお。お前さんがアイオリアかい？」

陸士の制服を着た男性が声を掛けてきた。

「…貴方は？」

「陸上警備隊108部隊のゲンヤ・ナカジマ三佐だ。アンタの事はレジアス中將から聞いて知っている」

「…ナカジマ…あの少女達の…？」

「ああ。父親だ…。昨日は娘二人を助けてくれて感謝している……」
ゲンヤは、アイオリアに深々と頭を下げた。

「……思い出した。前にレジアス中將が言っていた聖闘士を地上本部に向わせる時の預かり先が……」

「俺の部隊が預かるようレジアス中將から通達を受けている……」

レジアスとの会談で、検討されている聖闘士の地上本部出向の折、局員と聖闘士の不和が予想された。

一般局員はともかく、魔導師の局員との間に確執が生まれる可能性が高いと判断されたのだ。

聖闘士は、戦闘能力にかけては魔導師を上回る。

聖闘士の最下級の青銅聖闘士でも、オーバーSランクの魔導師と互角以上に戦えるのである。

逆に、現在は存在していないが魔導師の最高ランクであるSSSランクの魔導師でも、聖闘士の最高位である黄金聖闘士と互角に戦えるかといえば、否である。

空戦魔導師で、広域や砲撃魔導師が遠距離から攻撃しても、光速の

動きを持つ黄金聖闘士にはまず当たらないし、直ぐに間合いを詰められる。

もしくは、念動力で引き寄せられる。

そして、光速の攻撃を躲す事も防ぐ事も敵わない。

これより聖闘士となる候補生達にそういう優越感がないとは言えないだろう。

たとえ、それが自分自身ではなくても……。

それに対し、魔導師達としては、聖闘士候補生達が魔力資質がE、Fの者達で、武装隊の志望から落ちこぼれた者たちだという事実を知っているという点である。

既に魔導師達は、魔導師の落ちこぼれ達が聖闘士の方に流れたという噂が広まっていた。

他の管理世界で任務に従事する魔導師達は、未だ聖闘士に事を知らない者が過半数を占めるが、本局やミッドに在任中の魔導師の殆どは、既に聖闘士の存在を認知している。

互いが互いを見下し、それが確執になりかねないのだ。

そこでレジアスは、一般職員と魔導師のどちらにも人望が厚いゲンヤに任せる事にした。

レジアス自身も人望はあるが、同時に敵も多い。

ゲンヤは、レジアスと同等の信望を得ており、更にその人柄故に敵が少ない。

更にレジアスとは違い、本局や航空の人間とも親交がある。

出世に関してはレジアスが勝るが、人脈に関してはゲンヤの方が上。レジアスは、ゲンヤならば盲くやれると思い、彼に一任することにした。

「…聖闘士を外向させる事は、ほぼ決定している。どうやら、あいつ等もモノになってきているしな。ただ、どうしても手に負えない場合は此方に連絡してくれ。その時は、此方で制裁を加える…」

聖闘士の制裁……それは『死』である。

明確に口にしていないが、ゲンヤはなんとなく理解した。

「出来れば…そんな事にはならないで欲しいな…」

「…そうだな…。ところで今回の火災の原因は何なんだ？」
「ゲンヤは今回の事件の説明を始めた。」

この件に関してはまだ機密事項なので、本来、管理局の人間ではないアイオリアに説明するのは問題なのだが、アイオリアは今回の救助活動に参加しているし、レジアスからも彼ら聖闘士に対しては、出来るだけ便宜を図るよう言われている。

「……原因は、密輸物の爆発による発火…あつという間に空港全体に広がってしまったらしい……」

「…密輸物!？」

「ああ……どうやら『ロストロギア』らしい…どういつシロモノなのかはまだ調査中らしいが……な」

後日、そのロストロギアが二週間前の任務で回収したモノと同じ『レリック』である事が判明する。

ホテルに戻ったアイオリアとリインフォースは喫茶室で早めの昼食をとることにした。

サンドイッチと紅茶を注文し、先ほどのゲンヤとの話について話していた。

「それにしても……妙な縁だな…」

「何がだ!？」

「ああ、今、主はやては陸士部隊で研修をしている……、そして今回の事件の処理が終わればナカジマ三佐の下で研修することになっているらしい…」

「…なるほど…。しかし、偶然なのか？レジアス中將が裏で手を回した…とか？」

アイオリアとはやての関係を考え、やがて聖闘士達の面倒を見ることになるナカジマ三佐と面識を持たせるために仕組んだのではない

か？

「いや、それはないだろう」

レジアスは、どちらかといえばアイオリアを除く八神家の面々の事を快く思っていない。

アイオリアの協力を得るために、表立ってはやてを批判しなくはなつたが、内心では分らない。

アイオリアにしても、急に考えを変えられるモノではないと分かっているのです、今はそれでよしとしている。

それは、これからはやての行動次第である。

以前に顔を合わせた時に感じたことだが、レジアスは決して暗愚な人物ではない。

『犯罪者』という偏見を払拭できれば、きっとはやてを認める事ができるだろう。

「リア兄、リインフォース…おはよ！」

「リア兄様、お姉ちゃん…おはようございます！」

「おはようございます。アイオリアさん。リインフォースさん」

「おはよう。アイオリア、リインフォース」

はやて達がようやく部屋から出てきて、アイオリア達と合流した。

「もう昼だ…。いくら昨日の事件があつたときいえ、寝坊しすぎた

…」

「ははは。もっと前に目は覚めとつたんやけど…：…ちよつとなのはちゃん達と夢の事で話があつたんよ」

「何か、妙な夢でも見たのか？」

「いや、そつちの夢やなくて…：…将来のことや…」

はやては、いつか自分の部隊を持ちたいという夢をアイオリアに語つた。

今回の災害救助や、犯罪対策、発見されたロストロギア対策もミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅すぎる…。

少数精鋭のエキスパート部隊を作り、それで成果をあげていけば上層部も少しは変わるかもしれない

そして、はやてがそんな部隊を作れたら、なのはとフェイトもそれに協力することを約束した…とのことだ。

「……………」

アイオリアはため息を吐くと、はやてを手招きした。

はやてが近づくと、拳骨がはやての頭に落ちた。

「痛ッ！いきなり何すんねん…リア兄！」

「……………確かに、お前の言っている事は事実だし、お前の作りたいたいと思っている部隊構想は良いと俺も思う……………それになのはとフェイトが協力することも…な…だが…」

「主ははやてが言われた地上本部おかの行動が遅い…などという発言を、本局うみに所属している者が言って良い台詞ではありません…」

「どういうこと？」

「……………地上本部の行動が遅いのは、純粋な人手不足だ…。人手不足は本局も航空そぶも同じだが、地上は特に深刻だ…。原因は、本局が優秀な人材を独占しているから……………つまり、本局にも原因がある」
アイオリアは、以前、レジアスから見せられた資料のことをはやて達に伝えた。

「なのはが、航空戦技教導隊に所属しているのは良い。聞いた話だとお前の教導は評判が良いらしいから、天職なのかも知れん。フェイトにしても、はやてにしても能力に合った職場に配属されていると言っていていいだろう……………だが、正直、管理局は外の事ばかりに目を向けて、地上の方をおろそかにしていると思えん。確かに広大な次元世界の治安を護らなくてはならないのだから、人手はいくらあっても足りんのは分かるが……………自分の足元を疎かにするようでは話にもならん」

まあ、カノンなどに言わせれば、一つの組織が無限近く存在する次元世界すべてを管理できる筈がない……………とのことなのだが…。

その中で魔法文明の『管理世界』のみとはいえ、それでもその数は膨大であり、『管理外世界』といえど先の『P・T事件』、『最後フレシアテスタタロッサの闇の書事件』のように、ロストロギアが持ち込まれれば、管理局

が対処している。

それでは人手が足りなくなるのは当たり前である。

更に次元犯罪やロストロギア関連以外にも、各世界の軍事バランスや世界内での戦争や紛争の調停まで行っているのだ。

それは間違いなく内政干渉であり、そこまで管理局がする必要はない。

如何に管理世界とはいえ、それはその世界に住むその世界の人間の役割である。

それでは管理世界はミッドチルダの……いや管理局の植民地としか思えないのだ。

古代ベルカの戦争時代や『P・T事件』で起こった次元断層や『最後の闇の書事件』の『闇の書の闇』の様に、他の次元世界を滅びに巻き込むのなら話は別だが……。

それゆえに、アイオリア達は管理局を完全に信用できないのだ。

管理の名の下に、次元世界の征服をたくらんでいるのではないか……という疑念が生まれるのだ。

たとえも三提督の人柄に好意を持っていても、一般局員たちは心から次元世界の平和を護るといふ大儀を信じている事を知っても……。逆に、その内政干渉を平然と受け入れる管理世界の方に対しても憤り感じざるおえない。

以前、アイオリアとカノンはクロノからある管理世界のことについて聞かされた。

その世界の為政者たちは、管理局がそういった介入をしてくることをいいことに、丸投げして自身たちは利権漁りに奔走しているらしい。

その世界は、かなり高度な魔法文明で、ミッドチルダの魔法文明もその世界の文明の良いところを組み込んでいるほどである。

故に、管理局が創設されて直ぐに管理世界に指定された程である。にも関わらず、その世界の為政者の体たらくぶりにアイオリア達は呆れ返ってしまった。

話がそれたので戻そう。

先ほども述べたように、次元世界の方も手が足りないのは分かる。しかし、地上は地上で問題なのだ。

危険なロストロギアの違法捜索や不法所持……。

さらにはそれらの密輸問題……。

管理局のみがロストロギアをすべて管理する……と言うのも異論はあるものの、明らかに金持ちのコレクションでは済まない危険物などを個人が所有するのは確かに問題であるのも事実である。

地上本部は、それだけではなく一般犯罪などの取り締まりも行わなければならぬので、決して疎かにして良い部署ではないのだ。

にも関わらず、若い魔導師達は、本局「キャリア組。地上」ノンキャリアというイメージを持っているらしい。

実際、地上本部に配属された高ランクの魔導師達は、本局からスカウトされるとホイホイその話に乗ってしまう。

「はやて……。お前がそう思っていない事は知っているし、地上の本局に対する態度が悪いことも知っている。しかし、原因の一つは本局にもあるのだ……。余計な争いの原因になりかねんから、口を慎め……いいな」

陸軍と海軍が対立する……というのは、どこの世界でも珍しい話ではない。

だが、対立することでお互いが練磨しあうのならともかく、今の本局と地上は足を引っ張り合っている。

それでは、いつまで経っても改善しないのだ。

「うん。地上本部の事情も知らんと、少し口が過ぎた……。反省します……」

とりあえず、己の間違いを認める器量がはやてにはあるので、アイオリアはホツと息を吐いた。

「でも、私の夢自体は否定せんのやろ？」

「無論だ……」

説教はされたが、アイオリアも自分の夢を認めてくれたので、はや

ての表情は明るくなった。

それにしても、今回の発言といい、出会った当初と比べて、段々腹黒くなるはやてに、アイオリアとリインは少し嘆息するのであった。

第五十六話 新部隊構想（後書き）

ある犯罪組織の研究施設で、炎熱の融合騎が囚われていた。合成された獣との戦いの中、融合騎はロードを得る。

時空を超えた黄金の闘士

「烈火の衝撃」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十七話 烈火の衝撃

新暦0073年。

とある研究施設において：一人の少女は囚われていた。

生まれた時の事を覚えておらず、自分の親が誰かという事も知らない。

ただ静かに、随分と永い間：眠っていた。

気が付けば、白い部屋で実験動物扱いであった。

自分が何の為に生まれてきたかが分っていただけに……今の境遇が辛かった。

生まれた意味を何一つ果たせないまま、死ぬ自由すら無く……苦しいまま、いつか心と体が壊れて終わると：少女は思っていた。

彼女はも『ヒト』の姿をしているが人ではなく、融合ユニオンデバイスであった。

……古代ベルカ式の純正の名もなき融合騎。

しかし、そんな地獄も終わりを告げた。

名無しの槍型アームドバイスを持った古代ベルカ式の『騎士』と、幼き少女……そして、黄金の鎧を身に纏った青年の手によって……。

スカリエッティの情報網から、犯罪組織の研究施設に『レリック』がある事を知った騎士ゼストと、彼の部下の娘である召喚士ルーテシア・アルピーノと『蠍座』スコルピオンの黄金聖闘士ミロは、冥闘士スペクターを差し向けてきた敵に奪われる前に『レリック』を確保する為に、施設に侵入した。

その研究施設では、管理外世界に稀に存在する高い魔力資質を持った者達を、魔力に目覚める前に誘拐し、実験動物として扱っていた。

その研究とは、魔力を持った人間と魔法生物とを組み合わせた『合メ合ラ』キ

成獣』を製造し、生体兵器として売買するのが目的であった。彼女は、そんな組織に偶然発見されてしまった。

古代ベルカの融合騎：騎士と融合する事の出来る融合デバイスは、『合成獣』を造る組織から見れば、格好のサンプルであった。彼女を研究し、彼女のレプリカを量産して、『レリック』と共に『合成獣』に組み込む事を考えたのだ。

そんな組織の、余りにも非人道的な研究に不快感を示した三人は、その組織を潰す事にした。

研究施設を潰し、アギトを解放し、その場を離れようとするゼストとミロを、ルーテシアが止めた。

「…なんだ？」

「どうしたルーテシア？」

「……置いてっちゃうの？」

「あれは、古代ベルカ式…レプリカではない純正の融合騎だ。火災に気付いてやってくる局員が見つければ、丁重な保護を受けるはずだ」

「そこでもまた……実験動物!？」

ルーテシアは不安であった。

次元世界の治安を護ると謳う時空管理局だが、その上位組織である『最高評議会』の存在が不安にさせていた。

今は改心したとはいえ、広域次元犯罪者として違法な研究を行っていたスカリエッティのスポンサーであったのが評議会だ。

ルーテシアの母であるメガーヌとゼストが『人造魔導師』の素養がある事を知り、躊躇いも無くルーテシアを拉致し、実験動物としてスカリエッティの下に送った評議会が創設した組織に一抹の不安を覚えるのだ。

例え、ルーテシアの拉致が、娘を案じるメガーヌの下に来させる為に評議会を利用したスカリエッティの策謀だとしても……。

「この連中ほど酷いモノでもない……そう、思いたいがない」

「…ゼスト。ルーテシアの危惧も最もだ。管理局の人間すべてを疑

うわけではないが、巡りあわせが悪く、ここの連中とたいして変わらん研究者に当たっては、この娘が余りにも救われん……連れて行くべきではないか？」

「しかし、我々は恐るべき敵を相手にしなければなりません……。三口殿やシャカ殿はともかく、私やスカリエツティは奴等との戦いで死ぬ事を覚悟しているが……。彼女を巻き込むべきではないのではありませんか……」

7年前の冥闘士と共にスカリエツティ達の前に現れた男の小宇宙は、三口やシャカから見ればそれほど脅威ではなかった。

しかし、ゼストやスカリエツティからすれば恐ろしい敵である。

こちらに三口やシャカがいるとはいえ、敵対する以上自分たちの命の保障が無いことは理解していた。

そんな危険に巻き込む訳にはいかない……と。

しかし、彼女は同行したい旨を伝えた。

「いいのか……融合騎……？」

「……もう……どんな相手であっても、自由を奪われるのは嫌だ！それなら……アタシを助けてくれたアンタ達について行きたい……」

彼女は融合騎……。

その存在理由は……。

スカリエツティと通信し、新しい情報を得ていた。

その情報では、この犯罪組織の研究施設はもう一つあり、そちらの方では本格的な『合成獣』の製造が行われていた。

「……かつてのお前以上の外道だということか？」

「そうだね。確かに私も人の事は言えないが、当時の私でも彼らの所業は不快だった……」

スカリエツティも生命操作や生体改造等を行っており、生命を弄んだ事には変わらないが、それでも完全に『ヒト』というカテゴリーと

は違う異形に改造したことはなかった。

それは、彼の美意識に反する行為であった。

「そう言っても、やはり私に彼らを弾劾する権利はない……。私に出来るのは…彼らに憤りを覚える君達に情報を伝えることくらいだ…。頼むよ騎士ゼストにルーテシア、そしてミロ…」

ルーテシアに『アギト』と名付けてもらった融合騎を加えたミロ達は、数日後にもう一つの研究施設を襲撃した。

アギトが捕らえられていた研究施設よりも大きく、管理外世界から拉致された魔力保持者も数多く囚われていた。

ちなみに、高町なのはと八神はやての出身世界である『第97管理外世界』の人間は一人もない。

地球には、ギル・グレアムやなのは、はやての様に高ランクの魔力保持者が発見されるが、それは極稀な例であり、地球に住む人間のほとんどはリンカーコアを持っていないのが実状である。

突然の襲撃者に対し、組織の者達は取り乱すことなく応戦してきた。しかし、元・首都防衛隊の古代ベルカ式、S+ランクのストライカー級の騎士であったゼスト、まだ幼いとはい近代ベルカ式、AAランクの召喚士であるルーテシアが最も信頼する『召喚虫』のガリユー、そして、そもそも戦闘レベルにおいて魔導師如きでは相手にすらならない黄金聖闘士のミロにBランク以下の魔導師達では歯が立たない。

魔導師ランクは単なる目安に過ぎず、高ランクなら必ず勝るといふわけではないが、ゼスト達は百戦錬磨である為、組織の魔導師達にとっては相手が悪すぎた。

劣勢を悟ったこの施設の責任者は、切り札を出してきた。

「……なんだこの部屋は…？」

「周りの棚にあるビーカーに入っているのは薬品？」

【その通りだよ…侵入者諸君！】

三口たちが入った周囲に薬品が入った棚のある広い部屋のスピーカーから声が響いた。

【私がこの研究所の所長だ……。ああ、気を付けたまえ。そこにある薬品は、火気を近づけたり、衝撃によって爆発を起こす薬品だよ。一つでも爆発させれば連鎖反応で次々と爆発するだろうね……。魔導師である君たちは結界を張れば無事だろうが、この施設程度ならば確実に全壊させられるだけの威力を保障するよ……。この施設にいる所員や実験体につれてきた者達は確実に爆死するだろうね〜】
余裕ある台詞から、どうやら彼は既にこの場にいないようである。組織の末端構成員や実験体達はどうやら切り捨てられたようだ。

【さて、君たちにはこれから我々の組織が造り上げた生体兵器『合成獣』の能力テストに付き合ってもらおう…】

その言葉と同時に二足歩行の人型の『合成獣』が姿を現した。

しかし、その姿は決して『ヒト』ではなかった。

全身に鱗に覆われ、目は三つ目。

口は耳まで裂けており、背には蝙蝠のような翼が生え、指は鉤爪が付いている。

尻尾が生えており、尻尾の先は三つ又の頭を持つ蛇。

しかし、その顔は間違いなく元は人間だった頃の面影が残っていた。

「……殺して…くれ……コロシテ…クレ…」

『合成獣』は涙を流しながら、三口達に懇願していた。

【ちなみに…その化け物は人間だった頃の記憶をしつかりと持ち、人としての感情も残っている。しかし、体は彼の意思とは関係なく君たちを殺しかかるように調整されている……せいぜい頑張りたまえ…ハッハッハッハッ！】

スピーカーから所長の声が途絶えた後、『合成獣』はゼストに襲い掛かった。

「……クツ……！」

ゼストは、『合成獣』の攻撃をかるうじて躲し、蹴りを放った。

しかし、『合成獣』はビクともしなかった。

ルーテシアはスカリエツティへ通信を繋げ、現在の状況を説明した。
「ドクター……。なんとか……。なんとかあの人を助けてあげられないの？」

【……すまないが不可能だ……。酒とジュースを混ぜてカクテルを作ることは出来ても、それを再び酒とジュースに分けることは難しい。あそこまで遺伝子を合成されては……。『ヒト』ではない部分だけ除くことは……】

スカリエツティの返答にルーテシアは泣きそうになる。

「……ならば……。彼を救う方法はただ一つ……。彼の望み通り……。殺してやることだけか」

ゼストは、そう言うのと一瞬だけ哀しい表情を浮かばせたが、すぐに引き締め、無銘の槍型デバイスを構え、必殺の一撃を放った。

チンクの右目を奪った技でもある一撃だったが、槍は『合成獣』の鱗を貫くことも適わなかった。

「……なっ……。なんとという硬さだ」

「下がれゼスト！」

ゼストを下がらせた三口は、光速の動きで『合成獣』の間合いの中に入る。

「……受ける、真紅の衝撃！『スカーレットニードル』！！」

ゼストの槍とは違い、『スカーレット・ニードル』は間違いなく『合成獣』の鱗を貫いた……。だが。

「何？傷が塞がっていく！？」

【言い忘れたが、その【合成獣】は再生能力を持っている。だが熱に弱い生物の遺伝子を使っているから炎の魔法で焼けば再生できない。だが、その弱点を補う為にその鱗で覆わせたのだ。その鱗は並みの攻撃力では貫けない……。オーバースランクの砲撃か広域殲滅魔法で一片の肉片も残らず焼き尽くすか、再生が追いつかないほどの攻撃を加えない限り、再生を繰り返すのだよ】
再び、所長の声がスピーカーから聞こえてきた。

ご丁寧に『合成獣』の弱点まで教えてくれたが、それを実行するのは不可能だと分かりきっている故、性質が悪い。

この部屋には火気や衝撃で引火、もしくは爆発を起こす薬品が大量にある。

下手をすればこの研究所そのものを吹っ飛ばせる程の……。

そんな環境で、炎の魔法や砲撃魔法、ましてや広域殲滅魔法など使える筈もなかった。

ルーテシアの召喚虫の『地雷王』：究極召喚である『白天王』も相性が悪い。

そして、再生が追いつかない攻撃は、ゼストとルーテシア（ガリユー）には無理だが、ミロならば可能である。

何も、『スカーレット・ニードル』だけがミロの戦う手段ではない。黄金聖闘士である以上、『光速拳』は当然使える。

再生が追いつかなく位、『光速拳』を放てば倒せるだろう……だが、秒間に一億発もの拳を放てば、例えばミロが黄金聖闘士の命中精度を誇るとはいえ、間違いなく余波が発生し周りの薬品に影響を与えてしまうだろう……。

「くそ、こんな時にカミュが生きてこの場に来てくれれば……カミュでなくても氷河がいてくれれば何とかなったのだが……」

カミュもしくは氷河ならばこの部屋にある薬品をすべて凍結させることが可能である。

如何に危険な薬品でも、凍結してしまえば引火、爆発の心配はいらなくなるし、『合成獣』もカミュ級の凍気を受ければ生命活動を停止できるだろう。

「どうする……たとえ薬品が引火爆発を起こしても我々だけなら何とかなる……。だが……奴に見捨てられた者たちや拉致された人々は……」

組織の人間は、ある意味自業自得だが、拉致された人々を見捨てられる程、ミロも非情にはなれない。

これが『蟹座』^{キャンサー}のデスマスクならば、平気で見捨てられただろう。

彼は、己の『正義』の為ならば罪もない人間を何人巻き込もうが、良心の呵責も無く実行できるだろう。

最も彼の必殺技である、相手を死の国の入口『黄泉比良坂』に強制的に送る『積尸気冥界波』ならば、簡単に『合成獣』を倒せるが……。

「…方法はある！」

悩むゼスト達に声を掛けたのはアギトだった。

「…ゼストの旦那はあの鱗を貫けないけど、ミロの旦那は貫けるんだろう……」

「ああ。いかにあの鱗の防御力が高かろうが、黄金聖闘士にとって取るに足らん。しかし、貫いても再生されては……」

「ミロの旦那。アンタ…自分が高い魔力資質を持っていることに気付いているか？」

「何!？」

【その融合騎の言っていることは本当だよミロ。最も、君は魔導師になる気はないだろうから、私も伝えなかったが……君にはSSランク以上の魔力が眠っている……】

アギトとスカリエッティの思いもよらない指摘に、ミロは啞然とした。

「しかもミロの旦那は、ゼストの旦那よりもアタシとの適合率が高い……旦那とアタシが『融合』すれば、鱗を貫き、あいつが再生できない炎の攻撃を打ち込むことが出来る……」

ミロは、黄金聖闘士の中で最も気性が熱い。

それゆえか、炎熱の魔力変換資質を持つアギトとの相性が良い様である。

【……魔力資質を持つ者は、きっかけさえあれば簡単に魔力に目覚めることが出来る。アギトという『融合デバイス』がミロにとってのきっかけ……となるか……】

「……よかろう……迷っている時間も惜しい……彼を早く苦しみから解放させてやりたい……いくぞアギト!」

「ユニゾン・インー!!」
アギトと融合したミロの姿が変化した。
金髪は赤毛となり、瞳は火色…そして身に纏う『蠍座』の黄金聖衣は赤の混じった赤金色となった。
ただ、流石の『融合デバイス』とはいえ、神の奇跡によって作られた黄金聖衣を変化させることは出来ない。
赤金色に見えるのは、アギトの放つ魔力光によって錯覚しているだけである。

【どうだい。融合事故は起きていないかい?】

『融合デバイス』を使用する際に最も気をつけなくてはならないのが、融合騎の方が体の主導権を握る『融合事故』である。

「いや、大丈夫だ…」

【アタシがそんなヘマをやらかす訳がないだろ!変態医師!】

【へ…変態…言い得て妙だね】

【自分で認めんなよ!】

「コントはそれくらいにしておけ…アギト!炎の調整は任せるぞ」

【ああ。任せてくれミロの旦那!】

ミロの指先に小宇宙が集まり、さらにアギトが武器強化魔法『烈火刃』を宿らせ…放つその一撃は…!?

「くらえ、烈火の衝撃!『スカーレットニードル・カタケオ』!」

真紅の熱針が、『合成獣』の体を貫いた。

「どうだ!?!」

「……よし!再生しないぞ!」

「ならば!」

再生しない事を確認し、ミロは次々と『スカーレットニードル・カタケオ』を打ち込んだ。

もともと針の穴のような一撃である為、周囲の薬品には何の影響も与える心配もなく、一気に14発打ち込む事に成功した。

「……今、その地獄から解放してやる……安らかに眠れ……!『スカーレットニードル・カタケオ・アンタレス』!」

蠍の心臓部に位置するスカーレットニードル最大の致命点『アンタレス』を貫く。

「……………ア…アリ…ガ…ト…ウ……………」

『合成獣』は、最後にそう言い残し絶命した。

遺体に向かつて数秒黙祷した後、三口達は組織の者たちを拘束し、拉致された管理外世界の人々を解放した。

「……………近くの管理局の部隊に匿名で連絡しておいた。もう直ぐ此処に駆けつけてくるだろう……………」

「ならば、長居は無用……………。さっさとここを離れるぞ……………」

「あの人達……………これからどうなるのかな？」

到着した管理局の部隊が、組織の人間の拘束と拉致された人々を保護しているのを遠い場所から見ていたルーテシアがゼストに聞いた。「……………おそらく元の世界に戻されるだろうが……………分らん。管理局は慢性的な人手不足だからな……………魔力資質を持つ人材を素直に手放すか……………」

「だったら、管理局に伝えずに私達であの人たちを助けた方が……………」

「数が多すぎる。如何にスカリエツティでもあの人数を保護することはできない。奴も管理局から追われる身だし……………派手な行動は最高評議会に不信を抱かれる可能性が高い……………」

まだ、評議会に叛意を悟られる訳にはいかない。

「……………まあ、流石に強制はしないだろう……………。我々にも出来ることと出来ないことがある。管理局の良心に期待しよう……………」
ゼストはルーテシアの頭を撫でながらそう諭した。

「くそ！まさか『合成獣』があんなにもあっさり……………」

モニターで三口と『合成獣』の戦いを観ていた所長は舌打ちしていた。

「とりあえず、管理局に見つけられる前にここを離れなければ……逃げられるとでも思っていたのかね？」……！？」

逃げ出そうとしていた所長の前に、目を閉じた青年がいきなり姿を見せた。

「だ…誰だ貴様は!？」

「君如きに名乗る名など持たぬ……ましてこれから死ぬ君に私の名など知っても意味はあるまい……」

青年が一步前に出ると、所長はいきなりデバイスを構え砲撃魔法を放つ。

しかし、砲撃は青年に当たる前に霧散してしまった。

「…なっ!？」

「君の様な外道にふさわしい場所に送ってやろう……」『六道輪廻』
!!!

青年 『乙女座』のシャカ(しゅか)の精神攻撃技…『六道輪廻』が所長を六道へと誘う。

「うわあああああああああ!！」

『六道輪廻』とは地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界の何れかの世界に魂を飛ばす技である。

「……生命を弄び、人を獣に変える研究を行っていた君が墮ちるにふさわしい世界は『畜生界』だろう……君自身が畜生となり、報いを受けるがいい!！」

シャカは倒れ付した所長にそう言い捨て、その場を後にした。

第五十七話 烈火の衝撃（後書き）

母とシューティングアーツの鍛錬に励むナンバーズ・ノーヴェ。
攫われたクアットロの今後の動向に思いをはせる創造主^{スカリエッティ}

時空を超えた黄金の闘士

「スカリエッティたちの日常」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十八話 スカリエツティたちの日常

数あるスカリエツティの研究施設の一つ。

本日の往診を終えたスカリエツティは、『レリック』検索から戻ったゼストとある実験を行っていた。

「どうだい騎士ゼスト？」

「……防御力は問題ないが……やはり重い……。いくら身体強化をしようがこの重さでは戦いに支障がでるな……」

「……駄目か……」

そう、これは魔導師専用の聖衣の開発であった。

「……とりあえず、シヤカさんから防御力のお墨付きはもらったけど……やはり重さがネックだね……」

破壊の究極である原子を砕く聖闘士……つまり、神の闘士達の攻撃を防ぐのは特殊な防御力が必要である。

スカリエツティは完全にはいかないが、なんとか原子の破壊をある程度阻害する術式を組み込んだ金属の錬成に成功し、シヤカからも黄金聖闘士級ならともかく、下級聖闘士ではそう簡単に砕けないだろう……と認めてもらったのだが……重量が洒落にならなかった。それなりの筋力を持つゼストでさえも、魔法による身体強化でなんとか動けるがその分、速度が殺される。

はつきり言って、音速以上の動きを持つ神の闘士相手にそれは致命的である。

そう簡単に砕けないとはいえ、絶対に砕けないわけではない。

確かに、青銅聖衣に匹敵する防御力を得たが、その青銅聖衣を易々と砕く実力を持つ聖闘士や海闘士が相手ならば、それでも砕かれてしまうだろう。

聖闘士の拳の一発や二発は耐えられても、100発喰らえば青銅聖衣を砕くことは容易なのだから……。

無論、青銅聖衣でも『黄金の血』で蘇った黄金に限りなく近い青銅

聖衣や『靈血』で蘇った聖衣は例外だが……。

「……しかし、三口殿の話では聖衣も鉛の様に重いそうぞ……。小宇宙を燃やすことによって聖衣の重みを感じなくなるらしい……。つまり、小宇宙を身に着けていなければ、聖衣もただの重たいプロテクターに過ぎない……と……」

魔法による身体強化と小宇宙の燃焼は、似たようなモノである。

ただ、それによって得られる質が違うだけだ。

ゼストの指摘に、スカリエツィは考え込んだ。

「……術式を見直して、魔法の身体強化でなんとかできるようにするしかないのかな……」

「しかし、お前が作るうとしている聖衣は、『デバイス』の機能を加えたメカニックなのだろう……。ならば、聖衣以上の重量になるのは必然なのではないのか？」
難しいのは分かっている。

しかしゼストやクイント、そして自分の大切な『娘』達を護る為には……どうしても必要なのだ。

神の闘士たちとの戦いで少しでも生き残れる可能性を上げる為には……。

「今日はこちらまでにしておきましょう……」

「……そうだね……『母さん』……」

クイントは、戦闘機人『ナンバーズ』の？9『ノーヴェ』との鍛錬を行っていた。

ノーヴェは、クイントの遺伝子を元にクローン培養によって作られた戦闘機人なので、クイントの娘と言える。

ナンバーズ達の元となった『タイプゼロ』……つまり、ギンガ・ナカジマとスバル・ナカジマも同様にクイントの遺伝子を元に生み出されているので、実質、彼女達の『妹』とも言える存在である。

容姿も、次女であるスバルとほぼ瓜二つであり。知らない人が見れば双子と間違っただろう。

それゆえに、ノーヴェはクイントを『母』と慕っている。

クイントから、シューティングアーツを習い、共に鍛錬しているのだ。

「ノーヴェ…。鍛錬は終わったっすか？」

「ああ。ウエンディ……。今から上がる所だ……」

「それじゃあ、セイン姉がそろそろ夕食の時間だから呼んで来いって言ってたっすから……」

「ああ。今行く！」

ノーヴェに声を掛けたのは、？！『ウエンディ』。

現在、稼働中の戦闘機人の中では一番下の『妹』であり（未稼働の戦闘機人は残り三人）姉妹全員に対等に接している明るい妹である。

「…じゃあ、母さん。はやく行こう……。急がないとみんなに全部食われちゃう……」

「はいはい……」

娘に促され、クイントは苦笑しながら汗を流しに浴場に向かった。

「……ノーヴェもママリンも遅いっす！」

「…汗くらい流させる！」

ノーヴェ達が一番最後だったらしい。

ちなみに、ウエンディもクイントを『母』と呼んでいる。

ディエチも『お母さん』と呼び、何故かチンクまでも『母上』と…

…。

「それじゃあ、みんな揃ったし食べよう……」

ミロヤゼストたちが遠出をする時以外、夕食は皆と一緒に食べている。

スカリエッティが改心したこと、『母』であるクイントとメガー

又の存在が、次元犯罪者だった彼らを暖かな家族へと変えてしまっていた。

『家族』というモノに縁の無かったミロとシャカも、すっかり馴染んでいた。

「……うむ。今日の料理も美味いぞセイン……」

「やっぱ、セインの料理は最高っスよ」

「ありがと〜ミロ兄、ウエンディ……。うつつ……他の姉妹達はせっかくアタシが愛情込めて作った料理なのに、ちっとも褒めてくれない……」

ナンバーズの中で一番料理を作るのが得意なのが、？6『セイン』である。

性格は、ウエンディと同様明るい……。と、いうかウエンディの教育はセインが担当だったので、ウエンディはセインの影響を強く受けている為、性格が近い。

その明るく気さくな性格故に、姉妹たちはさほど構えず接することが出来るせいから、「あまり姉扱いしてもらえない」という悩みを持っている。

「……セインの料理が美味しいのは認める……。しかし毎回、ミロ兄とウエンディが言っているから、いちいち私達が言う必要はね〜だろ……」
ノーヴェが、落ち込むセインに更に追い討ちをかける。

すっかり落ち込んだセインをウエンディが慰めるが、その態度はやはり姉に対するというより、友達感覚であった。

「ところでスカリエッティ……。魔導師用の聖衣とやらの開発はどうだ？」

流石にセインが気の毒になったミロが、話題を変えた。

「……難航しているよ……」

重量を軽くしたら、今度は原子破壊の阻害度が低下してしまい、防御力が問題になる。

まさに、「あちらを立てれば此方が立たず」であった。

「……だけど、奴等が表立った活動を起こす前に完成させたいね……」

「……攫われたクア姉を助けないと……」

デイエチが気が合っていた姉、クアットロの安否を心配していた。

「……デイエチ……。君には酷かもしれないが……おそらくクアットロは……」

珍しくスカリエツティの歯切れが悪い……。

「もう、殺されているってドクターはそう思うの？」

「いや……まず間違いなく……彼女は私を裏切り、奴等の側についているだろう……」

「……!？」

?1?4までのナンバーズ達は『スカリエツティの因子』を持っている。

その中で、最もスカリエツティの性格を受け継いでいるのが、?2『ドゥーエ』である。

故に、ドゥーエはウーノと同じくらいスカリエツティの気持ちを理解できる存在である。

それゆえに、スカリエツティの変節を受け入れるのに抵抗がない。

しかしクアットロは、スカリエツティの最も『悪い部分』を受け継いでいる。

むしろ、彼よりも彼女の方が悪辣なほどである。

先ほど、デイエチはクアットロと気が合っていると述べたが、それはデイエチの側からの感情であり、クアットロ自身は根が善良なデイエチの事を「お馬鹿なデイエチちゃん」と見下している。

人間味を余分と感じて折り、それを強く持つチンクやセインに対しても「つまらない子」と言って、デイエチ同様見下している。

彼女が、同じナンバーズで敬意を払うのはウーノと教育係だったドゥーエだけであり、表には出さないが他のメンバーに対してはそれ程評価していなかったのが実情なのだ。

他のナンバーズは、クアットロのそんな一面に気付いていなかったが、創造主であるスカリエツティは無論、気付いていた。

そして今の自分に対し、彼女がどの様に思うかも……。

「……そんな…クア姉が……」

「君にはつらいだろうが、もはやクアットロは私はおるか、頭が上がらなかつたウーノに対しても失望と反感を持っている……」

流石に、ドゥーエに対する敬意まではまだ消えていないだろうが…

…それも時間の問題であろう。

恐らくクアットロは、なんとか管理局に潜入しているドゥーエとコンタクトを取ろうとする筈。

しかし、ドゥーエには既にスカリエッティの変節を伝えてあり、ドゥーエもそれを受け入れている。

その事をクアットロが知れば、ドゥーエに対する敬意も失せるだろう……。

ドゥーエは、クアットロいわく「究極の戦闘機人」と言わしめる存在ではあるが、単身戦闘力は決して低くは無いものの、それでもトーレヤチンク、ノーヴェよりは弱く、そしてまだ稼動していない？
7と？12よりも……。

クアットロよりは強いが、彼女は神の闘士が同行している可能性が高い……。

故に、ドゥーエにはクアットロからコンタクトを求めてられても、会うなどと言わないが、決して直接顔を合わせるな…間違っても敵の手から助けようとするな…と、厳命してある。

「…私としても、彼女もまだ大切な『娘』であるが……向こうは既にそう思っていない…」

寂しさの滲む顔で、そう告げるスカリエッティだった。

夜も更けて、そろそろ就寝するべくベットに入るクイントとノーヴェの二人。

クイントは寝る前に、管理局員としての最後の任務である戦闘機人事件の捜査に赴く前に、夫と愛娘二人と撮った写真を眺めるのが習

慣になっていた。

「……………母さん……。やっぱり会いたい？」

「……ええ。会いたいわ……。あの子達も貴女同様、私の大切な『娘』。でも、私の生存が評議会に知られれば……。スカリエッティの造反も知られ、きつとあの子達も危険に巻き込まれる……。だから会えない……」

だから、スカリエッティに手を回してもらい、自分のデバイスである『リボルバーナックル』を形見として、家族に送ってもらおう事くらいしか出来なかった。

「……………今は、アタシが母さんを独占しているから……。『姉貴』達はその事を知ったら……。恨まれる……かな？」

大切な母を独り占めしている。

ノーヴェはまだ見ぬ姉達に対する負い目を感じていた。

ノーヴェにとつて、大切な姉妹はチンク達ナンバーズなのだが、『母』と慕うクイントの娘たちの存在も無視できなかった。

「……………大丈夫よ。ギンガもスバルも……。優しい子だから……。むしろ、新しい『妹』が出来た事を喜ぶ筈だわ……」

その点を、まったく疑っていないクイントである。

「でも、スカリエッティの話では、先年、大規模火災に巻き込まれたらしいから……。その点が心配ね……」

ギンガはともかく、泣き虫で甘ったれのスバルの方は特に……。

彼女は知らない。

その事故で、彼女の娘二人は今後の自分を変える『運命の出会い』にめぐり合った事を……。

『エース・オブ・エース（白い悪魔）』と『金色の雷神』、そして『黄金の獅子』との出会いが……。泣き虫だった娘とその姉にとても

大きな影響を与えた事を……。

スカリエツティは、シャカ達と出会うまでは生命と言うものを軽んじていた。

彼にとつて、『生命』とは自らの知識欲を満たす為の素材にすぎず、それ以外に価値が無いものだった。

しかし、自身の『生命』をミーノスに弄ばれ、そしてシャカと出会い、そのシャカによつて生命の神秘を実感させられた。

今ではシャカに師事し、『悟り』を開く為の指導を受けているくらいである。

故に、スカリエツティはシャカに対してのみは敬称をつけている。

無論、シャカもスカリエツティ自身も完全な『悟り』など開けるとは思っていない。

彼の中の『無限の欲望』アンリミテッド・デザイアを制御する事が、第一の目的である。

欲望というのは、人間にとつて原動力である事を否定はしないが、それは上手く制御してこそである。

ただ、欲望のまま行動する等、獣よりも劣る行為である。

獰猛な肉食動物でも、自分にとつて必要な分しか獲物を狩らないのだから……。

「……夕食での話したが……そのクアット口とやらの性根を私が叩き直してやつても良いぞ……」

指導を終え、茶を飲んでいたシャカがそう呟いた。

「……そうですね。確かにシャカさんならば、あの子の矯正などたやすいでしょう」

スカリエツティ以上に悪辣とは言つものの、結局のところクアット口のそれは、自らの身の安全が確保されていれば……の話である。

安全な場所で相手を見下し、悪女ぶる……それが彼女の本性である。自らの安全が侵害されれば、醜態をさらしてしまうだろう。

スカリエツティは、クアット口のそんな所も見抜いていた。

以前の彼は気付かなかつたが、改心し、別の見方をしてみれば、それが直ぐに分かつたのだ。

「……ですが……、その機会があるかどうか……。夕食の席でクアット

口は変節した私を見限り、敵方に寝返ったと言いましたが……その
実は、ただ強い者に媚びて、自分の身を護ろうとしているに過ぎな
い。その敵方がクアットロをそれほど重用しているとは……」

「……なるほど……」

スカリエツティとシヤカは気付いていた。

あの時、襲ってきた冥闘士……ミーンズとシルフィードでさえも、
おそらく『捨て駒』であることを……。

『魔王』を失い、弱体化していたとはいえ、それでもそこその実
力を持つ冥闘士。

おそらくは、それよりも遥かに劣る『戦闘機人』……それも情報操
作や作戦指揮などの後方がメインの彼女を……神の闘士が重用する
はずがない。

なにより、自らの利の為に創造主を裏切り、敵方に寝返る者を信用
するとは思えないのだ。

傲慢な彼女には気付けない。

逆に自分が、言い様に利用され、用がなくなれば切り捨てられる事
を……。

他者を愚弄する彼女は、自らがその他者と同じ扱いを受けるかもし
れない事に気付けない。

「私が彼女を矯正する前に、奴等に始末される可能性が高い……と、
いうことか？」

「ええ。クアットロは利用価値が無くなった者をあっさり切り捨て
る。ですが、今、自分がその立場に居ることに……果たして気が付い
ているのか？」

敵の正体はまだ分からない。

何処にいるのか、どれほどの戦力を有しているのか？

スカリエツティの情報網に引っかかりもせず、おそらく管理局でも
掴んでいないのだろう……。

敵側に回った娘の安否を気遣うスカリエツティであった。

第五十八話 スカリエツティたちの日常（後書き）

聖域に保管されていた青銅聖衣を纏う聖闘士に選ばれた者たちが集まった。

そこに、童虎に伴われた少年と少女が加わった。

『カメロバルタリス 麒麟星座』と『コロネ 冠星座』の聖衣を賭けた戦いが始まる。

時空を越えた黄金の闘士

「選抜戦」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第五十九話 選抜戦

ある無人世界において、一人の少年が息を乱しながら、仰向けに寝転んでいた。

「はあっ…はあっ…はあっ…ク…クリア…した…」

「お見事です…ユーノ…」

見事、自らが課した試練をクリアした愛弟子にムウは微笑みながら、タオルと飲み物を渡した。

「ありがとうございます…ムウ様…」

「ええ。この試練を果たした事により、アテナは貴方を新たなる聖闘士と認めました。聖闘士の証である『聖衣』を貴方に与えます…。この『楯座』^{スキュータム}の白銀聖衣を…！」

9年前に、ムウが約2000年前の聖闘士である『楯座』のイメージの亡霊より託された白銀聖衣は、ムウの弟子であるユーノが受け継ぐこととなった。

「本来なら、貴方ならばヴェロツサよりも早く、聖闘士となれていただでしょうが…無限書庫の司書を勤めながらの修行ゆえに倍の8年の年月が掛かってしまいました…それでも、貴方の才はクロノに劣らないでしょう。少なくとも他の仕事と併行させながら、聖闘士になった貴方は、充分、優秀です…！」

ユーノは、聖闘士の修行をしながら無限書庫の司書の業務をこなし、来年には司書長の地位に就くことが内定している。

クロノも、執務官の仕事と併行させながらの修行ではあったが、修行に入る前に既に『小宇宙』に目覚めていた分、修行は楽な方だっただろう…。

あくまで一般的な聖闘士の修行と比べれば…の話だが…。

クロノが修行の前に『小宇宙』に目覚めたのは、任務中、生命の危機に追い込まれた事によることから見ても、二人の才はそれほどの違いはないと見ても良いだろう。

査察官の仕事を休職して、聖闘士の修行に打ち込んだヴェロッサとは違い……。

「……では、私は聖域の方に戻ります」

「えっ……。それじゃあ、無限書庫には……」

「貴方が聖闘士になった以上、もはや必要ないでしょう……。私が無限書庫で司書をしていた理由は、貴方の指導と、書庫内のある解読できる情報を収集です……。有益な情報はあまり得られませんでしたが……」

ムウの集めた情報の中には、残念ながら地球^{エデン}の結界を越える為に必要な『通行証』の情報はなかった。

スクライアの一族からも、それらしい情報は入ってきていない。

「あとは、解読出来ない書ですが……。その解読を貴方に依頼してもよろしいですか？」

「はい。承ります」

ムウも、それなりの知識があるとはいえ、やはり専門家ではない。

ユーノは遺跡発掘を生業とする一族の出なので、その手の専門家である。

餅は餅屋……。専門家に任せた方がいい。

「……あと、今後貴方に聖闘士として動いてもらわなければならぬい時もあるでしょう……。その時は……頼みます」

「はい！」

ユーノが聖闘士を目指した動機は、無茶がちなのはを護りたいからであった。

そして、先のなのは撃墜の件からも分かるとおり、聖闘士が必要とされる戦いが迫っている……。

勿論、それになのは達も巻き込まれるだろう。

ならば、ユーノにとってムウの要請は望む所であった。

新暦0074年

聖域に、建造された闘技場コロッセオに、二人の少年が向き合っている。

一人は、筋骨隆々の大男であり、もう一人は、赤毛の弱冠9歳の少年であつた。

そして、それを見守る雑兵や聖闘士候補生達。

さらに一番高い所に、『双子座ジエミニ』のカノン、『獅子座レオ』のアイオリア、『牡羊座アリエス』のムウの三人が立っていた。

「ハマーとエリオ!!」

大男の名はハマー、そして、赤毛の少年は……童虎が引き取つた少年、エリオであつた。

「お前たちはそれぞれ五人の戦士と戦い、勝ち抜いてきた。残つた戦士はお前たち二人のみ」

「今日、戦つて勝ち残つた一人に、アテナの栄誉ある聖闘士となるのだ」

「そして、その者には聖闘士の証である『聖衣』が与えられます……!!」

カノン、アイオリア、ムウが二人の戦士に告げる。

「戦え!二人とも……勝者にはこの『麒麟星座カメロバルタリス』の青銅聖衣を与える!」

カノンの台詞と共に闘技場に『麒麟星座』の聖衣が運ばれ、カノンたちの立っている場所の下にある台座に置かれた。

「おお、聖衣……」

「聖衣だ!!」

「あれが、地球の神話の時代から受け継がれ……」

「纏つた者は、最強の力を発揮できると……」

「まさしく聖闘士の『証』……」

エリオは、台座に置かれた『麒麟星座』の聖衣を見つめた。

「……あれが……『聖衣』……。僕はあれをこの手に掴む為に……この地にやって来たんだ……」

そんなエリオを皆から少し離れた所で『天秤座ライブラ』の童虎と仮面で素

顔を隠した少女……キャロが見守っていた。

「老師…エリオ君は勝てますよね……」

「ふむ。エリオの成長は紫龍よりも早かったが……、こればかりは何とも言えん。少なくとも実力ではあの男に負けておらんが……」
聖闘士になるのに五年掛かった紫龍に比べると、三年で修行を終えたエリオの方が早い。

だからといって、エリオの方が紫龍より優れているとは限らない。
実際、紫龍は青銅でありながら、黄金聖闘士に匹敵する強さに到達したのだから……。

五日前。

闘技場に、男11人、女5人、計16人の聖闘士候補生が集められた。

「貴方達は、他の候補生達と違い、『麒麟星座』と『冠星座』^{コロナ}を守護星座に持っている。故に、既に『聖衣』を与えられ、管理局に向した者たちと違い、正規の聖闘士になる資格を持っている」

この16人の前に、既に10人程が、この聖域で発見された『精霊』^{エレメンタル}をモチーフにした聖衣を授かり、管理局地上本部の陸士108部隊に出向している。

「だが、自惚れるなよ……。先に聖闘士になった者達は確かに正規の聖闘士ではないが、実力でいえばお前たちと同格、もしくは凌駕する者も存在している。自分達が格上などという、くだらん自尊心を持つなよ」

と、ムウの台詞を引き継ぐカノンが釘を刺した。

「……とにかく、これからお前たちは、聖衣を得るための選抜戦を行ってもらう。最後に勝ち残った者に『麒麟星座』と『冠星座』の聖衣を授けよう！」

アイオリアの言葉に、候補生達の表情に喜色が浮かび上がる。

今までの地獄の修行がようやく報われようとしているのだ。

カノンに釘を刺されたが、それでも、先に聖闘士になった者たちと違い、正規の聖闘士になれるチャンスが巡ってきたのだから……。

「それでは……待て！カノン！！」……！？」

組み合わせを決めようとするカノンに、待ったがかかった。

皆が、声の方に視線を向けると、そこには童虎が立っていた。

反射的に、その場にいる全員が傳く。

「これは、老師。来られるとはリニスから聞いておりますが……何か！？」

「すまんが、その選抜戦……この二人も参加させる……」

「……エリオとキヤロを……ですか？」

童虎の台詞に驚いたムウが二人を見る。

「……なるほど……確かに二人の守護星座は……そうですね」

「それに、既に小宇宙に目覚めているようですね……」

「充分、青銅レベルの実力を有しています……いいでしょう……」

二人を見て、納得する黄金聖闘士達に一人の候補生が異を唱えた。

「正気ですか？この二人はまだガキじゃありませんか？」

「……俺たちは、この二人よりも幼い時期に黄金聖闘士になったが……」

何を今更……と、言う様にアイオリアが答えた。

「そもそも、魔法の才能があれば子供でも、管理局に入局させるミッドチルダの人間が言っているいい台詞ではありませんね……」

「もともと、カノン達は子供を戦わせるのは間違っている……という考えを持っていない。」

「そもそも、聖闘士は少年たちの集まりなのだから……」。

「最も、とても10代の少年には見えない……という外見の者もいるが……」

「『アンドロメダ星座』の瞬の師匠である『ケフェウス座』のダイダロスなど、とても『琴座』のオルフェと同じ年齢とは思えない程、老けているし……」。

逆に言えば、アイオリアとムウも、もう直ぐ三十路に達する年齢と

は思えないくらい若々しいが……。
話を戻そう。

「この二人は、既に聖闘士を目指せる強さに達している。お前の危惧は無用だ……」

こうして、聖闘士選抜トーナメントが開始された。

ちなみに、エリオ達の参加に異を唱えた男は、一回戦でエリオと当たり、蹴り一発で沈められた……。

「……キヤロ。お前はエリオの事を心配するよりも、次の自分の戦いを考えた方が良い」

エリオの次は、キヤロの番である。

女性専用の聖衣、『冠星座』を得るための戦いが待っているのである。

既にキヤロも、二人の対戦相手を屠り、今日の相手に勝てば、『冠星座』の青銅聖衣を授かる事ができる。

「……でも、エリオ君の今日の対戦相手は……」

キヤロは、不安だった。

ハマーは、今までの対戦相手を全員、再起不能にしたのだから……。

一人は半身不随にされ、一人は両目を抉られ、一人は腕を切断された。

そんな相手と戦うエリオの事が心配でたまらないキヤロであった。

エリオとハマーの戦いが始まった。

ハマーは、エリオを捕らえようと手を伸ばすが、エリオはそれをあつさりと躲し、蹴りを放った。

「ほう、小僧……なかなかやるなあ……。だが、聖衣はお前のような

小僧にはやらんぞ……。いかに聖闘士を統括される老師の指導を受けていようが、この聖域で修行をしたこのハマー様に相応しいのだからなあ……」
そう言いながら、回し蹴りを放つ。
しかし、エリオはそれを難なく躲した。

「カノン……。この勝負……貴方はどう見ますか？」
二人の勝負を観戦していたムウは、カノンに問いかけた。

「……パワーならハマー、スピードはエリオだな……。それにしても、ハマーの奴は結局、聖闘士の闘技を近代格闘技ストライクアーツの延長としか考えていないな……」

ハマーは、聖域に来た候補生の中で、唯一、Dランクの魔力を持っている。

間諜であった例の三人を除けば、候補生達の中で、最も強い魔力資質の持ち主といえよう。

彼は、もともとはミッドチルダで流行している近代格闘技『ストライクアーツ』を学んでいた。

しかし、ストライクアーツは、結局魔力資質が重要となる格闘技である。

どれだけ頑張っても、Cランクに達するか達しないかというレベルのハマーは、それを補う為に、体を鍛えに鍛えた。

そのお陰もあってか、Bランクの魔力資質を持つ相手にも、闘い方によっては勝利することも出来た。

しかし、生来の気の荒さが原因なのか、対戦相手を壊す事でも有名だった。

そんなハマーに、管理局の武装隊に所属するストライクアーツの使い手がハマーと対戦した。

結果は、相手の勝ち。

相手は、Aランクの魔導師だったのだ。

結局、最後にモノをいうのは『魔力』の強さ。

ハマーは、落ち込んだ。

強い魔力資質を持たない自分が恨めしかった。

そんな折、管理局に勤める伯父から、『聖闘士』なる存在を知らされた。

戦闘に関しては、魔力資質の有無など関係なく、魔導師を圧倒できる戦士。

ハマーは、伯父に頼み、候補生の一人とした聖域に足を踏み入れた。彼の目的は、聖闘士となり、高ランク魔導師達を見返すことだった。他の候補生達が、カノンやアイオリアに対し敬意を持ち始める中、この男は結局、ストライクアーツ感覚が抜けなかった。

それでも、武術の才能はそれなりにあったのか、聖闘士の表面的な力くらいは身に付けることが出来た。

しかし、小宇宙は多少目覚めているが、まだまだ聖闘士のレベルに達しているわけではなかった。

「……あれは、俺とアイオリアが口を酸っぱくして言った『小宇宙』に関しては、理解しなかったからな……」

「それでも、彼が勝ち残ったのは……」

「……対戦相手がへボだったただけだ……」

組み合わせはくじ引きで決められたが、ハマーは対戦相手に恵まれ、格下ばかりであった。

それに対し、エリオは既に小宇宙に目覚めた相手とばかりぶつかったが、それを制し勝ち残ってきた。

「エリオは、俺たちの本命だった奴も倒したからな……」

昨日のエリオの対戦相手こそ、カノンとアイオリアが勝ち残ると予想した候補生だった。

童虎が、エリオを参加させなければ、間違いなく彼が『麒麟星座』の聖闘士になっていただろう。

「正直言って、昨日の対戦が事実上の決勝戦だった……」

最初は、相手の方が優勢だったが、エリオの起死回生の一撃により、逆転したのだ。

「実際ハマーは、星矢と戦った時のカシオスと大して変わらん……」
アイオリアがそう締めくくった。

カシオスとは、星矢と『天馬星座』^{ペガサス}の聖衣を争った相手である。

星矢は、聖域に来て六年間、カシオスに負け続けだったが、最後の戦いでは、これまでの敗北が嘘の様に圧勝した。

カシオスは、『小宇宙』に目覚めておらず、聖闘士の表面的破壊力を身に付けただけにすぎなかった。

それゆえ、『小宇宙』を身に着けた星矢の敵ではなかった。

しかし、そのカシオスの最後は雄雄しいモノであった。

彼は、自分の師であるシャイナが愛する星矢の命を護る為に、サガの幻朧魔皇拳を受けたアイオリアの洗脳を解く為に、その命を散らせたのだ。

最愛の人の為に、その人が愛する男を……自分にとっては憎悪の対象である男の命を護り、逝った。

カシオスによって洗脳を解かれたアイオリアは、それまでの聖闘士になりそこなった雑魚という評価を改め、『男』として認めている。しかし、星矢と戦った当時のカシオスの事は、やはり評価してはいなかった。

「ち……ちくしょう……。ちよこまかと動きおつて……」

エリオに一撃も、与える事も出来ず……息をきららせるハマー……。

「……申し上げ難いのですが……僕は、貴方には負けません」

「な……なんだと……。この俺がためえに劣るとも言いたいのか!？」

「はい。貴方から確かに『小宇宙』を感じますが……その程度では……僕には及びません……貴方は、聖闘士の表面的破壊力を身に付けただけです」

「…『小宇宙』だと…。カノン様達が言っていた聖闘士の力の源か…？…そんなモノ…」

「どうやら、貴方は『小宇宙』を発することは出来ても、感知は出来ないようです…。その程度のレベルでは…自分の体内の宇宙を感じるこの出来ない貴方に…聖闘士になる資格はありません…降参してください…」

エリオの勧告に、ハマーは逆上した。

聖闘士になる事を諦めれば、高ランク魔導師達を見返すことが出来なくなる。

何のために、今まで地獄の修行に耐えてきたのか分からなくなる。

「ふ…ふざけるな！てめえの様な小僧に降参なんかするかあああああ
あ…！」

そう言うと、ハマーは渾身の力を込めて、エリオに突進して言った。

「もし、本当にてめえから宇宙を感じたら、聖衣はくれてやらあああああ…！」

あれほどカノンから説明を受けても、まだ小宇宙を理解できていなかった。

だから、気付かない…エリオから立ち昇る小宇宙を…。

魔力変換資質によって発生した電気が、小宇宙と交わり『五色の燐光』を放つ。

「おお、あれは…！」

「昨日の対戦でも使った…」

「昨日の戦いの逆転の必殺技。」

自分の力を過信し、他の戦いを観戦しなかったハマーは知らない、

エリオの必殺技。

「…『フォスフォレスセンス・ランサー燐光の槍撃』…！」

エリオの手刀から放たれた『五色の燐光』が投げ槍の様に、音速でハマーに突き刺さった。

「ぐぎやあああああああああああ…！」

「アテナは、エリオを新たなる聖闘士と認めた！ここに聖闘士の証である聖衣を授ける！！」

ここに『麒麟星座』のエリオが誕生した。

「やったね！エリオ君！！」

「…フツ…見事じゃエリオ…。次はキャラ…お前の番じゃな…」

「はい！」

元気よく返事をしたキャラは、戦いに向かった。

……。

キャラも見事、対戦相手を降し、『冠星座』の聖衣を授けられた…。

「……それにしても…情けない……。これだけ雁首そろえていながら……二つの聖衣を持っていかれるとは…」

カノンは自虐的に、そう呟いた。

「まあ、師としては俺たちよりも老師の方が優れているのは解ってはいたが……それでもこいつらの不甲斐無さには呆れるな……」

アイオリアも、流石に慄然としていた。

ハマーによってリタイアしてしまった五名を除き、全員、一から鍛えなおす必要性を感じる二人であった。

特に、小宇宙を未だに理解していないハマーに対しては、徹底的にじっくり気満々である。

第五十九話 選抜戦（後書き）

海闘士七將軍『シークエーション海龍』。

彼の過去が今、明かされる。

時空を越えた黄金の闘士

「海龍の正体」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十話 海龍の正体（前書き）

今回で、長かった幕間2が終了します。
次回から、StrikerS編です。

第六十話 海龍の正体

次元航行中の『アースラ』に、カノンから連絡が届いた。

「……では、老師の教え子であるエリオとキヤロが、『麒麟星座』カメロバルダリスと『冠星座』コロナを継承したんですか？」

「……ああ。あの馬鹿弟子どもには呆れ果てるが……どうやら、エリオとキヤロに星の宿命が向いていたようだ……」

「……昨年、ユーノも無事『楯座』スキュータムの聖闘士になりましたし……これで、現存する正規の聖闘士が揃ったわけですね……」

9年前の『P・T事件』後に見つかった3体の聖衣……そして、クロノが先代『オリオン座』の聖闘士リゲルに託された2体の聖衣。その全てが、主を得たわけである。

そして、カノン、ムウ、アイオリア、童虎の4人の黄金聖闘士……。更に、修行を終えた聖闘士候補生10人に、正規外の聖衣40体の内の10体がそれぞれ与えられている。

『P・T事件』の最中に現れた海闘士、『海賊』バイレッツのフック。数年前のなのは撃墜事件の際に現れた海闘士の雑兵たち。これらの件から、海闘士との戦いは避けられないだろう。

いかにカノン達黄金聖闘士が強大でも、敵の数が多ければ対処は難しくなる。

敗北しないにしても、数多くの犠牲者が出るかも知れない。

その為にも、聖闘士は一人でも多く欲しい。

「とりあえず、今、現存する正規、正規外を含め、全ての聖衣を使える様にしておきたいな……」

「……そうですね」
ククロノは思う。

確かに、人間というのは罪深い生き物なのかも知れない。

しかし、それでも、滅ぼされなければならぬ程ではない筈である。なぜなら、人間には『愛』というモノがあるのだから……。

だから……『海皇』^{ホセイドーン}に選ばれた人間以外を滅ぼそうとする海闘士を認める訳にはいかない。

海闘士を束ねる『海將軍』^{ジエネラル}筆頭、『海龍』^{シードラゴン}。

彼は、着々と己の野望を果たす為の準備を整えていた。

「……フツ……もうすぐだ……。もうすぐ、この世界を理想の世界にするための戦いが始まる……。あの愚かなる『最高評議会』と……。それに良い様に利用されている『管理局』に代わり……。我ら海闘士……いや、私が『神』となり……。この世界を導くのだ……！」

彼は、自らの野望の原点である過去に思いを馳せた。

二十余年前、時空管理局本局。

「……アルファロメオ君！」

「……これは、クライド提督……。何用ですか？」

廊下を歩いているアルファロメオ・ベルリーナ執務官を、クライド・ハラオウン提督が呼び止めた。

「そう畏まらなくてもいいじゃないか？……明日からは君も私同様、巡航し級次元航行艦船の艦長に昇進するんだから……」

「ですが……今はまだ上官です。それにそちらが先任ですし……」

「堅いな……君は……。共にグレアム提督の下で働いた仲じゃないか……クライドとアルファロメオは、ギル・グレアム提督が執務官だった頃、共に執務官補佐として付き従っていた。

アルファロメオは、現在15歳。

既に1歳になる息子のいる23歳のクライドよりも若く、同期の出世頭と言われている程の優秀な局員である。

魔導師ランクは空、陸戦共にS+、総合SSと、クライドやその妻

であり、現在育児休暇中のリンディ・ハラウン女史にも匹敵する魔力を持ち、管理局最強と謳われるギル・グレアム…彼の使い魔であるリーゼ姉妹とも互角以上に戦える空戦魔導師である。

「……息子さんはお元気ですか？」

「ああ。ようやくよちよち歩きを卒業したよ……」

「それは何よりですね。仕事が残っていますので、リンディ女史…
…奥様にもよろしく言っておいて下さい。では……」

そう言い残し、一礼してその場を後にした。

アルファロメオは、クライドやグレアムを魔導師としては尊敬している。

しかし、出世願望が強いので、グレアムは兎も角、クライドに対しては自分よりも8歳年長にも拘らずライバル意識も持っていた。

彼の目的は、管理局で上を目指し、腐敗が目立ってきた管理局の改革をする事であった。

グレアムの様な管理外世界出身者は兎も角、管理世界出身の上役には平然と汚職をしている者が目立ってきていた。

管理局黎明期、三提督の活躍によって存在意義を確立できたと言うのに……『最高評議会』の方々が、旧暦の悲劇を繰り返させない為に、『時空管理局』を設立したというのに……その苦労と努力を無に帰そうする輩を排除する為に……彼は、地位と権限を欲していた。

次元航行中の巡航Ⅰ級4番艦『レイティア』。

アルファロメオ・ベルリーナ提督が艦長を務めるこの艦内は…地獄であった。

突如として発生したエンジントラブル。

そして、艦内に侵入してきたテロリストの攻撃により、瓦解寸前であった。

「クッ…こいつら一体何者だ！」

伊達にオーバーSランクの魔導師ではない。

テロリストの殆どの拘束に成功したアルファロメオだったが……その時、惨事が襲い掛かった。

「艦長！トラブルを起こしたエンジンがオーバーヒートしました。このままでは……この艦は沈みます……」

「何だと！……止むをえん……。脱出艇を用意……総員に退艦命令を出せ！」

「駄目です……。先のテロによって脱出艇及び転送ポートが破壊され、使用出来ません！」

「な……何い！！な……ならば何とか何処かの世界に不時着させる！」

「り……了解！！」

その時、拘束されていたテロリストが笑い声を上げた。

「何が可笑的い！」

「フフフツ……無駄だ……。お前たちはここで死ぬのだ……これは『最高評議会』の決定なのだから……」

「な……何だと！」

管理局の改革を進めるアルファロメオは若さゆえの無謀さから、既に行動を起こしていた。

その行動の幾つかは、『最高評議会』にとっても不利益を齎していた。

そして、とうとう評議会も容認出来なくなり、極秘裏に評議会からアルファロメオの抹殺指令が出されたのである。

「……バ……馬鹿な……『最高評議会』が……！？」

管理局の改革は、『最高評議会』に対する敬意からであったのに……

その評議会が、裏でテロリストを操り、自分を抹殺しようとした。その時、彼は悟った。

『最高評議会』はもはや、権力の座にしがみ付き、目的の為ならば一切手段を選ばない……次元犯罪者同様に成り下がっている事を……。そして……『レイティア』のエンジンが爆発し、艦は無人世界に墜落

した。

死を覚悟したアルファロメオだったが、その時……彼の内に何か
響いた。

それは……『海皇の意思』^{ビツクウィル}であった。

「……『海皇』ポセイドン……!?ま……まさか……先祖代々から伝えら
れた伝説は……真実だったのか?」

アルファロメオの先祖は、地球出身^{エデン}であり、先の戦女神アテナと海
皇ポセイドンとの聖戦の折り、海將軍筆頭である『海龍』の海闘士
であった。

グレアムの下にいた当時、グレアムの出身世界が『地球』という名
前なので、そこが自分の先祖の出身世界と思い、伝説の真偽を調べ
たが、所詮、伝説は伝説でしかない……と、確信していた。

しかし、グレアムの地球は『テラ』であり、彼の先祖の地球である
『エデン』の鏡面世界に過ぎない。

『海皇の意思』により、海闘士最強の『海將軍』として覚醒したア
ルフアロメオは、何とか生き残る事ができた。

しかし、彼の部下たちは……。

「エッセ執務官……ティグラ三尉……ジンガー空曹……キミーラ二士……
誰か生き残っているのはいないのか?……レバート一士、ヤリス三
士、ブーン陸曹、フリーカ三尉……」

部下たちの返答は無かった。

「……おのれ、最高評議会め!」

彼は悟った。

改革などと甘い事では駄目だ。

所詮、この世は『力が正義』。

そして、彼は今、魔導師を超える最強の力を手に入れた。

ならば……最強である自分が、最高評議会を処分し、管理局を手中
に納め……全次元世界を力で支配する『神』となつてやる。

最も優れた力を持つ『選ばれた』自分が支配することにより、管理
世界も管理外世界も、真の理想郷となるだろう……と。

理想に裏切られ、自分についてきてくれた部下たちを失った絶望により、アルファロメオの野心は、壮大な野望と化した。

その為に更なる力を得るべく、海闘士として『海皇』の下に向かおうとしたアルファロメオだったが、いかに『海皇』といえど一柱の神のみの力では、地球エチンの結界を外から越えさせる事は出来なかった。『海皇の意思』によつて、力を取り戻したベルリーノ家先祖代々から伝わる家宝である『海皇』の神具と、海闘士関連の古文書等を解析しても、地球エチンに行くことは叶わなかった。

その過程で、約2000年前に此方の次元世界に堕ちて来た『聖域』サンクチュアリの一部から持ち去られた『記憶』の神具を手に入れたが……。

そんな、無為の年月が過ぎたある時、星矢たちとの戦いの果て、海底神殿が崩壊し、それに伴い発生した次元震により、聖戦を生き残った『人魚姫』マーメイドのテイイスと『海魔女』セイレーンのソレント以外の海闘士達が、彼の前に漂流してきたのだ。

カノンが纏っていた、本来、彼のモノである『海龍』の鱗衣と共に……。
そして彼らから、『海皇』の許可を得て『海龍』の鱗衣を纏っていた『双子座』の黄金聖闘士、カノンの存在を知らされる事となった。

「……『海龍』様……」

過去に思いを馳せていたアルファロメオは、『海女王』セドナの海闘士、ネリビツクから声を掛けられ、現実に戻った。

「……『海女王』……それに『ナックラビイ』か……何用だ？」

「はっ！先日、雑兵たちが管理局と戦闘に入りましたが、無事、『レリック』の確保に成功しました」

『ナックラビイ』の海闘士、ジャックの報告を聞き、ほくそ笑む。

「そうか……ようやく準備も終わる………決行の時は近いぞ！」

「……御意……！」

第六十話 海龍の正体（後書き）

「自分の部隊を持ちたい」というはやての夢がようやく形となった。その部隊の名を「機動六課」。六課に、様々なメンバーが集う。

時空を越えた黄金の闘士。

「Standby 機動六課」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

幕間2終了に伴い設定紹介

長かった幕間2がようやく終わり、次回からStrikerS編に入ります。

基本的にはホテル・アグスタまでは原作ベースで進みますが、それ以降は原作からかけ離れる予定です。

さて、今回はこれまでに登場した「時空を越えた黄金の闘士」オリジナルキャラクターの紹介です。

海賊のフックバイレイツ

出身地 ノルウエー

必殺技 バイキング・アックス

海闘士。海將軍ジェネラルに次ぐ実力を持つが、上に媚び諂い下に横暴な性格の為、カノンを含めた海將軍全員から嫌われていた。

海底神殿崩壊時に発生した次元震により、『地球エデン』の外の次元世界へ跳ばされた。

『海龍シートルムン』の命により、プレシア・テストロッサに協力……、『プロジエクトF・A・T・E』の研究成果を手に入れる事が目的。

『靈血イール』で顕現したアリシア・テストロッサの残留思念との邂逅により、自らの愚かさを悟ったプレシアにとどめを刺すが、カノンの光速拳により、体をズタズタにされ命を落とす。

名前の由来はジェームス・マシュー・バリー戯曲『ピーター・パン』のフック船長から。

スキュータム
楯座のイージス

出身地 ギリシア
修行地 ギリシア・聖域サンクチュアリ
必殺技 不明

約2000年前の『軍神』アレスとの聖戦の折、アテナと軍神アレスとの激闘により発生した次元震により、聖域の一部諸共、次元世界に飛ばされる。

いつか、この跳ばされた聖域を訪れる聖闘士を迎えるために、肉体が滅び魂のみとなっても聖域を護っていた。

訪れたムウにアテナの遺産を託し、安らかな眠りに就く。
名前の由来は、イージスの楯から。

海女王セドナのネリビツク

出身地 カナダ・ユーコン準州
必殺技 不明

フック同様、『海將軍』に次ぐ実力を持つ海闘士。

セドナとは、北米極北地方の先住民族のイヌイト神話に登場する海の女神。

伝承では、セドナは美しい娘だが、大勢の求婚者の中から彼女が選んだ結婚相手はよりもよって犬（もしくは鳥）であったという。父親はその結婚を気に入らず、強引に娘を連れ出すが帰り道に嵐に遭遇し、怖くなった父親はセドナを海に放り出し、自分だけ助かるうとした。

セドナは必死に船の縁にしがみ付いたが、父親は彼女の指を切断し、セドナは海に没した。

その切断された指から、アザラシ、セイチウン、鯨などの海獣が

生まれたという。

その後、セドナは海底の冥界に鯨の骨で出来た家に住み、海獣たちの支配者となった。

別の伝承では、セドナは誰にも嫁がないと言って父親の怒りを買って、犬に嫁がされてしまった。ある時、若い男に毛皮や服、毛布を与えると誘われ、連れ出されてしまった。男の正体は、アホウドリ、またはカモメ、カラスとも言われている。

その後は、前述と大して変わらない話である。

ちなみにセドナを見捨てた父親は、後に波に攫われ、海に引きずりこまれてしまい、セドナとともに暮らしているとも、もしくは閉じ込められているとも言われているらしい。

名前の由来は、セドナの別名であるネリビツクから。

オリオン星座のリゲル

出身地 中東、イエメン・ムタワツキリテ王国（現在のイエメン共和国）

修行地 ギリシア・西マケドニア

必殺技 不明

50年前に次元世界に飛ばされたオリオン星座の聖闘士。

病に冒され、死を待っていた時に自分と同じ守護星座を持つクロノと出会い、クロノに自分と友の聖衣を託す。

名前の由来は、オリオン座 星、B型の青色超巨星のリゲルから。

ナツクラヴィのジャック

出身地 イギリス・スコットランド
必殺技 不明

フック、ネリビックと同じく『海将軍』に次ぐ実力を持つ海闘士。

ナックラビイとは、スコットランド民話において、水の近くに住む邪悪な精霊、『水妖^{フェア}』の一種で最も凶悪でおぞましい精霊。不作や病の流行、干ばつを齎すと言われている。

スコットランドの海に住み、ケンタウロスのような半人半馬の姿だが、肌が無く、むき出しの筋肉の筋がピクピク動いているというグロイ外見をしている。

長い腕で家畜を殴り殺し、その姿を見た人間までも殺しにやってくるという凶悪な精霊だが、肌がなくいつも塩水の中にいる為、淡水に弱い。

名前の由来は、英語で男性一般を指す言葉で、日本語の『太郎』に相当するジャック。

ハマー

出身地 ミッドチルダ西部
修行地 治外法権世界・聖域

元ストライクアーツ選手の聖闘士候補生。

エリオと『麒麟^{カメロバルダリス}星座』の聖衣を争い、敗れ去った。

モチーフは原作『聖闘士星矢』の登場時のカシオス。

名前の由来は、アメリカの自動車メーカー、ゼネラルモーターズのハマーから。

シーエラリオン
海龍のアルファロメオ

出身地 ミッドチルダ首都クラナガン

必殺技 不明

真の『海龍』の海闘士。

もともとは、時空管理局本局の次元航行部隊所属のアルファロメオ・ベルリーナ提督であり、クロノの両親の後輩に当たる魔導師だった。

管理局の腐敗を正すため、若さゆえの無謀な改革を何の裏づけも無く進めようとして、最高評議会の権益を知らず知らずの内に損なった為、評議会から排除されてしまう。

『ヒックウシル海皇の意思』によって、海闘士として覚醒するが、結界に阻まれ、地球に行けず、先の海皇との聖戦には参加できなかった。

神話の時代の『海龍』の海闘士の子孫。

名前の由来は、イタリアの自動車メーカー、アルファ・ロメオ社のアルファ・ロメオと標準型セダンから。

では、これからも私の作品にお付き合いください。

君は、小宇宙を感じたことがあるか!?

続・設定紹介

今回は聖衣の設定について紹介しましょう。

まず、この話で登場する白銀聖衣は、

「オリオン星座」

サザンクロス

「南十字星座」

スキュータム

「楯座」

以上、三体です。

これらに関しては、前々回のA's編設定紹介でも説明した通り、1987年に東映まんがまつりで放映された「聖闘士星矢 邪神エリス」、そして今年、2011年7月末に公開された「スーパーミュージカル聖闘士星矢」で登場した亡霊聖闘士たちゴーストセイントが纏っていた聖衣なので、イメージしやすいと思います。

管理局に向向している聖闘士達の聖衣も、前々回に紹介した通り、TV版オリジナル聖闘士であるドラデス、ガイスト達ゴーストセイント、クリスタルセイント、水晶聖闘士、炎熱聖闘士系統の聖衣です。

スカリエッティが現在、研究している魔導師用の聖衣のモチーフは、ぶつちやけTV版のメカニックの聖衣である鋼鉄聖衣スチールクロスです。

エリオ、キャラが纏う「麒麟星座」^{カメロバルダリス}と「冠星座」^{コロナ}は、完全なオリジナル聖衣です。

「冠星座」は女性用の聖衣であり、「鷲星座」^{イーゲル}、「蛇使い星座」^{オビュクス}、「カメレオン座」^{クレイン}、LC冥王神話の「鶴座」^{クレーン}の聖衣の様に女性が纏う型の聖衣を想像してください。

美術の成績が五段階評価の1で、ファッションセンスゼロの作者に具体的なイメージを求められては困りますので、それぞれの脳内で想像して変換してください。

「麒麟星座」については、ちょっととした設定があります。

「きりん座」はもともとは「らくだ座」であり、モチーフも動物園にいる鯨偶蹄目キリン科であるキリンである。

しかし、この話での「麒麟星座」のモチーフは頭は竜、尾は牛、蹄は馬、胴体は鹿、背毛は五色に彩られ、毛は黄色い。

「四神」の中央、「四霊」の西方に位置する瑞獣「麒麟」をモチーフにしています。

ぶつちやけて言うなら「山羊座」^{カプリコーン}の逆パターンです。

ナイル川沿いで宴会を開いていたオリンポスの神々の前に突然、怪物テュポンが現れ、驚いた神々は動物に姿を変えて逃げた。

その時、牧神パーンは混乱していたのか上半身が山羊、下半身が魚の姿に変身し、その姿を天帝^{ゼウス}は星座に加えたというのが、「やぎ座」にまつわる神話である。

しかし、「山羊座」の聖衣の形は、聖衣分解装着図でみても、普通の四本足の山羊の姿である。

次回からStrikerS編が始まります。

では、これからも私の作品にお付き合いください。
君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十一話 Standby 機動六課（前書き）

今回から、StrikerS編に入ります。

リインフォースとリインフォース？の区別の仕方について。

リインフォースはそのまま「リインフォース」
？は「リイン」と表記します。

第六十一話 Standby 機動六課

すべての始まりの地より、現れし海神の戦士。
大地の法の塔を破壊し、数多の次元うみを護る法の船を奪うべく……。
対するは、同じ始まりの地より使わされし戦女神の戦士。
心改めし無限の欲望が、法の守護者らに剣を与えん。
はるか古代に沈みし船が王と共に蘇り、女神の戦士を戦場に誘わ
ん。

破滅か存続か。

星々すらも、この未来を見通すこと叶わず……。

聖王教会教会騎士団兼時空管理局理事官、カリム・グラシア少将の
レアスキル プロフィール・シユリフテン
希少技能『預言者の著書』より。

新暦0075年。

ミッドチルダ中央区画湾岸地区。

ここに、時空管理局の新しい部隊の隊舎が準備されていた。

「なんや、こーして隊舎を見ると、いよいよやなーって気になる
な」

「そうですね、はやてちゃん…………… 八神『部隊長』」

「あはは…」

新設された古代遺失管理部『機動六課』。

交通の便が悪いが、ヘリが入りし易い場所であり、第97管理外
世界『地球』の海鳴市に雰囲気似ている為、部隊長八神はやて陸
上二佐とシャルマル医務官は気に入っていた。

「あれ…そういえばリア兄は？」

「アイオリアさんなら、散歩がてらに隊舎の中を見てくるっていう

先ほど歩いていきましたよ……」

「そっか……。でも、今回はリア兄にかなり手伝どうてもらたからなあ……」

「そうですね。アイオリアさんのお陰で、地上本部との対立も何とか緩和していますからね……」

地上本部の長、レジアス・ゲイズ中將の要請により、出向してきた聖闘士達の活躍は目覚しく、地上の犯罪者の検挙率は30%上昇しており、中將も面目躍如といったところであり、機嫌が良いらしい。予想された聖闘士と魔導師の確執も、陸士108部隊、部隊長のゲンヤ・ナカジマ陸上三佐の人柄と影響により旨く緩和されている。アイオリアが仲立をしたことにより、とりあえず地上本部と機動六課の仲もそれほど悪くなっていないのだ。

最初はレジアスと対立していたはやてだったが、地上の本局に対する不信感の理由を知り、そんな中、地上の平和の為に粉骨碎身で働いている中將に対し、敬意を持つようになっていた。

レジアスにしても、家族が自分の為に犯してしまった罪の償いを支えるべく、白眼視される事を覚悟の上で、働いている事をアイオリアに諭され、『犯罪者』という偏見をもって侮蔑していた事を恥じるようになっていた。

とはいえ、対立することを止めただけで、けっして友好関係になっただけではないが……。

機動六課、駐機場。

そこに足を伸ばしたアイオリアは、男女二人組と遭遇した。

「……シグナムか」

「……ああ、アイオリアか……」

女性の方は、彼にとっては家族同然の存在、六課FフョウWワ部隊『ライトニング分隊』副隊長、シグナム二等空尉だった。

「……そういえば、アイオリアとは初めて顔をあわせるんだっただな……彼は、ヴァイス・グランゼニック陸曹。六課のヘリパイロットを務めることになっている……武装隊でかつて私の部下だった男だ。ヴァイス、この人が私の家族の一人の……」

「アイオリアだ……よろしくな……グランゼニック陸曹……」

「此方こそ、俺のことはヴァイスでいいっすよ……アイオリアの旦那……。噂に名高い『黄金の獅子』に会えて光栄です」

カノンとムウと違い、はやてやレジアスと繋がりが深いアイオリアは、ゴールドセイント黄金聖闘士の中で最も管理局員に名が売れている。

「……ところで、ヘリはまだ来ていないのか？」

駐機場の中には、ヘリの姿は見当たらない。

「今日の夕方到着ッス。届くのは武装隊用の最新型！前から乗って見たかった機体なんでこれがもー楽しみで！」

何処の世界、何時の時代でも、男というモノは、こういうマシンに夢を抱く様で、今のヴァイスはまるで少年のようであった。

アイオリアも男なので、彼の気持ちは少しは理解していた。

「シグナム副隊長〜！ヴァイス陸曹〜！」

そこに、一人の少女が此方に駆け寄ってきた。

「アルト・クラエッタ二等陸士、只今到着です！」

彼女は、魔法能力のない内勤組で、かつてシグナムとヴァイスと同じ部隊であり、六課では司令部である『ロングアーチ』に通信士として所属している。

新型ヘリ『JF704式』が配備される事を聞き、見学に来たようだ。

ちなみに彼女を六課に推薦したのはシグナムである。

それから少しして、アルトを探していた彼女の同僚であるルキノ・リリエ二等陸士がやってきた。

シグナムが二人にもアイオリアを紹介し、彼女達の直接の上官である通信主任、シャリオ・フィニーノ一等陸士が来るまで、隊舎の中を見回ることを薦めた。

「俺も、散歩がてらに隊舎を回っている所だ。良ければ一緒に行くか？」

「はい！」

「よ……よろしく願います！」

アルトとルキノも、『黄金の獅子』の噂は耳にしていたので、緊張気味のようなのだ。

三人がその場を離れた後、ヴァイスがぼそりと呟いた。

「……あんなに緊張していたら、息抜きの散歩にならないんじゃないかな
いっすか……？」

「……フツ……すぐに慣れるさ……」

アイオリアの人柄をよく知るシグナムがそう応えた。

「……しっかし……大丈夫なんスカねえ、あんなガキんちよ共で」

「入隊したてのお前を見て、私もまったく同じ感想を持ったものだよ。なあ8年目？」

「いや、シグナム姐さん。それは言わねー約束で……」

シグナムが予想した通り、アルトとルキノの緊張は直ぐに解けた。最初こそ、管理局内では高名な『黄金の獅子』に対しガチガチだったが、アイオリアの『頼れる兄貴』という人柄に触れることによつて打ち解けていった。

「隊舎内、広いですね」

「……中古物件らしいが、造りは結構良いからな。六課の試用期間は一年だから、わざわざ新築する必要はあるまい」

アルトとアイオリアがそう話していると、ルキノが突然、足を止めた。

「ん？ルキノさんどーかした？」

ルキノの視線の先には、お人形サイズの小さな少女が飛行しながら、周りの隊員達に挨拶していた。

「か…可愛い……」

少女の愛らしさに、キヤーキヤーとまるでアイドルを前にしたミーハー少女の様にはしゃぎ出した。

「ああ、あいつは……」「ここに居たのかアイオリア……」「リインフォースか……」

そこに、愛らしい少女に良く似た容姿の女性が声を掛けてきた。

「……クラエッタ二等陸士にリリエ二等陸士だな？」

「は…はい！」

「始めまして、機動六課部隊長首席補佐及び遊撃要員のリインフォース一等陸尉だ！」

「は…始めまして…アルト・クラエッタ二等陸士です！」

「同じく、ルキノ・リリエ二等陸士です！」

リインフォースは挨拶を返す二人に頷いた後、先ほど二人がキヤーキヤー言いながら見ていた妹を呼んだ。

「あ、お姉ちゃんに…リア兄様……！！」

呼ばれた小さな少女は、直ぐに飛んで来て、アイオリアの肩の上に乗った。

「………お前と同じ職場になる者たちだ。挨拶しろ！」

「ハイです、お姉ちゃん！機動六課部隊長次席補佐及びロングアーチスタッフ、リインフォース？空曹長です！」

上 司 ……！？

ちなみに管理局の階級は、下から研修生、三等空ノ陸士、二等空ノ陸士、一等空ノ陸士、空ノ陸曹、空ノ陸曹長の順である。

つまり、この小さな少女はアルトとルキノより三階級も上の上官だった。

「…失礼しましたっ！！」

背筋を伸ばし敬礼する二人にリインは、楽にするように諭す。

自分の方が年下だし、ロングアーチのスタッフ同士仲良くやれたら

よいと思っているからだ。

「リイン……これから時間はあるのか!？」

「はい。今は休憩時間ですよ……リア兄様……」

「ならば、親睦を深める為に、この二人の隊舎の見回りに付き合っ
てやれ」

「解りました……。リア兄様はどうするんですか？」

「無論、俺も付き合うさ」

「ハイです!」

大好きな兄と一緒に散歩できることで、リインのテンションは急上
昇した。

「リインフォースはどうする?」

「私はこれから、主はや……いや、八神部隊長から頼まれた仕事がある
ので遠慮しよう……」

「そうか……では、また後でな」

「お姉ちゃん……失礼するです」

「……お疲れ様です!」

リインフォースと別れたアイオリア達は、散歩を続けるのだった。

第61管理世界『スプールス』、自然保護区画にある『管理局自然
保護隊』のベースキャンプ。

「じゃあ、エリオ、キャラ……忘れ物はないね?」

自然保護官タントとミラ、そして他の隊員達が、旅立とうとするエ
リオとキャラを見送っていた。

「はい」

「それじゃあ、行って来ます」

「二人には、ずっとここに居て欲しかったよ……」

エリオとキャラの肩に手を掛けながら、ミラが呟く。

『カメロバルタリス麒麟星座』と『コロナ冠星座』の聖闘士であるエリオとキャラだが、童

虎からの指導の他に、リニスから魔導師としての基本も教育されていた。

特に『召喚魔導師』としてのキャラの能力は、自然保護官向きの能力なので、尚更そう思える。

彼らは、民間協力者の『魔導師』として『機動六課』に出向する予定である。

有事の際には、聖衣を纏い聖闘士として動くことになるが……。

機動六課はその任務の性質上、『神の闘士』と戦わなくてはならない可能性がある。

機動六課は、ロストロギア『レリック』専任の部隊。

そして、そのレリックを狙ってやってくる『ガジェット・ドローン』と管理局が命名した機動兵器と、たまにそれと行動を共にする神の闘士『海闘士』の雑兵達の迎撃が六課の任務となる。

魔導師が『神の闘士』に対する対処法はまだ確立されていない。

何人かの犠牲を考慮した上ならば、青銅聖闘士や海闘士の雑兵くらいなら対処可能だが、唯でさえ人手不足の管理局としては、その方法を取ることは出来なかった。

白銀聖闘士以上に対しては、そもそも相手にならない。

故に神の闘士には神の闘士をぶつける事が一番の対処法だ。

しかし、地上本部に出向している聖闘士達の数も少ない為、とても機動六課に回すことは出来ない。

それを強引にしてみれば、和解の目処が立ちつつあるはやてとレジアスの関係を再び袂らせかねない。

本局が、有能な魔導師を次々と地上から奪っていつて行くのに、その対策として協力を取り付けた聖闘士まで取られれば、もはや関係回復は絶望的になるだろう。

更に、管理局に所属している『オリオン星座』のクロノ、『南十字星座』のヴェロッサもそれぞれ局員としての任務がある為、聖闘士として六課に協力できる状態ではない。

ヴェロッサは少しは自由に動けるが、次元航行部隊の提督であるク

口ノは無理であり、彼に出来るのはせいぜい『後見人』の一人として名を連ねることくらいだ。

三人目の白銀聖闘士である『スキュータム楯座』のユーノも、『無限書庫』の司書長として毎日、目が回るほどの忙しさであり、これまた不可能である。

無論、『海闘士』全体が動けば、聖闘士としての責務を最優先することになるが……。

そこではやてはアイオリアを通じて童虎に、エリオとキャロの協力を要請したのである。

海闘士が動く可能性がある以上、童虎も断る理由がない為、それを了承し二人を派遣することにしたのだ。

「……出向する部隊は、一年間の試験運用らしいから、終わればここに戻ってきますよ」

エリオは、明るく二人に答えるが、これから戦うことになるであろう相手の強大さを考えれば、楽観視は出来ない。

そのことに対しての覚悟は決めているが、それでも『家族』同然の自然保護隊の人たちの前ではそんなことはおくびにも出せなかった。

「確か、二人の直接の上司となるのは、本局のお偉いさんだったな？」

「……本局次元航行部隊所属のフェイト・T・ハラOWN執務官ね」

「ああ、リニスさんの元教え子で、たまに使い魔のアルフと共に逢いに来てくれる……」

フェイトは、自分によく似た境遇である二人、特に同じ『プロジェクトF・A・T・E』によって生み出されたエリオを気に掛けて、

度々、休暇などを利用して二人に逢いに来ていた。

「おお、二人とも待たせたな」

そこに、童虎が旅支度を整えたりニスと共に現れた。

「二人とも、無事に帰ってくるんじゃないぞ……」

了承したとはいえ、やはり童虎としては、二人を死地に向かわせたくはなかった。

聖闘士は、アテナと正義を護る闘士。

しかし、何度も過酷な戦いに傷つき、失明し、何度も死の淵に彷徨いながらも立ち向かって行った一番弟子の紫龍の事を考えると……心穏やかではいらなかった。

決して、表には出さなかったが……。

「あと、キヤロにはこれを渡しておこう……。」

「……これは？」

「仮面の代わりじゃ……。流石に従来の女性聖闘士の仮面では、食事時など不便じゃろうからな……。」

女性聖闘士の仮面は、顔のすべてを覆っている為、食事時は仮面を外さなくては食べられない。

家族同然の童虎やエリオ、自然保護隊の面々の前では仮面を被っていないキヤロだが、それ以外の前では掟通り被っている。

仮面の下の素顔を見られる事は女性聖闘士にとって、裸を見られること以上に屈辱的であり、その相手を殺すか愛するかの二者択一を選択しなければならぬ。

キヤロとしては、見られても屈辱はそれほど感じないが、一応掟であるし、親しい人間以外には見られたくは無い。

そこで、童虎が用意したのは、顔の上半分を隠すバイザータイプの仮面であった。

これならば、入浴と睡眠時くらいしか外す必要はない。

「ありがとうございます老師」

仮面を受け取ったキヤロは、さっそくそれを付けた。

「では、リニス……。二人を頼むぞ」

「はい老師。ちゃんと二人をミッドチルダまで送ります」

「リニスさんもお元気で……。」

「ええ、皆さんもお元気で……。」

リニスは、二人をミッドに送った後、本来の主であるカノンの下に戻る予定である。

「それでは老師……。」

「行つて参ります……」
エリオ、キャロ、リニスの三人は、童虎に傅き挨拶を済ませて、その場を後にした。

ミッドチルダ北部、旧ベルカ自治領、『聖王教会』大聖堂。

「機動六課……かあ。お子様だったはやてももう部隊長か」

「あの子と出会つて、私は8年、貴方は10年よ。はやても立派な大人だわ」

教会騎士団、騎士カリム・グラシアとその義弟、本局査察官ヴェロツサ・アコースがはやての事で話し合つていた。

義姉弟という関係ゆえに、ヴェロツサはカリムと彼女が属する『聖王教会』に協力してくれているが、すでに彼は『聖王』ではなく、『戦女神アテナ』を信仰している。

既に歴史上の偉人に過ぎない『聖王』と、二百数十年に一度、『地球^デ』の愛と正義を護る為に降臨する『女神^{アテナ}』。

多くの神々が人間を見捨てる中、ただ『一柱』：最後まで人間を愛し、護り続けている『女神^{アテナ}』に比べれば、『聖王』に対する信仰はただの英雄崇拜に過ぎないのかも知れない。

聖闘士の技能を教会騎士団に組み込む為に、義弟を聖闘士に送り込んだのだが……それは、あてが外れてしまった。

正直言つて、余りにも過酷過ぎるため、皆が耐え切れないのだ。

なまじ、魔法という便利で強力な力を持っているが故に、過酷過ぎる修行をしてまで『小宇宙』を得たいとは思えないのかもしれない。教会の中でも指折りの実力者であるAAAランクのシャツハ・ヌエラですら、耐え切れるか解らない程なのだから……。

クロノ提督、そして我が義弟も、よくやり遂げたモノだ……と、感心してしまうカリムであった。

最も、途中で投げ出し脱走でもすれば処刑されていただろうから、

ロツサも必死だったのだが……。

「後見人で監査役でもあるクロノ提督は、いろいろお忙しいし、私やシャツハも教会からあんまり動けないし……」

カリムは、書類から目を離し、義弟の方に顔を向ける。

「はやての事、助けてあげてねロツサ」

「了解、義姉さん。^{カリム}僕らの可愛い妹分の為……そして、『南十字星座』^{ロス}の白銀聖闘士として、ヴェロツサ・アコース頑張りますとも……」

と、応える義弟をすこし複雑な心境で見つめる義姉^{カリム}であった。

第六十一話 Standby 機動六課（後書き）

Bランクへ昇格の為、魔導師試験を受験したスバル・ナカジマとティアナ・ランスタール。

そこで、スバルは4年前に自分を助けてくれた一人、高町なのはと再会する。

はやては、スバル・ティアナ両名を機動六課のFWとしてスカウトする。

時空を越えた黄金の闘士

「FWメンバー」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十二話 F Wメンバー（前書き）

キャラの必殺技、どうしましょうか？

廬山の大瀑布がないから、それを逆流させなければ放てない昇龍覇は使わせたくないし……。

いっそ、他の作品の技を使わせてもらいますか……？。

龍に関する技……スーパーロボット大戦の龍虎王、龍王機、龍人機、真・龍虎王の技にするか、古いけど魔神英雄伝ワタルの龍神丸の技にするか……どうしましょうかね……。

第六十二話 F Wメンバー

「……………なのは…さん…」

「うん!？」

「…はいえ、高町教導官……………一等空尉!」

「…『なのはさん』でいいよ。みんなそう呼ぶから…。四年ぶりかな?背伸びたね…スバル」

「…えーと…あのっ……………あの……………」

「また逢えて、嬉しいよ」

スバル・ナカジマは、四年前の空港火災で救ってもらって以来、憧れている二人の内の一人、高町なのは一等空尉と再会したことで涙が溢れ、号泣した。

陸戦魔導師Bランクへの昇格試験を受験すべく陸士386部隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士は、試験会場となる廃棄都市街にいた。

試験内容は、各所に用意されたターゲットを破壊しつつ、制限時間内にゴールを目指すというモノ。

当初、二人は順当に進んでいたが、一瞬の気の緩みからティアナが足を負傷してしまふ。

ティアナは、自分はサポートに徹するから、スバルだけでもゴールすることを提案するが、二人一緒になければ納得しないスバルが、反則を取られるかもしれない裏技を提案し、それに賭けることとなった。

二人の力を合わせ、なんとか最後の難関である大型オートスフィアの破壊に成功。

最後のターゲットを破壊し、負傷したティアナを背負い、自作ロ―

ラーブーツ型デバイスを魔力全開で疾走させ、ゴールを目指すスバルだったが……止まる時の事を考えていなかったらしく、明らかにオーバースピードだった。

ゴールを通過した後、そのまま壁に激突しそうになるが、低速の爆風と六つの魔法陣の間に張られたネット、そして多数の白い緩衝材が二人を受け止めた。

なのはが「アクティブガード」と「ホールディングネット」を、試験官を務めていたリインが「柔軟かき支柱」ウァイビースーツを発動させ、二人を救ったであった。

スバルとティアナの試験を上空のヘリから見学していた八神はやて陸上二佐とフェイト・T・ハラオウン執務官は、二人に新たな部隊である「古代遺失管理部、機動六課」についての説明をしていた。スバルも巻き込まれた四年前の空港火災から、はやては新部隊設立に奔走し、やっとそのスタートが切れた。

登録は陸士部隊、FWは陸戦魔導師を主体とした特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務。フォワード

広域捜査は古代遺失管理部の一課から五課までが担当するので、六課は対策が専門である。

「…で、スバル・ナカジマ二等陸士、それにティアナ・ランスター二等陸士」

「…はい！」

「私は二人を機動六課のFWとして迎えたいと考えている。厳しい仕事にはなるやろうけど、濃い経験は詰めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやる？」

スバルとしては、憧れの高町教導官から直接、魔法戦を教われるし、執務官候補のティアナは、現職のハラオウン執務官からアドバイス等を貰える。

いきなりのスカウトの話に、流石にスバルとティアナは戸惑っていた。

そこに、なのはが二人の試験結果を持って来た。結果としては…不合格。

技術は二人とも問題ないが、危険行為と報告不良は見過ごせるレベルではない。

だが、二人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もランク扱いしておくのは、かえって危険と教官と試験官が見解が一致、再試験の為の特別講習を受けさせることとなった。

合格までは試験に集中したいだろうから、はやてへの返事は試験終了後となった。

スバルとティアナは中庭で、今後のことについて話し合っていた。選りすぐりの六課メンバー陣に不安を覚えるティアナだったが、スバルの励ましと自身の夢の為、入隊を決意するのだった。

「あの二人は、まあ入隊確定かな？」

「…だね」

中庭で相談し合う…というかジャレ合っている！？……スバルとティアナの様子を見ていたはやてとなのはは、二人の入隊を確信した。「なのはちゃん嬉しそうやね」

「二人とも育て甲斐があるし、時間かけてゆっくりと教えられるし…ね」

「フフフ…それは確実や」

六課が戦うべき敵は付け焼刃ではとても勝てない。じっくりと実力を身に付けさせなくては……。

「新規のFW候補はあと二人だけ……そっちは？」

「二人とも別世界……。今、シグナムが迎えに行ってるよ……本当は隊長のフェイトちゃんを迎えに行く予定やったんやけど……」
そこに、フェイトとリインが姿を見せた。

「……私はこの後、外せない仕事が出来ちゃったから……」

ちょうど、その二人が到着する時間帯に仕事がかち合ってしまったフェイトはやむを得ずシグナムに任せることにしたのだ。

「私も久しぶりに、その二人とリニスに会いたかったんだけど……」
フェイトも残念そうである。

「ほんなら、今度会うのは六課の隊舎でやな」

「お二人の部屋、しっかり作ってあるですよ」

「うん」

「楽しみにしてるよ」

第61管理世界『スプールス』から、第1世界『ミッドチルダ』へとやってきたエリオとキャロは、付き添いのリニスと共に六課からの迎えを待っていた。

「……もう時間過ぎてる」

「……まあ、シグナムも忙しい様ですから、少しくらいは仕方ないでしょう……」

「……やっぱり、中央の方たちって忙しいんですね？」

などと話していたら、エスカレーターで昇ってくるシグナムの姿が見えた。

「シグナム。こっちです」

「ああリニス、久しぶりだな……。そして、エリオとキャロ・ル・ルシエだな？」

「はい！」

「遅れて申し訳ない……古代遺失管理部、機動六課のシグナム二等空

尉だ…。長旅ご苦労だったな…」

「…いえ」

シグナムは、自分の隊に所属することになる二人を見た。

「…リニス…。二人の『魔導師』としての実力はどうなんだ!？」

「そうですね…。Bランク相当の実力はあると思いますよ」

聖闘士の修行と併行して、魔導師としても育成されているエリオとキャラロは、公式では囑託魔導師としての扱いである。

クロノ・ハラオウン提督の推薦で、数ヶ月前に囑託魔導師試験に合格している。

十年前のフェイトの時と違い、本局ではなく『スプールス』での異例試験だったが…。

「囑託魔導師扱いだが、我々の相手には『海闘士』^{マリナ}も含まれている。その時は、お前たちの『聖闘士』としての力を貸してもらうことになる…。よろしく頼むぞ…」

「…はい!…」

「では、シグナム…。二人をよろしくお願いします…」

「なんだ…もう行くのか? テスタロッサには会っていかないのか?」

リニスは、このまま聖域にいるカノンの下に戻る予定である。

「…フェイトも忙しいでしょうし、別にこれから二度と会えないわけでもないですから…」

「そうか。カノンによろしくな…」

「じゃあ、エリオとキャラロもしっかりとね…。そして…元気に老師の下に戻るように…」

「うん。リニスも…」

「…また…今度…」

リニスとしては、これから二人が戦うことになるであろう敵の事を思うと、心配でたまらなくなる。

『ガジエット』と共に現れる海闘士達…例え雑兵とはいえ、侮れない相手だ。

エリオとキャラロは、未だ実戦経験はない。

「こうなったら、貴様から血祭りに上げてやる！」

二人は同時に襲い掛かるが、突然その男から強大な小宇宙が発せられた。

「な…何っ!？」

「…ま…まさか、この男は!？」

「…さあ受ける獅子の牙を…! 『ライトニングプラズマ』!！」
男から発せられた無数の閃光が二人を貫く。

「「ギャアアアアア　　っ!！」」

ズタズタにされた二人は地に倒れ付した。

「…お…おま…えが…黄金の…獅子…子…」

「…『獅子座』の…アイオ…リ…」

言い切る前に事切れた。

ちなみに、二人がアイオリアを黄金聖闘士であることに気付かなかったのは、アイオリアが聖衣を纏っておらず、小宇宙も寸前まで抑えていたからである。

「…アイオリアさんの方も終わったわ…」

「…出現の頻度も数も増えてきているな…」

「…ああ、動きも段々賢くなってきたる」

「でも、これくらいならまだ私達だけでも抑えられるわ」

「…そうだな…」

「ド新人に任せるには、ちょっとメンドい相手だけだな…」

「仕方あるまい。我らだけでは手が足らぬ」

不安を口にするヴィータにザフィーラがそう諭した。

「その為の新部隊だもの」

「はやての…私達の新部隊…」

「…『機動六課』…かあ…」

レールウェイの窓から外を見ているスバルは、自分が所属すること

になる部隊の名前を呟いていた。

疲れているのか、ティアナはその横で眠っている。

機動六課に所属することで、もう一人の憧れの人との再会と、自らの出生に関わる運命が待っている事をスバルはまだ知らなかった。

第六十二話 F Wメンバー（後書き）

訓練を始めるFW達……。

そこで、スバルはもう一人の憧れの人と再会する。

そして、模擬戦の対戦相手とは……！？

時空を越えた黄金の闘士

「初訓練」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十三話 初訓練（前書き）

キャラの技の名称は声優繋がりで、スーパーロボット大戦のクスハの愛機『ゲルンガスト式』と『龍人機』、『龍虎王』から取ることに決定しました。

『真・龍虎王』の技は派手すぎて青銅レベルを超えているので使いませんが……。

ちなみに『盧山』の名を冠する技に関しては、ネタが思いついたので、少々お待ちください。

第六十三話 初訓練

時空管理局遺失物対策部隊、機動六課隊舎内ロビー。

陸士部隊制服に身を包んだ六課の隊員たちとエプロン姿のバックヤードスタッフの面々が一同に会していた。

その中には当然、FWとしてスカウトされたスバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士の姿もあった。

これから、機動六課が正式に活動を始めるにあたり、部隊長からの挨拶が行われようとしていた。

正面の立ち台に部隊長の八神はやて陸上二佐、その右手側にFW部隊分隊長の高町なのは一等空尉、フェイト・T・ハラウン執務官、左手側にリインと同じ部隊長次席補佐兼交代部隊責任者のグリフィス・ロウラン陸准尉。

立ち台の横に、FW部隊副隊長を務めるシグナム二等空尉、ヴィータ三等空尉と医療担当のシャマル主任医務官が並んでいた。

「機動六課課長、この本部隊舎の総部長、八神はやてです」
拍手が起こり、はやては挨拶の口上を続けた。

そんな機動六課の隊員たちをロビーの入口で見つめている二人。
民間協力者で、FW部隊に所属となったエリオとキャロル・ルシエであった。

当然、二人は正式な局員ではないので陸士部隊制服を着てはいない。エリオは、童虎や紫龍がいつも着ている太極拳・カンフー服姿であり、キャロはいつものアルザスの民族衣装を着て、童虎に渡されたバイザーを付けていた。

彼らは管理局員ではない為、こういう公式の催しに出席する義務はない。

にも関わらず、彼らがここにいるのは、自分たちと同じ民間協力者であり、六課の顧問を務めているアイオリアに指示されることだった。

部隊長の挨拶の後、さっさくFW陣は訓練を始める事になっているので、教導官であるのはと同僚となるスバル、ティアナを待っているのだ。

挨拶が終わり、はやてはフェイトとリインフォースの二人を連れて、ヴァイスの操縦するヘリに乗り、首都クラナガンの中央管理局へ向かった。

そこで、六課設立の趣旨の説明を行う為である。

六課が専門とする第一種搜索指定ロストロギア『レリック』は過去三件の大規模災害を引き起こし、その内二件は人為的な犯罪の可能性があり、その内の一件には、『海闘士』^{マリナ}と呼ばれる神の闘士が関わっている。

雑兵でも魔導師に匹敵する力を有する恐るべき相手である。

そして、隊舎に残ったなのは、陸士部隊制服から教導官用の本局制服に着替え、早速新人たちの訓練を始めようとしていた。

「えー、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フイニーノ一等陸士です。みんなは『シャリー』って呼ぶので良かったらそう呼んでね」

スバル達はシャリーから、預けていたデバイスを返してもらった。スバルは、母の形見（実は死んでいないが、スバルはその事実を知らない）の非人格式・拳装着型アームデバイス『リボルバーナックル』と自作ローラーを、ティアナは自作アンカーガンを、エリオはリニスガ『レヴァンティン』と『グラーフアイゼン』を参考に作った槍型アームデバイス『ストラダ』を、キャロは同じくりニスの作ったグローブ型ブーストデバイス『ケリュケイオン』を……。

「じゃ、早速訓練に入るうか」

「は……はい……？」

「でも……ここで……ですか？」

なのはの言葉に疑問顔のスバルとティアナ。

今いるこの場合は海側の隊舎横のなので、訓練スペースとしては狭すぎ空戦魔導師ならともかく、陸戦魔導師ではとても訓練が出まそうにない。

なのははクスリと微笑み、シャーリーに声を掛けた。

シャーリーが、端末を操作をすると、目の前の海上に陸戦用空間シミュレーターが展開した。

訓練内容は、逃走するターゲット…8体を破壊もしくは捕獲、15分以内にクリアすること。

「それでは」

「ミッション」

「スタート!!」

「どうだ、連中は…?」

「……流石にガジェット達のAMFに苦戦している…」

「まあ、まだまだよちよち歩きの新人共だ…。しゃーないけどな…」
新人達の訓練を見学していたシグナムとヴィータにアイオリアが声を掛けた。

モニターには、ティアナの魔力弾『シユートバレット』がかき消され、逃走するターゲット…『ガジェット・ドローン』の後を追うため带状魔法陣の光の道を作る『ウイングロード』を展開し追いかけるが『AMF』により、途中でいきなり道が消えてしまい、そのままビルの窓ガラスに突っ込んでしまう有様が映されていた。

「…エリオとキャラは?」

「あいつらも普段と勝手が違う様で、戸惑っているようだぞ…」

「お前やカノン、クロノ提督たちと違い、魔法戦闘と聖闘士の闘技の使い分けが上手く出来ていない」

午前中の訓練では、聖闘士の闘技の使用を禁じている為、二人は魔

導師としての力しか使っていない。

シグナムが指摘したように、アイオリアやカノン、そしてクロノ、ロツサ、ユーノは意識して使い分けが出来るが、実戦経験が乏しい二人は、うまく切り替えが出来ず、無意識に小宇宙を燃焼させては、慌てて中断している有様である。

それでも、4人は創意工夫して、なんとか『AMF』を突破しガジエットの破壊に成功した。

「はい。午前の訓練は終了。昼食を摂って、一時間後に午後の訓練……今日の午後の部の教導を担当するのは別の人だけだね」

「……えっ!?!」

エリオとキャロは事前に聞いていたのでそうでもないが、スバルとティアナの二人はなのはの言葉に驚く。

そこに、なのはの背後から一人の男が新人に近づいてきた。

その男の顔を見て、スバルは息を呑んだ。

「昼食後……お前たちの訓練を担当する六課オラザーバーの顧問を務めるアイオリアだ……よろしく頼む」

アイオリアの名を聞き、ティアナもまた息を呑んだ。

2年くらい前から、管理局地上本部に協力してくれている神の闘士『聖闘士』。救助活動が主な仕事である前所属の陸士386部隊とはあまり関わりがないが、それでも噂くらいは聞いている。

こと戦闘に関する限りにおいては、魔導師に匹敵もしくは凌駕する存在。

下位の聖闘士ならともかく、上位の聖闘士には空戦、陸戦問わず魔導師では対抗できない。

10年前までは、管理局の主流であった『魔法至上主義』を根底から揺さぶる存在。

特に最高位の『黄金聖闘士』は、管理局全戦力を集結させても逆に全滅させられる……という噂である。

流星に、ティアナはそれは誇張だと思っっているが、虚報ではない。現実問題として、管理局全戦力を一箇所に展開すること自体、不可能ではあるが、それでも魔導師では黄金聖闘士に歯が立たないのは事実である。

そして、目の前にいる男は、その『黄金聖闘士』。

その実力の一端は、ティアナも知っている。

3年前、ミッド地上でオーバーSランクの犯罪者が大規模テロを起こそうとした。

その犯罪者は10年前、クロノが『小宇宙』に目覚めるきっかけを作った男、『ゼブラ・ベリーサ』であった。

あるうことか彼奴は、第一世界であるミッドチルダを今回のテロのターゲットにした。

3年前の当時、地上本部には唯一対抗できそうなオーバーSランクのゼスト・グランガイツを失った為、彼に対抗できる魔導師は存在しておらず、そして聖闘士もまだ出向して来ていない。

ミッドチルダ……首都クラナガンが危機に晒されようとしていたが、たまたま陸士108部隊の長ゲンヤ・ナカジマ陸上三佐と今後について打ち合わせをしていたアイオリアが、ベリーサと遭遇し、これを撃退したのだ。

聖闘士の存在自体はベリーサは知らなかったものの、10年前のクロノを救いに来たカノンを見て、妙な力を持つ存在がいることは知ってはいたが、まさか本局と確執のある地上本部に同レベルの存在がいるとは、彼も思っていなかった。

用心深い彼にしては、珍しく拙い手を打ってしまったと言える。テロは未然に防がれベリーサ本人は、思いつきり手加減した『ライトニングボルト』一発であっさり沈んでしまい、逮捕されてしまったのだ。

ジェイル・スカリエツィに匹敵する広域次元犯罪者と言われた彼

のあつけない幕切れであった。

アイオリア本人の意向で、この事件がマスコミ等のメディアに映像で流れる事はなかったモノの、管理局の局員達には公開されていた。これが、黄金聖闘士の中でアイオリアの名が局全体に広まった理由である。

ティアナも訓練校を卒業し、スバルと共に386部隊に配属になってからこの映像を目にしたのだった。

顔は、被っていた『獅子座』の聖衣のマスクに覆われていたので、映像ではよく解らなかったが、その一撃がオーバーSランク魔導師の障壁と『防護服』ハリアジャケットを一撃で貫いていた事に絶句したのを覚えていた。

一方のスバルは、アイオリアの纏っていた金色のプロテクターを見て、あの空港火災の時に高町なのはと共に自分を助けてくれた人だった事に驚いていた。

父のゲンヤが隊長を務める部隊に所属している姉、ギンガは既にアイオリアと再会していたらしく、自分たちを助けてくれたあの人とこの映像の人物が同一人物であることが確認できた。

なのはと同じくらい憧れを抱いた人の強さの一端を映像とはいえ見ることの出来たスバルは感極まつたらしく、なのはとアイオリアへの憧れから編み出した拳から打ち出す砲撃魔法の名称を『ディバイン・ボルト』と命名した程である。

その男が今、二人の前に姿を見せているのだ。

「……………あ…あの…あ…あたし…！」

なのはと再会した時の様に、呆然としたスバルがアイオリアに声を掛けようとした時……………アイオリアの手がスバルの頭を撫でた。

スバルはあの時、自分にマントを被せてくれた時に感じた温もりを思い出した。

「ナカジマ三佐やギンガに聞いていたが……………大きくなったなお嬢ちゃん……………いや…スバル…！」

アイオリアに自分の名前を呼んでもらった瞬間、スバルはなのはと

再会した時と同じく号泣した。

昼食後、シュミレーター前にスバルとティアナが並んで立っていた。そう、スバルとティアナのみである。

【ねえ、ティア……エリオとキャロの二人はどうしたんだろう？】

【解らないけど……でも、あの二人の立場は民間協力者よ。私達のような正規の局員じゃないから、すべての訓練に参加するわけじゃないんじゃないかしら？】

【……そうだね。あの二人はまだ10歳だもんね……】
と、念話で話している二人になのはが声を掛けた。

「じゃあ、午前中にも言ったけど、今日の午後の訓練はアイオリアさんに担当してもらおうよ」

そう言うとなのは後ろに下がり、シャーリーと並びアイオリアが前に出てきた。

「さて、ガジエットの他に六課が相手をする敵は存在する」

シャーリーが空間モニターを開き、鱗を模したプロテクターを纏った集団の映像が映し出された。

「奴等は『海闘士』と呼ばれる俺たち『聖闘士』の宿敵の一つだ」
アイオリアは、スバルとティアナに海闘士という存在について教える為に『地球』^{エデン}の聖域に伝わる『超神話』について語り始めた。

宇宙の創世は今から約百五十億年前に、一つの爆発から始まった。この『大爆発』^{ビッグバン}によって解き放たれた『神々の意思』^{ビックウィル}が宿った星『地球』^{エデン}にまず『大地』^{ガイア}が、次に『天空』^{ウラノス}と『海洋』^{ポントス}が、そして『生命』が生まれたという。そして、その中で『神々の意思』を発現させた存在が誕生した。

彼らは『ティターン神族』を名乗り君臨したが、彼らの王である『クロノス農耕神』は暴虐の王であった。

やがて彼は、自らの子らに反旗を翻され、その地位を追われた。クロノスの息子らは『ゼウス』、『ハーデス』、『ポセイドン』と名乗り、やがてゼウスは『天空』と『大地』を治める『天帝』となり、ポセイドンは『海』を治める『海皇』、ハーデスは『冥界』を治める『冥王』となった。

そして幾人かの他の神々が名乗りをあげ、そして聖闘士が護るべき存在である『アテナ戦女神』が誕生した。

彼らは『天空』に最も近いと言われる『オリンポス山』に居を構えたことから、『オリンポス十二神』と呼ばれるようになった。

ギリシア神話では、アテナはゼウスの頭が割れて誕生したとされているが、『超神話』では詳しくは記されておらず、その誕生に関わる部分こそ、アテナの真の使命が秘められているという説もある。

他にも様々な『神々』が誕生したが、立場上は『オリンポス十二神』の統治を認め礼を取るが、素直に従うのを良しとせず、他の次元に存在する……平行世界へと旅立って行った。

これが、『ミッドチルダ』、『ベルカ』などを含めた次元世界の誕生である。

やがて『ゼウス天帝』は娘のアテナに『大地』を委ねると、他の神々と『エンジェル天闘士』達を引き連れ、『天空』の彼方に消えていったという。

『ポセイドン天帝』が去った後、『大地』の主神の座をアテナから奪うべく、『ポセイドン海皇』が準備を開始し、七つの海から屈強の戦士たちが集められた。

これが、『海闘士』の発祥である。

そして、ついに『海皇』の地上侵攻が始まり、地上の戦士たちは神秘の金属『オリハルコン』で作られた『スケイル鱗衣』を纏った『海闘士』

の前に為す術もなく倒されていった。

地上の名だたる戦士たちが、次々と倒された為、戦場には年端のいかぬ少年たちの姿が見られるようになった。

アテナが武器を嫌う為、彼らは自らの肉体を武器に戦い、傷つき倒れていった。

少年達が傷つくことに悲しんだアテナは、『オリンポス十二神』の一人『鍛冶神』^{ヘパイストス}と彼の技術を伝授されたムー大陸の錬金術師によって作り出された『聖衣』^{クロス}と呼ばれる防具を与え、これを纏った少年達こそが『聖闘士』の発祥である。

ギリシア神話では、ヘパイストスは妻のアフロディテに相手にされなかつた為、仕事場に訪れたアテナに欲情して追いかけ、彼女の足に精子を漏らし、アテナがそれを羊毛で拭き取り、大地に投げるとそこから半人半蛇のエリクトニオスという少年が誕生するとあるが、これは無論、ギリシア神話における創作であり、アテナとヘパイストスはお互い協力関係を築いていたと『超神話』では記されている。故に『聖闘士』の『聖衣』、『天闘士』の『天衣』^{ケローリ}は『鍛冶神』の技術だが、『海闘士』の『鱗衣』、『冥闘士』^{スペクター}の『冥衣』^{サイプリス}は彼の技術によって生まれた防具ではなかつた。

『聖闘士』の誕生により、これまでの劣勢を覆したアテナは、『海皇』に野望を捨て、『海界』に還る様説得を試みるが、『海皇』はこれを無視し海闘士と共に地上侵攻の拠点である城砦宮『アトランテイス』に籠り、大洪水や大地震起こし、多くの命を奪い去った。

これに怒ったアテナは、8人の聖闘士を『アトランテイス』に派遣。激しい戦いの末、8人の聖闘士は『アトランテイス』を海の底に沈めてしまった。

こうして、『海皇』との第一次聖戦はアテナの勝利で幕を閉じた。

「……話を聞く限り、海闘士は聖闘士よりも弱いと感じますが？」

「確かにそう聞こえるかも知れんが、実際はそうでもない。確かに俺としても、黄金聖闘士二人も居れば、海闘士の最高位である海将軍ラルが相手でも物の数ではない…という自信はある」

ティアナの発言を、アイオリアは否定する。

実際、先海闘士との聖戦において、『蠍座スコルピオン』のミロも「自分とアイオリアの二人だけでも海將軍など物の数ではない」と主張していたが……。

「だが、それでも侮れない敵であることもまた確かだ。海將軍の一人に黄金聖闘士の一人が敗北したし…な」

『サガの乱』の十二宮の戦いにおいて、瀕死の重傷を負った星矢達の看病をしていた沙織を護る為、黄金聖闘士の中で並ぶもののない『剛』を誇る『牡牛座タウラス』のアルデバランが派遣されたが、海將軍の？2の実力を誇る『海魔女セイレーン』のソレントに不覚を取ってしまった。た。

沙織が割り込まなければ、アルデバランはそこで命を落としていた可能性が高い。

誤解のないように言っておくが、アルデバランは決して弱くはない。アイオリアも正面から彼とぶつかれば、敗れるつもりはないが、それでも相当の覚悟が必要な相手である。

「それに、仮に聖闘士より弱かったとしても、それでもお前たちにとっては脅威であることに違いはない。それに戦力的に見ても、海闘士の方が我等よりも数の上では優勢だしな」

なんと言っても海闘士は雑兵レベルでも、青銅聖闘士に匹敵する実力がある。

それに対し、こちらの雑兵は下位ランクの魔導師よりも弱い者もいる有様である。

「さて、取りあえず海闘士に対する予備知識はこんなモノでいいだろう」

ようやく、訓練を再開するようである。

「午後からの訓練は、二人に『神の闘士』という存在の実力を肌で

感じ取ってもらおうことだよ」

今まで下がっていたなのはが、二人に訓練内容の説明を始めた。

「そ…それってつまり、アイオリアさんとの模擬戦ですか？」

「まさか…それじゃあ訓練にならないよ」

ティアナの質問になのはが苦笑した。

「実際、今、スバルとティアナがアイオリアさんと模擬戦をしても一瞬で終わってしまうだけだよ。何しろアイオリアさんは、私とフエイト隊長、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長の四人掛かりでも、持って一分…下手すれば私達でも一瞬で叩きのめされるくらい実力が違うからね」

それでは、何の実も得られない。

なのはの返答にティアナ達は息を呑む。

確かにアイオリアはオーバースランクの犯罪者を一撃で倒した。

しかし、管理局が誇る『エース・オブ・エース』と『金の閃光』、そしてヴォルケンリッター二人を相手にして、実力が違うと言われめるとは……。

スバルもティアナも、まだまだ『聖闘士』という存在を甘く見ている証拠であった。

「二人の模擬戦の相手は既にシュミレーターで待機しているから…後、二人とも訓練服じゃなく、『防護服』を使用すること」

なのはの指示に従い、『防護服』を纏ったスバルとティアナはシュミレーターの中に入った。

そこで二人を待っていた模擬戦相手とは……。

「えっ!？」

「あ…アンタ達が!？」

『麒麟星座』の聖衣を纏ったエリオと、『冠星座』の聖衣を纏い、バイザーではなく従来の女性聖闘士の仮面を付けたキャロであった。

第六十三話 初訓練（後書き）

スバルとティアナは、キャロと模擬戦を行うことになった。予備知識はあっても、実感がなかった二人はキャロの技の威力に息を呑む。

幻術を駆使し、ティアナはキャロを翻弄するのに成功するが……！？

時空を越えた黄金の闘士

「スターズ対冠^{コロナ}星座」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十四話 スターズ対冠星座

スバルとティアナは我が目を疑っていた。

目の前にいる模擬戦の相手は、午前中、自分たちと共に訓練を受けていた民間協力者のエリオとキャロ・ル・ルシエであった。

自分達が訓練服ではなく、バリアジャケット『防護服』になっているが、彼らは聖闘士が身に付けるプロテクター…『クロス聖衣』を纏っていた。

エリオは訓練服の上から、頭部に額と米神を覆うヘッドギア、胴体部にはシオルダーガードと胸部のみ覆うプレートアーマーとベルト、手足には前腕部まで覆ったガントレットに、膝関節のみ覆ったニーパッド。

キャロの聖衣は、エリオよりもかなり軽装で、レオタードのような服装の上に、左肩のみのシオルダーガードと未成熟なバストの上を覆うプレートアーマー、右腕には前腕部を覆ったガントレット、左腕には肘を覆ったエルボーパッド、両膝のニーパッド、そして頭部にはヘッドギアと、先ほどまで付けていたバイザーではなく、無機質な仮面マスクが彼女の顔を全て覆い隠していた。

「わざわざ隠している必要もないので教えるが、二人は表向きは囑託魔導師だが、聖闘士でもある。六課が戦うべき海闘士マリナーの雑兵と同格の実力を持つ『ブロンズセイント青銅聖闘士』だ」

二組の間に立ったアイオリアが、エリオ達について説明していた。敵に海闘士がいる以上、聖闘士が六課に協力するのは吝かではないしかし、管理局に出頭している聖闘士達を六課に集めるわけにはいかないのです、この二人を表向きは囑託魔導師として六課に所属させたのだ。

「さて、スバルとランスターの二人には、この二人のどちらかと模擬戦をしてもらおう」

「つまり、私とスバルがちびっ子達とそれぞれ一対一で、模擬戦を行うということですか？」

「……違うよ、ティアナとスバルは二人掛かりで、この二人のどちらかと模擬戦を行うんだよ」

アイオリアの傍らにいたなのはの説明に、ティアナは内心ムツとしていた。

舐められている……そう感じたようだ。

しかし、そんなティアナの思い等、看破されていた。

「舐めているんじゃないよ、純然たる事実だよ……。私だってエリオとキャラコを一对で戦えば、負けないにしても相当の覚悟が必要だよ……」

その後「今はね……」と呟く『エース・オブ・エース』の異名を誇る管理局のエースにティアナは絶句する。

「今は、エリオもキャラコも実戦経験が少ないから、私が勝つ確率は高い。でも、二人が経験を積んでいけば、陸戦で一对では勝つのは難しい」

空の飛べない聖闘士に空戦魔導師が最も有効なのは、空中戦だ。

ゴールドセイント黄金聖闘士相手には空が飛べた所でハンデにもならないが、青銅聖闘士相手には有利に戦えるだろう。

最も、エリオとキャラコには飛竜であるフリードリヒに騎乗するといふ、空戦方法があるが……。

一般の召喚魔導師が召喚する赤竜程度なら、オーバーSランクの魔導師なら容易に倒せる。

しかし、アルザスの竜召喚士ルシエの末裔であるキャラコが使役するフリードリヒと赤竜は比べ物にならない。

今、キャラコの傍らにいる小さな姿ならともかく、『真の姿』になればオーバーSランク魔導師といえど油断できない。

「今回の模擬戦の目的は、先ほども言ったが『神の闘士』の実力を肌で感じ取ってもらう為だ。ランスターの反応からもわかるが、体験せねば実感できない？」

言葉だけでは、決して実感できない。

スバルもティアナも、アイオリアがゼブラ・ベリーサを一撃で仕留

める映像を見ているが、彼女たちは、ゼブラ・ベリーサがどれ程の実力だったのかを理解している訳ではない。だから、その身で体験した方が実感しやすい。

アイオリアでは実力差があり過ぎて、かえって実感しにくいかもしれない。

故に、スバル達でもある程度は対抗できそうな青銅聖闘士と模擬戦を行うことにしたのだった。

二人の対戦相手は、コイン・トスの結果、キャロに決まった。

「…ねえ、キャロ…。さつきつけていたバイザーといい、今の仮面といい、何で顔を隠しているの？」

朝から疑問に思っていた事を口にするスバル。

「……聖闘士は本来、アテナ以外は男だけの世界です。そこに女子が入るためには、女である事を捨てる為に仮面をつけるんです。そして、その仮面の下の素顔を見た相手に対しては、二通りの選択をしなければなりません」

「…選択？」

「…まあ、そのことはいいでしょ」

内容が内容だけにキャロは話を打ち切り、構えを取った。

「三人とも準備はいいな？始めるぞ！」

アイオリアの合図の直後、キャロは二人に拳を放った。

繰り出される拳からの衝撃波が、二人を襲う。

「わっ！？」

「な…何なの？」

二人の間をすり抜けていった拳圧は、二人の後ろにあったコンクリートの柱を容易く薙ぎ倒した。

「…なっ！？」

シュミレーターが作り出したモノとはいえ、本物と変わらないそれ

を、容易く破壊したことに驚愕する。

「……余所見をするな！」

アイオリアの声に、ハツとなったスバルとティアナが前を見たとき、既にキヤロの姿はなかった。

そして、二人の上から太陽の光が遮られたので、上の方に視線を向けると、キヤロが二人に蹴り降りてきた。

「キヤア！」

慌てそれを躲した二人だったが、キヤロの蹴りが地を打った時に発せられた衝撃に吹き飛ばされた。

体勢を立て直した二人が見たものは、まるで流星が落ちた後のようなクレーターであった。

あんな蹴りをまともに喰らったら……。

二人の背中に冷たい汗が流れていた。

「これで、二人には聖闘士の攻撃力がどれ程のものか理解出来ただろう」

「流石にあの一撃は、防護服でも防げませんからね」

最初のキヤロの攻撃は、わざと外す様にアイオリアの指示によるものであった。

魔法と違い、聖闘士の技には『非殺傷設定』などはない。

故に通常の模擬戦なら相手を殺さない程度の手加減をしなければならぬが、今回はスバルとティアナに聖闘士の力を知ってもらう事も目的の一つである。

最初だけは全力で攻撃して、それをわざと外すように指示を出していたのだ。

「キヤロ！これは模擬戦だ。もう少し威力を弱める！」

「はい！」

このやりとりも予定通りである。

これで、この後キャラクの攻撃力が落ちても、それは『手加減』している二人に認識させることが出来る。
なぜなら、魔導師が二人掛かりなら攻撃力さえ弱めれば、青銅聖闘士相手なら、それなりに戦えるのだから……。しかし、それで聖闘士の攻撃力を侮ってもらっても困るので、しっかりと認識させなければならかった。

改めて対峙するスターズとキャラク。

「ティア、先手必勝…行くよ！」

「ま…待ちなさい!!」

ティアナの静止が聞こえていないのか、そのまま突撃をしかけるスバル。

「行くよキャラク! 『リボルバーシユート』!!」

リボルバーナツクルが回転し、突進しながら拳を突き出した。

しかし、キャラクはそれをあっさり躲すとカウンターの掌低打ちをスバルの腹に放つ。

「…『ブーストナツクル』!!」

『防護服』を抜かないよう手加減したが、それでも相当の威力である。

「グハッ！」

スバルはそのままティアナの横まで吹っ飛ばされた。

「このバカスバル! いくらアンタが近接型とはいえ、聖闘士相手に真正面から突っ込んだら、返り討ちに合うに決まってるでしょ!!」

ティアナも、聖闘士が最低でも音速^{マッハ}1の速さを持っていることは聞き及んでいた。

魔導師にとつての最高速が、聖闘士の基本速度。

つまり、いくら突進力の強いスバルでも、聖闘士からみたらまだまだ遅いのだ。

「いい加減、頭を切り替えなさい……私達じゃ、いくら最下級の聖闘士でもバカ正直に戦えば、勝率は0だってことを……」
最初は舐められているといきり立っていたティアナだったが、先ほどのキャラコの蹴りを見て、純然たる事実と認識した。

おそらく陸戦では、なのはでもバカ正直に戦えば、キャラコには勝てない。

実際、エリオとキャラコと近接でまともに戦えるのはシグナムくらいであろう。

シグナムは、豊富な経験で自分よりも速い相手に対しても、対応できる。

フェイトも、速さは青銅聖闘士と互角だが、残念ながら防御力が弱い。

近接限定では、フェイトはシグナムの様に聖闘士と戦うことはできなかった。

「じ……じゃあ、どうするの？」

「とにかく地形を利用して、私とアンタの持ち味をフルに生かすしかないわね……」

「ほう……考えたなランスター……」

「そうですね」

ティアナがとつた行動を見て、アイオリアとなのはが感心していた。魔力弾を撃ち、キャラコの周囲でそれを破裂させて視界を遮り、ビル群に紛れ込み姿を隠す。

その後、いたる所からスバルとティアナが現れ、キャラコを翻弄していた。

そんなキャラコを見て、エリオはハラハラしている。

「……ティアナの幻術ですね……」

「キャラコは、聖闘士の基礎的な闘技を習得しただけに過ぎない青銅

聖闘士だ。俺の知る限り、青銅で幻術系統を使えるのは一輝しかない」

幻術等は白銀シルバー聖闘士級なので、一般の青銅聖闘士には扱えない。最初から、白銀聖闘士を圧倒できる実力を有していた『フェニックス鳳凰星座』の一輝以外には幻術は有効な手段である。

最も、アイオリア達黄金聖闘士には、ティアナ程度の幻術は通用しない。

アイオリア達を翻弄させるには、カノン、一輝、シャカ級の技量が必要である。

特に一輝の『鳳凰幻魔拳』が通用しないのは、シャカくらいである。

「まだまだキャラは相手の気配を探ることはなれていないから……特に今は『ケリュケイオン』を持っていないから、魔力探知も難しいだろう」

デバイス無しでの魔力探知は難しいので、『ケリュケイオン』を外しているキャラは魔力でティアナ達の位置を特定できていない。

聖闘士になって、まだ一度も実戦を経験していないから、特にである。

「僕達は、老師と模擬戦シミュレーションをしている程度でしたからね」

「それだけでも紫龍に比べれば、十分お前たちは恵まれているけどな」

エリオとキャラは、聖闘士になった時点での実力は紫龍よりも上とも言えた。

二人は、修行中に童虎と手合わせできていたが、紫龍にはそんな経験はなかった。無理もない。

紫龍の修行中は、童虎はずっと五老峰の大滝の前に座したまま、動かなかった。

今の若々しい姿でもなく、二百数十年前からずっと『108の魔星』が封じられた塔を監視していたのだから……。

当然、そんな状態で紫龍と手合わせなど出来ない。

その点においては、エリオとキャラロは紫龍よりも恵まれていた。最も、聖闘士になって星矢に敗北してからの紫龍は常に強者と戦っていた。

恐らくは、一輝、星矢の次に強敵とぶつかったのが紫龍と言えよう。
ブラック
ブラックフォー
暗黒ドラゴンは、暗黒四天王最強だった。

『ペルセウス座』のアルゴルも、教皇に青銅抹殺を命じられた白銀の中では最強であり、自らの両目を捨てなければ勝てなかった。

『蟹座』のデスマスクも、黄金聖衣がデスマスクを見放さなければ、
キャンサー
死界の穴に叩き落とされていたろうし、『山羊座』のシユラも禁
カプリコーン
じ手の『盧山亢龍霸』で相打ちを仕掛けなければ勝てなかった。

『クリュサオル』のクリシユナも、シユラから『聖剣』を受け継いでいなければ……。

これほどの強敵、難敵との激戦を潜り抜け成長した紫龍にエリオとキャラロが追いつくのは至難の業である。

「後はアンタ次第よスバル！」

幻術に紛れ込んだスバルの足元に近代ベルカ式の魔法陣が展開する。
「しまった！」

幻術に翻弄されたキャラロは対応が遅れてしまっていた。

「行くよキャラロ！一撃必倒『デイバイン・ボルト』！！」
スバルの拳から撃ち放たれた砲撃がキャラロに直撃した。

「……『デイバイン・ボルト』？」

「ええ、この前のBランク昇格試験の時も使っていましたけど、私の『デイバインバスター』とアイオリアさんの『ライトニングボルト』から取ったみたいですよ……」

「……………ほう……………」

4年前の空港火災でアイオリアとなのはに助けられて以来、ずっと二人に憧れ続けたスバルらしい命名であった。

「それにしても、今のはいいタイミングだった…。キャラは避ける間もなくスバルの魔法に直撃した……………が……………」

「あれでキャラを倒せたと思うのは間違いですね……………」

全力で放った『デイベイン・ボルト』が直撃した手ごたえを感じていたスバルにティアナが近づいて来た。

「上手くいったねティア」

「ま、正面から戦わなければ私達でも、なんとかなっただわね……………」
二人はホツと息をついていた。

しかし、これが勝敗を分ける結果となった。

「エッ!?!」

「な……………何……………この感じ!?!」

二人が感じるのは『宇宙』。

魔力と小宇宙はまったくの別物であるが、それぞれ必殺技とも言えるくらいの技を放つときは、お互い感知することが出来る。

「う……………嘘!?!」

煙が晴れて、見えてきたは、しっかりと立っているキャラの姿だった。

なんだかんだ言いながら、まだまだスバルとティアナは甘く見ていたのだ。

キャラ本人ではなく、キャラが纏っている『聖衣』を……………。

たとえ、最下級の『青銅聖衣』でも、その防御力は『防護服』など軽く凌駕する。

残念ながら、スバルの『デイベイン・ボルト』の衝撃は、『冠^{コロナ}星座』の聖衣によって殆ど防がれていたのだ。

第六十四話 スターズ対冠星座（後書き）

日々訓練を続けるFW陣。

はやてとアイオリアは、聖王教会の騎士カリムと対面していた。スバルとティアナが新しいデバイスを受け取った直後、アラートが鳴り響く。

時空を越えた黄金の闘士

「ファースト・アラート」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十五話 ファースト・アライト

スバルとティアナはキャロとの模擬戦で、自分たちがこれから戦っていく相手というのがどのようなモノなのか、多少は理解したようである。

途中までは、自分たちのペースで進んでいた戦いだったが、本来トドメとなるはずの決め手がキャロには通用しなかった。

そんな2人にアイオリアが、対海闘士の対処法の説明をしていた。

「まあ、出向している聖闘士がいる部隊はあいつらに任せているが、数に限りがあるからな。聖闘士のいない部隊が海闘士と遭遇した時は、まず一対一では戦わない。必ず、多対一で戦うように心がけさせている。何とか撃退できてはいるが、その内の何人かは、良くて病院送り、悪ければ殉職している……」

無論、聖闘士も今の所、死者は出ていないが、何人かは重傷を負っている。

「あと、絶対に避けなければならないのが、密閉空間での戦闘だ。聖闘士や海闘士を相手にする場合、絶対にそういう場での戦闘は避ける……」

魔導師が聖闘士に対抗するには、周りの環境を利用するのがベストだ。

周りの障害物やアウトレンジからの砲撃……、接近戦は圧倒的に不利なのだから……。

故に、狭い場所での戦いは魔導師が圧倒的に不利になる。

距離が取れないから、音速の動きがスタンダードな聖闘士や海闘士なら、あつという間に懐に入られてしまう。

数年前、ブラックセイント暗黒聖闘士にアースラ内に侵入された時、リンディとリナスが暗黒聖闘士達相手に苦戦した様に……。

空を飛ぶことのできる空戦魔導師ならともかく、陸戦魔導師の場合には、障害物の余りない平原や荒野での戦いも同様である。

いかに距離を置こうにも、身を隠す所がなければ、音速の動きですぐに追い詰められてしまうからだ。

現に翌日、スバルとティアナはエリオと密閉空間や平原に設定させたシュミレーターで模擬戦を行ったが、5分と経たずに敗北していた。

それからしばらく、FW陣は訓練に明け暮れていた。

基本的には、なのはの教導がメインであるが、たまに聖闘士としてのエリオとキャロを相手に、海闘士対策の訓練も行われていた。

毎日、へとへとになって宿舎に戻るスバルとティアナは、これまでの自分たちが行ってきた訓練がいかに甘いものなのか骨身に染みていた。

「……今日も疲れた……それにしても……」

スバルは自分たちとは対照的に、ケロツとしている年少組に視線を向けた。

「あ……あなた達……アレだけ扱かれて、なんで平然としていられるのよ……？」

「……今までの修行に比べれば、まだまだ軽いですよ。あの程度で根を上げていたら聖闘士なんかにはなれませんよ……」

「老師の修行って地味に厳しいですから……最も、辛いなんて思った事一度もありませんけど……」

ティアナの指摘に、苦笑しながら答える2人。

聖闘士の修行は、魔導師の訓練の比ではない。

油断すると、間違いなく死に直結する。

当然、エリオもキャロも地獄のような修行を課されていた。

しかし、2人とも不思議と辛いと思っただけじゃない。

それは偏に童虎という師を持った幸運といえよう。

星矢達、青銅聖闘士五人の中で、最も恵まれていたのは間違いなく

紫龍だった。

星矢は、聖闘士発祥の地であるギリシア・聖域で修行したので、脱走すれば処刑、師である魔鈴も「死ぬ」と訴えても「死ねば」と返すようなありがたくて涙がちよちよぎれる様な師匠だった。

それでも、魔鈴を慕った星矢を見て、どんな調教しつけをされたのか疑問に思う。

氷河は、師匠は兎も角、修行地が東シベリアという極寒地なので、環境的に厳しい。

瞬も氷河同様、師匠には恵まれたが、昼間は灼熱、夜間は寒波という過酷な修行地だった。

一輝に至っては最悪の師匠、修行地も過酷な環境という目も当てられない地獄だった。

エスメラルダという心の支えがなければ、いかに一輝と言えど、耐え切れずに死んでいた事間違いないだった。

それに比べれば、自然豊かな盧山五老峰。長江中下流の暑苦しい亜熱帯気候の中でも稀有な涼しい気候で有名な避暑地でもある。

そして、師匠の童虎は聖闘士としても人間としても優れていて、全ての聖闘士に敬意を払われる存在。

他の4人に比べれば、紫龍はかなり恵まれている。

当然、エリオとキャロも同様であり、カノンとアイオリアに指導を受けたクロノやヴェロツサから見れば、うらやましい限りであろう。最も、クロノとロツサも星矢同様、それぞれ師匠を慕っているので、魔鈴同様、2人も弟子の調教はしっかりしていたのだろう。

未だに本出勤はなく、勤務と訓練を繰り返すFW陣達。

最も、民間協力者であるエリオとキャロに勤務はないが……………。

早朝訓練を終え、皆が集合してなのはの話聞いていたら、フリードがキョロキョロと首を動かしていた。

「フリード、どうしたの…?」

「……なんか…焦げ臭いような……」

「あっ、スバル…アンタのローラー!」

エリオの言葉に、ハツとなったティアナがスバルに促す。

スバルの自作ローラーがショートして、煙が出ていた。

「うわっヤバ!…あっ……ちゃく…しまった、無茶させちゃった」
ショートしている自作ローラーを抱きかかえるスバル。

スバルのローラーだけでなく、ティアナのアンカーガンも実は限界だった。

先ほどの訓練でも弾詰まりならぬ魔力詰まりを起こしている。

手入れは怠ってはいないが、所詮メカニックマイスターの資格を持たないアマチュアのハンドメイドデバイスでは、なのはの厳しい教導には耐えられなかったようだ。

「……みんな訓練にも慣れてきたし……エリオとキャロはともかくノ……2人はそろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ……」

「…新?」

「…デバイス?」

なのはの呟きに、スバルとティアナはきよんとんとして聞いていた。

はやてとアイオリアの2人は、六番ポートから聖王教会に向かっていた。

はやてはフェイトの車で送ってもらい、アイオリアはバイクでそれについていった。

「…まあ、リア兄はバイクよりも自分の足で走る方が速いんやけど……」

「……流石に市街地を光速で移動されたら洒落にならないよね……」

執務室でデスクワークをしていた聖王教会騎士カリム・グラシアに、秘書であるシャツハ・ヌエラから通信が入った。

「騎士カリム：騎士はやてとお連れの方がいらつしやいました」

カリムは、自分の部屋に通し、お茶を用意する様に伝える。

書類を書き上げペンを置くと、扉をノックする音が聞こえてきた。

「どうぞ！」

扉が開き、巡礼者の格好をした自分の妹分と皮のプロテクターを身に付けた男が入室してきた。

「カリム。久しぶりや」

「はやて。いらつしやい！」

カリムは笑顔ではやてを迎えると、その傍らにいる男に頭を下げた。

「義弟あにいとがお世話になりましたのに、今日までご挨拶に伺わないどころかそちらから出向いて戴き、申し訳ありません。ヴェロツサ・アコースの義姉あね、カリム・グラシアです」

「…アイオリアだ…。始めまして…」

アイオリアは、差し出されたカリムの手を握り、堅く握手をし微笑んだ。

頼りがいのある微笑みと、手から伝わる力強くも優しい暖かさを感じた。

自分の周りにはいないタイプの男性を見て、カリムの頬は朱が差していた。

「……ヤバツ…。恋敵を増やしてもうたかも…」

カリムの反応に、内心、焦りを覚えるはやて。

本人に自覚はないが、アイオリアは局の女性からの人気が高い。

はやてと守護騎士達を筆頭に、命を救われたスバル。

更には地上本部のレジアス中將の娘のオーリス三佐。

陸士108部隊所属でスバル同様、命を救われた姉のギンガ。

つい先日は、六課隊員寮の寮母を務めるアイナ・トライトンと親しそうに会話をしていた。

他のバックヤードの女性達にも好意を持たれている。

そこまで、女性局員の好意を持たれているにも関わらず、男性局員からの反感は少ない。

カノンやムウとは違い、基本的に年下に対し面倒見が良いので、アイオリアを慕っている者は数多い。

強さと優しさを兼ね備えた漢の中の漢とも言えるアイオリアは、女にも男（同性愛的な意味ではない）にもよくモテていた。

「それでは、立ち話も何ですし、もうすぐシャツハがお茶を持ってきますのでとりあえずこちらにどうぞ……」

カリムからの話の内容は、『ガジェット・ドローン』についてであった。

新型ガジェットの存在と……。

「ガジェット同士の戦闘？」

「ええ。極稀にんだけど、ガジェット同士の戦闘が確認されているわ」

「……同士討ちやるか？」

「……その可能性も否定できないけど……私達は、第三勢力の存在を疑っているわ……」

モニターに映し出されたガジェットの画像。

「……外観に多少の差異があるな……」

「ええ。性能に関してはほぼ一緒。同じ性能なのにその外観を変えらるなんて意味はないし……外観が違うからって、機械兵器が同士討ちをするのも不自然。この件から考えて、海闘士達とは別にカスタマイズされた『ガジェット』を使用している勢力があると判断せざるえない……」

海闘士だけでもやっかいなのにここに来て、別の新たな勢力の出現。その勢力は、敵なのか味方なのか……。

頭が痛くなってきたはやてに追い討ちをかけるように、ミッドチルダに『レリック』らしき不信貨物が運ばれたと告げられた。

その頃、スバルとティアナに新デバイスが与えられていた。

スバルに与えられたのは、ローラーブーツ型インテリジェントデバイス『マツハキヤリバー』。

スバルの固有魔法である『ウイングロード』を自動展開でき、スバルのもう一つのデバイスである『リボルバーナックル』の収納、瞬間装着、カートリッジロードの制御している。

ティアナに与えられたのは、拳銃型インテリジェントデバイス『クロスミラージユ』。

特徴として、『ワンハンドモード』から『ツーハンドモード』へと二丁に増やす事ができる。

更に後付けでカートリッジシステムを組み込んだなのは、『レイジングハート』、フェイトの『バルディッシュ』と違い、当初からカートリッジを組み込んで政策されている。

エリオとキャロのデバイスは、もともとリニスが管理局の最新技術を元に製作している。

特にエリオの槍型アームドデバイス『ストラーダ』は現段階での近代ベルカ式のデバイスの中では最良のデバイスである。

最も、聖闘士であるエリオは実戦では余りデバイスを使わないので、宝の持ち腐れとも言えるが……。

スターズに今、渡されたデバイスと、ライトニング達のデバイスには出力リミッターが施されており、訓練の段階ごとに解除していくとの事であった。

その時、隊舎にアラートが鳴り響いた。

一級警戒態勢のアラートである。

「グリフィス君！」

【はい。教会本部からの出動要請です】

そこに、聖王教会にいるはやてから、なのは達と車で移動中のフェイトに通信が入る。

【教会騎士団の調査部で追ってた『レリック』らしきモノが見つかった！】

エイリム山岳丘陵地区を走行中の『レリック』を積んだりニアレールが『ガジェット』に襲われ、車両の制御が奪われたようだ。

内部に侵入したガジェットは30体以上。
いきなりハードな初任務である。

【機動六課FW部隊……出動！】

「「「「「はい！」「」「」「」

【了解！】

第六十五話 ファースト・アライト（後書き）

時空を越えた黄金の闘士

「翔ける飛龍」

君は、小宇宙を感じた事があるか！？

オッス！オラ悟空。

この「時空を越えた黄金の闘士」が終わった後に、オラ達とリリカ
ルなのはクロスオーバーっちゅう話が始まるぞ。

タイトルは「時空を越えた」シリーズ第2弾「時空を越えた超戦士」
。

主人公は、オラの息子の悟飯だ。

いま、この物語の前の話の「序章」を公開中だ。

絶対、見てくれよな！

第六十六話 翔ける飛龍（前書き）

今回、エリオの新しい技が出ます。

車田漫画ネタで、20世紀最大の必殺パンチと云われる『アレ』です。

そして、皆さんお待ちかねの『盧山』系の技も……。

誰が使うかは、本編を読んで確認してください。

第六十六話 翔ける飛龍

レリックを乗せて山岳地帯を走るリニアレールには、たくさんのガジェット・ドローンが取り付いていた。

レリックが格納されている車両には進入されていないが、防護扉が破られるのも時間の問題。

そして、現場に急行するなのは達を乗せたヘリの前に、飛行型のガジェット？型の編隊が襲撃を仕掛けてきた。

なのはは、制空権を確保する為、現場に急行して来たフェイトと共に迎撃に入った。

「……あれ!？」

「どうしたの、なのは?」

「……うん。あの飛行型のガジェット……8年前の奴とデザインが違う……」

あの忌まわしい撃墜事件の際、傷ついたなのはを護る為にヴィータが戦ったモノではなかった。

「それに、海闘士が乗っていない……」

今まで確認されたガジェット？型は、空を飛べない海闘士たちの空戦を補助する為に使われていたが、単独で来るのは初めてだった。

「……確かに妙だけど、今はあいつらを殲滅するのが先だよ、なのは!」

「……そうだね……。御免ねフェイトちゃん!」

ガジェットから次々と放たれる砲撃を躲しながら、なのはは『アクセルシューター』で、フェイトは『アークセイバー』で、それぞれ撃墜していった。

なのは達が制空権を抑えているので、ヴァイス陸曹の操縦するヘリ

は安全無事に降下ポイントに辿り着いた。

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「「行きます!!!」」

へりから飛び降りたスバルとティアナは、空中でデバイスを起動させ、バリアジャケット『防護服』を纏った。

「次、ライトニング!……チビ共は『魔導師』として降りるのか?」

「はい。一応、僕達が管理局で聖闘士として行動するにはアイオリア様の許可が要りますから……」

他の部隊に出向している聖闘士たちと違い、エリオとキャロは表向きは民間協力者の魔導師として六課に所属している為、聖闘士として作戦に参加するには、顧問であるアイオリアの承認が必要だった。

「ライトニング3、エリオ」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「「行きます!!!」」

2人は手を繋ぎながら、飛び降り『防護服』を纏う。

スバルとティアナの『防護服』は、なのはの『防護服』をベースにデザインされていた。

なのはに憧れているスバルは、すっかりと感激していた。

エリオとキャロの『防護服』も、フェイトの『防護服』を参考にデザインされていた。

2人のデバイスは、フェイトの『バルディッシュ』同様、リニスが作成したモノである。

リニスにデバイス関連は全て任せていたので、自然とそうなった様である。

任務内容は、レリックの確保とガジェット殲滅。

1両目に降り立ったスターズ分隊と最後尾の12両目に降りたライ

トニング分隊がそれぞれガジェットを撃墜しながら、レリックが格納されている7両目に向かい、先に到達した方がレリックを確保することになっていた。

そして、FW陣に同行しているリインが、列車の制御を担当する。訓練の成果もあり、それぞれ苦もなくガジェットを撃墜し、先へと進んでいた。

そして、ロングアーチの方にも部隊長のはやてと顧問のアイオリアが到着し、このまま滞りなく任務は遂行されそうだった。

しかし、ライトニング分隊が8両目に突入したとき、2人の前に新型のガジェットが立ち塞がった。

大型で強力な『AMF』を発生させる新型は、攻撃を仕掛けたエリオの『ストラーダ』の魔力を消し去り、エリオを車外に放り出した。「エリオ君！」

アイオリア達と違い、エリオは飛行魔法も念動力も持ち合わせていない。

この高さから放り出されれば、如何に聖闘士といえど無事では済まない。

しかも、聖衣を纏っていない状態では特に……。キヤロは、とつさに列車から飛び降りた。

「ライトニング4、飛び降り！？」

「あ…あの2人、あんな高高度でのリカバリーなんて！？」

ロングアーチで管制を担当するアルトとルキノの2人が落下する2人を映すモニターを見て、息を呑む。

「いや、あれでええ！」

対照的に部隊長のはやては落ち着いていた。

「…発生源から離れれば『AMF』も弱くなる…。使えるよフルパフォーマンズの魔法が…！」

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……『竜魂召喚』！」
キャロの呪文と共に発生した魔法陣から、本来の姿である「白銀の飛竜」に戻ったフリードが、エリオを抱いたキャロをその背に乗せた。

「あれが…チビ竜の本当の姿!？」

「……カッコいい……」

ティアナとスバルも、雄雄しいフリードの真の姿に、呆然とその勇姿に見とれていた。

真の姿になったフリードは、チビ竜形態で放つ『プラストフレア』の上位版である『プラストレイ』を放つも、大型ガジェットを抜くことはできなかった。

「あの新型の装甲と『AMF』は厄介だね」

「うん、こうなったら……此方ライトニング3、エリオ。ロングア―チ…アイオリア様に承認を申請します！」

【……よかるうエリオ…承認する!】

アイオリアが許可を出し、エリオは今より聖闘士として行動する。

「キャロ…召喚を!」

「うん。……我求めるは、纏いし物、希望の証。我が呼び声に応えよ、聖なる衣……『聖衣召喚』!」

再び発生した魔法陣から、カメロバルタリス『麒麟星座』の聖衣が召喚された。

黄金聖衣と違い、青銅と白銀には所有者の下に飛来する能力はない。その為、聖衣を所持していない時に敵に襲われれば、不利は否めない。

ムウや貴鬼級の念動力の持ち主ならば、かなり距離が離れた所でも聖衣を呼ぶことは出来るだろうが、彼らほどの念動力者などそうそういるものでもない。

そして、身に纏う防具とはいえ、生命が宿る神秘である『聖衣』をデバイス等に収納することも不可能。

しかし、召喚魔導師であるキャラ口は、聖衣を召喚することが出来る。故に、常に持ち運ぶこともなく、必要になれば呼び寄せる事が可能だった。

『麒麟星座』の聖衣を纏ったエリオは、再び大型ガジェットと対峙する。

「でも、エリオ君。『フォスフォレスセンスランサー 燐光の槍撃』は、魔力も含まれるから『AMF』の範囲内では使用できないよ……」

先程、攻撃を加えてわかったが、この大型ガジェットの装甲は聖衣に近い防御力を誇っている。

如何に聖闘士とはいえ、それなりの技を使わなければ破壊できそうになかった。

エリオの必殺技『燐光の槍撃』は、魔力と小宇宙を合成させた技である。

そして、この技の射程範囲は『AMF』の効果範囲内……魔法が使えなければ、威力は半減する。

「……だから、『アレ』を使う……」
エリオにとって、『燐光の槍撃』は余技に過ぎない。

本来、麒麟とは殺生を嫌う瑞獣である。

麒麟が放つと云われる五色の燐光を模したあの技は、魔法の非殺傷設定を利用して、相手を殺さずに倒す為の技でもあった。

つまり、『燐光の槍撃』は見た目の派手さと反比例して、エリオの使う聖闘士の技の中で一番威力が低い。

魔法を併用しない純粹な『小宇宙』のみの質実剛拳（誤字にあらず）がエリオの右拳には宿ってるのだ。

エリオは小宇宙を高めながら、大型ガジェットに突撃していった。

ガジェットはベルトアームとレーザーの乱れ撃ちで迎撃する。

「……ギヤラクティカマグナム……！！」

エリオのその細腕から放たれたとは思えない程の一撃は、その拳圧

でペルトアームを粉碎し、レーザーを掻き消し、ガジエットのドテツ腹に風穴を開けた。

「…相変わらず凄い技だね…」

エリオの『ギヤラクティカマグナム』は、キャロの『竜王破山拳』よりも強い。

その威力は星矢が『リザード蜥蜴座』のミステイを倒した当時の『ペガサス彗星拳』に匹敵する。

つまり、当てることさえ出来れば白銀聖闘士をも倒せる技なのだ。

エリオが大型ガジエットを倒したと同時に、スターズ分隊が7両目に突入し、これにより列車内のガジエットの殲滅とレリックの確保に成功した。

「…ガジエット？型編隊…第5陣来ます！」

新人たちが列車で戦っていたと同じく、空においても戦いは激しさを増していた。

？型を殲滅し、制空権を確保した隊長陣だったが、すぐに新手の？型の編隊が接近してきたので、再び迎撃に移った。

第2陣、第3陣、第4陣と殲滅したが、また新たな編隊が接近してきていた。

「…敵は物量で押す気かいな？」

「…いかになのはとフェイトでも、いつかは疲弊するからな…」
如何に常人よりも高い魔力保有量でも、無限ではない物量による波状攻撃などされればいずれ限界が来てしまう。

「…！？…6時の方向より、新たなガジエット反応！」

「な…なんやて！？今までとはまったく正反対の方からか？」

「サーチャーを6時の方角へ！」

サーチャーから送られた映像が、ロンクアーチのモニターに映し出された。

「な……あれは…『海闘士』!？」

今までは、ガジェット?型のみだったが、今回は従来通りの海闘士を伴って現れた。

「……ま…不味いで…今までは、せいぜい2、3人やったのに……今回は20人はおるやないか!？」

雑兵とはいえ、青銅聖闘士に匹敵する海闘士たち。

唯でさえ、魔導師の『神の闘士』に対する対策は、一人に対し複数で挑むこと……。

如何になのは達がオーバーS魔導師とはいえ、20名の海闘士相手に2人で挑むのは無謀すぎる。

「八神部隊長!…第5陣のガジェットの進路が変わりました!」

「えっ!？」

先に来ていた?型たちは何と、なのは達から海闘士の方にその進路を変更した。

「?型と海闘士達が交戦状態に入りました!」

ガジェットと海闘士が争い始めた事にロングアーチは混乱した。

ガジェットは、海闘士と行動を共にしている筈なのに、何故ぶつかるのか!？」

はやては、先ほどのカリムの言葉を思い出した。

「やっぱり……デザインの違うガジェットは、海闘士達と別勢力のようやな……」

つまり、六課が相手をしなければならぬのは、海闘士達だけではなく、六課が意味していた。

「…第5陣…海闘士達に殲滅されました。海闘士側の被害は3名……」

「……それでもまだまだ数が多い……リア兄…遊撃のラインフォーと共に出してくれるか?」

相手が海闘士の編隊なら、なのはとフェイトでは荷が重い。

ここは、アイオリアに出てもらおうしかなかった。

【……待ってください!】

【ここは、任せてください!】

アイオリアが返答する前に、フリードに騎乗したライティング分隊から通信が入ってきた。

【なのは隊長、フェイト隊長……私達を受け止めてください！】
海闘士と対峙していたなのは達にキヤロからの念話が届いた。

「……受け止める!?!」
「どういう事？」

疑問に思う二人の後ろからエリオとキヤロを乗せたフリードが飛んで来て、なのは達の横を抜けたと同時に、エリオとキヤロがフリードの背から飛び降りた。

「え……エリオ！」
「キヤロ!?!」

2人は、慌てて落下するライティング分隊を受け止めた。
フリードはそのまま海闘士達に突撃する。

「何だ、このドラゴンは？」
「フン。如何にドラゴンとはいえ、俺たち海闘士の相手になるものか！」

「ま……待て！あのドラゴンから感じるこれは？」
「……『小宇宙』!?!」

最強種ともいわれるドラゴンだが、聖闘士や海闘士から見れば、ちよつと手強い獣程度に過ぎない。

まあ、道教における竜の様な『神格』を持つモノならば別だが……。西洋のドラゴンは、いずれ英雄たちに倒される存在である。

そんな英雄達以上の力を誇る『神の闘士』にとっては、手強いながらも倒せない相手ではなかった。

しかし今、目の前に迫っているドラゴンからは小宇宙を感じた。

『小宇宙』を使えるという事は『神格』を持つ竜に等しい存在とも言えるのだ。

「刻印??、護送体勢に入りました……ドクター、追撃戦力を送りますか?」

「いやウーノ。もうその必要はないよ……もともと海闘士達にレリックを取られないように先に確保しようとしただけだし……」

「その割りには、管理局が来てもすぐに退かせなかつたな」

「ただ撤退させるのは芸がありませんからねシャカさん……。それに機動六課とやらには良い経験だったでしょう」

このデザインの違うガジェット達はスカリエッティの差し金だった。管理局に対してはそれなりの反感があるが、機動六課はシャカの仲間の黄金聖闘士が協力しているという情報を掴んでいたので、その実力を試したくなったのだ。

「それにしても……」

モニターにフェイトとエリオの映像が映る。

「生きて動いている『プロジェクトF』の残滓……私の罪の象徴……その内の一人がまさか聖闘士とは……」

エリオが『ギャラクティカマグナム』で、大型ガジェットを破壊した時の映像が繰り返し再生されていた。

「……そして……タイプレオセカンド……いや、クイントの娘……」

モニターにはクイントの愛娘、自分の技術が使われている物の、何処の誰が生み出したか解らない……少女の姿が映し出されていた。

第六十六話 翔ける飛龍（後書き）

スカリエツティは遂に魔導師専用の聖衣…『鋼鉄聖衣』の開発に成功した。

そして、アルファロメオ側に新たなる海闘士が誕生した。

時空を越えた黄金の闘士

「力を得る戦士達」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十七話 力を得る戦士たち（前書き）

今回、黄金聖闘士たちの出番なし。

第六十七話 力を得る戦士たち

機動六課のFW陣は、今日も訓練に明け暮れていた。

今日は、個別スキルを上げる訓練を行っており、内容は今まで以上にハードなものになっていた。

フロントアタッカー
FAのスバルはヴィータに、センターガード
CGのティアナはなのはにそれぞれマ
ンツーマンで指導を受けていた。

ちなみにガードウィング
GWのエリオとフルバック
FBのキャロも、攻撃回避の訓練を受ける
ところなのだが……はつきりいつてそういう訓練は師である童虎に
徹底的に仕込まれているので、今更、フェイトに教わるまでもなか
った。

なので、2人はお互いで手合わせを行っていた。

スカリエツテイの研究所では、ついに完成した新デバイスのお披露
目が行われていた。

「どうだい、ゼスト、クイント。『聖衣デバイス』……いや、『ス
チールクロス
鉄聖衣』のプロトタイプの感想は……？」

「……とてもデバイスをこの身に装着しているとは思えん程……軽
い！」

ゼストが愛用している槍型アームデバイスも、かつてクイントが
愛用していた『リボルバーナックル』も、それなりの重量があった。
魔法で身体強化をしていたとはいえ、フィジカル面も鍛えていなか
れば、とてもではないが使用出来ない。

しかし、この『鋼鉄聖衣』は、機械が詰まっているとは思えない程
の軽さである。

身体強化ではなく、魔力を全身に循環させただけで、重量が感じら
れなくなっていた。

「……防護力も凄いわ……。如何に手加減しているとはいえ、聖闘士の攻撃を受けても傷一つついていない……」

先ほど、青銅レベル程度に小宇宙を高めて放ったミロの攻撃を受け、でも『鋼鉄聖衣』は輝一つ入らなかった。

流星に白銀聖闘士級の全力攻撃には耐えられないだろうが、ある程度なら耐えられる防御力を誇っている。

原子破壊の阻害と魔力を流すことにより重量が軽くなる術式を組むのは、流星の天才科学者でも苦労したようだが、ゼストもクイントも、…充分満足して貰えた様だ。

「…これで、ルーテシアやナンバーズ用…更には量産型の『鋼鉄聖衣』の開発の目処がたったよ……」

スカリエツティも成果が出て、ホツとした。

「……何れは、白銀や黄金聖闘士とも対抗できる『鋼鉄聖衣』も作れるようになれますか？」

「……いや、流星にそれは無理だろうね。基本的に『青銅』と『白銀』との実力差は懸け離れている。ミロやシャカさんが、以前に話してくれた『5人の青銅聖闘士』は例外だろうけど……」

青銅でありながら、黄金級の実力に達した星矢達は、間違いなく特別な例外と言えよう。

最も、『天馬星座』の聖闘士に関しては、神話の時代から『戦女神』を補佐する教皇以上に『戦女神』と『冥王』にとって、特別な存在なのだが……。

「……後は…実戦テスト……だね」

そう、これが一番の難問だった。

鋼鉄聖衣を纏ったゼストとクイントによる模擬戦でのデータは得ているが、対『神の闘士』のデータはまだ得られていない。

これに関しては、ミロとシャカでは駄目だ。

青銅級に小宇宙を抑えてというのは、所詮、手加減しているデータでは完璧とはいかない。

手加減しながらの実戦は、模擬戦と大して変わらないからだ。

「……管理局に出向しているという聖闘士を相手にする訳にもいかないからね……」

以前の次元犯罪者『ジェイル・スカリエッツィ』ならいざ知らず、今の現状で聖闘士に喧嘩を吹っかければ、後々の禍根になりかねない。

黄金聖闘士達に対しては、ミロとシャカの口利きでなんとかなるだろうが、現場の者たちとの禍根は、出来れば避けたい。

「……やはり危険だが……『レリック』を狙ってくる海闘士と戦うしかないな……」

ゼストの提案に、渋い顔になるスカリエッツィ。

スカリエッツィ自身、それしかないと思っっているが、シャカやミロに接しているとはいえ、『神の闘士』の凄まじさは完全に理解しているとは云えない。

どのようなアクシデントが起こるか解らず、2人をそんな危険に晒したくはなかった。

以前ならば平気でデータ収集の為の捨て駒に出来ただろうが、今のスカリエッツィにとってゼストとクイントは大事な家族なのだから……。

特に、クイントを母と慕う『娘』たち、ノーウェヤチンク達の事を考えれば……。

「……スカリエッツィ……。お前の気持ちは嬉しい……俺たちにとっても今やお前は掛け替えのない家族だ。だが、同時に共に海闘士の野望を打ち砕く為の同志だ。その礎の為ならば、多少の無理も行おう。お前の技術力と我らに対する想いを信じて……。だから、お前もシヤカ殿が認めた自分の作品と我らを信じてくれないか……」

ゼストとクイントは信頼を込めた微笑をスカリエッツィに向けた。スカリエッツィはそんな2人の気持ちを汲むのだった。

はやてとリンフォースは、スバルの父親であるゲンヤ・ナカジマ陸上三佐が部隊長を務める陸士108部隊の隊舎を訪れていた。

『レリック』の密輸ルートの捜査を依頼する為である。

108部隊の主任務は密輸調査である。

他の遺失管理部の機動部隊や本局捜査部にも依頼しているが、やはり地上の事は地上部隊の方が動きやすい。

それにゲンヤはともかく、他の地上部隊は縄張り意識が強い。

地上の事で本局が動き回ることにいい顔をしないでらう。

地上部隊の責任者であるレジアスも、アイオリアとの付き合いで多少は態度を改めているとはいえ、まだまだ本局自体との確執が無くなっているわけではない。

だが、それとは別にはやてがゲンヤにこの事件の捜査協力を依頼したのは裏の事情もあった。

それについては、後に明らかになる。

108部隊の捜査主任はラッド・カルタス二等陸尉とスバルの姉のギンガ・ナカジマ陸曹が担当し、六課側からはフェイトが捜査主任に当たることとなっている。

はやては、カルタスとギンガ両名を知っているので、使い易いだろうというゲンヤの配慮だった。

この事をリンフォースから聞かされたギンガは、アイオリアと共に自分を救ってくれたフェイトと仕事が出来る事を喜び気合を入れていた。

「ああ。それから捜査協力にあたり、六課からギンガにデバイスを一機、贈ろう」

「デバイスを？」

「スバル用に作った物の同型機で、ちゃんとギンガ用に調整するかな……」

「そ…それは凄く……嬉しいんですが…いいんでしょうか？」

「大丈夫だ…。ちゃんとテストロツサと共に走れる用に立派な機体を用意するから、期待するといい……!」

「…ありがとうございます。リインフォース一尉」

『海龍』のアルファロメオの下に、一人の雑兵が呼ばれていた。

「……『海龍』様。お呼びでしょうか？」

「……久しぶりだな……アプローズ…今は私と君だけだ…普段どおりで構わん…」

「……では、アルファロメオさん…。お久しぶりです…」

このアプローズという名の雑兵は、かつてアルファロメオが本局所属の魔導師であり、『レイティア』の艦長を務めていた時に、彼の補佐をしていたエッセ執務官の息子であった。

本局の次元航行部隊の武装隊に所属していた時の任務中にアルファロメオと再会した。

そして父親の死の真相を知り、海闘士となった男である。

偶然にも彼は、海闘士の資質を持っていた。

「それで…何用でしょうか？」

「うむ。君の実力は既に雑兵レベルを遥かに上回っている…。そこで君にこの『鱗衣』を与えよう…」

「こ…これは!？」

アルファロメオが指し示したのは、『海賊』の鱗衣であった。

「これがかつて纏っていた男は、君も知つての通り10年前に、『双子座』のカノンによって葬られた。修復を済ませたこれを受け継ぐ者がようやく現れた……。それが君だ！」

『海賊』の鱗衣が光を発すると、アプローズが纏っていた雑兵の鱗衣が吹き飛び、分解した『海賊』の鱗衣が装着された。

「君は、今日から『海賊』の海闘士となった…。そこで早速だが君に任務を与える…」

「…はい」

親しみの態度を改め、配下の海闘士の立場に戻ったアプローズは、

その場で傳いた。

「……管理局に所属している君ならば、もうすぐ『ロストロギア』のオークションが行われることは知っているな？」

そう、アプローズは今、現在も管理局に籍を置いている、いわば海鬪士の『スパイ』であつた。

「はい。ホテル・アグスタで行われるヤツですね。管理局の出資者も多く参加するそうですね……」

基本的に『ロストロギア』は本局の遺失物管理部で保管されるのだが、安全な物に関しては一般での所持も認められている。

時空管理局も組織である以上、活動の為の資金は重要であり、資金を提供してくれる出資者の意向はある程度汲まなければならない。

要するに、出資者に対するご機嫌取りである。

「ですが、オークションに出展される『ロストロギア』に我々が必要なモノがあつたのでしょうか？」

今のところ、海鬪士が必要としているのは『レリック』くらいである。

しかもそれは、クアットロという女が必要性を訴えているだけで、

アルファロメオ自身はそれ期待しているわけではない代物である。

そして、間違いなく『レリック』はオークションに出品される様な

『ロストロギア』ではない。

「いや、オークション品ではない……。そのオークションに出展側として参加する男が所有しているモノを手に入れて欲しいのだ……」

空間モニターに、その出展者の顔写真が展開される。

「……遺跡発掘を生業にしているスクライア一族の人間で、オークションの出品するモノとは別に、移送してきたモノを手に入れて欲しいのだ……」

「何の目的で移送してきたのですか？」

「オークションで、品物の紹介や鑑定を任されているミッドチルダ考古学会の学士に届ける為らしい……その学士も彼と同じくスクライア一族だ……」

「……ああ、無限書庫の司書長を務めている男ですか……しかし何故、そのような任務を私に……？」

正直、海闘士が動くような相手ではないように感じるアプローズ。

「その学士を甘く見るな……。彼奴は……白銀聖闘士だ」

「……！？」

「そのスクライア一族が移送してきたモノが聖闘士の手に渡ると少し面倒な事になるかも知れん……。ただでさえ、奴等の戦力は侮りたくないモノになっている……これ以上奴等の戦力を増強させるたくはない。故に、彼奴の手に渡る前に奪取してもらいたいのだ……」

10年という歳月で海闘士達が戦力を整えた様に、聖闘士側も着々と戦力を整えている。

「しかし、無理はするな……。確かに面倒な事になるかも知れんが必ずしもそうなるとは限らん……。使いこなせる者がそう簡単に見つかるとも思えんからな……。それよりも正規の海闘士を一人失う方が痛手となるし……私自身、エッセ執務官に続き、その息子である君まで喪いたくはない。奪取が不可能と判断次第、撤退しろ……」

「……御意！……それでは、ミッドチルダに向かいます……」

「……『海龍』様……よろしいのですか……彼に任せて……」

ネリビツクが不安そうに訊ねてきた。

「……確かにあの男の実力は認めますが……それでも経験が浅い……代わりに私が……」

「良い。アプローズには海闘士としての経験を積ませなければならぬ……彼を喪いたくないというのは、私の個人的な感情に過ぎん……。我らの大儀の為に……場合よっては彼を切り捨てる選択をしなければならなくなるかも知れん。そうならない為にも、やはり彼には経験を積ませた方がいい……」

裏を返せば、ネリビツクやジャックをも切り捨てる可能性がある」と

言及している。

そして、彼らもその意を読み取っていた。

「……我らとしては、『海皇』様と我等を誑かし利用した『双子座』のカノンに対する復讐と、この次元世界を我ら海闘士が望む理想郷を築いてくださるならば、その礎となることに何の異論もありません……」

「……その言葉に一言はないな……？」

「御意！」

「……覚えておこっ……」

108部隊との打ち合わせを終えたはやてとリインフォースは、ナカジマ親子と共に『地球』の日本風の料理屋で夕食を取っていたそこに、フェイトから通信が入った。
何でも海闘士とは別の『ガジェット』を使う第三勢力の正体が判明したとのことだ。

Dr.『ジェイル・スカリエッティ』。

フェイトにとって因縁深き相手である。

はやてとリインフォースは対策会議を行う為、中座することした。

「それでは、ナカジマ三佐……私達はこれで失礼させて戴きます」

「……おう」

はやては、支払伝票を取ろうとしたが、それより先にゲンヤが手にとった。

「そんな!？」

「さっさと行ってやんな。部下がまつてるんだろ？」

「……はい! ギンガはまた、私かフェイトちゃんから連絡するな!」

「はい。お待ちしています」

第六十七話 力を得る戦士たち（後書き）

オークション会場に襲来するガジェット達。

迎撃するシグナムに雑兵ながら実力のある海闘士立ちはだかった。

ティアナの致命的なミスで、スバルに危機が迫るその時！？

時空を越えた黄金の闘士

「ホテル・アグスタの死闘（前編）」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

第六十八話 ホテル・アグスタの死闘（前編）

ガジェットを使いレリックを集めている海闘士以外の第三勢力を広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツィと推定した機動六課は、骨董オークションが開かれるホテル・アグスタの警備を任された。出品物の多くが個人所有を許可された『ロストロギア』なので、ガジェットがレリックと誤認してくる可能性があるからだ。

部隊長の八神はやて二佐と補佐のリンフォース一尉、分隊長の高町なのは一尉とフェイト・T・ハラオウンは、会場内の警備を、副隊長以下のFWメンバーは、ホテルの外での警備を担当することになっていた。

はやてが現場に出ているので、ロングアーチの指揮は部隊長補佐のグリフィス・ロウラン准尉が行い、アイオリアもロングアーチで待機していた。

スターズ分隊のティアナは六課の構成について考えていた。

如何に、敵が魔導師と同等以上の戦闘力を持つ海闘士とはいえ、六課の戦力は異常だった。

わざわざ、リミッターを付けてまで高ランク魔導師を集めている点。八神部隊長は高町、ハラオウン両分隊長はオーバーSランク。

副隊長のシグナムとヴィータはニアSランク。

そして、危なげながらも潜在能力と可能性の塊である自分の相方。10歳という若さながら、海闘士と同等の存在である聖闘士であり、魔導師のランクも自分と同じ陸戦Bランクを持つライトニング分隊のちびっ子2人。

そして、六課の顧問の魔導師を遙かに超越した存在である『黄金聖闘士』にして、魔力量もAAAランクと隊長陣とほぼ同等の『獅子

座』のアイオリア。

「……やっぱり…ウチの部隊で凡人はあたしだけか…けど、そんなの関係ない！」

ティアナは立ち止まるわけには行かなかった。

自分の目指す『夢』の為に……。

「……間違いない…数名の海闘士と奴等のガジェット達が動いている……」

ルーテシアは、召喚虫『インゼクト』からの情報で、海闘士達が動いている事を突き止めた。

「……クイント…久しぶりの実戦だ…。あまり無理をするなよ……」

「解っています…隊長…では、行ってきます」

『スチールクロス鋼鉄聖衣』を纏ったクイントが一人でアグスタの方に駆け出した。

ガジェットの反応を確認したシャマルの指示で、シグナム達守護騎士が迎撃に向かった。

この3人（2人と1匹）にとって、『AMF』を装備しているとはいえガジェット等敵ではなかった。

ヴィータの『シユワルベ・フリーゲン』、シグナムの『紫電一閃』、ザファイラの『鋼の軛』が、次々とガジェット達が撃墜していった。シャマルのデバイス『クラールヴィント』から、ティアナの『クロスマイラージュ』へ送られてきている映像を見てスバルは興奮し、ティアナは拳を強く握り締めていた。

ガジェットの迎撃が続いていたシグナムに2人の海闘士が襲いかかってきた。

とっさに対応するも、相手が海闘士では如何にシグナムでもガジェ

ツトと同時に相手をするのは不可能だった。

ガジェット達はそのままシグナムの防衛ラインを突破していった。

「ヴィータ。ラインまで退がれ……新人達のフォローを頼む！」

「わ…解った！」

【ザフィーラ、シグナムと合流して！相手が海闘士じゃいくらシグナムでも1人では不利だわ！！】

【心得た！】

シグナム達は、一対一で海闘士と戦える数少ない『魔導師（騎士）』である。

対海闘士に関しては、隊長たちよりも百戦錬磨の勇士である副隊長達の方が対抗できるのだ。

しかし、流石に2人同時に相手は出来ない。

ヴィータは8年前、海闘士の集団相手にたった一人で持ちこたえたが、それは所謂『火事場の馬鹿力』的なモノで、童虎の助けが後数分遅れていれば、どうなっていたかわからなかった。

シグナムの下にザフィーラが到着し、一進一退の攻防を繰り広げる事となった。

シグナム達を突破したガジェット達は、ティアナ達の防衛ラインまで迫ってきた。

ティアナの指揮の下、迎撃体勢に入るFW陣。

（……今までと同じだ……証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して……あたしはそれで、いつだってやってきた！）

ティアナは『クロスミラージュ』を構え、ガジェットに向かって魔力弾を撃った。

海闘士は聖闘士と違い素手で戦う事を義務付けられてはいないので、それぞれ武装していた。

1人は、船の錨アンカーを鎖付き鉄球の様に振り回し、もう1人は戦斧トマホークを装備していた。

迫りくる錨をシグナムは『レヴァンティン』で薙ぎ払い、ザフィーラは狼から人型に変身し、間隙を縫ってシグナムに襲い掛かってくる戦斧トマホーク使いを迎撃していた。

「ほう、魔導師風情が同数で俺たちと互角に渡り合えるとは……貴様らが『ヴォルケンリッター』か？」

「そうだ……。私、烈火の将、『剣の騎士』シグナム！」

「蒼き狼、『盾の守護獣』ザフィーラ！」

「……面白い……ならここで貴様らを始末し、手柄にさせてもらうぜ！ 雑兵に対してだけとはいえ、海闘士達と互角に戦える守護騎士達は彼らにも深く認知されている。」

海闘士達にとつて、『エースエース・オブ・エース』や『金の閃光フレイト』以上に評価している相手なのだ。

「行くぜ！」

錨使いが小宇宙を込めた錨アンカーを振り回し、シグナムに投げつけた。しかし、速さと威力は上がったが、攻撃が余りにも単調過ぎた。

シグナムは、それを紙一重のタイミングで躲し、鎖を掴み取り、相手のバランスを崩させた。

「何!？」

「……手柄にしようと思いを掻いたのが失敗だったな!……『紫電一閃』!!」

「グギヤアアアアアアア!!」

シグナムの炎の斬撃が、海闘士を鱗衣に覆われていない横胴を捉えた。

「……フン……馬鹿な奴だ……」

戦斧使いは、失態を演じた仲間を鼻で晒った。

「……仲間に対して冷たい物言いだな……」

敵とはいえ仲間を晒う態度にザフィーラが眉を潜めた。

「……任務を完遂する事こそが一番の手柄だ。自らの実力を弁えず、余計な事に欲を掻いた愚者に相応しい態度だと思っが？」
戦斧使いは吐き捨てる様にザフィーラに答える。

「……流石にヴォルケンリッター2人を相手に1人でやり合うのは此方が不利……。任務は果たしたし、俺はここで失礼させてもらおう……」
そう言うとシグナムとザフィーラの方に戦斧を振り、衝撃波を放った。

ザフィーラは、シグナムの前に立ちはだかり障壁を張った。
凄まじい圧力がザフィーラに襲い掛かるが『盾の守護獣』の異名は伊達ではなく、見事に防ぎきった。

しかし、既に戦斧使いはその場から姿を消していた。

「……引き際を心得ているようだな……それに……」
ザフィーラは倒れ付している鎗使いに視線を向けた。

「……まだ息があつたのに……トドメを刺していくとは……」
衝撃波はシグナム達への牽制であると同時に、鎗使いの頭を潰すことも目的としていた。

敵に情報が漏れる事を防ぐ為のようだ。

「……あの男、雑兵の中でも上位の実力のようだな……」
少なくとも、この鎗使い等比べ物にならない実力を秘めている。

「ああ。奴とまともに戦えば私はおるか、エリオ達でも危ない……」
それこそクロノ提督ぐらいでないと勝てないかも知れん……」
雑兵相手なら、魔導師でも戦い様によつては遅れは取らないというのは、若干の修正が必要かも知れなかつた。

雑兵といえど、その実力はピンからキリまでである。

戦斧使いの実力は、白銀聖闘士ほどではないにしろ、間違はなく青銅聖闘士（シルバーステイン、ロンステイン）の上位レベルだつた。

「……我らも今以上の力を得なければならんかも知れん……」

「……ああ」

守護騎士達はプログラム。

経験を積み、技量を上げる事は出来ても、これ以上強くなる事は出来ない……。

そう思ってきたが、8年前にヴィータは『火事場の馬鹿力』とはいえ、実力以上の力を発揮した。

そのときにシグナム達は気付いたのだ。

自分達が限界だと思い込んでいたから、限界だったに過ぎない事を……。

ティアナ達は、ガジェットの波状攻撃を受けていた。

倒しても倒しても、次々と迫りくるガジェット達。

シヤマルは、ヴィータが到着するまで防衛ラインを持ちこたえる様、指示を出す。

「護つてばかりじゃ行き詰まります。ちゃんと全機、墜とします！」
自分の力を証明する為に、凄い隊長がいる部隊でも、どんな危険な任務でも、自分の……『ランスター』の弾丸は……ちゃんと敵を打ちぬける事を……」

「……『クロスファイアシュート』!!」
スバルが牽き付けているガジェットに向かって複数の誘導弾が次々と着弾していった。

だが……その内の一つがそれてスバルの方に向かっていった。

明らかに制御ミス。

そのままスバルへ直撃コースの弾丸に気付いたヴィータがそれを打ち墜とす為に向かおうとしたその時……。

「はあ！」

反対方向からヴィータよりも早く、スバル近づき、スバルの展開していた『ウイングロード』を足場に、迫る弾丸を打ち墜とした。

「……えっ!?!」

「だ…誰だ!？」
スバルの前に立つのは、聖衣や鱗衣の様なプロテクターを身に纏った女性であった。

第六十八話 ホテル・アグスタの死闘（前編）（後書き）

時空を越えた黄金の闘士

「ホテル・アグスタの死闘（後編）」

君は、小宇宙をかんじた事があるか！？

オッス、オラ悟空。

ここで読者のみんなにちょっととしたアンケートを行うぞ。

予告している時空を超えた超戦士の本編開始を予定通り「黄金の闘士」終了後にするか、それとも同時進行していくか。

どっちがいいか聞かせてくれ！

ユーザー登録しているなら、メッセージボックスが感想に。

非ユーザーの人は感想にどちらがいいか書いてくれ。

締め切りは2011年11月末日まで。

ただし、同時進行の場合はこの「黄金の闘士」の進行が遅くなることは覚悟しておいてくれ。

第六十九話 ホテル・アグスタの死闘（後編）（前書き）

前回、募集したアンケートの結果、同時進行への投票が0でしたので、11月末日を待つ必要はないと判断し、アンケートを打ち切ります。

「時空を越えた超戦士」は、予定通りこの話が終了後に執筆します。

第六十九話 ホテル・アグスタの死闘（後編）

六課FW陣が、防衛ラインを突破したガジェットを迎撃しているすぐ近くで、クイントは海闘士マリナーの雑兵と戦闘を行っていた。

「……何なんだこの魔導師は……『ヴォルケンリッター』とやらの他に我々と互角に戦える奴がいたのか？」

青銅聖闘士と同格の強さを持つ海闘士の雑兵は、当然、音速で動ける。

クイントは、並の魔導師よりも速いが、それでもフェイトに比べれば遅いし、守護騎士達程の戦闘経験もない。

にも関わらず、音速の動きについていけているのは偏にミロとの訓練と『鋼鉄聖衣』スチールクロスのお陰である。

ゼストとクイントは、暇があればミロに鍛錬してもらっていた。

既に成人している2人は、鍛錬によって『小宇宙』に目覚めることは出来ない。

海闘士の様に『海皇』ポセイドンの意思によって『小宇宙』を覚醒させるならともかく、自力で『小宇宙』に目覚めれるのは、成長期の過程でなければ出来ない。

故に、ゼストとクイントは『小宇宙』を身に付けることは出来なかった……。

だが、『黄金聖闘士』ゴールドセイントという規格外と鍛錬する事は決して無駄ではなく、『神の闘士』対策には充分だった。

それでも、守護騎士達のような膨大な戦闘経験がない為、やはり一対一では不利は否めない。

それを補ったのが『鋼鉄聖衣』である。

『鋼鉄聖衣』に組み込まれているのは、原子破壊の疎外だけではなく、音速の動きを計測出来るほどの高い演算機能と、フェイトの『クイックムーヴ』に匹敵するほどの高速魔法の術式も組み込まれている。

複数の事を同時に処理するマルチタスクが必須である戦闘魔導師だからこそ『鋼鉄聖衣』の性能を使いこなせるのだ。

青銅聖闘士級の相手に互角に戦える力が与えられた魔導師……いや『スチールセイント鋼鉄聖闘士』の誕生である。

クイントの戦いを少し離れた位置で、ゼストとルーテシアが観戦していた。

「……凄いね…クイント小母様…」

「うむ。これで『鋼鉄聖衣』の有用性が完全に証明できたな……」

「……その様だな……」

突然、背後から答えられ、ゼストとルーテシアは驚いて、背後を見た。

「……ミロ殿…来ておられましたか？」

いつの間にかミロとアギトが2人の後ろに立っていた。

「ミロ、アギト……心臓に悪いから、気配を絶って後ろから声を掛けないで……」

「悪いなルーラー……」

そついいながら、ちつとも悪びれていないアギトが軽く謝った。

「……ミロ殿から見てどうですか？」

「充分、及第点をやれるな……ジェネラル海將軍以外の海闘士など、このミロ

の敵ではないが…数だけは揃っているからな…。一斉に蜂起されれば俺とシャカ…それに他の黄金聖闘士だけでは対処できん…。しかし、『鋼鉄聖衣』を纏った魔導師がいれば、対抗が可能だな。最も今、クイントが相手をしているのは雑兵の中でも、雑魚のようだがな……。」

海闘士の雑兵はそれこそ何百人といるので、対抗するにはそれなり
の数が必要なのは間違いない。

カノンやアイオリア達も聖闘士の育成をしているが、それでもやは

り物量では海闘士達に及ばないのだから……。

「でもさ……ミロの旦那……。あれ以上のモノを作るのは流石の変態ドクターでも無理なんだろ？」

『鋼鉄聖衣』に組み込まれている術式は、スカリエツティという最高の天才が魔法という力の限界を突き詰めて完成させた術式なので、これ以上のモノは作ることが出来ないのだ。

「……魔導師達が雑兵共の相手をしてくれれば、海闘士達の野望を砕くことなど造作も無い。海將軍達は星矢達が2人を除いて全滅させた。白銀級シルバの強さを持つ海闘士も数が少ない筈だ……。その程度ならばこのミロ1人で充分だ……」

ミロが知る限りでは、海將軍の生き残りは『海龍』シードラゴンと『海魔女』セイレーンの2人である。

「その内の1人は、我らが同志である黄金聖闘士『双子座』ジェミニのカノンだ。もう1人も、海商王ジュリアン・ソロと共に『海皇』の起こした水害の被災者たちの救済の旅に出ているとの事だ……。ミロ達はまだこの世界に存在する真の『海龍』や『プロジェクトF』で新たに誕生した『海將軍』の存在を知らなかった。

ミロに指摘された様に、今クイントが相手をしている海闘士は、雑兵の中でもレベルの低い相手である。

無論、それでも魔導師にとっては強敵だが……。

しかし、『鋼鉄聖衣』を纏ったクイントにとって敵ではなかった。戦いは、クイント優勢で進んでいた。

その時、愛娘のスバルの危機が視界に映った。制御に失敗したティアナの誘導魔力弾がスバルに向かっていたので。今から『ウイングロード』を展開しても、到底間に合わない。

「隙あり！」

海闘士は、そんなクイントの隙を突き、襲い掛かってきた。

「……『フライング・クラッシュ』!!」

跳躍し、全体重を乗せて真下にいる相手に音速の蹴りを放った。

しかしクイントは海闘士よりも高く跳躍し、海闘士の頭部を足場にして更に跳躍し、『鋼鉄聖衣』に組み込まれている高速魔法を発動させ、一気にスバルの下へと向かった。

「お……俺を踏み台にしたああああああああああああ!!」
と、某ロボットアニメの敵役の台詞を吐きながら、海闘士は地面に叩きつけられ意識を失った。

スバルの下にたどり着いたクイントは、スバルが展開していた『ウイングロード』を足場にして、彼女に迫る魔力弾を叩き墮とした。

一方その頃、ホテル・アグスタ内。

客たちがオークションの会場で開会を待っている中、3人の男がホテルを抜け出そうとしていた。

オークション参加者として、入場していた管理局、1948航空武装隊長のアプローチ・エッセー一等空尉と部下の2人である。

「……これで『あの方』から頼まれたモノの確保は出来たな……。さて、外で雑兵達が陽動で暴れているウチに撤収するか……」

2人の部下が背負っているものを見ながら、アプローチはそう呟いた。

「……やれやれ。まさか武装隊の隊長がドサクサに紛れ火事場泥棒とは……嘆かわしいね。エッセ君……」

アプローチは、背後から聞き覚えのある声がしたので、驚愕しながら振り向いた。

「……アコースか？」

「久しぶりだねエッセ君……士官学校卒業以来だね……」

アプローチは、士官学校時代のロツサやクロノと同期生であった。特に親しい間柄でもなかったが……。

「……それで、エッセー尉殿は何ゆえ『火事場泥棒』に身を落とされたのかな？」

ロツサの顔は笑っているが、目は笑っていないかった……。

「……………」

「……前々からマークしていたが……まさか盗みを働くとは……」

「……マークしていた……だと!？」

「ああ。査察部としても君の行動に疑問が出ていてね。二月前から君は査察対象だよ。最も部下たちは何度も君に撒かれていた様だけ……」

「成る程……確かにその位から妙な視線を感じていたが……査察部だったとはな……まあいい。どの道、お前にはここで消えてもらう事に変わりはない!」

そう言うと、アプローズは『小宇宙』を燃焼させ、ロツサに拳を放った。

「……何!？」

今度はロツサが驚愕する番だった。

「……『小宇宙』だと……君は……まさか!？」

「フツ……俺の正体を見せてやろう……」

アプローズの周りに、いつの間にか、海闘士の雑兵が何人が集まってきた。

ロツサはそれらの顔に見覚えがあった。

「な……彼らは君の部下の1948航空隊の武装局員!？では……やはり……!？」

「……フツ……その通りだ!」

アプローズは、礼服を脱ぎ捨てると部下が持ってきた自分の『鱗衣』スケイルを身に纏った。

「……海闘士……『海賊』バイレックのアプローズ……。それが俺の正体だ!」

流石のロツサも、アプローズ達が海闘士であることまでは突き止めていなかった。

「……『海賊』だって!？……確か海賊の海闘士は十年前にカノンさ

んが葬った筈……」

「……確かに先代の『海賊』の海闘士フックは、カノンとか言う黄金聖闘士に殺された。俺はその空位になった鱗衣を継承したのだ」
「……いつから海闘士になった？」

「もはや問答無用……死ねアコース！かかれ！！」
アプローズの命令で、武装局員……いや雑兵たちがロッサに襲い掛かった。

だが、その側面から1人の男が雑兵たちに攻撃を仕掛けていた。
「君達か……？ 僕の友人から盗みを働いた輩は……」
そこには『白銀聖衣』を纏った青年が立っていた。

「……ユーノ先生、ナイスタイミングです！！」
「……チツ……『あの方』の言ったとおり、本当に学者風情が聖闘士だったのか？」

白銀聖闘士『楯座』スキュータムのユーノである。

「お待たせしました、ヴェロツサさん……これを！」
ユーノは、背負っていた箱をロッサの方に放り投げた。

「……何……それは『聖衣櫃』……ま……まさかアコース……貴様も！？」
ヴェロツサは聖衣櫃の開け、聖衣を装着する。

「……白銀聖闘士……『南十字星座』サザンクロスのヴェロツサ！」
「……ハラオウンとアコースが聖闘士の指導を受けていたという噂は本当だったのか……」

クロノとヴェロツサが聖闘士だということを知っているのは、管理局内でも一部の者のみであるが、噂としては流れていた。

最も、オーバーSランクの魔導師があえて聖闘士になるとは思われず、あまり信じられてはいなかったが……。

それが真実と知っているのはカノン達の関係者を除けば、本局所属の佐官以上の階級の者のみだった。

「……君が海闘士だと知った以上、僕も査察官ではなく『聖闘士』として動かせてもらう……」

「ヴェロツサさん。雑兵は僕が引き受けましょう……」

「助かります…。ユーノ先生…しかし、よろしいのですか？」
「大丈夫です…オークション開始までには終わらせるつもりです」
ユーノは自信満々にそう言うと、雑兵たちに蹴りを放った。

ロツサの拳とアプローズの拳が交差する。

2人の実力は伯仲しており、共に決め手を撃てない状況だ。

黄金聖闘士ではないが、『千日戦争』ワンサウザントウォーズに近い様相を見せていた。

「……このままでは埒が明かん…。一気に決めてくれる!!」
「来るか!」

互いに、最強の技を放つべく『小宇宙』を燃焼させる…。

「喰らえ、アコース!」
「バイキングアックス!」

「させるか!」
「サザンクロス・サンダーボルト!」

2人の必殺技がぶつかり合い、凄まじい衝撃が2人を吹き飛ばした。

「…うわあ　　っ!」

白銀聖闘士のユーノにとって、海闘士の雑兵など所詮、青銅聖闘士レベル…数を揃っていても敵ではない。

元々、『白銀』と『青銅』では実力にかなりの開きがある。

星矢達に敗北したことで、白銀は大した事がないというイメージがあるが、何度も言う様に星矢達は例外であって、青銅が白銀に勝つなどまずありえないのだ。

かつて、偽^{サガ}教皇から10人の白銀聖闘士がたつた5人の青銅聖闘士に返り討ちにあつたと聞いたミロが「青銅聖闘士が白銀聖闘士を倒した話など聞いた事がない」と述べたように……。5分と掛からずに、雑兵達は全て地に倒れ付していた。

ユーノは、アプローズに奪われたモノを取り戻した。

お互いの技に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられていたアプローズは奪ったモノが奪い返された事を知り、悔しげな表情になった。

「…クツ…やはり…雑兵では白銀聖闘士の相手は無理だったか……。流石に『白銀』2人を相手にするのは不利…か…」

そう言うと、アプローズは倒れている部下達と共に転送魔法で離脱した。

【…勝負は預けておくぞ…アコース…いや、『南十字星座』のヴェロツサ…！】

海闘士達の姿が消えた後、ロツサに念話が届いた。

「…随分あっさりと退きましたね？」

「恐らく、それ程致命されていたわけではない様です…」

ユーノからの問いに答えながら、ロツサは内心で頭を抱えていた。

本局所属の航空武装隊の一隊がまるまる海闘士に寝返っていたのだ。この件を公表すれば、局員達の間に関心暗鬼が芽生えることは間違いないのである。

海闘士との戦闘で、負傷、殉職した局員は数多く居るため、陸士達は海闘士に敵愾心を持つ者が多い。

聖闘士が地上部隊に協力している事もあり、管理局にとってもやはり『海闘士』は反管理局勢力である。

そんな中、本局所属の武装隊が海闘士側に寝返った事を知れば、ロツサにとって師であるアイオリアがある程度緩和させた、地上おと本局みの確執が再発する可能性が高い。

「……ところで、エッセ君が盗んだモノとはオークションの品ではないのですか!？」

気持ちを切り替えるべく、ロツサはユーノに何気なく問うた。

「…僕も詳しくは聞いていないんですが、オークションに出すモノと一緒に持ってきただけで、直接、僕に渡す予定だったそうです…」

「中身を確認しても？」

「ええ、構いません。友人は、手間が省けるからそのまま持ってい

つてくれと言っていました。厄介払いが出来てオークションの方に集中できるからと……」

ユーノの許可を取り、『モノ』の梱包を解き中身を確認したヴェロツサは驚愕した。

「ユーノ先生…これは!？」

「…成る程…海闘士が狙うわけですね…」

2人が見たモノとは一体、何なのか!？

全てのガジェットを撃墜した機動六課は、『聖衣』の様なプロテクターを纏って突如現れた謎の女性を囲んでいた。

だが、その中でティアナとスバルの様子がおかしかった。

ティアナは無論、先の誤射に対しヴィータから叱責を受けた為である。

そして、スバルは……蒼褪めた顔で女性を見ていた。

「…部下を助けてくれて礼を言います。アタシは、機動六課、スターズ分隊副隊長のヴィータ三等空尉です。色々と事情を伺いたいで、ご同行を願います」

はやてとアイオリアの教育の賜物か、それとも管理局の研修での成果か丁寧な口調で話すヴィータ。

しかし、女性は首を横に振り、その場を離れようとする。

「ま…待て!」

「…『リストラクション』!」

直ぐに地に降り、慌てて女性を制止しようとするヴィータと新人達だったが、突然、体が金縛りにあった様に動かなくなった。

「な…何!？」

「…すまないな。まだお前たちと行動を共にするわけには行かんだ…」

そこにフードで顔を隠した男が現れた。

「お前は先に行っている！」

フードの男に促された女性は、スバルの横を横切りその場を去ろうとする。

「ま…待って！」

動かない体を何とか動かそうと足掻きながら、スバルは女性に静止の言葉を掛ける。

女性は、スバルの傍で一度立ち止まると、彼女の頭を2、3回撫でると何も言わずに去っていった。

スバルは、目から涙が溢れ、その場で泣きじゃぐった。

そんなスバルを見てあっけに取られていたヴィータに、フードの男が近付いた。

「すまんが、アイオリアにこれを渡してくれ…そして、再会を楽しみにしているぞ…とな」

男は、ヴィータの襟にカードの様なモノを挟むと、女性の後を追っていった。

金縛りが解けたヴィータ達は、フードの男が残していったカードを見ていた。

「なんだこれ？」

「こ…これは『聖闘士カード』！？」

ヴィータの持っているカードを見てエリオとキャロは驚いていた。カードには蠍が描かれているからだ。

「聖闘士カードとは、聖闘士が敵を倒したときに、その証拠として残す為のモノです。滅多に使われることはありませんが…」

わざわざ自分が倒した事を証明する必要など殆ど無いが、稀に挑戦状代わりにメッセ^{スコレヒオン}ジとして使う為である。

「……これは『蠍座』のカード…、ならばさっきの人は…黄金聖闘士…」

「…『蠍座』の三口様か、彼に親しい人物…。でも、あの『小宇宙』は間違いなく黄金聖闘士級……。ならば本人に間違いはないと思うよ エリオ君…」

カードの裏側には、文字が書かれているがヴィータには読めなかった。

「なんて書いてあるんだ？」

「……これは…ギリシア文字ですね…。流石にギリシア語は勉強中なので…漢字だったら読めるんですが……」

ギリシア語は聖闘士共通語であるが、まだ10歳であり、漢字語圏の人間に育てられたエリオとキヤロはまだ読めなかった。

「まあ、後でリアに渡しておくか…」

ティアナは、己のミスに悔し涙を流していた。

そんなティアナにいつもなら、おせっかいの相棒が話しかけてくるのだが、今回は違った。

ティアナから少し離れた場所で、スバルは座り込んでいた。

「…あの人は…まさか…まさか…」

いかに顔を隠していてもスバルにはあれが誰なのかはつきりと解っていた。

大好きな母を、間違えるはずが無い。

しかし、クイントは死んだ筈なのだ。

スバルは、この事を父や姉に話すべきなのかどうか迷っていた。

第六十九話 ホテル・アグスタの死闘（後編）（後書き）

スクライアから、ユーノへと託されたモノとは！？

ミスシヨットをしたティアナは、任務終了後、休息を取ること考
えず自主練に明け暮れる。

そんな、彼女を制したのは！？

時空を越えた黄金の闘士

「兄への想い」

君は、小宇宙を感じたことがあるか！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1417p/>

時空を越えた黄金の闘士

2011年11月21日20時40分発行